

大阪大学大学院文学研究科

年報 2002

研究・教育(1997-2001)と外部評価

大阪大学大学院文学研究科

企画・評価委員会

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道徳の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勧奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔訳文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却つて立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

はじめに

大阪大学大学院文学研究科では、教育と研究の現状を認識し、今後の運営と改革の参考とするため、1994年以来これまで3回にわたり自己評価書を公刊してきました。以後、第2回（1996年刊）は大講座化、第3回（1999年刊）は大阪大学文学部創設50年を記念するシンポジウム「文学部は必要か——21世紀の人文をめぐって——」（1998年11月）を受けて、それぞれ工夫をこらした構成で刊行されました。今回は大学院重点化の完了を受け、その成果を示すかたちとなりますが、同時に自己評価だけでなく、各種資料や外部評価の結果も掲載することとなりました。

その背景には、国立大学の法人化のほか、大学評価をめぐるこの間のさまざまな動きがあることはあらためていうまでもありません。今後は大学評価がさらに体系的・組織的に実施されるようになると予想され、大阪大学大学院文学研究科でも、より進んだかたちでこれに備える必要があると考えるに至っております。また平成14年度秋からは、当研究科も大学評価・学位授与機構の評価（教育）を受けることとなり、現在その準備を進めているところです。

本書『年報2002——研究・教育（1997-2001）と外部評価——』を公刊するに至った詳しい経緯は「編集後記」に譲りますが、その企画にあたって注意したことは、従来の評価書とは異なった方法により研究と教育に関してできるだけ透明度の高い報告を作り、それに基づき独自の外部評価を実施することでした。本書の編纂の基本方針は次の5点にまとめられます。

- (1) 文学研究科全教官の研究と教育に関する過去5年間のデータを正確に収集し、記録する。
- (2) 研究業績は教官のものだけでなく、大学院生等のものも収録する。
- (3) 文学研究科の全専門分野を外部評価の対象とする。
- (4) 外部評価は、上記(1)と(2)の資料を各分野が依頼した外部評価者に郵送の上、評価者の意見を文書で回答してもらい、その意見を本書にそのまま掲載する。
- (5) 国内の研究者だけでなく、外国の研究者による外部評価も実施する。

データと評価の掲載にあたっては、文学研究科に所属する23専門分野について、①研究・教育活動の概要と特色、②組織（教官、在学生、修了生・卒業生）③組織としての研究・教育活動（博士学位授与、学生による論文発表、学生の受賞、学振採択、留学、就職、研究員受入、刊行物、学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催）、④研究・教育活動に関する自己点検と評価、⑤教員の研究活動（論文、著書・編著、翻訳、書評、解説、辞典項目等、口頭発表、講演、受賞、外部資金）、⑥教員の学会活動、⑦教員の教育活動、などを収録し、最後に、⑧外部評価の報告をそのまま掲載いたしました。

従来の評価書と異なり、大学院生等の研究業績を収録したのは、大学院生等の業績も研究・教育活動の重要な成果であるとの判断によるものです。また、文学研究科の教員の業績が論文と著

書だけではなく、さまざまな分野で多大な成果を生んでいることにも評価の目を向けていただきたく思います。

外国の評価者については、幸い文部科学省から2名の外国人評価者（イギリスとアメリカ）の招聘が認められ、目標が達成できました。また、外国人評価者には座談会にも参加していただき、それぞれの国の大学評価の在り方について語っていただきました。イギリスもアメリカも大学評価については厳しい現実にとらされているだけに、大変勉強になりました。また、データだけでは評価できず、目標やそれを実現する手段、さらには達成度といった観点も必要であることを教えられました。わが国の今後の大学評価の在り方を考える上で、この座談会は多くの検討課題を提供してくれたと思います。

外部評価を快くお引き受けくださった先生方（付表参照）には、年末年始の一番ご多忙な時期に評価の労を取っていただき、心から感謝申し上げます。ご回答いただいた外部評価書を拝見すると、形式はさまざまでしたが、いずれも各専門分野の状況をよく見ていただいていた、厳しいご指摘も少なくありませんでした。これらのご指摘は各分野に対する叱咤激励と受けとめ、今後の改善の糧とするつもりです。ご尽力に重ねてお礼申し上げますとともに、今後とも率直なご助言を賜りますようお願い申し上げます。

大学の評価についてはさまざまな考え方があり、これからも多彩な議論が続けられることと思います。今回私たちが本書で実現した方法は、人文科学の評価の在り方はどうあるべきかという問いに対する一つの試みと受けとめていただきたく思います。文学研究科に属するさまざまな専門分野がどのような研究を行い、どのような研究成果を出し、それがどう評価されているかを、できるだけ透明度の高いかたちで公表する試みとして考えついた方法であります。本書の刊行が、大阪大学大学院文学研究科のさらなる発展と成長に結びつくことを願ってやみません。

平成15（2003）年3月

大阪大学大学院文学研究科長
文学部長

河上 誓作

外部評価者

専門分野	氏名	所属
哲学哲学史	Kah Kyung Cho	ニューヨーク州立大学バッファロー校教授
現代思想文化学	Kah Kyung Cho	ニューヨーク州立大学バッファロー校教授
臨床哲学	Kah Kyung Cho	ニューヨーク州立大学バッファロー校教授
中国哲学	浅野裕一	東北大学大学院国際文化研究科教授
インド学・仏教学	後藤敏文	東北大学大学院文学研究科教授
日本学	桂島宣弘	立命館大学文学部教授
日本史学	藤井讓治	京都大学大学院文学研究科教授
東洋史学	杉山正明	京都大学大学院文学研究科教授
西洋史学	若尾祐司	名古屋大学大学院文学研究科教授
考古学	白石太一郎	国立歴史民俗博物館考古研究部教授
人文地理学	石川義孝	京都大学大学院文学研究科教授
日本文学	Andrew Gerstle	Professor of Japanese Studies, Director of AHRB Centre for Asian and African Literatures, School of Oriental and African Studies, University of London
日本文学	松村雄二	国文学研究資料館教授
比較文学	佐伯順子	同志社大学文学部教授
中国文学	金文京	京都大学人文科学研究所教授
国語学	毛利正守	大阪市立大学大学院文学研究科教授
英米文学	原英一	東北大学大学院文学研究科教授
ドイツ文学	鎌田道生	関西学院大学文学部教授
フランス文学	吉川一義	東京都立大学人文学部・人文科学研究科教授
英語学	中村捷	東北大学大学院文学研究科教授
日本語学	杉戸清樹	独立行政法人国立国語研究所 日本語教育部門長
美学・文芸学	利光功	東京工芸大学大学院芸術学研究科研究科長
音楽学	月溪恒子	大阪芸術大学教授 同大学院芸術文化研究科教授
演劇学	毛利三彌	成城大学文芸学部教授
美術史学	小佐野重利	東京大学大学院人文社会系研究科教授

はじめに..... i

目次

第1部 海外の大学評価と日本の大学評価

- 1-1 イギリスの大学評価と日本の大学評価：Prof. Andrew Gerstleを囲んでの座談会... 3
- 1-2 アメリカの大学評価と日本の大学評価：Prof. Kah Kyung Choを囲んでの座談会...12

第2部 大阪大学大学院文学研究科と文学部における研究・教育活動の概要

- 2-1 外部評価を実施するにあたって.....31
- 2-2 大阪大学大学院文学研究科の理念と実践：新世紀にふさわしい人文学をめざして...34
- 2-3 大学院における研究・教育活動.....37
- 2-4 学部における教育活動.....39
- 2-5 国内外の研究・教育機関との交流.....41
- 2-6 外部資金の導入.....43

第3部 各専門分野における研究・教育活動の概要と外部評価

- 3-1 哲学哲学史.....47
- 3-2 現代思想文化学.....61
- 3-3 臨床哲学.....71
- 3-4 中国哲学.....84
- 3-5 インド学・仏教学.....95
- 3-6 日本学106
- 3-7 日本史学134
- 3-8 東洋史学155
- 3-9 西洋史学175
- 3-10 考古学194
- 3-11 人文地理学214
- 3-12 日本文学229
- 3-13 比較文学261
- 3-14 中国文学272
- 3-15 国語学283
- 3-16 英米文学298
- 3-17 ドイツ文学317
- 3-18 フランス文学332
- 3-19 英語学349

3-20	日本語学	367
3-21	美学・文芸学	394
3-22	音楽学・演劇学	415
3-23	美術史学	442
3-24	文化基礎学（広域文化形態論講座）	460
3-25	地域社会論（広域文化形態論講座）	462
3-26	言語文芸学（広域文化表現論講座）	464
編集後記		469

第1部 海外の大学評価と日本の大学評価

1-1 イギリスの大学評価と日本の大学評価

—— Prof. Andrew Gerstle を囲んでの座談会 ——

日時：2003年1月10日（金） 午後3時～4時20分

場所：文学研究科長室

座談会参加者（アルファベット順）

天野文雄 文学研究科教授（演劇学）・評議員

Gerstle, A. Professor of Japanese Studies, Director of AHRB Centre for Asian and African Literatures, School of Oriental and African Studies, University of London

猪飼隆明 文学研究科教授（日本史）

河上誓作 文学研究科教授（英語学）・文学研究科長

小林 茂 文学研究科教授（人文地理学）

土岐 哲 文学研究科教授（日本語学）

はじめに

河上：ガーストル先生初めまして。この度は遠いところをはるばると私達の外部評価のためにおいで頂き、本当にありがとうございました。今日はもう少しお時間を頂戴して、色々お教え頂きたいと思います。

ガーストル：私もお聞きしたいですね。今度の COE についてどうお考えかとか……。

猪飼：大阪大学文学部・文学研究科では、今まで『自己評価書』を何度か出してきましたが、今回は研究について5年間の業績を調べて、データとして提出して外部の先生に評価していただくということにしました。ただし、評価のあり方については、戸惑うことがたくさんあるわけです。そういうことで、まずイギリスの大学評価の目的や理念、さらには実態についてお話しいただきたく思います。



ガーストル先生近影

RAE：研究評価

ガーストル：私は、ちょうど10年イギリスにいることになります。この10年の間、色々な評価に接しました。一番大事なものは、文部省の下でやるんですけれども、**Research Assessment Exercise** と言いまして、4、5年おきに全国の大学の研究が評価される。そして予算の中の研究費は評価である程度決まるといいう制度があります。評価の対象となる先生は論文を4点を出さなければならない。そこで、量（ページ数）は関係なく、質の評価を下されます。これはシステムとしては悪くないと思っています。私も主任として行きましたから……。若い人たちのキャリアに対して、いい影響を与えていると思います。あまりにもプレッシャーがかかる場合は別としても、次の4、5年間、目標をもって考えながら研究を進めるようになる。その場合、私達の **School of Oriental and African Studies (SOAS)** では、東アジアや南アジアといった **Asian Studies** の枠で、40人位のグループで申請します。それを単位にランキングされて、予算も変わってくるわけです。

河上：その申請単位が何人で構成されるのかは決められているのですか？

ガーストル：グループの大きさは大学の規模によってかわり、設定された分野に申請するわけです。日本の大学院設置審の委員会みたいなものがある、たとえば経済学の場合、数学的経済学とか開発的経済学とか細かくわかれています。その委員会が、申請者からだされた各4点の論文を読み、評価するわけです。ランキングとしては、5*が一番高い。それが一応、国際水準のトップレベルくらい。3はAとBになって、3以下は研究費がほとんどもらえないというふうになっています。業績だけでなく、特に博士課程の大学院生の指導とか、どれ位研究費をもらっているか、そしてどういう研究プロジェクトをやっているかも考慮されます。ちょうど、おとしの12月が申請の締切で、幸いに私たちはランクが一つアップされました。

猪飼：グループとしての評価になるわけですね？

ガーストル：だから成績をあげるために、急に誰か業績のある人を入れたり、あまり業績のない人を外したりします。ただし、もらう予算は人数をかけますし、何パーセントの人を外しているという数値もでます。厳しいですけども、まあまあみんな文句言いながら、仕方なくという態度ですね。

小林：その場合、委員は公表されているのですか？

ガーストル：はい。

天野：当然、同じ専門分野の人が提出された論文を読むのですね？

ガーストル：そうです。

小林：今年の1月5日に朝日新聞に出た記事（「大学の力」4）では、オックスフォード大学では資料作りに7万時間以上かかったというようなことを書いてあったんですけど。〈笑い〉

ガーストル：必死にやっていますね。

河上：そのランキングが上になったり、下になったりするというのは、かなり激しいものですか？

ガーストル：ただしこれは研究だけです。別に学生の卒業後の就職とか、図書館の本とか、他の

指標も入れる、[新聞による] 全体的なランキングがあり、新聞に出ます。研究費や科研費の取得額も一つのポイントになります。ただしこれからは評価のシステムをもう少し簡単にするという話ですね。

小林：日本の『世界』という雑誌（2001年5月号）に、ゴンブリッチという先生（オックスフォード大学）の、イギリスの高等教育政策を批判する「大学人の大量虐殺」という文章が出ています。こういう意見もあるわけですね。

ガーストル：はい。でも、大学の先生は文句ばかり。〈一同笑い〉こういう評価で問題なのは、本来息の長い研究の場合ですね。時間のかかる字引の編さんとか。でも、息の長い研究をしても、その間に学術雑誌に論文は出せるでしょ。やはり書いて出した方が、いい面もあると思うんです。また若い方をみていたら、悪くない影響があります。たとえば40歳で自分の博士論文が終わって、次のテーマをどうするかというときに緊張感があります。つまり研究で頑張らなければ、ランクが下がって、もっと教えなければならないとか、もっと学生をとらなければならないというようなことになります。我々、大学人はやはり税金で生きてますから。

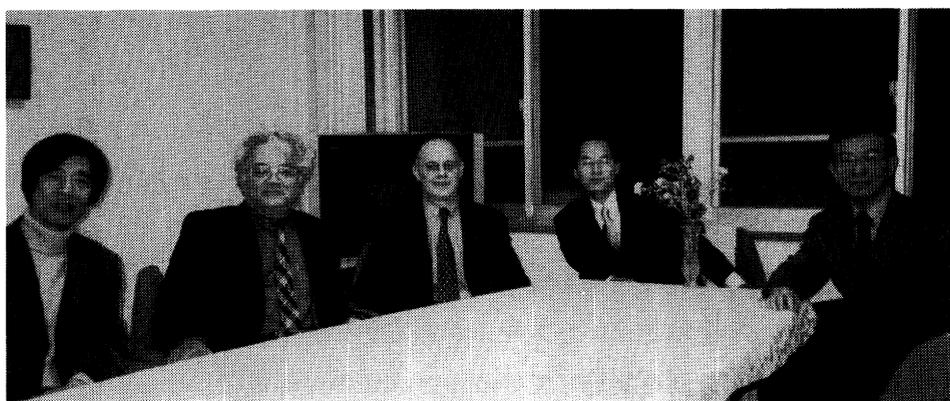
猪飼：若い研究者の研究計画を作る場合にも関与されるんですね。

ガーストル：学内だけになるのですが、始めのうちは1年間、もう少ししたら2年間に一度、レビューがあります。それは昇進のために使うものではありません。自分はこういう風に進めたい、そのために新しいコースも作りたいというプランも出せます。

猪飼：SOAS の場合、例えば東アジアの研究グループっていうのは、やはりお互いに共通している研究対象と方法をもっているのですか？

ガーストル：必ずしもそうではない。普通はみんな個人個人です。ただ、それぞれのグループの特徴、つまり何でもするというより、あることを深く研究しているグループが勝つわけです。特に科研費をもらうときは大事で、そういう共同研究が文科系でも大事になってきました。

猪飼：今度の評価では、独創性とか、実証性とか、視点を示してお願いしています。そうした点は、個人の研究については分かりやすい話ですが、組織の場合になると、非常に考えにくい場合があるとは思いますが。



ガーストル先生を囲む座談会の前に

RCS プログラム：イギリスの COE

ガーストル：イギリスでは、日本の COE と同じようなプログラムが、すでにはじまっています。Research Centre Scheme というプログラムです。私はたまたま申請の代表者になりましたが、それが首尾よく採択されました。人文科学系では、144件の申請があって、11件が採択されました。だから運が良かったんです。主体はアジア・アフリカを担当する SOAS ですが、隣の University College のヨーロッパ研究の人たちと組んでやっています。このなかに8件の共同研究がはいつています。やはり一つの大学だけでは採択されなかったと思います。面倒くさい面もあるけれども、制度はグループ単位での審査になっています。

河上：その RCS というのは、毎年募集してるんですか？

ガーストル：そうだと思います。今度の日本の COE で私が評価しないのは、9月か10月頃に決まって、1億円を3ヶ月で使うということですが、これはたいへんですね。〈苦笑〉

河上：そうですね。半年間遅れましたからね。

ガーストル：イギリスの場合は年度ごとに、企画をかなり細かく書きますが、予算の執行は少し融通がきくんです。次の年度に回すとか、少し早めに使うとか。

小林：この RCS は、1件あたり、いくらくらい研究費が出るんですか？

ガーストル：日本が羨ましいですよ、私たちは5年間で1億6,7千万円位だけです。日本では、あるところでは1年間でこれくらいもらっているようですが……。

天野：先生方の共同研究は、何というテーマですか？

ガーストル：この40年間、文学論が主に西洋で随分発達しました。post colonial や feminism など色々あります。アジア・アフリカの立場から、それを問うというのがテーマです。私の担当している研究会は、文学とパフォーマンスがテーマです。ですから、アフリカの口頭文芸なども入っています。私は浄瑠璃などを研究していますから、一緒に組んでるのはギリシャ古典の専門家です。ヨーロッパ中世の人たちも入って、発声なども比較研究します。3年間の共同研究会です。ほかに都市と文学というテーマの研究会も始まっています。

ところで、研究評価以外に、教育の面でも全国的な評価があります。今のところは、それは予算の配分に関わらない。

教育評価

猪飼：教育評価といいますと、イギリスではどういう視点でおこなわれるのですか？

ガーストル：文部省が何年間もかけて、分野をかえながら [おこない] 全部をまわるような評価で、その準備は大変でした。どういう規準で採点しているかというようなことについて、かなり実際のレポートを用意しなければならなかった。教育の目標、学部の学生や修士の学生に何を基本的に教えるか、卒業する学生はどのようなスキルがあるか、どういう教授法で教えるか、とかを書くわけです。自分がたてた計画を実施しているかどうかの評価規準になるわけです。だからすごく野心的な計画だったら、かえって危ないことになります。実際にやっていることを目標にする方がいいわけです。その評価は、これから少し簡単になるらしいです。訪問調査も4人の評価

委員が1週間の日程できて、実際の講義にも出て調査しました。

猪飼：その目標というのは、教官それぞれが、つまり1年間こういう教育をするぞ、ということですか？

ガーストル：理念的な面もあるんですね。どういう教養を、ということとか、また教育の方法、つまり実際にコンピューターを使っているとか、まだ普通の古い黒板を使っているとか。〈一同笑い〉そういう技術の面まで問題になります。別に、最先端がいいということではなく、効果的にやるということが大切です。

猪飼：教育機器の運用といたしますか、利用といたしますか……。

河上：ビデオやコンピューターですね、教室の現場における普及度は、どれくらいのものでしょうか？

ガーストル：まだ少ないでしょう。それともう一つ、学内だけに使う「外部評価」があります。例えば東アジアについては、他の大学の同じ分野の研究者を呼んで、評価してもらう。全体のプログラムをみる。学生もインタビューされたんですね。それから外部評価を改革に利用することもある。例えば我々は、[学生を]留学させたいですけれども、それができないときに、こういう方面に行きたいといって希望を出せば、特に外の人が力になってくれる場合もある。

河上：教育評価というと、アメリカの場合、学生による評価がありますね。イギリスではどうしていますか？

ガーストル：イギリスでは、必ず、1年間の講義が終わる直前に、用紙をまわして[学生に]書かせる。ただしそれは公にしない。まずは主任のところにおいて、それで先生に回る。それから英語で、**career development** といって、最近若い先生が雇われると、必ず教育研修コースに行かせる。セミナーをどう教えるか、講義の場合はどうするか、教え方を学ばせることが普通になってきました。今まで研究者はそういう教育を受けてない場合が多い。

河上：アメリカで大体5段階方式で、12~13項目に関して学生に全部点数をつけさせて、アベレージを出し、これを受講登録の前に公表するというやり方がありますよね。そういう方法はイギリスではとってない？

ガーストル：はい。他の大学は知りませんが。

小林：イギリスの教育評価には、**audit** というのがあるということですが、具体的にはどういうことなんですかね。

ガーストル：ごめんさない、私も細かくはなかなか分かりませんが、最近、**SOAS** の中に **audit committee** があると聞いています。たぶんマネジメントやアドミニストレーションに関連したことだと思います。

大学経営と学生

河上：学生数と経営の問題はどうですか。**SOAS** は一時、危機にさらされたという話を聞きました。

ガーストル：絶えず「危機」です。〈一同笑い〉私がちょうど **SOAS** に着任する前ぐらいでした

が、言語学はあまりにも理論だけになっていて、アジア・アフリカの個別言語から離れすぎた。でもイギリスの大学の予算は厳しいです。ほとんどの大学は赤字じゃないですか。ちょうど今月、政府の白書が出るはずですが。政府も資金が足りないということを認めています。そこでどうやって授業料収入をあげるか、ということが問題になってます。

河上：自国以外の学生の方が授業料が高いから、外国人学生をできるだけ集めるということは、世界的にありますよね。

ガーストル：海外からは結構来ますね。英語も習う。でもそれに頼るということは難しいですね。イギリスでは、EUの学生は国内の学生として来られます。だから、ヨーロッパから来る学生が多いです。イギリスの大学は、ヨーロッパの大学の中ではいい方じゃないですか？

河上：英語という強みがある。

ガーストル：いや、それだけではありません。

河上：学生がふえて教育の質が下がることはありませんか？

ガーストル：もちろんヨーロッパの大学全部は大衆化しました。この20年間にSOAS [の在学生数]も3倍くらいになっています。今はスペースの問題が大きく、私の研究室も半分になっています。日本のCOEのような研究費をもらっていても。〈一同笑い〉

猪飼：もう一つ、評価では社会貢献という問題がありますね。今は日本ではアカウントビリティーと言って、ともかく国からお金をもらっている以上、何かを説明できないとならないということで情報を公開する。また一方で、我々の学問を通じて、社会に対してどうかかわりをもつかという点の評価もありますよね。イギリスの場合はどうですか？

ガーストル：システムとしては、評価されない。ただ、評判。よくメディアに出るとか、イメージの問題じゃないですか？SOASの場合は、地味なことですけども、どうしても言葉が出発点ですね。教えている言語を並べたら40くらい [ありました]。ヨーロッパ以外の言語をカバーする大学ですから。だから、そういう意味では最近成功してるんですね。儲かっている。またロンドンの真ん中に立地していますから、そういう地の利が大事ですね。最近ビジネスのMAとか、Chinese business worldのコースを始めたりしています。今までは書誌学的、文献学的でしたから。開発経済学やODA関係のコースもあります。もう一つは、アジア、特に東南アジアやアフリカに放送大学のようなサービスもしている。つまり予算が少なくなると、人間が必死で色々考える。〈一同笑い〉もう一つ、foundation courseという英語のプログラムで、イギリスの大学の学部や大学院(MA)に入るために1年間の準備のコースがあります。これは随分成功しているんです。

河上：日本人も、大分行っていますよね。

ガーストル：はい。日本人は学部の方は、よくやり直す人が多いみたいですけど、それでも結構成功している。また、最近一般的にSOASの株は上がっています。10年がかりの「消滅しつつある言語の研究」という大きなプロジェクトがはじまりました。

土岐：日本でもやっていますね。SOASとの共同研究もあると思います。

猪飼：ところでイギリスの大学では、教育に関する予算はどう決まるんですか？

ガーストル：教育の予算（Teaching-Grant）は、分野によりますけど、人数で一応決まるんですね、研究の方（Research-Grant）は評価によって大きく左右されます。SOAS は、たぶん直接国からもらっている予算は半分以下です。その上に授業料は直接もらうんですけど、今は海外の授業料の方が大きく、国内は少ない。だから日本はずいぶん恵まれていると思います。〈一同笑い〉その代わりに日本の大学は子供扱いだったんですね、文部省からは。自由がない。

猪飼：そうですね。しかしそれも風前のともしびでしてね、〈一同笑い〉教育費については、学生あたり積算校費という形でお金は出しましょうと、しかし研究費については自分で稼ぎなさいという話に今なっている。

ガーストル：同じですね。

研究・教育の目標と評価

小林：今度我々が作りました研究・教育関係のデータは出版されることになっているんですけども、評価のためにあのデータをご覧になって、どういうご感想をお持ちになったかをぜひお伺いしておきたいのですが。とくに項目の構成について。

ガーストル：構成はよくなかったです。去年、大阪外語大の外部評価に来ました。また東京外語大や阪大の言語文化学部にも呼ばれて来ました。論文や学会発表までの説明はずいぶん成功している。しかし、例えば修士課程の一般的目標とか、どういうことを目指しているかとかいう項目がなかったですね。今こういうことをやっているという説明と業績が並んでいるが、これにくわえてもう一つ、各先生が今までの5年間どういう線で自分ではやってきたか、そしてこれからどう線で行こうと考えているのかを説明する項目があれば、よかったですと思います。

天野：今のご感想は端的に言いますと、理念のようなものが欠けているということですか？

ガーストル：ただ科目が並んでいるだけではなくて、どこまで学生を教育したいか、そしてそのためにはどうやって実現するか、という項目がほしいわけです。

猪飼：今回の評価は、ちょっと折衷的なんです。研究に重点を置きながらも、一方で大学院生の論文、口頭発表も含めてということになっています。またはじめはデータだけで報告書を出そうという方向で進んでいたのですが、やっぱりここまで来たんだから、全体の評価をやってみようということで、全専門分野について外部評価をしていただくということになりました。

ガーストル：ですから私は、何の目的でこの外部評価を頼まれたか、よくわからなかったんです、来るまで。

河上：そういう点ではスタートしたばかりですから、今回の経験から学ぶところは多いところですね。

猪飼：問題意識から言えば、自然科学系の評価に対して我々人文科学系はどのような評価の視点が用意できるかという、そういうことの試みでもあったわけです。また評価が特に資源配分の問題に関わった時に、つまり大阪大学の予算がどのように分配されるかということを考えますと、これは大変な問題なんですよ。

ガーストル：どうしても医学は強いですしね。〈一同笑い〉

河上：SOAS の場合はどうですか？

ガーストル：SOAS には3000人くらいの学生に対し、250人くらいのスタッフですが、その中でも結構難しいです。開発研究とか、法学とかは学部学生も多いし、修士課程の院生も多い。日本語や中国語は一応足りるくらいの学生が来ますけど、他はなかなか。だから今は厳しくなってきましたね。我々は、ですから今年から faculty を3つに分けたんです。languages and cultures つまり言葉を教えている部門と、歴史・美術・人類学も入っている arts and humanities, それに政治経済です。我々は幸いに政治経済より研究のランクは上ですけども赤字です。arts and humanities も赤字みたいです。これからどうやってそれをもうちょっと上げられるかというようなことを将来計画にして改善していくわけです。

河上：なるほどね。

ガーストル：新しい MA プログラムを出したりとか、自分の魅力的な部分をどう売るっていうか……。ですから阪大と同じように、大学院大学の方に変化しています。

徹底した外部評価

小林：ところで、日本の大学は外国人による大学評価をかなり実施しています。日本人同士でやると、どうしてもお手盛りになるんじゃないかというのがあって、外国人の先生に来ていただいているわけですが、イギリスにもそういう評価はありますか。

ガーストル：そういう評価はそれほどないでしょうが、たとえば講師から助教授とか教授へのプロモーションの時は必ず3人の国外の研究者に業績を読んでもらう。

河上：ご経験が非常に豊富でいらっしゃいますから、イギリスから見たアメリカ、それから日本、オーストラリアというかたちで、大学のあり方、評価のあり方等に関してご意見をお持ちだと思いますが、その点に関してはどうでしょうか？

ガーストル：イギリスが一番厳しいみたいです。例えば大学院の修士の試験までも、必ず採点や合否判定には違う大学の人が入っていて、びっくりしました。また、その人の声が一番強いんです。〈笑い〉日本語科の私達の場合も、実際の試験の問題や基準が適当かどうか、実施前に検討する。

小林：入学試験の場合ですか？そうじゃなくて普通の試験も……。

ガーストル：入学試験は大学がやりません。普通の学期末の試験の話です。博士の学位の場合も二人学外の人が審査にあたります。

河上：学位について、アメリカとはやはり違いますか。

ガーストル：イギリスは最近までは博士課程に入ると、いわゆる授業がなかったんです。このごろは方法論の授業を始めましたけれども。ですから準備を整えている。またイギリスではたかさんの専攻ではなく、一つの専攻を深くやる。ですから論文だけです。アメリカだったら、授業の成績と論文でしょ？ でも、それも変わってきました。なかなか博士課程が終わらないから。

〈一同笑い〉だから今厳しく、修士の後ですけども、4年間で終わらせるよういわれています。特に奨学金をもらった場合、4年間で終わらなかつたら、その大学に罰というか、奨学金がその

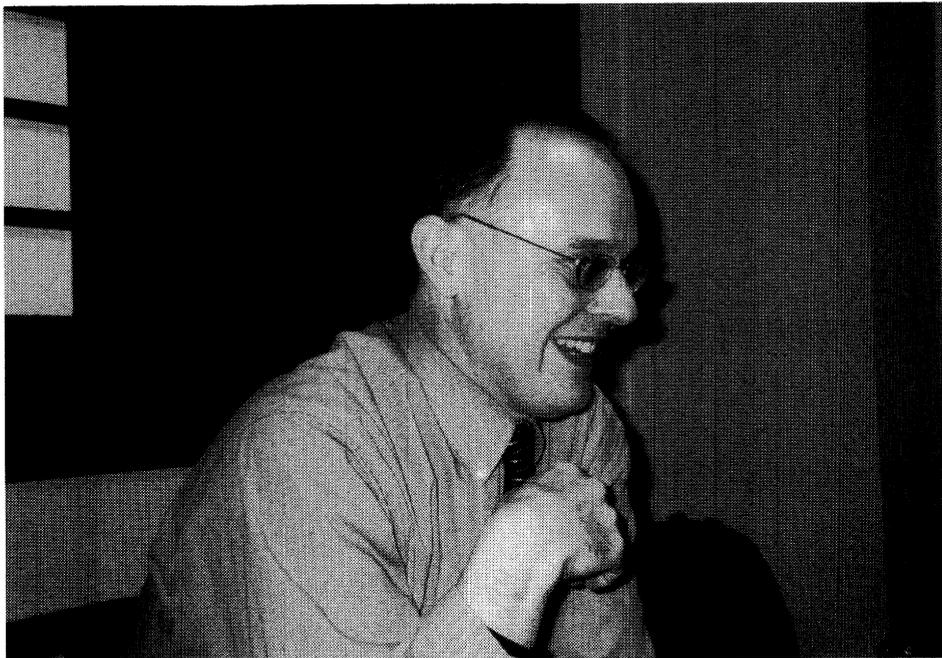
大学の学生にあたりにくくなる。ところで、この間、大阪大学の理科系の先生が来られて、統計的に大学の予算の割には業績が一番高いのはイギリスだと、おっしゃっていました。

河上：その先生は、核物理研究センターの先生かもしれません。

ガーストル：それから「日本の大学をよくするためには、会議を必ず1時間半で終わるべきである」ということをある方から言うようにいわれました。

小林：それは、どなたから言われたんですか？

ガーストル：[阪大の] 日本文学 [の] 5人 [の教官]。〈一同大笑い〉



大阪の伝統文化を楽しんでくつろがれるガーストル先生

河上：それはちょっと外部評価とは言えませんね。

猪飼：最後に、先生のご専門の領域で、大阪関係のご計画があるというお話しですが。

ガーストル：最近、近松の翻訳の長い仕事を終わって、違うことをやろうと思っています。でも歌舞伎はほとんどテキストがないから、役者中心に研究を始めて、絵本とか刷り物とか、イギリスで上方役者絵を調査したりして、二千枚以上見つけました。絵本もたくさん出てきています。それを中心に展覧会をしたい。大英博物館で、さらにうまく行けば、早稲田の演芸博物館でやって、最後には大阪歴史博物館で。多分、阪大図書館の本も2冊使います。

天野：どうも話題が尽きませんが、ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

(了)

1-2 アメリカの大学評価と日本の大学評価

—— Prof. Kah Kyung Cho を囲んでの座談会 ——

日時：2002年11月29日（金）午後3時～6時

場所：文学研究科長室

座談会参加者（五十音順）

天野文雄 文学研究科教授（演劇学）・評議員

猪飼隆明 文学研究科教授（日本史）

河上誓作 文学研究科教授（英語学）・文学研究科長

小林 茂 文学研究科教授（人文地理学）

里見軍之 文学研究科教授（哲学哲学史）

Kah Kyung Cho ニューヨーク州立大学バッファロー校教授（哲学）

土岐 哲 文学研究科教授（日本語学）

望月太郎 文学研究科助教授（現代思想文化学）

鷲田清一 文学研究科教授（臨床哲学）

はじめに

河上：このたびは外部評価のためにご来日いただき、ありがとうございます。ニューヨーク州立大学バッファロー校はナイアガラの滝の近くですので、冬の寒さも厳しい頃と存じます。昨日はアメリカでは感謝祭の祝日にもかかわらず、Cho先生には一日中たいへんお世話になりました。ご尽力に対して心から感謝申し上げます。

ご存知のように、いま日本の大学は大きく変わりつつあります。この変化の過程で「評価」が重要なキーワードの一つになってきました。今日の座談会では、こうした日本の現状を背景に大学評価のあり方について、アメリカの状況と比較しながら率直なご意見を賜ることができれば嬉しく存じます。短い時間ですが、何卒よろしく願い申し上げます。



懐徳堂の「定」の額の前で質問に答えられる Cho 先生

里見：Cho先生の略歴をご紹介します。先生は1927年のお生まれです。ソウル大学をご卒業後、東洋人初のドイツ政府給費留学生（DAAD）としてハイデルベルク大学にご留学、K・レーヴィット教授（当時）のもとで博士号を取得されました。その後ソウル大学教授、1970年以降はニューヨーク州立大学バッファロー校教授を務めておられます。その他にイエール大学をはじめ、アメリカやドイツの諸大学で客員教授等も務めておられますが、大阪大学でも十数年前——1990年だったと思います——、客員教授としてお招きしました。その後もご来日の度にご講演いただき、私は先生には何度もお会いする機会を得ました。そのような経緯から今回も外部評価をお願いすることができた次第です。先生は多くのお仕事をなさっていますが、最も有名なのは『意識と自然』——原題は“Bewusstsein und Natursein”，副題は「西と東とのDiwan」とされていますが、ゲーテのDiwan（『西東詩集』）とかけておられるのでしょうか。東西の哲学を現象学的に研究し、高い見地から比較思想的に論じられたご著作は、日本語にも翻訳され定評あるところです。

I. 大学評価の日米比較

変革期を迎えた日本の大学と評価の問題

猪飼：今回の座談会の趣旨について簡単にご説明申し上げます。現在、日本の大学とりわけ国立大学は戦後最大の変革期を迎えています。法人化と統合・再編が、その第一の局面です。いわゆる少子化現象の中、学生数が減少の一途をたどっていることから、大学の数そのものを整理すべきではないかという声も一部に生まれてきています。またバブル崩壊後、経済は低迷し、余裕のない時期を迎えています。その最中に国立大学が多くの人員を抱えている、そのような現状に対して批判的な世論も一部には存在しています。こういう情勢の下で大学改革が進められているわけです。我々としても、それには固有の方法でじっくり対応して行かなければならないと思います。しかし現実には法人化と統合・再編の問題に議論が集中しているのが現状です。

大学の統合・再編の一つの根拠として大学評価がいま頻りに強調されています。かつて文部省の管轄下に「学位授与機構」というシステムがありましたが、それを「大学評価・学位授与機構」に改め、いま文部科学省のもとで大学評価が促されています。この評価は、法人化後に制度化されていく見通しですが、それに先立ち大学評価・学位授与機構はいくつかの国立大学に対して「自己評価」の実施を指示しています。今年はその3年目にあたりますが、阪大の文学研究科および文学部が対象になりました。評価は、アメリカと同様に、「教育」「研究」「社会貢献」の3分野に分けて行われます。今回実施しなければならないのは、それらのうちの「教育評価」です。しばらくの間、大変な作業をしなければならないことになりました。

この動きに関連して、大学の持っている力量がどの程度のものかを大学自身が判断できるように、阪大ではデータ集積のシステムを開発しました。現在、このシステムの始動期にあつて、各教官はデータの入力に追われています。おそらく日本の国立大学では最大規模のデータ収集システムです。しかし今後それがどのように運用されるのか、いろいろと難しい問題を抱えているこ

とも事実です。これまでの大学評価は、総体的に見て、自然科学系諸分野での評価——これは数値化しやすい要素を持っていますので、比較的容易に行えるでしょう——をモデルにしていますが、そこでの基準に従って評価が行われると文系では困る。しかも財政との関連を考えますと、資金導入の能力が低い文系は資金導入の能力が高い理系に従属的になるという一般的傾向も生じます。

このような傾向に対して文学研究科では独自にデータ収集を試みて、集積したデータをもとに人文学に固有の評価のあり方を模索し始めました。我々に固有の評価のあり方を少しずつでも考案できればと願っています。現在は「研究評価」に重点を置っていますが、その際にも従来より「研究」を幅広く捉えるよう努力しています。具体的には、研究室として保持している能力の全容にまで視野を広げて、大学院生等の研究成果も含めてデータを収集しています。そうして苦労して集めたデータをまとめたものを、今回、専門分野の外部評価をお願いいたしました諸先生方にはお送りしました。日本の現実にご感想とアメリカでのご経験も含めてお話いただき、じっくり討論できればと思っております。

大学の危機——アメリカの場合：ニューヨーク州における大学の統合・再編

Cho：日本で今、大学がどのような危機的状況にあるかは私も間接的に察しておりますが、アメリカではいつも危機を論じています。危機の意識とは競争の意識であり、お互いに競争しながら成長する。終身制 (tenure) が自明なものでなく、“publish or perish” という言葉があるように、特に若手に対しては圧力が強いのです。

ニューヨーク州立大学 (State University of New York) の構成について、ここで少しご説明いたします。現在、州立大学が総合大学機構の形態をとっているのはニューヨークとカリフォルニアの2州だけです。ニューヨーク州立大学は64箇所のキャンパスを擁しますが、それらを統合する機構が作られた第一次的理由の一つが cost effectiveness の追求です。今、日本の国立大学が法人化されると説明されましたが、私たちの場合には逆の現象が起きたわけです。私立大学の性格を持っていたバッファロー校は州立大学の中に取り入れられました。一定の予算内で浪費がないよう、大学間で専門分野の重複を避け、地理的に近い大学で同じ分野の研究者が4, 5人もあるとすれば、人員を減らして、いずれかの側に伝統的特色を生かしつつ統合する。無駄な脂肪は除き、骨格を選定した後、筋肉を増やし成長させる、そういう方針です。バッファロー校では1970年代初期には哲学科に41人の専任教員がいました。それが現在は18人です。今ではこれが適当な数だと言われています。しかし必ずしも哲学に対する幻滅のゆえに哲学科が小さくなったわけではありません。ロックフェラーがニューヨーク州知事に在任中、カリフォルニア州に倣って、散らばっているキャンパスを統合して超一総合大学を作り、最高水準の州立大学としてハーバードやスタンフォードなどの私立大学と競うことのできるものにしようという欲望を持って統合を始めたのです。学生数は40万5千、教員数は2万5千、加えておそらく1万5千以上の客員があるでしょう。バッファロー校よりも伝統が若いストーニブルック (Stony Brook) 校は医学部や自然科学部を核として成長していますが、ニューヨーク市のような文化の中心地に近いという条

件のために哲学科も充実しています。哲学科の教員数はバッファロー校より多く20名以上を抱えます。もちろん地理的に相当離れているので、バッファロー校と競合する性格のものではありません。バッファローに近いところではアルバニーに校地があります。そこでは哲学科は私たちに抑えられて成長率が低いのです。バッファロー校に入学できない学生が、周辺の例えばアルバニー校へ行くというような傾向が生じています。

州立大学の授業料は、今は相当高くなっていますが、昔はずいぶん安かったのです。だから優秀な学生で、私立大学の高い授業料は払えない、そういう人たちは州立大学へ集まってきます。けれども、いまや州立大学にも「最良の40大学」に入るものがある。一つの州で最良と認められた州立大学は、ほとんど Ivy League と同格となっています。ランクを決める評価が3年に一度行われますが、それを見ると、哲学に関して言えば Harvard がいつも1位ではないのですよ。Harvard が4位になったり、7位になったりもする。カリフォルニア州立大学バークレー校やピッツバーグ大学などが1位だったこともあります。

社会奉仕としての大学教育

Cho: アメリカでは大学全体を「奉仕産業」と言っています。もちろんまず教育があり、次に研究があり、そして社会貢献があります。単純に考えれば社会貢献の割合は3分の1ですが、しかし「社会奉仕」‘service’が大学の活動全体を形容する言葉とされているのです。理工学部や経済学部は付近の産業と協力しています。人文学部や哲学部も歴とした社会奉仕に寄与する部局として見なされています。実際に貢献しているのは研究においてよりも教育においてです。表向きには私たちは研究大学 Research Institute を自称していますが、内部では神経を使って学生たちを捉えるよう努力しています。

学生移動に関して「消耗率」を考えねばなりません。例えば学部入学時に100名だった学生数が、1年、2年経つうちに70名に減ったりする。各分野別にその統計が出ています。消耗率が高い場合に、それをどうして防止するか。そのためには経験のある優秀な教授たちが初歩の、例えば論理学入門や倫理学入門などを教える。30年間勤務した長老も哲学入門は必ず担当することになっています。私も、ここ30年間、哲学入門をやらなかった年はないわけでした……。日本でも昔のソウル [京城] 大学では安倍能成のような先生が哲学入門を講義していましたが、一番難しい科目だと言っていました。自分の研究に都合の好い分野だけをゼミナール形式で教えて、授業が著作になるという、そういうことを考えている人たちがアメリカにもいますが、そういう向きに対して牽制するんですね。

大学の「主人」としての学生による評価の重要性

Cho: 教員は学生たちとの付き合いを大切にしています。学生に対して、どれくらいの時間を充てているか——研究室のドアがいつも開いていて、あらかじめアポイントメントを取らせるのではなく、学生はいつでも入れるようであってはいけない——が評価されます。だから、主人は学生であり、教員は奉仕者なのだという概念を強調しています。大学教員と学生たちとの関

係を念頭に置いて見ると、ほんとうにアメリカは民主主義的な国だと思います。いつでも学生たちを中心にして考え、彼らによる評価を非常に重要視しています。もちろんその他に、同僚による評価があり、外部の学者による評価もありますが、比重を比べてみれば、学生による評価が定着すれば客観性を持つようになります。

猪飼：一つお聞きしたいのですが、社会状況とか、政治状況とか、時代の変化に応じて学生たちの関心も移動しますね。そうすると、この講座には学生が数多く行くけれども、あの講座には学生が全然寄りつかないというようなことも起こってくる。しかし、そのような講座でもきちんと研究活動はやっていて、そして大学の中でそれなりの位置を占めているというような場合に、そういう講座やそこに所属する研究者の評価は、どうなりますか。要するに、評価を受けようにも、授業に学生があまり出て来ないとか、そんなことはありえますよね。

里見：問題は、学生数・院生数がきわめて少ない分野の場合です。そういう専門分野では学生に評価してもらおうと言っても、そもそも評価する学生の数が非常に少ないわけです。こういう場合、講座あるいはそこに所属する教員に対する評価は、どうなるのでしょうか。大きな講座に学生が大勢いて、この先生は良い、あの先生は悪い、という具合に評価されるのではなく、規模からして落ちぶれそうな講座があるとして、そういう場合、評価結果によっては、講座はつぶされるのでしょうか？

Cho：正式に講義が始まる前に登録学生人数を統制しますから、学生が出て来ないという問題になる場合はほとんどありません。例えば大学では是非必要だと認める講座で、(学部の場合)12~15名以下の登録しか予想できない時は、あらかじめ小さい教室を割り当てます。そしてこのような少数の学生が行う評価は、彼らに対する教員のパーソナルな接触が多いため、比較的教員に有利な結果になります。そのような歪みを大学本部ではちゃんと計算に入れて評価するわけです。

河上：学生数が何人以下だとコースをキャンセルしますか？

Cho：大学院の場合、例えばセミナーで最低5人。参加者が5人に満たない場合、キャンセルします。学部ではキャンセルする例はあまりありません。哲学入門や倫理学入門などは必修ですから。例えば医学や看護学を専攻する学生も受講することになっています。

学生による評価の信頼性

小林：関連して、是非お尋ねしたかったのは学生による評価の信頼性についてです。阪大でも授業評価(学部)をやりました。その結果を見ると、これは面白い授業だと書いてあるものもあれば、これはひどい授業だと書いてあるものもある……。同じ授業なんですけど、そういうふうに学生の評価が割れることもあるわけですよ。

Cho：アメリカでは学生による評価を制度化した後では、学生も、これは自分たちの受ける教育の改善にとって必要であると重要性を認めて、責任を持って公正にやるようになりました。初めは、この先生には叱られたから仕返しをしようと思ってね、この先生はダメだと書くような学生もいた。初めはいい加減なことを書いた学生もいましたが……。

河上：ご参考までにお教えいただきたいのですが、**student evaluation** の際、評価項目としては、どのようなものがありますか。私の経験では10項目位はあったように記憶していますが、要点として5つくらい挙げるとしたら、どういう項目が中心的ですか？

Cho：授業評価の場合、その授業で何が学生に要求されているかを初めからはっきりさせているか。シラバスはきちんと出来ているか。講義が始まって2，3週間経った後で渡すのではなく、最初の日きちんと渡すようにしているか。昨年度と同じようなシラバスを作って機械的に渡しているか、あるいは年々改良しているか。こういう **innovativeness** の有無を見るんですよ。それから学生たちと意思疎通がよくできているか。質問に対して、よく答えているか。バックグラウンドの異なる個々の学生に注意をよく払っているか。それから教材に対する評価があります。教科書は毎年同じものを使わず、色々なものを試しているか。1年生向けの授業であるにもかかわらず、大学院生を標準にしたような教材を使っている教員がいます。また自分の研究を中心に選んだ教科書を指定して自分の利得を計っている教員もいます。そういう教員は学生たちからの評価も低い。

望月：単におもしろいとか、おもしろくないとか、主観的なことではなくて、質問そのものが実質のある内容になっているわけですね。

河上：アンケートする主体は、学生ですか、教員ですか？

Cho：それは学生です。学生機構があって、彼らが統計を出して出版したりします。

河上：教官は介入しない？

Cho：独立です。

社会貢献について

河上：社会貢献について伺います。アメリカの場合、**university service** と **professional service** とが区別されてありますね。しかし社会貢献 **social service** というようなものが概念として、あるのかないのか。

小林：**university service** と **professional service** とは、どこが違うのでしょうか。

Cho：**university service** とは、補職を持って、つまり学長の任に就くとか、評議会に参加したりするとか、役職を持って大学行政に参加することを言います。

小林：**professional service** というのは、そうすると、学外でのサービスということになりますね。専門的知識を生かして、社会に奉仕する。

Cho：そうです。例えば、経済学者が銀行や経済金融団体に顧問として招待される。実際、そこから給与をもらっている人たちもあります。あるいは、企業が大学に寄付金を出して講座を設ける場合に、その講座で教える教員の給与を出資元の企業が支払っている場合もあります。

河上：日本とほとんど変わらないと考えてよろしいでしょうか？

Cho：ええ、そうです。

評価における教育／研究／社会貢献の比率

河上：アメリカでは、評価する場合に、教育／研究／社会貢献の比率というようなことは意識されませんか？

Cho：同じ比重を持っていると考えられています。例えば、research の面では良い本を書いているのに、teaching がゼロになっている教授があります。本も書かないし、teaching も駄目だが、university service だけ良くやっているという人もいます。〈笑い〉

望月：日本の場合、ほとんど研究業績の評価だけで済ませているようですが……。

河上：そうですね。しかし最近では法人化への動きの中で、例えば比率として teaching を4、research を4、social service を2にするとか、そのような案もあるように聞いています。しかしアメリカでは同じ比率で評価する、つまり平均点を重視するのですか？

Cho：表では teaching が重要であるとされていますが、じつは裏では research が最も重視されている。〈一同笑い〉 Research Institute を標榜している大学も多いので、実際は teaching の面で明らかに欠陥があるとしても、著作などで有名な人は平気でいられる。

個人評価——業績の評価基準

Cho：新規採用のとき、任用更新のとき、いつも具体的な状況に即して個人評価が行われる。採用後、3年間勤務した後で内部評価が講師や助教授に対して行われます。その後、6年目に準教授 Associate Professor に昇進するときに、tenure を与えるか否かが問題になります。それを判断する際、同じ時期に周辺の大学で採用された教員と比べて、この候補者の研究がどの程度発展しているか——論文を何本書き、そのうちのいくつが refereed [レフェリーによる審査を受けた] 論文であるか、それを基準にして評価が行われます。正式に査読を要請された匿名の評価者によって評価された論文を主に見るんですね。他の教員と比べて同等の位置にあるか、優秀であるか、または劣っているかを判断して採点する。そのような仕方では、具体的な状況に即して評価が行われる。また例えば、論文の場合、一般的に言って30頁を標準として、それ位の長さの論文を4本あるいは5本書けば、それが150頁ないし200頁の本1冊に相当するという評価基準もあります。過去6年間に本を1冊書いたか、あるいはそれに値する4本か5本の重要な論文を発表したか、その辺を基準にして評価されます。

望月：つまり人文学においては著書が重視されているということですね。

Cho：そうです。さらに、学会会議の委員になっているか、学術雑誌の編集委員に推薦されているかというようなことも評価の指標になります。

河上：死活問題と言いますか、“publish or perish”の話がさっき出ました。一般的には、いわゆるレフェリーつきの論文が一番評価されるということですが、その点に関しては、アメリカではかなり厳しい基準があるのでしょうか？つまり、どの雑誌には、どの程度のレフェリーがついているか、その辺りがはっきりしているというような……。

Cho：それにはきちんとした相場があります。

河上：日本の場合は、それほど厳しい基準はありません。どこそこに自分が書いたとされている

論文のリストを提出して、それがそのまま認められるわけです。が、それをチェックする機関がないのは問題です。それが本当かどうかをチェックする、つまり虚偽の申請ではないことを確認する。実際に虚偽の申請だったというケースがアメリカで、以前に私が滞在した大学でありまして、それは即刻クビになったということです。

Cho: 虚偽の申請は、まれにあります。

河上: すると、どこかにそれをチェックする機関があるわけですか？

Cho: 機関があるわけではなくて、恐らく偶発的に誰かが……。

河上: 偶発的に分かる？

Cho: ええ、そうですね。人間は、だれでも敵がありますから。〈笑〉

研究の独創性と外国語による成果の発信

Cho: 独創性は、自然科学の分野では、どこにでも見出されるでしょう。ところが西洋哲学を専攻している私たちにとって、ドイツの現象学や解釈学をやっている有名な学者たちの理論を乗り越えて、パイオニア的な立場で新しい理論を展開するのは非常に難しい。しかし、その代わりに比較哲学的な関心を持っておれば、それを彼らが考えている重要な問題に連結できる。そういう視点から見ると、彼らが目をつけていない分野が東洋哲学にはあるのだということが分かる。そうして徐々に、段階的に発展することによって、独創性が発揮されるのではないかと私は考えています。

しかし国際的な評価を受けることは必要です。先生方のご著作については、私は内容もある程度知っていますが、水準が非常に高く、これは惜しいと思ったのです。なぜならば、日本語で書かれているので、ドイツやアメリカの専門家たちは読めません。せいぜい1ページくらいのサマリーが付いているだけ。全体を翻訳して紹介する価値のある論文が多くあるにもかかわらず、評価を受けることすらできません。

ですから、私が特に励ましたいのは、論文を最初から外国語で書くこと。それができなかったら、日本語で書いたものを翻訳して、少なくとも全体の5分の1ぐらいは外国語で発表する、そうしたら彼らとも交流ができるだろうと思います。

研究の独創性の評価についても、アメリカでは評価者は被評価者と情実関係がないことが原則です。評価者は中立的立場の者でなければなりません。しかも評価者の名前が伏せられた形で評価が行われる。日本でも、論文のレビューは匿名で行うと聞きましたが……。

河上: 学会誌では特にそうですね。

表彰制度と merit increase

Cho: 大阪大学には表彰制度はありますか？

河上: これから始めようとしています。今までございませんでした。

Cho: アメリカには昔からありましたが、それでも飽き足らず最近は数を増やしています。

河上: どのような表彰制度がありますか？

Cho：例えば、若手の教員を対象にした著作賞とか、「持続的研究に功ある (Sustained Research Award)」そして学生たちに「優秀教授」と認められる教員を表彰するとか……。

河上：賞を増やすというのは、やはりモチベーションを与えるという意図があつてのことなのではないでしょうか？

Cho：それ以外に意図はありません。それが実際に金銭上の問題となってくるんですね。Merit increase が行われています。1000ドルから4000ドル平均の discretionary increase をもらうと、それが給与ベースに加算されるので、その分だけ賃上げ時に有利になる。例えば、同じ時期に二人の教員が採用されたとして、10年後に年俸が一人は5万ドルだが、もう一人は10万ドルに上がっているという現象が発生します。7万ドルの年俸をもらっている準教授がベースに4千ドルを加算した場合に3%賃上げがあれば、相当な開きが出てきます。

河上：アメリカの先生方の平均的な年収はどれくらいですか？

Cho：新規採用のとき4万から4万5千ドルぐらい、そして準教授に上がるときにおそらくベースに3千ないし6千ドルの追加があつて、また準教授から正教授に上がるときにも同じ程度のベースの増額があります。しかし ceiling に達したら、それ以上は……，

河上：上がらない。

Cho：州庁の財政上、無理なのです。近頃、アメリカでは定年退職制がなくなったわけですから……。お金の話は、これくらいでいいですか？〈一同笑い〉

河上：ありがとうございました。

組織評価 —— 中期目標・中期計画について

猪飼：評価に関わることで、もう一つお聞きしたいのは、今、文学研究科の組織としての中期目標・中期計画を作っているところですが、今後、目標にどれだけ到達しているか、計画はどれだけ実行されているかが評価される。この種の評価方法が取り入れられようとしているのです。アメリカでは、どうですか？

Cho：それは、例えば哲学科の全体としての目標と計画というようなことですか？

猪飼：ええ。学科として、こういう形で研究が進むように、という目標や計画を作って、自分が作った目標や計画に対して責任を持つという。

Cho：それは、ないことはないです。次のような話があります。それは、ストーニーブルック校—— ニューヨーク州立大学の中でもバッファロー校に次いで大きな graduate center になっていますが—— が設立されたのが、1950年代末あるいは60年代初めでしたが、これから大学を創立するわけですから、目標を設定しなければいけないでしょう。で、どういうことを言い始めたかといえば、周辺には、ハーバードだとか、MIT だとか、コロンビアだとか、哲学科の伝統を持っている有数の大学がある。彼らと競争したって、勝ち目はないというので、だから独創的なものを作ろうと言い出した。そこで、アメリカで盛んな分析哲学ではなく、ヨーロッパ哲学の研究の中心になることを目指したわけです。今、そこには西田哲学を研究している人もいます。日本語も上手で、西田の作品の翻訳も手がけた人がいます。周辺の大学を見まわして、研究分野

の重複を避けるという配慮は重要です。ニューヨーク州立大学は、どこでも有名な私立大学に囲まれているでしょう。彼らと競争するには独自の性格を持たなければならない。独自性を評価する際の指標は、教員の著作にはじまり、大学図書館の蔵書、それぞれの分野における博士号授与数、大学院生が卒業後に一流の大学に就職できるかどうかというような点にいたるまで、いろいろです。

目標を設定する時には議会から圧力が働くこともあります。予算の問題では、いつもそうです。州立大学となっていますが、「州立」の「州」は主語なのか、客語なのか。というのは、「州が立てた」のか、それとも「州を立てる」のか。〈一同笑い〉 財政問題が深刻でなかった頃は大学予算の95%を州民の税金で賄うことができたのです。それが今は40%以下になっています。だから、私立大学と州立大学の性格の違いは、いまやほとんどなくなりかけてきていて、とくに自然科学系では外部からの研究資金の導入が決定的な問題になっています。個々の教員の生存もそこに関係します。例えば、物理学をやっている教授が100万ドルをもらって、3年間、2、3人の他の教授と一緒に研究することになる。3年間は研究に没頭できるのですが、その期間が終わる頃には、またお金を集めなければならない。それが出来ない人は、淘汰されて、結局辞めてしまうということにもなるのです。人文科学系の教授が産業界から研究資金を得ることはまれですが、そこでは学生がたくさん集まることが重要です。学生の頭数で運命が決まります。学生の頭数に応じて、学長が資金を配分するわけです。

河上：非常に示唆的ですね。

小林：そうすると、外部資金をどれくらい獲得したかをめぐって競争するというのも別に不思議なことではなく、当然であるというふうにお考えになるわけですね？

Cho：そう、当然です。そう思います。何も憚ることはありません。

II. アメリカの教育制度をめぐって

大学院の入学試験について

河上：話は変わりますが、大学院に学生を入学させる場合に、日本では入学試験をします。アメリカでのやり方とは大分違うと思うのですが……。

Cho：書類審査です。

河上：その時に基準とするものは何でしょうか。例えば、論文は提出させているのか。推薦状はどの程度考慮するのか。また GPA を重視するのかどうか。それらの比率に関しても、何か基準をお持ちかどうか。どういう方法が一番いいのか。我々の大学院入試では提出された論文が特に重要視されています。

Cho：まず一番見るのが GRE Score。次に見るのが GPA。しかし、これは大学の質がまちまちですので当てにならないこともあります。よく知られた大学、またよく知られた教授のいる大学、特にその教授から推薦状をもらっている学生の場合には成績優秀であることは明白ですが、田舎の小さい大学から受験する学生の場合には straight A のこともあるわけです。推薦状の読

み方に関しては、私たちは心理分析の名手です。〈一同笑い〉 最高級の形容詞を使っても通りませんよ。

河上：“Be specific.”ということがよく言われますけれども、その人に関して、どこが、どういう理由で、こうなんだという具合に推薦状を書く、そういうことですか？

Cho：一般的に品行方正，学業優秀と書いては通じません。バッファロー校の女学生が大学院進学のために推薦状を書いてくれというので、彼女の書いた最近の二つの論文に言及して、それらはもし名前を伏せて読んだら誰でも大学院生のペーパーだと思わせるほどの水準であり、彼女を入学させる大学は自校の誉れを得るだろうと書いたのです。その後、この推薦書のおかげで彼女はエモリー大学とイエール大学の両方に合格しました。エモリー大学も相当に良い大学ですが、彼女はイエール大学神学科に入りました。

河上：そうしますと、potentiality が何よりも評価されるということですか？

Cho：いいえ、総合的に評価します。まず GRE スコアを見て、次に GPA を見る。さらに推薦書。出身校の質。それから、わたしたちは writing sample と呼んでいますが、提出された論文。writing sample の提出は初め要求されませんでした。今は要求されています。

猪飼：ところで、バッファロー校では大学院への内部進学者と他校の学部から入ってくる者の比率は、どれくらいの割合でしょうか。

Cho：ふつうは学部をバッファロー校で卒業した学生は、他所の大学院へ行きたがります。ところが格段に優秀な学生の場合に教授が内部進学を勧めるんですよ。「大学院に進学すれば、君は今のところ非常に成績が良いので、総長の追加 stipend や fellowship をもらうことができる」と言って勧める。その他にも奨学金があって、それに惹かれて来る学生も少なくありません。最低の奨学金が8000ドルですが、それに総長賞を加えると1万2千から1万4千ドルくらいにもなります。授業料も免除される。そう言うと、大体、彼らはここに来ますよ。結局はお金の問題です。

教育上の工夫

Cho：アメリカでは、学生は大学院に入学すると最初の3学期間は自分の専門とは無関係に基礎的な科目を履修します。このような履修規定を breadth requirement と呼びます。例えば哲学を専攻する者は、哲学という分野全体に関する基礎知識は持たなければならないという配慮から、このような規定が設けられました。ですから、論文は特定の対象について書きたいと思っても、最初の3学期はそれとは関係なしに必修科目を履修しなければなりません。哲学史を3科目、倫理学と美学——両者を併せて価値哲学と呼びます——を各々2科目、認識論と形而上学を各々2科目、実際に teaching するとき必要な基礎知識として、このような7科目を履修しなければなりません。博士のタイトルを得るためには特殊な専門的論文を書いても、就職初期には大学初年生の必要に応じた一般的講義ができるように準備させるわけです。

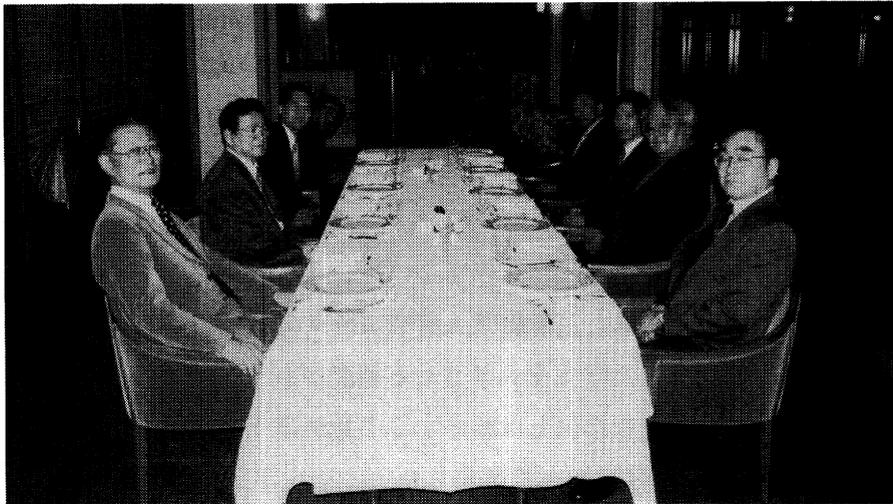
望月：日本の大学では、そういうカリキュラム上の工夫が足りないように思われます。

河上：そうですね。Breadth requirement は、我々は制度としては持っていません。

Cho：アメリカにおける教育制度のもう一つの特色は、TA (Teaching Assistant) にも講義させていることです。

鷺田：我々のところでは TA といったら、研究室のいろいろな雑用をやるだけですね。

Cho：それから、Adjunct Professor 制度をどこの学科でもやっています。学生の要求する科目を教える教員がないときは、隣接の学科、あるいは場合によっては周辺の大学にまで協力を求めるのです。正式にその学科に属する教員でない者を兼任教員としてリストに入れ、どんな分野でも教われるということを目瞭然分かるようにしています。また大学院の教育科目でありながらも学部に対しても開放されているものがあります。



Cho 先生の歓迎会の前に

学生の意識を高める工夫

望月：アメリカの大学では教育の上で様々な工夫をしているのですね。

Cho：ひっきりなしに工夫しています。

望月：学生に様々な義務を課したり、あるいは責任感を持たせるために、いろいろ工夫なさっているようですけれども、初めにおっしゃっていたような学生による評価が正しく機能するのも、じつは今おっしゃったような教育上の工夫が功を奏して学生が義務感と責任感を持つようになっていることが根本的な支えになっているのではないかと思います。

Cho：ええ、そのとおりです。

論文を書くときにも、指導教授のもとで書くというだけでなく、自分と考えを異にする学生と討論すること、それも同じ大学のみならず他の大学の学生との討論を通して仕上げていくわけです。例えば10キロ内に大学が3つあるとすれば、3大学で共同セミナーを持ちます。それを軸に学生たちがいわば他流試合をする。それも必修になっています。

猪飼：プレゼンテーションの訓練なども積極的にやるんですね。それがシステム化されているというのがおもしろいですよね。

Cho：東洋人は喋ることにに関して弱いんです。お喋りができない。しかしギリシャに源を持つ

哲学ではお喋りは大事なんです。ロゴスは、結局、おしゃべりのことなんですから……。

博士号取得までのプロセス

Cho : **First year requirement** を済ませたら、続く1年の間に少なくとも3科目のセミナーで3つの論文を書かなければなりません。そして、それらの論文のうちで自分が一番気に入っている論文を、先生が加えたいろんな批判を参考にして、もう一度書き直します。そうして、それを修士論文として提出する。その論文を学科の **Progress and Evaluation Committee** が審査する。ここまでの課程を通過することが、博士論文に取りかかるまでに必要な踏まなければならない段階です。その後、第三段階に入って、ようやく博士論文を書く準備ができたと認められるんですね。しかし論文を書く準備ができたと正式に認められるには、まだもう一つの手続きが必要です。**Topical** という口述試験の段階があります。学生は、参考文献のリストも備えて短い論文の概要を提出します。それについて口述試験が行われます。それに合格したら、ようやく論文を書き始められるわけです。論文を書き終えるまでの期間は、標準で5年となっています。5年以上かかる場合には、**topical** に戻ってもう一度口述試験を受けなければなりません。

修士課程における研究者養成コースと高度職業人養成コースの区別

Cho : 修士号取得だけを目標にした学生を入学させる制度があります。

小林 : それはドクターコースに進む学生とは履修する中身が違うのですか。

Cho : 例えば **medical ethics** だけをやって卒業したいという学生がいます。哲学的な基礎知識は必要ですが、そういう学生は博士論文を書くという野心は持っていないのですから、アリストテレスの倫理学を究める必要はないのです。看護師などとして病院に就職したり、また高等学校などで教鞭を取るとすれば、そちらのほうの免許も取らなければなりません。

猪飼 : そうすると、そういう種類の学生が書く修士論文は、博士課程に進学しようとする学生のものとは内容も違って来るわけですね？

Cho : 便宜上、先ほどお話したセミナーペーパーを二つ併せて提出します。題目が必ずしも同じ類のものでなくてもいいんですよ。二つのペーパーを合わせて、標準的に言って70ページから90ページまでになっていれば **master equivalent** と認める、つまりふつうの修士論文を提出した者と同等の資格を認める制度があります。

土岐 : これはオーストラリアの話ですが、**Ph. D.** 取得を目指す場合、修士論文を省略して、最初から博士論文を準備するというようなことがあります。

Cho : アメリカでも **Ph. D.** 志望の学生と **M. A.** 志望の学生は最初から区別されています。だから **M. A.** を志望している学生が途中で心変わりして、**Ph. D.** を取得したいと言い出せば、それはちょっと問題になります。要求される **GRE** スコアなども標準が違いますよ。

GPA 制度と成績評価の公平性

河上：阪大で最近特に話題になっているのは、これまでのお話の中にも出てきた GPA 制度です。これを実行するためには、やはり成績に関して全ての教員が公平な基準を持っていなければならない。これを、どうやって保つかが問題です。A ばかり与えるとか、B ばかり与えるということだったら、この GPA の制度は役に立ちませんので、公平に成績をつけるということが前提になってきますが、その点、どういう工夫をなさっているのでしょうか？

Cho：ある教授は最初の授業日に学生たちに対して、「君たちは私のクラスに来れば70%が A を取れるんだ！」と宣言したんです。〈一同笑い〉すると、実際に学生たちがそこに集まるんですよ。

河上：日本にも同じような先生がいるようです。

Cho：しかし彼は後で制裁されました。ふつうはクラスの15%だけが A をもらえる。私はずっと10%以下でしたが、最近はちょっと歳をとってきて、円満になってきている。〈一同笑い〉

土岐：しかし、例えばあるクラスではほとんどの学生が一生懸命に勉強する。そうすると、成績をつける場合に甲乙つけ難いことがあります。それでも A は15%という基準を遵守されるのですか。

Cho：A は15%が標準になっているというのは学部の話です。大学院では、基礎のよくできた学生が15人出席しているセミナーがあるとすれば、12人が A を取ることもあります。しかし大学院生で B を取れば、これは不足だと認められる。C ならば、これは退学しろというのと同じですから……。

小林：もう一つ、くだらない質問かもしれないんですが、アメリカの大学では出席をとるということは、ふつうに行われているのでしょうか。

Cho：行っています。E-mail なども活用しています。几帳面にやりますよ。

大学の大衆化

猪飼：僕らが大学生の頃の経験では、高校まで型に嵌められたような教育を受けてきたので、大学に入って初めてそこから解放された。大学は主体的に自分で勉強するところだという考え方が、学生の側にも教員の側にも基本にあって、教員も授業は開講するけれども、出席を強制したりはしない。で、出席もとらない。皆、自主的に勉強して、そこで伸びる者は伸びる、落ちる者は落ちる、という考え方がありました。

Cho：外国にも、そういう考え方があります。例えばドイツでは、高等学校を卒業後、大学に入学する学生が1960年代には20%以下だった。動機の十分にある学生だけが大学へ行ったので勉学を強制する必要がなかったのです。しかし、近年、経済事情がよくなって、他にする仕事もないから大学にでも行ってそこで昼寝でもしようかなどと思って来る学生があつて、そういう学生の人数が多くなると、やはり規律が失われ、いまや強制の必要が認められるんですね。

猪飼：そのような現象が日本でも進んでいるようですね。僕らから言えば違和感もあるんですけど、大学院でも「school 化」というような言葉を使い、カリキュラムをはっきりさせて、そ

のカリキュラム通りにやりなさいと言う。

Cho：ベトナム戦争の時代は学生たちの権利要求が今よりも強かった。しかし今は学生たちも保守的になってきて、そこで大学ではいろいろな **structure** を作って、そこに彼らを嵌め込んでしまう。しかし彼らは不平を言っていません。

猪飼：長い眼で見て、学生たちの資質、研究者として自立していく資質とか、そういう点はどうでしょうか、アメリカでは……。

Cho：大学院生はみっちり勉強しているし自覚もある。目的意識も確立されていて、私たちに不満はありません。

おわりに —— アメリカの大学は理想的か？

小林：日本の文部科学省は、日本の大学をアメリカの大学のようにしたいと思っているようです。しかし、そのようになったほうが良いのか悪いのか……。先生は、どのようにお考えでしょうか。日本の大学の事情もよくご存知でしょうから、是非ご教示ください。

Cho：競争は学問の本質でもあります。だから競争は必要でしょう。それから、特定の大学や特定の教授に見られるような権威主義が学問を阻害したり、学生の利益を阻害するような傾向があれば、制度を変えて、そういうことがないようにする必要があります。それは日本だけの問題ではないと思います。



帰国を前にくつろがれる Cho 先生

河上：要するに、“publish or perish” という方向へ行くわけですね。先生はドイツの事情もよくご存知ですが、ドイツと比べてどうでしょうか。

Cho：制度があまりにも違いすぎて……。ドイツでは、旧来の権威主義と近頃の民主主義の、いわば中間に置かれているようです。

天野：日本では学生はあまり勉強しないというのが一般的な評判のように思われるのですが。その点、先生はどういうふうにご覧になりますか。

Cho: アメリカにも勉強しない学生はざらにいますよ。大雑把に言って、学部では60名の学生が教室に座っているとすれば、そのうち20名は来なくてもいいような学生が座っていると思う。いえ、実際に来ないんですよ。〈笑〉 自覚的に勉強に励むのは大体3分の1程度ですね。しかし州立大学の中にも多くのキャンパスがありますから、それぞれに質が異なります。

天野: アメリカの大学での体験談を聞くと、いかにアメリカの学生が勉強好きで日本の学生が勉強しないかという話をよく耳にすることがあります。私個人もそういうイメージを持っていたのですが……。

Cho: 大学院には一般的に進んで勉強する学生が多いのですが、学部にもそういう学生がいます。そういう学生を持っていると気持ちがいい。きちんと宿題もやってくるし……。

猪飼: お疲れのところ長時間お話いただき、ありがとうございました。評価に関して日本はアメリカの後追いをしているような印象を受けます。もちろん評価それ自体は必要なことであります。サービスという問題については、とくに教育に関して、アメリカでは日本と比べてはるかに丁寧な教育のシステムと、それを評価するシステムが出来ているのだと教えられました。日本ではこれから評価をどういう形で定着させていくかが課題ですが、やはり我々には迫られてやっている感が強いわけですね。しかも、その一方で、「資源配分」などという言葉が使われていますが、評価結果が予算配分に直結することもあって、我々には少々びくびくするようなところがないわけではありません。いろいろな意味で先生のお話は参考になりました。日本における固有の評価のあり方を模索していく必要があると強く感じました。どうもありがとうございました。

(丁)

**第2部 大阪大学大学院文学研究科と文学部
における研究・教育活動の概要**

2-1 外部評価を実施するに当たって

はじめに

今回、文学部・文学研究科が、所属する全ての専門分野について、その研究活動を外部評価にゆだねることになった経緯、およびそこに込めた意図について述べておく。

その動機付けには、大きくいって二つの要素をあげることができる。その一つは、人文科学分野に有用で固有な評価方法を見つけだしたいとの思いである。周知のように、大学（学部・研究科・付置研究施設等）あるいは諸種の研究施設は、その抱えるアカンタビリティを果たすことの一環として、その展望を見つけるための自らの力量の把握のために、そしてその力量を社会一般に周知するために、自己評価書を作成し公表してきた。わが文学部・文学研究科も1994年・1996年・1998年の三度にわたって自己評価書を作成・公表してきた。その1998年度の自己評価書『現状と課題 1998』は、文学部創立50年という節目にもあたっていたが、それまで公表されてきた自己評価書の多くは「一種のデータブック的なものにすぎなく」、「組織の将来の改革につながる展望」も示し得ていないとして、構成員の生の声を入れ、また一部に第三者評価を加え、また50周年記念シンポジウム「文学部は必要か」についての新聞報道などをも掲載するなどして、斬新さを出そうと試みた。

しかし、その後大学評価をめぐる環境は大きく変化したように見える。すなわち、国立大学の独立行政法人化を前提に、法人化後の大学運営に資するものとしての評価が目指されるようになったのである。文部省の下に設置されていた学位授与機構は、大学評価・学位授与機構として再編成され、省庁改変によって新たに生まれた文部科学省の下部機関として、大学評価を実施することになった。その場合、大学評価は資源配分の基礎的データとされることが期待され、したがって大学は競走的环境の中で互いに競い合うことが運命づけられる。新自由主義的競争原理の中で、大学間格差はいっそう広がり、大学内における部局間の格差もあるいは拡大されるのではないかと懸念されるが、問題は、評価そのものがいかなる基準で行われるのかということであろう。学問として、その対象も方法も、あるいは歴史や社会から課せられた課題も相違するものを同一の基準で評価することに無理があることはいうまでもない。

そこで、人文科学にふさわしい評価のあり方を模索するための試みを行いたいと考えたのである。

動機付けの二つ目は、以上のような新たな状況に対応して、大阪大学では、評価の対象となる研究・教育・社会貢献の三分野についての全教官のデータを集積する大規模なデータシステムを構築することになった。文学部・文学研究科は、われわれとしてアピールすべき研究成果を、あらかじめデータとして独自に集積しつつ、全学のデータシステムの始動に備えることにしたのであるが、その後の推移は、全学に集積されたデータは全学共通の方法で処理され、評価されることになるだろうことを暗示していると思われ、そうであればその評価は、われわれ人文科学の研究や教育あるいはその他の実情を必ずしも反映したことにはならないかもしれない。そのように危惧することから、われわれとしては固有のデータの集積を続けることにしたのである。ととも

に、今回集積したデータにつき、独自に外部評価をすることに決したのである。今回集積しえたデータは研究活動に限られているが、所属する大学院生の研究成果をも収録することで、専門分野の研究活動の全体把握に近づきえたことから、専門分野のそれぞれについて、その研究活動に限って、外部評価（ピア・レビュー）を実施することとしたのである。

評価の視点

われわれは、今回の外部評価において、各専門分野の研究活動と業績についての評価の視点について、次の7点を提示した。

- イ、研究の先見性・独創性（研究のパイオニア的役割）
- ロ、研究の実証性（科学性）あるいは手堅さ（資史料の博搜・分析あるいはフィールドワーク等）
- ハ、研究の持続性（課題あるいは方法の一貫性）
- ニ、研究の体系性（個々の研究が全体としてどこに向かっているのか）
- ホ、研究（課題・方法・成果）の波及性（隣接の分野等に及ぼす効果〈能力〉）
- ヘ、教官組織としてのまとめり（教育への効果を視野に入れての評価）
- ト、学会活動での位置

それぞれについて簡単にその意図するところを説明しておきたい。諸科学において共通して言えることだが、われわれは研究課題を設定する際、当該研究における先行研究の緻密な検討は必須である。人文科学の場合、もはや検討の必要性はないと確信される事柄は多くはない。先行研究のほとんどをあらためて検討の俎上にのせる必要がある。自然科学の同様の過程に比してはるかに迂遠な作業を行うのを常としている。その検討から得られた研究史上の問題点と、われわれの現代（いま）に対する何らかの関わりあいのなかから生まれた問題意識との絡まりあいのなかから、新たな研究上の課題を自らに課すのである。その場合、対象はもともとの領域の中に見いだされるかもしれないし、隣接の領域や隣接諸科学との関係の中に見いだされることもあるだろう。いずれにしても、その新たな課題を研究の現実的な対象にするためには、そこに新たな方法が生み出されなければならない。この課題と方法が、研究者自身のものとして提起されてはじめて、研究の独創性が実現されるが、それが先見的であるかどうかには、また他の要素が必要となろう。ここであらためて、研究史を見直す視点や立場、現代に対する関わり方等が問い直されるということになる。

つづく研究の実証性（科学性）あるいは手堅さについては、言うまでもないことである。研究が、独りよがりや恣意性を排除し、客観性を実現するためには、可能なかぎり資史料を博搜し、それに透徹した分析を加えることが要求される。分野によって多少の違いがあるだろうが、この過程に資力や人力や多くの人々の協力が必要になるのである。

ところで、現代や現実から研究上の課題を見出すという姿勢、あるいは現実に生起するさまざまな問題や困難にわれわれが答えようとする姿勢は、われわれが社会的責任を果たすということ

からいっても、きわめて重要なものであるが、学問・研究の自主性や自立性を損なうものであってはならないだろうし、研究者自身による研究活動の一貫性の保持ということからいっても、注意すべき要素を多く含む問題であると考えられる。社会的ニーズにこたえることは、研究者に求められることではあるが、研究者自身の研究の一貫性や持続的発展、また体系性への志向の中で、主体的に選択されることが望まれる。トレンドの渦中にあるテーマを追いかけて、論文を量産することについては、その是非も問われるところではないか。

さて、研究のもつ方向性如何によっては、その課題や方法やまた成果は、さまざまな方面へ波及する可能性をもつものだと言える。

文学部・文学研究科の特質と評価

以上述べてきた評価の視点は、研究者個人の研究活動に対する評価には適当であるが、組織評価として妥当であるかどうかは問題である。

人文科学研究のあり方の特徴は、それがほとんどの場合個人的作業であるということである。活発に学会や研究会活動が行われ、共同の議論が組織されても、研究はおおむね個人的に行われる。同一の講座や専門分野に所属する研究者も、その多くは個人の責任において研究が行われる。もちろん多くの協力者を擁している、である。したがって、そうした個々の研究者を組織として以上のような視点で評価することに無理があるのではないかと思われる。

また次のような事情も存在する。教官の構成が、学生・院生の志向性や教育要求に可能な限り応えうるように行われているとすれば、教官をひとまとめにしてその研究を評価することには当然ながら無理があるように思える。

しかし、あえてその視点を専門分野の組織評価の視点として提示したのには次のような理由がある。と言うのは学生・院生の志向性や要求に応えるとはいっても、そこにはおのずから無理があるということである。わが文学部・文学研究科の場合は、その規模からいってその充足率は高いとは言えるが、彼らの研究テーマをわれわれの守備範囲に誘導することによって、手堅い指導を行いつけているのが現状ではないかと思われる。もちろん、にもかかわららずわれわれの守備範囲を無視して独自のテーマを追い続けるものもいるのであり、その場合は必要ならば適当な指導者や文献を紹介するというのがわれわれの立場だろう。

このような現実を考えれば、より積極的に専門分野としての研究上のまとまりを追求することも必要なのではないか。研究はあくまでも個人的な営みであることを前提にしての、研究上のまとまりを、専門分野の特性として主張するというのが、今後もっと必要になるのではないかと考えるのである。それが、テーマのうえのまとまりであるのか、方法や、手法におけるまとまりであるのか、さまざまなものが考えられるが、こうした視点で評価することに積極的意味があると考えたのである。教官組織としてのまとまりや学会活動における位置、などを視点に加えたのもそのような意図に基づくものである。

おわりに

今回の外部評価では、文学研究科のすべての専門分野について、それぞれ外部評価（ピアレビュー）を実施した。文学研究科全体ではなく、個々の専門分野のすべてについて評価が行われるのは、おそらく本研究科がはじめてのことではないかと思われる。この試みが、人文科学の評価の今後のあり方に何らかの示唆を与えることになれば幸いである。

（文学研究科教授 猪飼隆明）

2-2 大阪大学大学院文学研究科の理念と実践

—— 新世紀にふさわしい人文学をめざして ——

わが国の大学は、現在、かつてない大きな変革の波に洗われている。巨視的にみれば、それは戦後の新制大学の発足以来顕著になった大学の大衆化という潮流のひとつの帰結であり、直接的には近年の少子化現象による大学進学者数の減少に起因する大学改革の結果であろう。現在、われわれが直面している国立大学の独立行政法人化ももちろんそうした潮流のなかの動きであろう。考えてみれば、わが国の大学制度は、大正7年の大学令の制定から数えても、すでに約90年におよぶ歴史を有しており、この間、大学あるいは学部・学科レベルの統合・再編なども事例的にはかなり頻繁におこなわれてきた。そのような観点からすれば、現在の大学をめぐる大きな動きも、これまでもあった変化の類例と理解することもあるいは可能かもしれない。しかし、近年の大学改革をめぐる動きは、そうした過去の統合・再編とは本質的に性格を異にしているのではないかと思われる。それはこれまでの大学をめぐる変化が、基本的には明治以来の近代日本の大学観の枠内での変革であり改革であったのにたいして、近年の動きは長年にわたって揺らぐことがなかったわが国の大学観そのものを問い直そうとしているように思われるからである。長きにわたって支配的だった大学観とは、あえて一言でいえば、大学を一般社会の組織や世界とは別種の特異なものとする見方である。もちろん、そのような見方はわが国（だけではもちろんないが）の大学が少数のエリートを養成するという目的で生まれたことに起因するものであり、そうした草創期の大学観が、戦後の大学の大学の大衆化という大きな環境の変化にもかかわらず、きわめて強固に維持されてきたのだが、ここにいたって、その古典的な大学観そのものを見直さざるをえなくなった点に近年の大学改革論議の特徴があると思われるのである。換言すれば、少なくとも戦前までは有効だった草創期の大学観が、戦後は変動を続ける社会との隔たりを増大させて、さまざまな問題を露呈してきているということである。はやい話、現代の世界で、日本ほど大学の学生が勉強をしない国はないというのは、残念ながら認めざるをえない事実であろう。これは戦前までの大学にあった一面（それはかならずしもマイナス面ではなかったのだが）がそこだけとりだされて後代に継承された結果であるが、もちろん問題は学生だけにあるのではない。要するに、近年の大学をめぐる動きは、たんなる制度をめぐる問題なのではなく、長く支配的だったわれわれ大学人の大学観にかかわるものだという事である。冒頭に、かつてない変革と記したのもそうした理由からであるが、このような変革期に、われわれ大阪大学の文学研究科はいかなる理念と

行動をもって研究教育に対処してゆくべきなのであろうか。

本研究科は、昨年、文部科学省がわが国における世界的な研究拠点形成を目的にうちだした「21世紀 COE プログラム」の人文科学分野に、人間科学研究科と言語文化研究科の協力をえて、《インターフェイスの人文科学》のプログラムを申請して採用された。現在、このプログラムはすでに進行中であるが、この《インターフェイスの人文科学》がめざしているのは、いずれかといえばこれまでの縦割りの人文科学を、ダイナミックな領域横断的な体制に変換することによって、文化の生成を諸文化のインターフェイス（接触・摩擦・交流）の相のもとに分析し、またもすれば「象牙の塔」にこもる傾向がなきにしもあらずだった人文科学を現代社会に有機的にリンクさせてゆくことにほかならない。このプログラムの特徴は、その背景に、現代社会が地球規模でかかえているさまざまな問題は、もはや政治や経済というレベルだけで対応できるものではなく、その解決には文化への根源的な問いかけをおこなう人文科学の関与が不可欠であるという認識が底流としてある点に求められると思うが、じつはそのような認識こそ、これまでの人文科学には比較的希薄だったものであり、今後の人文科学にもっとも必要とされるものであろう。進行中のプログラム《インターフェイスの人文科学》におけるこのような方向性が、大きな変革期に際会しているわれわれ文学研究科のとるべきひとつの方向であることは疑いのないところであろう。

もっとも、本研究科がそのような視点をもった研究を行うのは、この《インターフェイスの人文科学》が最初ではない。たとえば、昭和56年度の文部省の特定研究費によって行われた《都市の理念に関する比較史的研究》においては、「哲学班」「史学班」「文学班」「美学班」「日本学班」という当時の文学部5学科全体にわたる19名からなる研究グループを組織して共同研究を推進し、「共同研究論集第1輯」として『近世都市の比較史的研究』（B5判、66頁）を翌年の昭和57年に刊行している。続いて、昭和58年度の文部省の特定研究費では《都市化の比較史的研究》のテーマのもと、「理念と形態研究班」「芸術・文化に現れた都市研究班」「都市論の比較史的考察研究班」という、これも文学部全体の専門領域にかかわる3研究グループ16名を組織して、翌昭和59年には「共同研究論集第2輯」として『都市史をめぐる諸問題』（B5判、150頁）を刊行している。ついで、昭和59年度の文部省特定研究では、《大阪における産業都市文化の発達に関する総合的研究》と《日本語・日本文化の特質に関する基礎的研究》の2つのプロジェクトが並行して推進された。前者は史学分野を中心とした他学部の教官も加わった20名によって、後者は「日本語研究班」「日本文化研究班」の2研究グループ10名によって行われ、昭和60年にそれぞれ「共同研究論集第2輯」「共同研究論集第3輯」として、『大阪の都市文化とその産業基盤』（B5判、94頁）、『日本語・日本文化研究論集』（B5判、303頁）が刊行されている。このあと、昭和61年度の特定研究では、《日本語・日本文化の特質に関する基礎的研究》とほぼ同じ研究組織とメンバーによって、その姉妹編ともいえるべき《日本語・日本文化の特質に関する総合的研究》が行われ、翌昭和62年に「共同研究論集第4輯」として、『日本語・日本文化研究論集』（B5判、208頁）を刊行している。

これらは文学部内に設けられた文学部共同研究センターを拠点に行われたものである。文部省の特定研究の成果を一貫して「共同研究論集」という形で公刊しているのも、当時の文学部が学

部全体の総意として共同研究の必要性を認識し、これを強力に推進したためである。「共同研究論集第1輯」冒頭の創刊の辞において、当時の文学部長だった片山良展教授（独文学講座）は、「個々の研究者がそれぞれのやり方で自己の専門領域に沈潜し、その研鑽の成果を講じ、世に問うというのが、大まかに言ってこれまで文学部のひとつの特色であった。そしてこのことは今後も根本的には変わらないであろう。しかしながら、それとならんで、多数の研究者がそれぞれの専門研究の蓄積の上に立って、相協力して共通のテーマを探求し、学際的研究に取り組むことが、学問が現代社会の要請に応えるためにも、また個別的専門研究そのものが自らを省み、新たな栄養を得てさらに深まるためにも、いまや須要事になってきている」と記しているが、ここには、大きな変革に直面している現在のわれわれとまったく同じ認識が示されている。これら一連の共同研究が行われた昭和56年から昭和62年という時期は、昭和47年の人間科学部の創設にともなつて、文学部の教育学・心理学・社会学関係の講座が新学部に移り、そのあと日本学科と美学科が増設されて、文学部が他大学の文学部にはない新しい陣容のもとに充実しつつあった時期である。このような意欲的な共同研究の推進は、当時の文学部のそうした状況とも連動していたものと思われる。

また、近年では、平成10年から平成11年にかけて実現した大学院重点化とともに新たに設置された広域文化形態論講座と広域文化表現論講座によって、活発な共同研究が行われた。広域文化形態論講座においては《自然のなかの人間》、および《死の習俗の比較史》のテーマが、広域文化表現論講座においては《〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰とその周辺——》のテーマがかかげられて、それぞれ3年にわたって、多くの大学院生や学外の研究者の参加のもとに行われ、その成果として、里見軍之編『自然のなかの人間』（平成13年、大阪大学文学研究科・文化形態論専攻・文化基礎学専門分野刊、189頁）、江川温・中村生雄編『死の文化誌——心性・習俗・社会』（平成14年、昭和堂刊、241頁）、荒木浩編『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——』（平成14年、広域文化表現論講座刊、358頁）が刊行されている。これら2講座による共同研究は、平成14年度から新たなスタッフによる新しいテーマのもとでスタートして目下進行中であるが、これも《インターフェイスの人文科学》の理念を先取りするものといえる。

以上は文学部および文学研究科が組織として推進してきた共同研究であるが、こうしてみると、「21世紀 COE プログラム」に《インターフェイスの人文科学》が採用されるまでに、それと同種の問題意識をもった共同研究が本研究科において組織的かつ継続的に行われてきたことが知られるであろう。それは古典的な大学観の見直しが求められているこの大きな変革の時代にあつて、さまざまな困難が予想される今後の人文科学を切り開いてゆく可能性と能力を本研究科が十分に備えていることを示すものにほかなるまい。

しかしながら、このような共同研究だけで21世紀の新しい人文科学が構築できるものでないことはもちろんである。そこには、「個々の研究者がそれぞれのやり方で自己の専門領域に沈潜し、その研鑽の成果を講じ、世に問う」従来の伝統的な側面もちろん不可欠であろうし、そうした教員自身の研究とともに、学生にたいする教育面の充実ということも今後は不可避的に要求されることになろう。さらに大学における研究を社会に還元することも、研究教育におとらず重視さ

れてゆくことも必至である。いわば、この21世紀にあつては、すぐれた研究者であることと、見識をもった教育者であることと、大学と社会との橋渡し役という1人3役が、時代の要請として大学人には求められているのである。それはなかなか容易なことではないが、じつはそのような能力は、大学が大衆化しはじめた戦後からすでにわれわれ大学人が備えていなければならないことだったのではないだろうか。しかし、それから半世紀以上も大学人は古典的な大学観を根底から疑ってみることをせず、社会の側もまた大学および大学人を長いこと必要以上にあつく遇ってきて、今日のこの事態を迎えたのである。しかし、いまや大学も社会もそうした旧来の大学観から一気に脱却しようとしている。この1年後には長いあいだわが国の研究教育の中核だった国立大学が消滅して、国立大学法人として再出発をするが、そのことがなによりも、現在の大学をめぐる変化がこれまでとはまったく性格を異にするものであることを如実に物語っていよう。そうだとすれば、われわれ大学人がとるべき道は、まず大学がそのような状況にあることを明確に認識して、あらためてそこから前進してゆく以外にはあるまい。われわれはそれを人文学という分野においておこなってゆこうとしているのである。その成否はもちろん今後の努力次第ということになるが、ここに『年報』としてまとめられた過去5年間の本研究科の研究教育の軌跡は、縷々述べてきたような節目にあたっての力強い決意表明であるとともに、ひいき目かもしれないが、新しい人文学を構築してゆく可能性を十分に感じさせるものとなっているのではないかと思う。

(文学研究科教授・評議員 天野文雄)

2-3 大学院における研究・教育活動

2-3-1 大学院重点化の影響

大学院文学研究科においては1998年4月に文化形態論専攻が発足、1999年4月に文化表現論専攻が発足し大学院重点化が完了した。その結果が、修了者・単位修得退学者数の変化について見られる。1997年度と2001年度を比べると、前期課程修了者数は47名の増加であり、約2.15倍に増えている。また後期課程単位修得退学者数は15名の増加であり、1.6倍に増えている。他方、1999年度の前期課程2年次の在籍者に対する修了者の割合は48.2%、2000年度の前期課程2年次の在籍者に対する修了者の割合は57.2%、2001年度の前期課程2年次の在籍者に対する修了者の割合は69.3%である。また1999年度の後期課程3年次在籍者に対する単位修得退学者の割合は27.3%、2000年度の後期課程3年次の在籍者に対する単位修得退学者の割合は16.2%、2001年度の後期課程3年次の在籍者に対する単位修得退学者の割合は25.3%である。いずれの場合も、単位修得退学者のうちには規定の修業年限（前期課程2年間、後期課程3年間）を越えて在籍していた者も含まれているので、母集団が同一であるとは言えないが、しかし概ねのところ大学院重点化後、前期課程を規定の修業年限で終える者は全体の5割～7割、後期課程を規定の修業年限で終えるものは全体の1.5割～3割の間を推移していると思われる。

しかし学位（博士）授与数について見ると、過去5年間（1997年度～2001年度）、課程博士および論文博士ともに大きな変化はなく、現在のところ大学院重点化の著しい影響があるとは言えない。

[表Ⅱ－2－3－1A (修了者・単位修得退学者数の変化)*]

年 度	'97	'98	'99	'00	'01
大学院前期課程修了者	45	72	66	87	97
大学院後期課程単位修得退学者	25	28	27	21	40

(*2002年版同窓会名簿による)

[表Ⅱ－2－3－1B (前期／後期課程最終年次在籍者数の変化)]

年 度	'97	'98	'99	'00	'01
大学院前期課程2年次在籍者	—	—	137	152	140
大学院後期課程3年次在籍者	—	—	99	130	158

(各年度、5月1日現在)

[表Ⅱ－2－3－1C (学位 (博士) 授与数)]

年 度	'97	'98	'99	'00	'01
課程博士	20	15	22	21	28
論文博士	15	11	12	11	10
合 計	35	26	34	32	38

2－3－2 大学院重点化後の研究・教育活動の傾向

大学院重点化に伴う定員増により多様な学生が入学・在籍するようになった。このため従来の研究者養成を目的とするのみならず、高度職業人養成を目的とする教育が要請されてきているが、それに向けて研究科全体としてカリキュラム改革を行うには至っていない。各専門分野において固有の工夫を講じているのが現状である。前期課程を修了した後、後期課程へ進学しない者の割合が、修了者の5割を越えるが、その多くが就職を希望している。それに応えるために前期課程修了者を対象とした就職説明会を定期的を開催している。

なお各専門分野における研究・教育活動の状況については第2部で詳述する。

[表Ⅱ－2－3－2 (就職者数の変化)*]

年 度	'97	'98	'99	'00	'01
就職者1 (研究者)	27	22	19	23	16
就職者2 (高度職業人)	23	27	33	45	32

(*専門分野からの届け出があった者について)

2－3－3 大学院前期課程修了者の進路

約半数が後期課程に進学するが、高度職業人として高等学校等の教職、県・市の教育委員会の専門職、博物館・図書館司書の職に就く者、また公務員として就職する者や民間企業に就職する者もいる (次頁、就職先2参照)。

2-3-4 大学院後期課程単位修得退学者および修了者の進路

後期課程単位修得退学者および修了者は、国内外の大学や研究所等の高等教育・研究機関に就職する者（就職先1）のほか、高度職業人として高等学校等の教職、県・市の教育委員会の専門職、博物館・図書館司書の職に就く者、また公務員として就職する者や民間企業に就職する者もいる（就職先2参照）。

（就職先1）*

茨城大学、愛媛大学、大阪大学、大阪外国語大学、大阪教育大学、岡山大学、香川大学、金沢大学、京都大学、京都工芸繊維大学、群馬大学、佐賀大学、静岡大学、長崎大学、鳴門教育大学、新潟大学、福井大学、弘前大学、山口大学、国文学研究資料館、国立国語研究所、大阪女子大学、大阪府立大学、大阪市立大学、群馬県立女子大学、静岡県埋蔵文化財調査研究所、英知大学、大阪学院大学、大谷大学、大阪電気通信大学短期大学部、岐阜聖徳学園大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸女子大学、京都女子大学、京都女子大学短期大学部、京都橘女子大学、近畿大学、光華女子大学、神戸商科大学、四天王寺国際仏教大学、大東文化大学、東北芸術工科大学、奈良大学、広島国際大学、広島女学院大学、別府大学、法政大学、明治大学、立命館大学、立命館アジア太平洋大学、朝鮮大学校、韓国カトリック大学（韓国）、建国大学校師範大学（韓国）、聖潔大学校（韓国）、全南大学校（韓国）、吉林大学（中国）、国立中央研究院民族学研究所（台湾）、長管管理学院（台湾）、エアランゲン大学（ドイツ）、等

（就職先2）*

兵庫県立高校教諭、岡山県立笠岡工業高校教諭、鳥取県教育委員会、兵庫県教育委員会、福井県教育委員会、福岡県教育委員会、桜井市教育委員会、石川県歴史博物館、新宿区歴史博物館、名古屋博物館、大阪府立中之島図書館司書、京都大学法学部図書館司書、国会図書館司書、大阪大学文学部教務補佐員、関西語言学院講師、長野市役所、川崎商事、株式会社日本システムデベロップメント、NTT 東日本、二見書房、専業作家、ジャーナリスト、等

（*専門分野からの届け出による）

2-4 学部における教育活動

——「学生による全学授業アンケート」の結果に見る近年の文学部教育——

平成13年に大阪大学では創設以来はじめての全学規模の「学生による全学授業アンケート」を実施した。大阪大学もわが国の多くの大学と同様に、教育のさらなる充実、学生生活やサービスの向上などが改善すべき重要な課題であることを認識しており、今回の実施もその認識を反映するものである。その結果は平成14年1月に「学生による全学授業アンケート・平成13年度報告書」として大阪大学教育課程等協議会から発表されている。

2-4-1 授業アンケート文学部関係回答の要約

① 受講態度について

授業別に集計した結果、その平均として、出席率については次のような結果が出た。90%以上出席している学生が全体の34%を占め、もっとも多い。次に多いのは80-90%出席していると答えた学生で、21%を占める。それらを合わせると、過半数の学生が平均して80%以上授業に出席

しているということになる。少なくとも学生の回答からは、文学部学生の授業出席状況はこのような現状にある。また、出席率の高い学生と低い学生とのあいだでは「受講熱意」「理解度」等で著しい差が出ており、学生の日ごろの出席状況を把握しておくことは、教師の側にとっても重要であることがわかる。

文学部学生は、出席率が高いが予習時間や復習時間は少ないという結果も出ている。予習復習を促すとともに、その手引きとなるように、各授業の担当教師が意識して参考文献を紹介する、あるいはレポートを課すといった工夫が必要であろう。また、付属図書館、各研究室の図書室の整備と参考図書の充実といった環境整備が必要であろう。

授業における質問や発言数も少ないという結果が出ている。80%の学生が授業中に一度も質問や発言をしなかったと答えている。これは文学部だけの問題ではなく、大阪大学全体でも同様の傾向にある。各学部と大学が協力して取り組むべき課題のひとつであろう。予習復習の時間、質問や発言はともに学年が高くなるにつれて増加しているが、十分な増加とは言いがたい。

出席率の高い学生は、授業の興味においても理解度においても、出席率の低い学生より高いという結果が出ている。また、これら二つのグループのあいだでは、受講熱意の差も大きい。興味のある科目の授業に意欲的に出席することが、理解度の高さという結果に結びついている。

② 授業の感想について

教師による学生の授業参加の促進については、促進がなされていると答えた学生の割合は、なされていないと答えた学生のそれをわずかに上回る程度であり、いちいち教師に促されなくとも学生は自ら授業に積極的に参加すべきであると考え教師が、文学部には少なくないことがわかる。

「指定された教科書や参考文献は授業の理解に役立ったか」という質問に対して、「どちらともいえない」という答えが過半数あった。教科書や参考文献を指定しても、予習も復習もしないといった現代学生気質に一部帰することも可能だろうが、教師の側としては、指定教科書や指定参考書と授業内容とのあいだにずれがある授業も多いことを示していると受け取るべきではないだろうか。

教師による授業準備に関しては、「教官は十分な準備をして授業に臨んでいたか」という質問に対して81%が肯定的な回答をしていた。授業の感想を求める11項目の質問中、肯定的な答えがもっとも高い割合を占めた質問事項である。授業準備に次いで肯定的な答えが多かったのは受講満足度に関する質問であった。

③ 教育環境・教育システムへの意見

「教室の広さ」については、不適切な規模の講義室の使用を指摘する回答が多かったが、大きすぎるのか、小さすぎるのかが判断できる調査が必要であろう。「設備の完備」については不足を訴える回答が、完備しているという回答を大きく上回っており、学生が設備の不十分さを感じている実態がわかる。「図書の充実」に関しても、不足を訴える回答が非常に多い。

かろうじて「図書館・図書室の利用しやすさ」について肯定的な回答が出ているが、付属図書

館と各研究室の図書室を分けたアンケートをとることが望ましい。「文献検索端末の利用しやすさ」については「利用しにくい」という回答が過半数を占めた。

以上のような回答の結果を学年別に比較してみると、学年が進むにつれて否定的な回答の割合が、とくに設備関係で増えており、どのような設備に不満を感じているのか、今回のような大規模な調査というよりは、小規模でもより具体的な調査の実施が望まれる。

④ カリキュラムについて

「シラバスの適切さ」については肯定的な回答が否定的な回答を大きく上回った。しかし、「学生便覧や履修の手引きの分かりやすさ」については、逆に否定的な回答が肯定的な回答を上回った。「カリキュラムを見て、ニーズが満たされていると思うか」という問いに対しては、「どちらかといえば満たしている」という回答が32%で最多だが、「どちらともいえない」が30%、「どちらかといえば不十分」が24%と続いていることも忘れるべきではないだろう。

⑤ 就学全般の様子

「入学満足度」は3年次で一時減少し、4年次になると回復し、専修に分属する2年次を上回り、最大に達する。このパターンは、「勉学の充実度」についての回答でも同様で、4年次での回復が一層顕著である。4年次では80%が「勉学の充実度」を感じており、なかでも35%は「大いにもっている」と答えている。充実感はかなり高いといえるだろう。ただし、「入学満足度」「勉学の充実度」ともに2年次から3年次にかけて、一種の揺らぎともいえる変化が一時あるのも事実で、その点、配慮が必要であろう。

2-5 国内外の研究・教育機関との交流

2-5-1 研究者交流

① 外国人客員研究員の受け入れ及び海外出張・研修

過去5年間に本研究科において受け入れた外国人客員研究員、また、本研究科教員の海外への出張・研修の件数は下記の通りである。

〔表Ⅱ-2-5-1 (研究者交流一覧)〕

種 別	'97前/後	計	'97前/後	計	'97前/後	計	'00前/後	計	'01前/後	計
外国人客員研究員	5 / 1	6	2 / 2	4	6 / 4	10	10 / 6	16	7 / 4	11
海外出張	8 / 4	12	11 / 8	19	9 / 17	26	16 / 18	34	17 / 9	26
海外研修	11 / 16	27	19 / 12	31	15 / 11	26	18 / 9	27	16 / 13	29

年度・期別により、数値の出入りはあるものの、基本的に、研究員受入においても、また本研究科教員の渡航においても、安定した増加傾向を示しており、また、その対象国も、全世界的に広範である。また、これら海外交流の中には、国際研究集会参加・開催等、有益な学術成果を産

んでいる交流が数多く含まれている。その具体的な詳細は、各専門分野の記述を参照されたい。

上記数値の内、文部科学省在外研究員として、短期（2ヶ月を標準とする）・長期（10ヶ月を標準とする）それぞれの滞在先及び研究題目は下記の通りである。

② 在外研究員

鷺田清一

1997年6月1日～1997年7月31日（短期）

滞在先：ドイツ

目的：〈所有〉の現象学的研究

森安孝夫

1998年11月11日～1999年9月10日（長期）

滞在先：ドイツ，フランス，イギリス

目的：中央アジア史の研究

荒木 浩

1999年9月1日～1999年10月30日（短期）

滞在先：アメリカ

目的：日本中世文学及び古代中世説話文学の研究

片山 剛

2001年3月21日～2002年1月20日（長期）

滞在先：中国，イギリス，アメリカ

目的：中国近世・近代史の研究

和田章男

2002年5月6日～2003年2月2日（長期）

滞在先：フランス

目的：ブルーストとノルマンディー地方に関する研究

また、近年の学術状況に鑑み、本研究科でも国内の大学に滞在し、研究に専念する内地研究員への応募が始まり、下記の滞在があった。

③ 内地研究員

杉原 達

2001年5月1日～2002年2月28日

龍谷大学（京都市）

目的：日本・アジア間文化交流史の研究

また、広域人文学（広域文化形態論・広域文化表現論）ほか、多くの共同研究が主催・共催され、数多くの研究者が本学を訪れ、研究交流を行い、その多くは成果報告書等の形で成果が公表されている（各専門分野の項参照）。

2-5-2 学生交流

① 海外からの留学生

本研究科における海外からの留学生の受入状況は以下の通りである。

[表Ⅱ-2-5-2 (海外からの留学生一覧)]

	'97	'98	'99	'00	'01
留学生 (大学院・学部)	66	74	82	86	92

(各年8月1日現在)

留学生の日本への留学希望は年々増加し、日本関係諸学を中心に、ほぼ各専門分野にわたって、受入数は漸増状態にある。留学生の出身国も、アジア、欧米を中心に、ほぼ全世界に及ぶ。博士・修士・学部、それぞれに、活気ある修学・学術交流が行われている。

② 海外への留学

本研究科における、海外への留学状況は以下の通りである。

[過去5年間の留学者について、課程別の総数]*

学部6名； MC4名； DC26名； PD3名 ： 計39名

主な留学先： アメリカ (ハーバード大学)、イギリス (ノッティンガム大学)、スイス (チューリヒ大学)、タイ (チュラロンコン大学)、中国 (北京師範大学)、ドイツ (フライブルク大学、アウグスブルク大学、ジューゲン大学)、フランス (ストラスブール大学、グルノーブル大学)、ベトナム (ハノイ国家大学)、他。

(*専門分野からの届け出による)

海外交流を重要な研究の場とする専門分野の多い本研究科の学問状況から、年々、留学生の数は増えており、その活躍の場も広い。

2-5-3 その他の活動

なお、本研究科には「大阪大学大学院文学研究科・文学部国際交流センター (付置留学生相談室)」が設けられ、海外との交流、及び留学生関係にきめ細やかな対応ができる体制をとっている。また同センターは、本研究科 (文学部を含む) における、海外との交流や現状を広報する『Bulletin (大阪大学大学院文学研究科・文学部国際交流センター室報)』を年二回公刊し、学術交流の詳細や留学生の声も、同室報に載せられているなど、本研究科の研究交流の推進に寄与している (現在45号既刊)。

2-6 外部資金の導入

2-6-1 科学研究費補助金

文学研究科の研究活動において、外部資金の役割はますます増大しつつある。外部資金の大半をしめる科学研究費補助金の取得額は、過去5年間につきのように変化している。なおここで示す数値は、取得年度に代表者が文学研究科に所属していたものに限っていること、また日本学術

振興会特別研究員奨励費もふくめていることをことわっておきたい。

〔表Ⅱ－２－６－１（取得された科学研究費の件数と金額：単位千円，千円未満切り捨て）〕

年 度	'97年度	'98年度	'99年度	'00年度	'01年度
件数	30	38	47	58	58
増減	－	1.27	1.24	1.23	1.00
金額	46,300	51,800	75,600	90,500	102,861
増減	－	1.12	1.46	1.20	1.14
科研費予算総額の増減	－	1.05	1.12	1.08	1.07

件数、金額ともほぼ順調ののびており、また金額の増加率は科研費予算総額の増加率をうまわっている。ただしその主体はつぎに示すように基盤研究(B)で、今後はより大型の基盤研究(A)やさらには文学研究科教官が代表者となった特定領域研究の取得が望まれる。また、教官一人あたりの申請件数は、'01年度が0.59，'02年度が0.71と増大の努力がはらわれているが、なお1.0には達していない。

〔表Ⅱ－２－６－２（取得された科学研究費のうちわけ：金額は単位千円，千円未満切り捨て）〕

年 度	'97年度	'98年度	'99年度	'00年度	'01年度
特定領域研究件数	0	1	2	4	4
同金額	0	900	2,700	7,900	9,300
基盤研究(A)件数	2	1	1	1	1
同金額	9,300	4,900	9,900	6,700	5,300
基盤研究(B)件数	5	5	8	12	12
同金額	20,000	14,000	32,500	40,800	46,400
基盤研究(C)件数	3	5	10	12	16
同金額	1,800	5,400	8,800	13,100	18,861

注：'97年度は海外学術研究を基盤研究(B)に加算

2－6－2 その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金（委任経理金）の導入は、これに対して、つぎに示すように限られている。この方面では、研究助成金の募集自体が多いとはいえないが、科研費以上に申請の努力が必要である。なおこの場合も取得年度に代表者が文学研究科に所属していたものに限っている。

〔表Ⅱ－２－６－３（科学研究費以外の外部資金の導入：単位千円）〕

年度	'97年度	'98年度	'99年度	'00年度	'01年度
件数	3	4	5	4	1
金額	2,600	9,300	3,650	3,200	200

**第3部 各専門分野における
研究・教育活動の概要と外部評価**

【凡 例】

- I. 現在の組織については、2002年4月1日を基準とし、この時点での現員（教員および在学生）を記す。また修了生・卒業生については、1997年度（1998年3月修了・卒業）～2001年度（2002年3月修了・卒業）に関して記す。
 - II. 過去5年間の組織としての研究・教育活動については、原則として1997年度～2001年度の間、に各専門分野に少なくとも1年以上在籍した大学院生等の学位取得（論文博士の場合は、在籍者ではない論文提出者による）、研究業績、受賞等に関して記す。
 - III. 教員の研究活動については、原則として2002年4月1日現在各専門分野に所属している現員による、1. 研究業績に関して1997年度～2001年度の間に公表されたものを記す。2. 受賞歴に関しては過去5年間に限らず遡って記す。（但し、専門分野名の右肩に*が付いたところについては、前任の助手による研究活動も含める）
 - IV. 教員による競争的資金獲得については、2002年4月1日現在各専門分野に所属している現員を研究代表者とする、1997年度～2001年度の間に配分を受けたものに関して（但し、多年度にわたる研究等の場合は、少なくとも1年以上、1997年度～2001年度の間に配分を受けたものに関して）記す。
 - V. 教員による学会役員等の引き受け状況については、2002年4月1日現在各専門分野に所属している現員によるものに関して、1997年度～2001年度の間に引き受けられ・遂行された任務に関して記す。
 - VI. 教員の教育活動については、2002年度の、1. 本学における授業担当に関して（1～3）記す。2. 他大学大学院における講義等に関して（4）記す。
 - VII. 外部評価の報告については、上記の活動に関して2002年度に実施された評価の報告を記載する。
- *広域文化形態論講座および広域文化表現論講座については、上記の限りではない。

3-1 哲学哲学史

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

専門分野・哲学哲学史は、文学部発足当初からの長い伝統を有し、哲学と哲学史は不可分であるとの観点から、特色として、(1) アカデミズムの確立 (2) 哲学の普遍性の標榜 (3) 現代的課題の探求を掲げて、研究・教育を続けてきました。研究は、第一に、綿密な文献解読に基づく近代・現代哲学の歴史的研究を大きな柱としています。その上で第二に、現代哲学の諸問題にも積極的に取り組んでいます。

第一の柱については、デカルトからレヴィナス、アンリまでのフランス系の哲学、ドイツ観念論や現象学などのドイツ系の哲学を研究の中心にしています。近年はさらに西田哲学などの日本の哲学、さらには英米系の分析哲学やプラグマティズムにも手を広げています。

第二の柱については、伝統的な認識論や存在論のほかに、精神科学方法論、言語行為論、コミュニケーション論、哲学的意味論などにも目を向けています。

研究室員はみな、人文基礎学、現代思想文化学などの専門諸分野と連携して、自由闊達に切磋琢磨しています。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：里見軍之 山形頼洋

助教授：入江幸男

助手：吉永和加

2. 在学生 (2002年4月現在)*

2002年度の学生数*								
学部 ^(注)	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	12	18	0	2	0	0	0	0

*専門分野・現代思想文化学と合算
(注) 哲学・思想文化学専修
※うち留学生2名, 社会人学生0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）*

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	7	2	0	0	0
'98	8	2	0	0	0
'99	7	3	3	1	1
'00	7	6	6	1	3
'01	9	8	0	1	0
計	38	21	9	3	4

* 専門分野・現代思想文化学と合算

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	1	1
'98	0	0	0
'99	1	0	1
'00	0	0	0
'01	1	0	1
計	2	1	3

1-2. 博士論文の提出者，題目，審査教官等

米虫正巳 「デカルト哲学と第一原理」 論文博士 1997年11月 主査 山形頼洋 副査 里見軍之・溝口宏平

佐々木正寿 「有限性の解釈学——前期ハイデガーの哲学と気分の問題——」 課程博士 2000年3月
主査 溝口宏平 副査 里見軍之・望月太郎

伊藤淑子 「自我の哲学としてのベルクソニスム」 課程博士 2002年3月
主査 山形頼洋 副査 里見軍之・望月太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文*

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	1	0	2	0	2	5
'98	1	2	7	0	0	10
'99	1	1	8	0	0	10
'00	4	1	7	0	6	18
'01	2	0	8	0	2	12
計	9	4	32	0	10	55

* 専門分野・現代思想文化学と合算

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中(発表年度において在籍)の大学院生による主要業績*

(1) 論文

- 佐々木正寿 「ハイデガーのパス解釈と情態論」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第29号, 1998年.
- 佐々木正寿 「ハイデガーの哲学と根本気分の問題」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第31号, 2000年.
- 佐々木正寿 「人間の存在と気分——ハイデガーと西田における根本気分の問題——」, 日本倫理学会『倫理学年報』第50輯, 2001年.
- 佐々木正寿 「自然における人間の位置をめぐって——シェーラーの人間学とハイデガーのテーゼ——」大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第32号, 2001年.
- 中橋 誠 「中期ハイデガーの真理論——真理の本質を目指す問いと転回——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第31号, 1997年.
- 中橋 誠 「ハイデガーの学問批判について」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第30号, 1999年.
- 小林照顕 「持続と言語」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第28号, 1997年.
- 小林照顕 「持続と系——ベルクソニズムにおける物質観——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第33号, 1999年.
- 小林照顕 「ベルクソニズムにおける神の概念について」, 日仏哲学会『フランス哲学思想研究』第5号, 2000年.
- 中田勝也 「スピノザの精神, 身体とその変様」, 大阪大学文学部哲学哲学史第一講座『カルテシアーナ』第14号, 1997年.
- 中田勝也 「スピノザにおける感情と観念」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第31号, 1997年.
- 中田勝也 「スピノザ『エチカ』における感情の意義」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第29号, 1998年.
- 陀安広二 「ベルクソンにおける責務感と意志」, 大阪大学文学部哲学哲学史第一講座『カルテシアーナ』第14号, 1997年.
- 陀安広二 「社会の生成と生命——ベルクソンの社会論——」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第29号, 1998年.
- 陀安広二 「ベルクソンにおける物質の本性と二元論」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第30号, 1999年.
- 陀安広二 「ベルクソン哲学における科学の位置付け」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇, 第34号, 2000年.
- 伊藤淑子 「ベルクソンにおける自我について」, 英知大学論叢『サピエンチア』第32号, 1998年.
- 伊藤淑子 「ベルクソン哲学における直観について」, 英知大学国際言語研究室『言語文化』第2巻, 1999年.
- 伊藤淑子 「記憶力と自我——ベルクソンの『物質と記憶力』における〈生きられる時間〉と〈純粹持続〉について——」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第30号, 1999年.
- 戸島貴代志 「反感」, 福井工業高等専門学校『福井高専研究紀要』第32号, 1998年.
- 戸島貴代志 「出会い」, 福井工業高等専門学校『実存思想論集』第14号, 1999年.
- 戸島貴代志 「不自由」, 福井工業高等専門学校『福井高専研究紀要』第34号, 1999年.
- 戸島貴代志 「超越論的思惟と場所的思惟」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第32号, 2001年.
- 川瀬雅也 「習慣・時間・表現——メルロ＝ポンティにおける習慣の問題をめぐって——」, メルロ＝ポンティ協会『メルロ＝ポンティ研究』第3号, 1997年.
- 川瀬雅也 「アンリの身体の現象学(前半)」, 立命館大学哲学会『立命館哲学』第9集, 1998年.
- 川瀬雅也 「アンリの身体の現象学(後半)」, 立命館大学哲学会『立命館哲学』第10集, 1999年.

- 川瀬雅也 「ベルクソンにおける身体と時間」, 日本倫理学会『倫理学研究』第30輯, 2000年.
- 川瀬雅也 「見えないものの実在性への問い——メルロ＝ポンティとミッシェル・アンリ——(前半)」, 立命館大学哲学会『立命館哲学』第12集, 2001年.
- 川瀬雅也 “Que veut dire le Cogito? : La définition du Cogito chez Merleau-Ponty et Henry”, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第32号, 2001年.
- 川瀬雅也 「見えないものの実在性への問い——メルロ＝ポンティとミッシェル・アンリ——(後半)」, 立命館大学哲学会『立命館哲学』第13集, 2002年.
- 土井理代 「前期ハイデガーにおける時間性と歴史性」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第29号, 1998年.
- 土井理代 「自然と人間の関わり合いについて——ハイデガーにおける〈世界〉とピュシスの概念を手掛かりに——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第33号, 1999年.
- 松田孝之 「実体における個性と普遍性——ライプニッツにおける実体概念に即して——」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第29号, 1998年.
- 松田孝之 「ライプニッツの空間概念」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第30号, 1999年.
- 松田孝之 「記憶と自我の同一性——ライプニッツにおける記憶について——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第35号, 2001年.
- 平光哲朗 「『物質と記憶』第一章における物質概念の二重性について」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第32号, 2001年.

(2) 口頭発表

- 佐々木正寿 「初期ハイデガーの現象学的解釈学と気分の現象」, 日本現象学会第23回研究大会, 静岡大学, 2001年11月17日.
- 中橋 誠 「ハイデガーの思惟における『頹落』の位置付け」, 日本倫理学会第51回大会, 東京大学, 2000年10月14日.
- 中橋 誠 「現存在とは何か」, 日本哲学会第60回大会, 学習院大学, 2001年5月27日.
- 戸島貴代志 「ルサンチマンとレアクション」, 日本宗教学会第58回学術大会, 南山大学, 1999年9月19日.
- 中田勝也 「『エチカ』における自由と人間について」, 2001年度スピノザ協会研究会, 京都大学, 2001年9月23日.
- 川瀬雅也 「生命・本能・知性——身体の哲学としての『創造的進化』——」, 関西倫理学会第48回大会, 大阪大学, 1997年11月15日.

*1997年度以前に博士前期・博士後期課程に入学した学生については、すべて専門分野・哲学哲学史の在籍者として扱う。

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

1997年度 楠本賞(大阪大学, 1998年3月)*

*専門分野・現代思想文化学に併記。

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 1 名 ストラスブール大学(フランス)

6. 専門分野出身の研究者 (1997~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 1 名

〈内訳〉

'97年度：0名 '98年度：0名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：0名

1999年度 (D 修了) 佐々木正寿 大阪大学大学院文学研究科 現代思想文化学 助手

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)*

計 6 名

〈内訳〉

'97年度：0名 '98年度：2名 '99年度：2名 '00年度0名 '01年度：2名

*専門分野・哲学哲学史と合算

〈主な職業名・就職先等〉

技術職、ジャーナリスト、教員、専業作家他

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

1997~2001年 『メタフュシカ』(専門分野の機関誌)* 毎年刊行

『感情の解釈学的研究』(科研費報告書)*

『自然と人間』(文化基礎学共同研究報告書)*

『コミュニケーションの存在論』(科研費報告書)*

*専門分野 現代思想文化学および臨床哲学と共同

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1998年10月10, 11日 関西哲学会 第51回大会開催* 国内学会

1998年・1999年 ベルクソン研究会(研究会)開催

1999年~2001年 日本フィヒテ協会(国内学会)事務局

*専門分野・現代思想文化学および臨床哲学と共同

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998～2000年度：広域文化形態論講座・文化基礎学専門分野 共同研究「自然の中の人間」
(研究代表者 里見軍之)

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

学部教育（哲学・思想文化学専修）については、基礎的学力を涵養するためにコア・カリキュラムを作り、試行している。すなわち、近代哲学史、現代哲学概説、英米哲学基本文献読解、フランス哲学基本文献読解、ドイツ哲学基本文献読解がこれである。他専修の学生の履修者が多く、特に講義の方は経済学部、理学部など他学部からの受講生もかなりあり、望外に需要があった。また、スタッフ全員がオフィスアワーを週1、2回設け、個別の相談に応じているが、まだ十分利用されているとは言いがたい、今後さらに利用を積極的に勧めたい。さらに、4回生の卒業論文指導の一環として、大学院生の研究発表会で中間発表をするようにしている。

大学院教育については、オフィスアワーや論文作成演習において助言、指導しているが、さらに現代思想文化学専門分野と共同の研究発表会を、不定期に開き、共同の指導体制も作っている。特に博士後期過程の院生には、文化基礎学（広域文化形態論講座）専門分野が主催する共同研究会への参加、研究室発行の学術雑誌への投稿、学会発表を勧めており、一定の成果を得ている。しかし、後期3年間で博士学位請求論文を提出できるものはまだ少なく、苦慮している。

研究活動に関しては、どうしても個人研究が中心とならざるをえないが、しかしその欠を補うため、文化基礎学専門分野の共同研究に多くのスタッフが参加している。また近接の現代思想文化学や臨床哲学専門分野と組んで毎年必ず科学研究費補助金を申請し、多くの場合採択され、すでに「感情の解釈学的研究」（研究代表者・山形頼洋）と「自然のなかの人間」（研究代表者・里見軍之）という研究成果を公表した。現在も「哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション」（研究代表者・溝口宏平・現代思想文化学）という共同研究を推進中である。大学院生の参加も勧めているが、しかし各自の博士論文執筆に忙しく、なかなか両立が難しいようである。また、研究の国際交流をはかるために外国の研究者を招き、講演会や共同研究を推進しているが、隣接の現代思想文化学専門分野と共催で、近年はニューヨーク州立大学のチョー教授やチュービンゲン大学のフィガール教授などに来学いただいた。今後はわれわれスタッフも積極的に外国に出かけるつもりであり、今年度は一人ドイツへ、来年度も一人または二人アメリカへ出張する予定である。

学会活動については、ほとんどのスタッフが各種の委員として学会の運営に努めているし、学会発表や司会も数多くこなしているが、そればかりでなく、日本フィヒテ協会の事務局や関西哲学会の開催校としても活動した。しかし、こうしたことを行うためには施設が不足しているので大いに難渋したことも事実である。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 里見軍之 「超越論的哲学の可能性」, 大阪大学文学部哲学講座『メタフィシカ』第28号, pp.117-133, 1997.
- 里見軍之 「感情論素描」, 平成9年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書『感情の解釈学的研究』, 大阪大学文学部, pp. 182-192, 1998.
- 里見軍之 「純粹経験について」, 『待兼山論叢』第33号哲学篇, 大阪大学文学部, pp. 1-14, 1999.
- 里見軍之 「人間と自然」, 大阪大学文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野共同研究報告書『自然の中の人間』, pp. 1-12, 2001.
- 里見軍之 「他者認識とコミュニケーションの基礎」, 平成13年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書『コミュニケーションの存在論』, pp. 5-11, 2001.
- 山形頼洋 「デカルトと現象学」, 『デカルト読本』, 法政大学出版局, pp.261-272, 1998.

Yorihiro YAMAGATA

“Cosmos and Life:According to Henry and Bergson”, *Continental Philosophy Review* 32-3, Special Issue for Henry, Kluwer Academic Publishers, pp. 241-253, 1999.

Yorihiro YAMAGATA

“Philosophy of Life and Kandinsky’s Abstraction”, *Annual Report of Osaka University, Academic Achievement1999-2000, Osaka University*, pp. 13-15, 2000.

- 山形頼洋 「ミシェル・アンリ, 運動としての身体—メルロ・ポンティの知覚の身体を超えて—」, 『フッサールを学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 159-179, 2000.
- 山形頼洋 「生命に於いてある自己と他者——ベルクソン, レヴィナス, アンリ——」, 『日本倫理学会大会報告書2000』, 日本倫理学会, pp. 38-47, 2000.
- 山形頼洋 「生き生きした現在の幸福な生」, 『思想』第916号, 岩波書店, pp.159-179, 2000.
- 山形頼洋 「自由落下の法則をめぐるコイレのデカルト解釈について」『メタフィシカ』第31号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-8, 2000.

Yorihiro YAMAGATA

“Sprache, Stimme und Kinästhesie” in *Sprache und Pathos*, Hg. Ekkehard Blattmann, Susanne Granzer, Simone Hauke und Rolf Kühn, Alber Philosophie, s. 125-145, 2001.

Yorihiro YAMAGATA

“L’immanence et le mouvement subjectif ” in *Michel Henry : L’Epreuve de la vie*, Les Editions du Cerf, pp. 129-140, 2001.

- 山形頼洋 「物質の概念について」, 里見軍之編『自然の中の人間』大阪大学文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野, pp. 13-21, 2001.
- 入江幸男 「問答の意味論と基礎付け問題」, 『大阪大学文学部紀要』第37号, pp. 153-190, 1997.
- 入江幸男 「感情の物語負荷性と問題」, 平成9年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書科学研究費報告書『感情の解釈学的研究』, pp.151-168, 1998.
- 入江幸男 「ボランティアと公共性」, 『ボランティア学研究』創刊号, 国際ボランティア学会, pp. 37-55, 2000.
- 入江幸男 「現代における承認の諸相」, 『ヘーゲル哲学研究』第6号, ヘーゲル研究会, pp. 28-40, 2000.
- 入江幸男 「問答論的矛盾」, 平成13年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書『コミュニケーションの存在論』, pp. 207-215, 2001.
- 吉永和加 「アンリのシェーラー批判に見る他者把握の問題」, 『メタフィシカ』第28号, 大阪大学文学部哲学講座, pp. 29-46, 1997.
- 吉永和加 「サルトルの恥の感情をめぐる他者の問題」, 平成9年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書『感情の解釈学的研究』, pp. 118-135, 1998.
- 吉永和加 「生の共同体について」, 『待兼山論叢』第32号哲学篇, 大阪大学文学部, pp. 13-25, 1998.
- 吉永和加 「M. アンリにおける生と他者の問題」, 『理想』第664号, 理想社, pp. 99-110, 2000.
- 吉永和加 「共同体の限界について——ルソーの共同体論——」, 『メタフィシカ』第31号, 大阪大学大

学院文学研究科哲学講座, pp. 9-27, 2000.

- 吉永和加 「自我の亀裂——ルソーの共同体を破綻させるもの」, 平成13年度科学研究費補助金基盤研究(BX2)研究成果報告書『コミュニケーションの存在論』, pp. 99-106, 2001.
- 吉永和加 「内在的他者把握の可能性——アンリにおける「基底」の考察——」, 『メタフュシカ』第32号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 29-42, 2001.

1-2. 著書

- 里見軍之 『自然のなかの人間』(共著), 大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座, 189p., pp. 1-12, 2001.
- 里見軍之 『コミュニケーションの存在論』(共著), 平成13年度科学研究費補助金基盤研究(BX2)研究成果報告書, 221p., 2001.
- 山形頼洋 『感情の解釈学的研究』(共著), 平成9年度科学研究費補助金・基板研究(BX2)研究成果報告書, 1998.
- 入江幸男 『哲学者たちは授業中』(共著), 入江幸男/入不二基義/上野修著, ナカニシヤ出版, 225p., pp. 151-168, 1997.
- 入江幸男 『ボランティア学を学ぶ人のために』(共著), 入江幸男/内海成治/水野義之著, 世界思想社, 287p., pp. 4-21, 1999.
- 入江幸男 『コミュニケーション理論の射程』(共著), 入江幸男/霜田求著, ナカニシヤ出版, 226p., pp. 161-188, 2000.
- 入江幸男 『ドイツ観念論の実践哲学研究』, 弘文堂, 342p., 2001.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 吉永和加 「実質的現象学——時間, 方法, 他者——」(共訳), 中敬夫(愛知県立芸術大学)/野村直正(京都産業大学)/吉永和加訳, 法政大学出版社, 251p., 分担 pp., 169-228, 2000.

(2) 書評

- 里見軍之 「細谷昌志『表象と構想力』」, 『図書新聞』, Sep. 06号, 図書新聞社, p. 5, 1999.
- 入江幸男 「思想史の方法——山口祐弘著『意識と無限』を読んで——」, 『ヘーゲル研究』第3号, ヘーゲル研究会, pp. 118-120, 1997.

(3) 辞典項目

- 里見軍之 「記述」「形相」「理念」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, 1998.
- 入江幸男 「フィヒテ」「知識学」, 『政治学事典』, 弘文堂, 2000.
- 吉永和加 「パスカル」「レヴィナス」「幾何学の精神/繊細の精神」「受動感情」, 『政治学事典』, 弘文堂, 2000.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

Yorihiko YAMAGATA

“The Living Present and the Other”, 単独, Freiburger Phänomenologie im Ost-West-Dialog, Tagung Leben als Phänomen, Phänomenologischen Hochschule/Kunzenveg 21 Freiburg, 2001年7月22日

(2) 国内学会

- 山形頼洋 「フランス現象学の現在」, 単独, シンポジウム——フランス現象学の現在——, 日本現象学会, 静岡大学人文学部第1会議室/静岡県静岡市, 2001年11月23日
- 入江幸男 「ボランティアと公共性」, 単独, 設立総会, 国際ボランティア学会, 大阪大学/吹田市, 1999年2月28日
- 入江幸男 「承認論の可能性」, 単独, ヘーゲル研究会シンポジウム, ヘーゲル研究会, 東洋大学/東京

都, 1999年12月19日

吉永和加 「他者の要請 —— ルソーにおける自我と共同体論の狭間から ——」, 単独, 日本倫理学会, 山形大学文学部/山形県山形市, 2001年10月6日

(3) 研究会

吉永和加 「アンリにおける生と共同体の問題」, 単独, 現象学解釈学研究会, 八王子セミナーハウス/東京都八王子市, 1999年11月20日

入江幸男 「ボランティアと公共性」, 単独, 第二回研究会, ボランティア学研究会, 大阪大学/吹田市, 1998年9月19日

2. 教員の受賞歴

入江幸男 第1回フィヒテ協会研究奨励賞, 日本フィヒテ協会より受賞, 1995年11月

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成7~9年度 課題番号:7451001 基盤研究(B)(2)研究代表者:山形頼洋「感情の解釈学的研究」 6,300,000円(3年間総額)

平成10~12年度 課題番号:10410004 基盤研究(B)(2)研究代表者:里見軍之「コミュニケーションの存在論」 6,200,000円(3年間総額)

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

里見軍之 教授

関西哲学会 委員 1967年4月から, 現在に至る。

日本フィヒテ協会 1986年4月から, 現在に至る。

関西倫理学会 1993年11月から, 2000年10月まで。

日本現象学会 2000年11月から, 現在まで。

山形頼洋 教授

日仏哲学会 理事 ……年から, 現在に至る。

関西哲学会 委員・編集委員 1997年から, 現在に至る。

入江幸男 助教授

日本哲学会 編集委員会委員 2001年7月から, 現在に至る

日本フィヒテ協会 委員 1994年11月から, 現在に至る

同 常任委員 2000年11月から, 現在に至る

同 『フィヒテ研究』編集委員会委員 1993年6月から, 現在に至る。

同 フィヒテ協会賞選考委員会委員 1998年11月から, 現在に至る

同 フィヒテ協会賞選考委員会委員長 1999年4月から, 2001年3月まで

国際ボランティア学会 編集委員会委員 1999年2月から, 現在に至る

国際ボランティア学会 理事 2002年10月より現在に至る

【Ⅵ. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

里見軍之 教授

- 1 学期 存在論演習 Gadamer “Wahrheit und Methode I
- 2 学期 存在論演習 Gadamer “Wahrheit und Methode II
- 2 学期 認識論講義 現象学の根本問題
- 1 学期 哲学哲学史修士論文作成演習 哲学の諸問題・発表と討論・1 (入江助教授と共同)

山形頼洋 教授

- 1 学期 西洋哲学史演習 17世紀西洋哲学研究
- 2 学期 比較哲学講義 西田哲学研究
- 通年 哲学哲学史修士論文作成演習 哲学・哲学史研究の方法論
- 通年 哲学哲学史博士論文作成演習 哲学・哲学史研究の方法論

入江幸男 助教授

- 1 学期 言語哲学講義 問答の意味論(3)
- 2 学期 言語哲学講義 正当化主義の可能性
- 1 学期 認識論演習 Kant : Kritik der Urteilkraft
- 1 学期 哲学哲学史修士論文作成演習 哲学の諸問題 —— 発表と討論 —— I (里見教授と共同)
- 2 学期 哲学哲学史修士論文作成演習 哲学の諸問題 —— 発表と討論 —— II (里見教授と共同)
- 1 学期 哲学哲学史博士論文作成演習 哲学の諸問題 —— 発表と討論 —— I (里見教授と共同)
- 2 学期 哲学哲学史博士論文作成演習 哲学の諸問題 —— 発表と討論 —— II (里見教授と共同)

伊豆蔵好美 講師(非常勤講師・奈良教育大学)

- 2 学期 西洋哲学史講義 ホッブズと17世紀哲学の諸問題Ⅲ
- 2 学期 西洋哲学史特殊講義 ホッブズと17世紀哲学の諸問題Ⅲ

鹿野忠良 講師(非常勤講師・大阪大学大学院理学研究科)

- 通年 認識論講義 文科と理科に橋は架かるか

藤本 温 講師(佐世保工業高等専門学校)

- 2 学期 西洋哲学史講義 中世スコラ哲学のインテンティオ論
- 2 学期 西洋哲学史特殊講義 中世スコラ哲学のインテンティオ論

2. 学部授業担当(哲学・思想文化学専修)

里見軍之 教授

- 1 学期 哲学史演習 ドイツ哲学基本文献読解Ⅰ
- 2 学期 哲学史講義 近代哲学史
- 2 学期 哲学史講義 現象学の根本問題
- 1 学期 哲学講義 現代哲学概説

山形頼洋 教授

- 2 学期 哲学演習 フランス哲学基本文献読解Ⅱ
- 2 学期 日本哲学講義 西田哲学研究

入江幸男 助教授

- 1 学期 現代哲学講義 指示と問答

- 2 学期 現代哲学講義 正当化主義の検討
 1 学期 論理学演習 論理学初歩 I
 2 学期 論理学演習 論理学初歩 II
 1 学期 哲学史演習 Kant : Kritik der Urteilkraft
 2 学期 哲学演習 英米哲学基本文献読解

伊豆蔵好美 講師 (非常勤講師・奈良教育大学)

- 2 学期 哲学史講義 ホッブズと17世紀哲学の諸問題 III

藤本 温 講師 (非常勤講師・佐世保工業高等専門学校)

- 2 学期 哲学史講義 中世スコラ哲学のインテンティオ論

中 敬夫 講師 (非常勤講師・愛知県立芸術大学)

- 1 学期 哲学講義 ビラン研究の現在

鹿野忠良 講師 (非常勤講師・大阪大学大学院理学研究科)

- 通年 科学史・科学論講義 文科と理科に橋は架かるか

3. 共通教育授業担当

里見軍之 教授

- II セメスター 主題別教育科目 科学と人間

山形頼洋 教授

- I セメスター 人間教育科目 哲学的人間論 I

入江幸男 助教授

- II セメスター 人間教育科目 ボランティア論

- I セメスター 専門基礎教育科目 哲学基礎 A

4. 他大学大学院における講義等

里見軍之 教授

- 1 学期 神戸大学大学院文化学研究科 (授業科目名) (講義題目)

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：Prof. Dr. Kah Kyung Cho (State University of New York at Buffalo)

独創性・評価について

- ・西洋哲学の研究という分野で、西洋哲学の本場と同じ独創性を発揮することは困難である。東洋人として、比較哲学の可能性に独創性を見出し得る。
- ・アメリカでの評価は、新規採用時／昇進時／特殊表彰時となっている。つまり、具体的な状況に即して評価が行われている。そのため、それらの際の書類審査に際しては、競争のための具体的な評価基準が予め設けられている。
- ・全国的もしくは国際的な評価基準が必要である。学術雑誌・学術会議等への採用の有無、そこ

での評価、またはそこでの委員経験、表彰などがそれに当たる。

- ・若手の教員のための表彰制度は、学問を競争化し、停滞を防いで刺激を与えることに有効である。
- ・また同僚もしくは同期の採用者と競争させることが必要である。あるいはさらには他大学で同分野を専攻する者と業績を比較して評価を行う。
- ・アメリカでは評価者は被評価者と情実関係がないことが原則である。評価者は中立的な立場で、被評価者の名前は伏せられた形で評価を行う。

実証性について

- ・哲学の実証性とは、生活世界に根ざし、とりわけ日本の場合では日本人自身の生活に根ざしていることから得られる。
- ・哲学を既成の科学を標準とするのではなく、流動的な生活世界から立ち上げることが重要。東洋の哲学の実証性は、生活世界そのものが基盤となっている。例えば西田や和辻の哲学のように、日本の独自の生活世界の中からその構成／構築物を導き出す。あるいはそれに内在的で不可視な構造を浮き上がらせ、その論理性を見せるのが実証性。
- ・こうした実証性は日本における独創性の発揮とも繋がる。

持続性—— 課題・方法の一貫性について

- ・課題の一貫性はある。これは消極的な意味ではなく、積極的な意味で評価できる。
- ・ただし、この持続性は、実を結んでいるとは言えない。というのも、国際的な交流が不足しているからである。例えば日本の『現象学年報』などは大変高い水準を保っているのに、国際的には無名に近い。この点が惜まれる。
- ・したがって、作成する論文の量は減らしてでも、自ら翻訳するか、あるいは翻訳を依頼することによって、外国に自らの成果を紹介する労をとるべきである。
- ・このことは、評価基準の問題とも関連している。外国で成果を認められると、そのことによって、評価基準を世界から国内へと持ち込むことが可能になる。また、そこで得られた評価基準によって、他の研究者を審査する資格も獲得される。
- ・ただし、方法の一貫性については反省も要する。グローバリゼーションや欧米中心主義への批判的な視点が必要である。支配的な一元的方法論を相対化する意味でも、採用する方法は複数性、多元性をもたなければならない。その際に、東洋的な方法論を確立し、比較哲学的な視点を得ることが有効である。
- ・例えば、西田の哲学、和辻の哲学は、西洋哲学の論理性とは異なる論理性を有している。これをオーギュスタン・ベルクなどの異国人に任せるのではなく、東洋人が着眼し、率先して研究すべきである。民俗（エスニック）学的方法論を取り入れた創造的分野の確立が必要。
- ・東洋人の立場で、欧米の方法論を取り入れて生産的な成果が得られる場合も無論ある。例えば、現象学の方法論は、西田、和辻の研究に大いに貢献し得る。現象学の応用は、東洋的なものを

際立たせ、整理することを可能にする。里見教授、山形教授、鷺田教授、中岡教授の研究うちにそういった成果が認められる。

- ・こうした方法の複数性、多元性は、隣接分野に影響を及ぼし得る。これは、鷺田教授などに見出される。
- ・またそれとは別に、アメリカの文献にあまり積極的に触れていない点に苦言を呈したい。ドイツ哲学を専攻するからといって、ドイツの一次文献を読むばかりでなく、フランスやアメリカの読解を経由したドイツ哲学を見ることも必要である。ドイツ的な現象学や解釈学がどのように変質して、アメリカ分析哲学に取り入れられるのか。これはドイツ哲学のみに言えることではない。一次文献の読解の純粹性を保つばかりでなく、他の言語を介した解釈を学び、交流すべきである。

学会活動での位置付け

- ・国内はともかくとして、国際的に見て、成果に乏しいと言わざるを得ない。これは、大阪大学に限らず、日本全体に言えることである。これは、実力のなさではなく、ピアールの弱さによる。論文の水準や発表の質は高いが、外国に紹介されていない。
- ・アピールする力をつけるためには、論文を書く際に、単に外国語のレジюмеを作成するだけでなく、国内にあっても論文全体を外国語で書くという習慣をつけるべきである。
- ・外国から学者をよぶ。日本語に直して雑誌に載せる。これだけでなく、院生や教官とのセッションをも記録に残す。国際学会でのコメントなども重要。

指導システム・大学院生の研究について

- ・教官・院生の指導システムは機能していると認められる。
- ・ただし、効果的な学習のためには、アメリカの大学院生の教育制度が示唆に富む。
- ・アメリカでは大学院の学習の期間を第三期に分ける。
 - (1) 第一段階
 - 三学期間に必修科目、**breadth requirement** を要請する。
 - 専攻に初めから取り組むのではなく、全体的な視野を得ることを目指す。この段階があることによって、大学院生が特定の教科に対する苦手意識からそれを敬遠することを防ぐ。大学院生の教養を高め、学問の偏頗性を矯正する目的を果たす。
 - 例えば、歴史に関して、哲学史三分野（古代／中世／近世／現代のうちから）。倫理学・美学などの価値哲学から二分野。さらに形而上学と認識論。この計七科目を取得することが望まれる。
 - さらに、得られた成果をまず学内で発表した後、それを修正したものを **first year requirement** として大学外で発表することを奨励（もしくは強制）し、記録に残しておく。こうして他人との対話を通して、自分の理論を弁証し、討論するトレーニングを早いうちから行う。

(2) 第二段階

- 第四学期から第六学期まで。この時期では、第一段階で所在を理解した課題への関心が固まっていることが求められる。
- その認定は、指導委員会によって行われる。この委員会が、第一段階の学生を第二段階に推薦し、別の委員会の承認を得る。
- このような過程を経て、専攻する分野の集中的な研究を行い、修士論文の題目を決定する。
- なお、第一段階の七科目のうち残されたものがある場合は、この段階で完全に履修されなければならない。

(3) 第三段階

- 最後の期間であり、論文作成が求められる。
- 論文作成の先立ち、**Topical** という一時間の口述試験が課される。
- その様式は、予め題目、参考文献リストを一頁分の要約とともに提出しておき、その後に実際に試験される。発表の際には、さらに詳しい原稿を用意し、三人の委員、他の院生、教官の前で発表する。
- この試験は、在学期間が長くなると、何回も受けなければならない。
- Ph.D.**は、三年から五年の内に取らなければならない。院生の怠惰を防ぐため、学校長から常に早く課程を終えるようにとのプレッシャーを与える。
- 教官は院生のニーズに応える必要があるため、懇談時間を設け、きめこまやかに指導する。
- 分野によって、院生が隣接の分野に関心を示す場合には、その分野の教官の援助を得ることができる。また、外部の大学からの教官も一人だけなら、依頼して院生に指導を受けさせることができる。
- 論文をパスさせるためには、招待された他大学の教官によって評価を得なければならない。そのことによって評価の中立性と公平性が保たれる。

3-2 現代思想文化学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

専門分野・現代思想文化学は、平成10年度より従来の専攻・哲学哲学史から分かれて設立された新しい専門分野である。西洋近世および現代の哲学研究を基盤としながら、今日対応が焦眉の課題となっている社会的・文化的諸問題に哲学的視座から積極的にアプローチすることを目指している。

研究室では、基盤的研究としてまずデカルトをはじめとする17世紀哲学、フランス啓蒙思想、ドイツ観念論、生の哲学、実存主義、解釈学および現象学等、幅広く研究の対象としているが、加えてこれらの研究を基礎に生命、環境、科学と技術、さらには宗教などの抱える現代的諸問題の哲学的考究にも努めている。研究・教育活動は、専門分野・文化基礎学および哲学哲学史との密接な連携のもとに行なわれている。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：浅野遼二 溝口宏平

助教授：望月太郎

2. 在学生 (2002年4月現在)*

2002年度の学生数*								
学部 ^(注)	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	12	18	0	2	0	1	0	0

*専門分野・哲学哲学史と合算
*うち留学生2名, 社会人学生0名
(注) 哲学・思想文化学専修

3. 修了生・卒業生 (1997~2001年度)*

年度	学部卒業生 ^(注)	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	7	2	0	0	0
'98	8	2	0	0	0
'99	7	3	3	1	1
'00	7	6	6	1	3
'01	9	8	0	1	0
計	38	21	9	3	4

*専門分野・哲学哲学史と合算
(注) 哲学・思想文化学専修

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】(1997～2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	1	0	1
'01	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教官等

本田敏雄 「フィヒテ論巧——フィヒテ知識学の歴史的原理的展開——」 課程博士 2001年3月
主査 溝口宏平 副査 里見軍之・入江幸男

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文*

年度	学会誌	紀要	講座等	学術的 商業誌	論文集	計
'97	1	0	2	0	2	5
'98	1	2	7	0	0	10
'99	1	1	8	0	0	10
'00	4	1	7	0	6	18
'01	2	0	8	0	2	12
計	9	4	32	0	10	55

*専門分野・哲学哲学史と合算

2-2. 口頭発表*

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	0	0	0	0	0	0
'99	0	0	1	0	0	1
'00	1	1	0	1	0	3
'01	0	3	1	0	0	4
計	1	4	2	1	0	8

*専門分野・哲学哲学史と合算

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中(発表年度において在籍)の大学院生による主要業績

(1) 論文

茶園陽一 「1886年の序文群におけるニーチェの自己批判」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタ
フュシカ』第30号, 1999年.

茶園陽一 「ニーチェにおける〈病気〉と〈健康〉の思想」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第34号, 2000年.

- 茶園陽一 「孤独と伝達」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『コミュニケーションの存在論』(平成12年度科学研究費研究成果報告書, 研究代表者: 里見軍之), 2001年.
- 西松豊起 「世界に住まうこと——ハイデガーの思惟に即して——」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第32号, 2001年.
- 入谷秀一 「伝達について——ハイデガー『存在と時間』におけるロゴスの両義性——」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第31号, 2000年.
- 入谷秀一 「初期ハイデガーにおける歴史的生についての試論」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第35号, 2001年.
- 本田敏雄 「フィヒテの『信仰』概念」, 日本フィヒテ協会『フィヒテ研究』第6号, 1998年.
- 本田敏雄 「ヘーゲル『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』におけるフィヒテ批判への再批判」, 郁文堂『高専ドイツ語教育』第3号, 2000年.
- 本田敏雄 “Vom “Tun” zum “Sehen””, Rodopi Verlag, Fichite-Studien, Amsterdam/Atlanta, Bd. 17. 2000.

Hans-Joachim Pepping

“Totenrituale für Wasserkinder - Beute der Verunsicherungsindustrie”, in : Schaumann, W. (Hg.): *Japanologie und Wirtschaft - Wirtschaft und Japanologie*, München, 1997.

Hans-Joachim Pepping

“Racisme et Violence - Éducation musicale sous L' Empire”, 大阪府立大学独仏文学研究会編『独仏文学』No. 31, 1997年.

Hans-Joachim Pepping

“Armut in Deutschland”, 大阪府立大学独仏文学研究会編『独仏文学』No. 32, 1998年.

Hans-Joachim Pepping

「音楽における「価値」の変遷について——音楽社会学的考察——」, 大阪府立大学総合科学部『大阪府立大学紀要』No. 46, 1998年.

Hans-Joachim Pepping

“Entstehung und Tragweite der literarischen Anthropologie”, 大阪府立大学独仏文学研究会編『独仏文学』No. 33, 1999年.

Hans-Joachim Pepping

“Religion in Deutschland - kein Thema mehr im 21. Jahrhundert?”, 大阪府立大学総合科学部『大阪府立大学紀要』No. 47, 1999年.

Hans-Joachim Pepping

「ドイツ人はフランス人から何を学ぶことができるだろうか——天羽均先生の退職に寄せて」, 大阪府立大学独仏文学研究会『独仏文学』No. 34, 2000年.

Hans-Joachim Pepping

「聖書の世界における自然観」, 大阪府立大学総合科学部『大阪府立大学紀要』No. 48, 2000年.

Hans-Joachim Pepping

“Mensch und Natur im Christentum - ein Überblick”, 里見軍之(編)『自然の中の人間』, 大阪大学大学院文学研究科, 2001年.

Hans-Joachim Pepping

「解釈学と聖書聖書——解釈者としてのイエス——」, 大阪音楽大学美学研究会編『ムネーモシュネー』No. 1, 2001年.

Hans-Joachim Pepping

「黙示的思想とクムランにおけるテキスト解釈」, 大阪音楽大学美学研究会編『ムネーモシュネー』No. 2, 2001年.

Hans-Joachim Pepping

「パウロにおけるテキスト解釈のさらなる発展」, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』第32号, 2001年.

Hans-Joachim Pepping

「マルキオンと原始キリスト教における解釈学的な基礎の形成」, 大阪音楽大学美学研究会編
『ムネーモシュネー』No. 3, 2002年.

(2) 口頭発表

入谷秀一 「ハイデガー『存在と時間』における解釈と記述」, 日本現象学会第22回研究大会, 東京大学
(駒場キャンパス), 2000年11月18日.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

1997年度 楠本賞 (大阪大学, 1998年3月)

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者 ('97年度~'01年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で, 大学・短大・
高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人 ('97年度~'01年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部
卒業生で, システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職, ジャーナリスト, アーティスト, 中・高
等学校の教員, その他の職業に就いた者について)*

計 6 名

〈内訳〉

'97年度: 0名 '98年度: 2名 '99年度: 2名 '00年度: 0名

'01年度: 2名

*専門分野・哲学哲学史と合算

〈主な職業名・就職先等〉

技術職, ジャーナリスト, 教員, 専業作家他

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

- 1997年度～ 『メタフシカ』（講座の紀要）* 毎年刊行
1999年度 『感情の解釈学的研究』（科研費報告書）*
2000年度 『自然と人間』（文化基礎学共同研究報告書）*
『コミュニケーションの存在論』（科研費報告書）*
2001年度 『啓蒙と反啓蒙』（科研費報告書）

* 専門分野・哲学哲学史および臨床哲学と共同

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 1998年10月10, 11日 関西哲学会 第51回大会開催（国内学会）*
1999年9月18日 ギュンター・フィガール教授（テュービンゲン大学）講演会，
演題「存在の経験と翻訳」大阪大学大学院文学研究科第1会議室
2001年10月9日 オリビエ・ブロック名誉教授（パリ第1大学）講演会，演題「古典主義時代における自由思想と地下文書の伝統と唯物論」，大阪大学待兼山会館会議室

* 専門分野・哲学哲学史および臨床哲学と共同

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 2000年度～ 「現代思想文化学研究会」（研究会）
2001年度～ 「科学と社会」（広域分化形態論文化基礎学共同研究）*

* 専門分野・哲学哲学史他と共同

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

- (1) 研究活動：本専門分野独自の組織的研究活動については、専門分野設立時に独自の研究プロジェクトが計画され実施され始めたが、その後スタッフの大学運営業務への参加の増大等に伴い中断のやむなきにいたっている。そのため現在は、広域文化形態論講座の専門分野・文化基礎学主催の共同研究「自然のなかの人間」（平成10年度～13年度）及び「科学と社会」（平成13年度～15年度）に積極的に参加するとともに、哲学講座内の哲学哲学史、臨床哲学各専門分野と共同して科学研究費補助金による共同研究、「コミュニケーションの存在論」（平成10年度～12年度、研究代表者：里見軍之）、「哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション」（平成14年度～16年度、研究代表者：溝口宏平）に研究分担者ないし研究代表者として参加し、本専門分野の研究領域の特色を出すべく努力している。今後の課題としては、教官と学生とが一体となった共同研究システムを企画開発し、現代思想文化の研究に相応しいフィールドワーク、情報収集機能等を取り入れた研究体制を構築することが求められよう。また、こうした研究活動と社会のニーズとの関連性の調査検討も今後必要と思われる。

(2) 教育活動：本専門分野では、平成10年度より従来の専門分野・哲学哲学史から分離したことに伴い、①西洋の近代から現代に至る哲学及び哲学史に関して専門研究者として必要とされる高度な知識と研究手法の涵養に努めるとともに、②現代世界の諸問題に哲学的ないし倫理的、さらには思想的視点からアプローチし、哲学的ないし思想の現代世界に対する寄与の可能性を探ることを目的に、生命倫理、環境哲学、風土論、科学論及び技術論に関する教育プロジェクトを構想し、授業科目等に反映させている。また、①の課題については、スタッフの専門領域を考慮して、特にフランス近世の哲学及び19～20世紀のドイツ哲学を中心とするカリキュラムが組まれている。また、専門分野・哲学哲学史と協同して各学期に1度学部から大学院博士後期課程までの学生による研究発表会を実施し、教官全体の集団指導体制による教育の開放性の確保に努めている。

こうした活動は、徐々に学生の理解を得てきつつあるように見えるが、哲学の専門教育及び研究の閉鎖性が、広範囲にわたる問題意識形成を阻害している面もあり、今後の教育指導体制の改善が望まれるところである。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 浅野遼二 「距離のパス——あらゆる価値の価値転換——」, 平成9年度科学研究費補助金研究成果報告書（研究代表者：山形頼洋）『感情の解釈学的研究』, 大阪大学文学部, pp. 49-63, 1998.
- 浅野遼二 「ケルケゴールの「想起」論」, 『待兼山論叢』哲学篇 第32号, 大阪大学文学部, pp. 1-12, 1998.
- 浅野遼二 「インフォームド・コンセントをいかに考えるか」, 平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書（研究代表者：里見軍之）『コミュニケーションの存在論』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 149-156, 2001.
- 浅野遼二 「人間らしい安らかな死——尊厳死と安楽死——」, 懐徳堂記念会編『生と死の文化史』, 和泉書院, pp. 1-38, 2001.
- 溝口宏平 「種の保存か、それとも人間の暮らしか」, 『モラル・アポリア』, ナカニシヤ出版, pp. 158-167, 1998.
- 溝口宏平 「存在論」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 998-999, 1998.
- 溝口宏平 「実存」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 668-669, 1998.
- 溝口宏平 「ニーチェ：神の死」, 『哲学を読む』, 人文書院, pp. 187-190, 2000.
- 溝口宏平 「ハイデガー：無への問い」, 『哲学を読む』, 人文書院, pp. 239-241, 2000.
- 溝口宏平 「西田幾多郎とデイルタイ」, 『デイルタイと現代』, 法政大学出版局, pp. 337-344, 2001.
- 溝口宏平 「解釈学」, 『事典・哲学の木』, 講談社, pp. 146-149, 2002.
- 溝口宏平 「解釈学的現象学の成立とその射程」, 『メタフェシカ』第29号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-12, 1998.
- 溝口宏平 「自然と人間との新たな関わりのために」, 『自然のなかの人間』, 大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野, pp. 183-189, 2001.
- 溝口宏平 「精神科学における基礎付けの概念」, 『待兼山論叢』哲学篇 第35号, 大阪大学文学部, pp. 1-14, 2001.
- 望月太郎 「フランス哲学における人間学の形成と自己知の変容——デカルト, ルラルジュ・ド・リニャック, メヌ・ド・ピラン——」, 『アルケー（関西哲学会年報）』第5号, 関西哲学会, pp. 163

-175, 1997.

望月太郎 「ミシェル・アンリのデカルト解釈について」, 『フランス哲学・思想研究』第3号, 日仏哲学会, pp.17-31, 1998.

望月太郎 「コントとピラン——ニュートン主義批判の観点から——」, 『フランス哲学・思想研究』第4号, 日仏哲学会, pp.17-30, 1999.

Taro Mochizuki “La générosité comme principe de l’alter ego et de la communauté”, *L’esprit cartésien* (2vol.), tome 1, Association des Sociétés de Philosophie de Langue Française (A.S.P. L.F.), Librairie philosophique J. Vrin, Paris, pp. 411-414, 2000.

望月太郎 「動物論とその周辺——ビュフォンとコンディヤック——」, 『待兼山論叢』哲学篇・第34号, 大阪大学文学会, pp. 1-14, 2000.

望月太郎 「啓蒙／反啓蒙とエクレクティスム——デイドロとルラルジュ・ド・リニヤックの場合——」, 大阪大学大学院文学研究科紀要・第41巻, 大阪大学, pp. 1-16, 2001.

望月太郎 「風土性と倫理——和辻からベルクへ——」, 『自然のなかの人間』, 大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野, pp. 159-173, 2001.

望月太郎 「コンディヤックからカバニスへ——感覚主義の変容とコミュニケーション論——」, 『コミュニケーションの存在論』, 平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 89-97, 2001.

望月太郎 「感覚主義からイデオロギーへ——イデオロギーのコンディヤック批判——」, 『メタフュシカ』第32号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-28, 2001.

望月太郎 「『動物論』とその周辺——啓蒙と反啓蒙, 相克と布置の形成——」, 『啓蒙と反啓蒙——1740~1830年代フランスにおける近代哲学の発展——』, 平成14年度科学研究費補助金研究成果報告書, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 14-29, 2002.

1-2. 著書

溝口宏平 「モラル・アポリア」(共著), 佐藤康邦(東京大学)／溝口宏平編, ナカニシヤ出版, 259p., pp. 158-167/235-236, 1998.

望月太郎 「啓蒙と反啓蒙——1740~1830年代フランスにおける近代哲学の発展」(共著, 平成14年度科学研究費補助金研究成果報告書), 望月太郎／吉永和加／伊東道生(東京農工大学)／杉山直樹(徳島大学)／松田克進(広島修道大学)／米虫正巳(関西学院大学)／細見和志(関西学院大学)他編, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, 127p., 2002.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

溝口宏平 「ニーチェ——神の死——」, 大浦康介他編『哲学を読む』, 人文書院, pp. 183-187, 2000.

溝口宏平 「ハイデガー——無への問い——」, 大浦康介他編『哲学を読む』, 人文書院, pp. 234-238, 2000.

望月太郎 「ジョエル・ブーデルリック著『コンピュータ・グラフィック——芸術的創造の非在郷——』」, 東海大学文明研究所紀要・第18号, 東海大学文明研究所, pp. 169-187, 1998.

(2) 書評

望月太郎 「中敬夫著『メヌ・ド・ピラン——受動性の経験の現象学——』」, 『フランス哲学・思想研究』, 日仏哲学会, 第6号, pp. 212-216, 2001.

(3) 解説

溝口宏平 「第五回解釈学シンポジウム——デイルタイ——」, 『デイルタイ研究』第10号, 日本デイルタイ協会, pp. 82-87, 1998.

(4) 辞典項目

望月太郎 「コンドルセ」「心身二元論」「テクネー(技術)」「人間機械論」「デステュット・ド・トラシー」, 猪口孝・大澤真幸・岡沢憲夫・山本吉宣・ステイブン・R・リード編『政治学辞典』, 弘文

堂, pp. 391-392/530/766-767/859, 2000.

(5) その他 (エッセー, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

溝口宏平 「現代中国文化事情管見」, 『宝積』第18号, 宝積比較宗教・文化研究所, pp. 5-10, 2001.

溝口宏平 「『教養』とはなにか?」, 『共通教育だより』第16号, 大阪大学全学共通教育機構, pp. 2-3, 2001

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

溝口宏平 「自然と人間との新たな関わりのために」, 単独, 国際学術シンポジウム—新世紀の価値観, 中華人民共和国 天津市 南開大学, 2000年9月10日

(2) 国内学会

溝口宏平 「精神科学の基礎付けの目標とその限界」, 単独, 日本デルタイ協会2001年度シンポジウム, 日本デルタイ協会, 慶應義塾大学/東京都港区, 2000年12月9日

望月太郎 「ミシェル・アングロのデカルト解釈について——その哲学的な位置づけ」, 単独, 望月太郎, 日仏哲学会春季シンポジウム——ミシェル・アングロ哲学の再検討, その自我論を中心に, 日仏哲学会, 日仏会館/東京都渋谷区, 1997年4月2日

望月太郎 「コントとピラン——ニュートン主義の受容と批判」, 単独, 日仏哲学会春季シンポジウム——オーギュスト・コントと現代, コント生誕200年, 日仏哲学会, 京都府京都市/京大会館, 1998年3月29日

(3) 研究会

浅野遼二 「脳死・尊厳死・安楽死・自殺」, 単独, 大阪大学文学部教官研究会, 大阪大学文学部/豊中市, 1997年11月13日

浅野遼二 「実存主義研究に関する大学院教育・研究協力」, 単独, 教育研究交流会, 広島大学文学部/東広島市, 1998年2月1日~4日

(4) 自治体等での講演会等

浅野遼二 「尊厳死と安楽死」, 単独, 懐徳堂春季講座, 大阪府立文化情報センター/大阪市, 1997年5月27日

浅野遼二 「生と死について考える——尊厳死と安楽死——」, 単独, 池田市生涯教育推進研修部会, 池田市サンシティ/池田市, 1997年7月19日

浅野遼二 「心豊かに生きる」, 単独, 高齢者のための中央教養教室, 豊中市立中央公民館/豊中市, 1997年10月8日

浅野遼二 「風土を読む」, 単独, 松江東高等学校東雲祭, 松江東高等学校/松江市, 1998年9月4日

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997年度~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成9年度~10年度 課題番号: 09710005 奨励研究(A) 研究代表者: 望月太郎

『メヌ・ド・ピラン哲学の全体構造』 2,100,000円

平成11年度~13年度 課題番号: 11610007 基盤研究(C)(1) 代表者: 望月太郎

『啓蒙と反啓蒙——1740~1830年代フランスにおける近代哲学の発展』 3,600,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997年度～2001年度)

望月太郎 日仏哲学会 理事・編集委員 2001年8月から、現在に至る。

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

浅野遼二 教授

- 1 学期 現代思想文化学講義 「歴史の形而上学」研究
- 2 学期 現代思想文化学講義 「宗教の形而上学」研究
- 1 学期 現代思想文化学演習 ヘーゲル弁証法の研究
- 2 学期 現代思想文化学演習 ニーチェ「生の哲学」研究
- 2 学期 生命思想論講義 「生命の形而上学」研究
- 1 学期 現代思想文化学修士論文作成演習 現代思想文化研究Ⅰ (溝口教授と共同)
- 2 学期 現代思想文化学修士論文作成演習 現代思想文化研究Ⅱ (溝口教授と共同)
- 1 学期 現代思想文化学博士論文作成演習 現代思想の諸問題Ⅱ (溝口教授と共同)
- 2 学期 現代思想文化学博士論文作成演習 現代思想の諸問題Ⅱ (溝口教授と共同)

溝口宏平 教授

- 1 学期 文化基礎論演習 ハイデガー哲学研究Ⅰ
- 2 学期 文化基礎論演習 ハイデガー哲学研究Ⅱ
- 1 学期 現代思想文化学演習 M. ハイデガー『存在と時間』の研究Ⅰ
- 2 学期 現代思想文化学演習 M. ハイデガー『存在と時間』の研究Ⅱ
- 1 学期 現代思想文化学修士論文作成演習 現代思想文化研究Ⅰ (浅野教授と共同)
- 2 学期 現代思想文化学修士論文作成演習 現代思想文化研究Ⅱ (浅野教授と共同)
- 1 学期 現代思想文化学博士論文作成演習 現代思想の諸問題Ⅰ (浅野教授と共同)
- 2 学期 現代思想文化学博士論文作成演習 現代思想の諸問題Ⅱ (浅野教授と共同)

望月太郎 助教授

- 1 学期 現代思想文化形成史講義 17世紀フランス思想研究
- 2 学期 現代思想文化形成史演習 18世紀フランス思想研究
- 2 学期 現代思想文化形成史講義 18世紀フランス思想研究
- 通年 現代思想文化学修士論文作成演習 現代思想文化研究の方法論
- 通年 現代思想文化学博士論文作成演習 現代思想文化研究の方法論

中 敬夫 講師 (非常勤講師・愛知県立芸術大学)

- 1 学期 現代思想文化学講義 ビラン研究の現在
- 1 学期 現代思想文化学特殊講義 ビラン研究の現在

2. 学部授業担当 (哲学・思想文化学専修)

浅野遼二 教授

- 1 学期 現代哲学講義 「知の形而上学」批判
- 2 学期 現代哲学講義 「宗教の形而上学」批判
- 2 学期 生命哲学講義 「生命の形而上学」批判
- 1 学期 哲学史演習 ヘーゲルの「学の始元」
- 2 学期 哲学史演習 ニーチェの「歴史と生」

溝口宏平 教授

- 2 学期 哲学演習 ドイツ哲学基本文献読解Ⅱ
- 1 学期 現代哲学演習 M・ハイデガー『存在と時間』の読解Ⅰ
- 2 学期 現代哲学演習 M・ハイデガー『存在と時間』の読解Ⅱ

望月太郎 助教授

- 1 学期 哲学演習 フランス哲学基本文献読解Ⅰ
- 1 学期 哲学史講義 17世紀フランス哲学・思想研究
- 2 学期 哲学史講義 18世紀フランス哲学・思想研究

中 敬夫 講師（非常勤講師・愛知県立芸術大学）

- 1 学期 哲学講義 ビラン研究の現在

伊豆蔵好美 講師（非常勤講師・奈良教育大学）

- 2 学期 哲学史講義 ホッブズと17世紀哲学の諸問題Ⅲ

鹿野忠良 講師（非常勤講師・大阪大学大学院理学研究科）

- 2 学期 科学史・科学論講義 文科と理科に橋は架かるか

3. 共通教育授業担当

浅野遼二 教授

- I セメスター 人間教育科目 生命の思想
- I セメスター 基礎セミナー 旅と風土

溝口宏平 教授

- II セメスター 主題別教育科目 生命・環境と倫理
- II セメスター 主題別教育科目 科学と人間（分担）

望月太郎 助教授

- II セメスター 主題別教育科目 科学と人間（分担）
- III セメスター 専門基礎教育科目 哲学概論

4. 他大学大学院における講義等

浅野遼二 教授

- 1 学期 大阪府立看護大学大学院 看護学専攻 看護倫理学講義
- 2 学期 大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻 生命倫理学講義

望月太郎 助教授

- 1 学期 関西学院大学大学院文学研究科 哲学専攻 哲学基礎論特殊講義 1
- 2 学期 関西学院大学大学院文学研究科 哲学専攻 哲学基礎論特殊講義 3

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：Prof. Dr. Kah Kyung Cho（State University of New York at Buffalo）

本専門分野の外部評価は哲学哲学史・臨床哲学と一括して行われ、その報告は専門分野・哲学哲学史の項に一括して掲載してある。

3-3 臨床哲学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

臨床哲学は従来の倫理学専攻を改組し、1998年度に新たに設置された専門分野である。当分野では第一に、欧米および近代日本の倫理思想、道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を、原典研究というかたちで精密に解説・批評すること、第二に、哲学や思想として表現された問いや概念を社会の具体的コンテクストに再び置き直し、社会の中で現に生きている人たちとの議論を通じてそれらを問い直すこと、に取り組んでいる。また、当分野では「共同研究」というスタイルを重視する。研究者が自分だけの知的好奇心を満たすだけに終わらず、例えばケア、医療、介護、教育、芸能、セクシュアリティなどについて、社会で実際にそれらに関わる人たちとの議論をするなかで「何が問題であるのか」を確定し、研究プランを作り、それを遂行することを重視する。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 2 助教授 0 講師 1 助手 1

教授：中岡成文 鷲田清一

講師：本間直樹

助手：紀平知樹

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
32	5	11	0	1	0	4	0	4

※うち留学生1名、社会人学生10名

3. 修了生・卒業生 (1997~2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	5	2	1	0	0
'98	5	1	1	1	1
'99	7	5	1	1	0
'00	8	6	5	0	1
'01	11	2	1	0	0
計	36	16	9	2	2

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】(1997～2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	1	0	1
'99	1	0	1
'00	0	0	0
'01	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教官等

坂本恭子 「ニーチェにおける〈子供〉の生成——〈子供〉の道徳、身体、産出——」

課程博士 1999年3月 主査 中岡成文 副査 鷺田清一、溝口宏平

田中朋広 「道徳と幸福——カント実践哲学における最高善の研究——」

課程博士 2000年3月 主査 鷺田清一 副査 中岡成文、里見軍之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	0	1	0	24	3	28
'98	1	2	3	24	1	31
'99	2	4	9	24	2	41
'00	5	5	5	27	1	43
'01	5	5	16	25	4	55
計	13	17	33	124	11	198

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	2	0	3	0	5
'98	1	8	1	3	0	13
'99	0	7	4	7	0	18
'00	3	5	5	5	4	22
'01	1	10	6	18	3	38
計	5	32	16	36	7	96

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中(発表年度において在籍)の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 河村 厚 「コナトゥスから救済へ——スピノザにおける救済の根底的基礎としてのコナトゥスについて——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第31号, 1997.
- 河村 厚 「スピノザにおけるコナトゥスと倫理」, 日本倫理学会『倫理学研究』第29集, 1999.
- 紀平知樹 「マックス・シェーラーの共感論——ケアの哲学のために——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第32号, 1998.
- 紀平知樹 「意味と類型」, 日本現象学会『現象学年報』第15号, 1999.
- 堀江 剛 「スピノザにおける「神の存在証明」」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第33号, 1999.
- 堀江 剛 「心身の協働——スピノザ倫理学における人間理解および心身並行論について——」, 日本倫理学会『倫理学研究』第30集, 2000.
- 本間直樹 「オートポイエーシスと身体の問題」, 日本現象学会『現象学年報』第15号, 1999.
- 本間直樹 「コミュニケーションと倫理学——「道德の盲点」を起点として——」, 日本倫理学会『倫理学研究』第48集, 2000.
- 西村高宏 「連帯する哲学と政治——後期メルロ＝ポンティにおける「哲学の観念」と政治——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第33号, 1999.
- 馬嶋 裕 「ミルと自律性」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』哲学篇第34号, 2000.
- 寺田俊郎 「カントの道德論における「徳の義務」の位置」, 日本倫理学会『倫理学研究』第29集, 2000.
- Toshiro TERADA “Why couldn't Kant be a utilitarian?”, Proceedings of 20th WCP, 2000.
- 栗山愛以 「衣服が孕む両義性について」, ファッション環境学会『ファッション環境』, Vol.10-4, 2000.
- 渡邊美千代 「精神科実習における相互作用における相互作用の考察——沈黙からの他者受容過程の分析——」, 第11回日本看護学教育学会・学術集会講演集, 2001.
- 宮脇浩/荒尾小枝子/林野ヨシエ/渡邊美千代/佐伯恵子/宮崎洋子/荒木孝治
「SST の実際における看護者の臨床判断能力」, 『日本精神科看護学会誌』, Vol.44・No.2, 2001.
- 幡山隆子/西山由利子/林野ヨシエ/宮崎洋子/佐伯恵子/荒木孝治/渡邊美千代
「SST 実施が精神科看護者のアイデンティティに与える影響」, 『日本精神科看護学会誌』, Vol.44・No.2, 2001.

(2) 口頭発表

- 河村 厚 「スピノザにおけるコナトゥスと倫理」, 関西倫理学会第48回研究大会, 大阪大学, 1997年11月15日.
- 堀江 剛 「スピノザ倫理学における「心身並行論」について」, 第49回関西倫理学第49回研究会, 甲南大学, 1998年11月7日.
- 寺田俊郎 「カントの道德論における「徳の義務」の位置」, 関西倫理学会第49回研究大会, 甲南大学, 1998年11月7日.
- 紀平知樹 「シェーラーの錯誤論——『愛の秩序とその混乱』の一解釈——」, 関西倫理学会第49回研究大会, 甲南大学, 1998年11月8日.
- 本間直樹 「「道德の盲点」について」, 日本倫理学会第48回大会, 九州大学, 1999年10月18日.
- 馬嶋 裕 「ミルの倫理学説における『性格』概念の意義」, 関西倫理学会第50回研究大会, 大阪市立大学, 1999年11月13日.
- 西村高宏 「人間の裏面としての歴史——後期メルロ＝ポンティにおける人間と歴史——」, 関西倫理学会第50回研究大会, 大阪市立大学, 1999年11月14日.
- 西村高宏 「メルロ＝ポンティの唯物論——人と物との「血縁関係」を表明するもの——」, 日本倫理学会第51回大会, 東京大学, 2000年10月14日.
- 大北全俊 「イメージ概念の射程——ベルクソンによる運動の記述をめぐって——」, 関西倫理学会第51回研究大会, 徳島文理大学, 2000年11月11日.
- 森 芳周 「カント批判哲学におけるカテゴリーの体系」, 関西倫理学会第52回研究大会, 阪南大学, 2001年11月10日.

渡邊美千代／犬童幹子／鈴木けい子／古賀典子

「精神科実習のコミュニケーション技術の変化分析—社会的スキルとエゴグラムの調査から」, 第32回日本看護学会・看護教育分科会, 山口市, 2001年8月23日.

鈴木けい子／古賀典子／犬童幹子／渡邊美千代

「実習による社会的スキルの変化——老年看護実習・精神看護実習を通して」, 第32回日本看護学会・看護教育分科会, 山口市, 2001年8月23日.

宮脇浩／荒尾小枝子／林野ヨシエ／渡邊美千代／佐伯恵子／宮崎洋子／荒木孝治

「SST の実際における看護者の臨床判断能力」, 第10回日本精神看護技術協会看護学会, 2001年10月10日.

幡山隆子／西山由利子／林野ヨシエ／宮崎洋子／佐伯恵子／荒木孝治／渡邊美千代

「SST 実施が精神科看護者のアイデンティティに与える影響」, 第10回日本精神看護技術協会看護学会, 2001年10月10日.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 5 名

〈内訳〉

PD：2名

'97年度：0名 '98年度：0名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：1名

DC：3名

'97年度：0名 '98年度：1名 '99年度：1名 '00年度：1名 '01年度：0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）

計 2 名

'97年度：0名 '98年度：0名 '99年度：0名 '00年度：1名 '01年度：1名

〈内訳〉

2000年度（D 修了）本間直樹 大阪大学大学院文学研究科 講師

2001年度（D 修了）寺田俊郎 明治大学法学部 助教授

7. 専門分野出身の高度職業人（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

大学院博士課程在籍者に看護師等がいる。

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

- 1997年～ 『メタフュシカ』 講座の紀要 毎年刊行*
- 1997年～ 『臨床哲学ニューズレター』 機関誌 毎年刊行
- 1998年～ 『メチエ』 機関誌 季刊
- 1999年～ 『臨床哲学』 機関誌 毎年刊行

* 専門分野・哲学哲学史および現代思想文化学と共同

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 1997年 11月15, 16日 関西倫理学会第48回研究大会 国内学会
- 1999年 10月16, 7日 日本倫理学会第50回大会 国内学会
- 2001年度より, 日本現象学会事務局 国内学会

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 1997年～ 臨床哲学研究会
- 2000年～ 哲学カフェ

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

当専門分野は「臨床哲学」という名をもつ日本で初の大学関係の組織として、平成10年4月に発足した（前身は倫理学専攻）。臨床哲学はこのように組織化された形では、当専門分野の鷺田清一教授によりはじめて提唱された。臨床哲学のユニークな理念は少しずつ認められ、関係学会で「臨床哲学」に関するワークショップが開かれたり、国際高等研究所（関西学研都市）で「臨床哲学の可能性」をテーマとする研究プロジェクトが組まれたり、しだいに日本でも注目を集めるようになってきた。

社会の現場にコミットする新しい哲学を謳う臨床哲学の理念に沿って、多くの社会人院生・研究生たち（医療・介護や教育の関係者など）が活躍しているのが、当専門分野の教育・研究活動の最大の特色であるといえよう。教育研究の方法論としても、平成10年から翌年にかけては、箕面の老人保健施設で高齢者介護と「傾聴」とをテーマとする「実習」的な活動を行ったが、これなどは人文系の学問にはこれまでまれだった試みだろう。そのほかにも「社会の中での哲学」の一環として、哲学カフェや「ソクラテス的対話」（SD）、高校での哲学教育など多彩な取り組みを行っている。また、これらの取り組みと関連して、ヨーロッパの国際学会にも毎年教員や院生

を派遣して、研究発表や意見交換を行っている。

以上のように、世界でもまだ類の少ないユニークなアイデアのもと、社会に開かれた活動を展開しており、またそれが社会的に評価されつつあることは確かであると思われる。他方、臨床哲学の理念や有効性、具体的方向性をまだ充分には明らかにできていないという問題点もある。そのためもあって、とくに社会人としての場を持たない院生が研究の方向に迷う傾向も見られる。教員はそれを指導する最大の努力を払っているが、従来の哲学・倫理学教育に加えて臨床哲学としての多様な新しいフィールドにコンタクトしなければならず、時間と人数の不足に恒常的につきまわられている。設備の面では、社会人を含めて増大する院生・学生のためのスペース（勉強室、ゼミ室）が不足している。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 専門分野所属の教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 中岡成文 「痛みと身体・痛みと自己」, 『メンタルケア』第2号, ライブストーン, pp. 102-107, 1997.
- 中岡成文 「〈境界〉の制作——30年代思想への接近——」, 『思想』第882号, 岩波書店, pp. 49-68, 1997.
- 中岡成文 「否定性と支配——ヘーゲルにおける知識と行為——」, 『西日本哲学年報』第5号, 西日本哲学会, pp. 1-13, 1997.
- 中岡成文 「講義の七日間——知るということ——」, 『知のパラドックス/岩波新・哲学講義』第3巻, 岩波書店, pp. 1-60, 1998.
- 中岡成文 「信仰は市民生活を越えられるのか」, 『モラル・アポリア——道徳のディレンマ/倫理学のフロンティア——』第1号, ナカニシヤ出版, pp. 213-221, 1998.
- 中岡成文 「種の論理——田辺元——」, 『日本の哲学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 58-88, 1998.
- 中岡成文 「モラルある理性へ」, 『岩波新・哲学講義—哲学に何ができるか——』別巻, 岩波書店, pp. 3-26, 1999.
- 中岡成文 「排除しない思考は可能か」, 『戦争責任と「われわれ」——「歴史主体」論争をめぐる——倫理学のフロンティア』第6号, ナカニシヤ出版, pp. 99-114, 1999.
- 中岡成文 「理解と援助のパラドックス」, 『臨床哲学』第1号, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 12-19, 1999.
- 中岡成文 「ケアする欲求, 欲求するケア——臨床哲学のために——」, 『メタフュシカ』第30号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 141-153, 1999.
- 中岡成文 「ヘーゲルにおける表出と癒しのエコノミー」, 平成10年度～11年度科学研究費補助金（基盤研究(B)1)研究成果報告書（研究代表者・鷺田清一『倫理学のアカウンタビリティ』, 大阪大学文学研究科）pp. 86-95, 2000.
- 中岡成文 「考えにくい死を考える——哲学のまなごし——」, 『生と死の文化史/懐徳堂ライブラリー』第4号, 懐徳堂記念会, pp. 55-85, 2001.
- 中岡成文 「田辺元——絶対否定は何を差異化するか——」, 『京都学派の哲学』, 昭和堂, pp. 52-65, 2001.
- 中岡成文 「環境課題を問う——哲学の視点から——」, 『環境情報科学』第1巻第30号, 環境情報科学学会, pp. 43-47, 2001.
- 中岡成文 「いかなる哲学のための, いかなる教育か」, 『アルケー・関西哲学会年報』第9号, 関西哲学会, pp. 142-151, 2001.
- 鷺田清一 「〈ゆるみ〉とくすきま」, 『講座現代日本文化論/夢と遊び』, 岩波書店, pp. 19-48, 1997.
- 鷺田清一 「他者という形象——《ヘテロロジー》素描——」, 『実存思想論集/他者』第12号, 日本実存思想協会, pp. 5-35, 1997.

- 鷺田清一 「布と身体」, 『美と創作シリーズ／染を学ぶ』, 岩波書店, pp. 166-177, 1998.
- 鷺田清一 「いのちのはずみ」, 『講座《生命》』第3号, 哲学書房, pp. 233-25, 1998.
- 鷺田清一 「時が去りゆく, 物が消える — 現代の奇妙な喪失感情について —」, 『中央公論』1998年5月号, 中央公論社, pp. 182-190, 1998.
- 鷺田清一 「肯定の停止 — 〈人間〉という最上級の共同体をめぐって —」, 『哲学』第49号, 日本哲学会, pp. 28-42, 1998.
- 鷺田清一 「失われた身体を求めて」, 『美と創作シリーズ／現代芸術を学ぶ』, 角川書店, pp. 68-101, 1999.
- 鷺田清一 「包む・服飾」, 『テキスト生活美学』, 光文館, pp. 9-21, 1999.
- 鷺田清一 「酒の文化, 酒場の文化」, 『酒の文明学』, 中央公論新社, pp. 4-41, 1999.
- 鷺田清一 「危機と批判 — 二十世紀の文明批評とその時間意識 —」, 『懷徳堂ライブラリー／批評の現在』第2号, 懷徳堂記念会, pp. 1-38, 1999.
- 鷺田清一 「理論と実践—あるいは, 見ることと行なうこと—」, 『エチカとは何か—現代倫理学入門—』, ナカニシヤ出版, pp. 154-170, 1999.
- 鷺田清一 「物語と同一性」, 『教育学研究』, 日本教育学会, pp. 3-9, 1999.
- 鷺田清一 「哲学とその〈外部〉 — 哲学の文体をめぐって —」, 叢書《転換期のフィロソフィー》第1巻『哲学: 知の新たな展開』, ミネルヴァ書房, pp. 260-276, 1999.
- 鷺田清一 「幸福と所有一消えた二つの主題 —」, 『講座《世界歴史》／普遍と多元—現代文化へ向けて—』, 第28号, 岩波書店, pp. 249-75, 2000.
- 鷺田清一 「洋装下着の受容と身体感情の変容」, 『《近代日本文化論》／ハイカルチャー』, 岩波書店, pp. 195-214, 2000.
- 鷺田清一 「わご・身体・メディア」, 『わご学』, 国際高等研究所 Report1999-04, pp. 67-81, 2000.
- 鷺田清一 「アイデンティティ」, 『20-21世紀 DESIGN INDEX』, INAX 出版, pp. 273-27, 2000.
- 鷺田清一 「所有と固有 — *propriete* という概念をめぐって —」, 『所有のエチカ』, ナカニシヤ出版, pp. 4-41, 2000.
- 鷺田清一 「わくばらに — 宗教的なものと偶然性の感情 —」, 『アステイオン』第53号, TBS ブリタニカ, pp. 23-45, 2000.
- 鷺田清一 「老いの時間」, 『講座《生命》』第5号, 河合文化教育研究所, pp. 269-300, 2001.
- 鷺田清一 「全体という擬制 — 〈国家〉の存在をめぐって —」, 『アステイオン』第56号, TBS ブリタニカ, pp. 9-41, 2001.
- 本間直樹 「『病』の認識論に向けて — 家族療法からシステム論へ —」, 『メタフュシカ』第29号, 大阪大学文学部哲学講座, pp. 127-139, 1998.
- 本間直樹 「オートポイエーシス — あるいは意識, 時間, 感情について —」, 平成9年度科学研究費基盤研究(B2)研究成果報告書(研究代表者: 山形頼洋)『感情の解釈学的研究』, 大阪大学文学部, pp. 136-150, 1998.
- 本間直樹 「『社会的なもの』の境位 — 間主観性とコミュニケーションを巡って —」, 『倫理学研究』第28号, 日本倫理学会, pp. 98-109, 1998.
- 本間直樹 「コミュニケーションと倫理学 — 「道徳の盲点」を起点として —」, 『倫理学年報』第48号, 日本倫理学会, pp. 151-163, 1999.
- 本間直樹 「オートポイエーシスと『身体』の問題」, 『現象学年報』第15号, 日本現象学会, pp. 263-273, 1999.
- 本間直樹 「コミュニケーションの有り難さ」, 平成11年度科学研究費・基盤研究(B1)研究成果報告書(研究代表者: 鷺田清一)『倫理学のアカウンタビリティ』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 145-156, 2000.
- 本間直樹 「『聴くこと』をめぐる6つの試論」, 『サウンドスケープ』第2号, 日本サウンドスケープ協会, pp. 1-7, 2000.
- 本間直樹 「他者の自己表出(ディスクルス)を受けとめながら... — アンダース・リンドセットの哲学プラクティス —」, 『臨床哲学』第2号, 大阪大学臨床哲学研究室, pp. 98-114, 2000.
- 本間直樹 「コミュニケーションにおける声・身体・共存について — 困難なコミュニケーションが映し出すもの —」(共著: 本間直樹/武田保江), 平成13年度科学研究費補助金・基盤研究(B)

- (2) 研究成果報告書 (研究代表者: 里見軍之) 『コミュニケーションの存在論』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 157-166, 2001.
- 本間直樹 「失語症とその看護が問いかけるもの——他者理解とコミュニケーションについての臨床哲学的考察——」(共著: 本間直樹/武田保江), 『臨床哲学』第3号, 大阪大学臨床哲学研究室, pp. 2-15, 2001.
- 本間直樹 「いま改めて聴くことの意味を考える」, 『精神科看護』第7巻第28号, 精神看護出版, pp. 8-21, 2001.
- 本間直樹 「臨床哲学における対話の活用——ソクラテック・ダイアローグの有効性と問題点——」(共著: 本間直樹/堀江剛), 平成13年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書, (研究代表者: 中岡成文) 『哲学的理論における抽象性と具体性——ヘーゲル哲学と看護理論に定位して——』, pp. 5-22, 2002.

1-2. 著書

- 中岡成文 『知のパラドックス』(共編著), 岩波書店, 219p., 1998.
- 中岡成文 『私と出会うための西田幾多郎』, 出窓社, 197p., 1999.
- 中岡成文 『臨床的理性批判』, 岩波書店, 203p., 2001.
- 中岡成文 『ハベ馬斯—交往行為—』, 河北教育出版社, 262p., 2001.
- 鷺田清一 『現象学の視線』, 講談社, 335p., 1997.
- 鷺田清一 『メルロ=ポンティエー可逆性—』, 講談社, 342p., 1997.
- 鷺田清一 『顔の現象学』, 講談社, 235p., 1998.
- 鷺田清一 『ひとはなぜ服を着るのか』, 日本放送出版協会, 277p., 1998.
- 鷺田清一 『悲鳴をあげる身体』, PHP 研究所, 201p., 1998.
- 鷺田清一 『普通をだれも教えてくれない』, 潮出版社, 299p., 1998.
- 鷺田清一 『二十世紀を震撼させた100冊』, (共編著) 野家啓一/鷺田清一編著, 出窓社, 269p., 1998.
- 鷺田清一 『「聴く」ことの力』, TBS ブリタニカ, 269p., 1999.
- 鷺田清一 『五界彷徨』, 北宋社, 277p., 1999.
- 鷺田清一 『皮膚へ—傷つきやすさについて—』, 思潮社, 216p., 1999.
- 鷺田清一 『所有のエチカ』, (共編著), 鷺田清一/大庭健編著, ナカニシヤ出版, 243p., 2000.
- 鷺田清一 『ことばの顔』, 中央公論新社, 261p., 2000.
- 鷺田清一 『まなざしの記憶』, TBS ブリタニカ, 206p., 2000.
- 鷺田清一 『「哲学」と「てつがく」のあいだ』, みすず書房, 284p., 2001.
- 鷺田清一 『〈弱さ〉のちから』, 講談社, 221p., 2001.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 鷺田清一 「木田元『最終講義』『偶然性と運命』」, 『週刊読書人』, 第2390号, 2001.
- 本間直樹 「J. ミラー『フィロソフィカル・ライフの探求』」, 季刊『iichiko』, 第42号, 日本ペリアールアートセンター, pp. 45-54, 1997.

(2) 書評

- 中岡成文 「矢代梓——啓蒙のアイロニー——」, 『週間読書人』, 株式会社読書人, pp. 2207, 1997.
- 中岡成文 「大庭健——自分であるとはどんなことか——」, 『週間読書人』, 株式会社読書人, pp. 2225, 1998.
- 鷺田清一 「大滝昭一郎『書と「共通感覚」』」, 『中国新聞』1998年7月19日刊, 1998.
- 鷺田清一 「中村雄二郎『日本文化における悪と罪』」, 『東京新聞』1998年8月9日刊, 1998.
- 鷺田清一 「海野弘『ダイエットの歴史』」, 『信濃毎日新聞』1998年9月6日刊, 1998.
- 鷺田清一 「木村敏『分裂病の詩と真実』」, 『図書新聞』第2411号, 1998.
- 鷺田清一 「加藤典洋『日本人の自画像』」, 『群像』, 講談社, 7月号, 2000.

- 鷺田清一 「森村泰昌『空想主義的芸術家宣言』, 『東京新聞』2001年1月28日刊, 2001.
 鷺田清一 「井上雅人『洋服と日本人』, 『論座』, 朝日新聞社, 2月号, 2002.

(3) 辞典項目

- 鷺田清一 『社会学文献事典』3項目, 弘文堂, 1998.
 鷺田清一 『哲学・思想事典』17項目, 岩波書店, 1998.
 鷺田清一 『政治学事典』5項目, 弘文堂, 2000.
 本間直樹 「コミュニケーション」, 『政治学事典』, 弘文堂, pp. 4-9, 2000.

(4) 解題・解説・総説

- 鷺田清一 「木村敏『偶然性の精神病理』」, 解題, 岩波書店, pp. 233-243, 2000.
 本間直樹 「フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』」, 解説, 『20世紀を震撼させた100冊』, 出窓社, pp. 116-117, 1998.
 本間直樹 「メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』」, 解説, 『20世紀を震撼させた100冊』, 出窓社, pp. 144-145, 1998.

(5) その他 (エッセー, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 中岡成文 「ケアはお互いさま」, 『整形外科看護』第3巻第12号, メディカ出版, pp. 58-61, 1998.
 中岡成文 「所有が終わるところ—臓器移植が突きつける問題—」, 『整形外科看護』第4巻第5号, pp. 4-7, 1999.
 中岡成文 「関係づけるケアへ」, 『整形外科看護』第4巻第12号, pp. 4-7, 1999.
 中岡成文 「福祉のための臨床哲学」, 『月間福祉』7月号, pp. 24-27, 2000.
 中岡成文 「自分を中心であること」, 『整形外科看護』第5巻第11号, pp. 78-79, 2000.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 中岡成文 「理解と援助のパラドックス」, 単独, 第4回哲学プラクティクス国際会議「哲学プラクティクスと徳」, 国際哲学プラクティクス学会, Thomas-Morus-Academie Bensberg, 1998年8月5日
 中岡成文 「人為と自然—1920-30年代におけるジョン・デューイと三木清—」, 単独, 日中學術フォーラム「近代日本哲学の東洋的意義」, 中国社会科学院東方文化研究中心, 2000年8月29日
 鷺田清一 「哲学と臨床」, 単独, 発達科学の発展のための国際集会, 発達科学国際シンポジウム, 神戸国際会議場/神戸市, 2000年12月2日

(2) 国内学会

- 中岡成文 「いかなる哲学のための, いかなる教育か」, 単独, 課題研究—哲学の教育—, 関西哲学学会, 関西学院大学, 2000年10月8日
 鷺田清一 「皮膚論的な思考」, 単独, 繊維学会, ラフォーレ修善寺/静岡県, 1997年8月27日
 鷺田清一 「肯定の停止」, 単独, 日本哲学会大会, 日本哲学会, 金沢大学/金沢市, 1998年5月23日
 鷺田清一 「教育という物語」, 単独, 日本教育学会大会, 日本教育学会, 香川大学/高松市, 1998年8月28日
 鷺田清一 「メディアと二十世紀の文化」, 単独, 春季大会, 日本マスコミュニケーション学会, 関西大学/吹田市, 2000年6月4日
 鷺田清一 「岐路に立つ身体」, 単独, 日本スポーツ教育学会, 大阪国際会議場/大阪市, 2000年1月9日
 鷺田清一 「老いの時間」, 単独, 日本現象学・社会科学会, 慶應義塾大学/東京都, 2000年12月10日
 鷺田清一 「詩と形而上学—九鬼周造の世界—」, 単独, 日本哲学史フォーラム, 京都大学/京都市, 2000年12月24日
 鷺田清一 「聴くことの力」, 単独, 日本人間性心理学会, 札幌学院大学/札幌市, 2001年9月3日
 鷺田清一 「危機と批判」, 単独, 日本学術会議哲学系公開シンポジウム, 日本哲学会/日本倫理学会, 日本学術会議/東京都, 2001年12月11日
 本間直樹 「「道徳の盲点」について」, 単独, 日本倫理学会, 九州大学/福岡県福岡市, 1997年10月18日
 本間直樹 「オートポイエーシスと身体の問題」, 単独, 日本現象学会, 岩手大学/岩手県盛岡市, 1998

- 年11月15日
- 本間直樹 「哲学への寄与—ルーマンの場合—」, 単独, 日本現象学社会科学学会, 専修大学/神奈川県, 1999年12月11日
- 本間直樹 「失語症とその看護が問いかけるもの—他者理解とコミュニケーションについての臨床哲学的視角—」, 共同: 本間直樹/武田保江 (大阪大学), 日本倫理学会, 大阪大学/大阪府吹田市, 1999年10月16日
- 本間直樹 「臨床哲学と応用倫理学—ソクラテック・ダイアログをもとにした対話の実践に向けて—」, 共同: 本間直樹/堀江剛, 日本倫理学会, 山形大学/山形県山形市, 2001年10月7日
- (4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等
- 中岡成文 「臨床哲学について」, 単独, 公開セミナー「臨床哲学の可能性」, 国際高等研究所, 2000年12月9日
- 鷺田清一 「情報社会の都市風景」, 単独, 名古屋世界都市景観会議, 名古屋国際会議場/名古屋市, 1997年10月8日
- 鷺田清一 「劇場都市の再生」, 単独, 金沢ルネッサンス冬まつり, 金沢市市民芸術ホール/金沢市, 1998年2月7日
- 鷺田清一 「聴くことの力」, 単独, 日本ホスピス/在宅ケア研究会全国大会, 大阪国際会議場/大阪市, 2001年7月1日

2. 教員の受賞歴

- 鷺田清一 サントリー学芸賞 (サントリー文化財団, 著書『分散する現在』および『モードの迷宮』, 平成元年11月)
- 鷺田清一 桑原武夫学芸賞 (潮出版社, 著書『「聴く」ことの力—臨床哲学試論』, 平成12年7月)

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

- 平成10~11年度 課題番号: 10410011 基盤研究(B)(1) 研究代表者: 鷺田清一『倫理学のアカウンタビリティ』
- 平成12~13年度 課題番号: 12610004 基盤研究(C)(2) 研究代表者: 中岡成文『哲学的理論における抽象性と具体性—ヘーゲル哲学と看護理論に定位して—』
- 平成13~14年度 課題番号: 13610040 基盤研究(C)(1) 研究代表者: 鷺田清一『看護の臨床哲学的研究』

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

- 中岡成文
 日本倫理学会評議員 (1998-2002年)
 関西哲学会委員 (1994-2002年)
 日本フィヒテ協会委員 (1987-2002年)

鷲田清一

(1) 学会役員

- 日本倫理学会常任評議員 (1997年－)
- 同, 課題設定委員 (1997－1999年)
- 日本哲学会委員 (2001年－)
- 同, 編集委員 (1999年－)
- 日本現象学会委員 (1989年－)
- 同, 編集委員 (1996－1997年)
- 同, 事務局長 (2001－2002年)
- 日本現象学・社会科学会委員 (1984年－)
- 日本顔学会評議員 (1997年－)
- 関西倫理学会委員 (1991年－)
- 同, 編集委員 (1996－1999年, 2002－2003年)
- 関西哲学会委員 (1995年－)
- ファッション環境学会理事 (1991－2000年)

(2) 客員教授

- 国際日本文化研究センター客員教授 (1997－1999年)

(3) 研究所役員

- 国際日本文化研究センター評議員 (2002年－)
- 国際高等研究所特別委員 (2002年－)
- 京都服飾文化研究財団評議員 (1999年－)
- 伊丹クラフト協会理事 (1999年－)

(4) 研究所共同研究員

- 国際高等研究所客員研究員 (1998－2002年)
- 国立民族学博物館共同研究員 (2000－2002年)
- 政策研究大学院大学共同研究員 (2000年－)

(5) 政府・自治体関連委員

- 科学技術庁科学技術会議専門委員 (21世紀の社会と科学技術を考える懇談会) (1999－2000年)
- 内閣官房「21世紀日本の構想」懇談会委員 (1999－2000年)
- 科学技術庁原子力委員会・原子力バックエンド対策専門部会評価委員 (1999－2000年)
- 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員 (哲学) (2000年)
- 内閣府総合科学技術会議専門委員 (生命倫理) (2001年－)
- 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員 (哲学) (2000－2002年)
- 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員 (倫理学) (2001年)
- 京都市基本構想等審議会副会長 (1998－2001年)
- 京都市基本構想起草委員会委員長 (1998－1999年)
- 京都市基本構想調整委員会副委員長 (2000年)
- 大阪府大学のあり方検討会議委員 (2001－2002年)
- 大阪府文化懇話会委員 (2001年)
- 大阪市文化振興懇話会・事業評価委員会委員長 (2002年－)

【VI. 教員の教育活動】 (2002年度)

1. 大学院授業担当

中岡成文 教授

1 学期 臨床哲学講義 ひとは何を欲求するか(3)

2 学期 臨床哲学演習 ひとは何を欲求するか(4)

1 学期 臨床哲学講義 関わる・演ずる・結ぶ(1) (鷲田教授と本間講師と共同)

- 2 学期 臨床哲学演習 関わる・演ずる・結ぶ(2) (鷺田教授と本間講師と共同)
- 1 学期 臨床哲学修士論文作成演習 臨床哲学研究(1) (鷺田教授と本間講師と共同)
- 2 学期 臨床哲学修士論文作成演習 臨床哲学研究(2) (鷺田教授と本間講師と共同)

鷺田清一 教授

- 1 学期 臨床哲学講義 時間論
- 2 学期 臨床哲学演習 ヘーゲル『法の哲学』を読む
- 1 学期 臨床哲学演習 邦語哲学・思想文献購読Ⅰ
- 2 学期 臨床哲学演習 邦語哲学・思想文献購読Ⅱ
- 1 学期 臨床哲学講義 関わる・演ずる・結ぶ(1) (中岡教授と本間講師と共同)
- 2 学期 臨床哲学演習 関わる・演ずる・結ぶ(2) (中岡教授と本間講師と共同)
- 1 学期 臨床哲学修士論文作成演習 臨床哲学研究(1) (中岡教授と本間講師と共同)
- 2 学期 臨床哲学修士論文作成演習 臨床哲学研究(2) (中岡教授と本間講師と共同)

本間直樹 講師

- 1 学期 倫理学演習 現代倫理思想の諸問題Ⅰ
- 2 学期 倫理学演習 現代倫理思想の諸問題Ⅱ
- 1 学期 社会哲学講義 進化と倫理Ⅲ
- 2 学期 社会哲学演習 進化と倫理Ⅳ
- 通年 対話技法論演習 コミュニケーションの技法と実践
- 1 学期 臨床哲学講義 関わる・演ずる・結ぶ(1) (中岡教授と鷺田教授と共同)
- 2 学期 臨床哲学演習 関わる・演ずる・結ぶ(2) (中岡教授と鷺田教授と共同)
- 1 学期 臨床哲学修士論文作成演習 臨床哲学研究(1) (中岡教授と鷺田教授と共同)
- 2 学期 臨床哲学修士論文作成演習 臨床哲学研究(2) (中岡教授と鷺田教授と共同)

品川哲彦 講師 (非常勤講師・関西大学)

- 1 学期 倫理学特殊演習 応用倫理学の文献を読む
- 1 学期 倫理学演習 応用倫理学の文献を読む

霜田 求 講師 (非常勤講師・大阪大学大学院医学研究科)

- 1 学期 倫理学特殊演習 カントの倫理学
- 2 学期 倫理学特殊演習 生命操作の倫理的課題
- 1 学期 倫理学演習 カントの倫理学
- 2 学期 倫理学演習 生命操作の倫理的課題

2. 学部授業担当 (倫理学専修)

鷺田清一 教授

- 1 学期 臨床哲学講義 時間論
- 2 学期 倫理学演習 ヘーゲル『法の哲学』を読む
- 1 学期 倫理学演習 邦語哲学・思想文献講読Ⅰ
- 2 学期 倫理学演習 邦語哲学・思想文献講読Ⅱ

中岡成文 教授

- 1 学期 臨床哲学講義 ひとは何を欲求するか(3)
- 2 学期 臨床哲学演習 ひとは何を欲求するか(4)
- 2 学期 倫理学史講義 西洋近代倫理思想史概説

本間直樹 講師

- 1 学期 倫理学講義 倫理学概論
- 2 学期 倫理学演習 倫理学の研究方法
- 1 学期 倫理学演習 現代倫理思想の諸問題Ⅰ
- 2 学期 倫理学演習 現代倫理思想の諸問題Ⅱ
- 1 学期 社会哲学講義 進化と倫理Ⅲ
- 2 学期 社会哲学演習 進化と倫理Ⅳ

品川哲彦 講師 (非常勤講師・関西大学)

- 1 学期 倫理学演習 応用倫理学の文献を読む

霜田 求 講師 (非常勤講師・大阪大学大学院医学研究科)

- 1 学期 倫理学演習 カントの倫理学
- 2 学期 倫理学演習 生命操作の倫理的課題

3. 共通教育授業担当

中岡成文 教授

- I セメスター 基礎セミナー 臨床哲学セミナー

鷺田清一 教授

- Ⅲ セメスター 主題別教育科目 言語と世界

本間直樹 講師

- I セメスター 主題別教育科目 行為と規範と文化
- Ⅱ セメスター 専門基礎教育科目 倫理学基礎

4. 他大学大学院における講義等

鷺田清一・中岡成文 教授 (連合講義)

大阪大学大学院医学系研究科分子治療学講座 医の倫理

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：Prof.Dr. Kah Kyung Cho (State University of New York at Buffalo)

本専攻の外部評価は、哲学哲学史・臨床哲学と一括して行われ、哲学哲学史専門分野の項に一括して掲載してある。

3-4 中国哲学*

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

中国哲学は、中国古典の精読を通じて、広く東アジア世界の文化的特質を解明しようとする実証的学問である。本研究室は、全国の主要大学の中でも、この学問を主対象として、体系的・組織的・継続的に教育・研究を行っている数少ない拠点の一つである。

その中でも突出した特色としては、①既存の伝世文献に加え、新たに発見された竹簡・帛書などの出土資料を積極的に取り上げて考究する点、②担当教官数は少ないながらも、中国古代から近世、さらには日本漢文に至る幅広い時代・思想を対象とする点、③大阪大学が誇る漢籍コレクション「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびその電子情報化を推進する点、などが挙げられる。具体的な成果物としては、学術誌『中国研究集刊』の編集・刊行（年2回）、『懷徳堂文庫図書目録』電子版の作成・公開、研究室HPを通じた研究情報の公開などがある。

また本研究室は、旧来の小講座制の良き伝統を継承しながらも、とかく閉鎖的になりがちな小講座の体質を脱却し、学内外の組織と密接な協力関係を築いている。さらに、全国組織の学会の事務局を務め、他大学の中国哲学研究室と定期的な研究交流を行うなど、開かれた教育・研究組織として積極的な活動を展開している。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：湯浅邦弘

助手：佐野大介

2. 在学生（2002年4月現在）

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
3	2	2	0	0	0	0	0	0

※うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	1	1	0	3	1
'98	1	2	0	0	0
'99	3	2	0	0	1
'00	1	2	0	0	0
'01	0	1	0	0	1
計	6	8	0	3	3

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	3	3
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	0	0	0
'01	0	0	0
計	0	3	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教官等

湯浅邦弘 「中国古代軍事思想史の研究」 論文博士 1997年12月

主査 加地伸行, 副査 福島吉彦, 濱島敦俊

串田久治 「中国古代における「謠」の思想史的研究」 論文博士 1998年2月

主査 加地伸行, 副査 福島吉彦, 湯浅邦弘

吉永慎二郎 「儒墨の思想史的交渉と孟子思想の構造についての研究」 論文博士 1998年3月

主査 加地伸行, 副査 山形頼洋, 湯浅邦弘

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	1	0	0	0	0	1
'98	0	0	0	0	0	0
'99	2	0	0	0	0	2
'00	1	1	0	0	0	2
'01	2	2	0	0	0	4
計	6	3	0	0	0	9

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
'97	0	1	0	0	0	1
'98	0	3	0	0	0	3
'99	0	5	0	0	0	5
'00	0	3	1	0	0	4
'01	0	2	1	0	0	3
計	0	14	2	0	0	16

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 釜田啓市 「懐徳堂関係研究論考目録」, 『中国研究集刊』, 24号, 1997.
- 佐野大介／前川正名 「『孝経』及び「孝」関係論考目録」, 『中国研究集刊』24号, 1999.
- 井上 了 「現行本『慎子』の資料的問題について」, 『中国研究集刊』24号, 1999.
- 佐野大介 「『古文孝経孔安国伝』における徳目間の関係構造」, 『中国研究集刊』27号, 2000.
- 佐野大介 「『古文孝経孔氏伝』偽書説について」, 『待兼山論叢（哲学篇）』第34号, 2000.
- 佐野大介 「『古文孝経孔安国伝』の法治観」, 『日本中国学会報』, 第52集, 2001.
- 前川正名 「橘曙覧作「日本建国之吟」考」（共著）, 『福井大学教育地域科学部紀要・第一部・人文科学（国語学, 国文学, 中国学編）』, 第52号, 2001.
- 前川正名 「『白虎通義』諫諍篇に就いて（漢代に於ける「諫諍」の一側面）」, 『待兼山論叢（哲学篇）』第35号, 2001.
- 前川正名 「『啓発録』に見る橋本左内の忠孝観」, 『國學院中國學會報』第四十七輯, 2001.

(2) 口頭発表

- 佐野大輔 「『古文考経孔安国伝』の法治観」, 第1回大阪大学・名古屋大学中国哲学研究室交流, 2000.
- 吉村未知 「郭店楚簡儒家系文献に見る法治思想」, 第2回大阪大学・名古屋大学中国哲学研究室交流, 2001.
- 前川正名 「『啓発録』に見る橋本庄内の忠孝観」, 国学院大学中国学会第39回大会, 2001.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 1 名

<内訳>

学部：1名 DC：0名 PD：0名

<留学先>

北京師範大学

6. 専門分野出身の研究者 (1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 3 名

'97年度：1名 '98年度：0名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：1名

〈内訳〉

1997年度 (D 中退) 釜田啓市 大阪大学大学院文学研究科 助手

1997年度 (D 中退) 井上 了 同上

2001年度 (D 中退) 佐野大介 同上

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6 名

〈内訳〉

'97年度：0名 '98年度：2名 '99年度：2名 '00年度：1名 '01年度：1名

〈主な職業名・就職先等〉

川崎商事, NTT 東日本, 長野市役所, 二見書房

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 2 名

寺門日出男 (都留文化大学助教授) (1999年度)

余 崇生 (台湾・国立東屏師範学院副教授) (2001年7月～8月)

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 1 名

余 崇生 (台湾・国立東屏師範学院副教授) (2001年7月～8月)

10. 刊行物

『中国研究集刊』・半年刊・(大阪大学中国学会事務局)

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学中国学会 (国内学会) 事務局引受 1984年4月から、現在に至る。

阪大名大中国哲学研究会 (研究会) 事務局引受 2000年11月11日～2001年11月17日

懐徳堂研究会 (研究会) 事務局引受 2000年4月から、現在に至る。

郭店楚簡研究会 (研究会) 事務局引受 2001年9月14日～16日, 2001年12月14日～16日

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大名大中国哲学研究会 (2001年11月11日)

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

- ① 中国思想史研究を中心とする着実な教育・研究……本研究室は、初代教授木村英一の学風に見られる通り、経学（中国儒教経典に対する注釈学）を中心としながらも、古代から近世に至る諸思想（法家、老荘、仏教など）についても、重厚な教育・研究を展開する点に特色を有する。現在の教授である湯浅邦弘も、既存の枠に囚われることなく、思想的には、儒家に加えて、法家・兵家・道家にも十分な目配りを行い、また資料的にも、伝世文献のみならず、1970年代以降に発見された新出土資料を積極的に取り上げ研究業績を上げている。こうした学風の中で薫陶を受けた大学院生も、様々な時代・思想を対象として研究を進めている。また、本研究室は、1984年（昭和59年）に組織された大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を年2回編集・刊行している。最新号は、2002年12月刊行の第31号であり、中国学に関する学術誌として定評を得ている。ただ現在、助教授人事が学内事情により凍結されているため、湯浅一人が授業を担当し、非常勤ポストも減少傾向にあることから、助教授の補充が大きな課題となっている。

- ② 人文学における電子情報化の開拓と推進……本研究室の近年の最大の成果は、懐徳堂文庫資料を中心とする電子情報化の推進である。大阪大学が誇る漢籍コレクション「懐徳堂文庫」については、これまで、『懐徳堂文庫図書目録』（1976年）があるのみであったが、湯浅を中心として組織した懐徳堂研究会により、2000年度から貴重資料の総合調査が行われ、それらは精細な画像と解題をともなったデータベースとして結実した。その成果の一部は、2001年5月の大阪大学創立70周年記念事業「バーチャル懐徳堂」として公開されたほか、『懐徳堂事典』（湯浅編著）として再編され刊行された。その後も、『懐徳堂文庫図書目録』の電子版を作成して2002年6月に Web で公開し、貴重資料データベースの Web 公開を2002年度末に予定するなど、人文学における電子情報化の先端的業績をあげている。

- ③ 財懐徳堂記念会事業への支援……大阪大学文学部と密接な協力関係にある懐徳堂記念会については、本研究室の歴代教授がその運営幹事を務めるなど、特に積極的な支援を行っている。大学院生も、懐徳堂記念会機関誌『懐徳』に毎号、関係文献提要进行している。また、上記の懐徳堂電子情報化事業とも相俟って、懐徳堂記念会の諸事業、例えば、記念会 HP の作成・メンテナンス、2002年3月の「船場博」や同5月の「大阪大学いちょう祭」への「バーチャル懐徳堂」の出展などに研究室を挙げて取り組んだ。社会貢献の顕著な成果である。また、これに関連して、懐徳堂文庫資料約5万点について、2001年8月に附属図書館旧館から新館への総合移転が行われたが、これについては湯浅が図書館研究開発室員（兼任）としてそれを企画・指揮し、研究室がその業務を推進した。

- ④ 他大学との学術交流……開かれた研究室を目指し、2000年から名古屋大学文学部中国哲学研究室と学術交流会を行っている。毎年秋、両研究室の全教官・院生が一堂に会して研究発表会を開催している。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 専門分野所属の教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 湯浅邦弘 「馬王堆帛書『十六経』の蚩尤像」,『東方宗教』89号,日本道教学会, pp. 40-54, 1997.
- 湯浅邦弘 「出土資料と老荘思想研究」,加地伸行編『老荘思想を学ぶ人のために』,世界思想社, pp. 55-74, 1997.
- 湯浅邦弘 「中国古代の戦争と平和」,『岩波講座・世界歴史』25巻,岩波書店, pp. 151-168, 1997.
- 湯浅邦弘 「中国軍事思想史研究の現状と課題」,『中国研究集刊』23号,大阪大学中国学会, pp. 45-65, 1998.
- 湯浅邦弘 「兵家の思想と活動」,『しにか』1999年2月号,大修館書店, pp. 21-26, 1999.
- 湯浅邦弘 「『李衛公問対』の兵学思想」,大阪大学文学部紀要・第39巻,大阪大学文学部, pp. 1-45, 1999.
- 湯浅邦弘 「焚書坑儒とは何か」,『しにか』2000年2月号,大修館書店, pp. 40-45, 2000.
- 湯浅邦弘 「『太陰陰経』の兵学思想」,大阪大学大学院文学研究科紀要・第40巻,大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-40, 2000.
- 湯浅邦弘 「懷徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について——デジタルコンテンツとしての位置づけ——」(共著:湯浅邦弘/杉山一也(岐阜経済大学)/竹田健二(鳥根大学)/藤居岳人(阿南工業高等専門学校)/井上了),『中国研究集刊』27号,大阪大学中国学会, pp. 45-66, 2000.
- 湯浅邦弘 「『天楽樓書籍遺蔵目録』について——懷徳堂資料のデジタルアーカイブ化に向けて——」(共著:湯浅邦弘/寺門日出男(都留文科大学)/神林裕子(甲子園短期大学)/井上了),『懷徳』69号,懷徳堂記念会, pp. 91-107, 2001.
- 湯浅邦弘 「甦る兵家の活動」,『しにか』2000年9月号,大修館書店, pp. 21-27, 2000.
- 湯浅邦弘 「中国古代兵学の「自然」」,里見軍之編『自然のなかの人間』,大阪大学大学院文学研究科, pp. 23-33, 2001.
- 湯浅邦弘 「『虎鈴経』の兵学思想」,大阪大学大学院文学研究科紀要・第41巻,大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-26, 2001.
- 湯浅邦弘 「懷徳堂学派の『論語』注釈——泰伯篇曾子有疾章について——」(共著:湯浅邦弘/寺門日出男(都留文科大学)/神林裕子(甲子園短期大学)/石飛 憲(鳥根県立大田高等学校))『中国研究集刊』29号,大阪大学中国学会, pp. 103-130, 2001.
- 湯浅邦弘 「懷徳堂データベースの構築——全体構造と今後の課題——」,『懷徳』70号,懷徳堂記念会, pp. 36-41, 2002.
- 湯浅邦弘 「懷徳堂データベース全コンテンツ」,大阪大学大学院文学研究科紀要・第42巻,大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-320, 2002.
- 湯浅邦弘 「孔子の見た夢——懷徳堂学派の『論語』注釈——」,荒木浩編『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——」,大阪大学大学院文学研究科, pp. 137-158, 2002.
- 湯浅邦弘 「『忠臣』の思想——郭店楚簡『魯穆公問子思』について——」,『大久保隆郎教授退官記念論集——漢意とは何か——』,東方書店, pp. 45-65, 2001.
- 湯浅邦弘 「郭店楚簡『六徳』について——全体構造と著作意図——」,『中国出土資料研究』第6号,中国出土資料学会, pp. 39-53, 2002.
- 井上 了 「現行本『慎子』の資料的問題について」,『中国研究集刊』24号,大阪大学中国学会, pp. 41-54, 1999.
- 井上 了 「『慎子』における「因」の思想」,『待兼山論叢(哲学篇)』第33号,大阪大学文学部, pp. 29-40, 1999.

- 井上 了 「漢籍電子テキスト所蔵情報集約の提言」,『中国研究集刊』26号,大阪大学中国学会, pp. 1-3, 2000.
- 井上 了 「懷徳堂文庫所蔵『論孟首章講義』について」(共著:湯浅邦弘/杉山一也/竹田健二/藤居岳人/井上了),『中国研究集刊』27号,大阪大学中国学会, pp. 45-66, 2000.
- 井上 了 「中条若処と並河天民」,『懷徳』69号,懷徳堂記念会, pp. 88-90, 2001.
- 井上 了 「『天楽楼書籍遺蔵書目』について——懷徳堂資料のデジタルアーカイブ化に向けて——」(共著:寺門日出男/湯浅邦弘/神林裕子/井上了),『懷徳』69号,懷徳堂記念会, pp. 91-121, 2001.
- 井上 了 「北京大学出版社整理本『孝経注疏』(繁体字版)初見」,『中国研究集刊』29号,大阪大学中国学会, pp. 131-137, 2001.
- 佐野大介 「『古文孝経孔安国伝』における徳目間の関係構造」,『中国研究集刊』27号,大阪大学中国学会, pp. 24-44, 2000.
- 佐野大介 「『古文孝経孔氏伝』偽書説について」,『待兼山論叢(哲学篇)』第34号,大阪大学文学会, pp. 29-42, 2000.
- 佐野大介 「『古文孝経孔安国伝』の法治観」,『日本中国学会報』53号,日本中国学会, pp. 45-58, 2001.

1-2. 著書

- 湯浅邦弘 「中国古代軍事思想史の研究」,研文出版, 384p., 1999.
- 湯浅邦弘 「懷徳堂事典」(編著), 編者・湯浅邦弘, 大阪大学出版会, 384p., 2001.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 湯浅邦弘 「中国の夢判断」, 東方書店, pp. 1-357, 1997.

(2) 書評

- 湯浅邦弘 「工藤元男著『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』」,『中国出土資料研究』3号,中国出土資料学会, pp. 95-102, 1999.

(3) 解題・解説・総説

- 湯浅邦弘 「韓非子——世界制覇のための方策——」,『世界の文学』102巻,朝日新聞社, pp. 58-59, 2001.
- 湯浅邦弘 「二人の孫子——中国兵法の誕生——」,『中国人物列伝』, 恒星出版, pp. 71-92, 2002.
- 井上 了 「懷徳堂関係研究文献提要(42)」,『懷徳』67号,懷徳堂記念会, pp. 109-110, 1999.
- 佐野大介 「懷徳堂関係研究文献提要(47)」,『懷徳』66号,懷徳堂記念会, pp. 111-113, 1998.
- 佐野大介 「懷徳堂関係研究文献提要(48)」,『懷徳』67号,懷徳堂記念会, pp. 110-111, 1999.
- 佐野大介 「『孝経』及び「孝」関係論考目録」,『懷徳』69号,懷徳堂記念会, pp. 135-136, 2001.
- 佐野大介 「懷徳堂関係研究文献提要(55)」(共著:佐野大介/前川正名),『中国研究集刊』24号,大阪大学中国学会, pp. 1-37, 1999.
- 佐野大介 「懷徳堂関係研究論文提要(56)」,『懷徳』69号,懷徳堂記念会, pp. 136-137, 2001.
- 佐野大介 「漢籍分類目録」15項目,(共著:湯浅邦弘/井上了/佐野大介),大阪大学大学院文学研究科紀要・第42巻,大阪大学大学院文学研究科, pp. 158-182, 2002.

(4) 辞典項目

- 佐野大介 「懷徳堂事典」15項目,大阪大学出版会, 2001.

(5) その他(エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 湯浅邦弘 「懷徳堂と電子図書館」,大阪大学図書館報136号,大阪大学附属図書館, pp. 1-4, 2000.
- 湯浅邦弘 「懷徳堂文庫の総合移転」,大阪大学図書館報140号,大阪大学附属図書館, pp. 6-8, 2001.

1-4. 口頭発表

(1) 国内学会

- 湯浅邦弘 「郭店楚簡『六徳』の思想」, 単独, 中国出土資料学会, 2001年度第1回例会, 立正大学大崎校舎/東京都品川区, 2001年7月14日.
- 湯浅邦弘 「古典資料の電子情報化——懐徳堂文庫の場合——」, 単独, 全国漢文教育学会, 第18回大会, 盛岡大学/岩手県岩手郡滝沢村, 2001年6月16日.
- 井上 了 「孟子におけるネポティズムの一側面——「禅讓」觀を例として——」, 単独, 日本中国学会, 第53回大会, 福岡大学/福岡市, 2001年10月6日.

(2) 研究会

- 湯浅邦弘 「中国古代兵学の「自然」——道家的「自然」の一展開——」, 単独, 大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野共同研究「自然の中の人間」, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 1999年9月16日.
- 湯浅邦弘 「懐徳堂学派の「夢」の説」, 単独, 大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野共同研究「心と外部」, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 2000年10月19日.

(3) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 湯浅邦弘 「ふたりの孫子——出土文字資料が語る——」, 単独, 朝日カルチャーセンター「中国人物列伝」, 朝日新聞社ビル/大阪府大阪市, 2000年11月14日.
- 湯浅邦弘 「孔子と『論語』」, 単独, 豊中市立公民館秋の講座, 豊中市立庄内公民館/大阪府豊中市, 2001年10月9~30日.
- 湯浅邦弘 「よみがえる懐徳堂」, 単独, 阪神奈大学生涯学習ネット公開講座フェスタ2001, 大阪府立文化情報センターさいかくホール/大阪府大阪市, 2001年11月28日.

2. 教員の受賞歴

なし

【Ⅳ. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成12~14年度 課題番号12610015 基盤研究(C)2 研究代表者: 湯浅邦弘「異文化接触から見た中国軍事思想史の研究」 平成12年度: 800,000円 13年度: 900,000円 14年度: 1,000,000円

平成12~13年度 課題番号12710004 奨励研究(A) 研究代表者: 井上 了「周末漢初における「格言集」の形成と展開——新出土資料より見た——」 平成12年度: 500,000円 13年度: 700,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

平成12年度 (財)懐徳堂記念会研究出版助成費 研究代表者: 湯浅邦弘「懐徳堂関係資料の電子化に関する研究」 150,000円

【Ⅴ. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

湯浅邦弘 中国出土資料学会理事(1998年4月~, 現在に至る)
大阪大学中国学会代表(1998年4月~, 現在に至る)

懐徳堂研究会代表 (2000年4月～, 現在に至る)

日本道教学会評議員 (2002年4月～, 現在に至る)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

湯浅邦弘 教授

1学期	中国哲学特殊演習	【夢占逸旨】の研究
通年	中国哲学特殊演習	郭店楚簡儒家系文献の研究
通年	漢籍資料学特殊演習	懐徳堂文庫漢籍の研究
1学期	中国哲学演習	【夢占逸旨】の研究
通年	中国哲学演習	郭店楚簡儒家系文献の研究
通年	漢籍資料学演習	懐徳堂文庫漢籍の研究
通年	中国哲学博士論文作成演習	論文作成指導
通年	中国哲学修士論文作成演習	論文作成指導

神塚淑子 講師 (非常勤講師・名古屋大学)

1学期	中国哲学特殊講義	道教思想の形成と展開
1学期	中国哲学講義	道教思想の形成と展開

矢羽野隆男 講師 (非常勤講師・四天王寺国際仏教大学)

通年	中国化学特殊演習	【潜夫論】所引【詩経】の解釈
通年	中国化学演習	【潜夫論】所引【詩経】の解釈

2. 学部授業担当

湯浅邦弘 教授

1学期	中国哲学演習	【夢占逸旨】の研究
通年	中国哲学演習	郭店楚簡儒家系文献の研究
通年	中国哲学演習	懐徳堂文庫漢籍の研究
通年	中国哲学演習	論文作成指導

神塚淑子 講師 (非常勤講師・名古屋大学)

1学期	中国哲学講義	道教思想の形成と展開
-----	--------	------------

矢羽野隆男 講師 (非常勤講師・四天王寺国際仏教大学)

通年	中国化学演習	【潜夫論】所引【詩経】の解釈
----	--------	----------------

3. 共通教育担当

湯浅邦弘 教授

Iセメスター	専門基礎教育科目	中国哲学基礎
--------	----------	--------

4. 他大学大学院における講義等

湯浅邦弘 教授

2学期 (集中講義)	名古屋大学大学院文学研究科	中国哲学史特殊講義「新出土資料による中国思想史研究の展開」
------------	---------------	-------------------------------

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：浅野裕一（東北大学大学院国際文化研究科教授）

イ) 研究の先見性・独創性

大阪大学の中国哲学研究室は、これまで実証的な経学研究を中心に、法家思想・道家思想・名家思想などの諸子学、仏教学などの分野でも、優れた業績を上げてきているが、現在湯浅教授の下で進められつつある研究活動に関しては、先見性・独創性の観点から評価すべき点が二点ある。その第一は、馬王堆帛書・郭店楚簡など、新出土資料の研究にいち早く着手した点である。戦国・秦漢時代の文字資料の相次ぐ発見は、中国哲学研究に画期的進展をもたらしつつある。だがわが国で出土資料の研究を行っている大学は、一ないし二を数えるにすぎない。そうした中であって、湯浅教授が『中国古代軍事思想の研究』以来、この未開拓の分野に積極的に取り組み、銀雀山漢墓竹簡・雲夢秦簡・馬王堆帛書・郭店楚簡などの研究で着実に成果を上げてきていることは、先見性・独創性に富む姿勢として高く評価できる。その第二は、「懷徳堂文庫」の漢籍に対する総合的な学術調査を継続的に実施している点である。特に貴重図書データベース化を実現し、『懷徳堂文庫図書目録』電子版を作成・公開したり、大阪大学創立70周年記念授業の一環として「バーチャル懷徳堂」を作成・公開するなどの活動は、高度情報化時代における文系の学術研究の方向を先取りするもので、その先見性と独創性は大いに評価すべきであろう。また大阪の精神文化の基盤たる懷徳堂の研究を、院生諸君やOBの研究者が多数参加する形で精力的に進め、『懷徳堂事典』を完成させたり、雑誌『懷徳』に多くの論考を掲載したりしてきていることは、独法化を控え、地域と大学の連携強化が求められている現在、一つのモデルケースを提供するものであり、その先見性も高く評価できる。

ロ) 研究の実証性

湯浅教授が進めている出土資料の研究は、発表された帛書や竹簡の写真版を基に、独自の解説を行って原文を確定する基礎作業の上に、思想内容の分析に進む方法を取っており、文献学としての手堅さを評価することができる。また「懷徳堂文庫」に関する研究は、保存されている文献個々を精査した上で、文献考証学的手続きを踏んで行われている。院生が『中国研究集刊』や『懷徳』などに発表してきている論考にも、文献考証学的手法が徹底されており、空疎な理論に陥ることを避けて、実証性を重視する姿勢が研究室全体の学風を形成している点は、高く評価できる。

ハ) 研究の持続性

湯浅教授は多年にわたって出土資料の研究に取り組んできており、その成果を継続的に発表してきている。また昨年まで助手であった井上了氏も、出土資料に関する研究で平成12・13年度の科学研究費補助金の助成を受けている。こうした実績から判断して、現時点での院生の論文の発表数はまだ少ないものの、今後大阪大学中国哲学研究室に出土資料の研究が定着してい

くものと予想される。また「懷徳堂文庫」に関する研究は、院生・OBを含めて研究室の総力を上げて、精力的に継続されてきており、今後も研究室の重要な活動として進められていくと予想される。

ニ) 研究の体系性

出土資料の研究は、昨年末より上海博物館蔵戦国楚簡が逐次公表されつつあるように、現在も新たな資料の発見が続いている。湯浅教授は、個々の出土資料を分析するとともに、それが従前組み立てられてきた古代中国思想史にどのような変更を迫るのかについても研究してきており、院生による『孝経』の研究なども含め、将来その成果を踏まえた思想史の再構築といった方向に進むものと予想される。また「懷徳堂文庫」に関する研究は、湯浅教授及び院生・OBが貴重図書の整理と公開の作業を行いながら、個々の文献に対する研究成果を数多く発表してきている。こうした研究活動が蓄積されていけば、将来懷徳堂の学問の全容解明が進み、京都の古義堂との比較などを通じて、江戸時代の思想史に占める懷徳堂の意義が再評価される方向に体系化していくものと予想される。

ホ) 研究の波及性

出土資料の研究は、これまで通説となってきた古代中国思想史の大幅な書き換えを要求する。この思想史の再構築は、古代東洋史の分野にも大きな影響を及ぼすであろう。また出土資料の中には、『詩経』や賦、音楽に関する文献などが含まれており、これらに対する研究の進展は、中国文学の分野における研究の発展にも大きく寄与するであろう。さらに出土資料は秦の始皇帝の文字統一以前の古代文字で記されており、その解読を通じて獲得された知見は、文字学の分野にも大きな進展をもたらすと予測される。また「懷徳堂文庫」に関する研究の蓄積は、京都の伊藤仁斎・東涯父子による古義堂の学問や、江戸の荻生徂徠による古文辞学との精密な比較を可能にする可能性を秘めており、日本思想史の分野における研究の進展に対しても、多大の寄与をするものと予測される。

ヘ) 教官組織としてのまとめ

中国哲学研究室では、学術雑誌『中国研究集刊』を年に二度発行していて、院生・OBの論文が多数掲載され、研究活動に重要な役割を果たしている。また『懷徳堂事典』の刊行に際しても、院生・OBが多くの項目を分担執筆している。こうした状況から、湯浅教授を中心に研究室が組織的に活動を継続して、大きな成果を上げていると判断できる。ただし、取り組んでいる研究活動が幅広く、活動量が極めて多いにもかかわらず、教官が湯浅教授一人である点は、マンパワーの面でやはり弱体であるとの印象を免れない。早急に助教授を補充して、これまで進めてきた研究活動をより強力に持続できる体制を作るべきであろう。また懷徳堂に関わる研究活動を安定的に持続させるために、懷徳堂センターに専任のスタッフを配置するといった取り組みも必要であろう。

3-5 インド学・仏教学*

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

教育活動としては、インド学・仏教学研究の基礎となる原典を正しく理解する能力を養うために、サンスクリット語やパーリ語などの古典インド諸文献を精密に読解する演習が中心である。授業内容は、榎本がインド思想史概説を講義、普通演習としてパーリ語やサンスクリット語文献を輪読、論文作成演習でヴェーダ・初期仏教経典・戒律・アビダルマ・初期大乘経典・唯識・ジャイナ教・医学・法典など幅広い分野の研究指導を行ってきた。また、前職の井上助手は叙事詩やドイツ語の研究書を、現職の天野助手はヴェーダ文献を学生と輪読した。非常勤講師からは、各自が専門とするヴェーダ・中観・唯識ジャイナ教・ヒンドゥー教・医学・中国仏教文献・古典チベット語など広範な分野の教育を受けた。

研究活動の概要は業績表から知れようが、その特色として、本専門分野ではインド学の一環として仏教学を位置づけ、仏教研究を広く当時のインド思想全体の視点から研究し、仏教以外のインド学を研究するものも仏教文献を積極的に活用していることが挙げられる。これは同時に本専門分野の教育方針の根幹ともなっている。本専門分野の国内最大の学会は「日本印度学仏教学会」と称するように、本専門分野においてもインド学と仏教学を切り離すことなく、内外の最先端の研究成果に沿った教育研究活動を実践している。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：榎本文雄

助手：天野恭子

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	3	4	0	0	0	2	0	0

※うち留学生1名、社会人学生2名

3. 修了生・卒業生（1997年度～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	2	1	0	0	0
'98	2	0	0	0	0
'99	1	2	2	0	1
'00	1	1	0	0	0
'01	0	2	0	0	0
計	6	6	2	0	1

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	0	0	0
'01	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者，題目，審査教官等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等の 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	1	0	0	0	0	1
'99	0	1	0	0	0	1
'00	2	0	0	0	0	2
'01	1	0	0	0	0	1
計	4	1	0	0	0	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	0	0	0	0	0	0
'99	0	0	0	0	0	0
'00	0	1	0	0	0	1
'01	0	0	2	0	0	2
計	0	1	2	0	0	3

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 福井 真 「Sukhāvātīvyūha（梵文無量寿経）の研究——流通偈を中心にして——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第32号哲学篇, 1998.
- 福井 真 「Sukhāvātīvyūha『梵文無量寿経』東方偈の研究——ekajātipratibaddhaを中心にして——」, 『教学研究紀要』第7号, 1999.
- 福井 真 「Sukhāvātīvyūha（梵文無量寿経）, 東方偈の研究」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第35号哲学篇, 2001.
- 河崎 豊 「apadāna / avadāna について」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第34号哲学篇, 2000.
- 河崎 豊 「初期仏教経典における avadāna」, 『印度学仏教学研究』49巻1号 [通巻第97号], 2000.

(2) 口頭発表

- 河崎 豊 「初期仏教経典における avadāna」, 日本印度学仏教学会第51回学術大会, 東洋大学, 2000年9月2日.
- 大島卓也 「Vādhūla-Anvākhyāna 2.2」, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「ヴェーダ後期の言語と宗教」, 2001年9月28日.
- 大島卓也 「Vādhūla-Anvākhyāna 2.3」, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「ヴェーダ後期の言語と宗教」, 2001年10月12日.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 1 名

<内訳>

PD: 1名

DC: 0名

外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 2 名

PD: 1名

DC: 1名

<留学先>

ハーヴァード大学, フライブルク大学

6. **専門分野出身の研究者**（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）

計 1 名

<内訳>

1999年度 天野恭子（D 中退） 大阪大学大学院文学研究科 助手

7. **専門分野出身の高度職業人**（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 1 名

<内訳>

'97年度：1名 '98年度：0名 '99年度：0名 '00年度：0名 '01年度：0名

専門分野の性格から、研究者を志望するものが多く、高度職業に就いている者は少数である。

1名が進学塾にて英語の指導をしている。

<主な職業名・就職先等>

塾講師（英語）

8. **客員研究員等の受け入れ状況**

なし

9. **外国人研究者の受け入れ状況**

なし

10. **刊行物**

なし

11. **学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況**

なし

12. **専門分野主催の研究会等活動状況**

1998年4月～4ヶ月に1回「中央アジアフォーラム」（阪大東洋史研究室と合同で主宰）

13. **組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価**

インド学・仏教学の研究にはインド語原典の精密な理解が基礎となる。したがって、大学院のインド学・仏教学専門分野はもとより、学部のインド哲学専修の授業においても、サンスクリット語の原典を読解する演習が授業の中心となる。ゆえに、本専門分野や本専修の学生はサンスク

リット語の初級を習得していることが不可欠である。ところが、インド哲学以外の専修の学生は全て共通教育において専修での勉学に最低限必要な語学を習得しているが、インド哲学専修に必須のサンスクリット語は共通教育科目には存在しない。しかし、共通教育科目にサンスクリット語を導入することは現状では不可能である。したがって、文学部の外国語科目枠の授業科目としてサンスクリット語を開講することが本専門分野と本専修の存続に不可欠である。

文学研究科の諸専門分野の大部分には研究対象が隣接する他の専門分野があるが、本専門分野にはそれがない。本専門分野の研究対象とたまたま個人的なレベルで関係する教官が本研究科に現時点で数名在職するにすぎない。このため、本専門分野の学生は隣接する研究対象を体系的に学習する機会が少なく、それが他大学のインド学や仏教学を専攻する学生に比べて大きなハンディキャップとなっている。このハンディキャップを少しでも解消するため、他大学において隣接する諸分野を対象とするさまざまな研究者から非常勤講師という形で授業を受けており、それによって本専門分野はかろうじて存立しているというのが現状である。しかし、その非常勤講師数は、文学研究科全体としても、他の八大学に比べて極めて少ない。これでは世界的に突出した研究成果を生み出す研究者を育成するどころか、他大学に伍する教育レベルを維持することも容易でない。

また、本専門分野には隣接する専門分野がないことから、本専門分野に分配される予算によって隣接する諸分野の図書まで購入する必要が生じる。そのため、学術雑誌の刊行などの学術活動に充てる経済的な余裕が本専門分野にはないことも遺憾である。

しかし、このように経済的な余裕がないため、本専門分野では教育方法を工夫している。その一例を挙げると、本専門分野の論文作成演習では学生が全員参加し、発表者は前もって完全原稿を参加者全員に配布する。よって、授業当日は、発表者の説明の時間が省け、参加者全員が準備してきた確実な論拠に基づく質疑応答と討議が充分に行える。本専門分野ではこのように教育方法を工夫することで、授業の効率化と独創的な研究に充てる時間の増大を図り、国際的な議論の場にも対応しうる優れた人材の養成に資することを期している。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 専門分野所属の教員による論文発表等 (1997年度～2001年度の過去5年間)

1-1. 論文

Fumio ENOMOTO “Sanskrit Fragments from the Saṃgītanipāta of the *Samyuktāgama*”, *Bauddhavidyāsudhākaraḥ: Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday*, Indica et Tibetica Verlag, pp. 90–106, 1997.

榎本文雄 「『根本説一切有部』と『説一切有部』」, 『印度学仏教学研究』第47巻第1号, pp. 392–400, 1998.

榎本文雄 「度梵志経」, 落合俊典(編)『中国日本撰述経典(其之四)・漢訳経典』, 大東出版社, pp. 531–542, 1999.

榎本文雄 「本行六波羅蜜経」, 落合俊典(編)『中国日本撰述経典(其之四)・漢訳経典』, 大東出版社, pp. 543–554, 1999.

Fumio ENOMOTO “‘Mūlasarvāstivādin’ and ‘Sarvāstivādin’”, *Vividharatnakaraṇḍaka: Festgabe für Adelheid Mette*, Indica et Tibetica Verlag, pp. 239–250, 2000.

Fumio ENOMOTO “The Discovery of ‘The Oldest Buddhist Manuscripts’”, *The Eastern Buddhist*, 32-1, The Eastern Buddhist Society, pp. 157-166, 2000.

榎本文雄 「『雑阿含経』の訳出と原点の由来」, 『石上善応教授古稀記念論文集』, 山喜房佛書林, pp. 31-41, 2001.

井上信生 「仏典・叙事詩・プラーナにおける世界の終末」, 『日本仏教学会年報』62, pp. 1-12, 1997.

井上信生 「Mahābhārata VI 5-13の世界観」, 『待兼山論叢』第31号哲学篇, pp. 43-53, 1997.

井上信生 「Carā-cara or Cara-acara」, 『インド思想史研究』10, pp. 53-58, 1998.

1-2. 著書

榎本文雄 『真理の偈と物語——『法句譬喻経』現代語訳』（共著：榎本文雄／神塚淑子（名古屋大学）／菅野博史（創価大学）／末木文美士（東京大学）／松村巧（和歌山大学）／引田弘道（愛知学院大学））, 大蔵出版社, 620p., 2001.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 解説

石井公成／榎本文雄 「シンポジウム：インド学仏教学におけるコンピュータ利用の現状と展望」, 『印度学仏教学研究』50巻2号, pp. 755-759, 2002.

(2) 辞典項目

榎本文雄 「ゴータマ・ブツダ」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 528-530, 1998.

榎本文雄 「阿含経」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 14-15, 1998.

榎本文雄 「原始仏教」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 456-457, 1998.

榎本文雄 「五蘊」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 508-509, 1998.

榎本文雄 「サンスカーラ」, 『岩波哲学・思想事典』, 岩波書店, pp. 590-591, 1998.

1-4. 口頭発表

(1) 国内学会

井上信生 「Brahmā 神の現世関与の様態——Mahābhārata 3.185および3.277より——」, 単独, 平成10年度日本仏教学会学術大会, 高野山大学／和歌山県高野町, 1998年10月4日.

天野恭子 「マイトラーヤニー・サンヒターにおける代名詞 esá-/etáの使用法」, 単独, 平成13年度インド思想史学会学術大会, 京大会館／京都府京都市, 2001年12月15日.

(2) 研究会

榎本文雄 「インド宗教における自然観」, 単独, 大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野共同研究「自然の中の人間」, 大阪大学／大阪府豊中市, 2000年3月16日.

井上信生 「Rājadharmānuśāsanaparvan 87-89」, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「インド文化史の諸問題」, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 1998年5月8日.

井上信生 「Rājadharmānuśāsanaparvan 87-89」, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「インド文化史の諸問題」, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 1998年5月22日.

井上信生 「Rājadharmānuśāsanaparvan 87-89」, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「インド文化史の諸問題」, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 1998年6月5日.

天野恭子 「Vādhūla-Anvākyana 2.4」, 単独, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「ヴェーダ後期の言語と宗教」, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 2001年11月9日.

天野恭子 「Vādhūla-Anvākyana 2.5」, 単独, 京都大学人文科学研究所共同研究班研究会「ヴェーダ後期の言語と宗教」, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 2001年11月30日.

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

なし

2. その他の外部資金の受け入れ状況

三島海雲記念財団学術奨励金 榎本文雄「『雑阿含経』のインド語原典の復元」50万円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

榎本文雄	日本印度学仏教学会	理事	1996年4月から、現在に至る。
	日本仏教学会	理事	1996年4月から、現在に至る。
	パリ学仏教文化学会	理事	1999年4月から、現在に至る。
	インド思想史学会	評議員	1997年4月から、現在に至る。
	仏教史学会	委員	1983年11月から、2000年10月まで。

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

榎本文雄 教授

1学期	インド哲学史特殊演習	Sanskrit 文献特殊研究1
2学期	インド哲学史特殊演習	Sanskrit 文献特殊研究2
1学期	インド哲学史演習	Sanskrit 文献研究1
2学期	インド哲学史演習	Sanskrit 文献研究2
1学期	インド学博士論文作成演習	インド思想の諸問題1
2学期	インド学博士論文作成演習	インド思想の諸問題2
1学期	インド学修士論文作成演習	インド思想の諸問題1
2学期	インド学修士論文作成演習	インド思想の諸問題2
1学期	仏教文献学特殊演習	Pali 語文献特殊研究1
2学期	仏教文献学特殊演習	Pali 語文献特殊研究2
1学期	仏教文献学演習	Pali 語文献研究1
2学期	仏教文献学演習	Pali 語文献研究1
1学期	仏教学博士論文作成演習	インド仏教の諸問題1
2学期	仏教学博士論文作成演習	インド仏教の諸問題2
1学期	仏教学修士論文作成演習	インド仏教の諸問題1
2学期	仏教学修士論文作成演習	インド仏教の諸問題2

船山 徹 講師(非常勤講師・京都大学人文科学研究所)

1学期	仏教学特殊演習	漢文仏典精読
1学期	仏教学演習	漢文仏典精読

室寺義仁 講師（非常勤講師・高野山大学）

1 学期 仏教学演習 インド・チベット仏教文献学のための古典チベット語入門

1 学期 仏教学特殊演習 インド・チベット仏教文献学のための古典チベット語入門

梶原三恵子 講師（非常勤講師）

2 学期 インド哲学演習 アタルヴァヴェーダ研究

2 学期 インド哲学特殊演習 アタルヴァヴェーダ研究

2. 学部授業担当

榎本文雄 教授

2 学期 インド哲学史講義 インド思想史概説

1 学期 仏教学演習 パーリ語文献研究 1

2 学期 仏教学演習 パーリ語文献研究 2

2 学期 インド文化学演習 サンスクリット初級講読

1 学期 インド哲学史演習 サンスクリット文献研究 1

2 学期 インド哲学史演習 サンスクリット文献研究 2

1 学期 仏教学演習 論文作成指導 1

1 学期 インド哲学演習 論文作成指導 1

2 学期 インド哲学演習 論文作成指導 2

2 学期 仏教学演習 論文作成指導 2

船山 徹 講師（非常勤講師・京都大学人文科学研究所）

1 学期 仏教学演習 漢文仏典精読

室寺義仁 講師（非常勤講師・高野山大学）

1 学期 仏教学演習 インド・チベット仏教文献学のための古典チベット語入門

梶原三恵子 講師（非常勤講師）

2 学期 インド哲学演習 アタルヴァヴェーダ研究

3. 共通教育授業担当

榎本文雄 教授

Ⅲセメスター 専門基礎教育科目 インド学基礎

4. 他大学大学院における講義等

榎本文雄 教授

2000年度 通年 関西大学大学院文学研究科 比較宗教学特殊研究 講義

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：後藤敏文（東北大学大学院文学研究科教授）

「インド学仏教学」の分野では、古くから国際的な視野と自覚の下に研究が行われているが、大阪大学もその一員であり、現在では重要な位置にある。インド学は19世紀のドイツを中心に開花した文献学的方法を中核に成果を蓄積してきた。古代インドの言語文化は、所謂アジアとは大

大きく異なる背景をもっておりながら、同時に東・東南アジアへ広がる仏教を生み出す基盤ともなった。このような位置からも推測できるように、地味な分野でありながら人文科学諸領域の中で重要な貢献を為してきた。言語学、宗教学、人類学等の分野で指導的役割を果たした研究者の中にインド学出身者が多かったことは偶然ではない。

しかし、インド学仏教学の現在は楽観できない。これまで蓄積してきた成果は基礎作業にあたり、ヴェーダの宗教文献、仏典の成立、仏教の教理、ジャイナ教やヒンドゥー教の展開をはじめインドの社会・思想・歴史の問題を証拠に基づいて検証・議論すべき段階に達したばかりである。近年盛んな現地研究の成果と照合する作業もこれからである。しかし、基盤部分が一通り整備されつつある今日、世界中で研究への動機付けが急に下降してきた。原因は研究の行き詰まりや人材不足にあるのではなく、むしろ世代交代の失敗、現教授層の能力不足と歴史意識・責任感の欠如によるところが大きい。また、もはやドイツ中心の時代ではなく、今後は我が国が受け継いで発展させてゆくべき課題も多い。そうした中で、現大阪大学のインド学・仏教学は正統の火を燃やし続けているように思われる。特に、ヴェーダ文献から仏教興起時代に懸けての展開を中心に据えているのは誇るべき見識である。教授は初期仏教文献、漢訳仏典に通じ、国際的に知られた研究者である。日本仏教の分野でも貴重な発言を続けている。先行する婆羅門教のヴェーダ文献に対する理解も深く、後の叙事詩・法典・医学書などへの目配りにも怠りない。仏教成立の事情を研究するには、難分野であるジャイナ教典研究が欠かせないが、この分野でも業績を挙げており、大学院生の中に後進も育ちつつある。仏教研究に新展開をもたらしつつあるアフガニスタン出土の新資料研究にもいち早く参加している。研究を支えているのは、常に原典に基づいて議論を組み立てる堅実な文献学的手法である。現大学院生は、数は少ないものの、インド精神文化の中核と仏教理解とに正面から光を当てる分野に散らばっており、やがて大きな像を結ぶことが期待される。関西一円には専門研究者が多いにも拘わらず方向付けを欠いており、大阪大学にはこれらの力を集結する役割が期待される。

大阪大学が中核に据える文献学的方法は、すぐに目立つ成果を発信するものではないが、人類の知的財産を確実に増し、信頼できる材料を発掘し蓄積する基礎学問である。我々が歴史を議論することができるのは、こうした基礎学問のお陰である。大阪大学がこの姿勢と方法とを堅持し、次代へ繋げてゆくことは、中・長期的に見て大学の戦略としても得策であろう。ただし、学部教育については、より柔軟な啓蒙的コースが必要に思われる。

大学院生は積極的に学会発表等をこなしている。今後、博士論文完成への設計図をしっかりと描き、学会発表を効率よく組み立てる工夫が一層望まれる。出身研究者も育ってきている。最近ハーヴァード大学とフライブルク大学とに博士論文が提出されたことは、研究室の底力を示している。さらに、助手経験者がハーヴァード大学で研究中である。

大阪大学の文学研究科には、東洋史、日本仏教史、東洋美術史に関連分野の専門家がおり、イ

インド学の現員は良く連携を保っている。特に、中央アジアの専門家を有する点は大阪大学の利点であるが、「中央アジアフォーラム」への参加は、羨ましい状況を作っている。他方、印欧語歴史言語学や、西洋古典学、聖書学、宗教学等の中で直接関連する領域の専門家を欠くことは、インド古典文献学の訓練を維持する上で不利である。この分野での基本的図書の整備にも専門教員の存在が欠かせないが、少なくとも非常勤講師や図書専門員を置くことにより改善が図られれば、文学研究科全体の未来にとって財産となろう。「インド学・仏教学」が哲学系の分野に属していることには歴史的背景があろうが、不利な制約があるかも知れない。文学部の諸領域をより合理的な理念の基に再構築する必要はどの大学にも共通する課題であるが、その中で、解決されるべき問題があるように思われる。

例えば中国研究については、哲学、歴史（古代～現代）、言語、文学、美術に亘って専門家があり、場合によっては、社会学や経済史の専門家もいる。インド研究の場合には全て「インド学」一つに訓練が委ねられる。そうした中で、大阪大学のインド学仏教学が主要原典の文献学的研究に的を絞っていることは正当である。インドの文献・文化史の性格から、古い原典を取り上げる方が訓練として相応しく、国内の大規模なインド学講座がともすれば文献学的訓練の場として機能していないだけになおさらである。これまで育ってきた人材を、些末な議論の袋小路から出ない「インド哲学」や主観的な仏教理解、輸入紹介の営みの陰に消えさせてはならない。

大阪大学のインド学・仏教学最大の課題はスタッフの充当・拡大と学生数の確保であろう。現在助教授職が空いているが、良い人材があれば速やかに埋めるべきである。しかし、大阪大学は事実上連鎖の頂点の一つにあり、現制度下では一度の決定はその後長期に亘る固定を意味する。他方、大阪大学が今の正統な針路を発展させてゆくことは、インド学仏教学全体にとっての重大事である。インド学のあるべき姿について展望と方向性とをもち、確実に伝授可能な文献学的訓練を経た人材が必要であり、専門分野の内外に説得力を持つ公明な人事が望まれる。広く人材を募るか探すか、インド学全体に関わる本質的な主題を扱う若手の中から、分野を限らず最優秀な者を採用する勇気が必要と思われる。（仮に期限付きの職を設けて2名を採用できるとすれば、一気にインド学の一センターとなる可能性がある。）

学生数と学位授与件数の少なさは改善されるべき課題である。ただし学生数確保の為に安易な方策を採るべきではない。地道な努力はやがて知られるところとなり、後になって効果が出るものである。近くの大規模国立大学の対応する研究室は、現有4名、定員6名に1名の外人教官を有し、更に研究所に3～4名の専門家があり、非常勤講師の数でも比較を絶した好条件にあるが、挙げている業績と学生数、学位授与数およびその内実とを考えれば、大阪大学は、質と効率の面で、少なくとも引けを取るものではない。現在の努力を続け、他大学出身者を大学院に積極的に迎え入れるよう努めるべきである。その為には、日本全体の人的流動性を高める必要があるが、できるところから手を付けざるを得ない。具体的には、同程度の規模の大学院間で大学院生の交

流を図り、訓練の相互分担を図るような工夫が必要である。研究会等の実績を見ると、京都大学の研究所が主催する研究会への参加が目立つが、今後は大阪大学でも研究会を組織する必要があるだろう。また、集中講義や研究セミナーのような機会がより多く与えられれば、大阪大学にとっても、大阪大学のスタッフから教えを受けたい他大学の研究者にとっても望ましい。他大学の学生・研究者たちも協力を惜しまない筈である。大阪大学の学生が運営するホームページからは情熱と潜在能力とが伝わり、また、具体的情報に富んでいる。こうした努力も将来実を結ぶこととなるだろう。大阪大学がこの分野を「インド学・仏教学」と名乗っていることは、既にメッセージとなっているが、世界の多くの先人たちの努力の上に立つこの営為の発展にとって、大阪大学は一拠点となるべき使命を担っていると確信する。

3-6 日本学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

日本学研究室の源流は、1974年の日本学専攻の開設にさかのぼるが、その後の組織改変を経て、近年は、ふたつの学問的特色を備えてきた。ひとつは、日本という地域の歴史や、文化、思想を孤立した特殊なもの、あるいは自明なものとしてみるのではなく、一国史・単一文化の枠を突破しようとする点である。

いまひとつは、既存のディシプリンをふまえつつ学際的な研究方法を意識的に追求する点である。この点については、教官・院生が所属し研究報告をおこなう学会の多様性に示されている。例をあげてみよう。日本民俗学会、日本民族学会、日本宗教学会、日本女性学会、日本思想史学会、日本社会学会、解放社会学会、女性史総合研究会、日本史研究会、日本移民学会、社会思想史学会、「女性・戦争・人権」学会、「宗教と社会」学会、口承文芸学会、近代女性史研究会、芸能史研究会、朝鮮史研究会、在日朝鮮人研究会、等々。

日本学研究室は、このような特色を生かすために、多彩なアプローチの掘り下げを促すとともに、それらの意識的な交錯を保証するような教育研究体制を組んでいる。とりわけ全教官が出席し、院生がタコツボ型の研究に陥らず、多分野の研究状況から刺激を得て論文を練り直す場としての「日本学研究方法論演習」は、日本学研究室の教育・研究活動を象徴的に表現するものである。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 3 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：中村生雄 川村邦光 杉原 達
助教授：富山一郎 荻野美穂
助手：真鍋昌賢

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
69	17	32	0	0	0	3	2	0

※うち留学生 6名, 社会人学生 5名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	21	6	3	3	2
'98	15	5	5	2	1
'99	24	5	3	1	1
'00	12	7	3	2	1
'01	14	3	2	3	0
計	86	26	16	11	5

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	1	2	3
'98	2	0	2
'99	1	0	1
'00	2	0	2
'01	3	0	3
計	9	2	11

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

1997年度

川森博司 「日本昔話の構造と表現の研究」, 論文博士, 1997年4月, 主査 小松和彦 副査 中村生雄・荒木浩

川上郁雄 「在日ベトナム人社会の研究」, 論文博士, 1997年12月, 主査 杉原達 副査 中村生雄・土岐哲・桃木至朗

金 容儀 「韓日昔話の比較研究——近代教科書に語られた「瘤取り爺」譚を中心に——」, 課程博士, 1998年3月, 主査 中村生雄 副査 川村邦光・川森博司・小松和彦（国際日本文化研究センター）

1998年度

菊地 暁 「〈あえのこと〉のこと——近代日本民俗誌システムの探求——」, 課程博士, 1999年3月, 主査 中村生雄 副査 川村邦光・富山一郎

朴 己煥 「近代日韓文化交流史研究—韓国人の日本留学—」 課程博士, 1999年3月, 主査 杉原達 副査 中村生雄・富山一郎

1999年度

金津日出美 「国民国家形成期の性差の言説——〈生殖〉の管理・統制と〈生殖〉の科学——」, 課程博士, 2000年3月, 主査 杉原達 副査 川村邦光・富山一郎

2000年度

宋 秀環 「日本帝国植民地・台湾における原住民の文化支配——青年団政策を中心として——」, 課程博士, 2000年7月, 主査 川村邦光 副査 杉原達・富山一郎

盛田良治 「日本社会科学と植民地アジア」, 課程博士, 2001年3月, 主査 杉原達 副査 中村生雄・富山一郎

2001年度

表 智之 「物言わぬモノ、モノ語る人——19世紀日本の古物趣味と歴史認識をめぐって——」, 課程博士, 2001年11月, 主査 中村生雄 副査 川村邦光・富山一郎

真鍋昌賢 「浪曲師の歴史-社会的位相の研究——<芸人知>の民俗学的研究にむけて——」, 課程博士, 2001年11月, 主査 川村邦光 副査 荻野美穂・中村生雄・富山一郎

六車由実 「人身御供祭祀論」, 課程博士, 2002年3月, 主査 中村生雄 副査 川村邦光・富山一郎

2. 大学院生等による論文発表等の件数

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	1	8	3	6	1	19
'98	4	8	4	0	0	16
'99	5	9	1	1	0	16
'00	4	9	4	2	2	21
'01	5	9	1	1	0	16
計	19	43	13	10	3	88

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	1	4	1	0	0	6
'98	0	6	0	0	3	9
'99	1	10	4	0	0	15
'00	0	16	8	0	4	28
'01	0	13	18	0	3	34
計	2	49	31	0	10	92

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

兪（浅川）晃広 「東ティモールにおけるナショナリズムの展開——カトリック教会の役割を中心に——」, 『比較日本文化研究』第4号, 1997年.

浅川晃広 「ポーリン・ハンソン論争——社会変動期のオーストラリアにおける人種論争——」, 『オーストラリア研究紀要』第23号, 1997年.

浅川晃広 「日本における帰化制度——在日コリアン家族の事例——」, 『コリアン・マイノリティ研究』第3号, 1999年.

浅川晃広 「オーストラリアにおける移民定住団体助成制度——多文化主義政策との関連で——」, 『オーストラリア研究』第12号, 1999年.

浅川晃広 「多文化主義におけるアイデンティティ——在豪ティモール人の事例をてがかりに——」, 『日本学報』第19号, 2000年.

浅川晃広 「戦後日本国籍取得者の概要——帰化許可官報告示の分析——」, 『日本学報』第20号, 2001年.

- 浅川晃広 「移民国家オーストラリアにおける市民権——市民権法の改正過程を中心に——」,『神戸市外国語大学・外国学研究——グローバル化と民主主義——』第50号,2001年.
- 浅川晃広 「明治国籍法の歴史的意味——帰化の設定をめぐって——」,『移民研究年報』第7号,2001年.
- 伊賀みどり 「助産院出産の現在——大阪のある助産院の『お産の記録』の分析——」,『日本学報』第19号,2000年.
- 伊賀みどり 「開業助産婦の出産観——自伝と伝記の分析より——」,『日本学報』第20号,2001年.
- 伊賀みどり 「母乳哺育の文化史序説——『乳揉みさん』の活躍した頃——」,『女性学年報』第22号,2001年.
- 石附 馨 「ヤマト嫁の語りにもみる“沖縄戦の記憶”」,『日本学報』第21号,2002年.
- 伊藤 遊 「『自分』の〈日常生活〉を「書く」ということ——『郷土研究』再考あるいは自分史方法論研究序説——」,『日本学報』第20号,2001年.
- 岩屋さおり 「炭鉱労働における女性労働者の排除の正当化——女性労働者の坑内労働廃止をめぐって——」,『待兼山論叢 日本学篇』第31号,1997年.
- 岩屋さおり 「労働者保護規定と女性炭鉱労働者」,『日本学報』第17号,1998年.
- 内海 顕 「タンゲン・タンゲンガン儀礼の33年——バリ島の村落における儀礼の民族——」,『南方文化』第24号,1997年.
- 内海 顕 「インドネシアのバリ島の赤米・黒米の現状」,『赤米に魅せられて』(図書,窓映社),1997年.
- 内海 顕 「赤米復活—赤米信仰の発生をめぐる一考察——」,『日本学報』第17号,1998年.
- 内海 顕 「変わりゆく環境,変わらない風景——バリ島における現実の稲作と描かれた稲作——」,『民族芸術』第14号,1998年.
- 内海 顕 「トゥルナ・ニョマン——バリ島,トゥングナン・プグリンシンガン村の若者組修行課程——」,『季刊民族学』第23巻第2号,1999年.
- 内海 顕 「バリ絵画の美術史——その諸特質および文化・社会的背景の回顧と分析そして展望——」,『民族芸術』第17号,2001年.
- 宇野田尚哉 (学振 PD)
「武士道論の成立——西洋と東洋のあいだ——」,『江戸の思想』第7号,1997年.
- 表 智之 「19世紀日本の〈考証家〉と度量衡研究」,『日本経済思想史研究会会報』第7号,1997年.
- 表 智之 「〈歴史〉の読出し/〈歴史〉の受肉化——考証家の19世紀——」,『江戸の思想』第7号,1997年.
- 表 智之 「19世紀日本における〈歴史〉の発見——屋代弘賢と〈考証家〉たち——」,『待兼山論叢 日本学篇』第31号,1998年.
- 表 智之 「古印と考証—「漢委奴国王」印問題をめぐって——」,『日本思想史研究会会報』第17号,1998年.
- 香川雅信 「人種・玩具・写真—三越児童用品研究会における人類学の「応用」——」(発表要旨:待兼山比較日本文化研究会第3回研究会),『比較日本文化研究』第4号,1997年.
- 香川雅信 「『障り信仰』の論理あるいは非—論理(1)」,『四国民俗』第31号,1998年.
- 香川雅信 「徳島の犬神憑き」,『精神医学』第40巻第11号,1998年.
- 香川雅信 「坪井正五郎の玩具研究——趣味と人類学的知——」,『比較日本文化研究』第5号,1998年.
- 金津日出美 「〈日本産科学〉の成立——起源の「発見」と賀川流産科学——」,『江戸の思想』第6号,1997年.
- 金津日出美 (学振 PD)
「戦前立命館における「学校衛生」制度——立命館医務局の活動を中心に——」,『立命館百年史紀要』第6号,1998年.
- 金津日出美 (学振 PD)
「構成される「日本婦人」と骨盤への視線」,『懐徳』第67号,1999年.
- 川越道子 「語りの現場に関する一考察」,『日本学報』第19号,2000年.

- 川越道子 「『多文化共生』の経験——神戸市長田のケミカルシューズ産業の現場から——」,『日本学報』第21号,2002年.
- 金城正樹 「『恥さらし』の名付けと名乗り——金城馨さんとの対話より文化を考える——」,『けーし風』第30号,2000年.
- 才津祐美子 「そして民俗芸能は文化財になった」,『たいころじい』第15号,1997年.
- 才津祐美子 「『民俗文化財』とは何か」,『国際亜細亜民俗学』第2号,1998年.
- 才津祐美子 「秋夜の火祭り・福江ねぶた——青森ねぶたの移入と定着——」,『比較日本文化研究』第5号,1998年.
- 才津祐美子 「『南方』系という語り」,『日本学報』第18号,1999年.
- 才津祐美子 「錯綜する語りの中で——民俗芸能／文化財／観光資源としての『念仏踊』オーモンデー——」,『国立歴史民俗博物館研究報告』第91号,2001年.
- 全 成坤 「在日韓国人高齢者に関する一考察——養護老人ホームを事例として——」,『待兼山論叢 日本学篇』第33号,1999年.
- 全 成坤 「崔南善における檀君神話の発見と親日派の再解釈」,『日本学報』第21号,2002年.
- 高原幸子 「ジェンダーと開発——アマルティア・センのエンタイトルメント概念をめぐる——」,『日本学報』第18号,1999年.
- 高原幸子 「タイ少女買売春防止 NGO の活動より」,『女性・戦争・人権』第3号,2000年.
- 高原幸子 「タイ女性をとりまく法的言説——桑名事件をめぐる事件性——」,『解放社会学研究』第16号,2002年.
- 中村 平 「原住民族高齢者の日本的“教化”経験に対する解釈——タイヤルとブヌン族を例——」,『中華民国第一回人類学・相関領域大学院生論文発表会論文集』,2000年.
- 中村 平 「国民教育・戦争動員・植民の記憶——日本統治末期タイヤル人の国家意識——」,『フィールドワーク解釈:人類学新世代論文集』,2001年.
- 中本剛二 「医療現場における他者性の変容——ターミナル・ケアをめぐる医療人類学的考察——」,『日本学報』第20号,2001年.
- 成定洋子 「『オナリ神信仰』再考——フェミニスト人類学的視点から——」,『日本学報』第19号,2000年.
- 畑中小百合 「『癒し』の構造——現代日本の『病』と『治療』をめぐる——」,『日本学報』第18号,1999年.
- 畑中小百合 「1950年代の学校劇運動の展開——生活綴方運動とのかかわりから——」,『日本学報』第21号,2002年.
- 花森重行 「反娼省小説としての——『帰去来』木田独歩における『連続』と『驚き』——」,『立命館大学言語文化研究』,第12巻3号,2001年.
- 花森重行 「国文学研究史についての一考察——1890年代の芳賀矢一をめぐる——」,『日本学報』第21号,2002年.
- 兵頭晶子 「『もの憑き』をめぐる諸言説についての一考察——十九世紀の民間世界への眼差し——」,『日本思想史研究会会報』第18号,2000年.
- 平野敬和 (三木信吾と共著)
「吉野作造の『朝鮮論』を読む」,『文化交流史研究』創刊号,1997年.
- 平野敬和 「日露戦争期の吉野作造」,『日本学報』第18号,1999年.
- 平野敬和 「総力戦体制下の政治思想」,『日本思想史学』第32号,2000年.
- 平野敬和 「帝国改造の政治思想——世界戦争期の吉野作造——」,『待兼山論叢 日本学篇』第34号,2000年.
- 藤本純子 「女性の『性』をめぐる眼差しの行方」,『日本学報』第20号,2001年.
- 藤本純子 「『少年』から見る虚構世界」,『物語の風俗』2001年号,2001年.
- 古川綾子 「桂文左衛門の転向——明治期落語の変容過程——」,『日本学報』第18号,1999年.
- 古川綾子 「明治期の大阪落語に関する一考察——1904年の改良運動をめぐる——」,『芸能史研究』第147号,1999年.

ヨルン・ボクホベン

「死霊祭祀における霊魂の扱い方——仏壇祭祀と霊魂観念——」, 『日本学報』第19号, 2000年.

ヨルン・ボクホベン

“Reflections on Origins of the Buddhist House Aitar”, *Japan Anthropology Workshop Newsletter* 33, 2000年.

松村浩二 (学振 PD)

「養生論的な身体へのまなざし」, 『江戸の思想』第6号, 1997年.

真鍋昌賢 「乃木さんのひとり歩き——浪花節にえがかれた日露戦後の庶民感情——」, 『説話・伝承学』第6号, 1998年.

真鍋昌賢 「戦時下における教育紙芝居の上演現場——口頭芸と国家の関係をめぐって——」, 『待兼山論叢 日本学篇』第32号, 1998年.

丸山泰明 「「癩」とヒロイン——近代におけるイメージの創出をめぐって——」, 『日本学報』第19号, 2000年.

丸山泰明 「神様の出兵に関する一考察——岩手県紫波郡の事例を中心に——」, 『待兼山論叢 日本学篇』第35号, 2001年.

水野 守 「志賀重昂「南洋」巡航と『南洋時事』のあいだ——世紀転換期日本の「帝国意識」——」, 『日本学報』第20号, 2001年.

六車由実 「『海上の道』はなぜ書かれたのか——固有信仰論前後の柳田国男——」, 『日本学報』第17号, 1998年.

六車由実 「それでも私たちが「柳田」を論じるのはなぜか——柳田のイデオロギー批判に対するリアクションとして——」, 『柳田国男の会研究報告集』第3号, 1998年.

六車由実 「「人身御供」と祭——尾張大国霊神社の儼追祭をモデルケースにして——」, 『日本民俗学』第220号, 1999年.

六車由実 (学振 PD)

「「人身御供」祭祀論序説——「食」と「性」, そして「暴力」——」, 『日本学報』第19号, 2000年.

六車由実 (学振 PD)

「人身御供を通してみる日本の稲作——祭祀における食物の役割——」, 『食文化助成研究の報告』第10号, 2000年.

六車由実 (学振 PD)

「人身御供と殺生罪業観その覚書」, 『東北学』第3号, 2000年.

村上和弘 「PCと日本語教育(1)——韓国における、PC上での日本語リテラシーにおける問題点と試案——」, 『日語日文学』第12号, 1999年.

村上和弘 「ネチケットとは——何か電子ネットワーク上での認識モデルに関する一考察——」, 『日本語文学』10, 2000年.

村上和弘 「PC上での日本語リテラシーのあり方について——韓国・蔚山大における実態調査より——」, 『名古屋大学 日本語・日本文化論叢』第8号, 2000年.

森 宣雄 「東アジアのなかの沖縄の日本復帰運動——台湾・沖縄・韓国の脱冷戦・民主化運動——」, 『インパクション』第103号, 1997年.

森 宣雄 「沖縄初期県政の挫折と旧慣温存路線の確立——旧慣温存論争の政治史面からの再検討——」, 『待兼山論叢 日本学篇』第32号, 1998年.

森 宣雄 「皇民たちの時代——戦時期からの現代史としての『近代日本の精神構造の社会史的研究——』平成9-11年度科学研究費補助金(基盤研究B1)研究成果報告書, 2000年.

森 宣雄 「琉球は「処分」されたか——近代琉球対外関係史の再考——」, 『歴史評論』第603号, 2000年.

森 宣雄 (富山一郎と共著)

「記憶に出会うということ——「台湾人の戦争展」——」, 『インパクション』120号, 2000年.

森 宣雄 「琉球併合と帝国主義, 国民主義」, 『日本学報』第20号, 2001年.

森 宣雄 (学振 PD)

(図書)『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』, 2001年.

盛田良治 「東畑精一における「植民政学」の展開」『日本学報』第17号, 1998年.

山 泰幸 「貨幣と他者性——貨幣の民俗学ノート——」, 『日本学報』第17号, 1998年.

(2) 口頭発表

伊賀みどり 「飛騨地方の婦人会活動——吉城郡宮川村の事例より——」(発表要旨: 日本民俗学会第50回年会), 『日本民俗学会50周年記念 第50回年会研究発表要旨』, 1998年.

伊賀みどり 「現代の助産院出産——大阪のある助産院の事例より——」(発表要旨: 日本民族学会第33回研究大会), 『日本民族学会第33回研究大会 プログラム 研究発表抄録』, 1999年.

伊賀みどり 「開業助産婦による出産の変容——助産の技術や妊産婦へのケアに注目して——」(発表要旨: 日本民俗学会第51回年会), 『日本民俗学会 第51回年会 研究発表要旨』, 1999年.

伊賀みどり 「出産の変容——開業助産婦による助産の技術とケア——」(発表要旨: 2000年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「東アジアにおける文化交流」ポスターセッション), 『2000年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウム 東アジアにおける文化交流——儒教思想と民間説話——』, 2001年.

伊賀みどり 「出産・母乳哺育の変容——「ちちもみさん」と助産婦に注目して——」(発表要旨: 日本民族学会第35回研究大会), 『日本民族学会 第35回研究大会 プログラム 研究発表抄録』, 2001年.

伊藤 遊 「自分史の方法論的研究」(発表要旨: 日本民俗学会51回年会), 『日本民俗学会第 51回年会 研究発表要旨』, 1999年.

伊藤 遊 「今和次郎の考現学」(発表要旨: 日本民俗学会52回年会), 『日本民俗学会第52回年会 研究発表要旨』, 2000年.

内海 顕 「ヴェトナム中部少数民族カトゥの生活」(発表要旨: 日本生活学会第25回秋期研究発表大会), 『生活学会報 第25回秋季研究発表梗概』, 1998年.

宇野田尚也 (学振 PD)

「近代漢学の成立」(発表要旨: 日本思想史学会平成9年度大会), 『日本思想史学会平成9年度大会報告要旨集』, 1997年.

宇野田尚也 (学振 PD)

「宗教意識と帝国意識——日清・日露戦間期の海老名弾正を中心に——」(発表要旨: 第6回日韓宗教研究者交流シンポジウム), 『(近代) 東アジアにおける「民族」と宗教——使命観をめぐって——』, 1998年.

宇野田尚也 (学振 PD)

「世紀転換期日本の帝国主義論」(発表要旨: 日本思想史学会平成10年度大会), 『日本思想史学会平成10年度大会報告要旨集』, 1998年.

表 智之 「風俗をめぐるダイアログ」(発表要旨: 日本思想史学会平成9年度大会), 『日本思想史学会平成9年度大会報告要旨集』, 1997年.

表 智之 「明治初頭期の古代像と江戸の古物趣味」(発表要旨: 日本思想史学会平成13年度大会), 『日本思想史学会平成13年度大会報告要旨集』, 2001年.

Hidemi Kanatsu “The Formation of Japanese Obstetrics: The “Discovery” of its Origin in the Kagawa School of Obstetrics,” (発表要旨: Association for Asian Studies, 52nd ANNUAL MEETING, in San Diego, USA (アジア学会大会)) “Association for Asian Studies, 52nd ANNUAL MEETING,” 2000年.

才津祐美子 「「民俗文化財」とは何か」(発表要旨: 第二回亜細亜民俗国際學術大會), 『第二回亜細亜民俗国際學術大會』, 1997年.

才津祐美子 「観光民俗学序説」(発表要旨: 第50回日本民俗学会年会), 『日本民俗学会50周年記念 第50回年会 研究発表要旨』, 1998年.

- 才津祐美子 「岐阜県白川村における「大家族制」と「合掌造り」の発見」(発表要旨：第27回秋季研究発表大会),『生活学会報 第27回秋季研究発表梗概』,2000年.
- 才津祐美子 「世界遺産を守るということ——「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」の活動を中心に——」(発表要旨：2000年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「東アジアにおける文化交流」ポスターセッション),『2000年度 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム 東アジアにおける文化交流—— 儒教思想と民間説話 ——』,2001年.
- 才津祐美子 「「文化」保存の在り方を問う——世界遺産・白川郷の事例から——」(発表要旨：日本民族学会第35回研究大会),『日本民族学会第35回研究大会 プログラム 研究発表抄録』,2001年.
- 才津祐美子 「「景観」の「再記憶化」——世界遺産・白川郷を事例として——」(発表要旨：日本民俗学第53回年会)『日本民俗学会第53回年会研究発表要旨』,2001年.
- 高原幸子 「ドメスティックバイオレンスと人権——タイ少女売春をめぐる——」(発表要旨：1999年度女性・戦争・人権学会)『女性・戦争・人権学会ニュースレター』第5号,1999年.
- 高原幸子 「ジェンダーと人権——A. K. センのエンタイトルメント概念をめぐる——」(発表要旨：1999年度社会思想史学会大会),『社会思想史研究』第24号,2000年.
- 中本剛二 「医療現場における他者——死にゆく者の,想像されるライフヒストリー,家族,儀礼——」(発表要旨：2000年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「東アジアにおける文化交流」ポスターセッション),『2000年度 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム 東アジアにおける文化交流—— 儒教思想と民間説話 ——』,2001年.
- 中本剛二 「医療現場における理想と場の相対化——病院と看護実践をめぐる医療人類学的研究——」(発表要旨：日本民族学会第35回研究大会),『日本民族学会 第35回研究大会 プログラム 研究発表抄録 2001』,2001年.
- 畑中小百合 「「癒し」の物語——からだどころの奇妙な関係——」(発表要旨：第50回日本民俗学会年会),『日本民俗学会50周年記念 第50回年会 研究発表要旨』,1998年.
- 畑中小百合 「身体と表現——雑誌「学校劇」を通して——」(発表要旨：日本民族学会第34回研究大会),『日本民族学会第34回研究大会 プログラム 研究発表抄録』,2000年.
- 畑中小百合 「表現する身体——学校劇の現場から——」(発表要旨：2000年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウム「東アジアにおける文化交流」ポスターセッション),『2000年度 国立歴史民俗博物館国際シンポジウム 東アジアにおける文化交流—— 儒教思想と民間説話 ——』,2001年.
- 畑中小百合 「身体へのまなざし——学校における”時代”認識の手段——」(発表要旨：日本民族学会第35回研究大会),『日本民族学会 第35回研究大会 プログラム 研究発表抄録 2001』,2001年.
- 兵頭晶子 「久米事件の「事件」性——神道学と歴史学の接点あるいは虚構——」(発表要旨：日本思想史研究会2001年度前期報告),『日本思想史研究会会報』第19号,2001年.
- 兵頭晶子 「「もの憑き」を語る言説——明治期精神医学における主題化とその交錯——」(発表要旨：日本思想史研究会2001年度夏合宿),『日本思想史研究会会報』第19号,2001年.
- 兵頭晶子 「「もの憑き」をめぐる近世——民俗の世界への眼差しとその位相——」(発表要旨：日本史研究会2001年度近世史部会),『日本史研究』第477号,2002.
- 平野敬和 「吉野作造のアジア」(発表要旨：1998年度日本思想史学会大会),『日本思想史学会大会要旨集』,1998年.
- 平野敬和 「総力戦体制下の政治思想」(発表要旨：1999年度日本思想史学会大会),『日本思想史学会大会要旨集』1999年.
- 古川綾子 「明治期の大阪落語の変容課程」(発表要旨：芸能史研究会例会),『芸能史研究』第145号,1999年.
- ヨルン・ボクホベン 「靈魂と聖なるものの封じ込め方」(発表要旨：日本宗教学会58回学術大会)『宗教研究』第323号,2000年.

ヨルン・ボクホベン

「仏壇の起源についての一考察」(発表要旨：日本宗教学会59回学術大会),『宗教研究』第327号, 2001年.

ヨルン・ボクホベン

「先祖祭祀における葬儀の意味と死霊の扱い方——墓と祭壇の役割——」(発表要旨：日本宗教学会第60回学術大会),『宗教研究』第331号, 2002年.

本多 彩 「アメリカの浄土真宗」(発表要旨：日本宗教学会第60回学術大会),『宗教研究』第331号, 2002年.

真鍋昌賢 「「語り物の消滅」をこえるための視点——職業的な口頭芸の分析にむけて——」(発表要旨：第51回日本民俗学会年会),『日本民俗学会第51回年会研究発表要旨』, 1999年.

丸山泰明 「戦時下における神の出現」(発表要旨：「宗教と社会」学会第8回学術大会),『「宗教と社会」学会ニューズレター』第27号, 2000年.

丸山泰明 「千人針を語ることば」(発表要旨：第53回日本民俗学会年会),『日本民俗学会第53回年会研究発表要旨』, 2001年.

水野 守 「初期政教社にみる帝国日本の意識——1889年条約条約改正問題における対応を手がかりに——」(発表要旨：2000年度日本思想史学会大会),『2000年度日本思想史学会大会研究発表要旨』, 2000年.

六車由実 「柳田民俗学の「固有信仰論」前後」(発表要旨：第49回日本民俗学会年会),『日本民俗学会第49回年会研究発表要旨』, 1997年.

六車由実 「『海上の道』はなぜ書かれたのか」(発表要旨：1997年度日本思想史学会),『1997年度日本思想史学会大会研究発表要旨』, 1997年.

六車由実 「人身御供譚と供犠——日本の農耕祭祀にける供犠とは何か——」(発表要旨：日本民俗学会第50回年会),『日本民俗学会50周年記念 第50回年会 研究発表要旨』, 1998年.

六車由実 「日本における「人身御供」祭祀の問題」(発表要旨：日本民族学会第33回研究大会),『日本民族学会第34回研究大会 プログラム 研究発表抄録』, 1999年.

六車由実 「祭における「暴力」と「人身御供」」(発表要旨：第51回日本民俗学会年会),『日本民俗学会第51回年会研究発表要旨』, 1999年.

六車由実 「人身御供祭祀における「食」と「性」の問題」(発表要旨：日本宗教学会58回学術大会),『宗教研究』第323号, 2000年.

六車由実 (学振 PD)

「「人身御供」と「動物供犠」——日本の狩猟文化の変容との関わりで——」(発表要旨：日本民族学会第34回研究大会),『日本民族学会第34回研究大会 プログラム 研究発表抄録』, 2000年.

六車由実 (学振 PD)

「人身御供と殺生罪業観」(発表要旨：第52回日本民俗学会年会),『日本民俗学会第52回年会研究発表要旨』, 2000年.

六車由実 (学振 PD)

「宮座と人身御供——「人形」の供物を供える祭から——」(発表要旨：日本宗教学会59回学術大会),『宗教研究』第327号, 2001年.

森 宣雄 「近代台湾社会の震災経験と社会の団結について——1935年台湾中部大震災を中心に——」(発表要旨：中国現代史研究会),『現代中国研究』第6号, 2000年.

盛田良治 「東畑精一のフィリピン——「植民政策学」から「地域研究」への展開——」(発表要旨：1997年度社会思想史学会大会),『社会思想史研究』第21号, 1997年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 2 名

<内訳>

PD：1名 DC：1名 外国人：0名

PD：森 宣雄, DC 1：中村 平 (2002年4月現在)

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 2 名

学部：0名 PD：2名 DC：0名

崔博憲 チュラロンコン大学 (タイ)

川越道子 ハノイ国家大学 (ベトナム) (2002年4月現在)

6. 専門分野出身の研究者 (1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 5 名

'97年度：2名 '98年度：1名 '99年度：2名 '00年度：0名 '01年度：0名

<内訳>

1997年度 博士後期課程修了 金 容儀 全南大学校人文科学大学 助教授 (韓国)

1997年度 博士後期課程修了 宋 秀環 国立中央研究院民族学研究所 (台湾)

1998年度 博士後期課程修了 菊池 暁 京都大学人文科学研究所 助手

1999年度 博士後期課程修了 真鍋昌賢 大阪大学文学研究科 助手

1999年度 博士後期課程修了 六車由実 東北芸術工科大学東北文化研究センター常勤嘱託研究員

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業生で、システムエンジニア・プログラマー・通訳等の技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 12 名

'97年度：3名 '98年度：2名 '99年度：3名 '00年度3名 '01年度：1名

<内訳>

技術職：3名 ジャーナリスト：4名

アーティスト：1名 教職：1名 その他：3名

[現況の説明]

卒業生・修了生の職業は一般企業、公務員をはじめ多岐にわたっている。また1997年度以降の

修了生のうち、2002年3月時点で大学などの非常勤講師に就いている者は4名である。

＜主な職業名・就職先等＞

1998年度 学芸員（兵庫県立歴史博物館）

2000年度 韓国釜山教育庁職員，家庭裁判所調査官 など

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 4 名

1999年度 宋秀環，国立中央研究院民族学研究所（台湾）

朴己煥，浦項工科大学（大韓民国）

2001年度 黄麗雲，南台科技大学（台湾）

グランバック・リサ，スタンフォード大学（アメリカ合衆国）

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 4 名

8の欄に記した4名

10. 刊行物

1981年度～現在 『日本学報』紀要 毎年1回刊行

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2000年5月～現在：「戦死者のゆくえ研究会」（「宗教と社会」学会のプロジェクトとして）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

以下すべて「日本学研究方法論の会」（「戦死者のゆくえ研究会」は上記学会プロジェクトとの合同研究会）

2000年度 9月12日「反乱－鎮圧の系譜学（第1回）」（富山担当）

10月31日「戦時性暴力と東京裁判」（荻野担当）

1月27日「越境の中の近代日本（第1回）」（杉原担当）

3月30日「戦死者のゆくえ研究会（第4回）」（川村担当）

2001年度 7月31日「反乱－鎮圧の系譜学（第2回）」（富山担当）

10月5日「戦死者のゆくえ研究会（第5回）」（川村担当）

12月14日「表象分析という方法」（荻野担当）

2月2日「天皇・祭祀・ナショナリズム（第1回）」（中村担当）

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

日本学は、人文社会科学の諸ディシプリンをふまえながら、それらを意識的に交差させ統合す

ることによって、地理的境界というよりも歴史的・社会的文脈としての「日本」に関わる新たな理論的かつ実証的問題を発見し、分析を展開するところに、その存在意義がかかっているといってもよい。

そうした研究教育体制を保証するために、近年、研究室として意欲的な試みを企図してきた。第一に、1998年度より主に博士前期課程学生を対象にして「日本学研究方法論演習」という科目を設置し、異分野にまたがって対話し議論を積み重ねる能力を養うとともに、論点を鮮明にして論文に定着させる場として位置づけてきた。全教官の出席するこの演習において、報告者は事前にペーパーを配布することを義務づけられ、コメンテーターの発言を受けて真剣な討論にさらされる。それは多様な角度から形成される対話を通じて論文の作成を促す教育的場であるとともに、新たな研究のための論点を発見する場としても機能している。

第二に、2000年度より博士後期課程学生を中心に、さらに外部の研究者も招いて「日本学研究方法論の会」を年間約4回開催してきた。そのテーマとしては、紀要に特集されたもののほかに、「戦時性暴力と東京裁判」「表象分析という方法」「天皇・祭祀・ナショナリズム」があり、学際的な研究プロジェクトとして設定されている。また「戦死者のゆくえ」は、「宗教と社会」学会の学会プロジェクトとしても機能しており、本研究室の研究教育活動が学会活動と連動していることを示している。

第三に、1999年度より紀要『日本学報』に特集を組み込むようになった。1999年度は「日本研究の現在」と題して全教官が執筆し、日本研究への多彩な視角を提示したが、2000年度からは「日本学研究方法論の会」において深めた論点に関して、外部も含めた報告者が論文を寄稿する形で特集を生かすようにし、発信媒体として位置づけることにしたのである。2000年度は「反乱——鎮圧の系譜学」、2001年度は「戦死者のゆくえ」、2002年度は「越境の中の近現代日本」が特集となっている。

このように、日本学研究室では、通常の講義や演習のほかに、ワークショップ的な学問的討論の場、プロジェクト牽引型の学際的な研究会、そしてその内容を発信するメディアとしての『日本学報』の刊行という、それぞれ緊密な関係をもったトライアングルを形成する知的営為を制度として確立しているところに、組織としての研究・教育活動上の独自性があるといえる。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1 論文

- 中村生雄 「蓮如の女性観・家族観」、山折哲雄・大村英昭編『蓮如・転換期の宗教者』、小学館、pp. 93-119, 1997.
- 中村生雄 「現代に〈聖地〉は可能か?」、『日本の美学』25、ベリかん社、pp. 22-37, 1997.
- 中村生雄 「天皇制と柳田民俗学」、『民俗学がわかる。』、朝日新聞社、pp. 141-145, 1997.
- 中村生雄 「民間学としての柳田民俗学」、『待兼山論叢（日本学篇）』第31号、大阪大学文学会、pp. 1-16, 1997.
- 中村生雄 「文化ナショナリズムと「日本の宗教」』、『文化と哲学』第15号、静岡大学哲学会、pp. 1-19, 1998.

- 中村生雄 「柳田国男の〈供犠〉解釈」,『柳田国男の会報告集』第3号,柳田国男の会,pp. 27-43,1998.
- 中村生雄 「『民俗社会』のなかの身体」,野本寛一他編『講座日本の民俗学2』,雄山閣,pp. 32-49,1998.
- 中村生雄 「〈日本〉という自己と〈自然〉」,沼義昭博士古稀記念会編『宗教と社会生活の諸相』,隆文館,pp. 251-270,1998.
- 中村生雄 「折口信夫」,野村純一他編『柳田国男事典』,勉誠社,pp. 744-750,1998年
- 中村生雄 「天皇制」,野村純一他編『柳田国男事典』,勉誠社,pp. 273-278,1998年
- 中村生雄 「〈ことば〉と〈現場〉ということ」,山折哲雄編,『日本人の思想の重層性』,筑摩書房,pp. 29-46,1998.
- 中村生雄 「近代日本の宗教と国家」,青木保他編『近代日本文化論9』,岩波書店,pp. 55-78,1999.
- 中村生雄 「祀り——民俗学の地平から——」,村上陽一郎他編『叢書・転換期のフィロソフィー』4,ミネルヴァ書房,pp. 187-207,1999.
- 中村生雄 「宗教現象の諸相——「自然葬」をどう考えるか——」,細谷昌志編『新しい教養のすすめ・宗教学』昭和堂,pp. 115-144,1999.
- 中村生雄 「女犯肉食と肉食妻帯の距離」,『親鸞がわかる。』,朝日新聞社,pp. 10-13,1999.
- 中村生雄 「『供犠の文化』と『供養の文化』」,『東北学』第1号,東北芸術工科大学東北文化研究センター,pp. 246-258,1999.
- 中村生雄 「『動物供養』は何のために?」,『東北学』第3号,東北芸術工科大学東北文化研究センター,pp. 268-279,2000.
- 中村生雄 「『反哲学』の風土」,細谷昌志編『シリーズ近代日本の知5』,晃洋書房,pp. 166-186,2000.
- 中村生雄 「日本の「近代」と「自己」について」,『日本学報』第19号,大阪大学大学院文学研究科日本学研究室,pp. 69-84,2000.
- 中村生雄 「宗教と天皇制」,『百科事典で読む20世紀』,平凡社,pp. 46-58,2000.
- 中村生雄 「加藤玄智の神道学と生祠研究」,『宗教研究』第325号,日本宗教学会,pp. 121-144,2000.
- 中村生雄 「人と馬と東北と」,『東北の風土に関する総合的研究』,東北芸術工科大学東北文化研究センター,pp. 74-80,2001.
- 中村生雄 「祀りと儀礼」,長谷正当他編『宗教の根源性と現代1』,晃洋書房,pp. 152-170,2001.
- 中村生雄 「イケニエ祭祀の起源」,小松和彦編『怪異の民俗学7』,河出書房新社,pp. 206-237,2001.
- 中村生雄 「『日本仏教』から見た人と動物」,懐徳堂記念会編『生と死の文化史』,和泉書院,pp. 87-126,2001.
- 中村生雄 「『自然宗教』論と戦後神道」,里見軍之編『自然のなかの人間(報告書)』,大阪大学大学院文学研究科,pp. 83-94,2001.
- 中村生雄 「宮田登が『日和見』に託したもの」,『東北学』第5号,東北芸術工科大学東北文化研究センター,pp. 298-307,2001.
- 中村生雄 「自画像を描くということ」,『日本学報』第20号,大阪大学大学院文学研究科日本学研究室,pp. 173-186,2001.
- 中村生雄 「『血食』とカニバリズム」,『劇場文化』第7号,静岡県舞台芸術センター,pp. 84-94,2001.
- 中村生雄 「忘却された旅」,『21世紀フォーラム』第77号,政策科学研究所,pp. 35-43,2001.
- 中村生雄 「狩猟文化は「日本人のルーツ」の問題として考えられるか」,『SCIENCE of HUMANITY』第35号,勉誠出版,pp. 37-47,2001.
- 中村生雄 「動物の夢/死者の夢」,荒木浩編『〈心〉と〈外部〉(報告書)』,大阪大学大学院文学研究科,pp. 25-40,2002.
- 川村邦光 「「信」の世界の建設者」,山折哲雄・大村英昭編『蓮如——転換期の宗教者』,小学館,pp. 9-20,1997.
- 川村邦光 「東北地方の巫女の口寄せ——言葉と語りの力——」,『国文学』42号,學燈社,pp. 86-89,1997.
- 川村邦光 「マモノの発生と暴力」,『情況』10月号,情況出版社,pp. 133-149,1997.
- 川村邦光 「若者の“力”と近代日本」,田中雅一編『暴力の文化人類学』,京都大学学術出版会,pp. 217-250,1998.

- 川村邦光 「金太郎の母」, 田中雅一編『女神：聖と性の民俗学』, 平凡社, pp. 123-144, 1998.
- 川村邦光 「犠牲としてのキリシタン：殉教と旅の重さ」, 山折哲雄編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』, 国際日本文化研究センター, pp. 37-60, 1998.
- 川村邦光 「性の民俗学」, 『日中文化研究』第12号, pp. 85-93, 1998.
- 川村邦光 「日本の子供観と児童中心主義——“子供の領分”の変遷をめぐって——」, 『子ども学』第18号, pp. 46-53, 1998.
- 川村邦光 「避妊と女の闘い——セクシュアリティの戦後をめぐって——」『思想』第886号, pp. 137-159, 1998.
- 川村邦光 「戦争と民俗／民俗学」, 『日本民俗学』第215号, pp. 34-48, 1998.
- 川村邦光 「オトメの願い：愛と性のオトメ文化」, 飯島吉晴編『幸福祈願 民俗学の冒険1』, 筑摩書房 pp. 24-54, 1999.
- 川村邦光 「折口信夫『古代研究』(1929-30年)」, 筒井清忠編『日本の歴史社会学』, 岩波書店 pp. 49-64, 1999.
- 川村邦光 「“性の民俗” 発生の以前：ワイセツの現場とは」, 『アジア遊学』第8号, 勉誠社, pp. 9-20, 1999.
- 川村邦光 「他界の構図：地獄と極楽の原風景」, 山折哲雄・川村邦光編『民俗宗教を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 60-87, 1999.
- 川村邦光 「民俗の知——からだ・ことば・こころ——」, 山折哲雄・川村邦光編『民俗宗教を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 145-166, 1999.
- 川村邦光 「犯罪の民俗」, 青木保他編『近代日本文化論6：犯罪と風俗』, 岩波書店, pp. 2-20, 2000.
- 川村邦光 「巫者とカミ：憑依霊の来歴と特性をめぐって」, 脇田晴子・M ブッシー編『アイデンティティ・周縁・媒介』, 吉川弘文館, pp. 82-96, 2000.
- 川村邦光 「巫女の心身と憑依の技法」石田秀美編『東アジアの身体技法』, 勉誠出版, pp. 156-196, 2000.
- 川村邦光 「“日本”という現場と民俗学」, 『日本学報』第19号, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 13-28, 2000.
- 川村邦光 「晶子の身体への眼ざし——性欲とセクシュアリティのゆくえ——」, 『ユリイカ』33号, 青土社, pp. 152-161, 2000.
- 川村邦光 「健康という“心にこだわるフェティシズム”——終わらない“自分探し”と心の“癒し”——」, 『木野評論』第31号, pp. 63-71, 2000.
- 川村邦光 「“東北”近代の盲巫女」, 『東北学』第2号, pp. 62-70, 2000.
- 川村邦光 「戦死者論序説——戦死者とは誰か——」, 『日本思想史研究会会報』1月19日号, pp. 1-14, 2001.
- 川村邦光 「民俗学」, 『20世紀日本の思想』, 作品社, pp. 76-81, 2002.
- 杉原 達 「責任のありか——中国人強制連行問題からの一考察——」, 関西大学経済政治研究所編『大阪問題の研究』, 関西大学経済政治研究所, pp. 141-160, 1999.
- 杉原 達 「ドイツにおける帝国意識——世紀転換期におけるオリエントとの関係を中心に——」, 北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』, 世界思想社, pp. 115-144, 1999.
- 杉原 達 「中国人強制連行と私たち——安野・西松を中心に」, 『広島教育』第554号, pp. 14-25, 1999.
- 杉原 達 「大阪・今里からの世界史再論」, 佐藤能丸・安田常雄編『思想史の発想と方法』, 東京堂出版 pp. 441-452, 2000.
- 杉原 達 「「龍の簪」をさして——梁石日『雷鳴』をよむ——」, 『ユリイカ』32-15号, 青土社, pp. 135-141, 2000.
- 杉原 達 「帝国の腹のなかで——帝国意識研究のための覚書き」, 『日本学報』第19号, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 45-54, 2000.
- 杉原 達 「西松建設の中国人強制連行への関与と企業責任について」, 『歴史に正義と公道をⅡ』, 中国人強制連行・西松建設裁判を支援する会, pp. 95-146, 2001.
- Ichiro Tomiyama 'Colonialism and the Science of the Tropical Zone', Tani E. Barlow(ed.) *Formations of Colonialism Modernity in East Asia*, Duke University Press, pp.199-221, 1997.

- 富山一郎 「沖縄(ウチナー)へのこだわり——大阪・大正区——」, 原尻英樹編『世界の民族——「民族」形成と近代——』, 放送大学教育振興会, pp. 20-32, 1998.
- 富山一郎 「お国は?」, De Musik Inter 編『音の力 沖縄 コザ沸騰編』, インパクト出版会, pp. 20-32, 1998.
- 富山一郎 「赤い大地と夢の痕跡」, 複数文化研究会編『<複数文化>のために』, 人文書院, pp. 118-135, 1998.

Ichiro Tomiyama

- 「The Critical Limits of the National Community」, The Institute of Social Science (University of Tokyo) *Social Science Japan Journal*, Oxford University Press, pp. 165-179, 1998.
- 富山一郎 「ユートピアの海」, 春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』, 世界思想社, pp. 204-225, 1999.
- 富山一郎 「非——歴史としての沖縄人」, 花田達朗・吉見俊哉・コリン スパーク編『カルチュラル・スタディーズとの対話』, 新曜社, pp. 92-105, 1999.
- 富山一郎 「『地域研究というアリーナ』, 『地域研究論集』 1-3, 国立民族学博物館地域研究企画交流センター, pp. 7-17, 1999.
- 富山一郎 「平和をつくる」(ハングル), 『当代批評』第7号, 当代批評社(韓国・ソウル), pp. 127-144, 1999.
- 富山一郎 「開発言説に関するノート」, 『開発言説と農村開発』平成8年度~平成10年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書(代表者 足立明), pp. 6-14, 1999.
- 富山一郎 「暴力の予感——『沖縄』という名前を考えるための序論——」, 吉見俊哉・栗原彬・小森陽一編『越境する知Ⅱ』, 東京大学出版会, pp. 179-206, 2000.
- 富山一郎 「開発と名前」, 『日本学報』第19号, 大阪大学日本学研究室, pp. 55-65, 2000.
- 富山一郎 「帝国から」, 『現代思想』vol. 28-7, 青土社, pp. 102-112, 2000.
- 富山一郎 「困難な私たち」, 『思想』第913号, 岩波書店, pp. 91-107, 2000.

Ichiro Tomiyama

- 「Japan's militarization and Okinawa's bases」, Ichiro Tomiyama (editorial Board) *Inter Asia cultural Studies* Vol. 1no. 2, Routledge, pp. 348-356, 2000.
- 富山一郎 「台湾に出会う」, 東アジア哲史文ネットワーク編『小林よしのり『台湾論』を超えて』, 作品社, pp. 20-30, 2001.
- 富山一郎 「生活改善運動の分析」, 大門正克・小野沢あかね編『民衆世界への問いかけ』, 東京堂出版, pp. 238-275, 2001.
- 富山一郎 「<問題提起>シンポジウム「反乱-鎮圧の系譜学」に向けて: —— マナから反乱へ ——」, 『日本学報』第20号, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 1-22, 2001.

Ichiro Tomiyama

「"Spy": Mobilization and Identity in Wartime Okinawa」, *Japanese Civilization in the Modern World XVI/Nation-State and Empire/Senri Ethnological Studies* no.51, National Museum of Ethnology, pp.111-132, 2001.

Ichiro Tomiyama

- 「The "Japanese" of Micronesia」, Ronald Y. Nakasone(ed.), *Okinawan Dias-pora*, University of Hawaii Press, pp.57-70,2002.
- 富山一郎 「ファノン『黒い皮膚, 白い仮面』」, 大澤真幸編『ナショナリズム論の名著50』, 平凡社 pp. 121-132, 2002.
- 富山一郎 「国境」, 小森陽一他編『近代日本の文化史4』, 岩波書店, pp. 207-231, 2002.
- 荻野美穂 「身体, 自己決定権, 中絶」, 渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』, 世界思想社, pp. 168-183, 1997.
- 荻野美穂 「生命と権利のディスコース —— アメリカの中絶論争を読む ——」, 『思想』第878号, 岩波書店, pp. 76-100, 1997.
- 荻野美穂 「避妊の歴史の中のピル」, 『インパクション』第105号, インパクト出版会, pp. 14-20, 1997.

- 荻野美穂 「女性にとっての“身体”の意味」, 加藤紘編『新女性医学大系9 女性と予防医学』, 中山書店, pp. 59-67, 1998.
- 荻野美穂 「心理的・社会的視点からみた成人女性の「望まない妊娠」に関する実態調査」, 荻野美穂／東 優子 (お茶の水女子大学) / 宇野澄江 (ウィメンズ・センター大阪), 平成9年度厚生省心身障害研究・生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究報告書, 厚生省, pp. 149-166, 1998.
- 荻野美穂 「ジェンダーという問い」, 近藤和彦編『西洋世界の歴史』, 山川出版社, pp. 405-413, 1999.
- 荻野美穂 「男の性と生殖——男性身体の語り方——」, 西川祐子・荻野美穂編『共同研究 男性論』, 人文書院 pp. 201-224, 1999.
- 荻野美穂 「思想としての女性——「女性」史, 「ジェンダー」史, それとも? ——」, 『岩波講座 世界歴史28』, 岩波書店, pp. 229-248, 2000.
- 荻野美穂 「歴史学における構築主義」, 上野千鶴子編, 『構築主義とは何か』勁草書房, pp. 139-158, 2001.
- 荻野美穂 「「家族計画」への道——敗戦日本の再建と受胎調節——」, 『思想』第925号, 岩波書店, pp. 169-195, 2001.
- 真鍋昌賢 「乃木さんのひとり歩き——浪花節にえがかれた日露戦後の庶民感情——」, 『説話・伝承学』第6号, 説話・伝承学会, pp. 137-152, 1998.
- 真鍋昌賢 「戦時下における教育紙芝居の上演現場。口頭芸と国家の関係をめぐる一考察」, 『待兼山論叢 (日本学篇)』第32号, 大阪大学文学会, pp. 1-24, 1998.
- 真鍋昌賢 「旅する主人公と失われた国家」, 『上方芸能』第136号, 上方芸能編集部, pp. 13-15, 2000.
- 真鍋昌賢 「戦時体制と職業的な口頭芸」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』第91号, 国立歴史民俗博物館, pp. 613-629, 2001.
- 真鍋昌賢 「「新作」を量産する浪花節——口演空間の再編成と語り芸演者——」, 吉見俊哉編『一九三〇年代のメディアと身体』, 青弓社, pp. 195-224, 2002.
- 真鍋昌賢 「繰り返される「情話」, 転換する結末——語り芸の「近代」を論じるきっかけとして——」, 『口承文藝研究』第25号, 口承文藝学会, pp. 163-172, 2002.

1-2. 著書

- 中村生雄 「祭祀と供犠」, 法蔵館, 303p., 2001.
- 中村生雄 「死の文化誌」, (共編著), 昭和堂, 239p., 2002.
- 中村生雄 「日本を問いなおす」, (「いくつもの日本I」, 共編著), 岩波書店, 292p., 2002.
- 川村邦光 「憑依の視座」, 青弓社, 220p., 1997.
- 川村邦光 「民俗宗教を学ぶ人のために」(共著), 山折哲雄 (国際日本文化研究センター) / 川村邦光編, 世界思想社, 253p., 1999.
- 川村邦光 「<民俗の知>の系譜」, 昭和堂, 180p., 2000年
- 川村邦光 「すぐわかる日本の宗教」, 山折哲雄 (国際日本文化研究センター) / 川村邦光 (共著), 東京美術, 143p., 2000.
- 川村邦光 「地獄めぐり」, 筑摩書房, 235p., 2000.
- 杉原 達 「越境する民——近代大阪の朝鮮人史研究——」, 新幹社, 234p., 1998.
- 富山一郎 「暴力の予感」, 岩波書店, 366p., 2002.
- 富山一郎 「戦場の記憶」, (ハングル) 移山出版, (韓国, ソウル), 304p., 2002.
- 荻野美穂 「共同研究 男性論」(共著), 荻野美穂／西川祐子 (京都文教大学) 編, 人文書院, 381p., pp. 1-4 / 201-224, 1999.
- 荻野美穂 「中絶論争とアメリカ社会——身体をめぐる戦争——」, 岩波書店, 292p., 2001.
- 荻野美穂 「ジェンダー化される身体」, 勁草書房, 376p., 2002.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞書項目等

(1) 翻訳書

- 荻野美穂 シュテファン・キュール著「ナチ・コネクション」, 『思想』, 岩波書店, 第878号, pp. 55-75, 1997.
- 荻野美穂 ジョーン・W・スコット著「女であることのパラドクス: フェミニズムの歴史を読み直す」, 『Doshisha American Studies』 Center for American Studies Doshisha University, 35号, pp. 25-35, 同志社大学アメリカ研究所, 1999.
- 荻野美穂 ジョーン・W・スコット著「ジェンダー再考」, 『思想』第898号, 岩波書店, pp. 5-34, 1999.
- 荻野美穂 アテナ・グロスマン著「沈黙という問題: 占領軍兵士によるドイツ女性の強姦」, 『思想』第898号, 岩波書店, pp. 136-159, 1999.
- 荻野美穂 ジェーン・ウエグシャイダー・ハイマン/エステル・R・ローム著『愛!?: 私自身を生きるために』荻野美穂監訳/『愛!?: 翻訳グループ訳, 松香堂, 352p. 2001.

(2) 書評

- 中村生雄 「川田稔『柳田国男』」, 『日本史研究』, 日本史研究会, 431号, pp. 75-76, 1998.
- 中村生雄 「嶋田義仁『稲作文化の世界観』」, 『宗教研究』, 日本宗教学会, 72巻2号, pp. 146-152, 1998.
- 中村生雄 「八木公生『天皇と日本の近代』」, 『日本思想史学』, 日本思想史学会, 33号, pp. 219-228, 2001.
- 中村生雄 「脇田晴子/アンヌ・ブッシイ編『アイデンティティ・周縁・媒介』」, 『宗教研究』, 日本宗教学会, 76巻2号, 2002.
- 杉原 達 「西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』」, 『社会経済史学』, 社会経済史学会, 63巻4号, pp. 118-121, 1998.

(3) 辞書項目

- 中村生雄 「柳田国男」ほか9項目, 『岩波哲学辞典』, 岩波書店, 1998.
(編集協力と項目執筆)
- 中村生雄 「供犠」ほか5項目, 『日本民俗大辞典』, 吉川弘文館, 1999~2000.
- 中村生雄 「柳田国男」ほか16項目, 子安宣邦監修『日本思想史辞典』, ぺりかん社, 2001.
(編集担当と項目執筆)
- 川村邦光 「出口なお」他, 子安宣邦監修『日本思想史辞典』, ぺりかん社, 2001.
- 杉原 達 「トルコ」, マルクス・カテゴリー事典編集委員会編『マルクス・カテゴリー事典』, 青木書店, pp. 410-412, 1998.
- 杉原 達 「大塚久雄」「田中正造」「日本資本主義発達史」「日本資本主義発達史講座」「日本資本主義論争」「野呂栄太郎」「矢内原忠雄」, 子安宣邦監修『日本思想史辞典』, ぺりかん社, pp. 61-62/348/421/421/421-422/435/546, 2001.
- 荻野美穂 「女性」廣松渉他編『哲学・思想事典』岩波書店, pp. 791-792, 1998.
- 真鍋昌賢 「新しい遊びへの関心: 盛り場デビュー」「賭け事」「社会人: 就職・入社式」, 倉石あつ子/小松和彦/宮田登編, 『人生儀礼事典』, 小学館, pp. 90?91/132/133?134, 2000.

(4) その他 (エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 杉原 達 「総論: 台湾シンポジウムをふりかえって」, 『東アジアの冷戦と国家テロリズム』, 国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」事務局, pp. 7-12, 1997.
- 杉原 達 「思想としての「現場探訪」」, 『思想』, 岩波書店, 第877号, pp. 1-3, 1997.
- 杉原 達 「済州島「4・3事件」50周年を前に: 東アジアの視点で見直せ」, 朝日新聞, 朝日新聞社,

- (1998. 3. 28) 1998.
- 杉原 達 「君が代丸」, 朝日新聞, 朝日新聞社 (1999. 2. 15) 1999.
- 杉原 達 「呑み屋にて」, 朝日新聞, 朝日新聞社 (1999. 2. 16), 1999.
- 杉原 達 「宋さんの眼」, 朝日新聞, 朝日新聞社, (1999. 2. 17), 1999.
- 杉原 達 「日本研究」, 朝日新聞, 朝日新聞社, (1999. 2. 18), 1999.
- 杉原 達 「越境する魂」, 『環』5号, 藤原書店, pp. 166-167, 2001.
- 杉原 達 「人がつながるとのこと」, 大阪経済法科大学『東アジア研究』, 大阪経済法科大学東アジア研究所, 第33号, pp. 1-2, 2001.
- 荻野美穂 「解説」, エリザベート・バダンテール著『母性という神話』, 筑摩書房, pp. 509-518, 1998.
- 荻野美穂 「「選択」と「選別」: 母体保護法と受精卵遺伝子診断をめぐる」, 『創文』7月号, 創文社, pp. 10-13, 1997.
- 荻野美穂 「解説・産児調節運動編」『性と生殖の人権問題資料集成 第1巻』, 不二出版, pp. 1-7, 2000.
- 荻野美穂 ウーテ・フレーフェルト/荻野美穂/姫岡とし子「女性史からジェンダー史へ (インタビュー)」, 『思想』898号, 岩波書店, pp. 173-181, 1999.
- 荻野美穂 「生殖する身体とリプロダクティブ・ライツ」, 池内靖子他編『21世紀のジェンダー論』, 晃洋書房, pp. 109-118, 1999.
- 真鍋昌賢 「本章の意図 (伝承を支える様々な場)」, 『飛騨古川——まち・ひと・まつり: 岐阜県吉城郡古川町フィールドワーク報告書——』, 大阪大学文学部日本学講座, pp. 30-31, 1998.
- 真鍋昌賢 「本章の意図 (祭りの規範とやんちゃ気質)」, 『飛騨古川——まち・ひと・まつり: 岐阜県吉城郡古川町フィールドワーク報告書——』, 大阪大学文学部日本学講座, pp. 4-5, 1998.
- 真鍋昌賢 「怪異伝承の収集とカード化の過程」, 『日本における怪異・怪談及び妖怪文化に関する総合的研究』, 国際日本文化研究センター, pp. 74-79, 2002.
- 真鍋昌賢 「メディアの重層性と軍神のポピュラリティ: 「戦死者のゆくえ」で対話するための論点として」, 『日本学報』, 大阪大学文学部日本学研究室, 第21号, pp. 83-86, 2002.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 中村生雄 「天皇の祀りと「食国」」, 単独, フランス極東学院, 滋賀県立大学/滋賀県彦根市, 2001年9月23日
- 中村生雄 「日本の民俗宗教と自然」, 単独, 関西大学東西学術研究所国際シンポジウム, 関西大学/大阪府吹田市, 2001年10月26日
- 川村邦光 「日本東北地域のシャーマニズム」, 単独, 漢陽大学校民俗学研究所/韓国シャーマニズム学会1998年国際学術大会『東アジアのシャーマニズム』, 漢陽大学校/大韓民国 ソウル市, 1999年1月6日
- 川村邦光 「戦争と民俗学」, 単独, 北米シンポジウム「日本人の価値・規範意識とヒストリオグラフィー——歴史学と民俗学」, 国際日本文化研究センター/京都府京都市, 2002年1月17日
- 杉原 達 西松建設苦役劳工之戦争罪行問題研究会の共同司会, 香港城市大学/香港特别行政区, 2001年8月5日
- 富山一郎 「帝国日本における人種および人種主義」, 単独, 国際人類学会, 東京都市センターホテル/東京都千代田区, 2002年9月23日
- 荻野美穂 「Controversy over the Official Approval of Oral Contraceptive Pills in Japan: The National Politics and Women's Perspectives」, 単独, The 14th International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, ウィリアム・アンド・メアリ大学/アメリカ合衆国 ウィリアムズバーグ, 1998年7月27日
- 荻野美穂 「'You can have abortions, but no oral contraceptive pills': Women and reproductive control in Japan」, 単独, Feminist Analysis of Modernity in East Asia: A Comparative Study of Women's Experience in China, Japan and Korea, 梨花女子大学/大韓民国ソウル市, 1999

年6月12日

荻野美穂 「From OBOS to SOFL: Why and How We Have Adapted Them into Japanese Society」, 単独, International OBOS Translation Network, Crossing Cultural Borders with Our Bodies, Ourselves, Federation of Women's Self-Help Centers/オランダ王国 ユトレヒト, 2001年6月14日-16日

荻野美穂 「政治問題としてのリプロダクティブ・ライツ/ヘルス」, 単独, 第12回アジア女性会議北九州, 北九州市立女性センター「ムーブ」/福岡県北九州市, 2001年10月6日

真鍋昌賢 「The romantic stories of rokyoku in socio-historical context: popularity, sales and changed endings」, 単独, the International Society for Folk Narrative Research, メルボルン大学/オーストラリア メルボルン, 2001年7月19日

(2) 国内学会

中村生雄 「宗教学における「日本」意識」, 単独, 日本宗教学会57回学術大会, 南山大学1999年9月14日

中村生雄 「死者供養と動物供養」, 単独, 日本宗教学会58回学術大会, 駒澤大学/東京都世田谷区, 2000年9月15日

中村生雄 「「殺す文化/食べる文化」再考」, 単独, 京都宗教哲学会, 京都大学/京都府京都市 2001年12月15日

川村邦光 「近代日本と女性: 通俗的女性イメージの形成」, 単独, 比較文化論講座特別講演会, 東北大学大学院国際文化研究科/宮城県仙台市1997年2月20日

川村邦光 「戦争と民俗/民俗学」, 単独, 日本民俗学会, 日本民俗学会第49回シンポジウム「『近代』と民俗」, 東京家政学院大学/東京都町田市, 1997年10月4日

川村邦光 「家庭の“性生活”をめぐる」, 単独, 比較家族史学会第35回研究大会, 東京学芸大学/東京都小金井市, 1999年6月27日

川村邦光 「折口信夫の“実感”をめぐる」, 単独, 日本宗教学会第58回学術大会, 南山大学/愛知県名古屋市長古屋市, 1999年9月18日

川村邦光 「折口信夫と日本民俗学会」, 単独, 日本民俗学会第51回年会, 神奈川大学/神奈川県横浜市, 1999年10月3日

川村邦光 「“戦死者”の表象をめぐる」, 単独, 日本宗教学会第59回学術大会, 駒沢大学/東京都世田谷区, 2000年9月15日

川村邦光 「女神と金太郎の母」, 単独, 説話・伝承学会シンポジウム「説話・伝承における豊穡の女神」, 奈良教育大学/奈良県奈良市, 2001年4月30日

川村邦光 「戦死者の表象と儀礼」, 単独, 日本民俗学会第53回年会, 帝塚山大学/奈良県奈良市, 2001年10月7日

杉原 達 「責任を問題にする「場」をめぐる: 中国人強制連行の問題からの一考察」, 単独, 日本倫理学会第49回大会, 関東学院大学/神奈川県横浜市, 1998年10月25日

杉原 達 「コメント: シンポジウム「ヨーロッパ移民の形成史(17-20世紀): エスニシティの形成と軋轢をめぐる」」, 単独, 史学会, 東京大学/東京都文京区, 2000年6月20日

荻野美穂 「人口政策と家族計画: 占領期日本の場合」, 単独, 比較家族史学会第38回研究大会, 京都文教大学/京都府京都市, 2000年10月29日

荻野美穂 「人口政策と女性の身体: 戦前・戦後の日本」, 単独, 日本生命倫理学会第12回大会, 大雪クリスタルホール/北海道旭川市, 2000年11月4日

真鍋昌賢 「近代国家と語り物: 浪花節を事例として」, 単独, 説話伝承学会秋季大会, 龍谷大学/京都府京都市, 1997年9月14日

真鍋昌賢 「語り物の消滅」をこえるための視点: 職業的な口頭芸の分析にむけて」, 単独, 日本民俗学会第51回年会, 神奈川大学/神奈川県横浜市, 1999年10月3日

真鍋昌賢 「浪花節史にみる口頭芸の<近代>: 名称という表層/底流する芸人知」, 単独, 芸能史研究会, 京大会館/京都府京都市, 2000年7月14日

真鍋昌賢 「<近代>における口頭芸の社会的な位相：浪曲師・寿々木米若の口演演目みる戦中と戦後」, 単独, 日本口文藝学会第40回研究例会：シンポジウム日本口承文芸と「近代」, 国学院大学／東京都渋谷区, 2000年10月14日

(3) 研究会

川村邦光 「戦後のセクシュアリティ：三人のみちこ, その青春」, 単独, 待兼山比較文化研究会, 大阪大学待兼山会館／大阪府豊中市, 1999年12月4日

杉原 達 「コメント：ドイツ近現代史研究の立場から」, 単独, イギリス帝国史研究会 木畑洋一編【大英帝国と帝国意識】合評会, 京大会館／京都府京都市, 1998年12月10日

杉原 達 「コメント：強制労働の日独比較」, 単独, ドイツ現代史研究会, 立命館大学白雲荘／京都府京都市, 2002年1月27日

富山一郎 「植民地主義と記憶」, 司会およびコーディネイト, 日米共同研究会, プリンストン大学／アメリカ合衆国 ニュージャージー州, 1998年11月12日

富山一郎 「植民地的なる沖縄」, 単独, 東アジアと日本帝国, シカゴ大学／アメリカ合衆国 イリノイ州, 2000年5月26日

富山一郎 「沖縄の経験」, 単独, 島嶼と発展, 済州市, 済州島大学校／大韓民国 済州市, 2000年10月8日

富山一郎 「島嶼と移民」, 単独, ヨーロッパ統合と日本, 横浜市, 2000年10月21日

富山一郎 「暴力の記憶」, 単独, インターアジア・カルチュラルステディーズ・コンファレンス, 九州大学, 2000年12月13日

富山一郎 「文化研究ネットワーク」, 単独, 連結亜州批判機構, 台北市, 2001年6月30日

富山一郎 「東アジアにおける暴力の記憶」, カルチュラルスタディーズの新しい地平, 東京大学／東京都文京区, 2002年7月11-12日

富山一郎 「近代日本における人種概念の受容と実践」, 単独, 人種概念の普遍性を問う, 京都国際会議場／京都府京都市, 2002年9月19日

真鍋昌賢 「浪曲師・寿々木米若の口演記録にみる演目の消長」, 単独, 平成10年度国立歴史民俗博物館国際シンポジウムポスターセッション, 国立歴史民俗博物館／千葉県佐倉市, 1998年11月20日

(4) 自治体等での講演会等

中村生雄 「死をめぐる諸問題」, 単独, 現代における宗教の役割研究会, 京都国際ホテル／京都府京都市, 1999年12月26日

中村生雄 「日本人の宗教性と真宗信仰」, 単独, 真宗高田派仏教文化講座, 専修寺／三重県津市, 2000年8月3日

中村生雄 「狩猟と牧畜のあいだ」, 単独, 京都造形芸術大学シンポジウム, 京都造形芸術大学／京都府京都市, 2001年9月30日

川村邦光 「世紀末の宗教と宗教の未来」, 単独, 読売宗教講演会, 読売ビル／大阪府大阪市, 1997年9月20日

川村邦光 「民俗からみた女性の生き方：1. ドブクロと女性：2. 女性と戦争の民俗」, 単独, 高槻市立南大冠公民館／大阪府高槻市, 1998年12月18日

川村邦光 「民俗の中の『性』」, 単独, シンポジウム「民俗の中の『性』」, 福島県立博物館／福島県福島市, 2000年2月11日

川村邦光 「文明開化と民衆：金精神と断髪から」, 単独, 町田市立自由民権資料館／東京都町田市, 2001年8月12日

杉原 達 「今「東アジア」に生きよう」, 単独, 東アジア・フェスティバルとよなか国際交流協会／大阪府豊中市, 1999年5月30日

杉原 達 「在日外国人と日本社会：大阪の朝鮮人の歴史から考える」, 単独, 大阪市職員研修会, 大阪市職員研修所／大阪府大阪市, 2000年12月5日

- 杉原 達 「異文化との出会い：20世紀の大阪に学ぶ」、単独、第33回大阪大学開放講座、豊中市立アクア文化ホール／大阪府豊中市、2001年10月18日
- 荻野美穂 「性と生殖の政治学」、単独、京都市女性大学、京都市立ウイングス京都／京都府京都市、1997年11月11日
- 荻野美穂 「リプロダクティブ・ライツという考え方」、単独、大阪市ヒューマンライツ・セミナー、大阪市立クレオ大阪北／大阪府大阪市、1998年2月21日
- 荻野美穂 「ジェンダーアプローチの可能性」、単独、京都市シティーカレッジ、大谷大学／京都府京都市、1998年9月10日
- 荻野美穂 「女性の性と生殖：リプロダクティブ・ライツという考え方」、単独、京都市女性大学、京都市立ウイングス京都／京都府京都市、1998年11月24日
- 荻野美穂 「性と生殖の自己決定権をめぐって」、単独、平成11年度女性問題アドバイザー養成講座、京都府女性総合センター／京都府京都市、1999年11月20日
- 荻野美穂 「女の解剖学：近代的身体の成立」、講座「女・からだ・私たち自身」、大阪市立クレオ大阪東／大阪府大阪市、2000年1月15日
- 荻野美穂 「リプロダクティブ・ヘルス／ライツの思想と現実」、単独、平成12年度女性問題アドバイザー養成講座、京都府女性総合センター／京都府京都市、2000年10月7日
- 荻野美穂 「リプロダクティブ・ヘルス／ライツの思想と現実」、単独、平成13年度女性問題アドバイザー養成講座、京都府女性総合センター／京都府京都市、2001年7月21日
- 荻野美穂 「日本のフェミニズムの歴史と課題」、単独、同志社大学第22回同和教育研究集会、同志社大学／京都府京都市、2001年9月28日
- 荻野美穂 「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ：歴史に学ぶ政策と選択」、単独、新潟市女性センター「アルザ」／新潟県新潟市、2002年3月15日

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997年度～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

- 平成13年度 基盤研究 (B) (1) 12410007 戦死者をめぐる宗教・文化の研究 川村邦光
3,600,000円
- 平成12年度 基盤研究 (B) (1) 12410007 戦死者をめぐる宗教・文化の研究 川村邦光
3,700,000円
- 平成10年度 奨励研究 (A) 10710156 近代日本における「帝国意識」の形成過程と植民地台湾への認識構造をめぐる研究 松田京子 700,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

- 平成13年度 サントリー文化財団研究助成金
狩猟民俗と動物供犠にあらわれた日本文化における自然認識の研究
中村生雄 1,200,000円
- 平成12年度 サントリー文化財団研究助成金
狩猟民俗と動物供犠にあらわれた日本文化における自然認識の研究

中村生雄 1,300,000 円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

中村生雄

- ・ 日本宗教学会 (評議員 1992年 9月～)
(理事 1998年 9月～)
- ・ 日本思想史学会 (大会委員 1998年10月～)
(評議員 2002年10月～)
- ・ 日本文学協会 (委員 1999年 4月～)
- ・ アジア民族文化学会 (運営委員 2001年 5月～)
- ・ 日本仏教総合研究学会 (評議員 2002年 2月～)

川村邦光

- ・ 日本宗教学会 (評議員 1998年 9月～)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

川村邦光 教授

- | | | |
|------|--------------|---|
| 1 学期 | 日本文化学特殊演習 | 文化の表象とプラクティスの研究 I |
| 2 学期 | 日本文化学特殊演習 | 文化の表象とプラクティスの研究 II |
| 1 学期 | 日本文化学演習 | 文化の表象とプラクティスの研究 I |
| 2 学期 | 日本文化学演習 | 文化の表象とプラクティスの研究 II |
| 1 学期 | 文化人類学演習 | 人類学・民俗学の方法 |
| 2 学期 | 日本文化学講義 | 近代日本のセクシュアリティ |
| 1 学期 | 日本学博士論文作成演習 | 日本学博士論文の作成 I |
| 2 学期 | 日本学博士論文作成演習 | 日本学博士論文の作成 II |
| 1 学期 | 日本学修士論文作成演習 | 日本学修士論文の作成 I |
| 2 学期 | 日本学修士論文作成演習 | 日本学修士論文の作成 II |
| 通年 | 日本学研究方法論特殊演習 | 日本研究の展開 (杉原教授, 中村教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同) |
| 通年 | 日本学研究方法論演習 | 日本研究の現状と問題点 (杉原教授, 中村教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同) |
| 通年 | 日本学研究方法論演習 | 日本研究の可能性 (杉原教授, 中村教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同) |

杉原 達 教授

- | | | |
|------|-----------|----------------|
| 1 学期 | 文化交流史特殊演習 | 文化交流史研究 I |
| 2 学期 | 文化交流史特殊演習 | 文化交流史研究 II |
| 1 学期 | 文化交流史演習 | 越境の中の近代日本 |
| 2 学期 | 文化交流史講義 | 中国人強制連行をめぐる諸問題 |
| 1 学期 | 文化交流史演習 | 文化交流史研究 I |
| 2 学期 | 文化交流史演習 | 文化交流史研究 II |

- 1 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成 I
 2 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成 II
 1 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成 I
 2 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成 II
 通年 日本学研究方法論特殊演習 日本研究の展開 (川村教授, 中村教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同)
 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の現状と問題点 (川村教授, 中村教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同)
 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の可能性 (川村教授, 中村教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同)

中村生雄 教授

- 1 学期 日本文化学講義 「日本」を論ずる視角
 2 学期 日本思想史演習 自然/野生/家畜
 1 学期 日本文化学演習 近代の日本/前近代の日本 I
 2 学期 日本文化学演習 近代の日本/前近代の日本 II
 1 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成 I
 2 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成 II
 1 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成 I
 2 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成 II
 1 学期 日本文化学特殊演習 近代の日本/前近代の日本 I
 2 学期 日本文化学特殊演習 近代の日本/前近代の日本 II
 通年 日本学研究方法論特殊演習 日本研究の展開 (川村教授, 杉原教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同)
 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の現状と問題点 (川村教授, 杉原教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同)
 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の可能性 (川村教授, 杉原教授, 荻野助教授, 富山助教授と共同)

荻野美穂 助教授

- 2 学期 比較文化学特殊演習 ジェンダー理論の現在
 2 学期 比較文化学演習 ジェンダー理論の現在
 1 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成
 2 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成 II
 1 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成 I
 2 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成 II
 通年 日本学研究方法論特殊演習 日本研究の展開 (川村教授, 杉原教授, 中村教授, 富山助教授と共同)
 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の現状と問題点 (川村教授, 杉原教授, 中村教授, 富山助教授と共同)
 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の可能性 (川村教授, 杉原教授, 中村教授, 富山助教授と共同)

富山一郎 助教授

- 1 学期 文化交流史特殊演習 歴史記述にかかわる理論的諸問題 I

- 2 学期 文化交流史特殊演習 歴史記述にかかわる理論的諸問題Ⅱ
- 2 学期 文化交流史演習 沖縄近現代史研究の諸問題
- 1 学期 文化交流史演習 歴史記述にかかわる理論的諸問題Ⅰ
- 2 学期 文化交流史演習 歴史記述にかかわる理論的諸問題Ⅱ
- 1 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成Ⅰ
- 2 学期 日本学博士論文作成演習 日本学博士論文の作成Ⅱ
- 1 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成Ⅰ
- 2 学期 日本学修士論文作成演習 日本学修士論文の作成Ⅱ
- 通年 日本学研究方法論特殊演習 日本研究の展開（川村教授，杉原教授，中村教授，荻野助教授と共同）
- 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の現状と問題点（川村教授，杉原教授，中村教授，荻野助教授と共同）
- 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の可能性（川村教授，杉原教授，中村教授，荻野助教授と共同）

桂島宣弘 講師（非常勤講師・立命館大学文学部）

- 2 学期 日本思想史特殊講義 18世紀後期～19世紀前期の自他認識と日本思想史学
- 2 学期 日本思想史講義 18世紀後期～19世紀前期の自他認識と日本思想史学

毛利嘉孝 講師（非常勤講師・九州大学大学院比較社会文化研究院）

- 1 学期 文化交流史特殊講義 「文化」を研究することと創造すること
- 1 学期 文化交流史学講義 「文化」を研究することと創造すること

中谷文美 講師（非常勤講師・岡山大学文学部）

- 2 学期 文化人類学特殊講義 ジェンダーで読む文化
- 2 学期 文化人類学講義 ジェンダーで読む文化

2. 学部授業担当

川村邦光 教授

- 1 学期 文化人類学演習 人類学・民俗学の方法
- 2 学期 日本文化学講義 近代日本のセクシュアリティ
- 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の基礎（杉原教授，中村教授，荻野助教授，富山助教授と共同）
- 1 学期 日本文化学演習 日本学卒業論文の作成Ⅰ
- 2 学期 日本文化学演習 日本学卒業論文の作成Ⅱ

杉原 達 教授

- 1 学期 日本学演習 日本学事始めⅠ
- 1 学期 文化交流史演習 越境の中の近代日本
- 2 学期 文化交流史講義 中国人強制連行をめぐる諸問題
- 通年 日本学研究方法論演習 日本研究の基礎（川村教授，中村教授，荻野助教授，富山助教授と共同）

1 学期 文化交流史演習 日本学卒業論文の作成 I
2 学期 文化交流史演習 日本学卒業論文の作成 II

中村生雄 教授

1 学期 日本文化学講義 「日本」を論ずる視角
2 学期 日本思想史演習 自然／野生／家畜
通年 日本学研究方法論演習 日本研究の基礎（川村教授，杉原教授，荻野助教授，富山助教授と共同）
1 学期 日本文化学演習 日本学卒業論文の作成 I
2 学期 日本文化学演習 日本学卒業論文の作成 II

荻野美穂 助教授

2 学期 日本学演習 日本学事始め II
通年 日本学研究方法論演習 日本研究の基礎（川村教授，杉原教授，中村教授，富山助教授と共同）

富山一郎 助教授

通年 日本学研究方法論演習 日本研究の基礎（川村教授，杉原教授，中村教授，荻野助教授と共同）
2 学期 文化交流史演習 沖縄近現代史研究の諸問題
1 学期 文化交流史演習 日本学卒業論文の作成 I
2 学期 文化交流史演習 日本学卒業論文の作成 II

桂島宣弘 講師（非常勤講師・立命館大学文学部）

2 学期 日本思想史講義 18世紀後期～19世紀前期の自他認識と日本思想史学

毛利嘉孝 講師（非常勤講師・九州大学大学院比較社会文化研究院）

1 学期 文化交流史講義 「文化」を研究することと創造すること

中谷文美 講師（非常勤講師・岡山大学文学部）

2 学期 文化人類学講義 ジェンダーで読む文化

3. 共通教育担当

富山一郎 助教授

I セメスター 人間教育 マイノリティを考える

川村邦光 教授

II セメスター 専門基礎 日本学基礎

杉原 達 教授

II セメスター 基礎セミナー 日本学セミナー

真鍋昌賢 助手

II セメスター 専門基礎 民俗学

4. 他大学における集中講義等

[教員名, 大学名, 年度, セメスター, 担当授業科目, 講義/演習の別, 授業題目]

- 中村生雄 京都大学大学院文学研究科, H10. 4. 1~H11. 3. 31 (各週), 日本哲学特殊講義, 講義
近畿大学大学院文芸学研究科, H11. 4. 13~H12. 3. 31 (隔週), 日本文化論, 講義
- 富山一郎 九州大学大学院比較社会文化学府, H13. 4. 1~H14. 3. 31 (集中), 講義
京都大学大学院文学研究科, H9. 4. 4~H10. 3. 31 (各週), 講義
- 杉原 達 広島大学大学院教育学研究科, H9. 4. 1~H10. 3. 31 (集中), 異文化交流研究, 講義
- 真鍋昌賢 滋賀県立大学人間文化学部, H14. 10. 1~H15. 3. 31 (各週), 民俗学, 講義
同上, 同上, 民衆芸能論, 講義

【Ⅶ. 外部評価の報告】

桂島宣弘 (立命館大学文学部教授)

大阪大学大学院文学研究科日本学研究室の研究活動を外部から見て

一、総説——阪大日本学の創設以来の研究活動について

阪大日本学科は、一九七五年四月に日本では初めての日本学を冠する学科として創設された。未だ外国人による日本研究のみが日本学（ジャパノロジー）と称せられていた中で、そのネーミングからオリエンタリズムの日本版、あるいは「新国学」の到来かと憂慮する向きもあったが、実際は学際的な研究分野を開拓する学科として、またむしろ国民国家日本を歴史的・社会的に相対化する〈場〉としての先駆的な機能を果たし続けてきたと思う。ことに当初は大学院のみの創設であったこともあり、日本各地の大学からそれぞれの領域に飽きたらなさを感じていた精力的な学部卒業生が集い、加えて海外からの日本学研究を志す優秀な留学生も集って、他大学では類のない、国際的視点から日本を捉える一大研究センターが形成されていったことは特筆に値する。かかる大学院が先行しての盤石な基盤形成があつてこそ、一九八六年に学部生を受け入れるようになってからの学部生教育においても大きな成果を発揮することが可能になったと考えられる。また、それまでの日本文化学講座・比較文化学講座・社会言語学講座に加え、文化交流史講座・現代日本語学講座・日本語教育学講座が新設されたことによって、日本語を母語とする者とそうでない者とが共に総合的な日本学研究を行う〈場〉が一段と充実したと思われる。

今日の日本学研究室は、このうち日本文化学講座と文化交流史講座を母体としたものであろうが、それまでの思想史・民俗学・近代文化・社会史の領域に、さらに宗教史や沖縄学・女性史などが加わり、一段と学際性に厚みを増したように思われる。言語・地理学領域が他の講座に移行したことは、創設初期の総合性を知る者としてはやや残念なことではあったが、それを補ってあまりある充実ぶりであるといえよう。研究室全体の博士前期課程大学院生が集う「日本学研究方法論演習」、博士後期課程の大学院生と外部の者が集う「日本学研究方法論の会」などは、学際的な学問研究を研ぎ澄ます優れた研鑽の〈場〉となっていることは、多くの阪大日本学院生の研究会などでの研究発表からも推察されるところである。

国際化・学際化が要請される中、かけ声だけではない内実を知るためには、阪大日本学研究室の先駆的経験から学ぶことは少なくないと感じている。

二、現在の研究に関して

日本学に所属する教官（助手を含む）の研究は、いずれも今日の人文学の領域に新しい旋風を巻き起こすものとして注目されるものである。ジャンルとしては民俗学・宗教学・歴史学・社会学・女性史学ということになるだろうが、全体にそれらを横断しての研究という点に特質がある。一言でいえば、そのことによって近代日本の歴史過程、国家や社会のありようが鋭く問われ、現代の問題状況を析出しようとする実践的な性格を帯びている研究ということになるだろう。民俗・儀礼・宗教・ジェンダーが国家や社会との関連で鋭く問われ、また帝国日本とその植民地の歴史過程が越境や沖縄などを足場に鋭くえぐり出されていく。これらがいずれも現代日本との関わりで明らかにされ、問題の所在がきわめて明確に、しかも的確に取り出されている。したがって、その研究の影響力は学界にとどまらず、社会的にも大きいといえる。また、一般に横断型研究が有している方法的・体系的不安定さは、こうした現代社会・国家との鋭い対峙、問題設定によって、きわめて強靱な一貫性を確保しているように思う。さらに、周縁や社会的境界領域への着目、フィールド・ワークに基づく研究は、従来の研究が見落としてきた数多くの豊かな資史料の発掘をもたらし、この点は社会的にも高い評価を受けているように思う。量的に見ても、これだけ精力的に研究業績を次々に公にしている教官を擁している「日本」に関わる研究室は、全国的にも珍しいのではないか。

大学院生の研究も、テーマから見ると、いずれも意欲的かつ独創的な領域に果敢に挑んでいるものが多く、そこに教官の研究の影響が看取される。自由に各学問分野を横断しながら、問題構成的な研究活動を行っている姿勢は、ますます細分化が進行している既成学問状況に大きな刺激を与えるもので、今後の活躍が期待される。課程博士を中心とした博士学位の取得状況も順調であるように思う。また、在学院生による研究論文の公表状況、学会・研究会での発表状況も、単独の研究室としてはきわめて高い水準にあることは間違いない。印象的には、論文博士の学位取得状況がやや低調なように思われるが、歴史的に新しい研究室であることを勘案するとやむを得ないことのようにも思われる。

三、若干の問題点の指摘

日本学の旧講座以来の経緯を知る者として、研究の現状について若干の問題点と考えていることを以下に記しておきたい。

まず、これは既成の学問領域（歴史学・日本史学・日本思想史学）に所属する者としての保守的意識によるものともいえるが、学際的横断的研究はしばしば個別の「伝統的」ディスプリンの蓄積してきた方法や実証に対しては、粗雑さを露呈することもあること。この点は、院生の研究報告などに接して時々感じてきたことである。日本学出身者の鋭い問題構成的研究に共鳴してきた者として、既成の人文学領域に大きな風穴をあけるためにも、この点は他人事とはいえない問

題と受けとめている。もっとも、「日本学研究方法論演習」「日本学研究方法論の会」などが、こうした問題を克服していることも推察されるところで、このことは蛇足的な指摘に過ぎない。

また、創設以来の国際的なメッカとしての日本学科を知る者としては、近年やや国際的な研究者や留学生との交流、院生の国際学会での発表が停滞しつつあるという印象も持っている。このことは、無論現下の国際情勢下における日本学の位置が、以前のそれと異なってきていることも関係していると思われ、技術的に克服できる問題でもなからう。しかしながら、やや気になっていることでもあり、指摘だけしておきたい。

最後にこれは提案と受けとめていただきたいが、学際領域として、ことに既成の学問領域を先頭きって挑発してきた日本学研究室としては、『日本学報』の発刊に止まらず、そろそろ開かれた研究発表の〈場〉の構築を考えてもよいのではなからうか。ここで敢えて〈場〉とのべたのは、学会という既存の組織とは異なる開放的な研究交流の〈場〉としての日本学研究室への期待からである。多くの業績を挙げてきた退官教授、海外で活躍する日本学出身の研究者、各地で活躍するOB研究者、そして日本学から刺激を受けてきたわたくしのような外部の研究者などが、現在の教官・院生などと共に研鑽し、研究交流できる〈場〉が構築されることで、日本学研究室がこれまで果たしてきた既成の人文学領域の脱構築という課題は、一段と高いレベルで推進されることになるのではなからうか。 以上。

3-7 日本史学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

日本史学専門分野では、学部生・大学院生に対する教育および研究活動の基本を、(イ) 日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の習得、(ロ) 精緻な実証をふまえた独創的な研究能力の育成、(ハ) 時代・分野の枠にとらわれない、柔軟かつ幅広い歴史的思考力の獲得、(ニ) フィールドワークや古文書調査等、実地調査能力の習得、(ホ) プレゼンテーション能力の育成、に置いている。

(イ) では、特に各時代(古代・中世・近世・近代)で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めている。(ロ) では、卒論演習や大学院ゼミ、また修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図っている。(ハ) に関しては、年1回、学界の第一人者といわれる研究者に研究発表をしていただく場を日本史研究室として設けているほか、特に大学院生に対しては、学会運営に積極的に携わる中で、柔軟かつ幅広い歴史的思考力を身につけるよう指導している。(ニ) については、毎年恒例の新入生歓迎小旅行や研究室旅行で、現地見学・現地調査を実施しているほか、近世古文書演習において古文書調査合宿を行っている。(ホ) については、毎年7月に院生報告会、10月に卒論・修論報告会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表を行う機会を設けている。

以上のほか、日本史学専門分野では、学会において、教官と院生がともに委員として学会運営や研究活動を行う機会が多く、本専門分野の特色のひとつをなしている。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 4 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：猪飼隆明 梅村 喬 平 雅行 村田路人

助手：北泊謙太郎

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
54	16	12	1	1	0	3	1	2

※うち留学生0名，社会人学生2名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	12	5	1	1	0
'98	11	3	2	2	1
'99	18	7	1	3	0
'00	18	4	6	5	1
'01	13	9	6	2	0
計	72	28	16	13	2

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	1	1
'98	1	1	2
'99	0	3	3
'00	4	1	5
'01	1	1	2
計	6	7	13

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- 竹下喜久男 「近世地方芸能興行の研究」, 論文, 1998年2月,
主査: 村田路人, 副査: 天野文雄・平 雅行
- 寺木伸明 「近世部落の成立と展開に関する研究」, 論文, 1998年9月,
主査: 村田修三, 副査: 平 雅行・村田路人
- 伊藤真昭 「近世初頭の所司代に関する研究——寺社との関係を通して——」, 課程, 1999年3月,
主査: 村田修三, 副査: 平 雅行・江川 温・村田路人
- 加地宏江 「南北朝期における歴史叙述の基礎的研究」, 論文, 1999年4月,
主査: 平 雅行, 副査: 村田修三・荒木 浩
- 原田正俊 「日本中世の禪宗と社会」, 論文, 1999年6月,
主査: 平 雅行, 副査: 村田修三・天野文雄
- 吉田一彦 「日本古代社会と仏教」, 論文, 2000年2月, 主査: 平 雅行, 副査: 梅村 喬・村田修三
- 千田嘉博 「織豊系城郭の形成」, 論文, 2000年5月, 主査: 村田修三, 副査: 小林 茂・福永伸哉
- 伴瀬明美 「中世王家の成立および存在形態の研究」, 課程, 2000年8月,
主査: 平 雅行, 副査: 梅村 喬・村田修三
- 能川泰治 「近代日本都市下層社会の歴史的研究」, 課程, 2000年10月,
主査: 猪飼隆明, 副査: 村田路人・杉原 達
- 木下光生 「近世身分制社会と葬送の研究」, 課程, 2001年3月,
主査: 村田路人, 副査: 猪飼隆明・平 雅行
- 市 大樹 「律令国家都鄙間交通の研究」, 課程, 2001年3月,
主査: 梅村 喬, 副査: 村田修三・平 雅行
- 高橋昌明 「武士の成立 武士像の創出」, 論文, 2002年2月,

主査：平 雅行，副査：村田修三・梅村 喬
 愛宕邦康 『『遊心安楽道』の研究』，課程，2002年3月，主査：平 雅行，副査：梅村 喬・榎本文雄

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等の 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	4	2	0	0	1	7
'98	9	1	0	0	11	21
'99	6	2	0	0	4	12
'00	7	4	0	0	4	15
'01	7	7	0	2	2	18
計	33	16	0	2	22	73

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	12	2	0	1	15
'98	0	14	2	0	0	16
'99	0	27	2	0	0	29
'00	0	14	5	0	0	19
'01	0	11	13	7	0	31
計	0	78	24	7	1	110

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績*

(1) 論文

- 高木秀樹 「聖一派下大慈門派の伊勢への進出」，『禅学研究』78，2000年3月
 高木秀樹 「書評：上田純一著『九州中世禅宗史の研究』」，『日本宗教文化史研究』9，2001年5月
 大田壮一郎 「大覚寺門跡と室町幕府——南北朝～室町期を中心に——」，『日本史研究』433号，1999年7月
 大田壮一郎 「室町幕府の追善仏事に関する一考察」，『仏教史学研究』44-2，2002年3月
 加藤宏文 「萩藩の「郡問屋」について——村落支配における都市問屋の役割・存在形態——」，『瀬戸内海地域史研究』7 1999年7月
 野村 玄 「高仁親王葬送の歴史的位位置」，『史海』48，2001年6月
 野村 玄 「後光明天皇の即位と江戸幕府」，『日本史研究』467，2001年7月
 野村 玄 「明正天皇論——即位・在位・譲位の背景——」，『京都産業大学論集』人文科学系列29，2002年3月
 山口佳代子 「自由な発想——庶民とともに歩んだ浪速文化⑥読書習慣の定着が支えた大坂の出版業」，『江戸時代人づくり風土記・大阪の歴史力』，2000年3月
 山口佳代子 「幕末の動乱と大坂 変動の時代へ③幕末の異変とさまざまな情報」，『江戸時代人づくり風土記・大阪の歴史力』，2000年3月
 山口佳代子 「幕末期大坂における一枚摺出版活動」，大阪大学文学部日本史研究室編『近世近代の地域と

- 権力], 清文堂, 1998年12月
- 山口佳代子 「男装する「美少女戦士」—— 異性装のキャラクターから見るアニメ『セーラームーン』——」, 『女性学年報』18, 1997年11月
- 山口佳代子 「田村由美『BASARA』に見る異性装のヒロイン—— 「男装の麗人」譚の90年代的変容をめぐって——」, 『女性学年報』21, 2000年11月
- 飯沼雅行 「山崎通における公儀制札馬借所と領主制札馬借所について—— 脇街道の支配形態に関する一考察——」, 『交通史研究』40, 1997年11月
- 木下光生 「近世大坂における墓所聖と葬送・諸死体処理」, 『日本史研究』435, 1998年11月
- 木下光生 「大坂六ヶ所墓所聖の存立構造」, 『ヒストリア』168, 2000年1月
- 木下光生 「近世おんぼう論」, 『部落問題研究』140, 1997年8月
- 木下光生 「近世葬具業者の基礎的研究」, 『大阪の歴史』57, 2001年4月
- 木下光生 「近世口丹波地方における隠墓の存在形態」, 細川涼一編『三昧聖の研究』所収, 碩文社, 2001年4月
- 愛知県部落解放運動連合会編『近世尾張の部落史』, 愛知県部落解放運動連合会(木下氏が全文執筆), 同左, 2002年3月
- 木下光生 「前近代身分制研究の成果と課題(1998年)」, 『部落問題研究』150, 2000年3月
- 田中隆一 「韓国併合と天皇恩赦大権」, 『日本歴史』602, 1998年7月
- 田中隆一 「アジア太平洋戦争期の戒厳令解釈と『総督政治』」, 大阪大学文学部日本史研究室編『近世近代の地域と権力』, 清文堂, 1998年12月
- 田中隆一 「『満洲国』における憲法制定問題」, 『日本史研究』449号, 2000年1月
- 田中隆一 「満洲国治外法権撤廃と満鉄」, 小林英夫編『近代日本と満鉄』, 吉川弘文館, 2000年4月,
- 田中隆一 「満洲国下の満鉄と『日本海ルート』」, 小林英夫編『近代日本と満鉄』, 吉川弘文館, 2000年4月
- 田中隆一 「『満洲国』初期の領事館警察と治外法権撤廃」, 『日本植民地研究』12, 2000年6月
- 田中隆一 「帝国日本の司法連鎖」, 『朝鮮史研究会論文集』38, 2000年10月
- 田中隆一 「『満洲国』協和会の『在満朝鮮人』政策と徴兵制—— 青年文化運動との関連から——」, 『帝塚山学院大学日本文学研究』33, 2002年2月
- 頼原善徳 「日清・日露戦争研究のための覚書—— 日本の「環太平洋構想」とアメリカ・「脱亜脱欧」——」『新しい歴史学のために』226, 1997年5月
- 頼原善徳 「19世紀末日本の環太平洋構想—— 金子堅太郎における論理と展開——」, 『ヒストリア』158, 1997年11月
- 頼原善徳 「稲垣満次郎論—— 明治日本と大太平洋・アメリカ——」, 『ヒストリア』160, 1998年6月
- 頼原善徳 「成立期第一次桂内閣の性格に関するノート」, 大阪大学文学部日本史研究室編『近世近代の地域と権力』, 清文堂, 1998年12月
- 頼原善徳 「日清・日露戦争の世界史的位置」, 『日本史研究』439, 1999年3月
- 寺田匡宏 「復興と歴史意識—— 阪神大震災記録保存運動の現在——」, 『歴史学研究』701, 1997年9月
- 寺田匡宏 「西撰水車と絞油—— 技術革新と地域社会の変貌——」, 酒井一監修『江戸時代人づくり風土記28兵庫』農山漁村文化協会, 1998年10月
- 寺田匡宏 「震災と歴史学徒—— 1995-2000——」, 『歴史科学』161, 2000年6月
- 寺田匡宏 「近世西撰の産業技術と地域社会—— 灘目水車業を中心に——」, 地方史研究協議会編『巨大都市大阪と摂河泉』, 雄山閣, 2000年10月
- 寺田匡宏 「近世中後期, 西撰地域の人口と社会—— 菟原郡魚崎村を中心に——」, 『ヒストリア』173, 2001年1月
- 寺田匡宏 「落とされた記憶の行方—— 都市に記憶を「込める」の射程——」, 宮本佳明・笠原一人・季村敏夫・菅祥明・寺田匡宏『風景・記憶・建築—— 同時多発テロ, 震災, 戦争の解説——』, 震災・まちのアーカイブ, 2002年2月
- 寺田匡宏 「記憶と歴史のあいだにあるもの—— 2001年・阪神大震災という問い——」, 都留文化大学比較文化学会『2001年度比較文化学会講演会報告集』, 2002年3月

- 真木隆行 「後宇多天皇の密教受法」, 大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』, 清文堂 1998年12月,
- 真木隆行 「東寺座主構想の歴史的変遷」, 『仏教史学研究』41-2, 1999年3月
- 真木隆行 「鎌倉末期における東寺最頂の論理——『東宝記』成立の原風景——」, 東寺文書研究会編『東寺文書にみる中世社会』, 東京堂出版, 1999年5月
- 木村英一 「鎌倉後期の勅命施行と六波羅探題」, 『ヒストリア』167, 1999年11月
- 木村英一 「六波羅探題の成立と公家政権——「洛中警固」を通して——」, 『ヒストリア』178, 2002年1月
- 木村英一 「根来寺と寺領荘園」, 山陰加春夫編『きのくに荘園の世界』下, 清文堂, 2002年2月
- 松迫寿代 「堂島米市場の仕組みと役割——全国米相場の形成」, 『江戸時代人づくり風土記 大阪』第四章-1, 農山漁村文化協会, 2000年3月
- 松迫寿代 「道修町の成立と発展」, 『江戸時代人づくり風土記 大阪』第四章-3, 農山漁村文化協会, 2000年3月
- 松迫寿代 「干鯛仲買近江屋長兵衛の盛衰」, 『江戸時代人づくり風土記 大阪』第四章-6 (中川すがね氏と共同執筆), 農山漁村文化協会, 2000年3月
- 前田 徹 「安芸国三田郷の耕地景観と「村」」, 『芸備地方史研究』212・213合併号, 1998年12月
- 前田 徹 「備中国賀夜郡服部郷の開発」, 『地方史研究』281, 1999年10月
- 愛宕邦康 「円珍招来の菩提流志訳「不空罽索經」一卷について」, 『待兼山論叢』32 史学編, 1998年12月
- 愛宕邦康 「『浄土三国仏祖伝集』における元暁の位置付け」, 『印度学・仏教学研究』48, 1999年12月
- 愛宕邦康 「浄土宗における元暁像について」, 『仏教文化研究』46, 2002年9月
- 愛宕邦康 「課程博士論文:『遊心安楽道』の研究」, 同左, 2002年3月
- 市 大樹 「国司任符に関する基礎的考察」, 『古文書研究』47, 1998年4月
- 市 大樹 「国司任符の発給について」, 『延喜式研究』14, 1998年3月
- 市 大樹 「九世紀畿内地域の富豪層と院宮王臣家・諸司」, 『ヒストリア』163, 1999年1月
- 市 大樹 「伊勢国計会帳の作成年代と浮浪人の通送」, 『続日本紀研究』326, 2000年6月
- 市 大樹 「伊勢国計会帳からみた律令国家の交通体系」, 『三重県史研究』17, 2001年
- 市 大樹 「朝使派遣と国司」, 『文化財論叢Ⅲ』, 2002年
- 市 大樹 「1999年古代史部会大会報告批判」, 『歴史学研究』731, 1999年12月
- 市 大樹 「課程博士論文:『律令国家都鄙間交通の研究』」, 同左, 2001年3月
- 保母 崇 「奈良末期から平安初期の東宮官人と皇太子」, 『日本歴史』625, 2000年6月
- 保母 崇 「律令制下における東宮坊の構造とその特質について」, 『待兼山論叢』34 史学編, 2000年12月
- 中尾浩康 「延暦十一年の軍制改革について」, 『日本史研究』467, 2001年7月
- 筑木一郎 「書評:林宥一著『「無産階級」の時代——近代日本の社会運動——』」, 『日本史研究』469, 2001年9月

*1997年度~2001年度に発表された大学院生・PD 研究員・特別研究学生の発表論文, レフェリー付きの雑誌に掲載された論文, およびそれに準ずる論文 (日本史研究室)

(2) 口頭発表

- 高木秀樹 「中世禅僧における禅と祈祷」, 日本史研究会中世史部会, 1999年4月
- 高木秀樹 「聖一派下大慈門派の伊勢への進出」, 禅学研究会学術大会報告, 1999年11月
- 馬部隆弘 「城郭支配政策からみた戦国期毛利氏の権力構造」, 城郭談話会, 2001年3月
- 大田壮一郎 「大覚寺門跡の形成と室町幕府」, 延暦寺文書復元研究会, 1998年5月
- 大田壮一郎 「大覚寺門跡の形成と室町幕府——南北朝~室町期を中心に——」, 大阪歴史学会中世史部会, 1998年7月
- 大田壮一郎 「大覚寺門跡と室町幕府——南北朝~室町期を中心に——」, 日本史研究会中世史部会, 1999

年1月

- 大田壮一郎 「室町幕府の仏事体系」, 大阪歴史学会中世史部会, 1999年11月
- 大田壮一郎 「鎌倉室町期の国家的法会について」, 仏教史学会例会, 2000年3月
- 大田壮一郎 「黒田史学と中世宗教史研究」, 大阪歴史科学協議会前近代史研究部会, 2000年5月
- 大田壮一郎 「鎌倉室町期の国家的法会について——公請の退転と武家八講——」, 日本史研究会中世史部会, 2000年7月
- 大田壮一郎 「室町時代の仏事儀礼について——武家八講を中心に——」, 中世史研究会例会, 2001年10月
- 木下光生 「大坂六ヶ所墓所聖の存立構造」, 大阪歴史学会1999年度大会報告, 1999年6月
- 田中隆一 「アジア・太平洋戦争期の戒厳令解釈と『総督政治』」, 朝鮮史研究会関西部会月例会, 1998年3月
- 田中隆一 「韓国併合と天皇恩赦大権」, 東アジア近代史学会大会報告, 1998年6月
- 田中隆一 「『満洲国』における憲法制定問題」, 日本史研究会近現代史部会, 1999年4月
- 田中隆一 「朝鮮民族解放運動と法域」, 日本近代法制史研究会月例会, 1999年5月
- 田中隆一 「十五年戦争期の満鉄と『日本海ルート』」, 日本植民地研究会大会報告, 1999年6月
- 田中隆一 「帝国日本の司法連鎖」, 朝鮮史研究会大会報告, 1999年10月
- 田中隆一 「『満洲国』期の領事館警察と治外法権撤廃」, 日本植民地研究会月例会, 2000年1月
- 田中隆一 「『満洲国』政治史研究の射程」, 京都市科歴史部会月例会, 2001年12月
- 田中隆一 「『満洲国』期における朝鮮人国籍問題」, 朝鮮史研究会月例会, 2002年4月
- 顕原善徳 「19世紀末日本の環太平洋構想——金子堅太郎における論理と展開——」, 大阪歴史学会1997年度大会報告, 1997年6月
- 顕原善徳 「日清・日露戦争の世界史的位置」, 日本史研究会1998年度大会報告, 1998年11月
- 寺田匡宏 「震災と歴史学徒」, 大阪歴史科学協議会5月例会, 1999年5月
- 寺田匡宏 「近世西撰の産業技術と地域社会」, 地方史研究協議会大会, 1999年10月
- 寺田匡宏 「近世中後期, 西撰地域の人口と社会」, 大阪歴史学会大会, 2000年6月
- 寺田匡宏 「記憶とさまざまな声の歴史へ」, 2001年度都留文化大学比較文化学会講演会, 2001年5月
- 寺田匡宏 「国立歴史民俗博物館における災害史展示の試み」, 阪神大震災の史料保存と記録化に関する研究会, 2002年2月
- 寺田匡宏 「歴史学における災害史と環境史研究」, 国立歴史民俗博物館基幹研究「環境利用システムの多様性と生活世界」第4回研究会, 2002年3月
- 真木隆行 「東寺座主の創出とその終焉」, 仏教史学会例会, 1997年9月
- 真木隆行 「中世東寺の構造と変容」, 大阪歴史学会中世史部会第一回大会準備報告, 1999年1月
- 真木隆行 「中世における宗的結合」, 大阪歴史学会中世史部会第二回大会準備報告, 1999年4月
- 真木隆行 「中世東寺長者の成立」, 大阪歴史学会中世史部会第三回大会準備報告, 1999年5月
- 真木隆行 「中世東寺長者の成立」, 大阪歴史学会大会報告, 1999年6月
- 木村英一 「鎌倉後期の公家政権・六波羅探題・在地——六波羅探題の勅命施行をめぐる——」, 日本史研究会中世史部会, 1998年2月
- 木村英一 「新日吉小五月会と公家政権・鎌倉幕府——平安末～鎌倉中期を対象として——」, 大阪歴史学会中世史部会, 1998年12月
- 木村英一 「鎌倉幕府京都大番役の勤仕先について」, 大阪歴史学会中世史部会, 2000年11月
- 木村英一 「六波羅探題の成立・展開と公家政権——洛中警固問題を通して——」, 大阪歴史学会中世史部会第一回大会準備報告, 2001年3月
- 木村英一 「六波羅探題の成立と公家政権——「洛中警固」を通して——」, 大阪歴史学会中世史部会第二回大会準備報告, 2001年5月
- 木村英一 「六波羅探題の成立と公家政権——「洛中警固」を通して——」, 大阪歴史学会中世史部会第三回大会準備報告, 2001年6月
- 木村英一 「六波羅探題の成立と公家政権——「洛中警固」を通して——」, 大阪歴史学会2001年度大会報告, 2001年6月
- 皿海ふみ 「近世武家社会における穢——幕府の制度を中心に——」, 日本史研究会近世史部会, 1998

- 年3月
- 前田 徹 「平安後期の沖積地開発——安芸国三田郷を中心に——」, 日本史研究会中世史部会, 1997年4月
- 前田 徹 「大阪湾岸地域研究の整理」, 大阪歴史学会中世史部会, 1998年4月
- 前田 徹 「領域型荘園と私領主・村——東寺領伊勢国大國荘——」, 大阪歴史学会中世史部会, 1998年11月
- 前田 徹 「郡郷司と中世的領域支配」, 大阪歴史学会大会準備報告, 2002年1月
- 愛宕邦康 「『浄土三国仏祖伝集』における元暁の位置付け」, 印度学仏教学会第50回学術大会, 1999年9月
- 市 大樹 「九世紀畿内地域の富豪層と院宮王臣家・諸司」, 大阪歴史学会1998年度大会報告, 1998年6月
- 市 大樹 「召文木簡をめぐって——平城京出土木簡を中心に——」, 奈良文化財研究所, 2002年2月
- 中尾浩康 「健児小考」, 名古屋古代史研究会, 2001年10月
- 筑木一郎 「書評: 林宥一著『「無産階級」の時代——近代日本の社会運動——』」, 日本史研究会・歴史学研究会合同書評会, 2000年11月
- 平野淳子 「日蓮と不授不施——千葉氏と安達氏への態度を通じて——」, 大阪歴史学会中世史部会, 2000年10月
- 下小牧雅広 「撰関期僧綱考——南都僧綱の教学的・資縁の変容——」, 大阪歴史学会中世史部会, 2001年1月
- 松永和浩 「北朝の年中行事——公武関係史像の素材として——」, 大阪歴史学会中世史部会, 2001年9月

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

- 野村 玄 昌平坂学問所創建200年 財団法人斯文会創立80年記念論文佳作賞 財団, 1998年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 6 名

<内訳> PD: 2名 DC: 4名 外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者 (1997~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で, 大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 3 名

'97年度: 1名 '98年度: 0名 '99年度: 1名 '00年度: 0名 '01年度: 1名

<内訳>

1998年度 (D 修了) 真木隆行 山口大学人文学部 講師

2000年度 (D 修了) 北泊謙太郎 大阪大学大学院文学研究科 助手*

7. 専門分野出身の高度職業人数（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業生で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 14 名

'97年度：0名 '98年度：2名 '99年度：4名 '00年度：4名 '01年度：4名

<内訳>

技術職 2名 ジャーナリスト 4名 教職 5名 その他 3名

<主な職業名・就職先等>

1998年度 大阪府立中之島図書館 司書 1名

2001年度 国立国会図書館 司書 1名

京都大学法学部図書館 司書 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 4 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3 名

10. 刊行物

1998年12月 『古代中世の社会と国家』 論文集

（大阪大学文学部日本史研究室編，清文堂，日本史研究室50周年記念論文集）

1998年12月 『近世近代の地域と権力』 論文集

（大阪大学文学部日本史研究室編，清文堂，日本史研究室50周年記念論文集）

1998年3月 『難波家（平野家）史料目録』 その他

（大阪大学文学部日本史研究室編，和泉書院）

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

①97年度～01年度「中世寺院法研究会」（研究会）

②97年度～01年度「日根野を考える会」（研究会）

③99年度～01年度「大阪歴史科学協議会」（学会）

④2000年8月「日本宗教史懇話会」（研究会）

⑤2001年6月「フランス極東学院プロジェクト第2回研究会」（国際研究会）

⑥2000年7月「横井小楠研究会大会」（研究会）

⑦2002年6月～「大阪歴史学会」（学会）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

98年度～01年度 研究室例会

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

(1) 教官スタッフ

日本史学専門分野では、1997年度以降、古代史1，中世史2，近世史1，近代史1の計5名の教授・助教授および1名の助手（近代史）によって、教育・研究活動を行ってきた。古代から近代までの日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対しては、行き届いた教育がおこなえたものと判断している。

(2) 学生・院生数と教育・研究環境

日本史学専修に進む学部2年生は、この5年間、毎年十数名を数え、本専修の人気の高さを示している。大学院生は、博士前期課程入学者は、97年度入学は3名であったが、翌98年度以降は毎年7～9名が入学・進学している。博士後期課程は毎年2～4名の入学・進学である。ともに、他大学からの入学者が増えていることが、近年の特徴であり、内部からの進学者が大半を占めていた時期に比べ、院生間に活力が出てきた。

いっぽう、学生・院生の増加により、2002年度は学部生54名、院生28名となった。このほか研究生・科目等履修生などを加えると、研究室の学生・院生等は90名を数える。活気はあるが、現在の研究室は人数に比べ手狭であり、教育・研究環境は必ずしも良好とはいえない。特に研究室に設置されているコンピューター台数は2台程度であり、構成員の人数に比して極端に少なく、情報処理装置の利用活用については考える余地がある。

(3) 学生・院生教育と就職状況

教官スタッフは全時代をカバーしているため、学部・大学院ともに、各時代にわたる講義・演習が用意されており、この点では充実した教育体制といえる。非常勤講師の割り当ては2 Semester分、前期・後期それぞれ1 Semesterずつ2人の講師に講義を担当していただいているが、4時代のうち2時代に限定されるので、学生・院生間に不満の声があがっている。非常勤講師枠の拡大が望まれる。

教育内容については、各時代とも、徹底した史料読解を訓練する史料講読演習を通して、日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の育成に努めており、一定の成果をあげている。また、近世古文書解読演習では、いちよう祭展示への参加や史料目録作りによって、実践的な古文書教育を行っている。

就職については、学部卒業生に関しては、おおむね良好である。一般企業が大半を占めるが、新聞社や図書館に就職した者もいる。院生に関しても、前期課程修了者はおおむね良好といってよい。高校教員・図書館司書・自治体史編纂室職員など、専門性の高い分野への就職が多いが、一般企業への就職も急増している。大学院博士前期課程が、高度教養人養成機関としての性格をあわせもってきたことの反映として、評価できるのではないと思われる。後期課程修了者については、大学等への就職は相変わらず難しいが、特に就職率が低下したわけではない。

(4) 研究室全体としての教育

「はじめに『研究・教育活動の概要とその特色』」で記したように、毎年、学外の研究者を招いての例会、新入生歓迎小旅行や研究室旅行による現地見学・現地調査、卒論・修論発表会や院生報告会を行い、教室での講義・演習では修得できない能力の育成を図っている。これらは、教育上大の効果をあげており、今後も継続して行いたい。

(5) 課程博士号学位取得

この5年間では7名で、院生の数を考えれば少ない。今後、学位取得者増加のため、指導の強化を図りたい。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等 (1997年度～2001年度の過去5年間)

1-1. 論文

- 猪飼隆明 「西南戦争における軍夫」、『近世近代の地域と権力』、大阪大学文学部日本史研究室、pp. 363-381, 1998.
- 猪飼隆明 「明治前期の美原」、『美原町史』第1巻、美原町、pp. 865-923, 1999.
- 猪飼隆明 「明治後期の美原」、『美原町史』第1巻、美原町、pp. 924-1000, 1999.
- 猪飼隆明 「黙殺された近代の民衆運動」、『徹底批判《国民の歴史》』、大月書店、pp. 216-227, 2000.
- 猪飼隆明 「薩摩藩出身の維新の指導者 西郷隆盛と大久保利通」、『人物で読む近現代史』上巻、青木書店、pp. 16-22, 2001.
- 猪飼隆明 「江戸を戦火から救った 勝海舟」、『人物で読む近現代史』上巻、青木書店、pp. 23-30, 2001.
- 猪飼隆明 「軍備を重視した岩倉具視と山県有朋」、『人物で読む近現代史』上巻、青木書店、pp. 46-52, 2001.
- 猪飼隆明 「熊本近代史概説」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 1-19, 2001.
- 猪飼隆明 「世界の中の日本、日本の中の熊本」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 23-36, 2001.
- 猪飼隆明 「維新政権の性格と肥後藩」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 102-151, 2001.
- 猪飼隆明 「廃藩置県と実学党政権の崩壊」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 223-236, 2001.
- 猪飼隆明 「西南戦争」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 602-655, 2001.
- 猪飼隆明 「自由民権運動の展開」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 762-835, 2001.
- 猪飼隆明 「デフレ下の都市と農村」、『新熊本市史』通史編 第5巻 近代1、熊本市、pp. 859-887, 2001.
- 猪飼隆明 「国権党の対外硬運動と自由党の分裂」、『新熊本市史』通史編 第6巻 近代2、熊本市、pp. 244-271, 2001.
- 猪飼隆明 「ハンナ・リデルと回春病院」、『新熊本市史』通史編 第6巻 近代2、熊本市 pp. 364-393, 2001.
- 猪飼隆明 「『熊本評論』と大逆事件」、『新熊本市史』通史編 第6巻 近代2、熊本市、pp. 785-834, 2001.
- 猪飼隆明 「地租改正絵図と村図」、『荒尾市史』絵図・地図編、荒尾市、pp. 159-212, 2001.
- 猪飼隆明 「炭鉱図」、『荒尾市史』絵図・地図編、荒尾市、pp. 213-250, 2001.
- 猪飼隆明 「幕末維新时期における民衆の居住空間と生活についての研究」、『幕末維新論集8 形成期の明治国家』、吉川弘文館、pp. 322-394, 2001.
- 猪飼隆明 「西郷隆盛」、『歴史が動くとき——人間とその時代——』、青木書店、pp. 269-288, 2001.
- 猪飼隆明 「『原罪』としての天皇制」、『唯物論と現代』24号、関西唯物論研究会、pp. 13-22, 2000.
- 猪飼隆明 「アジアの中の天皇制」、『歴史科学』Jun. 00、大阪歴史科学協議会、pp. 25-36, 2000.

- 梅村 喬 「「在地」の歴史的語義について——「在地造語」と「在地成語」——」,『日本史研究』第440号,日本史研究会,pp. 62-72, 1999.
- 梅村 喬 「平安時代土地公証制度の研究序説——立券文書と在地——」,『大阪大学大学院文学研究科紀要』第40号,Osaka University,pp. 153-198, 2000.
- 梅村 喬 「大須真福寺文庫新出の尾張国郡司百姓等解文写本について」,『愛知県史研究』第4号,愛知県,pp. 165-171, 2000.
- 梅村 喬 「古代史から見た初期中世史研究——「戦後史学」検証の試み——」,『歴史科学』第162号,歴史科学協議会,pp. 1-10, 2000.
- 梅村 喬 「平安時代土地公証制試論——在地・領主・文書——」,『ヒストリア』第172号,大阪歴史学会,pp. 151-176, 2001.
- 梅村 喬 「「承平二年丹波国牒」の背景——条里坪付の展開——」,『待兼山論叢』第35号,大阪大学大学院文学研究科,pp. 1-25, 2001.
- 梅村 喬 「在地再論——古代と中世のあいだ——」,『歴史の理論と教育』第111号,名古屋歴史科学研究会, 2001.
- 平 雅行 「殺生禁断の歴史的展開」,『日本社会の史的構造』古代・中世,思文閣出版,pp. 149-171, 1997.
- 平 雅行 「旧仏教と女性」,『日本女性史論集』5差別と宗教,吉川弘文館,pp. 150-179, 1998.
- 平 雅行 「定豪と鎌倉幕府」,『古代中世の社会と国家』,清文堂,pp. 427-444, 1998.
- 平 雅行 「将軍九条頼経時代の鎌倉の山門僧」,『日本仏教の史的展開』,塙書房,pp. 283-299, 1999.
- 平 雅行 「和泉 撰津」,『中世諸国一宮制の基礎的研究』,岩田書院,pp. 57-73, 2000.
- 平 雅行 「日本の肉食慣行と肉食禁忌」,『アイデンティティ・周縁・媒介』,吉川弘文館,pp. 146-163, 2000.
- 平 雅行 「中世前期の文化」,『概説日本歴史』,吉川弘文館,pp. 90-101, 2000.
- 平 雅行 'Tabous et alimentation carnee dans l'histoire du Japon', *Identites, marges, mediations*, ECOLE FRANCAISE D'EXTREME-ORIENT, pp. 165-182, 2001.
- 平 雅行 「中世仏教の成立と展開」,『展望日本歴史』9中世社会の成立,東京堂出版,pp. 220-255, 2001.
- 平 雅行 「日本中世の祈り」,『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第32号,滋賀大学経済学部附属史料館,pp. 1-23, 1999.
- 平 雅行 「鎌倉山門派の成立と展開」,『大阪大学大学院文学研究科紀要』第40号,大阪大学文学研究科,pp. 41-151, 2000.
- 平 雅行 「ラディカルな罪と救済のドラマ」,『AERA MOOK/親鸞がわかる』,朝日新聞,pp. 30-33, 1999.
- 平 雅行 「女人往生——仏教と女性——」,『日本歴史大事典』3巻,小学館,pp. 301-303, 2001.
- 平 雅行 「仏教思想史研究と顕密体制論」,『日本史研究』第422号,日本史研究会,pp. 46-61, 1997.
- 村田路人 「畿内近国支配論について」,『日本史研究』第428号,日本史研究会,pp. 98-103, 1998.
- 村田路人 「享保の国分けと京都・大坂町奉行の代官支配」,『近世近代の地域と権力』,清文堂出版,pp. 325-341, 1998.
- 村田路人 「大坂周辺地域の支配と大坂」,『近世の大坂』,大阪大学出版会,pp. 63-83, 2000.
- 村田路人 「非領国地域における鳴物停止令——触伝達の側面から——」,『大阪の歴史』56号,大阪市史編纂所,pp. 1-36, 2000.
- 村田路人 「勘定奉行神尾春央巡見先触の伝達をめぐる——撰津・河内の事例から——」,『枚方市史年報』4号,枚方市,pp. 1-18, 2001.
- 村田路人 「代官郡触と幕府の畿内近国広域支配」,『待兼山論叢』第31号史学篇,大阪大学文学会,pp. 1-26, 1997.
- 村田路人 「近世の地域支配と触」,『歴史評論』第587号,歴史科学協議会,pp. 53-68, 1999.
- 北泊謙太郎 「日露戦争中の出征軍人家族援護に関する一考察——下士兵卒家族救助令との関わりにおいて——」,『待兼山論叢<史学篇>』第33号,大阪大学文学会,pp. 51-73, 1999.

北泊謙太郎 「日露戦争後における帝国在郷軍人会の成立と展開——大阪聯隊区司令部管内を事例に——」,『ヒストリア』第163号,大阪歴史学会, pp. 197-221, 1999.

1-2. 著書

- 平 雅行 「鎌倉幕府の顕密寺社政策についての基礎的研究」,平 雅行,大阪大学, 150p., 2002.
- 平 雅行 「親鸞とその時代」,平 雅行,法蔵館, 220p., 2001.
- 梅村 喬 「愛知県の歴史」,(共著),三鬼清一郎/梅村喬/加藤益幹/西田真樹/岸野俊彦/津田多賀子,山川出版社, 400p., pp. 9-40, 2001.
- 梅村 喬 「詳解日本史 B」,梅村 喬,三省堂, 377p. pp. 21-60, 1999.
- 梅村 喬 「愛知県史・資料編6 古代 I」,(共著),福岡猛志/神野清一/玉井力/梅村喬/清田善樹/西宮秀紀/上川通夫,愛知県, 989p., pp. 1-989, 1999.
- 猪飼隆明 「熊本県の歴史」,(共著),板楠/工藤敬一/松本寿三郎/猪飼隆明,山川出版社, 400p., pp. 250-330, 1999.
- 猪飼隆明 「熊本県の明治秘史」,猪飼 隆明,熊本日日新聞社, 200p., 1999.
- 村田路人 「近世畿内における幕府支配機構の研究」,74p., 2000.
- 村田路人 「羽曳野市史第二巻本文編2」,(共著),藪田貫(関西大学)内田満(埼玉県立熊谷高校)/村田路人/河島一仁(立命館大学)/山中浩之(大阪女子大学)/山中永之佑(追手門大学)/秋元みゆき/酒井一(天理大学)/小路田泰直(奈良女子大学)/古田実(大阪芸術大学)/吉田晶,羽曳野市, 1074p., pp. 26-47/100-119/120-141, 1998.
- 村田路人 「江戸時代人づくり風土記27・49大阪 見る・読む・調べる 大阪の歴史力」,(共編著),内田九州男(愛媛大学)/渡邊忠司(大阪市史料調査会)/中川すがね(甲子園大学)/村田路人/岡田光代(大阪府立大学)/山中浩之(大阪女子大学)/監修者・藤本篤,農山漁村文化協会, 636p. pp. 224-229/358-363, 2000.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 書評

- 梅村 喬 「亀田隆之『日本古代治水史の研究』」,『日本史研究』466号,日本史研究会, pp. 63-69, 2001.
- 梅村 喬 「早川庄八著『日本古代の財政制度』」,『日本歴史』641号,吉川弘文館, pp. 107-108, 2001.
- 村田路人 「塚田孝『近世の都市社会史——大坂を中心に——』」,『歴史科学』149号,大阪歴史科学協議会, pp. 35-40, 1997.
- 村田路人 「藤本清二郎『近世賤民制と地域社会——和泉国の歴史像——』」,『日本史研究』443号,日本史研究会, pp. 54-60, 1999.
- 村田路人 「杉本史子『領域支配の展開と近世』」,『日本歴史』633号,吉川弘文館, pp. 116-118, 2001.

(2) 辞典項目

- 平 雅行 「『京都市姓氏歴史人物大辞典』54項目」,『京都市姓氏歴史人物大辞典』,角川書店, pp. 54項目, 1997.
- 平 雅行 「『岩波日本史辞典』23項目」,『岩波日本史辞典』,岩波書店, pp. 23項目, 1999.
- 平 雅行 「『日本歴史大事典』47項目」,『日本歴史大事典』,小学館, pp. 47項目, 2001.
- 猪飼隆明 「『日本史辞典』」,岩波書店,伊藤博文ほか19項目, 1999.
- 猪飼隆明 「『世界史辞典』」,角川書店,征韓論ほか5項目, 2000.
- 猪飼隆明 「『日本歴史大辞典』」,小学館,秋月の乱ほか16項目,
- 梅村 喬 「『岩波日本史辞典』15項目」,『岩波日本史辞典』,岩波書店, pp. 15項目, 1999.
- 村田路人 「麻田藩」「国役」「国役普請」,『日本歴史大事典』1,小学館, pp. 41/998/998, 2000.
- 村田路人 「御普請」「桜井谷騒動」「狭山藩」「定式普請」,『日本歴史大事典』2,小学館, pp. 158/245/284/522-523, 2000.
- 村田路人 「中甚兵衛」「普請役」,『日本歴史大事典』3,小学館, pp. 152/572, 2001.

村田路人 「国別主要地誌一覧」のうち「摂津」「河内」「和泉」,『日本歴史大事典』4,小学館,pp. 342-343, 2001.

(3) 解題・解説・総説

平 雅行 「黒田俊雄『王法と仏法』,『王法と仏法』,法蔵館,pp. 269-278, 2001.

梅村 喬 「2000年度の歴史学界—回顧と展望(日本古代史)」,(共著)梅村 喬/早川万年/近藤大毅/平野岳美/安原 功/市 大樹/西宮秀紀/上川通夫/稲葉佳代/丸山裕美子/古尾谷知浩,『史学雑誌』,史学会,110-5号,pp. 40-41/52-55, 2001.

村田路人 「1997年の歴史学界——回顧と展望——日本 近世三(政治・支配史関係)前期」,『史学雑誌』,史学会,107-5号,pp. 122-125, 1998.

村田路人 「江戸時代の国役と村々」,『広報とよなか』,豊中市,pp. 49, 1998.

村田路人 「国役普請と普請の請負人」,『広報とよなか』,豊中市,pp. 45, 1998.

北泊謙太郎 「特集:戦争遺跡から見た近代大阪——大阪大空襲から55年——「特集にあたって」」,『ヒストリア』第171号,大阪歴史学会,pp. 1-3, 2000年9月

(4) その他(エッセイ,批評,新聞記事,インタビュー等)

平 雅行 「中世民衆と顕密仏教」,『中外日報』,中外日報社,pp. 1面,1998年6月16日

平 雅行 「増幅された文明の不安」,(共著),平 雅行/ジャン・ドリュモア(フランス社会科学高等研究院),文化総合面,朝日新聞社,2000年12月6日

北泊謙太郎 「歴史資料保存と歴史学の間における問題とは——「阪神・淡路大震災と歴史学 パートII」の報告・討論をめぐって——」,『日本史研究』第421号,日本史研究会,pp. 79-83, 1997年9月

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

猪飼隆明 「日本近代化の特質について」,第15回日露国際学術シンポジウム,ロシア・ウラジオストク 極東大学,1999年9月7日

(2) 国内学会

平 雅行 「戒律と儀礼」,共同,仏教史学会50周年記念シンポジウム,仏教史学会,大谷大学/京都市,1999年10月24日

平 雅行 「幕府僧の天台座主進出」,大阪歴史学会中世史部会,梅田東学習ルーム/大阪府大阪市,2000年4月6日

平 雅行 「顕密体制論について」,日本仏教研究会10周年記念シンポジウム,日本仏教研究会,東京大学/東京都,2000年5月24日

梅村 喬 「「在地」の歴史的語義について——在地造語と在地成語——」,日本史研究会大会,日本史研究会,龍谷大学/京都市,1998年10月24-25日

梅村 喬 「“承平二年丹波国牒” 釈読の試み」,名古屋古代史研究会,短歌会館/名古屋市,1999年3月20日

梅村 喬 「平安時代土地公証制試論——在地・領主・文書——」,大阪歴史学会大会,大阪歴史学会,大阪市立大学/大阪市,1999年2月26日

梅村 喬 「平安時代土地公証制度の諸論点」,大阪歴史科学協議会,大阪市立社会福祉センター/大阪市,2000年1月22日

村田路人 「畿内近国支配論について」,1997年度日本史研究会大会,日本史研究会,仏教大学/京都市,1997年11月16日

村田路人 「近世の地域支配と触」,第32回歴史科学協議会大会,歴史科学協議会,中京大学/愛知県名古屋市,1998年9月27日

- 村田路人 「非領国地域における触伝達の特質」, 第342回法制史学会近畿部会, 法制史学会, 同志社大学/京都府京都市, 1999年9月19日
- 村田路人 「コメント 近世大坂研究の一視点——周辺地域の支配とのかかわりから——」, シンポジウム「近世大坂の都市空間と社会構造」, 近世大坂研究会, ぐるーぷ・とらっと, 大阪市立大学/大阪府大阪市, 2000年3月19日
- 北泊謙太郎 「都市部における在郷軍人会の成立と展開——大阪市を事例に——」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大阪教育大学天王寺キャンパス/大阪府大阪市, 1997年4月25日
- 北泊謙太郎 「論評: 渋谷聡「近世ドイツ帝国議会の席次規定に関するノート」」, 大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, JSA 大阪支部/大阪府大阪市, 1998年1月22日
- 北泊謙太郎 「日露戦争後における陸軍の社会秩序整合政策に関する一考察——帝国在郷軍人会の成立を中心に——」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立天王寺区民センター和室/大阪府大阪市, 1998年5月17日
- 北泊謙太郎 「日露戦争後における帝国在郷軍人会の成立と展開——大阪聯隊区司令部管内を事例に——」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大阪教育大学天王寺キャンパス/大阪府大阪市, 1998年6月6日
- 北泊謙太郎 「日露戦争後における帝国在郷軍人会の成立と展開——大阪聯隊区司令部管内を事例に——」, 単独, 大阪歴史学会1998年度大会, 大阪歴史学会, 大阪教育大学天王寺キャンパス/大阪府大阪市, 1998年6月28日
- 北泊謙太郎 「論評: 脇村孝平『ブルワントン熱病』考」, 大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪歴史科学協議会, JSA 大阪支部/大阪府大阪市, 1999年3月25日
- 北泊謙太郎 「日露戦争時の出征軍人家族援護に関する一考察——下士兵卒家族救助令との関わりにおいて——」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大阪教育大学天王寺キャンパス/大阪府大阪市, 1999年9月17日
- 北泊謙太郎 「書評: 櫻井良樹著『大正政治史の出発——立憲同志会の成立とその周辺——』」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大阪教育大学天王寺キャンパス/大阪府大阪市, 2000年1月14日
- 北泊謙太郎 「能川泰治氏の業績について」, 日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, ポートシャインホテル/京都府舞鶴市, 2001年7月30日

(3) 研究会

- 平 雅行 「鎌倉幕府と延暦寺」, 延暦寺文書復元研究会, 機関紙会館/京都府京都市, 1997年11月27日
- 平 雅行 「専修念仏とその時代」, 大阪哲学学校, 尼崎労働福祉会館/兵庫県尼崎市, 1997年10月11日
- 平 雅行 「親鸞とその時代」, 同朋大学学術大会記念講演, 同朋大学/愛知県名古屋市, 2000年1月29日
- 平 雅行 「寺社の暴力とその正当化」, 正統性と正当化, フランス極東学院プロジェクト研究会, 大阪大学/大阪府大阪市, 2001年6月3日
- 猪飼隆明 「「原罪」としての天皇制」, シンポジウム「歴史認識と歴史教育」, 関西唯物論研究会, 1999年6月21日
- 北泊謙太郎 「近現代の地域社会を展示するとはどういうことか——大阪歴史博物館の展示に即して——」, 新大阪市立博物館・考古資料センターを考える実行委員会勉強会, 同実行委員会, 大阪教育大学天王寺キャンパス/大阪府大阪市, 2002年1月31日
- 北泊謙太郎 「近現代の地域社会を展示するとはどういうことか——大阪歴史博物館の展示に即して——」, 大阪歴史博物館を考えるシンポジウム, 新大阪市立博物館・考古資料センターを考える実行委員会, 大阪歴史博物館/大阪府大阪市, 2002年3月9日

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 平 雅行 「専修念仏の革命的意義とその実践」, 真宗大谷派東京教区教化委員会課題別研修会, 東本願

- 寺真宗会館／東京都，1997年6月9日
- 平 雅行 「日本仏教にみる現世と来世」，懷徳堂秋期講座，懷徳堂記念会，文化情報センター／大阪府大阪市，1997年11月13日
- 平 雅行 「親鸞の善人悪人観」，第四回仏教講座，善久寺／大阪府羽曳野市，1999年5月30日
- 平 雅行 「鎌倉仏教とその時代」，単独，岸和田健老大学，社会福祉センター／大阪府岸和田市，1999年6月15日
- 平 雅行 「法然とその時代」，西山浄土宗53回東部地方教学講習会，常保寺／愛知県一宮市，2000年5月26日
- 平 雅行 「仏教界の革新」，芦屋川セカンドカレッジ，市民センター／兵庫県芦屋市，2000年9月18日
- 平 雅行 「嘉禄の法難と聖覚・親鸞」，単独，21世紀に生きる親鸞を尋ねて，真宗大谷派四国会館／香川県高松市，2001年4月11日
- 平 雅行 「日本における女性と仏教」，西山浄土宗東部地方教学講習会，宝樹寺／愛知県常滑市，2001年6月8日
- 平 雅行 「親鸞と女性・被差別民」，21世紀に生きる親鸞を尋ねて，真宗大谷派四国会館／香川県高松市，2001年8月6日
- 平 雅行 「中世民衆と親鸞」，真宗大谷派名古屋別院信道講座，真宗大谷派名古屋別院／愛知県名古屋市，2002年3月10日
- 猪飼隆明 「松平春嶽とその時代」，単独，幕末サミット（とシンポジウム），福井県福井市，1999年5月16日
- 梅村 喬 「愛知の古代史を語る」，単独，蟹江町公民館／愛知県蟹江町，2001年3月17日
- 村田路人 「近世の大坂——支配の請負人用聞を中心に——」，守口市歴史講座「大阪の歴史 近世編」，守口市立東部公民館／大阪府守口市，1997年12月2日
- 村田路人 「大坂町奉行所と大坂町人」，芦屋川セカンドカレッジ，芦屋市民センター／兵庫県芦屋市，1998年5月18日
- 村田路人 「宝永元年大和川付替手伝普請：実施過程を中心に」，柏原市立歴史資料館秋季企画展「河内国たいへん」講演，柏原市立歴史資料館／大阪府柏原市，1998年10月18日
- 村田路人 「近世幕府権力と治水システム——撰津・河内地域を中心に——」，吹田市立博物館平成11年度特別陳列「江戸時代の吹田」講演会，吹田市立博物館／大阪府吹田市，1999年11月14日
- 村田路人 「江戸時代の畿内近国支配と村々」，向日市文化資料館平成12年度文化講演会，向日市文化資料館／京都府向日市，2000年6月17日
- 村田路人 「幕府の上方支配」，単独，仏教大学シティーキャンパス講座「太平の世」，仏教大学四条センター／京都府京都市，2000年8月28日
- 村田路人 「江戸時代の撰津・河内地域と幕府の支配」，松原市文化情報振興事業団平成12年度秋季歴史講座，松原市民ふるさとびあプラザ市民ギャラリー／大阪府松原市，2000年11月18日
- 村田路人 「江戸時代の大坂城——どのようにして城は維持されたのか——」，平成13年度懷徳堂春季講座，大阪府立文化情報センター／大阪府大阪市，2001年5月30日
- 北泊謙太郎 「ナショナリズムの在地的基盤——在郷軍人会の活動に即して——」，2001（第21回）平和のための京都の戦争展「ミニ講演会——近代日本におけるナショナリズム——」，立命館大学国際平和ミュージアム／京都府京都市，2001年8月5日

(5) その他

- 平 雅行 「末法思想の系譜」，ラジオ番組「宗教の時間」，NHK ラジオ第二放送／大阪府大阪市，2001年4月15日
- 猪飼隆明 「明治維新と現代」，懷徳堂洪庵忌，適塾，1999年4月13日

2. 教員の受賞歴

なし

【Ⅳ. 教員による競争的資金獲得】(1997年度～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成9年度基盤研究(C)(2)	09610334	近世畿内における幕府支配機構の研究	
	村田路人		900,000円
平成10年度基盤研究(C)(2)	10610326	鎌倉幕府の顕密寺社政策についての基礎的研究	
	平 雅行		1,200,000円
平成10年度基盤研究(C)(2)	09610334	近世畿内における幕府支配機構の研究	
	村田路人		500,000円
平成11年度基盤研究(C)(2)	10610326	鎌倉幕府の顕密寺社政策についての基礎的研究	
	平 雅行		900,000円
平成11年度基盤研究(C)(2)	09610334	近世畿内における幕府支配機構の研究	
	村田路人		500,000円
平成12年度基盤研究(C)(2)	10610326	鎌倉幕府の顕密寺社政策についての基礎的研究	
	平 雅行		500,000円
平成13年度基盤研究(C)(2)	10610326	鎌倉幕府の顕密寺社政策についての基礎的研究	
	平 雅行		500,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【Ⅴ. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

猪飼 隆明 教授

・熊本歴史科学研究会	代表		～1998年	3月
・横井小楠研究会	事務局長		～2000年	7月
・大阪歴史科学協議会	研究委員	1998年	6月～1999年	6月
・大阪歴史科学協議会	委員長	1999年	6月～(至現在)	

梅村 喬 教授

・名古屋歴史科学研究会	代表委員	1998年	4月～1999年	3月
・大阪歴史科学協議会	研究委員	2000年	6月～2002年	6月
・大阪歴史科学協議会	編集委員長	2002年	6月～(至現在)	

平 雅行 教授

・史学研究会	評議員	1990年	5月～(至現在)	
・仏教史学会	評議員	1999年	10月～(至現在)	
・史学会	評議員	1999年	11月～(至現在)	
・日本宗教史懇話会	代表	1999年	8月～(至現在)	
・日本歴史学協会	委員	2000年	7月～(至現在)	
・日根野を考える会	代表	2001年	11月～(至現在)	

村田路人 教授

- ・大阪歴史科学協議会 研究委員 1997年 6月～2000年 6月
- ・大阪歴史科学協議会 編集委員長 2000年 6月～2002年 6月
- ・大阪歴史学会 事務局長 2002年 6月～（至現在）

北泊謙太郎 助手

- ・大阪歴史学会 企画委員 1997年 6月～2000年 6月
- ・日本史研究会 研究委員 2000年 11月～（至現在）

村田修三 名誉教授（2002年3月まで教授）

- ・歴史科学協議会 代表委員 2001年 9月～（至現在）

【VI. 教員の教育活動】（2002年度）

1. 大学院授業担当

猪飼隆明 教授

- 通年 日本近代史特殊講義 有司専制論（その2）
- 通年 日本近代史特殊演習 近代史料の研究
- 通年 日本近代史講義 有司専制論（その2）
- 通年 日本近代史演習 近代史料の研究
- 通年 日本史博士論文作成演習 博士論文作成指導演習（梅村喬教授，平雅行教授，村田路人教授と合同）
- 2学期 日本史修士論文作成演習 修士論文作成指導演習（梅村喬教授，平雅行教授，村田路人教授と合同）

梅村 喬 教授

- 通年 日本古代史特殊講義 平安時代土地領有制の研究
- 通年 日本古代史特殊演習 平安時代法制史料の研究
- 通年 日本古代史講義 平安時代土地領有制の研究
- 通年 日本古代史演習 平安時代法制史料の研究
- 通年 日本史博士論文作成演習 博士論文作成指導演習（猪飼隆明教授，平雅行教授，村田路人教授と合同）
- 2学期 日本史修士論文作成演習 修士論文作成指導演習（猪飼隆明教授，平雅行教授，村田路人教授と合同）

平 雅行 教授

- 2学期 日本中世史特殊講義 鎌倉幕府の寺社政策
- 通年 日本中世史特殊演習 日本中世史の諸問題
- 2学期 日本中世史講義 鎌倉幕府の寺社政策
- 通年 日本中世史演習 日本中世史の諸問題
- 通年 日本史博士論文作成演習 博士論文作成指導演習（猪飼隆明教授，梅村喬教授，村田路人教授と合同）
- 2学期 日本史修士論文作成演習 修士論文作成指導演習（猪飼隆明教授，梅村喬教授，村田路人教授と合同）

村田路人 教授

- | | | |
|------|-------------|-----------------------------------|
| 2 学期 | 日本近世史特殊講義 | 近世領主権力の研究 |
| 通年 | 日本近世史特殊演習 | 近世史研究の方法的検討 |
| 2 学期 | 日本近世史講義 | 近世領主権力の研究 |
| 通年 | 日本近世史演習 | 近世史の諸問題 |
| 1 学期 | 日本近世史演習 | 近世古文書の解読と整理 |
| 2 学期 | 歴史資料論演習 | 近世古文書の整理と近世史科学の検討 |
| 通年 | 日本史博士論文作成演習 | 博士論文作成指導演習（猪飼隆明教授，梅村喬教授，平雅行教授と合同） |
| 2 学期 | 日本史修士論文作成演習 | 修士論文作成指導演習（猪飼隆明教授，梅村喬教授，平雅行教授と合同） |

榎木謙周 講師（非常勤講師・京都府立大学）

- | | | |
|------|-----------|------------|
| 1 学期 | 日本古代史特殊講義 | 日本古代の産業・技術 |
| 1 学期 | 日本古代史講義 | 日本古代の産業・技術 |

竹永三男 講師（非常勤講師・島根大学）

- | | | |
|------|-----------|---------------------|
| 2 学期 | 日本近代史特殊講義 | 第一次世界大戦期・大戦後の地方長官会議 |
| 2 学期 | 日本近代史講義 | 第一次世界大戦期・大戦後の地方長官会議 |

2. 学部授業担当

猪飼隆明 教授

- | | | |
|------|--------|---------------------------------|
| 1 学期 | 日本史学演習 | 日本史上の諸問題（梅村喬教授，平雅行教授，村田路人教授と合同） |
| 通年 | 日本史学講義 | 有司専制論（その2） |
| 通年 | 日本史学演習 | 日本近・現代史の基礎的研究 |

梅村 喬 教授

- | | | |
|------|--------|----------------------------------|
| 1 学期 | 日本史学演習 | 日本史上の諸問題（猪飼隆明教授，平雅行教授，村田路人教授と合同） |
| 通年 | 日本史学講義 | 平安時代土地制度の研究 |
| 2 学期 | 日本史学演習 | 古代史料演習 |
| 通年 | 日本史学演習 | 古代法制史料の研究 |

平 雅行 教授

- | | | |
|------|--------|----------------------------------|
| 1 学期 | 日本史学演習 | 日本史上の諸問題（猪飼隆明教授，梅村喬教授，村田路人教授と合同） |
| 2 学期 | 日本史学講義 | 鎌倉幕府の寺社政策 |
| 1 学期 | 日本史学演習 | 中世古文書演習 |
| 2 学期 | 日本史学演習 | 日本史史料演習（村田教授と合同） |
| 2 学期 | 日本史学演習 | 日本史論文演習（村田教授と合同） |

村田路人 教授

- 1 学期 日本史学演習 日本史上の諸問題（猪飼隆明教授，梅村喬教授，平雅行教授と合同）
- 2 学期 日本史学講義 近世領主権力の研究
- 2 学期 日本史学演習 日本史史料演習（平教授と合同）
- 2 学期 日本史学演習 日本史論文演習（平教授と合同）
- 1 学期 日本史学演習 近世古文書の解読
- 2 学期 日本史学演習 近世古文書の解読と整理

榎木謙周 講師（非常勤講師・京都府立大学）

- 1 学期 日本史学講義 日本古代の産業・技術

竹永三男 講師（非常勤講師・島根大学）

- 2 学期 日本史学講義 第一次世界大戦期・大戦後の地方長官会議

3. 共通教育担当

平 雅行 教授	I セメスター	専門基礎	日本史学基礎 A
平 雅行 教授	II セメスター	基礎セミナー	日本史セミナー
猪飼隆明 教授	II セメスター	主題別	日本近代化と国際環境
村田路人 教授	I セメスター	専門基礎	日本史学基礎 B
梅村 喬 教授	I セメスター	主題別	日本史における民衆世界の形成

4. 他大学における集中講義等

村田路人 関西学院大学大学院文学研究科 H14. 4. 1～H15. 3. 31 各週

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：藤井讓治（京都大学大学院文学研究科教授）

イ、研究の先見性・独創性

研究における先見性・独創性を，大阪大学大学院文学研究科日本史学という組織（専攻）の問題として取り上げれば，それらは十分とは言い難い。しかし，人文科学において，その先見性や独創性は，多く個人研究の場，あるいは学外研究者との共同の場において示されてきたものであり，従来の研究のあり方からすれば，研究評価において大きな欠陥とはいえないであろう。以下の持続性，体系性，波及性についても，この点は，ほぼ同様の評価となろう。ただ，今後の研究において，日本史研究が個別分散化している現状を克服し，また地域の課題に全時代的に答えるためにも，文学研究科の日本史学が組織として先見性のある研究，独創性のある研究を立ち上げる努力は必要であろう。

個々の教官の研究についてみれば，猪飼隆明氏の明治維新期の研究，梅村喬氏の古代末中世初期の土地制度史研究，平雅行氏の中世仏教史研究，村田路人氏の近世畿内における幕府支配機構の研究など，いずれの研究業績をとっても，それぞれの分野での最先端あるいは学界動向を指導

するものであり、高い評価が与えられよう。大学院生の研究も、精力的に行われ、それぞれに先見性・独創性がみられるが、教官の研究課題あるいは研究素材・地域と共通ないしは類似したものが、すべてではないがかなりみられるのが少し気にかかる。

ロ、研究の実証性あるいは手堅さ

大半の教官は、『日本史研究』『ヒストリア』などレフリー制のある雑誌に複数の論文を書いており、こうした業績からそれぞれの教官の研究における実証性や手堅さについては、十分評価しうる。辞典項目の執筆もこうした研究の手堅さを踏まえて依頼されたものであろう。大学院生についても、さまざまな学会誌に多くの論文や研究ノートを発表しており、その研究水準の高さやうかがわせてくれ、その研究活動の旺盛さも含めて、高く評価しうる。

ハ、研究の持続性、ニ、研究の体系性

教官については、従来よりの研究成果を、折あるごとに単著としてまとめており、課題や方法に一貫したものがみられ、かつそれぞれの分野での体系化がなされており、十分に評価しうる。大学院生については、現段階で云々することは困難な点もあるが、課程博士の学位取得者があり、持続性・体系性の両面において、それなりの評価はしうる。ただ、博士課程修了者の博士学位取得数が、1年平均1・2人であるのは、少し少ないように思われる。

ホ、研究（課題・方法・成果）の波及性

大半の教官は、さまざまな自治体史編纂に関わっており、みずからの研究の方法や成果を、そうした場で生かし、大きく貢献している。また平雅行氏の研究は、歴史学だけでなく仏教学との接点も多くあり、隣接分野への広がりを見せるものと評価できる。

ヘ、教官組織としてのまとめ

5人の教官で組織されている大阪大学大学院文学研究科の日本史学は、古代・中世・近世・近代にそれぞれを専門とする教官を擁し、時代的に配慮された配置となっており、また、制度史・仏教史・文化史・政治史・地域史等、研究対象や方法的面での多様性が確保されており、教育上では極めてバランスのとれた教官配置となっている。ただ、教官構成が、教授4、助手1と、助教授を欠いており、年齢バランスが少しよくないように思われる。

一方、1998年に刊行された日本史研究室50周年記念論文集2冊の刊行は、緩いしぼりではあるが、日本史学の研究室が一体となって研究を進めていることを如実に語っており、教官組織のまとめとして評価したい。ただ、科学研究費補助金の獲得状況を見ると、個人研究である基盤研究C(2)での獲得がみられるだけであり、欲をいえば、教官組織としての取り組みがあってもよいように思われる。この点については、今後の一つの課題となろう。

ト、学会活動での位置

学会・研究会の事務局を引き受けていることは、大阪大学大学院文学研究科日本史学の研究室が学会運営に深く関与し、研究と研究の進展に大きく寄与していることを示すものであり、また教員の全員が、諸学会・研究会の委員長・代表をはじめ多くの重要な委員を務めており、大学内での研究活動に限らず広く学外での研究活動に参加しており、全体として高く評価しうる。

また、大学院生が、多様な学会で報告し、また論文をそれぞれの研究会の会誌に発表しており、学会が研究活動の場として位置づけられており、それを可能としている研究環境を提供している阪大の日本史学の姿勢は高く評価しうる。

さらに、学会やシンポジウムが開催され、なかでも2001年6月に開かれた「フランス極東学院プロジェクト第2回研究会」は、日本史の分野では少ない国際学会の開催として注目され、今後こうした取り組みが期待される。

3-8 東洋史学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

阪大東洋史が世界の学界の中で重きをなす研究領域は、唐宋以後の中国史、イスラム化以前の中央アジア史、そして東南アジア史である。何れの領域の教官も漢文文献を根本史料にしながら、現地語史料とフィールドワークの成果を合わせた研究を行ない、院生達にもそれを指導している。学部生に対しては、全員に漢文ゼミを課すと共に、3つの領域のいずれかの英語論文講読ゼミに出席させ、世界の学界の動きを学ばせている。本研究室の教育の中で最も特徴あるのは、「合同演習」と通称され、教官から学部生まで全員が出席を義務づけられている演習である。そこでは日本語の論文紹介、卒論・修論の中間報告など、学年に応じた研究発表・報告が求められ、とりわけ大学院後期課程学生は、東洋史学史・工具書等について入門講義を行ない、学部生を裨益すると同時に、自らが教職に就いた時のための訓練を行なう。全員がこの合同演習に出席するということは、広大な領域にまたがり、時代も古代から近現代に亘る東洋史全般の発表を聞き討論するということで、狭い専門に閉じこもるのを打破する効果がある。大学院に進学する者は、この合同演習に学部時代から積極的に出席し続けることによって、幅広い知識と関心を持った研究者・高度職業人に育っていくし、学部だけで卒業していく者にとっても、学問の厳しさと奥深さを肌で感じながら、ここを卒業したという誇りと自信をもって社会に出ていくことになり、教育効果も絶大である。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 4 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：森安孝夫 片山 剛 荒川正晴 桃木至朗

助教授：青木敦

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
29	11	17	0	0	0	0	0	0

※うち留学生4名, 社会人学生4名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	12	2	0	2	2
'98	6	5	3	4	2
'99	7	1	1	1	0
'00	14	7	0	1	0
'01	5	4	1	0	0
計	44	19	5	8	4

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	1	1	2
'98	3	1	4
'99	1	0	1
'00	0	1	1
'01	0	0	0
計	5	3	8

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- 長井千秋 「南宋財政史研究序説」
論文博士，10年2月25日，主査濱島敦俊教授 副査片山剛教授・荒川正晴助教授
- 松川 節 「一三～一四世紀モンゴル語命令文の書式に関する文献学的研究」
課程博士，10年3月25日，主査森安孝夫教授 副査濱島教授・合阪學教授・片山教授・荒川助教授・桃木至朗助教授
- 松井 太 「モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と文書行政」
課程博士，11年3月25日，主査荒川教授 副査濱島教授・東野治之教授・片山教授
- 田口宏二郎 「国家的物流としての漕運——明代北京の現物米財政と畿輔経済——」
課程博士，11年3月25日，主査濱島教授 副査片山教授・平雅行教授・桃木助教授
- 太田 出 「清代江南デルタ地方社会と治安維持装置」
課程博士，11年3月25日，主査片山教授 副査濱島教授・猪飼隆明教授・桃木助教授
- 柏 樺 「明代州県政治体制研究」
論文博士，11年3月25日，主査濱島教授 副査片山教授・荒川助教授
- 杉山清彦 「大清帝国形成史序説」
課程博士，12年3月25日，主査森安教授 副査濱島教授・片山教授・荒川助教授・桃木助教授
- 金 弘吉 「明末北京の宮殿修建と木材調達」
論文博士，12年3月25日，主査濱島教授 副査片山教授・荒川助教授

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	7	1	0	1	2	11
'98	4	0	0	0	3	7
'99	4	3	0	0	4	11
'00	5	0	0	0	4	9
'01	7	3	1	1	4	16
計	27	7	1	2	17	54

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等の 講演会	その他	計
'97	2	1	7	1	0	11
'98	0	4	18	2	0	24
'99	5	4	21	0	0	30
'00	1	5	23	1	0	30
'01	1	4	34	0	0	39
計	9	18	103	4	0	134

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

[1997（平成9）年]

田口宏二郎 「明末畿輔地域における水利開発事業について——徐貞明と滹沱河河工——」『史学雑誌』（史学会）第106編第6号，1997年6月

松川 節 「カラコルム出土1348年漢蒙碑文——嶺北省右丞郎中総管取糧記——」『内陸アジア言語の研究』（中央ユーラシア学研究会）12，1997年7月

中村 淳 「チベットとモンゴルの邂逅——遥かなる後世へのめばえ——」『岩波講座世界歴史11 中央ユーラシアの統合』岩波書店，1997年11月

松井 太 「カラホト出土蒙漢合璧税糧納入簿断簡」『待兼山論叢（史学篇）』（大阪大学大学院文学研究科）第31号，1997年12月

[1998（平成10）年度]

松井 太 「モンゴル時代ウイグルスタン税役制度とその淵源——ウイグル文供出命令文書にみえる Käsig の解釈を通じて——」『東洋学報』（財団法人東洋文庫）第79巻第4号，1998年3月

杉山清彦 「清初正藍旗考——姻戚関係よりみた旗王権力の基礎構造——」『史学雑誌』第107編第7号，1998年7月

松井 太 「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』13，1998年9月

太田 出 「清代緑営の管轄区域とその機能——江南デルタの汎を中心に——」『史学雑誌』第107編第10号，1998年10月

[1999（平成11）年度]

田口宏二郎 「前近代中国史研究と流通」『中国史学』（中国史学会）第9巻，1999年12月

[2000（平成12）年]

- 石川亮太 「一九世紀末東アジアにおける国際流通構造と朝鮮——海産物の生産・流通から——」『史学雑誌』第109編第2号, 2000年2月
- 横山政子 「「帰国」をめぐる事情」「日本名」を名のるといふこと」「中国帰国青年」の配偶者選択の現実と意味 蘭信三(編)『「中国帰国者」の生活世界』行路社, 2000年2月
- 田口宏二郎 「明代の京・通倉」『待兼山論叢(史学篇)』第34号, 2000年12月
- 杉山清彦 「關於天命・天聰朝的正藍旗」『満学研究』(北京市社会科学院満学研究所)第5輯, 2000年12月 [2001(平成13)年]
- 杉山清彦 「清初八旗における最有力軍団——太祖ヌルハチから摂政王ドルゴンへ——」『内陸アジア史研究』(内陸アジア史学会)第16号, 2001年3月
- 杉山清彦 「八旗旗王制の成立」『東洋学報』第83巻第1号, 2001年6月
- 坂尻彰宏 「敦煌勝文書考」『東方學』(東方学会)第102輯, 2001年7月
- 石川亮太 「二〇世紀初, 朝鮮東北部のルーブル紙幣流通——近代東アジア域内流通と朝鮮の地域経済——」『待兼山論叢(史学篇)』第35号, 2001年12月

(2) 口頭発表

[1997(平成9)年]

- 田口宏二郎 「浅析明代北京的糧穀再分配機制」(発表要旨)『第七届明史国際学術討論会論文集』1997年8月
- 瀧 千春 「*DIARIUM ANDREAE LY* (『李安德の日記』)——清代中期中国人司祭のラテン語日記——」(発表要旨)『'97史学会第95回大会プログラム』1997年11月

[1998(平成10)年]

- 太田 出 「清朝国家・軍隊・関聖大帝」(発表要旨)『'98史学会第96回大会プログラム』1998年11月
- 湯野基生 「清代長生教の活動とその弾圧の背景」(発表要旨)『'98史学会第96回大会プログラム』1998年11月

[1999(平成11)年]

- 田口宏二郎 「明代畿輔農業経済と米穀流通」(発表要旨)『第13回明清史夏合宿 NEWS LETTER』1999年7月
- 杉山清彦 「關於天命・天聰朝的正藍旗」(発表要旨)『第二届国際満学研討会論文提要匯編』1999年8月
- 林 淑美 「清代台湾移住民社会と童試受験問題——閩南人と客家人の關係を中心に——」(発表要旨)『'99史学会第97回大会プログラム』1999年11月

[2000(平成12)年]

- 石川亮太 「20世紀初, 朝鮮・中国間の国境貿易——東アジア国際流通構造と地域間流通」(発表要旨)『社会経済史学会第69回全国大会報告要旨』2000年10月

[2001(平成13)年]

- 田口宏二郎 「畿輔鉅稅初探」(発表要旨)『第九届明史国際学術討論会論文集』2001年8月
- 糸山大樹 「「洋務」企業の運営と「プロフェッション」の創出——福州船政局における管理人員・技術人員を例として——」(発表要旨)『2001史学会第99回大会プログラム』2001年11月

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況 ('97~'01年度)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 11 名

<内訳>

PD: 4名

DC: 7名

外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 12 名

<内訳>

学部：1名 MC：4名 DC：7名

6. 専門分野出身の研究者数（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）

計 4 名

'97年度：2名 '98年度：2名 '99年度：0名 '00年度：0名 '01年度：0名

<内訳>

1997年度（博士号取得）長井千秋 岐阜聖徳学園大学教育学部 助教授

1997年度（博士号取得）松川 節 大谷大学文学部人文情報学科 専任講師

1998年度（後期課程修了 博士号取得）松井 太
弘前大学人文学部国際社会講座 専任講師

1998年度（後期課程修了 博士号取得）太田 出
神戸商科大学商経学部一般教育科 助教授

7. 専門分野出身の高度職業人数（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 4 名

'97年度：0名 '98年度：0名 '99年度：0名 '00年度：3名 '01年度：1名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 1名
 教職 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 15 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 15 名

10. 刊行物

1993年～『内陸アジア言語の研究』（中央ユーラシア学研究会機関誌・年1回刊行）

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

中央ユーラシア学研究会事務局（常置）

中央アジア学フォーラム（神戸市外大と共同主宰）

海域アジア史研究会（主宰）

1997年7月20日～22日「明清史夏合宿」（研究会）事務局担当

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

名称：中央ユーラシア学研究会

活動状況：本会は学術雑誌『内陸アジア言語の研究』の発行を目的とする研究協力団体である。

『内陸アジア言語の研究』（毎年1冊刊行）は、中央ユーラシア（内陸アジア、中国を含む）の言語資料に関わる学術論文・資料紹介などを掲載しており、国際的にも高い評価を得ている。本会では、原稿のコンピューター入力、編集、販売促進などの活動も行なっている。

名称：中央アジア学フォーラム

活動状況：本会は、仏教時代（イスラム化以前）の中央アジア研究の諸分野について論文・著書の要旨を説明したり、書評を兼ねた発表をして討論しあう懇話会である。しばしば研究発表も混じえる。例会は毎年3～4回の頻度で開催され、関西在住の研究者・学生のみならず、関東などからも参加者を集め、情報交換の場としても機能している。

名称：海域アジア史研究会

活動状況：中国史、東南アジア史、日本史などの国家や研究領域の枠組みを超えた議論や交流のための研究会で、阪大を会場に毎月1回例会をしており、2003年10月に設立10周年を迎える。

「海からの視点」をキーワードに研究発表、史料講読などを行っており、関西各大学の研究者・大学院生のほか、名古屋・東京や西日本各地からもしばしば参加者がある。

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

1997～2001年度の博士後期課程在籍者は21名（うち留学生3名）、博士前期課程入学者は23名（うち留学生1名）であった。そのうち課程博士号取得者は5名、それ以後に続く博士予備論文合格者は8名である。この5年間に研究職を得た者は5名、日本学術振興会特別研究員PD4名、同DC7名であった。公費による長期留学生は3名であるが、後期課程のほぼ全員が短期の留学・海外資料調査・フィールドワークを経験し、成果を挙げている。対象地域は、フィールドである中国（上海・西安・黒竜江省・浙江省・山西省・広東省・福建省・新疆ウイグル自治区・内蒙古自治区）・台湾・韓国・モンゴル・ベトナム・カンボジアのみならず、文書所蔵機関や研究機関のあるロンドン・オックスフォード・パリ・ベルリン・サンクトペテルブルク・北京・上海・敦煌・トゥルファン・ウルムチ・大連・瀋陽・台北・香港・ハノイ・ロサンゼルス・シカゴ・ボストン・その他に及んでいる。海外資料調査・フィールドワークの例としては、森安がリーダー

となって国内の研究者を組織し、本研究室の PD 研究員 2 名・オーバードクター 1 名も参加したモンゴル調査は、モンゴル科学アカデミーとの連携もあって『突厥・ウイグル・モンゴル帝国時代の碑文及び遺蹟に関する歴史学・文献学的調査』の巨冊となって結実し、世界の学界でも評価された。またこの10年来継続されているベトナム・バックコック村の総合調査においても、桃木をはじめ毎年複数の院生・学生が参加し、村落文書・碑文の収集などに当たっている。一方、濱島・片山は、10数年前より開始した中国農村歴史調査を1999・2000年度において3箇所6回の調査を実施し、PD・院生も老農民の聞き取り調査や景観観察（集落図・水利図の作成）などに参加した。また荒川はほぼ毎年、院生と共にトゥルファン・ウルムチの博物館において出土文書の調査に当たった。一方、受け入れた外国人客員研究員は6名（うち客員教授1名）、講義・講演を行った外国人研究者も多数である。

阪大の教官・院生が中心的に運営に当たっている研究会には、海域アジア史研究会・中央アジア学フォーラムがあり、明清史夏合宿の幹事校も担当している。また本研究室メンバーが中心となって編集・出版している『内陸アジア言語の研究』は、今や世界の注目を集め、英文の書評が出るほどの雑誌に育っている。

教官はもとより PD・DC・院生達は、以上の経験の上に、各種学会・研究会における発表を多数行ない、さらには上記の「合同演習」での発表・討論をも踏まえて学術論文を執筆している。この5年間に PD・DC・院生による学会発表はのべで100余回、発表論文は33点に達した。

以上のように多大の成果を挙げているが、院生全般にとっての最大の問題は、安定した研究活動をするための最低条件が整っていないことである。具体的には研究スペースが極めて狭いこと、並びに研究に専念するための経済的保障を得られる機会が限られていることである。ハード面及びソフト面において院生をいかにサポートしていくかが、今後の大きな課題である。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 森安孝夫 「ウイグル文字新考——回回名称問題解決への一礎石——」、『東方学会創立五十周年記念東方学論集』、東方学会、pp. 1226-1238, 1997.
- 森安孝夫 「『シルクロード』のウイグル商人——ソグド商人とオルトク商人のあいだ——」、『岩波講座世界歴史第11巻 中央ユーラシアの統合』岩波書店、pp. 93-119, 1997.
- 森安孝夫 「大英図書館所蔵ルーン文字マニ教文書 Kao. 0107の新研究」、『内陸アジア言語の研究』12号、中央ユーラシア学研究会、pp. 41-71, 1997.
- 森安孝夫 「ウイグル文契約文書補考」、『待兼山論叢(史学篇)』32号、大阪大学文学会、pp. 1-24, 1998.
- 森安孝夫 「大唐安西阿史夫人壁記の再読と歴史学的考察」,(共著)、石見清裕(早稲田大学)／森安孝夫 『内陸アジア言語の研究』13号、中央ユーラシア学研究会、pp. 93-110, 1998.
- 森安孝夫 「シネウス遺蹟・碑文」、『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』、中央ユーラシア学研究会、pp. 177-195, 1999.
- 森安孝夫 “From Chinese to Uighur Documents”, (共著)、森安孝夫/P. ツィーメ 『内陸アジア言語の研究』14号、中央ユーラシア学研究会、pp. 73-102, 1999.
- 森安孝夫 “On the Uighur chxshapt ay and the Spreading of Manichaeism into South China”, *Stu-*

- dia Manichaica. IV. Internationaler Kongress zum Manichaeismus, Berlin, 14-18. Juli 1997, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, pp.430-440, 2000.*
- 森安孝夫 “The Sha-chou Uighurs and the West Uighur Kingdom”, *Acta Asiatica* 78, Toho Gakkai, pp.28-48, 2000.
- 森安孝夫 「沙州ウイグル集団と西ウイグル王国」, 『内陸アジア史研究』15号, 内陸アジア史学会, pp. 21-35, 2000.
- 森安孝夫 「河西帰義軍節度使の朱印とその編年」, 『内陸アジア言語の研究』15号, 中央ユーラシア学研究会, pp. 1-121, 2000.
- 森安孝夫 “The West Uighur Kingdom and Tun-huang around the 10th-11th Centuries”, *Berichte und Abhandlungen der Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften* 8, pp.337-368, 2000.
- 森安孝夫 「ベゼクリク出土ソグド語・ウイグル語マニ教徒手紙文」, (共著) 森安孝夫/吉田 豊 (神戸外大) 『内陸アジア言語の研究』15号, 中央ユーラシア学研究会, pp. 135-178, 2000.
- 森安孝夫 “Uighur Buddhist Stake Inscriptions from Turfan”, *De Dunhuang à Istanbul. Hommage à James Russell Hamilton*, Brepols (Turnhout, Belgium), pp. 149-223, 2001.
- 片山 剛 「華南地方社会と宗族：珠江デルタの地縁社会・血縁社会・図甲制」, 『明清時代史の基本問題』汲古書院, pp. 471-500, 1997.
- 片山 剛 「清代中期の広府人社会と客家人の移住 —— 童試受験問題をめぐって ——」, 『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会, pp. 167-210, 2000.
- 片山 剛 「広東人社会と客家人 —— 一八世紀の国家と移住民 ——」, 『流動する民族 —— 中国南部の移住とエスニシティ ——』, 平凡社, pp. 41-62, 2001.
- 片山 剛 「珠江デルタの市場と市鎮社会 —— 19世紀初頭順徳県龍山堡の大岡墟 ——」, 『中国近代の都市と農村』, 京都大学人文科学研究所, pp. 195-222, 2001.
- 片山 剛 「清代民間社会と中央及地方政府 —— 以広東省為主 ——」, 『中国伝統社会経済と現代化 —— 従不同的角度探索中国伝統社会的底蘊及其与現代化的關係 ——』, 広東人民出版社, pp. 485-495, 2001.
- 荒川正晴 「唐の州県百姓と過所の発給 —— 唐代過所・公驗文書筋記(1) ——」, 『史観』137号, 早稲田大学史学会, pp. 4-18, 1997.
- 荒川正晴 「唐帝国とソグド人の交易活動」, 『東洋史研究』56巻3号, 東洋史研究会, pp. 171-204, 1997.
- 荒川正晴 「出土史料より見た高昌国の仏教」, 『文化遺産』4号, 財団法人島根県並河萬里写真財団, pp. 55-58, 1997.
- 荒川正晴 「北朝隋・唐代における「薩寶」の性格をめぐって」, 『東洋史苑』50・51号, 東洋史学研究会, pp. 164-186, 1998.
- 荒川正晴 「関于唐向西域輸送布帛与客商的关系」, 『魏晋南北朝隋唐史資料』16号, 武漢大学, pp. 342-353, 1998.
- 荒川正晴 「関于吐魯番出土漢文文書中的 Ulaγ」, 『出土文献研究』3号, 中華書局, pp. 198-211, 1998.
- 荒川正晴 「トゥルファン文書を読み解く —— 文書に見える冥界の姿 ——」, 『しにか』9巻7号, 大修館書店, pp. 58-63, 1998.
- 荒川正晴 「ソグド人の移住聚落と東方交易活動」, 『岩波講座世界歴史第15巻 商人と市場』岩波書店, pp. 81-103, 1999.
- 荒川正晴 「唐朝の交通システム」, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』40号, 大阪大学, pp. 199-335, 2000.
- 荒川正晴 「ヤールホト古墓群新出の墓表・墓誌をめぐって」, 『シルクロード学研究紀要』10号, シルクロード学研究会, pp. 160-168, 2000.
- 荒川正晴 「魏晋南北朝隋唐期の通過公証制度と商人の移動」, 『中国の歴史世界』東京都立大学出版会, pp. 337-349, 2002.
- 荒川正晴 「長行馬文書攷 —— 英国図書館所蔵文書を中心として ——」, 『日中律令制の諸相』東方書店, pp. 379-405, 2002.

- 荒川正晴 “The Transit Permit System of the Tang Empire and the Passage of Merchants”, *The Memoirs of the Toyo Bunko* 59, Toyo Bunko, pp. 1-21, 2002.
- 桃木至朗 「周辺の明清時代史——ベトナム経済史の場合——」, 『明清時代史の基本問題』, 汲古書院, pp. 607-634, 1997.
- 桃木至朗 “Nghiên cứu Đại Việt sử ký toàn thư tại Nhật Bản”, *Xưa và Nay* 47, Hội Khảo học Lịch sử Việt Nam, pp. 28-29, 1998.
- 桃木至朗 「一家の事業としての李朝——ベトナム王朝国家形成史への一視角——」, 『東洋学報』79巻4号, 財団法人東洋文庫, pp. 1-25, 1998.
- 桃木至朗 「近世北部ベトナムの風水と高駢の地理書」, 『百穀社通信』8号, ベトナム村落研究会, pp. 105-122, 1998.
- 桃木至朗 「東・東南アジアの歴史・地域・時代——「日本史」の位置と方法をめぐる評論の試み——」, 『新しい歴史学のために』230・231合併号, 京都民科歴史部会, pp. 38-47, 1998.
- 桃木至朗 「護城山碑文に見る字喃について」, (共著) 清水政明(京都大学大学院生) / Le Thi Lien (ベトナム考古学院) / 桃木至朗, 『東南アジア研究』36巻2号, 京都大学東南アジア研究センター, pp. 149-177, 1998.
- 桃木至朗 「南の海域世界——中国における南海交易と南海情報——」, 『岩波講座世界歴史第9巻 中華の分裂と再生』岩波書店, pp. 109-130, 1999.
- 桃木至朗 “A Short Introduction to Champa Studies”, *The Dry Area in Southeast Asia / Harsh or Benign Environment ?*, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, pp. 65-74, 1999.
- 桃木至朗 “Dai Viet and the South China Sea Trade from the 10th to the 15th Century”, *Crossroads* 12-1, Northern Illinois University, Center for Southeast Asian Studies, pp. 1-34, 1999.
- 桃木至朗 “Champa chi la mot the che bien?”, *Nghiên cứu Đông Nam Á* 99 (4), Viện Nghiên cứu Đông Nam Á, pp. 43-48, 1999.
- 桃木至朗 “Was Dai Viet during the Early Le Period (1428-1527) a Rival of Ryukyu within the Tributary Trade System of the Ming?”, *Commerce et Navigation en Asie du Sud-Est (XIVe-XIXe Siècle)*, Nguyen The Anh & Ishizawa Yoshiaki (eds.) L’Harmattan, pp. 101-112, 1999.
- 桃木至朗 “Ve van de phan ky lich su Viet Nam tien can dai” *Nghiên cứu Lịch sử* 308, Viện Sử học Việt Nam, pp. 70-78, 2000.
- 桃木至朗 「東南アジア史における漂流の研究は可能か?——漢籍とチャンパ・ベトナム史の事例から——」, 『前近代アジアにおける海域交流成立条件に関する基礎的研究』, 海域交流史研究会(天理大学), pp. 197-206, 2000.
- 桃木至朗 “Gia đình của các vua nhà Lý và sự xuất hiện của vương triều phụ hệ ở Việt Nam”, *Việt Nam học, kỷ yếu hội thảo quốc tế lang thu nhất, Hà Nội 15-17.7.1998*, tập I, Nhà Xuất bản The gioi, pp. 255-272, 2000.
- 桃木至朗 「近世ベトナム王朝にとっての「わが国」」, 『日本・ベトナム関係を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 18-39, 2000.
- 桃木至朗 「東南アジアの海と陸——チャンパとチャム族のネットワーク——」, 『海のアジア第3巻 島とひとのダイナミズム』岩波書店, pp. 61-84, 2001.
- 桃木至朗 「林邑と環王」, (共著) 山形真理子(立教大学非常勤講師) / 桃木至朗, 『岩波講座東南アジア史第1巻 原史東南アジア世界』岩波書店, pp. 227-254, 2001.
- 桃木至朗 「唐宋変革とベトナム」, 『岩波講座東南アジア史第2巻 東南アジア古代国家の成立と展開』岩波書店, pp. 29-54, 2001.
- 桃木至朗 「「ベトナム史」の確立」, 『岩波講座東南アジア史第2巻 東南アジア古代国家の形成と展開』岩波書店, pp. 171-196, 2001.
- 青木 敦 「教会・山地民・伝統文化——霞雲村でのキリスト教会に関する聞き取りメモ——」, 『アジア農村研究会通信』1号, アジア農村研究会, pp. 1-7, 2000.

- 青木 敦 「長興村の状況——イバン・ユカン（イバン・ノーカン）氏へのインタビューの記録——」, 『アジア農村研究会通信』1号, アジア農村研究会, pp. 8-9, 2000.
- 青木 敦 「淳熙臧否とその失敗——南宋の地方監察制度の二つの型——」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』132号, 東京大学東洋文化研究所, pp. 1-38, 1997.
- 青木 敦 「北宋末～南宋期の法令に付された越訴規定について」, 『東洋史研究』58巻2号, 東洋史研究会, pp. 1-37, 1999.
- 青木 敦 「健訟の地域的イメージ——11-13世紀江西の法文化をめぐって——」, 『社会経済史学』65巻3号, 社会経済史学会, pp. 1-21, 1999.
- 青木 敦 「宋代の監司の語義について」, 『歴史学研究』753号, 歴史学研究会, pp. 18-22, 2001.

1-2. 著書

- 森安孝夫 『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』, (編者) 森安孝夫/A. オチル (モンゴル国科学アカデミー), 中央ユーラシア学研究会, 292p, 1999.
- 桃木至朗 『新編高等世界史B』(共著), 川北 稔/加藤祐三 (横浜市立大学) /小林雅夫 (早稲田大学) /重松伸司 (三重県立大学) /大内宏一 (早稲田大学) /鈴木董 (東京大学) /江川温/大泉敬子 (東京情報大学) /杉山正明 (京都大学) /桃木至朗, 帝国書院, 397p., pp. 56-59/88-91/166-169/287-290/293-293/318-319/339-339, 1998.
- 桃木至朗 『ベトナムの事典』, 監修者・石井米雄 (神田外語大学学長) /編者・桜井由躬雄 (東京大学) /桃木至朗, 同朋舎, 448p, 1999.
- 桃木至朗 『チャンパ——歴史・末裔・建築——』(共著), 桃木至朗/樋口英夫 (写真家) /重枝豊 (日本大学), めこん, 270p, pp. 1-4/11-96, 1999.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳

- 青木 敦 「中嶋敏編『宋史選挙志訳註(3)』「考課・北宋」部分」, 財団法人東洋文庫, pp. 209-260, 2000.

(2) 書評

- 森安孝夫 「護雅夫著『古代トルコ民族史研究 第3巻』」, 『東洋史研究』57巻3号, 東洋史研究会, pp. 81-98, 1998.
- 桃木至朗 Anthony Reid (ed.), *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States in Southeast Asia and Korea 1750-1900*, 『東南アジア——歴史と文化』28号, 東南アジア史学会, pp. 149-152, 1999.
- 桃木至朗 「O.W.Wolters, *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*, revised edition」, 『東南アジア——歴史と文化』30号, 東南アジア史学会, pp. 147-149, 2001.
- 青木 敦 「佐竹靖彦編『宋元時代史の基本問題』」, 『歴史学研究』712号, pp. 45-47, 1998.

(3) 辞典項目

- 桃木至朗 『日本史広辞典』5項目, 桃木至朗, 山川出版社, 1997.
- 桃木至朗 『ベトナムの事典』16項目, 桃木至朗, 同朋舎, 1999.
- 桃木至朗 『世界史辞典』31項目, 桃木至朗, 角川書店, 2001.
- 荒川正晴 『世界史辞典』6項目, 荒川正晴, 角川書店, 2001.
- 青木 敦 「馬端臨」, 「陳垣」, 「健訟」, 青木 敦, 『歴史学事典』, 弘文堂, 1997.

(4) 解題・解説・総説

- 森安孝夫 “A Report on the 1996-1997 Mongol-Japanese Expeditions in Mongolia”, *Newsletter of the Circle of Inner Asian Art* 7, Circle of Inner Asian Art, SOAS, London University, pp. 6-8, 1998.
- 森安孝夫 「欧州所在中央アジア出土文書・遺品の調査と研究」, 『東方学』99号, 東方学会, pp. 122-134, 2000.
- 荒川正晴 「最近五年(1993~1998) 日本的唐代学術研究概況」, 『中国唐代学会会刊』, 9期, pp. 181-197, 1998.
- 荒川正晴 「近年の日本におけるトゥルファン研究」, 『中央アジア研究』, 6号, pp. 65-89, 2001.
- 桃木至朗 「近代世界システムの拡大とアジアの対応——東南アジアの場合——」, 『世界史のしおり』Feb-98, 帝国書院, pp. 5-8, 1998.
- 桃木至朗 「海洋アジア交易圏と世界の歴史」, 『世界史のしおり』Apr-98, 帝国書院, pp. 7-12, 1998.
- 桃木至朗 「用語解説2項目」, 『世界史のしおり』May-98, 帝国書院, pp. 21-21, 1998.
- 桃木至朗 『新編高等世界B最新版 教授資料』55項目, 帝国書院, 1999.
- 桃木至朗 「オーストロネシア語族・オーストロアジア語族」, 『世界史のしおり』Apr-00, 帝国書院, pp. 16-16, 2000.
- 桃木至朗 「ジャンク船」, 『世界史のしおり』1-Apr, 帝国書院, 2001.
- 青木 敦 「大澤正昭『主張するく愚民』たち——伝統中国の紛争と解決法——」, 『歴史学研究』710号, 歴史学研究会, pp. 32-33, 1998.
- 青木 敦 中嶋敏編『宋史選挙志訳註(3)』「考課」(解説), 東洋文庫, pp. 209-210, 2000.
- 青木 敦 “Comment on Professor Wong’s Paper” in Miura Toru ed., *Ownership, Contracts and Markets in China, Southeast Asia and the Middle East : The Potentials of Comparative Study*, Tokyo, Japan, pp. 56-60, 2001

(5) その他(エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 片山 剛 『『華中・南デルタ農村実地調査報告書』「第一部 江南デルタ」索引』, (共著), 濱島敦俊/片山剛/横山政子, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』41巻, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 73-103, 2001.
- 桃木至朗 「ベトナムの京都フエの魅力」, 『GEO』Apr-97, 同朋舎, pp. 113-113, 1997.
- 桃木至朗 「タインロイ合作社医療センター聞き取り調査報告」, (共著), 吉田彌太郎(京都大学)/桃木至朗/嶋尾稔(慶應義塾大学)/岩井美佐紀(日本学術振興会), 『百穀社通信』8号, ベトナム農村研究会, pp. 147-154, 1998.
- 桃木至朗 「私は悩む——ベトナム史はいつ始まったか——」, 『日本とベトナム』Oct-98, 日本ベトナム友好協会, 1998.
- 桃木至朗 「歴史学は生き残れるか?」, 『ベトナムの社会と文化』1号, ベトナム社会文化研究会, pp. 409-410, 1999.
- 桃木至朗 「韓国調査旅行フィールドノート」, 『前近代東アジアにおける海域交流成立条件に関する基礎的研究』, 海域交流史研究会, pp. 215-219, 2000.
- 桃木至朗 「南の国から I——東洋史という業界——」, 『共通教育だより』15号, 大阪大学全学共通教育機構, pp. 13-16, 2001.
- 桃木至朗 「南の国から II——女性がつくった父系王朝——」, 『共通教育だより』16号, 大阪大学全学共通教育機構, pp. 9-12, 2001.
- 桃木至朗 「南の国から III——南シナ海世界のなかの中世ベトナム——」, 『共通教育だより』17号, 大阪大学全学共通教育機構, pp. 7-10, 2001.
- 桃木至朗 「南の国から IV——ベトナム民族と世界——」, 『共通教育だより』18号, 大阪大学全学共通教育機構, pp. 9-12, 2002.
- 青木 敦 「社会経済史」, 『月刊しにか』, 140号, 大修館, pp. 120-121, 2001.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 片山 剛 「清代民間社会和中央及地方政府——以広東省為主——」, 単独, 「中国伝統社会経済与現代化」国際学術討論会, 海口国際飯店/海南省海口市, 1999年3月25-27日
- 荒川正晴 「ヤールホト古墳群から新たに出土した墓表・墓誌」, 単独, シルクロード国際研究集会, 早稲田大学シルクロード調査研究センター, 早稲田大学文学部/東京都新宿区, 1997年6月22日
- 荒川正晴 「敦煌・トゥルファン研究——歴史・言語・美術——」, 共同, 荒川正晴/武内紹人, 国際東方学者会議, 東方学会, 国立教育会館/東京都千代田区, 2000年5月19日
- 荒川正晴 「唐の中央アジア支配とオアシス国家」, 単独, シルクロード国際シンポジウム——甦るシルクロード——, 早稲田大学シルクロード調査研究所, 早稲田大学国際会議場/東京都新宿区, 2001年11月12日
- 桃木至朗 “Was Dai Viet during the Early Le Period(1428-1527)a Rival of Ryukyu within the Tributary Trade System of the Ming?”, 単独, Euro-Japanese International Seminar: Second International Seminar on Trade and Navigation in Southeast Asia, Institute of Asian Culture, Sophia University/Tokyo, 1997年10月3日
- 桃木至朗 “The Ly Imperial Family and the Invention of the Patrilineal Dynasty in Vietnam”, 単独, Vietnamese Studies and the Enhancement of International Cooperation, Ba Dinh Hall of National Assembly/Hanoi, 1998年7月14日
- 桃木至朗 “Was Champa a Pure Maritime Polity? : Agriculture and Industry Recorded in Chinese Documents”, Core University Seminar, Kyoto University and Thmmasat University: Eco-History and Rise/Demise of the Dry Areas in Southeast Asia, 京都市/京大会館, 1998年10月16日
- 青木 敦 “Comments on Professor Bin Wong’s “Comparative Perspective on Chinese Dynamics of Political and Economic Change””, 東京大学東洋文化研究所, 2001年9月24日
- 青木 敦 「地域與國法——南宋女子分法與江南民間慣習關係再考——」, 単独, 欲掩彌彰——中國史文化中的【私】與【情】——, 国家図書館漢学研究中心, 台湾国家図書館/台湾台北市, 2001年8月20日

(2) 国内学会

- 荒川正晴 「唐の「過所」と「公驗」——トゥルファン出土文書の検討を中心として——」, 単独, 第47回東方学会全国会員総会シンポジウム, 東方学会, 国立教育会館/東京都千代田区, 1997年11月7日
- 桃木至朗 「一族の事業としての陳朝——中世ベトナムにおける父系同族集団の形成——」, 単独, 第60回研究大会, 東南アジア史学会, 大阪府和泉市/桃山学院大学, 1998年11月28日

(3) 研究会

- 片山 剛 「珠江デルタの農村社会と都市——神々・「社会」・市場——」, 単独, 1997年5月23日例会, 京都大学人文科学研究所「中国近代の都市と農村」研究班, 京都大学人文科学研究所分館/京都府京都市, 1997年5月23日
- 片山 剛 「一八〜一九世紀, 珠江デルタにおける都市性と農村性——「土籍」と「客籍」をめぐって——」, 単独, 慶応大学地域研究センタープロジェクト「中国清代の国家と地域」, 第4回研究会, 慶応大学地域研究センター/東京都港区, 1997年12月23日
- 片山 剛 「珠江デルタ開発史と地域社会」, 単独, 1998年3月3日例会, 京都大学東南アジア研究センター「フロンティア社会の比較研究」研究班, 京都大学東南アジア研究センター/京都府京都市, 1998年3月3日
- 片山 剛 「珠江デルタの農村社会と市鎮」, 単独, 1998年10月9日例会, 京都大学人文科学研究所「中

- 国近代化の動態的構造」研究班，京都大学人文科学研究所分館／京都府京都市，1998年10月9日
- 片山 剛 「清代中期の広東人社会と客家人の移住 —— 童試受験問題をめぐって ——」，単独，第9回研究会，慶応大学地域研究センタープロジェクト「中国清代の国家と地域」，慶応大学地域研究センター／東京都港区，1998年10月30日
- 片山 剛 「中国における死の習俗」，単独，1998年11月21日例会，大阪大学大学院文学研究科共同研究「死の習俗の比較史」，大阪大学待兼山会館／大阪府豊中市，1998年11月21日
- 片山 剛 「『自梳女』たち・死後祭祀・宗族制度」，単独，1999年10月29日例会，京都大学人文科学研究所「中国近代化の動態的構造」研究班，京都大学人文科学研究所分館／京都府京都市，1999年10月29日
- 片山 剛 「華南の女性の死生観 —— 結婚しない型を中心に ——」，単独，1999年7月24日例会，大阪大学大学院文学研究科共同研究「死の習俗の比較史」，大阪大学待兼山会館／大阪府豊中市，1999年7月24日
- 片山 剛 「明清時期珠江三角州の形成、開発及桑園困在構造上の変化」，単独，2000年8月23日例会，広東省社会科学学会聯合会，広東省社会科学院／広東省広州市，2000年8月23日
- 片山 剛 「珠江デルタの『自梳女たち』と宗族制度」，単独，2000年9月23日例会，大阪大学大学院文学研究科共同研究「死の習俗の比較史」，大阪大学待兼山会館／大阪府豊中市，2000年9月23日
- 青木 敦 「『中国史』と『東南アジア史』の対話の可能性 —— 岩波講座『東南アジア史2』を読んで ——」，単独，東南アジア史学会関西例会，東南アジア史学会，駅前第3ビル／大阪府，2001年12月22日
- 青木 敦 「上訴制度に見える宋代法制の法定主義 —— 清代の訴訟制度との比較の視点から ——」，単独，魏書研究会夏合宿，魏書研究会，越志旅館／長野県戸隠村，1997年8月3日
- 青木 敦 「台湾桃園県の村にて —— アジア農村研究会1996年桃園県復興郷霞雲村調査報告 ——」，単独，岡山アジア研究会例会，岡山アジア研究会，岡山大学／岡山県岡山市，1997年12月6日
- 青木 敦 「兩岸学術交流における問題点の整理」，中国史国際会議準備委員会ミニシンポジウム，2000年3月18日
- 桃木至朗 「10-14世紀ベトナム王権と女性たち」，単独，東南アジア史学会関西例会第232回例会，大阪市／大阪市立大学文化交流センター，1997年9月27日
- 桃木至朗 “An Introduction to the Recent Research Trends in Japan Concerning Early Modern China”，共同，Shiro Momoki/Kojiro Taguchi (Ph.D.,JSPS)，京都大学東南アジア研究センター／京都市，1999年7月31日
- 桃木至朗 「日本の東南アジア史学会における失われた10年？ —— 『世界各国史5 東南アジア1 大陸部』（山川出版社，1999年12月）を批評する ——」，単独，第264回例会，東南アジア史学会関西例会，大阪市／大阪市立大学文化交流センター，2000年7月15日
- 桃木至朗 「基調講演一関西例会史の回顧と展望 ——」，単独，25周年記念座談会「いままぜ関西例会か —— 東南アジア史研究の未来像を求めて ——」，東南アジア史学会関西例会，大阪市立大学文化交流センター／大阪市，2001年6月23日
- 桃木至朗 「『岩波講座東南アジア史1 原史東南アジア世界』を批評する」，単独，第278回例会，東南アジア史学会関西例会，大阪市立大学文化交流センター／大阪市，2001年10月20日

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 荒川正晴 「シルクロードの国家と経済」，単独，シルクロード学の諸問題，コンソーシアム京都，キャンパスプラザ京都，2001年12月1日
- 荒川正晴 「シルクロードのキャラヴァン交易」，単独，シルクロード学への誘い，コンソーシアム京都，キャンパスプラザ京都，2001年11月25日
- 桃木至朗 「コーディネーター」，(共同)，Osamu Yamaguchi / Shiro Momoki，A Short Training Course on Building Capacity for the Research, Preservation, Collection and Presentation of Intangible Cultural Values of Ethnic Minorities in Vietnam, Bao Son Hotel / Hanoi,

2001年8月12-17日

- 桃木至朗 「歴史学と21世紀の東南アジア研究」, 単独, 夏季公開セミナー「歴史万華鏡」, 京都大学東南アジア研究センター, 京都大学東南アジア研究センター/京都市, 2001年9月7日
- 桃木至朗 「コーディネーター」, 単独, ダイナミック・ベトナム2001「ベトナムの女と男」, 日本ベトナム友好協会大阪府連合会, 日本ベトナム友好協会大阪府連合会事務所/大阪市, 2001年10月3-31日
- 桃木至朗 「コーディネーター」, 単独, 「やわらか・しなやか・したたか: 魅惑のベトナム」, 大阪北市民教養ルーム, 大阪北市民教養ルーム/大阪市, 2002年2月26日-3月26日

(5) その他 (講演・Workshop)

- 桃木至朗 「事務局長」, 単独, 第1回日越インタースピーチコンテスト, 日越インタースピーチコンテスト日本実行委員会, 神田外語大学/千葉市, 2000年4月1日
- 片山 剛 “The Boundaries and Territories of Natural Villages and Administrative Villages in the Pearl River Delta in Late Imperial and Republican China”, 単独, Seminars Trinity Term 2001, Institute for Chinese Studies, University of Oxford, England, 2001年6月7日
- 片山 剛 “New Directions of Chinese Social History in Japan”, 単独, Workshop “Asia in the World, the World in Asia”, University of Chicago, United State of America, 2001年10月18日
- 片山 剛 “What Kind of Relationship Is This? : A Relationship Between Villages and Land in the 19th Century South China”, 単独, University of California, Irvine, United State of America, 2001年11月28日
- 片山 剛 “Regional Structure of Ritual Spaces for Soul Tablets: Past and Present in the Pearl River Delta”, 単独, University of Redland, United State of America, 2001年11月29日
- 片山 剛 “Ritual Spaces for Soul Tablets: : Past and Present in the Pearl River Delta”, 単独, Noon Lecture Series, UCLA Center for Chinese Studies, United State of America, 2001年12月6日

2. 教員の受賞歴

- 森安孝夫 流沙海西奨学会賞 (第8回) 流沙海西奨学会「唐代内陸アジア史の研究——トルキスタン成立前史——」昭和50 (1975) 年11月
- 森安孝夫 東方学会賞 (第7回) 東方学会「敦煌と西ウイグル王国」昭和63 (1988) 年11月
- 荒川正晴 流沙海西奨学会賞 (第21回) 流沙海西奨学会「麹氏高昌国における郡県制の性格をめぐって」昭和63 (1988) 年11月

【IV. 教員による競争的資金獲得】 (1997年度~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

- 平成9年度 国際学術研究 8041014 突厥・ウイグル・モンゴル帝国時代の碑文及び遺跡に関する歴史学・文献学的調査 森安孝夫 6,800,000円
- 平成9年度 奨励研究 (A) 12710190 17~20世紀中国の軍隊・警察・監獄と犯罪現象の変化 太田 出 900,000円
- 平成10年度 国際学術研究 8041014 突厥・ウイグル・モンゴル帝国時代の碑文及び遺跡に関する歴史学・文献学的調査 森安孝夫 4,700,000円

平成12年度	基盤研究 (B) (1) 12571029	トゥルファン出土文書および関連伴出資料の調査	荒川正晴	3,100,000円
平成13年度	基盤研究 (B) (1) 12571029	トゥルファン出土文書および関連伴出資料の調査	荒川正晴	2,600,000円
平成13年度	基盤研究 (B) (1) 13410108	中央アジア出土文物から見たシルクロード貿易と文化交流の諸相	森安孝夫	6,200,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

平成9年度	三菱財団人文科学研究助成	トゥルファン出土漢語文書の研究	荒川正晴	3,700,000円
平成10年度	懐徳堂研究出版助成	珠江デルタ農村社会史研究	片山 剛	200,000円
平成11年度	三菱財団人文科学研究助成	華中・南デルタ周縁部の開発と農村社会の史的研究	片山 剛	2,000,000円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

森安 孝夫 教授

- 日本モンゴル学会 理事 (任期1987年5月～現在)
- 日仏東洋学会 評議員 (任期1991年3月～現在)
- 内陸アジア史学会 常任理事 (任期1994年11月～現在)
- 東方学会 評議員 (任期2000年6月～現在)

片山 剛 教授

- 史学会 評議員 (任期2001年10月～現在)
- 中国史学会 評議員 (任期2001年4月～現在)

荒川 正晴 教授

- 内陸アジア史学会 監事 (任期1994年11月～現在)

桃木 至朗 教授

- 東南アジア史学会 関西地区委員 (任期1998年1月～1999年12月)
- 編集委員 (任期2000年1月～現在)
- 史学研究会 (京都大学) 評議員 (任期2000年6月～現在)

青木 敦 助教授

- 宋代史研究会 研究報告第八集編集委員長 (任期2001年10月～現在)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

森安孝夫 教授

- 1 学期 東洋史特殊演習 東洋史学合同演習 (片山教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
通年 東洋史特殊演習 東西交渉史フランス語演習
通年 中央アジア史特殊講義 古トルコ文献学
1 学期 中央アジア史特殊講義 古代ウイグル民族史
通年 中央アジア史特殊演習 中央アジア史ドイツ語演習
通年 中央アジア史特殊演習 西域出土文書演習
1 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (片山教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
2 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (片山教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
通年 東洋史演習 東西交渉史フランス語演習
1 学期 中央アジア史講義 古代ウイグル民族史
通年 中央アジア史講義 古トルコ文献学
通年 中央アジア史演習 中央アジア史ドイツ語演習
1 学期 東洋史博士論文作成演習 東洋史学論文指導 (片山教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
2 学期 東洋史修士論文作成演習 東洋史学論文指導 (片山教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)

片山 剛 教授

- 1 学期 東アジア史特殊演習 漢籍講読演習
2 学期 東アジア史特殊演習 漢籍講読演習
1 学期 東アジア史特殊演習 英文文献講読演習
2 学期 東アジア史特殊演習 英文文献講読演習
1 学期 東アジア史特殊講義 地域社会の形成と漢文化受容および中華帝国への参入
1 学期 東アジア史講義 地域社会の形成と漢文化受容および中華帝国への参入
1 学期 東アジア史演習 漢籍講読演習
2 学期 東アジア史演習 漢籍講読演習
1 学期 東アジア史演習 英文文献講読演習
2 学期 東アジア史演習 英文文献講読演習
通年 東アジア史演習 東アジア史研究の諸問題
1 学期 東洋史特殊演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
1 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
2 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
1 学期 東洋史博士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
2 学期 東洋史修士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)

荒川正晴 教授

- 1 学期 東洋史特殊演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
通年 中央アジア史特殊演習 北～中央アジア史漢文史料読解
2 学期 中央アジア史特殊講義 唐代官文書の研究
2 学期 中央アジア史講義 オアシス国家とキャラヴァン交易
通年 中央アジア史演習 北～中央アジア史漢文史料読解
通年 中央アジア史演習 中央アジア出土漢文文書演習
1 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
2 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
1 学期 東洋史博士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 片山教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
2 学期 東洋史修士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 片山教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)

桃木至朗 教授

- 1 学期 東南アジア史特殊演習 東南アジア近世社会史 I
- 2 学期 東南アジア史特殊演習 東南アジア近世社会史 II
- 2 学期 東南アジア史特殊講義 東南アジア近世社会経済史 I
- 1 学期 東洋史特殊演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 青木助教授と共同)
- 2 学期 東南アジア史講義 東南アジア近代史研究入門
- 1 学期 東南アジア史演習 東南アジア近世社会史 I
- 2 学期 東南アジア史演習 東南アジア近世社会史 II
- 1 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 青木助教授と共同)
- 2 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 青木助教授と共同)
- 1 学期 東洋史博士論文作成演習 史学論文指導 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 青木助教授と共同)
- 2 学期 東洋史修士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 青木助教授と共同)

青木 敦 助教授

- 通年 東アジア史特殊演習 東アジア史研究の諸問題
- 2 学期 東アジア史特殊講義 東アジアの制度と経済
- 1 学期 東洋史特殊演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 桃木教授と共同)
- 2 学期 東アジア史講義 アジアの法制と経済
- 1 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 桃木教授と共同)
- 2 学期 東洋史演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 桃木教授と共同)
- 1 学期 東洋史博士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 桃木教授と共同)
- 2 学期 東洋史修士論文作成演習 東洋史学論文指導 (森安教授, 片山教授, 荒川教授, 桃木教授と共同)

大櫛敦弘 講師 (非常勤講師・高知大学)

- 1 学期 東アジア史特殊講義 車の中国古代史
- 1 学期 東アジア史講義 車の中国古代史

清水和裕 講師 (非常勤講師・神戸大学)

- 2 学期 西・南アジア史特殊講義 初期イスラーム史の諸問題
- 2 学期 西・南アジア史講義 初期イスラーム史の諸問題

2. 学部授業担当

森安孝夫 教授

- 1 学期 東洋史学講義 古代ウイグル民族史を中心とする中央アジア史
- 1 学期 東洋史学演習 中央アジア史英語演習
- 2 学期 東洋史学演習 中央アジア史英語演習
- 通年 東洋史学演習 東西交渉史フランス語演習
- 通年 東洋史学演習 東洋史学合同演習 (片山教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
- 通年 東洋文献学演習 漢籍基礎講読 (荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)

片山 剛 教授

- 1 学期 東洋史学講義 地域社会の形成と漢文化受容および中華帝国への参入
- 通年 東洋史学演習 東洋史学合同演習 (森安教授, 荒川教授, 桃木教授, 青木助教授と共同)
- 通年 東洋文献学演習 漢籍基礎講読

荒川正晴 教授

- 2 学期 東洋史学講義 オアシス国家とキャラヴァン交易
- 通年 東洋史学演習 漢籍史料講読

通年 東洋史学演習 東洋史学合同演習（森安教授，片山教授，桃木教授，青木助教授と共同）
 通年 東洋文献学演習 漢籍基礎講読（森安教授，桃木教授，青木助教授と共同）

桃木至朗 教授

2 学期 東洋史学講義 東南アジア近代史入門
 1 学期 東洋史学演習 東南アジア史英語演習
 2 学期 東洋史学演習 東南アジア史英語演習
 通年 東洋史学演習 東洋史学合同演習（森安教授，片山教授，荒川教授，青木助教授と共同）
 通年 東洋文献学演習 漢籍基礎講読（森安教授，荒川教授，青木助教授と共同）

青木 敦 助教授

2 学期 東洋史学講義 東アジア諸地域の法と経済
 1 学期 東洋史学演習 中国史英語演習
 2 学期 東洋史学演習 中国史英語演習
 通年 東洋史学演習 宋代漢籍史料講読
 通年 東洋史学演習 東洋史学合同演習（森安教授，片山教授，荒川教授，桃木教授と共同）
 通年 東洋文献学演習 漢籍基礎講読（森安教授，荒川教授，桃木教授と共同）

大櫛敦弘 講師（非常勤講師・高知大学）

1 学期 東洋史学講義 車の中国古代史

清水和裕 講師（非常勤講師・神戸大学）

2 学期 東洋史学講義 初期イスラーム史の諸問題

3. 共通教育担当

森安孝夫	教授	Ⅱセメスター	専門基礎	アジア史学基礎 A
桃木至朗	教授	Iセメスター	人間教育	歴史上の人間像
片山 剛	教授	Iセメスター	専門基礎	アジア史学基礎 B
		Ⅱセメスター	主題別	現代世界と東アジア
荒川正晴	教授	Iセメスター	主題別	アジアの異文化交流
		Iセメスター	基礎ゼミ	シルクロードの歴史と文化
青木 敦	助教授	Ⅲセメスター	主題別	台湾の社会と歴史

4. 他大学における集中講義等

森安孝夫 平成13年度 富山大学人文学部に出講
 片山 剛 平成12年度 山口大学人文学部・大学院人文科学研究科に出講
 片山 剛 平成12年度 徳島大学総合科学部に出講
 桃木至朗 平成13年度 京都大学大学院文学研究科・文学部に出講

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：杉山正明（京都大学大学院文学研究科教授）

イ. 研究の先見性・独創性

研究における先見性・独創性の観点から、大阪大学大学院文学研究科東洋史学という組織（専攻）を眺めれば、かなり水準が高いとあっていいだろう。組織体として際立つ特徴は、空間的にはパミール以東のインドを含まないアジアに明確に対象地域を設定していること、そのうえでアジア史さらには世界史全体への関心・視野をもちつつも、唐宋以後の中国史、イスラーム化以前の中央アジア史、そして東南アジア史という三つの研究領域にきわめて特化したかたちで教員・院生ともに研究活動を展開している点にある。これは、国内の他の大学がともすれば、総花的な研究展開になりがちななかで、実に明確で分かりやすい戦略的方向性をもっているといえるだろう。

個々の教員の研究についていえば、森安孝夫氏のイスラーム化以前の中央アジア・北アジア史研究は、東大百年の伝統が消えうせるなかで、唯一それをうけつぎ、敦煌・トゥルファン学における歴史的アプローチとあいまって、鋭意育成した相当数の有為の若手研究者・院生たちをいまや擁し、国内はもとより、世界のなかでも屈指の拠点を形成しつつある。片山剛氏の華南デルタ農村社会史研究および清代・民国時代史研究は、文献研究と実地調査を有機的に組みあわせて、集落レベルの基層社会の具体相を精力的に描くものであり、従来の日本の中国史研究にもっとも欠落していた独創的な視点・方法論を採るものとして印象深い。荒川正晴氏の研究は、一方に唐代史という時間軸、もう一方に敦煌・トゥルファン・河西・中央アジアという空間軸のふたつのスタンスのなかで、出土文書・出土文物などの徹底的な精査・解読にもとづき、きわめて具体性の高い歴史社会の実態を追究するものであり、森安氏との相互協力による研究展開もこれまでの枠をこえている。桃木至朗氏の研究は、ヴェトナム史を中心に東南アジア史全域に目を配り、また同時期の中国史研究とも連絡をとりつつ、多角的・網羅的に当該分野の歴史の具体像と全体像をとらえ、視野に収めようとする顕著な方向性があり、日本における東南アジア史研究のオピニオン・リーダー的位置にある。青木敦氏の研究は、宋代の官制史・法文化史と社会経済史の両方向からのアプローチを当面の主軸としつつ、一方で未解明の点の多い南宋史・江南史に深化し、一方で中国史の全体像を再構築しようとするもので、閉塞的状况が目立つ当該分野にあって前途洋々たる感がある。以上5名の研究は、それぞれの分野での最先端、ないしは国内外の学界を指導するものであり、高い評価があたえられよう。大学院生の研究も、意欲的かつ精力的におこなわれ、それぞれ先見性・独創性がみられるが、研究の精密化・集中化のためやむなきこととはいえ、やや教員の研究課題・研究方向と共通・類似したものが多いのはいなめない。

ロ. 研究の実証性あるいは手堅さ

いずれの教員も、国内でレフリー制をしき、かつ定評のある研究誌に多数の論文を執筆しているばかりでなく、国際的学術雑誌での論文掲載も顕著である。漢文文献・現地語文献の精査・精

読とフィールド・ワークを組み合わせた方法においても、実証性・手堅さは印象深い。大学院生についても、その研究水準は相当に高く、旺盛な研究活動とあわせ、高く評価されよう。

ハ．研究の持続性・ニ．研究の体系性

教員については、研究テーマと方法にそれぞれ一貫した持続性・方向性がいちじるしく、かつ体系化への努力も明確で、十分に評価される。大学院生については、現段階では定かにいいがたいが、既存の発表論文からすると、着実な体系的アプローチを心掛けている様子が見てとれ、持続性についても博士課程修了者の博士論文のあり方から考えて懸念ないであろう。

ホ．研究の波及性

すべての教員が、複数領域にまたがる研究方法を採っているだけでなく、論文はもとより各種の企画執筆にもたずさわっており、そうした場を通してみずからの研究成果を国内外に発信し、関連分野への刺激やひろがりにも貢献している。

ヘ．教員組織としてのまとめ

教員の研究領域は、ほぼ3つに特化している一方、森安と荒川、片山と桃木、片山と青木といったかたちで、相互協力・相互乗り入れの研究展開をしており、研究推進上の連絡・まとめは十分である。ただ教員構成として、50代と40代後半の教員が4名を占め、年齢バランスがややよくないように見える。

ト．学会活動での位置

学術雑誌『内陸アジア言語の研究』の発行母体である中央ユーラシア学研究会をはじめ、中央アジア学フォーラム、海域アジア史研究会を催し、大学の枠をこえた交流と研究の進展に寄与している。また、全教員が、国内の主要な学会・研究会の重要な委員・役員をつとめているだけでなく、海外の学会との連絡も熱心であり、全体としてきわめて高く評価できる。大学院生も各種の学会・研究会で旺盛な報告・活動を展開している点も特筆に値する。

3-9 西洋史学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

一般に西洋史学の教育・研究活動においては、ある種の慣行として、古代オリエント、古代地中海世界、中世のヨーロッパ世界、近世以降のヨーロッパ、ロシア、南北アメリカ、オセアニアといった対象領域が想定されている。しかし私たちの専門分野では、こうした地理的枠を限定的なものとしてはとらえていない。歴史研究の枠組みとして真に成り立ちうるのは世界史であって、西洋史学は世界史を西洋文明のインパクトという方向から考察することに他ならないと考えるからである。

もちろん西洋史学研究は個別具体的問題の考察から始まるのであり、そこにおける中心的主張は史料分析に基礎を置くものでなければならない。時代や地域によっては史料講読だけで済む多様な語学力が必要とされる。さらにその解釈に当たっては、通史的知識はもとより、人文・社会諸科学の成果を使いこなすだけの知的容量が要求される。しかし、こうして得られた個別の知見は、さらに関係史的、比較史的な考察を通じ世界史の中で意味づけされねばならない。このことは学生にも教官にも等しく要請される課題である。

学生には、一方で個々人における強い自覚と自己研鑽を伴った個別テーマへの取り組みが、他方で演習や研究会において他の地域・時代を研究する教官・学生と活発に議論することが求められる。指導教官による個別指導はこうした自主的努力を補うものと位置づけられている。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 4 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：川北 稔 江川 温 竹中 亨 杉本淑彦 (客員)

助教授：藤川隆男

助手：中川順子

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
49	16	15	0	0	0	4	2	0

※うち留学生 0 名, 社会人学生 12 名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	15	6	0	0	0
'98	14	4	1	1	1
'99	11	3	1	2	2
'00	16	5	1	0	1
'01	10	5	3	3	0
計	66	23	6	6	4

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての教育・研究活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	1	1
'99	0	2	2
'00	0	0	0
'01	3	0	3
計	3	3	6

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- 高橋 章 「アメリカ帝国主義成立史の研究」, 論文博士, '98年10月12日,
主査, 川北稔, 副査, 合阪學, 竹中亨
- 河村貞枝 「イギリス近代フェミニズム運動の研究」論文博士, '99年10月24日
主査, 川北稔 副査, 竹中亨, 藤川隆男
- 和田光弘 「紫煙と帝国」, 論文博士, '99年11月6日
主査, 川北稔, 副査, 合阪學, 藤川隆男
- 北原靖明 「大英帝国とその周縁への世紀転換期（1877-1910）アングロ・インディアンのかなざし」,
'00年9月21日, 課程博士, 主査, 川北稔, 副査, 竹中亨, 杉本淑彦
- 酒井一臣 「「文明国標準」の帝国」, 課程博士, '02年3月25日
主査, 竹中亨, 副査, 杉本淑彦, 藤川隆男
- 水野祥子 「19世紀後半から20世紀前半における環境保護主義の成立と普及」, 課程博士
'02年3月25日, 主査, 川北稔, 副査, 竹中亨, 藤川隆男

2. 大学院生等による論文発表等の件数

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	1	0	0	0	0	1
'99	2	0	2	0	2	6
'00	3	0	0	1	2	6
'01	6	0	2	0	0	8
計	12	0	4	1	4	21

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	1	2	8	2	0	13
'98	0	4	11	1	0	16
'99	0	3	13	0	0	16
'00	1	5	9	0	0	15
'01	1	5	16	0	0	22
計	3	19	57	3	0	82

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 川本真浩 「前世紀転換期イギリスにおける帝国と地理——「帝国意識」形成の歴史的背景、待兼山論叢、第31号史学編、1997年。
- 中川順子 「近世ロンドンの外国人——イギリス財政における外国人の貢献——」、西洋史学、第184号、1997年。
- 水野祥子 「一九世紀末イギリスの環境保護活動——ナショナル・トラスト創設をめぐる新たな展開——（発表要旨）」、『1997年度 広島史学研究会大会プログラム』、1997年。
- 上山益己 「12世紀北フランス貴族の家門理解——アンジュー伯家の事例——」、待兼山論叢、第32号史学編、1998年。
- 水野祥子 「世紀転換期イギリスの環境保護活動——ナショナル・トラスト創設をめぐる新たな展開——」、西洋史学、第191号、1998年。
- 長井伸仁 「第三共和政期のパリ市議会議員（1871—1914年）（発表要旨）」、『1998年度 広島史学研究会大会プログラム』、1998年。
- 戸渡文子 「イギリスにおける「老人問題」の発見——『タイムズ』（1891—1950年）社説の分析をとおして——」、西洋史学、第195号、1999年。
- 酒井一臣 「帝国日本と「文明国標準」——大正期南洋群島問題を中心に——」、渋沢研究、第12号、1999年。
- 酒井一臣 「ワシントン会議への道——太平洋問題と「帝国」日本——」、法学政治学論究、第43号、1999年。
- 長井伸仁 「第三共和政期のパリ市議会議員（1871—1914年）」、史林、第82巻第4号、1999年。

- 長井伸仁 「19世紀のパリ市議会議員」, 帝塚山大学教養学部紀要, 第56輯, 1999年。
- 竹中 徹 「シャルル5世期フランス王権のキリスト教世界観——『果樹園の夢』におけるフランス王と教皇——(発表要旨)」, 『1999年度 広島史学研究会大会プログラム』, 1999年。
- 中川順子 「近世イギリス社会における外国人の受容——帰化と国籍取得の事例から——(発表要旨)」, 『日本西洋史学会第49回大会 部会別自由論題報告要旨』, 1999年。
- 諸沢由佳 「13世紀レコンキスタにおけるセビーリャの市と属域」, 『スペイン史学会第84回定例研究会プログラム集』, 1999年。
- 戸渡文子 「イギリスにおける「古い」の発見」, 歴史評論, 608号, 2000年。
- 鷺田睦朗 「ローマ共和政「最後の時期」における高位公職選挙——ケントゥリア民会の制度とその運用状況から——」, 西洋史学, 199号, 2000年。
- 坂本優一郎 「一八世紀ロンドン・シティとイギリス政府公債」, 西洋史学, 第200号, 2001年。
- 竹中 徹 「シャルル5世期フランス王権の『夢』——王と教皇, キリスト教世界——」, 西洋史学, 第197号, 2000年。
- 水野祥子 「地球規模でみる環境保護主義の成立——英国領インドの森林保護を通して(発表要旨)」, 『大阪歴史科学協議会例会 彙報』, 2000年。
- 坂本優一郎 「ホイッグ寡頭政とロンドン資本市場(報告要旨)」, 『史学研究(2000年度 広島大学史学研究会 中国四国歴史学地理学協会 大会プログラム 部会発表要旨)』, 第230号, 2000年。
- 水野祥子 「帝国からみる環境の歴史——環境史の新たな潮流——」, 歴史科学, 第165号, 2001年。
- 水野祥子 「イギリス帝国における環境保護主義の成立——植民地インドの森林保護政策を通して——(発表要旨)」, 『日本西洋史学会第51回大会 部会別自由論題報告要旨』, 2001年。
- 浅野敬一 「社会政策としての中小企業支援——米国中小企業庁の設立に至る過程を中心に——」, アメリカ史評論, 第19号, 2001年。
- 浅野敬一 「アメリカにおけるコンビニエンス・ストアの成立と発展——小規模小売業における大量生産システムの導入——」, 市場史研究, 第21号, 2001年。
- 宮崎 章 「イギリス帝国史再考」, 待兼山論叢, 第34号史学篇, 2001年。
- 酒井一臣 「新四国借款団と国際金融家——国際協調主義の論理と限界——」, 史林, 第84巻2号, 2001年。
- 諸沢由佳 「13世紀後半のセビーリャにおけるアラゴン連合王国出身者の殖民」, スペイン史研究, 第15号, 2001年。
- 山脇範子 「近世フランスにおける系譜学——記憶の場という視点から——」, 岡田山論集, 第3号, 2001年。
- Masumi UEYAMA 'La littérature généalogique: l'exemple de la dynastie des comtes d'Anjou (発表要旨)', Séminaire "Sociétés, idéologies et croyances au Moyen Age", Université de Provence (フランス, プロヴァンス大学)。
- 田中晶子 「戦後西ドイツと「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ——1950年代の自動車のある生活」をめぐって——(発表要旨)」, 『史学研究(2001年度広島史学研究会大会同大会レジュメ・プログラム集)』, 第234号, 2001年。
- 酒井一臣 「「文明国標準」としての協調外交(発表要旨)」, 『日本国際政治学会2001年度研究大会』, 2001年。
- 酒井一臣 「交錯する脅威——E・L・ピースと日豪関係——(発表要旨)」, 『オーストラリア学会第12回全国研究大会』, 2001年。

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

- 長井伸仁 「地方自治体研究博士論文賞 (Prix de thèses sur les collectivités locales)」
「審査員特別賞 (Prix spécial du jury)」

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 5 名

<内訳>

PD：3名 DC：2名 外国人：0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 4 名

学部：0名 PD：0名 DC：4名

6. 専門分野出身の研究者（1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）計 4 名

'97年度：0名 '98年度：1名 '99年度：2名 '00年度：1名 '01年度：0名

<内訳>

1998年度 川本真浩（博士後期課程単位取得退学） 大阪大学大学院文学研究科助手

1999年度 長井伸仁（PD） 日本学術振興会特別研究員

大阪大学大学院文学研究科助手

中川順子（博士後期課程単位取得退学） 大阪大学大学院文学研究科助手

2000年度 坂本優一郎（博士後期課程中退） 京都大学人文科学研究所助手

7. 専門分野出身の高度職業人（1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳等の技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）計 17 名

'97年度：0名 '98年度：2名 '99年度：2名 '00年度：7名 '01年度：6名

<内訳> 技術職 7名 ジャーナリスト 1名

教職 9名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

1997～2001年度 『西洋史学』185号～204号 学術雑誌（学会誌）

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 1997－2001年度 日本西洋史学会『西洋史学』編集部（国内学会）
1997－2001年度 大阪イギリス史研究会（隔月，全国規模の研究会）
1997－2001年度 イギリス都市生活史研究会（隔月，研究会）
1997－2001年度 イギリス帝国史研究会（年2回，全国規模の研究会）
1997－2001年度 近世イギリス史研究会（年1回，全国規模の研究会）
1997－2001年度 ワークショップ西洋史・大阪（シンポジウム）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

西洋史専門分野の活動を，（1）共同研究の推進や学界活動 （2）個人の研究 （3）教育
その他の三つの面から評価したい。

（1）西洋史研究室は，雑誌『西洋史学』の編集やワークショップ西洋史・大阪，大阪イギリス史研究会を恒常的に主催するだけでなく，イギリス都市生活史研究会，イギリス帝国史研究会，近世イギリス史研究会，「近代世界システムと地域文化」研究会（阪大），「死の習俗の比較史」研究会（阪大），世界における「白人」の構造化研究会（民博）などの事務局や代表者を提供することで，西洋史学や他分野との共同研究の結節点としての役割を果たしてきた。公的な財政支援をほとんど受けずに，共同研究機関のごとき役割を果たせるのは，スタッフの高い能力と，外部の研究者の高い評価を示唆している。また，日本西洋史学会の代表者や編集委員，日本歴史学協会や史学研究会，日仏歴史学会の役員を提供し，西洋史学界を支えてきた。

（2）西洋史研究室のスタッフは，個人として各個の研究にのみに注力するのではなく，岩波講座世界歴史の編集や辞典類の編集，フランス史，ドイツ史，イギリス史，オーストラリア史，中世史などの概説の執筆など，学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実にも強い要請があり，積極的に参加している。それぞれ個人を見ると，川北は生活史と世界システム論を組み合わせ，壮大な歴史理論を構築している。その偉業は海外でも認められており，ロイアル・ヒストリカル・ソサエティのフェロウとなった。江川は中世の領主層や習俗に関する研究で学界をリードし，竹中は日独関係の研究で国際評価を受ける一方，西洋史学会で西洋史研究の在り方に問題提起したのは記憶に新しい。藤川は人種・ジェンダーなど新たな研究領域の開拓に取り組み，中川は在英外国人という視点からのイギリス近世史の読み替えに，独創性を発揮している。これらの研究活動は，各種の科学研究費だけではなく，松下国際財団，村

田財団，旭硝子財団，豪日交流基金などの支援などの形で社会的評価を受けている。

- (3) 大学院生に対しては，学内での教育・研究を支援するだけでなく，海外留学を奨励し，毎年3－5人が常時留学している状況にある。これらの学生に対する財政的な支援は今後の課題の一つであろう。西洋史専門分野は，社会人学生や他大学の学生の受け入れにも熱心であるが，スタッフの不足は深刻である。さらに，IT教育の充実と研究への利用を重要な目標とし，データベースの作成とウェブ上での公開を研究・教育活動の一部としている。現在，100万字を越えるデータを西洋史ホームページ上で検索可能にしており，IT利用への取り組みは進んでいる。

以上のように，西洋史研究室は，阪大のみの教育研究活動にとどまらず，日本の西洋史研究・学界を支える支柱の一つとして大きく貢献してきた。現在の限られたスタッフの数から言えば，その能力の限界に近い活動を展開していると思われる。今後の最大の問題点は，研究科の事情によって，欠員2人の新規採用が停止されていることである。現在の高いレベルの活動を維持するには，すぐさま計画的な採用を実現できるようなシステムを文学研究科が早急に構築する必要がある。現状がこれ以上続けば，教育・研究活動に大きな支障が生じるであろう。

【Ⅲ．教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 江川 温 「ヨーロッパの成長」，『岩波講座世界歴史8 ヨーロッパの成長』，岩波書店，pp. 3～78，1998年。
- 江川 温 「王権の基礎——クロヴィスの洗礼から聖別式のランス定着まで——」，『フランス学を学ぶ人のために』，世界思想社，pp. 27～40，1998年。
- 江川 温 「ユリの花と十字架と——中世盛期，末期の王権と聖ドニ崇敬——」，『フランス学を学ぶ人のために』，世界思想社，pp. 41～53，1998年。
- 江川 温 「『親族の賛同』は何を表現しているのか——11・12世紀のフランス領主社会における聖界への所領贈与と親族の関与——」，『公家と武家——「家」の比較文明的考察——』，思文閣出版，pp. 494～517，1999年。
- 江川 温 「『神の平和』運動の軌跡が照らしだすもの——11，12世紀における平和理念と紛争処理——」，『フランス史からの問い』，山川出版社，pp. 4～24，2000年。
- 江川 温 「国・地域別の諸問題 フランス（含ベルギー）」，『西洋中世史研究入門』，名古屋大学出版会，pp. 193～206，2000年。
- 江川 温 「中世ヨーロッパ世界」，『西洋世界の歴史』，山川出版社，pp. 47～101，1999年。
- 川北 稔 「環大西洋革命の時代」，『岩波講座世界歴史17（環大西洋革命）』，岩波書店，pp. 3～72，1997年。
- 川北 稔 「自然環境と歴史学：トータル・ヒストリを求めて」，川北稔 樺山紘一ほか編『岩波講座世界歴史1』世界史へのアプローチ，岩波書店，pp. 109～131，1998年。
- 川北 稔 「生活文化の「イギリス化」と「大英帝国」の成立：18世紀におけるイギリス帝国の変容」，木畑洋一編『大英帝国と帝国意識：支配の深層を探る』，ミネルヴァ書房，pp. 75～96，1998年。
- 川北 稔 「イギリス風マナーの自立：「イギリス人らしさ」の成立」，指昭博編『「イギリス」であること：アイデンティティ探求の歴史』，刀水書房，pp. 101～117，1999年。

- 川北 稔 「18世紀の黒いイギリス人たち」,『周縁からのまなざし：もうひとつのイギリス近代史』, 山川出版社, pp. 8~29, 2000年.
- 川北 稔 'British Hegemony and Post-War interpretation of History in Japan', S. Akita and T. Matsuda, *Looking Back at the 20th century*, Osaka University of Foreign Studies, pp.72~78, 2000年.
- 川北 稔 「『生活水準』の指標としての身長：イギリス産業革命研究の新展開」, 龍谷大学経営学論集 Apr-37, 龍谷大学経営学部, pp. 1~11, 1998年.
- 川北 稔 「歴史学はどこへ行くのか：21世紀にむかって」, 七隈史学創刊号, 福岡大学, pp. 3~12, 2000年.
- 川北 稔 'Great Britain: Not in the Decline Yet?', *Human and Environmental Forum*, Kyoto University, pp.105~108, 2001年.
- 川北 稔 「世界史のなかの生活史」, 川北稔 樺山紘一ほか編『世界史へ』, 山川出版社, pp. 144~161, 1998年.
- 川北 稔 「ウィリアムズ」, 川北稔 尾形勇ほか編『20世紀の歴史家たち3』, 刀水書房, pp. 235~245, 1999年.
- 川北 稔 「歴史観としての世界システム論」,『世界システムを読む』, 情況出版社, pp. 19~30, 2000年.
- 川北 稔 「帝国と植民地：18世紀イギリス帝国の変質」, 浜下武志/川北稔編『支配の地域史』, 山川出版社, pp. 330~361, 2000年.
- 川北 稔 「地主ジェントルマンの20世紀：ハバカクとトムソンの理解」, 歴史評論, 577号, 歴史科学協議会, pp. 2~14, 1998年.
- 竹中 亨 'Populism as an Analytical Instrument for the Comparative Perspective', *Publication of the Proceedings from the Kyoto American Studies Summer Seminar 1997*, Center for American Studies, Ritsumeikan Univ., pp.95~101, 1997年.
- 竹中 亨 「『国民』への憧憬としての政治：ドイツにおける極右ポピュリズム」,『よみがえる帝国：ドイツ史とポスト国民国家』, ミネルヴァ書房, pp. 185~217, 1998年.
- 竹中 亨 「明治日本におけるドイツ系音楽家——文化移転としての洋楽——」,『西洋における移動と移民の史的構造/平成9~11年度科学研究費補助金基盤研究B-2研究成果報告書』, pp. 27~37, 2000年.
- 竹中 亨 *Bild der bundesrepublikanischen Demokratie seit der Wende 1998 in der japanischen Öffentlichkeit*, Leske + Budrich, pp.369~382, 2001年.
- 竹中 亨 「ドイツ近現代史における反ユダヤ主義の歴史的的位置」, 大阪大学文学部紀要, 39巻, 大阪大学文学部, pp. 1~19, 1999年.
- 竹中 亨 「伊沢修二における『国楽』と洋楽——明治日本における洋楽受容の論理——」, 大阪大学大学院文学研究科紀要, 40巻, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1~27, 2000年.
- 竹中 亨 「西洋史学と実証」, 西洋史学, 191号, 日本西洋史学会, pp. 42~49, 1998年.
- 竹中 亨 「『発見する歴史学』か『解釈する歴史学』か?」, 西洋史学, 200号, 日本西洋史学会, pp. 47~51, 2001年.
- 藤川隆男 「大洋を渡る女たち——19世紀オーストラリアへの移民」,『近代ヨーロッパの探求』移民, 1巻, ミネルヴァ書房, pp. 125~184, 1998年.
- 藤川隆男 「最もイングッシュなものそれは最も美しい」,『イギリスであること』, 刀水書房, pp. 143~165, 1999年.
- 藤川隆男 「移住する先住民：クィーンズランドのアボリジナル」,『先住民と都市』, 青木書店, pp. 24~40, 1999年.
- 藤川隆男 「オーストラリアにおけるアイルランド系移民」,『岩波講座世界歴史/移動と移民』, 19巻, 岩波書店, pp. 87~108, 1999年.
- 藤川隆男 「19世紀オーストラリアへの女性移民(ジェントルウーマン)」,『西洋における移動と移民の史的構造(代表 合阪学)』, pp. 19~22, 2000年.

- 藤川隆男 「ジェントルウーマン・ダウンアンダー」, 『ジェントルマンであること』(山本正編), 刀水書房, pp. 146~169, 2000年.
- 藤川隆男 「アポリジナルと白人の法」, 『オセアニア近代史の人類学的研究/国立民族学博物館研究報告』別冊21巻, 国立民族学博物館, pp. 175~195, 2000年.
- 藤川隆男 「オーストラリアにおけるイングリッシュ・アイデンティティ」, 『オーストラリアにおけるイングリッシュ・アイデンティティ』, pp. 1~37, 2002年.
- 藤川隆男 “Reorganization of Race and Gender in Federation of Australia”, 『つくばカナダ・セミナー報告集8』, つくばカナダ・セミナー報告集実行委員会, pp. 59~74, 1997年.
- 藤川隆男 「オーストラリア三都物語」, 政策研究, 12月10日, 総合研究開発機構, pp. 62~65, 1999年.
- 藤川隆男 「オーストラリア女性史の発展と展望」, 西洋史学, 187号, 日本西洋史学会, pp. 56~69, 1997年.
- 中川順子 「外国人を見る眼差し: 近世演劇における外国人観」, 『「イギリス」であること: アイデンティティ探求の歴史』, 刀水書房, pp. 58~82, 1999年.
- 中川順子 「外からきたジェントルマン: 近世における在英外国人の場合」, 『ジェントルマンであること: その変容とイギリス近代』, 刀水書房, pp. 39~60, 2000年.
- 中川順子 「近世イングランドにおける外国人の法的地位: 16世紀の事例を中心に」, 待兼山論叢, 34号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1~24, 2000年.

1-2. 著書

- 江川 温 『新編高等世界史 B 最新版』(共著), 川北稔/加藤祐三/小林雅夫/重松伸司/大内宏一/鈴木董/江川温/大泉敬子/杉山正明/桃木至朗, 帝国書院, 376p., pp. 114-140, 1999年.
- 江川 温 『岩波講座世界歴史8 ヨーロッパの成長』(共著), 編者: 樺山紘一(東京大学)/江川温, 岩波書店, 316p., 1998年.
- 川北 稔 『ウォーラーステイン』, 講談社, 231p., pp. 85-221, 2001年.
- 川北 稔 『ヨーロッパと近代世界』, 放送大学教育振興会, 152p., 1997年.
- 川北 稔 『イギリス史』(共著), 山川出版社, 536p., pp. 202-225, 1998年.
- 川北 稔 『アジアと欧米世界』(共著), 中央公論社, 462p., pp. 93-278/394-427, 1998年.
- 川北 稔 『イギリスの歴史: 帝国・コモンウェルスのあゆみ』(共著), 川北 稔/木畑洋一(東京大学), 有斐閣, 302p., pp. 63-114, 2000年.
- 川北 稔 『路地裏の大英帝国』(共著), 川北 稔/角山栄(和歌山大学名誉教授), 平凡社, 359p., pp. 10-48, 2001年.
- 川北 稔 『世界史辞典』, 角川書店, 1244p., 2001年.
- 川北 稔 『岩波講座世界歴史: 17・環大西洋革命』(共著), 岩波書店, 307p., pp. 1-72, 1997年.
- 川北 稔 『岩波講座世界歴史: 1 世界史へのアプローチ』(共著), 岩波書店, 286p., pp. 109-132, 1998年.
- 川北 稔 『支配の地域史』(共著), 川北稔/浜下武志(東京大学), 山川出版社, 377p., pp. 330-361, 山川出版社, 2000年.
- 川北 稔 『周縁からのまなざし: もうひとつのイギリス近代』(共著), 川北稔/指 昭博(神戸外国語大学), 2000年.
- 川北 稔 『ヨーロッパと近代世界(改訂版)』, 放送大学教育振興会, 152p., 2001年.
- 川北 稔 『アメリカは誰のものか』, NTT 出版, 197p., 2001年.
- 藤川隆男 『オセアニア史』(共著), 山本真鳥編/藤川隆男他著, 山川出版, 370p., pp. 78-167, 2000年.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 江川 温 「クリスティアヌ・クラピッシュ=ズェベール」, 『イタリア都市の公的空間における女性——

- 14-15世紀——」, 女性史学, 女性史総合研究会, / 9 / 1, pp. 46-61, 1999.
- 川北 稔 『コロンブスからカストロまで 全二巻』共訳, 岩波書店, pp. 1-365 / 1-354, 2000.
- 川北 稔 『近代世界システム: 大西洋革命の時代』名古屋大学出版会, pp. 1-405, 1997.
- 川北 稔 『新版・史的システムとしての資本主義』pp. 1-242, 1997.
- 川北 稔 「産業革命論の現在」, 西洋史学, 日本西洋史学会, 183号, pp. 47-64, 1997.
- 川北 稔 「ウォーラーステイン『転換する時代』」, 日本経済新聞, 日本経済新聞社, 1999.
- 川北 稔 『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会, pp. 1-454, 2000.
- 藤川隆男 「クラーク」, ベイカー・ドナルド/藤川隆男, 『20世紀の歴史家たち』, 刀水書房, 第3巻, pp. 279-292, 1999.

(2) 書評

- 江川 温 「佐藤彰一『修道院と農民——会計文書から見た中世形成期ロワール地方——』, 名古屋大学出版会」, 法制史研究, 創文社, 48号, pp. 314-319, 1998.
- 江川 温 「心性史研究の過去と現在——マルク・ブロック『王の奇跡』の翻訳刊行によせて——」, 思想, 岩波書店, 905号, pp. 113-139, 1999.
- 江川 温 「池上俊一『ロマネスク世界』」, 名古屋大学出版会」, 史林, 史学研究会, 83巻6号, pp. 148-153, 2000.
- 川北 稔 「物語ドイツ史」, 日本経済新聞, 日本経済新聞社, 1998.
- 川北 稔 「森明子『土地を読みかえる家族』」, 民博通信, 国立民俗学博物館, 87号, pp. 69-72, 1999.
- 川北 稔 「ギッフォード『アポリシヨニズムの社会史』」, 市場史研究, 市場史研究会, 19号, pp. 221-214, 1999.
- 川北 稔 「諸田実『フッガー家の時代』」, 社会経済史学, 社会経済史学会, 65巻2号, pp. 99-100, 1999.
- 川北 稔 「フランク『リオリエント』」, 週刊エコノミスト, 毎日新聞社, 7月4日, 2000.
- 川北 稔 「白石隆『海の帝国』」, 日本経済新聞, 日本経済新聞社, 2000.
- 川北 稔 「平田雅博『イギリス帝国と世界システム』」, 歴史評論, 歴史科学者協会, 608号, 2000.
- 川北 稔 「イギリス帝国史研究の新境地へ」, 創文, 創文社, 429号, 2001.
- 川北 稔 「ウォーラーステイン『新しい学』」, 日本経済新聞, 日本経済新聞社, 4月1日, 2001.
- 竹中 亨 「田村栄子『若き教養市民層とナチズム: ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』」, 西洋史学, 日本西洋史学会, 185号, pp. 68-71, 1997.
- 竹中 亨 「Gerhard A. Ritter, Ueber Deutschland. Bundesrepublik in der deutschen Geschichte」, 西洋史学, 日本西洋史学会, 194号, pp. 80-83, 1999.
- 竹中 亨 「工藤章『現代ドイツ化学企業史: IG フェルペンの成立・展開・解体』」, 社会経済史学, 社会経済史学会, 65巻4号, pp. 106-108, 1999.
- 竹中 亨 「三宅正樹『ユーラシア外交史研究』」, 週刊読書人, 読書人, pp. 3, 2000.
- 中川順子 「ジョサナン・バリー, クリストファ・ブルックス編/山本正訳 『イギリスのミドリリング・ソート——中流層をとおしてみた近世社会——』」, 経済史研究, 大阪経済大学日本経済学研究所, 3, pp. 174-182, 1999.
- 中川順子 「イギリス都市・農村共同体研究会編, 『巨大都市ロンドンの勃興』」, 西洋史学, 日本西洋史学会, 195号, pp. 64-67, 1999.
- 中川順子 「見市雅俊著『ロンドン=炎が生んだ世界都市——大火・ペスト・反カソリック——』」, 史林, 史学研究会, 83巻3号, pp. 176-180, 2000.

(3) 辞典項目

- 江川 温 『角川世界史辞典』, 角川書店, 40項目, 2001.
- 川北 稔 『世界民族事典』, 弘文堂, 20項目, 2000.
- 藤川隆男 「オーストラリア」, 岩波イスラーム辞典, 岩波書店, p. 226, 2001.

(4) その他 (エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 江川 温 「ジャンヌ・ダルクが目指した町ランス」, 毎日新聞, 毎日新聞大阪本社, pp. 8, 2001.
川北 稔 「ニグロ・奴隷・ダンス・抵抗」, 人文書院, 1月5日, 2001.

口頭発表

(1) 国際学会

- 竹中 亨 'Populism as an Analytical Instrument for the Comparative Perspective', 1997年度京都アメリカ研究夏期セミナー, 立命館大学/京都市北区, 1999/8/1.

(2) 国内学会

- 竹中 亨 「19世紀のドイツ・反ユダヤ主義の展開」, ドイツ現代史学会, ドイツ現代史学会大会, 横浜市立大学/神奈川県横浜市, 1997/7/25.
竹中 亨 「「発見」する歴史学か「解釈」する歴史学か?」, 日本西洋史学会, 日本西洋史学会大会第50回大会, 大阪外国語大学/大阪府箕面市, 2000/5/14.
中川順子 「近世イギリス社会における外国人の受容——帰化と国籍取得の事例から——」, 日本西洋史学会第49回大会, 拓殖大学/東京都文京区, 1999/5/16.

(3) 研究会

- 竹中 亨 「民族の憂鬱と田園の愉悦: テーオドーア・フリッチュにおける民族至上主義と田園都市構想」, 京都大学西洋史読書会, 2001年度読書会大会, 京大会館/京都府京都市, 2001/11/3.
藤川隆男 「国民なき国民国家オーストラリア連邦の成立」, イギリス帝国史研究会, 東京大学駒場/東京都, 2001/5/11.
中川順子 「近世イギリスにおける外国人観と「イギリス人」意識について」, ワークショップ西洋史大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 1997/10/11.
中川順子 「ジェントルマンライクな外国人」, 第27回 大阪イギリス史研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 1998/11/7.
中川順子 「外国人がジェントルマンらしくあるのは」, 第35回大阪イギリス史研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 1999/11/6.
中川順子 「合評会基調報告 見市雅俊著『ロンドン=炎の生んだ世界都市 大火・ペスト・反カトリック』」, イギリス都市生活史研究会, 京都学生会館/京都府京都市左京区, 1999/9/15.
中川順子 「合評会基調報告 イギリス都市・農村共同体研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』」, イギリス近世史研究会, 明治大学/東京都千代田区, 1999/10/10.
中川順子 「合評会基調報告 川北稔・指昭博編『周縁からのまなざし』」, 共同中川順子, イギリス都市生活史研究会, 京都学生会館/京都府京都市左京区, 2000/12/10.
中川順子 「それは援助なのか排除なのか——17世紀後半イングランドにおける外国人の状況と資金援助をめぐる——」, 第50回大阪イギリス史研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2001/11/10.

(4) 自治体等での講演会等

- 中川順子 「近くて遠いオランダ」, 朝日カルチャーセンタ/大阪府豊中市, 2002/3/2.

2. 教員の受賞歴

- 川北 稔 第5回東京海上各務記念優秀図書賞(経済部門) [1984年]

【IV. 教員による競争的資金獲得】

1. 科学研究費補助金の獲得状況(1997年度~2001年度の過去5年間)

平成9年度	基盤研究 (B) (2)	9410101	西洋における移動と移民の史的構造	合阪 學	5,500,000円
平成11年度	基盤研究 (B) (2)	9410101	西洋における移動と移民の史的構造	合阪 學	1,800,000円
平成10年度	基盤研究 (B) (2)	9410101	西洋における移動と移民の史的構造	合阪 學	3,500,000円
平成12年度	基盤研究 (C) (2)	12610387	近現代フランス国民のオリエント・イスラーム観 杉本淑彦		1,500,000円
平成13年度	基盤研究 (C) (2)	12610387	近現代フランス国民のオリエント・イスラーム観 杉本淑彦		900,000円
平成11年度	基盤研究 (C) (2)	11610048	オーストラリアにおけるイングリッシュ・アイ デンティティ 藤川隆男		1,100,000円
平成12年度	基盤研究 (C) (2)	11610048	オーストラリアにおけるイングリッシュ・アイ デンティティ 藤川隆男		1,100,000円
平成13年度	基盤研究 (C) (2)	11610048	オーストラリアにおけるイングリッシュ・アイ デンティティ 藤川隆男		700,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

H11年	杉本淑彦	杉本淑彦助教授研究助成金 (松下国際財団)	1,250,000円
H12年	杉本淑彦	杉本淑彦助教授研究助成金 (山陽放送文化財団)	500,000円
H12年	竹中 亨	竹中 亨教授研究助成金 (旭硝子財団)	1,200,000円
H12年	竹中 亨	竹中 亨教授研究助成金 (旭硝子財団)	200,000円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

川北 稔	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 代表者	2001年4月~
川北 稔	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 編集委員	1973年4月~
川北 稔	史学研究会評議員	1995年7月~
川北 稔	Royal Historical Society, Fellow,	1997年4月~
江川 温	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 編集委員	1979年4月~
江川 温	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 庶務・会計	1991年4月~
江川 温	日仏歴史学会 幹事	1997年4月~1998年3月
江川 温	日仏歴史学会 理事	1998年4月~2002年3月
江川 温	日本歴史学協会 委員	2001年4月~
竹中 亨	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 編集委員	1993年4月~
藤川隆男	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 編集委員	1995年4月~
中川順子	日本西洋史学会 (『西洋史学』編集部) 編集委員	2000年4月~

【Ⅵ. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

川北 稔 教授

- 1 学期 西洋近代史特殊講義 『民衆の大英帝国』再考
- 1 学期 西洋近代史特殊演習 工業化の社会史Ⅰ
- 2 学期 西洋近代史特殊演習 工業化の社会史Ⅱ
- 1 学期 西洋近代史講義 『民衆の大英帝国』再考
- 1 学期 西洋近代史演習 工業化の社会史Ⅰ
- 2 学期 西洋近代史演習 工業化の社会史Ⅱ
- 1 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (江川教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)
- 2 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (江川教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)
- 1 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (江川教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)
- 2 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (江川教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

川北 稔 教授

- 1 学期 欧米地域社会論特殊演習 共同研究「世界システムと地域社会Ⅲ」
- 2 学期 欧米地域社会論特殊演習 共同研究「世界システムと地域社会Ⅳ」
- 1 学期 欧米地域社会論演習 工業化の社会史Ⅰ
- 2 学期 欧米地域社会論演習 工業化の社会史Ⅱ

江川 温 教授

- 1 学期 西洋中世史特殊演習 西欧中世世界の諸問題(Ⅰ)
- 2 学期 西洋中世史特殊演習 西欧中世世界の諸問題(Ⅱ)
- 2 学期 西洋中世史特殊演習 ラテン語史料講読
- 1 学期 西洋中世史演習 西欧中世世界の諸問題(Ⅰ)
- 2 学期 西洋中世史演習 西欧中世世界の諸問題(Ⅱ)
- 1 学期 西洋中世史演習 ラテン語史料講読
- 1 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (川北教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)
- 2 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (川北教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)
- 1 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (川北教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)
- 2 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (川北教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

杉本淑彦 教授

- 1 学期 西洋近代史特殊演習 近代帝国主義文化の諸問題Ⅰ
- 2 学期 西洋近代史特殊演習 近代帝国主義文化の諸問題Ⅱ

- 1 学期 西洋近代史演習 近代帝国主義文化の諸問題 I
 2 学期 西洋近代史演習 近代帝国主義文化の諸問題 II
 1 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 I (川北教授, 江川教授, 竹中教授, 藤川助教授
 と共同)
 2 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 II (川北教授, 江川教授, 竹中教授, 藤川助教授
 と共同)
 1 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 I (川北教授, 江川教授, 竹中教授, 藤川助教授
 と共同)
 2 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 II (川北教授, 江川教授, 竹中教授, 藤川助教授
 と共同)

竹中 亨 教授

- 2 学期 西洋近代史特殊講義 ドイツ近代史の研究
 1 学期 西洋近代史特殊演習 ドイツ近現代史の研究
 2 学期 西洋近代史特殊演習 ドイツ近現代史の研究
 1 学期 西洋近代史演習 ドイツ近代史の研究
 1 学期 西洋近代史演習 ドイツ近現代史の研究
 2 学期 西洋近代史演習 ドイツ近現代史の研究
 1 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 I (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 藤川助教授
 と共同)
 2 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 II (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 藤川助教授
 と共同)
 1 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 I (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 藤川助教授
 と共同)
 2 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 II (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 藤川助教授
 と共同)

藤川隆男 助教授

- 1 学期 西洋近代史特殊演習 19世紀オーストラリア史
 1 学期 西洋近代史特殊演習 オーストラリア史
 2 学期 西洋近代史特殊演習 オーストラリア史
 1 学期 西洋近代史演習 オーストラリア史
 2 学期 西洋近代史演習 オーストラリア史
 2 学期 西洋近代史演習 オーストラリア連邦運動
 1 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 I (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 竹中教授と
 共同)
 2 学期 西洋史博士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 II (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 竹中教授と
 共同)
 1 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 I (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 竹中教授と
 共同)
 2 学期 西洋史修士論文作成演習 西洋史学上の諸問題 II (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 竹中教授と
 共同)

松浦京子 講師 (非常勤講師・京都橘女子大学)

- 1 学期 西洋近代史特殊講義 イギリスの女性運動

前川和也 講師 (非常勤講師・京都大学人文科学研究所)

1 学期 西洋古代史特殊講義 古代メソポタミアの国家と社会

栗原麻子 講師 (非常勤講師・奈良大学)

2 学期 西洋古代史特殊講義 古典期アテナイの国家と共同体

2. 学部授業担当

川北 稔 教授

1 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (江川教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

2 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (江川教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

1 学期 西洋史学講義 『民衆の大英帝国』再考

1 学期 西洋史学演習 工業化の社会史Ⅰ

2 学期 西洋史学演習 工業化の社会史Ⅱ

江川 温 教授

1 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (川北教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

2 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (川北教授, 杉本教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

1 学期 西洋史学演習 フランス語史書講読Ⅰ

2 学期 西洋史学演習 フランス語史書講読Ⅱ

1 学期 西洋史学演習 西欧中世世界の諸問題(Ⅰ)

2 学期 西洋史学演習 西欧中世世界の諸問題(Ⅱ)

杉本淑彦 教授

1 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (川北教授, 江川教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

2 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (川北教授, 江川教授, 竹中教授, 藤川助教授と共同)

1 学期 西洋史学演習 近代帝国主義文化の諸問題Ⅰ

2 学期 西洋史学演習 近代帝国主義文化の諸問題Ⅱ

1 学期 西洋史学講義 西洋近現代史序説

竹中 亨 教授

1 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 藤川助教授と共同)

2 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 藤川助教授と共同)

1 学期 西洋史学演習 ドイツ近現代史の研究

2 学期 西洋史学演習 ドイツ近現代史の研究

2 学期 西洋史学演習 西洋史学研究入門Ⅱ

1 学期 西洋史学演習 ドイツ語歴史書講読Ⅰ

2 学期 西洋史学演習 ドイツ語歴史書講読Ⅱ

藤川 隆男 助教授

1 学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅰ (川北教授, 江川教授, 杉本教授, 竹中教授と共同)

- 2学期 西洋史学演習 西洋史学上の諸問題Ⅱ（川北教授，江川教授，杉本教授，竹中教授と共同）
 1学期 西洋史学演習 オーストラリア史
 2学期 西洋史学演習 オーストラリア史
 1学期 西洋史学演習 西洋史学研究入門Ⅰ
 2学期 西洋史学講義 歴史学とは何か

松浦京子 講師（非常勤講師・京都橘女子大学）

- 1学期 西洋史学講義 イギリスの女性運動

前川和也 講師（非常勤講師・京都大学人文科学研究所）

- 1学期 西洋史学講義 古代メソポタミアの国家と社会

栗原麻子 講師（非常勤講師・奈良大学）

- 2学期 西洋史学講義 古典期アテナイの国家と共同体

3. 共通教育

川北 稔 教授

- I セメスター 専門基礎 西洋史学基礎 B
 II セメスター 特別科目 歴史学と現代

江川 温 教授

- I セメスター 主題別 ヨーロッパの都市文明
 I セメスター 主題別 日本とキリスト教—歴史的考察—
 II セメスター 特別科目 歴史学と現代

竹中 亨 教授

- I セメスター 主題別 西洋の歴史と日本
 I セメスター 主題別 20世紀のヨーロッパ
 II セメスター 特別科目 歴史学と現代

杉本淑彦 教授

- II セメスター 特別科目 歴史学と現代
 II セメスター 主題別 近代化論と反近代化論

藤川隆男 助教授

- II セメスター 主題別 ヨーロッパの都市の変貌
 II セメスター 主題別 移民と移民規制の歴史
 II セメスター 特別科目 歴史学と現代
 II セメスター 主題別 オーストラリアの近現代

4. 他大学における集中講義等

なし

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：若尾祐司（名古屋大学大学院文学研究科教授）

研究の先見性・独創性

一般に、旧小講座制下における西洋史学の教育・研究活動は、その対象を狭くヨーロッパ史に

限るか、せいぜい北アメリカを含む近代化モデルとしての欧米地域に限定する傾向にあった。これに対して当該研究室は、1998年の大学院重点化で「世界史」講座への移行を中心とする編成替えを行い、西洋史学の新たな方向づけを行っている。すなわち、歴史研究の枠組みは一国史ではなく世界史にあり、西洋史学の独自の役割は、西洋文明のインパクトという側面からの世界史把握にあるとする、立場である。

国際的に見ても、ナショナル・ヒストリーから日常・社会史と世界システム論へ、この四分の一世紀に歴史学の研究方向は大きく様変わりした。そして現在では、国民国家を相対化する文化史学と歴史人類学やトランスナショナル・ヒストリーが課題となっている。そうした国際的な研究動向と連動して、研究室全体の研究の方向づけがなされ、日本の西洋史学をリードするパイオニア的役割が果たされている。

とりわけ、川北氏は世界システム論の先見的な提起によって、西洋史学のみならず日本の歴史学全般に大きな影響を与えている。また、江川氏は中世ヨーロッパ社会・習俗研究で、竹中氏は全く新しいスタイルの日独関係史で、藤川氏は未開拓のオセアニアを対象とする人種・ジェンダー史で、先見的かつ独創的な研究を提示し学界をリードしている。助手の中川氏も、国民化の時代における「外国人」の歴史という新しいテーマ領域を開拓している。大学院生の研究業績も、環境保護運動史、老いの歴史、市議会議員史、日壕関係史など、現代的問題と結びついた未開拓の研究テーマが取り上げられ、意欲的な挑戦が行われている。西洋史研究における当該研究室のパイオニア的役割は、「ラディカルな研究スタイル」として、広く一般にも認められているところである。

研究の実証性・科学性

西洋史学における研究の実証性・科学性を確保するためには、第一に問題設定の客観性が重要であり、第二に検証手続きとしての資史料が問題となる。

第一の点では、個別テーマに関する研究史整理が不可欠である。しかし同時に、国際的な歴史研究の動向を正確に把握するために、重要文献の安心できる翻訳は、当該研究者のみならず歴史学界全体にとって研究の基盤を与えるものである。この点で、世界システム論関係をはじめとする一連の翻訳作業は、単に訳者個人のみならず学界全体にとって、歴史研究の科学性を高める上での重要な貢献である。

第二の点は、これまで西洋史研究の場合、日本史や東洋史の研究と比べ弱点となっていた。資史料に依拠するためには、原則として現地作業が必要である。ようやく近年になって、文書館作業など現地への研究滞在チャンスが広がっている。この点で、博士課程在学生のうち常時3～5名が留学中という現状は、実証性への新しい可能性を開きつつある。しかし、教員のサバティカルも制度化されておらず、文書館作業等を日常的にできる状況とは程遠いから、欧米の歴史家と比べ実証面での手堅さが弱くなる傾向は否めない。こうした現状の中で、日本との関係史を取り込むことによって独自の資史料を発掘する竹中氏の研究作業は、西洋史学における新しい実証研究の一つのモデル・ケースを与えている。

研究の持続性・体系性

伝統的な国制史や政治史・経済史というより、新しい社会史・生活史や関係史に目を向ける方向が当該研究室の特色である。この共通の課題・方法意識の上に、それぞれの分野で専任教員は持続的に卓越した研究を積み上げ、体系的成果を取りまとめている。大学院生の研究テーマもそれぞれ明確かつ一貫性を有し、体系性をもって成果が出されている。2001年度より課程博士が出されていることも、その証左である。

ただし、当該研究室が築き上げた伝統を維持し発展させるには、さらに個人レベルにとどまらず、研究室として科学研究費補助金や外部資金を獲得し、いっそう系統的で包括的な共同研究を立ち上げる工夫も、今後は必要になるかもしれない。

研究の波及性・発信性

世界システム論をはじめとする当該研究室のパイオニア的研究作業は、広く日本の歴史学全体に多大な波及効果を与えている。この点は、衆目の一致するところである。過去5年間の専任教員の研究活動に限ってみても、発表論文の質のみならず量の豊富さは驚嘆に値する。しかも、発表論文の半数以上は、一般の読者層をも対象とする学術出版社の書物に掲載されている。また、歴史講座や事典類の編集、概説の執筆など、研究成果を普及する努力が払われると共に、多数の書評活動は、それ自体が研究の相互批判と波及効果への貢献となっている。

こうした国内向けの影響のみならず、欧語論文の作成による国際的発信の努力も始まっている。しかし、この点は、なお十分とは言えない。外国人研究者や留学生の受け入れについても、実績不足の感は否めない。迂遠ではあるが、国際的波及性の最善の手段は、留学生の受け入れであろう。その方策の検討と共に、今後とくに若い研究者が国際的発信性を高め、国外に向かっての波及性を強化することが期待される。

教員組織のまとめ

助手を除く専任教員の専門分野は、古代史を欠き近代史に比重を置いた、ややバランスを欠く構成となっている。当該研究室の特色に沿ってアクセントをつけた、その意味でまとまってはいるが、教育効果の上では最低限のバランスを確保することが必要であろう。研究科の事情による欠員2人の採用停止という現状は、この点でも、また当該研究室が果たす全国的な役割からしても問題であり、停止措置の早期解除が望まれる。

過去5年間の大学院生の論文点数21、口頭発表数82といった驚異的な数値は、教員スタッフの超人的な研究指導とそのまとめの反映であろう。しかし、現在の学部生49名、大学院生31名という大量の在籍学生の教育要求に応じて、これまでの指導実績を維持していくことは、もはや限界点に達していると思われる。さらに川北氏の定年退官も目前に迫っているから、欠員の回復と共に、中期的な将来展望を見据えた教員組織の新たな方向性への検討を期待したい。

学会活動

学界活動として、教員スタッフは数多くの学会で事務局や代表者として中心的な役割を果たし、また大学院生は学会・研究会での報告を精力的に行っている。

特筆すべきは、西洋史研究の中心的な学会である日本西洋史学会の機関誌『西洋史学』を、当該研究室が恒常的に編集していることである。この編集作業は、助手をはじめ専任教員の献身に大きく依存している。『西洋史学』の発行は、日本西洋史学会の発展と西洋史研究の存立そのものを支えてきた、といっても過言ではなからう。

それだけに、今後の日本における西洋史研究の将来性を考える場合、日本西洋史学会や雑誌『西洋史学』のあり方が重要になってくる。たとえば、『西洋史学』に欧語論文の掲載を可能にするといった、編集方針に関する本格的な見直し論議があっても良いと思われる。西洋史研究に関する西洋史学会での竹中氏の問題提起を実りあるものとするためにも、学会や機関誌のあり方に関する議論への積極的イニシアティヴを期待したい。

3-10 考古学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

2001年度まで専任スタッフは都出比呂志教授，福永伸哉助教授の2名だったが，2002年4月より高橋照彦助教授が加わった。教官の専門分野は都出教授が弥生・古墳時代および比較考古学，福永助教授が弥生・古墳時代，高橋助教授が奈良・平安時代を中心とする歴史考古学である。また，キャンパス内の文化財調査業務を行う埋蔵文化財調査室に所属する清家章助手が，本務の合間を縫って兼任として活動をサポートしている。

本学考古学分野の大きな特色としては次の3点があげられる。

第一は，考古学研究に必要な発掘調査，出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視していることである。そのために1988年の講座開設以来，毎年欠かさずフィールド調査を行い，成果を学術報告書にまとめる取り組みを継続している。

第二は，世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め，広い視野で日本考古学の研究に取り組んでいることである。とくに教官や大学院生は海外の発掘調査や学会にも参加して，自らの研究の意味をつねに問うことを心がけている。

第三は，教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視していることである。地域社会に入って行うフィールド調査，現地説明会，成果報告会などを通じて，地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり，学問と社会とのあるべき関係を追求している。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 1 助教授 2 講師 0 助手 1（兼任）

教授：都出比呂志

助教授：福永伸哉 高橋照彦

助手：清家 章（兼任）

2. 在学生（2002年4月現在）

2002年度の学生数								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	7	3	0	0	0	0	0	0

※うち留学生0名，社会人学生0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	12	3	0	0	1
'98	0	4	0	0	0
'99	11	3	1	0	1
'00	8	1	0	0	0
'01	11	3	4	1	2
計	42	14	5	1	4

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	1	1
'98	0	0	0
'99	0	1	1
'00	0	0	0
'01	1	0	1
計	1	1	3

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- 禹 在柄 国家形成期の武器と武装 論文博士 1997年9月 主査 都出比呂志 副査 東野治之, 福永伸哉
- 近藤喬一 東アジア青銅器文化の研究——弥生・古墳時代の青銅器を手がかりにして—— 論文博士
2000年3月 主査 福永伸哉 副査 肥塚隆, 村田修三
- 寺前直人 弥生時代における武器の形成と展開 課程博士 2001年9月 主査 福永伸哉 副査 都出比呂志, 梅村喬, 小笠原好彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	0	1	0	0	0	1
'98	1	0	0	0	1	2
'99	5	1	0	0	2	8
'00	2	0	0	0	2	4
'01	5	1	0	2	1	9
計	13	3	0	2	6	24

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	0	1	0	0	1
'98	0	0	2	0	0	2
'99	0	0	7	0	0	7
'00	0	1	3	0	0	4
'01	0	1	5	1	0	7
計	0	2	18	1	0	21

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

1997年次

高田健一 「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢』史学編第31号 大阪大学大学院文学研究科 1997年

1998年次

寺前直人 「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45巻第2号 考古学研究会 1998年

1999年次

西谷彰 「弥生時代における土器の製作技術交流」『待兼山論叢』史学篇第33号 大阪大学大学院文学研究科 1999年

菊地芳朗 「古墳の初段階と地域権力」『会津若松市史研究』創刊号 1999年

2000年次

林正憲 「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』第85巻第4号 2000年

2001年次

菊地芳朗 「東北地方の古墳時代集落」『考古学研究』47巻4号 考古学研究会 2001年

寺前直人 「弥生時代開始期における磨製石斧の変遷——中部瀬戸内地域と大阪湾沿岸地域を中心として——」『古文化談叢』第46集 九州古文化研究会 2001年

寺前直人 「弥生時代の武器形木器——本州島西部地域を中心として——」『考古学研究』第48巻第1号 考古学研究会 2001年

寺前直人 「弥生時代における石製武器の普及」『季刊考古学』第76巻 雄山閣出版 2001年

寺前直人 「弥生時代における石鏃大型化の2つの画期」『待兼山論叢』史学篇第35号 大阪大学大学院文学研究科 2001年

寺前直人 「弥生時代における石鏃大型化の2つの画期（発表要旨）」『日本考古学協会総会』2001年

長友朋子 「弥生時代の土器地域色とその性格」『古代学研究』第153号 古代学研究会 2001年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

計：2名

学部：1名

PD：0名

DC：1名

6. 専門分野出身の研究者（1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専等の常勤職員として就職した者について）

計 13 名

'97年度：2名 '98年度：1名 '99年度：5名 '00年度：1名 '01年度：4

<内訳>

1997年	豊島直博	(M 修了)	岡山大学埋蔵文化財センター 助手 現在 奈良文化財研究所
1997年	大林 元	(M 修了)	静岡県埋蔵文化財調査研究所
1998年	岡寺 良	(M 修了)	福岡県教育委員会文化財担当
1999年	宮崎 認	(M 修了)	福井県教育委員会文化財担当
1999年	高田健一	(D 単位修得退学)	鳥取県教育委員会文化財担当
1999年	忽那敬三	(M 修了)	岡山大学埋蔵文化財センター助手
1999年	後藤理加	(M 修了)	新宿区歴史博物館
1999年	上田健太郎	(M 修了)	兵庫県教育委員会文化財担当
2000年	三浦俊明	(M 修了)	石川県立歴史博物館
2001年	寺前直人	(D 修了)	大阪大学文学研究科教務補佐員
2001年	長友朋子	(D 単位修得退学)	大阪大学文学研究科教務補佐員
2001年	瀬川貴文	(M 修了)	名古屋市博物館
2001年	福辻 淳	(M 修了)	桜井市教育委員会文化財担当

7. 専門分野出身の高度職業人（1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 4 名

'97年度：1名 '98年度：2名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：0名

<内訳> 技術職 2名 教職 2名

<主な職業名・就職先等>

株式会社日本システムデベロップメント，兵庫県高校教諭

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

- 1998年『古墳時代政治史の考古学的研究－国際的契機に着目して』
- 1999年『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』
- 1999年『国家形成期の考古学——大阪大学考古学研究室10周年記念論集』
- 1999年『昼飯大塚古墳Ⅲ』
- 2000年『今里大塚古墳第3次・井ノ内車塚古墳第3次調査概要』
- 2001年『弥生・古墳時代青銅器の使用痕跡研究』
- 2001年『古墳時代前・中期における埋葬人骨とその親族関係.』
- 2001年『勝福寺古墳測量調査報告』

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 1997年度 考古学研究会関西例会事務局
- 1997年5月 フィリップ・スミス氏講演会（講演会）
- 1998年4月 ジョージ・イオーガン氏講演会（講演会）
- 1998年6月 マット・ヴァンペルト氏講演会（講演会）
- 1999年6月 羽生淳子氏講演会（講演会）
- 2000年2月 シンポジウム「弥生時代の人・社会・風土」（シンポジウム）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 1998年2月 東アジア墳丘墓研究会
- 1998年7～8月 長岡京市井ノ内車塚古墳・今里大塚古墳発掘調査（長岡京市教委と共催）
- 1999年7～9月 大垣市昼飯大塚古墳発掘調査（大垣市教委と共催）
- 2000年7～8月 川西市勝福寺古墳測量調査
- 2001年7～8月 川西市勝福寺古墳発掘調査（川西市教委と共催）
- 2002年2月 後期前方後円墳研究会

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

考古学研究室では、組織全体で取り組む調査研究プロジェクトを通じた教育研究と学生自身の研究テーマにそった教育研究の二者を並行して進めている。

組織全体のプロジェクトとしては、「国家形成期における古墳時代の評価」という大きな問題解明のために、1997年～2001年にかけて長岡京市井ノ内稲荷塚古墳、大垣市昼飯大塚古墳、長岡京市今里大塚古墳、長岡京市井ノ内車塚古墳、川西市勝福寺古墳の発掘調査を行い、出土資料の整理分析作業をへてそれぞれの調査報告書を刊行した。このほか1997年には、前年に研究室の総力をあげて編集刊行した『雪野山古墳の研究』が、調査報告書としては初めての雄山閣考古学特別賞を受賞した。

発掘調査成果の公開・活用については、現地説明会、市民報告会、文化財講座、インターネッ

トによる発信などの方法で、社会との連携を強めている。こうした活動は全学のテーマ別自己評価書（研究連携）に盛り込まれ、また新聞報道等でも紹介されるなど、学内外から高い評価を得ている。さらに、文化資源活用に関する講義を開講するなどして、考古学研究と文化財の社会的活用の双方を推進できる人材を育成する取り組みを開始した。

こうした実践的教育研究には相当の経費と設備を要する。講座割当ての校費や設備だけでは実施に困難を伴うが、自治体との連携、科学研究費補助金・受託研究費・総長裁量経費の獲得など多様な方策を講じて、質の高い教育研究が継続できるように努力している。

各自のテーマにそった研究活動の点では、この5年間に博士後期課程に在籍した7名がレフェリー付き雑誌に13本の研究論文を発表した。いずれも研究史の現状を確実に前進させる論文であると評価できる。修士課程に在籍する学生のレフェリー付き雑誌への論文発表がない点はなお改善の余地があるが、研究者数の割にそうした雑誌が少なく、投稿しても掲載されるのが修士課程修了後になってしまう、という事情も関係している。1999年には講座開設10周年を記念して、教官、大学院学生、卒・修了生による論集『国家形成期の考古学』を刊行し、研究室における教育研究の成果を世に問うた。この間に博士後期課程を修了あるいは単位修得退学した6名の学生は、いずれも専門職（学術振興会特別研究員も含む）に就いているが、学位取得者はまだ1名だけであり、今後も適宜指導助言を行うなどのサポートが必要である。

以上のように、本学考古学分野においては、通常の講義・演習のほかに発掘調査、出土資料整理分析、学術報告書の作成、論文集刊行、内外の研究者による講演会、学会事務局の受け入れ、研究室研究会、学生勉強会など、さまざまな方法によって教育研究の目標が達成できるようにつとめており、おおむね着実に実績を積み重ねていると評価できる。

【Ⅲ. 教員の活動研究】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 都出比呂志 首長系譜変動パターン論序説、古墳時代における首長系譜の変動パターンの比較研究、大阪大学文学部、pp. 5～16, 1999年
- 都出比呂志 墳丘墓の比較考古学：異なる墳丘型式の意味、国家形成期の考古学、大阪大学考古学研究室、pp. 3～27, 1999年
- 都出比呂志 東アジアの墳丘墓、日本人および日本文化の起源の起源に関する学際的研究成果報告書、p. 117, 2002年
- 都出比呂志 Yayoi Farmers Reconsidered: New Perspectives on Agricultural Development in East Asia.5, Australian National University, pp. 53～59, 2001.
- 都出比呂志 卑弥呼と古墳 31巻、帝塚山短期大学日本文化史学会、pp. 1～17, 1999年
- 都出比呂志 都市の形成と戦争、考古学研究 44巻、考古学研究会、pp. 41～57, 1997年
- 都出比呂志 国家形成の比較考古学の提案：山尾幸久氏の提起にふれて 44巻4号、考古学研究会、pp. 104～108, 1998年
- 福永伸哉 景初三年銘鏡と東アジア、古代出雲文化展、島根県、pp. 124～127, 1997年
- 福永伸哉 銅鐸から銅鏡へ、古代国家はこうして生まれた、角川書店、pp. 217～275, 1998年
- 福永伸哉 対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格、青丘学術論集、12集、韓国文化振興財団 pp. 7～26 1998年

- 福永伸哉 埋葬施設構築材の象徴性：木石併用棺の存在意義について，古代中世の社会と国家，清文堂，pp. 3～19，1998年
- 福永伸哉 古墳時代の首長系譜変動と墳墓要素の変化，古墳時代における首長系譜の変動パターンの比較研究，大阪大学文学部，pp. 17～34，1999年
- 福永伸哉 古墳時代前期における神獸鏡製作の管理，国家形成期の考古学，大阪大学考古学研究室，pp. 263～280，1999年
- 福永伸哉 弥生時代の転換期と春日七日市遺跡，七日市遺跡と氷上回廊，春日町教育委員会，pp. 51～62，2000年
- 福永伸哉 青龍三年鏡と顔氏の鏡作り，邪馬台国と安満宮山古墳，吉川弘文館，pp. 197～208，1999年
- 福永伸哉 三国時代の鏡と三角縁神獸鏡，邪馬台国と安満宮山古墳，吉川弘文館，pp. 51～62，1999年
- 福永伸哉 葬制からみた変革期，国家形成過程の諸変革，考古学研究会，pp. 31～54，2000年
- 福永伸哉 華北東部地域の三国時代銅鏡 東アジアの古代文化，97巻，大和書房，pp. 114～123，1998年
- 福永伸哉 鏡の多量副葬と被葬者像，季刊考古学65号，雄山閣出版，pp. 26～29，1998年
- 福永伸哉 近畿地方の出現期の古墳，季刊考古学別冊8，雄山閣出版，pp. 107～114，1999年
- 福永伸哉 中国鏡流入のメカニズムと北近畿の時代転換点，季刊考古学別冊10，雄山閣出版，pp. 107～114，2000年
- 福永伸哉 画文帯神獸鏡と邪馬台国政権，東アジアの古代文化108巻，大和書房，pp. 108～120，2001年
- 福永伸哉 銅鏡百枚と三角縁神獸鏡，シンポジウム邪馬台国がみえた，学生社，pp. 38～50，2001年
- 福永伸哉 古墳の出現と中央政権の儀礼管理，考古学研究，46巻，考古学研究会，pp. 53～72，1999年
- 福永伸哉／森下章司（京都大学） 河北省出土の魏晉鏡，史林83巻1号，史学研究会，pp. 123～139，2000年
- 福永伸哉 古墳における副葬品配置の変化とその意味：鏡と剣を中心にして，待兼山論叢，34号，大阪大学文学部，pp. 1～24，2001年
- 高橋照彦 千葉県市原市菊間出土銭，出土銭貨，8号，出土銭貨研究会，pp. 37～42，1997年
- 高橋照彦 銭貨の流通——古代から近世——，お金の不思議——貨幣の歴史学——，山川出版社，pp. 219～241，1998年
- 高橋照彦／齋藤努（国立歴史民俗博物館）／西川裕一（日本銀行金融研究所） 中世～近世初期の模倣銭に関する理化学的研究，金融研究，17巻3号，日本銀行金融研究所，pp. 83～130，1998年
- 高橋照彦 土器の流通・消費からみた平安京とその周辺，国立歴史民俗博物館研究報告，78集，国立歴史民俗博物館，pp. 33～67，1999年
- 高橋照彦 ニヤ遺跡出土の鏡と銭貨，日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書2巻，日中共同ニヤ遺跡学術調査隊，pp. 335～344，1999年
- 高橋照彦 「律令的土器様式」再考，瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集，真陽社，pp. 602～616，1999年
- 高橋照彦／齋藤努（国立歴史民俗博物館）／西川裕一（日本銀行金融研究所） 近世銭貨に関する理化学的研究——寛永通寶と長崎貿易銭の鉛同位体比分析——，IMES DISCUSSION PAPER SERIES 2000-J-1号，日本銀行金融研究所，pp. 1～76，2000年
- 高橋照彦 日本における銭貨生産と原料調達，国立歴史民俗博物館研究報告，86集，国立歴史民俗博物館，pp. 131～184，2001年
- 高橋照彦 三彩・緑釉陶器の化学分析結果に関する一考察，国立歴史民俗博物館研究報告，86集，国立歴史民俗博物館，pp. 209～232，2001年
- 高橋照彦 近世銭貨の生産と法量規格——寛永通寶と長崎貿易銭の計測的研究——，鹿園雑集 奈良国立博物館研究紀要2・3号，奈良国立博物館，pp. 1～37，2001年
- 高橋照彦 三彩・緑釉陶器と地方官衙，考古学ジャーナル，475号，ニュー・サイエンス社，pp. 2～5，2001年
- 高橋照彦 地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器，考古学ジャーナル，475号，ニュー・サイエンス社，pp. 16～20，2001年

- 高橋照彦 正倉院三彩の伝来過程と製作契機，佛教芸術，259号，佛教藝術學會，pp. 75～98，2001年
- 高橋照彦 日本古代における三彩・緑釉陶の歴史的特質，国立歴史民俗博物館研究報告，94集，国立歴史民俗博物館，pp. 371～407，2002年
- 清家 章 岡町南遺跡第2次調査，豊中市埋蔵文化財発掘調査概要，豊中市教育委員会，pp. 35～38，1998年
- 清家 章 弥生時代の女性，瀬戸内弥生文化のパイオニア，シンポジウム資料，古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会，pp. 79～86，2000年
- 清家 章 猪名川左岸域における小古墳の意義，待兼山遺跡Ⅲ発掘調査報告書，大阪大学埋蔵文化財調査委員会，pp. 74～88，2001年
- 清家 章 穂積遺跡第23次調査の概要，豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1997年度，豊中市教育委員会，pp. 41～48，1998年
- 清家 章 古墳時代周辺埋葬考：畿内の埴輪棺を中心に，国家形成期の考古学，大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，pp. 231～260，1999年
- 清家 章/服部聡志/橘田正徳 小曾根遺跡第25次調査の概要，豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1998年度，豊中市教育委員会，pp. 1～12，1999年
- 清家 章 女性首長と軍事権，待兼山論叢，32号，大阪大学文学部，pp. 25～47，1998年
- 清家 章 畿内周辺における箱形石棺の型式と集団，古代学研究152，古代学研究会，pp. 1～18，2001年
- 清家 章 吉備における同棺複数埋葬とその親族関係，古代吉備23，古代吉備研究会，pp. 57～72，2001年

1-2. 著書

- 都出比呂志 『権力と国家と戦争——古代史の論点4——』，都出比呂志/田中 琢/編著，小学館，318p.，pp. 299～304/6～86，1998年
- 都出比呂志 『古代国家はこうして生まれた』，編著・都出比呂志，角川書店，276p.，pp. 8～50，1998年
- 都出比呂志 『環境と食料生産：古代史の論点1』 編著・都出比呂志/佐原 真，小学館，334p.，pp. 6～76，2000年
- 都出比呂志 『女と男，家と村：古代史の論点2』，編著・都出比呂志/佐原 真，小学館，302p.，pp. 6～76，2000年
- 都出比呂志 『王陵の考古学』，岩波書店，197p.，2000年
- 福永伸哉 『古墳時代政治史の考古学的研究』，大阪大学文学部，202p. 1998年
- 福永伸哉 『銅鐸と邪馬台国』，共著 福永伸哉/難波洋三（京都国立博物館）/水野正好（奈良大学）/山尾幸久（立命館大学）/原口正三（甲子園短期大学），サンライズ出版，278p.，pp. 131～162/195～269，1999年
- 福永伸哉 『邪馬台国と安満宮山古墳』，共著 福永伸哉/門脇禎二（橘女子大学）/原口正三（甲子園短期大学）/石野博信（徳島文理大学）/都出比呂志（大阪大学）/酒井龍一（奈良大学）/森田克行（高槻市教育委員会），吉川弘文館226p. pp. 51～62/125～208，1999年
- 福永伸哉 『弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究』，大阪大学大学院文学研究科，32p.，2001年
- 福永伸哉 『邪馬台国から大和政権へ』，大阪大学出版会，96p.，2001年
- 高橋照彦 『陶磁器の文化史』，共著 吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）/高橋照彦/小野正敏（国立歴史民俗博物館）/丸山伸彦（国立歴史民俗博物館）/日高薫（国立歴史民俗博物館），国立歴史民俗博物館，213p.，pp. 9～64，1998年
- 高橋照彦 『中国・四国地方に埋納されたやきもの』，共著 井口喜晴（奈良国立博物館）/高橋照彦/井上喜久男（愛知県陶磁資料館），奈良国立博物館，36p.，pp. 4～4/9～11/16～16/23～30/36～36，1999年
- 高橋照彦 『九州地方に埋納されたやきもの』，共著 井口喜晴（奈良国立博物館）/高橋照彦，奈良国立博物館，36p.，pp. 4～4/6～8/13～15/21～23/26～31/34～36，1999年

- 高橋照彦 『国産紀年銘土器・陶磁器データ集成』, 共著 吉岡康暢 (国立歴史民俗博物館) / 高橋照彦 / 村木二郎 (国立歴史民俗博物館), 国立歴史民俗博物館, 775., pp. 1-775, 2001年
- 清家 章 『古墳時代前・中期における埋葬人骨と親族関係: 近畿の資料を中心に』, 大阪大学大学院文学研究科, 30p, 2001年

1-3 翻訳・書評・解説・辞典項目等

(1) 解題・解説・総説

- 都出比呂志 「チェコ考古学の現状: 解説」, 都出比呂志解説, 考古学研究, 考古学研究, 44巻3号, pp. 11-13, 1997年
- 福永伸哉 「三角縁神獣鏡」, アエラムック 考古学がわかる, 朝日新聞社, pp. 109-111, 1997年
- 福永伸哉 「邪馬台国のメインルートつながる」, 読売新聞, 読売新聞社, 1997年
- 福永伸哉 「黒塚古墳の三角縁神獣鏡」, 京都新聞, 京都新聞社, 1998年
- 福永伸哉 「浮かび上がる三角縁神獣鏡の意味」, 毎日新聞, 毎日新聞社, 1998年
- 福永伸哉 「前方後円墳成立過程を語るホケノ山」, 神戸新聞, 神戸新聞社, 2000年
- 福永伸哉 「交易と技術誇った丹後勢力」, 毎日新聞, 毎日新聞社, 2000年
- 福永伸哉 「貿易技術立国を図る: 丹後の古代再考」, 京都新聞, 京都新聞社, 2001年
- 高橋照彦 「造墓と墓碑——徳島県阿波国造碑」, 古代の碑——石に刻まれたメッセージ——, 国立歴史民俗博物館, pp. 53-55, 1997年
- 高橋照彦 「山科西野山古墳出土品」, 週刊朝日百科 日本の国宝, 50号, 朝日新聞社, pp. 318-320, 1998年
- 高橋照彦 「稻荷台遺跡」, 共著 浅利幸一 (市原市埋蔵文化財調査センター) / 高橋照彦, 千葉県歴史資料編考古3巻, 千葉県, pp. 68-79, 1998年
- 高橋照彦 「「水精双六子」ほか10項目」, 平成10年正倉院展, 奈良国立博物館, pp. 24・25・64・65・68・69, 1998年
- 高橋照彦 「佐井寺僧道葉墓出土品」, 日本の美——縄文から江戸まで——, 東京国立博物館, p. 38, 1998年
- 高橋照彦 「「青磁浮唐草文香炉」「青磁浮唐草文花瓶」」, 女人高野 室生寺のみ仏たち, 奈良国立博物館, pp. 4-9, 1999年
- 高橋照彦 「正倉院宝物 紺玉帯残欠」, 奈良国立博物館だより, 31号, 奈良国立博物館, p. 5, 1999年
- 高橋照彦 「正倉院宝物 金銀花盤」, 月刊 大和路ならら, 2-10号, 地域情報ネットワーク, pp. 2-8, 1999年
- 高橋照彦 「「紺玉帯残欠」ほか4項目」, 平成11年正倉院展, 奈良国立博物館, pp. 30-35・84-86, 1999年
- 高橋照彦 「金堂鎮壇具」, 東大寺の至宝, 朝日新聞社・東武美術館, pp. 46-50, 1999年
- 高橋照彦 「伝白山神社経塚遺物」, 月刊 大和路ならら, 3-2号, 地域情報ネットワーク, p. 43, 2000年
- 高橋照彦 「正倉院宝物 三彩鉢」, 月刊 大和路ならら, 3-10号, 地域情報ネットワーク, p. 32, 2000年
- 高橋照彦 「「三彩鉢」ほか4項目」, 平成12年 正倉院展, 奈良国立博物館, pp. 90-97, 2000年
- 高橋照彦 「平安期施釉陶磁器研究の現状と課題——緑釉・灰釉陶器を中心に——」, 中近世土器の基礎研究, 15号, 日本中世土器研究会, pp. 29-44, 2000年
- 高橋照彦 「「色絵香炉」ほか3項目」, 聖徳太子1380年御遠忌記念 法隆寺展, 日本経済新聞社, pp. 166-168, 2001年
- 高橋照彦 「「二彩陶器」ほか2項目」, 東大寺修二会千二百五十回記念 特別陳列 お水取り, 奈良国立博物館, pp. 46-47, 2001年
- 高橋照彦 「松林寺塔納置舍利容器」, 月刊 大和路ならら, 4-8号, 地域情報ネットワーク, pp. 39, 2001年

年

- 高橋照彦 「松林寺五層塔納置舍利容器」「伊勢繩生廃寺塔心礎納置舍利容器」, 仏舎利と宝珠—釈迦を慕う心—, 奈良国立博物館, pp. 196-201, 2001年
- 高橋照彦 「天人文壇」「鳳凰文壇」「瓦塔」, 特別陳列 岡寺の歴史と美術, 奈良国立博物館, pp. 6-8, 2001年
- 高橋照彦 「鳳凰文壇」, 月刊 大和路ならら, 39号, 地域情報ネットワーク, p. 39, 地域情報ネットワーク, 2001年
- 高橋照彦 「花氈」ほか7項目, 平成13年 正倉院展, 奈良国立博物館, pp. 30-32/76/77/96/104, 2001年
- 高橋照彦 「彩絵三鼓胴」「東大寺転害門」, 大和の神々と美術 手向山八幡宮と手搔会, 奈良国立博物館, pp. 27-30, 2002年
- 高橋照彦 「東大寺金堂鎮壇具」, 奈良国立博物館だより, 41号, 奈良国立博物館, p. 8, 2002年
- 高橋照彦 「平安京における消費の変容——出土の土器・陶磁器を対象として——」, 新体系日本史, 6巻, pp. 192-198, 2001年

(2) 辞典項目

- 福永伸哉 「金属器の登場, 階級社会の登場, クニの登場, 外交の登場, 青銅器の種類と役割, 鏡の製作と分有, 卑弥呼の時代, 弥生時代から古墳時代へ, 大和政権の成立, 大陸との交渉」, 共著, 考古学キーワード, 有斐閣, 10項目, 1997年

(3) その他 (批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 都出比呂志 「卑弥呼の鏡の魔力」, 本の旅人, 角川書店, 29巻・号, pp. 40-41, 1998年
- 都出比呂志 「卑弥呼の使節」, 図書, 岩波書店, pp. 18-21, 1997年
- 都出比呂志 「分布論の八賀さん」, かにかくに, 三重大学人文学部考古学研究室, pp. 43-44, 1998年
- 都出比呂志 「弥生時代の嫁姑問題」, 女性と年少者, (財) 婦人少年協会, 124巻・号, pp. 2, 1998年
- 都出比呂志 「狩人バチから埴輪へ: 昆虫少年が歩んだ道」, エコソフィア, 昭和堂, 創刊号, pp. 6-9, 1998年
- 都出比呂志 「考古学と現代の接点」, 読書探検, 大阪大学生協同組合, 24巻・号, pp. 3-4, 1998年
- 都出比呂志 「あの時の一品」, 日本経済新聞, 日本経済新聞, p. 6, 1998年
- 都出比呂志 「島田さんのご冥福を」, 峠道: 島田暁先生追悼文集, , pp. 26-27, 2002年
- 福永伸哉 「大量出土の三角縁神獸鏡が語るもの」, 共著 福永伸哉/森岡秀人(芦屋市教育委員会)/小山田宏一(大阪府教育委員会), 産経新聞, 産経新聞社, 1998年
- 福永伸哉 「ホケノ山古墳鼎談」, 共著 福永伸哉/広瀬和雄(奈良女子大学)/東潮(徳島大学), 産経新聞, 産経新聞社, 2000年
- 高橋照彦 「国立歴史民俗博物館「陶磁器の文化史」展より」, 共著 吉岡康暢(国立歴史民俗博物館)・小野正敏(国立歴史民俗博物館)・高橋照彦・荒川正明(出光美術館), 陶説, Jun-01号, 日本陶磁協会, pp. 15-33, 1998年
- 高橋照彦 「飛鳥池遺跡出土「富本鏡」の意義」, 中日新聞, 1999年
- 高橋照彦 「緑色の敷瓦(上)」, 朝日新聞, 2000年
- 高橋照彦 「緑色の敷瓦(中)」, 朝日新聞, 2000年
- 高橋照彦 「緑色の敷瓦(下)」, 朝日新聞, 2000年
- 高橋照彦 「伝橋寺出土・火頭形三尊埴仏」, 読売新聞, 2000年
- 高橋照彦 「方形阿弥陀三尊埴仏」, 読売新聞, 2000年
- 高橋照彦 「瓦塔」, 読売新聞, 2001年
- 高橋照彦 「松林寺塔納置舍利容器」, 読売新聞, 2001年
- 高橋照彦 「天人文壇」, 読売新聞, 2001年

- 高橋照彦 「花氈」, 朝日新聞, 2001年
 高橋照彦 「ベルリンの唐三彩」, 独立行政法人国立博物館ニュース, 650号, 東京国立博物館, p. 11, 2001年
 高橋照彦 「飛鳥文陶製経筒」, 読売新聞, 2002年
 高橋照彦 「鬼瓦 (伝奈良市中山瓦窯出土)」, 読売新聞, 2002年
 清家 章 「シンポジウムレポート「弥生時代の人・社会・風土」」, エコソフィア, 昭和堂, 6号, pp. 83, 2000年

口頭発表

(1) 国際学会

- 都出比呂志 ‘Yayoi Farmers Reconsidered; New Perspectives on Agricultural Development in East Asia’, 単独 インド太平洋学会, Australian National University / Australia Canberra, 1998/7/2

(2) 国内学会

- 都出比呂志 「開発と埋蔵文化財」, 単独 大阪大学施設部/吹田市山田丘, 1998/11/12
 都出比呂志 「卑弥呼と古墳」, 単独, 日本文化史学会, 奈良女子短期大学/奈良県奈良市, 1998/12/2
 都出比呂志 「後円墳と後方墳」, 単独, 東海考古学フォーラム, 未来会館/岐阜県岐阜市, 1998/11/15
 福永伸哉 「古墳時代における政権権威基盤の変革」, 単独, 考古学研究会, 岡山例会, 岡山大学文学部/岡山県岡山市, 1998/9/6
 福永伸哉 「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」, 単独, 考古学研究会, 考古学研究会1999年度総会, 岡山大学文学部/岡山県岡山市, 1999/4/24-25
 福永伸哉 「国家形成過程における葬制の変革」, 単独, 考古学研究会, 考古学研究会関西例会100回記念シンポジウム, 大阪府立労働センター/大阪府大阪市1999/10/3
 高橋照彦 「正倉院三彩をめぐる諸問題」, 単独, 東洋陶磁学会, 東洋陶磁学会研究会, 五島美術館/東京都世田谷区, 2001/4/14

(3) 研究会

- 福永伸哉 「木棺墓研究の視点」, 単独, 両丹考古学研究会, 夜久野町ふれあいの里福祉センター/京都府夜久野町, 1997/11/29
 高橋照彦 「平安時代における緑釉陶器の生産と流通, 相模国出土例を中心に」, 単独, 相模の古代を考える会, 東海大学/神奈川県平塚市, 1997/7/20
 高橋照彦 「平安時代の施釉陶磁器」, 単独, 中世土器研究会, 中世土器研究会研究集会, 京都府中小企業会館/京都府京都市, 1999/12/4-5
 高橋照彦 「緑釉瓦埴小考, 文献史料・美術資料と考古資料の境界を越えて」, 単独, 京都大学考古学談話会大会, 京大会館/京都府京都市, 2000/11/18
 高橋照彦 「三彩・緑釉陶器の生産体制」, 単独, 官営工房研究会, 奈良国立文化財研究所/奈良県奈良市, 2000/12/16
 高橋照彦 「古代銭貨の理化学的分析」, 共同, 齋藤努 (国立歴史民俗博物館)/高橋照彦, 日本銀行金融研究所研究会, 日本銀行金融研究所/東京都中央区, 2001/5/25
 高橋照彦 「銭貨の原料調達の変遷」, 単独, 「わが国鑄銭技術の史的検討」研究集会, 独立行政法人奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部/奈良県橿原市, 2002/2/23-24
 清家 章 「埋葬からみた被葬者の性別」, 単独, ホミニゼーション研究会, 第29回研究会「性の先史学」, 京都大学霊長類研究所/愛知県犬山市, 2000/3/18
 清家 章 「近畿古墳時代の埋葬原理」, 単独, 考古学研究会関西例会, 第108回例会, ドーン・センター/大阪府大阪市, 2001/1/27

清家 章 「岩橋千塚古墳群の箱形石棺とその意義」, 単独, 紀伊考古学研究会, 第4回大会「今, 岩橋千塚古墳群を再検討する」, 和歌山市立博物館/和歌山県和歌山市, 2001/9/15

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 都出比呂志 「王陵の考古学」, 単独, 岩波基礎講座, 岩波講座センター/東京都千代田区, 1998/9/4-9
- 都出比呂志 「邪馬台国と安満宮山古墳」, 共同 水野正好/門脇貞二/原口正三/石野博信/都出比呂志/酒井龍一/福永伸哉/森田克行, 安満宮山シンポジウム, 高槻市市民ホール/大阪府高槻市, 1998/10/5
- 都出比呂志 「邪馬台国」, 単独, 長岡京市産業会館/京都府長岡京市, 1998/4/17
- 都出比呂志 「考古学からみた生駒西麓」, 単独, リージョンセンター/大阪府東大阪市, 1999/3/21
- 福永伸哉 「銅鐸から銅鏡へ」, 単独, 大阪府立弥生文化博物館/大阪府和泉市, 1997/10/26
- 福永伸哉 「トルコ共和国ゲミレル島遺跡の発掘調査」, 単独, 兵庫県民会館/兵庫県神戸市, 1997/11/14
- 福永伸哉 「乙訓の古墳時代」, 単独, 長岡京市中央公民館/京都府長岡京市, 1997/12/2
- 福永伸哉 「三国時代の鏡と三角縁神獣鏡」, 単独, 高槻市市制施行55周年記念歴史シンポジウム 検証邪馬台国——安満宮山古墳をめぐる——, 高槻市現代劇場ホール/大阪府高槻市, 1998/5/11
- 福永伸哉 「雨の宮古墳群の歴史的背景」, 単独, 雨の宮古墳講演完成記念シンポジウム, 鹿西町カルチャーセンター飛翔/石川県鹿西町, 1998/5/30-31
- 福永伸哉 「銅鏡の世界」, 単独, 茨木市立文化財資料館/大阪府茨木市, 1998/8/22
- 福永伸哉 「弥生文化と七日市遺跡」, 単独, シンポジウム 三万年のメッセージ——七日市遺跡と氷上回廊, 春日町文化ホール/兵庫県春日町, 1998/9/15
- 福永伸哉 「三角縁神獣鏡と初期大和政権」, 単独, 池田市立中央公民館/大阪府池田市, 1998/10/2
- 福永伸哉 「銅鐸から銅鏡へ」, 単独, 銅鐸博物館開館10周年記念銅鐸シンポジウム, 野洲町文化ホール/滋賀県野洲町, 1998/10/24-25
- 福永伸哉 「三角縁神獣鏡について」, 単独, 千葉県文化財センター職員研修, (財)千葉県文化財センター/千葉県千葉市, 1999/2/26
- 福永伸哉 「倭人と鏡」, 単独, 吹田市立博物館/大阪府吹田市, 1999/3/20
- 福永伸哉 「考古学からみた東アジアと邪馬台国」, 単独, 高槻市生涯学習センター/大阪府高槻市, 1999/4/13
- 福永伸哉 「倣製三角縁神獣鏡はなぜつくられたのか」, 単独, 下関市立考古博物館/山口県下関市, 1999/5/16
- 福永伸哉 「銅鐸と弥生人のこころ」, 単独, 芦屋市市民センター/兵庫県芦屋市, 1999/6/21
- 福永伸哉 「古墳時代の死生観」, 単独, 芦屋市市民センター/兵庫県芦屋市, 1999/7/19
- 福永伸哉 「三角縁神獣鏡論争のゆくえ」, 単独, 広島県立歴史民俗資料館/広島県三次市, 1999/11/13
- 福永伸哉 「銅鏡百枚と三角縁神獣鏡」, 単独, 第8回「古代史におけるアジアと日本」シンポジウム, 日経ホール/東京都千代田区, 1999/11/16
- 福永伸哉 「古墳時代の銅鏡」, 単独, 藤井寺市生涯学習センター/大阪府藤井寺市, 1999/11/20
- 福永伸哉 「井ノ内古墳群と継体大王」, 単独, 長岡京市中央公民館/京都府長岡京市, 1999/12/2
- 福永伸哉 「大和政権の成立と展開」, 単独, 川西市中央公民館/兵庫県川西市, 1999/12/23
- 福永伸哉 「古墳時代の型——銅鏡——」, 単独, 第4回古代史博物館フォーラム 型からひもとく歴史像—弥生・古墳・飛鳥—, 泉南市古代史博物館/大阪府泉南市, 2000/3/19
- 福永伸哉 「日本考古学の諸問題」, 単独, 奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財担当者一般研修, 奈良国立文化財研究所/奈良県奈良市, 2000/6/23
- 福永伸哉 「三角縁神獣鏡と葛城の前期古墳」, 単独, シンポジウム 葛城とヤマト政権——4世紀の王権内部の実像に迫る——, 御所市民会館/奈良県御所市, 2001/11/4

- 福永伸哉 「6世紀の倭と勝福寺古墳」, 単独, 川西市勝福寺古墳発掘調査講演会, 川西市中央公民館／兵庫県川西市, 2001/10/27
- 福永伸哉 「三角縁神獸鏡研究の現状と日本古墳時代の年代論」, 単独, 韓国忠南大学校百済学教育研究団招聘講座, 忠南大学校博物館／忠清南道大田市, 2001/11/17
- 福永伸哉 「巨大墳丘墓と頭飾りは何を語るか」, 単独, 赤坂今井墳丘墓シンポジウム, 京都府立丹後文化会館／京都府峰山町, 2001/11/25
- 福永伸哉 「邪馬台国から大和政権へ」, 単独, 大阪市歴史博物館／大阪府大阪市, 2002/2/2
- 福永伸哉 「古保利古墳群出現の背景」, 単独, 第1回高月シンポジウム 古保利古墳群を考古学する, 高月町中央公民館／滋賀県高月町2002/3/2
- 高橋照彦 「三彩・緑釉陶の展開 —— その歴史的な位置づけを中心に ——」, 単独 高橋照彦, 歴博フォーラム, 陶磁器が語る日本とアジア, 国立歴史民俗博物館／千葉県佐倉市, 1998/4/19
- 高橋照彦 「平安時代の緑釉陶器生産」, 単独, シンポジウム「日本の三彩と緑釉 —— 天平に咲いた華」, 愛知県陶磁資料館／愛知県瀬戸市, 1999/10/17-18
- 高橋照彦 「鉛同位体比分析からみた銭貨」, 単独, 出土銭貨研究会, 出土銭貨講座, 尼崎市立小田公民館／兵庫県尼崎市, 2000/4/22
- 高橋照彦 「正倉院三彩をめぐる諸問題」, 単独, 奈良国立博物館公開講座, 奈良国立博物館／奈良県奈良市, 2000/11/11
- 高橋照彦 「正倉院の三彩陶器」, 単独, 長岡京市第35回文化財講演会, 長岡京市産業文化会館／京都府長岡京市, 2001/3/17
- 高橋照彦 「唐三彩と奈良三彩」, 単独, 帝塚山大学考古学研究所公開講演会, 帝塚山学園／奈良県奈良市, 2001/7/14
- 高橋照彦 「防長・近江の施釉陶器」, 単独, 独立行政法人奈良文化財研究所文化財専門研修, 独立行政法人奈良文化財研究所／奈良県奈良市, 2002/2/25
- 清家 章 「古墳被葬者の親族関係」, 単独, 宇治市歴史資料館, 2001発掘宇治, 宇治市中央公民館／京都府宇治市, 2002/3/9
- 清家 章 「勝福寺古墳発掘調査報告」, 単独, 川西市教育委員会, 川西市勝福寺古墳発掘調査講演会, 川西市中央公民館／兵庫県川西市, 2001/10/27
- 清家 章 「人類の発生とマチカネワニ」, 単独, 豊中市立千里公民館, 公民館講座「豊中の歴史を探る～千里丘陵の原始古代」, 千里公民館／大阪府豊中市, 2002/3/18
- 清家 章 「須恵器作りのムラと古墳」, 単独, 豊中市立千里公民館, 公民館講座「豊中の歴史を探る～千里丘陵の原始古代」, 千里公民館／大阪府豊中市, 2002/3/25

(5) その他

- 都出比呂志 「弥生の戦争」, 単独, 二上山博物館／奈良県香芝市, 1998/5/5
- 都出比呂志 「考古学入門, 考古学の方法」, 単独, 奈良国立文化財研究所／奈良県奈良市, 1998/5/15
- 都出比呂志 「日本考古学の諸問題」, 単独, 奈良国立文化財研究所一般研修, 奈良国立文化財研究所／奈良県奈良市, 1998/7/2
- 都出比呂志 「考古学の発見と自然科学」, 単独, 湯川記念講演会, 大阪大学／大阪府豊中市, 1998/11/8
- 都出比呂志 「考古学の現代：大阪での学び方を考える」, 共同, 大阪大学入学式, 大阪大学／大阪府豊中市, 1998/4/6
- 都出比呂志 「人文学と自然科学の協力, 考古学から考える」, 共同, 大阪大学入学式, 大阪府立体育館／大阪府大阪市, 1999/4/9
- 都出比呂志 「古墳と鏡」, 単独, 辰馬資料館講演, 辰馬資料館／兵庫県西宮市, 1998/11/7
- 都出比呂志 「古墳時代イメージの革新」, 共同, 日本考古学協会シンポジウム, 京都府京都市, 1998/9/20
- 都出比呂志 「考古学入門, 考古学の方法」, 単独, 奈良国立文化財研究所一般研修, 奈良国立文化財研究

- 所／奈良県奈良市，1999／6／15
- 都出比呂志 「修羅と古墳時代」，単独，大阪府立近つ飛鳥博物館／大阪府南河内郡河南町，1999／6／20
- 都出比呂志 「前方後円墳と世界の王陵」，単独，文化財保存全国協議会，宇佐市文化会館大ホール／大分県宇佐市，1999／8／2
- 福永伸哉 「近畿地方の出現期の古墳」，単独，第7回雄山閣考古学賞記念シンポジウム 前方後円墳の出現，日本出版クラブ会館／東京都新宿区，1998／6／20
- 福永伸哉 「埋葬姿勢から弥生渡来人をさぐる」，単独，文部省科研費地域連携推進研究シンポジウム 瀬戸内弥生文化のパイオニア，西神 SHIC PLAZA／兵庫県神戸市，2000／12／9－10
- 福永伸哉 「百済武寧王陵の調査成果と日本考古学」，単独，韓国忠南大学校百済学教育研究団招聘講座，忠南大学校博物館／忠清南道大田，2001／11／17
- 清家 章 「弥生時代の女性」，単独，文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会，シンポジウム新方遺跡からの新視点 瀬戸内弥生文化のパイオニア，西神 SHIC PLAZA／兵庫県神戸市，2000／12／9－10

2. 教員の受賞歴

- 1989年 都出比呂志 第二回浜田青陵賞
- 1997年 都出比呂志・福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞

【IV. 教員による競争的資金獲得】（1997年度～2001年度）

1. 科学研究費補助金の獲得状況

1997年度	基盤研究（B）（2）	8451087	古墳時代首長墓系譜の変動パターンの比較研究	
	都出比呂志			2,100,000円
1997年度	基盤研究（C）（2）	7610402	古墳時代政治史の考古学的研究	
	—— 国際的契機に着目して ——		福永伸哉	400,000円
1997年度	基盤研究（C）（2）	10610394	弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究	
	福永伸哉			1,700,000円
1997年度	奨励研究（A）	9710281	日本列島における炊飯様式の地域性の研究	
	—— 竈と炊飯具の分析を中心として ——		杉井 健	1,700,000円
1997年度	奨励研究（A）	11710213	弥生～古墳時代における親族構造の考古学・人類学的研究	
	清家 章			700,000円
1998年度	基盤研究（B）（2）	8451087	古墳時代首長墓系譜の変動パターンの比較研究	
	都出比呂志			500,000円
1998年度	基盤研究（C）（2）	10610394	弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究	
	福永伸哉			500,000円
1999年度	基盤研究（C）（2）	10610394	弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究	
	福永伸哉			600,000円
1999年度	奨励研究（A）	11710213	弥生～古墳時代における親族構造の考古学・人類学的研究	
	清家 章			1,700,000円
2000年度	奨励研究（A）	12710221	古代鉛釉陶器の日韓比較研究	

	高橋照彦		800,000円
2001年度	基盤研究 (B) (1)	13410115	西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究
	福永伸哉		6,000,000円
2001年度	奨励研究 (A)	12710221	古代鉛釉陶器の日韓比較研究
	高橋照彦		700,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

1997	福永伸哉	福永伸哉助教授研究助成金 (財) 高梨学術奨励基金より	500,000円
1997	福永伸哉	福永伸哉助教授研究助成金 三島雲海記念財団より	500,000円
1999	清家 章	(財) 高梨学術奨励基金	500,000円
2001	福永伸哉	受託研究 独立行政法人通信総合研究所より	1,300,000円
2001	高橋照彦	高橋照彦助教授研究助成金 鹿島美術財団より	500,000円
2002	福永伸哉	受託研究 独立行政法人通信総合研究所より	7,000,000円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】 (1997～2001年度)

都出比呂志

考古学研究会常任委員 (1997年4月～1998年3月)

考古学研究会会計監査委員 (1998年4月～2002年3月)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事 (1997年4月～2002年3月)

財団法人大阪府文化財センター評議員 (1997年4月～2002年3月)

豊中市文化財保護審議会委員 (1997年4月～2002年3月)

長岡京市文化財審議委員 (1990年4月～2002年3月)

福永伸哉

考古学研究会常任委員 (1997年4月～2000年3月)

高橋照彦

東洋陶磁学会幹事 (1997年4月～2002年3月)

清家 章

考古学研究会常任委員 (2000年4月～2002年3月)

【VI. 教員の教育活動】 (2002年度)

1. 大学院授業担当

都出比呂志 教授

通年 考古学博士論文作成演習 考古学博士論文指導 (福永助教授, 高橋助教授と共同)

通年 考古学修士論文作成演習 考古学修士論文指導 (福永助教授, 高橋助教授と共同)

福永伸哉 助教授

通年 考古学特殊講義 日本青銅器文化の展開

通年 考古学講義 日本青銅器文化の展開

通年 考古学博士論文作成演習 考古学博士論文指導 (都出教授, 高橋助教授と共同)

通年 考古学修士論文作成演習 考古学修士論文指導（都出教授，高橋助教授と共同）

高橋照彦 助教授

2学期 考古学特殊講義 日本古代施釉陶器生産の研究

2学期 考古学講義 日本古代施釉陶器生産の研究

通年 考古学博士論文作成演習 考古学博士論文指導（都出教授，福永助教授と共同）

通年 考古学修士論文作成演習 考古学修士論文指導（都出教授，福永助教授と共同）

小野昭 講師（非常勤講師・東京都立大学）

1学期 考古学特殊講義 旧石器時代の環境変遷と生活技術

辻秀人 講師（非常勤講師・東北学院大学）

2学期 日本考古学特殊講義 東北世界の古墳時代史

森岡秀人講師・杉本宏講師・榎垣田佳男講師（非常勤講師・芦屋市教育委員会・宇治市教育委員会・文化庁）

1学期 考古学特殊講義 文化資源活用論

2. 学部授業担当

都出比呂志 教授

1学期 考古学演習 考古学基礎演習

1学期 考古学演習 考古学卒論演習（福永助教授，高橋助教授と共同）

2学期 考古学演習 考古学論文演習（福永助教授，高橋助教授と共同）

福永伸哉 助教授

通年 考古学講義 日本青銅器文化の展開

2学期 考古学演習 考古学資料演習

1学期 考古学演習 考古学卒論演習（都出教授，高橋助教授と共同）

2学期 考古学演習 考古学論文演習（都出教授，高橋助教授と共同）

高橋照彦 助教授

1学期 考古学演習 考古学文献講読

2学期 考古学講義 日本古代施釉陶器生産の研究

通年 考古学演習 考古学の基本技術

1学期 考古学演習 考古学卒論演習（都出教授，福永助教授と共同）

2学期 考古学演習 考古学論文演習（都出教授，福永助教授と共同）

小野 昭 講師（非常勤講師・東京都立大学）

1学期 考古学講義 旧石器時代の環境変遷と生活技術

辻 秀人 講師（非常勤講師・東北学院大学）

2 学期 日本考古学講義 東北世界の古墳時代史

森岡秀人講師・杉本宏講師・榎垣田佳男講師（非常勤講師・芦屋市教育委員会・宇治市教育委員会・文化庁）

1 学期 考古学講義 文化資源活用論

3. 共通教育担当

I セメスター 専門基礎 福永伸哉助教授 考古学基礎 A

II セメスター 専門基礎 岡村勝行講師（非常勤講師・大阪歴史博物館） 考古学基礎 B

4. 他大学における集中講義等

福永伸哉助教授 富山大学 2 学期 考古学特殊講義

高橋照彦助教授 京都大学 1 学期 博物館学講義

清家 章助手 神戸女学院大学 通年 考古学講義

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：白石太一郎（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）

はじめに

大阪大学に考古学の講座が正式に設置されたのは、1988年のことで必ずしも古いことではない。またその専任スタッフも都出比呂志教授、福永伸哉助教授、高橋照彦助教授の3名で、埋蔵文化財調査室でのキャンパス内の埋蔵文化財調査業務を本務とする兼任の清家章助手を含めても4名で、その数は必ずしも多いとはいえない。

それにもかかわらず、1916年に日本で最初の考古学の講座が開設され、絶えず日本の考古学研究を先導してきた京都大学の考古学専攻に劣らず、あるいは一部の分野ではそれを越えて日本の考古学研究の方向性をリードするとともに、将来の日本考古学を担う多くの若い研究者の育成にもきわめて重要な役割を果たしている。これは単に評者のみでなく、多くの日本の考古学研究者が共に認めるところである。さらにそのことは、全国各地の大学で考古学を学んだ学生のうち、とくに研究者をめざす優秀な人材が大阪大学の大学院への入学を志望することにもよく表れている。

以下求めに応じ、考古学分野の諸活動のうち研究活動とその業績にしぼって、若干の評価を試みることにしたい。ただ紙幅の関係もあり、その評価は多様な研究活動のうち、特に中心的なものに絞らざるをえないことをあらかじめお断わりしておく。

研究の先見性・独創性

2002年度に高橋助教授が着任するまでは、専任スタッフが都出教授、福永助教授の2名であっ

たことから、その研究対象が日本考古学のうちでも、弥生時代から古墳時代という比較的限られた時代であったことは止むをえない。ただこの時代は、日本列島に原生国家が誕生し、それが次第に結びついて一つのまとまりある古代国家が形成されるに至る、社会史的、政治史的、文化史的にもきわめて重要な時代にあたっている。

都出教授は、この日本列島における国家形成という歴史学上でも重要なテーマに考古学の立場から取り組んでいる。特に H. クラッセンらの初期国家論を取り入れ、定型化した前方後円墳の造営にみられるような一元的な政治秩序を「前方後円墳体制」と名付け、古墳時代はその当初からすでに国家段階に達していたという説を提起した。これは一貫して日本列島における国家形成を7世紀後半の律令制国家の成立に求めてきた第2次大戦後の古代史研究に対するアンチテーゼとして大きな意味を持つ問題提起であった。さらに教授は、日本の前方後円墳を世界各地の初期の王陵のあり方と比較することによって、日本の古代王権それ自体の性格にまで考察のメスを入れようとしている。

一方福永助教授は、古墳成立期の対外関係や列島内各地の政治勢力の相互関係を考古学的に追求する上に最も有力な材料となる銅鏡、特に三角縁神獣鏡に関する着実な研究によって、都出教授の大きな問題提起を実証的に担保する重要な研究を進めている。福永助教授の研究で重視されるのは、その製作地を含め議論の多い三角縁神獣鏡について、従来の研究者がまったく注目しなかった鈕孔の形態など、その製作技法の差異を明確に表す特徴に着目し、その系譜を追求するとともに、その編年研究を大きく前進させた。

こうした都出、福永両氏の研究成果については異論もないわけではなく、さらに今後の研究が必要であることはいうまでもないが、その先見性と独創性においてきわめてすぐれたものであり、日本列島における国家形成を考古学的方法によって明らかにしようとする研究の先頭に立つものであることに異論はなかろう。両氏の指導を受けた大学院生や卒業生の研究には膨大なものがあるが、その一端は1999年に大阪大学考古学研究室10周年記念論集として刊行された『国家形成期の考古学』にみることができる。すぐれた問題意識と先端的な方法によるすぐれた研究が数多く収録されており、それらが当該分野の研究に与えた刺激はきわめて大きい。

日本列島における古代国家の形成過程やその性格を追求するには、その形成過程である弥生時代から古墳時代の研究とともに、出来上がった律令制国家の実態の解明が不可欠である。その点で、都出、福永両氏の研究を補完するのは、高橋照彦助教授による律令期の土器をはじめとする資料の生産や流通に関する実証的研究である。高橋氏の大阪大学での研究は今後にまつほかないが、同氏の今までの律令期の土器や貨幣に関する研究は、考古学の基本的方法に則ったきわめて説得力のあるすぐれたもので、律令期社会の実態解明に大きな役割を果たしている。都出、福永両氏の研究と高橋氏の研究が結びついてはじめて考古学による日本の古代国家解明のスクラムが出来上がるものと期待される。

研究の実証性

大阪大学の考古学分野の研究が評価されるのは、それが明確な問題意識を持つものであること

と共に、発掘調査を含むフィールドワークや徹底した資料調査の裏付けをもつ、その実証性にある。考古学研究ではまず発掘調査がその研究の出発点になることはいうまでもない。その意味で滋賀県雪野山古墳に始まる一連の大阪大学の発掘調査は、諸氏の研究の実証的裏付けを与えるものとし重要である。さらにその先端的で着実な発掘方法や、報告書のスタイルは、各地で数多く行われている地方公共団体などの発掘調査やその報告書の作成などにも大きな影響を与えたものとして、また発掘法の学生への教育の観点からも評価される。さらに都出氏の王陵の比較研究が世界各地の王陵の調査成果の博搜を基礎とするものであり、また福永氏の三角縁神獣鏡の研究が、東アジア各地の確実な出土例の検証を進めつつあることなど、その実証を重視する研究姿勢は今後も貫かれるであろう。

研究の体系性と持続性

都出氏や福永氏の研究が高く評価されるのは、それが単に前方後円墳や三角縁神獣鏡に関する実証的研究であるからではない。日本列島における古代国家の成立をいかに捉えるか、また日本の古代国家や王権の特質は何かという、大きくかつ明確な研究課題に基づく研究であるところが重要である。そこにこそ研究の体系性と持続性が一貫して認められるのである。高橋氏の土器や貨幣など具体的な資料の実証的研究も、律令期社会の実態の解明という氏の従来からの問題意識に貫かれた明確な目的を持つものであり、それは大阪大学の考古学分野の従来からの研究目標と見事に整合する。こうした研究の体系性とその持続性が、さらにどのような研究成果を生み出すかが期待される。

教官組織の問題

考古学の研究対象が原始・古代に限らず、さらに中世や近世にまで拡大するなかで、大阪大学の教員諸氏がカバーする領域は、時代的、地域的にも必ずしも広いものとはいえない。しかし国立大学の現状からも、さらに異なる時代や地域を研究対象とする多くの教官を確保することは不可能であろうし、またその必要はなかろう。むしろ、日本の古代国家の中枢が存在した関西にある大学として、その基本的な研究テーマを日本の古代国家の形成とその特質の解明に絞っていることは適切である。学生の教育の観点からも、こうした特色ある教育・研究によって学んだ方法は、他の時代・地域・テーマへの応用は充分可能である。その意味で、高橋助教授の着任によって弥生・古墳時代からさらに律令期の研究者が揃った意義はきわめて大きい。

ただ評者にとって若干気になるのは、各教員の影響力があまりにも大きいためであろうが、卒業生の多くがきわめてよく似た研究課題、研究法、学風を持つように見受けられる点である。この点は決して悪いことではないが、独創的な、異色の研究者を育てることも大切である。この点、非常勤講師の招聘などでさらにひと工夫できるのではなかろうか。

また大阪大学の考古学分野が追求しているこうした研究課題をさらに進展させるためには、各教官がすでに自覚し、実践しているように、世界史的視野、とりわけ中国・朝鮮半島との関係の追求や比較研究を欠かすことはできない。韓国などからの留学生で、韓国の大学の教員になり、

古代日韓の交流の実態解明に大きな業績をあげている研究者や、逆に卒業生で韓国の大学に留学中の研究者もあり、この面でも成果があがっていることは認められる。さらに東アジア考古学の専攻者が教員に加われば、その教育研究体制にさらに量り知れない前進を与えるものと思慮される。

学会活動その他

三教員は、それぞれの世代の研究者の中で指導的位置にあり、また学会活動その他で日本考古学界で大きな役割を果たしている。またそれぞれ著作や講演活動などを通じて積極的に研究成果の社会への還元や、文化財の保護に大きな役割を果たしていることも高く評価できる。

3-11 人文地理学

【はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色】

小規模教室ながら、現代の人文地理学の主要分野である空間分析および人間—環境関係について、先端的な研究を推進することにつとめ、同時にそれを教育に反映させることをめざしている。また当教室の地図史研究の伝統を継承しつつ、近代地図作成に関連する学外の研究者との共同研究を組織している。

教育においては、先端の研究を意識しつつ、その実行につながるような視野と能力を修得できるよう努力している。またコンピュータ・リテラシーを重視し、各種データの整理、統計分析、プレゼンテーションの実習を課すほか、調査対象地域に関するさまざまな資料の収集、インタビューからデータの解析、報告にいたる作業も並行しておこなっている。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 1

教授： 小林 茂

助教授： 堤 研二

助手： 今里悟之

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
16	2	2	1	1	0	2	0	0

※うち留学生2名, 社会人学生0名

3. 修了生・卒業生 (1997~2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	0	0	0	0	0
'98	4	0	0	0	0
'99	4	0	0	0	0
'00	5	0	0	0	0
'01	4	0	0	0	0
計	17	0	0	0	0

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての教育・研究活動】(1997～2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	0	0	0
'01	0	0	0
計	0	0	0

1-2 博士論文の提出者, 題目, 審査教官等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	0	0	0	0	0	0
'99	1	0	0	0	1	2
'00	0	0	0	0	2	2
'01	0	0	0	0	0	0
計	1	0	0	0	3	4

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	0	1	1	0	0	2
'99	0	2	0	0	0	2
'00	0	1	0	0	0	1
'01	0	4	0	0	0	4
計	0	8	1	0	0	9

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績論文

鳴海邦匡 「近世山論絵図と廻り検地法——北摂山地南麓における事例を中心に——」, 『人文地理』第51巻6号, 1999年.

口頭発表

- 鳴海邦匡 「近世境争論絵図とその測量技術——北摂山地西部地域の近世境争論絵図作製における野帳の検討を中心に——」, 単独, 人文地理学会, 1998年度人文地理学会大会一般研究発表, 京都大学/京都府京都市, 1998年11月15日 (『1998年度人文地理学会大会公開講演会・一般研究発表要旨』, pp. 44-45.).
- 鳴海邦匡 「近世山論絵図とその調製過程」, 単独, 歴史地理学会, 第42回歴史地理学会大会自由論題研究発表, 立命館大学/京都府京都市, 1999年6月6日 (『歴史地理学』41-4, pp. 50-51.).
- 鳴海邦匡 「近世畿内山麓の植生景観と資源利用——17世紀末北摂山地南麓における山論絵図の検討を中心に——」, 単独, 人文地理学会, 1999年度人文地理学会大会一般研究発表, 奈良大学/奈良県, 1999年11月21日 (『1999年度人文地理学会大会研究発表要旨』, pp. 66-67.).
- 鳴海邦匡 「『復元』された測量技術と近世山論絵図」, 単独, 人文地理学会, 第65回人文地理学会地理思想研究部会, 京大会館/京都府京都市, 2001年3月24日 (『人文地理』53, pp. 391-392.).
- 鳴海邦匡 「道中図を素材とした山地植生の描写分析: 萩市郷土博物館所蔵『中国行程記』の検討」, 単独, 人文地理学会・福岡地理学会共催, 第240回人文地理学会特別例会, 九州大学/福岡県福岡市, 2001年6月9日 (『人文地理』53, pp. 388-389.).
- 鳴海邦匡 「近世後期の地図測量技術とその広がり(一)——肥後藩天文方池部長十郎・啓太の先導的役割——」, 共同 鳴海邦匡・磯永和貴(佛教大学非常勤講師), 人文地理学会, 2001年度人文地理学会大会一般研究発表, 神戸大学/兵庫県神戸市, 2001年11月11日 (『2001年度人文地理学会大会研究発表要旨』, pp. 74-75.).
- 渡辺理絵 「城下町絵図と武家の居住——米沢藩を例にして——」, 単独, 人文地理学会, 第87回人文地理学会歴史地理研究部会, 京都私学会館/京都府京都市, 2002年1月26日 (『人文地理』54-4, pp. 91-93.).

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 1 名

学部: 0名 MC: 1名 DC: 0名

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で, 大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人 ('97年度~'01年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業業者で, システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職, ジャーナリスト, アーティスト, 中・高等学校の教員, その他の職業に就いた者について)

計 7 名

'97年度: 0名 '98年度: 0名 '99年度: 2名 '00年度: 3名 '01年度: 2名

<内訳>	技術職	4名
	ジャーナリスト	1名
	アーティスト	0名
	教職	2名
	その他	0名

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 0 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 1 名

10. 刊行物

- 1999年度 『地域空間の形成と変動に関する実証的および理論的研究』（科研費報告書）
- 2000年度 『人口減少・高齢化地域における生活機能・社会経済的地域機能の実態と IT 支援』（日本証券奨学財団研究助成報告書）
- 2001年度 『ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応に関する調査研究（平成12年度～13年度科学研究費補助金〔基盤研究（B）（1）海外学術調査〕研究報告書）』

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 2000年5月27日「人文地理学会・地理思想研究部会」（国内学会）
- 2002年3月23日「人文地理学会・地理思想研究部会」（国内学会）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去5年間の自己点検と評価

- (1) 教育活動：5年前（1997年）は、専門分野としての「人文地理学」が発足して3年目であったが、旧日本学（比較文化学）の時代から勤務してきた高橋 正教授が退官し、小林健太郎教授が着任したところであった。小林健太郎教授は、しかしその後3ヵ月足らずの同年7月に病死されたのは大きな痛手であった。

これによって当専門分野は危機的状況となったが、10月より当時九州大学に勤務していた小林 茂が併任教授として着任し、その欠を補うこととなった。1998年4月に小林 茂が専任の教授として赴任し、1999年4月に堤 研二が助教授として島根大学より着任し、1997年4月より勤務していた山田朋子助手とともにようやく組織的には形を整えることができた。しかし、学生の実習や演習の場となる共同研究室は狭小なうえ、日本学専修と共用で、通常の地理学教室で行われている実習をほとんど実施することができなかった。校舎の増築にと

もない、共同研究室ならびに地図室（ただし窓のない部屋で日本史学と共用）が確保できたのは2001年5月であり、以後コンピュータ関連機器、統計分析やGISに関連するソフト、測量関連機器などを購入し、設備を整えてきた。なお、山田助手は2000年4月に今里悟之助手と交代した。

学部学生の当専修への進学は、増減はありながらも順調で、設備が整うにつれて、各種実習が充実している。ただし大学院生の当専門分野への進学については、大きな課題をかかえている。当初まったく在学生在がいなかったこともあるが、以後も毎年度1名の入学者のみで、2002年4月現在でようやく4名、これに特別研究学生1名をくわえて計5名と少数であることが反省される。今後は内部からの進学者にくわえ、外部からの受験者の増大が課題である。

- (2) 研究活動：教官の研究面では、前任校でおこなっていた研究を継続し、科学研究費のほか、民間の財団等から研究費を継続的に取得してきており、研究環境の整備に努力を要しながらも、まずまずの成果を上げてきたと考えている。今後は成果を学会誌、国際誌にさらに発表していくことが課題である。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 小林 茂 「カトマンズのイネの二期作」, 農耕文化研究振興会編『農耕の世界／その技術と文化Ⅳ／アジアの農耕様式』大明堂, pp. 38-56, 1997.
- 小林 茂 「福岡平野の遺跡立地研究」, 共著 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／高倉洋彰（西南学院大）, 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／高倉洋彰（西南学院大）編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会, pp. 1-10, 1998.
- 小林 茂 「博多遺跡群をめぐる環境変化：弥生時代から近代まで、博多はどう変わったか」, 共著 磯 望（西南学院大）／下山正一（九州大）／大庭康時（福岡市教委）／池崎讓二（福岡市教委）／小林 茂／佐伯弘二（九州大）, 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／高倉洋彰（西南学院大）編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会, pp. 69-112, 1998.
- 小林 茂 「文献および絵図・地図からみた房州堀」, 共著 佐伯弘二（九州大）／小林 茂, 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／高倉洋彰（西南学院大）編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会, pp. 223-234, 1998.
- 小林 茂 「近世の福岡・博多市街絵図：公用図について」, 共著 小林 茂／佐伯弘二（九州大）, 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／高倉洋彰（西南学院大）編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会, pp. 235-257, 1998.
- 小林 茂 「福岡藩の元禄期絵図の作製方法と精度」, 共著 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／下山正一（九州大）, 小林 茂／佐伯弘二（九州大）／磯 望（西南学院大）／高倉洋彰（西南学院大）編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会, pp. 259-274, 1998.
- 小林 茂 「ネパールの低開発と知識人：D.B. ビスタ氏『運命論と開発：近代化にむけたネパールの闘い』をめぐる」, 『比較社会文化』第4巻, 九州大学比較社会文化研究科, pp. 49-64, 1998.
- 小林 茂 「血圧規定要因としてのミネラル摂取量の意義：ネパール健康科学調査より」, 共著 川崎晃一（九州大）／伊藤和枝（中村学園大）／大柿哲朗（九州大）／吉水 浩（久留米大）／小林

- 茂／上園慶子（九州大）／Pradeep K. Ghimire（トリブバン大）／Sashi Sharma（トリブバン大）／Gopal P. Acharya（トリブバン大），『健康科学』第20巻，九州大学健康科学センター，pp. 109-118，1998.
- 小林 茂 「ネパール王国丘陵農村および都市近郊農村における *Helicobacter pylori* 感染と教育レベルとの関係」，共著 川崎真澄（九州大）／川崎晃一（九州大）／大柿哲朗（九州大）／小林 茂／伊藤和枝（中村学園大）／吉水 浩（久留米大）／青柳邦彦（九州大）／Sashi Sharma（トリブバン大）／Gopal P. Acharya（トリブバン大），『健康科学』第20巻，九州大学健康科学センター，pp. 127-132，1998.
- 小林 茂 「ネパール都市近郊住民の24時間心拍数」，共著 大柿哲朗（九州大）／吉水 浩（久留米大）／川崎晃一（九州大）／伊藤和枝（中村学園大）／小林 茂／川崎真澄（九州大）／Sashi Sharma（トリブバン大）／Gopal P. Acharya（トリブバン大），『健康科学』第20巻，九州大学健康科学センター，pp. 145-154，1998.
- 小林 茂 「奄美諸島における近世—明治期のイネ栽培の変容過程」，共著 小林 茂／久武哲也（甲南大），農耕文化研究振興会編『世界の農耕，その技術と文化V，琉球弧の農耕文化』大明堂，pp. 10-42，1998.
- 小林 茂 “Sero-prevalence of *Helicobacter pylori* infection in Nepal”，共著 Masumi Kawasaki (Kyushu University) / Terukazu Kawasaki (Kyushu University) / Tetsuro Ogaki (Kyushu University) / Kazue Itoh (Nakamura University) / Shigeru Kobayashi / Yutaka Yoshimizu (Kurume University) / Kunihiko Aoyagi (Kyushu University) / Akiko Iwakawa (CRC Central Research Laboratory) / Shinsuke Takahashi (CRC Central Research Laboratory) / Sashi Sharma (Tribhuvan University) / Gopal P. Acharya (Tribhuvan University), *European Journal of Gastroenterology & Hepatology*, vol.10, European Association of Gastroenterology and Endoscopy, pp. 47-50, 1998.
- 小林 茂 「カトマンズ都市圏の固形廃棄物処理問題」，成田孝三編『大都市圏研究(下)』大明堂，pp. 309-334，1999.
- 小林 茂 「地形図の変化と柳川の近代」，柳川市史編集委員会編『地図のなかの柳川：柳川市史地図編』柳川市，pp. 225-236，1999.
- 小林 茂 “A survey on helminthic infections in two rural communities in Nepal”，共著 Shinjiro Hamano (Kyushu University) / Shigeru Kobayashi / Tetsuro Ogaki (Kyushu University) / Masataka Koga (Kyushu University) / Masumi Kawasaki (Kyushu University) / Kazue Itoh (Nakamura University) / Atsushi Saito (Kyushu University) / Moriyasu Tsuji (Kyorin University) / Shoji Tokunaga (Kyushu University) / Sashi Sharma (Tribhuvan University) / Gopal P. Acharya (Tribhuvan University) / Terukazu Kawasaki (Kyushu University), *Japanese Journal of Tropical Medicine and Hygiene*, vol.27, no.4, 日本熱帯医学会，pp. 511-515，1999.
- 小林 茂 「徳之島に漂着した朝鮮人漂流者の自力回航と帰還」，『徳之島郷土研究会報』第24号，徳之島郷土研究会，pp. 52-58，1999.
- 小林 茂 「ネパールにおける肺吸虫および肺吸虫症の研究」，共著 川島健治郎（九州大）／濱野真二郎（九州大）／小林 茂／古賀正崇（九州大）／大柿哲朗（九州大）／斎藤篤（九州大）／川崎晃一（九州大），『健康科学』第22巻，九州大学健康科学センター，pp. 89-93，2000.
- 小林 茂 「ネパールにおける蠕虫感染状況とその血清学的検討」，共著 濱野真二郎（九州大）／小林 茂／大柿哲朗（九州大）／古賀正崇（九州大）／川崎真澄（九州大）／伊藤和枝（中村学園大）／斎藤篤（九州大）／辻守康（杏林大）／徳永章二（九州大）／Sashi Sharma（トリブバン大）／Gopal P. Acharya（トリブバン大）／川崎晃一（九州大），『健康科学』第22巻，九州大学健康科学センター，pp. 95-101，1999.
- 小林 茂 「ネパールにおけるサラセミアの分子遺伝学的解析」，共著 服巻保幸（九州大）／酒井保禎（九州大）／小林 茂／古海弘泰（九州大）／濱野真二郎（九州大）／遠藤敏廉（九州女子大）／Gopal P. Acharya（トリブバン大）／川崎晃一（九州大），『健康科学』22巻，九州大

- 学健康科学センター, pp. 103-108, 1999.
- 小林 茂 「近世後期における琉球船の朝鮮漂着と自力回航」, 『待兼山論叢／日本学編』第33巻, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-15, 1999.
- 小林 茂 「近世の南西諸島における天然痘の流行パターンと人痘法の施行」, 『歴史地理学』第42巻1号, 歴史地理学会, pp. 47-63, 2000.
- 小林 茂 “Molecular analysis of alpha-thalassemia in Nepal: correlation with malaria endemicity”, 共著 Yasuyoshi Sakai (Kyushu University) / Shigeru Kobayashi / Hiroaki Shibata (Kyushu University) / Hiroyasu Furuumi (Kyushu University) / Toshiyasu Endo (Kyushu Women's College) / Supan Fucharoen (Khon Kaen University) / Shinjiro Hamano (Kyushu University) / Gopal P. Acharya (Tribhuvan University) / Terukazu Kawasaki (Kyushu University) / Yasuyuki Fukumaki (Kyushu University), *Journal of Human Genetics*, vol.45, no.3, Japan Society of Human Genetics, pp. 127-132, 2000.
- 小林 茂 「琉球王府の対天然痘戦略と漂流民」, 琉球中国関係国際学術会議編『第八回琉中歴史関係国際学術会議論文集』, 琉球中国関係国際学術会議, pp. 141-158, 2001. 3月
- 小林 茂 「カトマンズの都市環境問題」, 穂坂光彦・篠田隆編『南アジアの都市環境マネジメント』文部省科学研究費・特定研究(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク」Discussion Paper No. 18, pp. 1-16, 2001.
- 小林 茂 「農業水利」, 共著 小林 茂・加賀康治, 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史／環境資料編』太宰府市, pp. 291-387, 2001.
- 小林 茂 「『太宰府旧蹟全図』の検討とスケッチ図の解説」, 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史／環境資料編』, 太宰府市史編集委員会編, pp. 475-489, 2001.
- 小林 茂・堤 研二 「土地利用の変化と伝統的環境利用」, 太宰府市史編集委員会編, 『太宰府市史／環境資料編』, pp. 389-471, 2001.
- 堤 研二 “Development of the Settlement System in Japan in the Context of Sustainable Development: A Case of Peripheral Region,” *Sustainability as an Approach for National, Regional and Local Development in Japan and Germany*, The Organizing Committee of the 8th Japanese-German Geographical Conference, pp. 125-141, 1998.
- 堤 研二 「旧軍港都市『佐世保市』・旧城下町『諫早市』」, 山田安彦・山崎謹也編『歴史の古い都市群／北九州地方の都市』11, 大明堂, pp. 304-311, 1997.
- 堤 研二 「離島空港をめぐる諸問題——隠岐空港を事例として——」, 『地域地理研究』第3巻, 地域地理学会, pp. 57-66, 1998.
- Kenji Tsutsumi “Depopulated Regions in Japan: A Case Study on the Former Coal-Mining Region, Takashima, Nagasaki Prefecture, Japan,” *Sustainability and Development: On the Future of Small Society in a Dynamic Economy*/ Research Report, Social Sciences, University of Karlstad Aug. 98, Regional Science Research Unit, University of Karls-tad, pp. 230-235, 1998.
- Kenji Tsutsumi “An Essay on Counterpolicies to Depopulation: Challenges for / from Depopulated Regions,” *Local Knowledge and Innovation: Enhancing the Substance of Non-Metropolitan Regions*, MARG (Marginal Areas Research Group), pp. 249-255, 1999.
- 堤 研二 「歴史の息づく水辺の城下町——松江市——」, 平岡昭利編『中国・四国／地図で読む百年』, 古今書院, pp. 101-106, 1999.
- 堤 研二 「神話と散村の平野——出雲平野——」, 平岡昭利編『中国・四国／地図で読む百年』, 古今書院, pp. 107-112, 1999.
- 堤 研二 「近代における地方鉄道と地域構造——福岡県太宰府地域を事例として——」, 『待兼山論叢』日本学篇 第34号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 47-61, 2000.
- 堤 研二 「過疎地域の人口と過疎問題——2000年国勢調査速報をもとに——」, 『統計』第52巻4号, 財団法人・日本統計協会, pp. 18-24, 2001.
- Kenji Tsutsumi “Modernization, Industrialization and Regional Change in Japan: A Case of a Coal

Mining Region: Panopticonization towards Space and Society," *For Alternative 21st Century Geographies: The 2nd International Symposium of Critical Geography Vol.1*, Korean Association of Spatial Environmental Research, pp. 127-135, 2001.

今里悟之 「中国四川農村の村落領域と景観形成——成都市龍泉驛区二河村14組を事例として——」, 『地理学評論』第74A 卷7号, 日本地理学会, pp. 394 - 414, 2001.

今里悟之 「諏訪農山村における部落会計の変遷と社会秩序」, 『待兼山論叢』 日本学篇, 第35号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1 - 16, 2001.

1-2. 著書

小林 茂 「福岡平野の古環境と遺跡立地」, 共編著 小林 茂・磯 望 (西南学院大)・佐伯弘二 (九州大)・高倉洋彰 (西南学院大) 編, 九州大学出版会, 289p., 1998.

小林 茂 「太宰府市史環境資料編」, 共編著 磯 望 (西南学院大)・小林 茂・下山正一 (九州大) 編, 太宰府市, 521p, 2001.

Kenji Tsutsumi "Local Knowledge and Innovation: Enhancing the Substance of Non-Metropolitan Regions, 共編著 Kiyoshi Kobayashi (Kyoto University)・Yasutaka Matsuo (Sen-shu University)・Kenji Tsutsumi, MARG (Marginal Areas Research Group), 357p, pp. 1-4 / 249-255, 1999.

堤 研二 「地域空間の形成と変動に関する実証的および理論的研究」, 単著, 科学研究費補助金成果報告書, 53p., 2000.

堤 研二 「人口減少・高齢化地域における生活機能・社会経済的地域機能の実態と IT 支援」, 単著, 日本証券奨学財団研究助成 (経済学分野) 成果報告書, 55p, 2001.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 書評

小林 茂 「田和正孝著『漁場利用の生態』」, 『地理学評論』第70A 卷第4号, 日本地理学会, pp. 451 - 453, 1997.

小林 茂 「海野一隆著『地図にみる日本』」, 『地図情報』第19卷第4号, 財団法人地図情報センター, pp. 29, 2000.

小林 茂 「加藤雅信著『所有権の誕生』」, 『法学教室』第252号, 有斐閣, pp. 55, 2001.

堤 研二 「岡橋秀典著『周辺地域の存立構造——現代山村の形成と展開——』」, 『地理学評論』第70A 卷, 第9号, 日本地理学会, pp. 592-594, 1997.

堤 研二 「西野寿章著『山村地域開発論』」, 『地理学評論』第72A 卷6号, 日本地理学会, pp. 391-393, 1999.

今里悟之 「関戸明子著『村落社会の空間構成と地域変容』」, 『歴史地理学』第42卷4号, 歴史地理学会, pp. 43-46, 2000.

(2) 解説

小林 茂 「川喜田二郎におけるヒマラヤ研究の構想」, 川喜田二郎著作集10/『ヒマラヤの文化生態学』, 中央公論社, pp. 649 - 652, 1997.

小林 茂 「ネパールヒマラヤにみる多民族の共生と摩擦」, 酒井治孝編, 『ヒマラヤの自然誌』, 東海大学出版会, pp. 271 - 284, 1997.

小林 茂 「中近世における環東シナ海漂流漂着データベースの作製」, 『平成8年度年報』, 財団法人福武学術文化振興財団, pp. 81 - 85, 1997.

小林 茂 「朝鮮から琉球へ, 琉球から朝鮮への漂流年表」, 共著 小林 茂・松原孝俊 (九州大)・六反田豊 (九州大), 『歴代宝案研究』第9号, 沖縄県教育委員会, pp. 73 - 136, 1998.

小林 茂 「福岡藩の元禄国絵図」, 西日本文化協会編, 『福岡県史/通史編/福岡藩(1)』, 福岡県, pp. 284

- 285, 1998.

- 小林 茂 「黒田五十二万石『両市中繁栄』の城下町」, 『熊本・九州の城下町／城下町古地図散歩』第7号, 平凡社, pp. 16 - 30, 1998.
- 小林 茂 「ネパール丘陵地帯におけるマラリアに対する適応と遺伝性貧血に関する研究」, 川崎晃一編, 『ネパールにおける高血圧発症要因の比較疫学的研究』第5報, 九州大学健康科学センター, pp. 39-50, 1999.
- 小林 茂 「地形図と南西諸島の近代」, 地図資料編纂会編, 『大正・昭和琉球諸島地形図集成／解題』, 柏書房, pp. 27-33, 1999.
- 小林 茂 「ネパールの総選挙——その監視活動と結果——」, 『日本ネパール協会報』第155号, 日本ネパール協会, pp. 10 - 11, 1999.
- 小林 茂 「琉球王国をめぐる漂流漂着データベースの作製」, 『1997年度(前期)研究助成報告書』, 財団法人松下国際財団, pp. 16-17, 1999.
- Shigeru Kobayashi "Urban Development in the Osaka Plain," *Japan in East Asian Context / A Field Guide Book of Post-Congress Scientific Field Trips*, International Geographical Congress, Seoul, pp. 85-89, 2000.
- Shigeru Kobayashi "Tradition and innovation in Kyoto," *Japan in East Asian Context / A Field Guide Book of Post-congress Scientific Field Trips*, International Geographical Congress, Seoul, pp. 91-94, 2000.
- 小林 茂 「カトマンズ盆地の失われゆく文化財」, 日本ネパール協会編, 『ネパールを知るための60章』, 明石書店, pp. 239-241, 2001.
- 小林 茂 「太宰府の環境資料調査とそのテーマ」, 共著 磯 望(西南学院大)・小林 茂, 太宰府市史資料編纂委員会編, 『太宰府市史／環境資料編』, 太宰府市, pp. 1 - 4, 2001.
- 小林 茂 「学術資料としての正式2万分1地形図」, 地図資料編纂会編, 『正式二万分一地形図集成／関西編／解題』, 柏書房, pp. 28-31, 2001.
- 小林 茂 「最近のネパール情勢」, 『日本ネパール協会報』第169号, 日本ネパール協会, pp. 8 - 9, 2001.
- 小林 茂 「ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応に関する調査研究——研究の経過と成果——」, 小林 茂編, 『ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応に関する調査研究／平成12-13年度科学研究費補助金(基盤研究[B][1]海外学術研究)研究成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-10, 2002.
- 今里悟之 「学界展望(2000年1月~12月)・村落」, 『人文地理』第53巻3号, 人文地理学会, pp. 64-67, 2001.

(3) 辞典項目

- 堤 研二 「島根県」, 永原慶二ほか編『日本歴史大事典』第2巻, 小学館, pp. 413-414, 2000.
- 堤 研二 「斐伊川」, 永原慶二ほか編『日本歴史大事典』第3巻, 小学館, p. 435, 2001.
- 堤 研二 「松江」, 永原慶二ほか編『日本歴史大事典』第3巻, 小学館, p. 750, 2001.
- 堤 研二 「温泉津」, 永原慶二ほか編『日本歴史大事典』第3巻, 小学館, p. 1017, 2001.

(4) その他(エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 小林 茂 「九州国立博物館を考える——多彩な民衆交流展示を——」, 朝日新聞(西部本社版), 朝日新聞西部本社, p. 2, 2000年4月22日.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 小林 茂 「『朝鮮から琉球へ, 琉球から朝鮮への漂流年表』の作成」, 共同 小林 茂・松原孝俊(九州大)・森川哲雄(九州大)・六反田豊(九州大), 第7回中琉歴史関係国際学術会議, 剣潭海

外青年活動中心／台北市，1998年11月1日。

Shigeru Kobayashi “Two strategies to cope with small pox in the Ryukyu Islands during the Tokugawa Era,” 共同 Shigeru Kobayashi・Tomoki Nakaya (Ritsumeikan University), International Geographical Union, 29th International Geographical Congress, COEX / Seoul, 2000年8月18日。

小林 茂 「琉球王府の対天然痘戦略と漂流民」，単独，第8回琉中歴史関係国際学術会議，エッカホテル／那覇，2000年11月4日。

Shigeru Kobayashi “The prevalence of alpha-thalassemia in correlation with malaria endemicity in a lower hill area in Nepal,” 共同 Shigeru Kobayashi・Shinjiro Hamano (Kyushu University)・Yasuyoshi Sakai (Kyushu University)・Hiroaki Shibata (Kyushu University)・Hiroyasu Furuumi (Kyushu University)・Toshiyasu Endo (Kyushu Women’s College)・Supan Fucharoen (Khon Kaen University)・Taku Shirakawa (Kobe University)・Kaoru Nishiyama (Kobe University)・Sashi Sharma (Tribhuvan University)・Gopal P. Acharya (Tribhuvan University)・Terukazu Kawasaki (Kyushu University)・Yasuyuki Fukumaki (Kyushu University), Nepal Medical Association, 20th All Nepal Medical Conference, Birendra International Convention Centre / Kathmandu, 2001年3月2日。

Kenji Tsutsumi “A Most Uneven Developed Country, Japan: Depopulated Regions There,” 単独, The Inaugural International Conference of Critical Geography, University of British Columbia etc. / Vancouver, 1997年8月10日-13日。

Kenji Tsutsumi “Modernization, Industrialization and Regional Change in Japan: A Case of a Coal Mining Region: Panopticonization towards Space and Society in Modern Japan,” 単独, The 2nd International Conference of Critical Geography, University of Taegu / Taegu, 2000年8月9日-13日。

Kenji Tsutsumi “Public Administration to Depopulated Regions in Japan,” 単独, International Geographical Union, The 29th International Geographical Conference, COEX Seoul / Seoul, 2000年8月15日。

(2) 国内学会

小林 茂 「歴史災害研究の資料と視角」，単独，歴史地理学会第182回例会，国学院大学／東京都，1999年3月25日。

小林 茂 「朝鮮－琉球間の漂流民の送還と自力回航」，単独，史学会シンポジウム「近世東アジアの漂流民と国家」，東京大学文学部／東京都，1999年7月24日。

小林 茂 「近世の南西諸島における天然痘の流行パターンと人痘法の施行」，単独，歴史地理学会，第42回大会，立命館大学／京都市，1999年6月6日。

小林 茂 「シンポジウム『災害・防災への歴史地理学的アプローチ』趣旨説明」，共同 小林 茂・磯望（西南学院大），歴史地理学会，第43回歴史地理学会大会，島原文化会館／島原市，2000年5月28日。

堤 研二 「第2回国際批判地理学会の概要」，単独，日本地理学会批判地理学研究グループ部会，敬愛大学／千葉県佐倉市，2001年3月28日。

(3) 研究会

Kenji Tsutsumi “Depopulated Region in Japan: A Case Study on Former Coal Mining Region, Takashima, Nagasaki Prefecture, Japan,” 単独, The International Symposium on the Future of Small Society in a Dynamic Economy, University of Karlstad / Karlstad, 1997年5月11日-14日。

Kenji Tsutsumi “Development of the Settlement System in the Context of Sustainable Regional Development: A Case of Peripheral Region,” 単独, The 8th Japanese-German Geographical

Conference, 八王子セミナーハウス／東京都八王子市, 1998年3月16日.

Kenji Tsutsumi “Industrialization and Spatial Integration in Modern Japan,” 単独, The East Asia Regional Conference in Alternative Geography, 慶州教員共済組合会館／Kyongju, 1999年1月23日-26日.

Kenji Tsutsumi “Challenges from Depopulated Regions,” 単独, The International Symposium: Local Knowledge and Innovation: Enhancing the Substance of Non-Metropolitan Regions, 鳥取大学／鳥取県鳥取市, 1999年5月11日-14日.

堤 研二 「ICGG テグについて」, 単独, 日本地理学会 社会地理学研究グループ研究会, KKR 白浜・美浜荘／和歌山県西牟婁郡白浜町, 2000年1月29日-31日.

Kenji Tsutsumi “Industrialization and Panopticonization towards Space and Society in Modern Japan: A Case of a Coal Mining Region,” 単独, The Osaka Workshop for Frontiers of Asian Geographies, 大阪市立大学／大阪府大阪市, 1999年8月16日-17日.

Kenji Tsutsumi “Regional Functions and Information Technology in Depopulated Areas: Some Cases in Japan,” 単独, The International Symposium on Communication and Regional Development, University of Karlstad / Karlstad, 2001年9月17日-19日.

堤 研二 「明治・大正・昭和の太宰府軌道（馬車鉄道）——近代の鉄道と地域構造——」, 単独, 太宰府を語る会・第517回例会, 太宰府天満宮文華館／福岡県太宰府市, 2001年5月26日.

堤 研二 「人間・環境・地域社会——過疎地域研究の視座から——」, 単独, 2001年度大阪大学地球総合工学シンポジウム「大阪大学は地球を救うことに貢献できるか?——持続可能な発展を目指して——」, 大阪大学吹田キャンパス・銀杏会館／大阪府吹田市, 2001年12月5日.

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

堤 研二 「環境利用と地域形成」, 単独, 平成9年度・和鋼博物館講座11月例会, 安来市立和鋼博物館／島根県安来市, 1997年11月16日.

堤 研二 「地域社会と教育：西城における取り組みと問題の整理」, 単独, 第2回・西城町の活性化と教育を考えるシンポジウム, 西城町 Will ホール／広島県比婆郡西城町, 2000年11月16日.

堤 研二 「近代の地方鉄道と地域構造——太宰府馬車鉄道を事例として——」, 単独, 太宰府市史研究会, 太宰府市ふるさと文化館／福岡県太宰府市, 2000年11月18日.

堤 研二 「隠岐空港整備・利用促進に関する総合調査私案」, 単独, 隠岐空港整備利用促進協議会理事会, 島根県隠岐支庁／島根県隠岐郡西郷町, 2001年1月13日.

堤 研二 「地域連携教育の動向と課題」, 単独, 西城町の活性化を考える教育懇話会, 西城町山村開発センター／広島県比婆郡西城町2002年3月18日.

堤 研二 「温泉地区ダム周辺地域活性化について」, 単独, 島根県中山間地域づくり支援ブレンバンク派遣事業, 島根県大原郡木次町温泉公民館／島根県大原郡木次町, 2001年10月4日.

今里悟之 「伊根町新井の土地の名・海の名・風の名」, 単独, 2000年度丹後地域文化オープンカレッジ・東部地区現地報告会, みやづ歴史の館／京都府宮津市, 2001年2月10日.

(5) その他

堤 研二 「大学から見た高専教育——学生指導の立場から——」, 単独, 国立佐世保工業高等専門学校講演, 国立佐世保工業高等専門学校・学生主事室／長崎県佐世保市, 2002年3月27日.

2. 教員の受賞歴

堤 研二, 1997年度「地域地理学会賞」, 地域地理科学学会, 人口移動・過疎地域・産業近代化などに関する実証的および理論的な一連の研究, 1997年7月6日.

【IV 教員による競争的資金獲得】(1997～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

- 平成11年度課題番号：11113101特定領域研究117「南アジアの変動」A03, 公募研究, 研究代表者：小林 茂『南アジアの環境変化とマラリアに関する文化的生物学的適応』 1700000円
- 平成12年度課題番号：12575016 基盤研究(B)(1) 研究代表者：小林 茂 『ネパールにおけるマラリアに対する文化的, 生物学的研究』 4800000円
- 平成13年度課題番号：12575016 基盤研究(B)(1) 研究代表者：小林 茂 『ネパールにおけるマラリアに対する文化的生物学的研究』 2300000円
- 平成10年度課題番号：10680082 基盤研究(C)(2) 研究代表者：堤 研二『地域空間の形成と変動に関する実証的および理論的研究』 1400000円
- 平成11年度課題番号：10680082 基盤研究(C)(2) 研究代表者：堤 研二『地域空間の形成と変動に関する実証的および理論的研究』 800000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

- 平成9年度 第18回日本生命財団出版助成 主編者：小林 茂 共編者3名, 書名等：『福岡平野の古環境と遺跡立地』, 九州大学出版会 2300000円
- 平成9年度(1997, 10-1998, 9) 松下国際財団研究助成 研究代表者：小林 茂 研究分担者4名『琉球王国をめぐる漂流・漂着データ・ベースの作成』 1300000円
- 平成12年度(2000. 12-2001. 11) 日本証券奨学財団研究助成(経済学分野) 研究代表者：堤 研二, 研究分担者：なし 『人口減少・高齢化地域における生活機能・社会経済的地域機能の実態とIT支援』 900000円
- 平成12年度 国際研究集会派遣研究員 派遣者氏名：小林茂 研究集会：29th International Geographical Congress, Seoul 125000円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

小林 茂

- 日本南アジア学会・編集委員 1996年10月～1998年9月
- 日本国際地図学会・第18期評議員 1997年2月～1999年2月
- 日本地理学会・1997年度研究奨励賞受賞候補者選考委員 1997年4月～1998年3月
- 日本地理学会・1998年度研究奨励賞受賞候補者選考委員長 1998年4月～1999年3月
- 人文地理学会・協議員 1998年11月～2000年10月
- 人文地理学会・編集委員 1999年11月～2000年10月
- 人文地理学会・評議員 2000年11月～2002年10月
- 人文地理学会・編集委員 2000年11月～2001年10月
- 農耕文化研究振興会・『農耕の技術と文化』編集委員 2001年4月～現在

堤 研二

- 人文地理学会・協議員 1998年11月～2000年10月, 2000年11月～2002年10月
- 人文地理学会・庶務委員 1999年11月～2000年10月

人文地理学会・地理思想研究部会 世話人 1999年11月～2000年10月, 2000年11月～2001年10月

人文地理学会・地理思想研究部会 世話人代表 2001年11月～現在

人文地理学会・地理学ウィーク企画委員 2001年11月～2002年10月

今里悟之

人文地理学会・集会委員 2000年11月～現在

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

小林 茂 教授

1 学期 人文地理学特殊講義 ネパール・ヒマラヤの資源利用と環境保全

2 学期 人文地理学特殊講義 人間——環境関係研究の展開

1 学期 人文地理学講義 ヒマラヤの環境問題

2 学期 人文地理学講義 文化生態学と政治生態学

通年 人文地理学博士論文作成演習 人文地理学の諸問題 (堤助教授と共同)

通年 人文地理学修士論文作成演習 人文地理学の諸問題 (堤助教授と共同)

堤 研二 助教授

2 学期 人文地理学特殊講義 マージナル・リージョンの研究

2 学期 人文地理学講義 人口移動と地域変動の研究

通年 人文地理学博士論文作成演習 人文地理学の諸問題 (小林教授と共同)

通年 人文地理学修士論文作成演習 人文地理学の諸問題 (小林教授と共同)

石川義孝 講師 (非常勤講師・京都大学)

1 学期 人文地理学特殊講義 アジアの人口移動

藤田裕嗣 講師 (非常勤講師・神戸大学)

2 学期 歴史地理学 特殊講義日本中世における流通システム論

松山利夫 講師 (非常勤講師・国立民族学博物館)

1 学期 地誌学特殊講義 オーストラリア先住民の神話・伝承に関する地誌学的な分析の試み

相馬秀廣 講師 (非常勤講師・奈良女子大学)

2 学期 自然地理学特殊講義 自然環境の地理学

2. 学部授業担当

小林 茂 教授

1 学期 地誌学演習 野外調査の基本技術

1 学期 人文地理学講義 ヒマラヤの環境問題

2 学期 人文地理学講義 文化生態学と政治生態学

2 学期 人文地理学演習 人文地理学文献講読

通年 人文地理学演習 人文地理学卒論演習 (堤助教授と共同)

堤 研二 助教授

1 学期 人文地理学演習 人文地理学基礎演習 I

2 学期 人文地理学演習 人文地理学基礎演習 II

1 学期 人文地理学演習 人文地理学文献演習

2 学期 人文地理学講義 人口移動と地域変動の研究
通年 人文地理学演習 人文地理学卒論演習 (小林教授と共同)

石川義孝 講師 (非常勤講師・京都大学)

1 学期 人文地理学講義 アジアの人口移動

藤田裕嗣 講師 (非常勤講師・神戸大学)

2 学期 歴史地理学講義 日本中世における流通システム論

松山利夫 講師 (非常勤講師・国立民族学博物館)

1 学期 地誌学講義 オーストラリア先住民の神話・伝承に関する地誌学的な分析の試み

3. 共通教育担当

堤 研二 II セメスター 人文地理学セミナー 金・4 基礎セミナー

小林 茂 II セメスター 人文地理学基礎 B 月・2 専門基礎

4. 他大学における集中講義等

小林 茂 立命館大学大学院文学研究科 前期 人文科学の主旨問題 V 演習

後期 人文科学の主旨問題 VI 演習

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：石川義孝 (京都大学大学院文学研究科教授)

人文地理学教室の研究活動と業績に関して高く評価できるのは、以下の諸点である。論文発表等から見た教官・院生による研究が多彩かつ意欲的であり、先見性・実証性・持続性という点で優れている。また、世界の人文地理学のフロンティアに位置する諸テーマと問題意識を共有しつつ、研究が展開されている。国際学会での口頭発表や、隣接の他分野あるいは国外の研究者との共同研究が多いことも、研究の波及性という点で評価しうるし、科学研究費や民間からの競争的資金の獲得に成功している点も注目される。さらに、教官組織のまとまりがよく、学部学生・院生の教育が長期的視野からなされているし、教官の学会活動に対する貢献も明確である。

しかしながら、問題点がないわけではない。論文発表数が多いにもかかわらず、現段階では、それらが単著の研究書として刊行されておらず、研究の体系性という点でやや難がある。院生の論文発表が少なく、博士の学位の授与が皆無であった点も、残念である。また、研究成果が閲読制度のある雑誌 (学会誌) に掲載されている例が少ない。わが国の人文地理学の分野では、院生の就職にさいして、国内の主要学会誌に *refereed paper* を何本発表しているかが、決定的に重要である。教官の立場からは、院生に *refereed paper* の発表を求めざるを得ないが、教官自身が率先して範を示すことが望ましい。教官による国際学会での口頭発表の成果も、できるだけ国際的に著名な地理学雑誌に寄稿すべきである。

とはいえ、1997年に着任された小林健太郎教授がまもなく逝去されたために、その後着任された小林 茂教授・堤 研二助教授が、教室の再建に多大なエネルギーをさかねばならなかった事

情も、斟酌される必要がある。しかし、教室の教育体制がようやく軌道に乗り、また、関連するインフラも整備されつつある模様なので、近い将来、上述の問題点が克服され、一層優れた研究業績が刊行されることを期待したい。

3-12 日本文学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

日本文学専門分野では、隣接分野で、学部では同一専修を構成する国語学、また隣接専門分野の比較文学と連携し、日本語・文化の諸相を、古代から現代まで、幅広い視野に立った教育・研究を行う。

各時代（古代、中世、近世、近・現代等）・各ジャンル（物語、小説、和歌、詩、説話、日本漢文学等、韻文・散文の諸相に渉る）に及ぶ教員の専門分野を活かし、幅広い視点から演習と講義を中心とするカリキュラムで教育を行う。

系統だった、また客観的な視野での教育・研究を推進するため、全教員・全学生の参加する卒業論文のための中間発表会、修士論文作成の中間発表会を国語学・比較文学と合同で行う。

各教官は授業以外に研究会を組織することもあり、また外部の研究会に院生とともに出席し、広い視野の他分野の研究者とも交流を図る。それらの成果は内外の学界に広く公表する。

国語学とともに大阪大学国語国文学会を組織し、同学会誌『語文』を刊行し、卒業生や名誉教授との交流の場としての国語国文学会を年に一度開催し、大学院生・学部生の教育研究の交流を促進する。

各国からの要請にも応え、アジア、アメリカ、ヨーロッパ各国の留学生を受け入れ、博士論文作成を指導する。また、本国で博士号を取得するカリキュラムの国（米国など）の学生に対しては、ディサテーション・リサーチの1～2年の研究生としての留学にも応える。

学生との交流、また、客員研究員なども交え幅広い意見の交流を行うべく、年に一度、春と夏（夏は1泊～2泊）に、研修旅行・ハイキングを行い、日本文学関係の各種の研究資料や臨地調査を実施する。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 3 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：伊井春樹 後藤昭雄 出原隆俊

助教授：飯倉洋一 荒木 浩

助手：海野圭介

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数								
学部*	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	22	26	0	4	0	1	1	6

* (国語学と合わせて) ※うち留学生 14名, 社会人学生 10名

3. 修了生・卒業生 (1997~2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	18	5	6	3	4
'98	17	5	2	4	2
'99	18	9	2	4	1
'00	16	7	4	2	3
'01	16	7	1	5	2
小計	85	33	15	18	12

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】(1997~2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

	課程博士	論文博士	計
'97	3	1	4
'98	3	1	4
'99	4	1	5
'00	2	0	2
'01	2	2	4
計	14	5	19

1-2. 博士論文の提出者, 題目, 審査教官等

(課程博士)

- 阿部真弓 「『弁内侍日記』の総合的研究」, 1998年3月
主査 伊井春樹, 副査 天野文雄, 副査 荒木浩
- 滝川幸司 「平安前期文壇の研究」, 1998年3月
主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 浅見洋二
- 青田寿美 「鷗外初期文芸の研究」, 1998年3月
主査 出原隆俊, 副査 伊井春樹, 副査 中村元保
- 鷲原知良 「近世後期漢詩壇の研究」, 1998年9月
主査 後藤昭雄, 副査 渡邊志津子, 副査 福島吉彦
- 高原早苗 「中世楽書と説話伝承に関する研究」, 1999年3月
主査 伊井春樹, 副査 天野文雄, 副査 荒木浩
- 新稲法子 「繁昌記もの研究」, 1999年3月
主査 後藤昭雄, 副査 渡邊志津子, 副査 福島吉彦
- 申智淑 「有島武郎文学における下層の表象」, 1999年9月

- 主査 出原隆俊, 副査 伊井春樹, 副査 玉井暲
 海野圭介 「藤原定家撰述歌学書の基礎的研究」, 2000年3月
 主査 伊井春樹, 副査 天野文雄, 副査 荒木浩
 加藤昌嘉 「源氏物語のコトバと機構」, 2000年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 柏木隆雄
 中川照将 「『源氏物語』における物語の文法」, 2000年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 内藤高
 山崎ゆみ 「元禄演劇の研究」, 2000年9月
 主査 出原隆俊, 副査 天野文雄, 副査 伊井春樹
 松原一義 「『塵荊抄』の研究」, 2001年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 荒木浩
 チョーティブラカーイ・アッタヤ 「『源氏物語』における出家」, 2002年3月
 主査 伊井春樹, 副査 出原隆俊, 副査 荒木浩
 謝立群 「『徒然草』における中国隠逸思想の影響」, 2002年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 荒木浩
 川崎佐知子 「『狭衣物語』享受史論究」, 2002年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 飯倉洋一

(論文博士)

- 松原秀江 「薄雪物語と御伽草子・仮名草子」, 1998年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 渡邊志津子
 片岡利博 「物語文学の本文と構造」, 1999年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 荒木浩
 藤田真一 「蕪村 俳諧遊心」, 2000年3月
 主査 渡邊志津子, 副査 伊井春樹, 副査 奥平俊六
 伊藤鉄也 「源氏物語本文の研究」, 2002年3月
 主査 伊井春樹, 副査 後藤昭雄, 副査 荒木浩
 小林健二 「中世劇文学の研究——能と幸若舞曲——」, 2002年3月
 主査 伊井春樹, 副査 天野文雄, 副査 荒木浩

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

	学会誌	紀要	講座等 機関紙	学術的 商業誌	論文集	計
'97	3	4	11	6	7	31
'98	3	8	15	6	2	34
'99	7	5	18	4	7	41
'00	5	2	9	0	19	35
'01	10	4	8	0	6	28
計	28	23	61	16	41	169

2-2. 口頭発表

	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	8	8	1	0	17
'98	0	6	9	0	0	15
'99	0	12	14	2	0	28
'00	0	13	11	1	0	25
'01	7	10	13	0	1	31
計	7	49	55	4	1	116

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 阿部真弓 「往生伝としての『とはずがたり』試論——夢を媒介として——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 7, 1990年
- 阿部真弓 「『とはずがたり』に見られる『夜の寝覚』摂取の様相——人物造型を中心に——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 11, 1992年
- 阿部真弓 「『弁内侍日記』作者の執筆意識——天候記事をめぐって——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 61, 1993年
- 阿部真弓 「『弁内侍日記』における人物描写——九条家を中心に——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 14, 1993年
- 阿部真弓 「『松浦宮物語』に見える須磨, 明石巻の影」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 15, 1994年,
- 阿部真弓 「歌人弁内侍にとっての『弁内侍日記』試論」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 17, 1995年
- 阿部真弓 「『弁内侍日記』の描く栄枯と無常感——宝治元年章段の構想をめぐって——」, 大阪大学文学部『待兼山論叢』, 29, 1995年
- 阿部真弓 「『とはずがたり』におけるメタファーとしての月影——後深草院をめぐって——」, 『研究叢書188『とはずがたり』の諸問題』(和泉書院), 1996年
- 阿部真弓 「『弁内侍日記』の執筆時期に関する一考察」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 1, 1996年
- 阿部真弓 「『弁内侍日記』——「をかし」の日記——」, 『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂), 62. 5, 1997年
- 青田寿美 「『鴉外』の〈Tragödie〉観(上)——初期文芸評論を中心に——」, 京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』, 66-5, 1997年
- 青田寿美 「『鴉外』手記資料「詩学材料」に関する覚書」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 68, 1997年
- 青田寿美 「『鴉外』の〈Tragödie〉観(下)——初期文芸評論を中心に——」, 京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』66-6, 1997年
- チョーティカプラカーイアッタヤ 「『源氏物語』藤壺の宮の出家」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 26, 1999年
- チョーティカプラカーイアッタヤ 「『源氏物語』における空蟬の出家」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 檀原みすず 「森鴉外のベルリン第三の下宿」, 森鴉外記念会『鴉外』, 67, 2000年
- 藤井由紀子 「『源氏物語』第一部の構造——〈ものさとし〉の機能をめぐって——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 23, 1998年
- 藤井由紀子 「『源氏物語』魂の系譜——「夢」と「物の怪」を視座として——」, 『古代中世文学論考』

- (新典社), 1, 1998年
- 藤井由紀子 「『しのびね物語』の基底——源泉としての『源氏物語』明石一族の物語——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 25, 1999年
- 藤井由紀子 「『静かなる』六条院——『源氏物語』藤裏葉巻の栄華の実相——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 27, 2000年
- 藤井由紀子 「『源氏物語』鈴虫巻の六条院——六条御息所の鎮魂を視座として——」, 中古文学会『中古文学』, 66, 2000年
- 藤井由紀子 「御陵の桐壺帝」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 藤井由紀子 「六条院崩壊の論理——『源氏物語』若菜巻における——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 30, 2001年
- 藤井由紀子 「須磨の暴風雨——『源氏物語』における神々の諸相——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 66, 2001年
- 泉 由美 「泉鏡花「湯島詣」論——心象風景としての湯島——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 31, 1997年
- 泉 由美 「泉鏡花「国貞ゑがく」論——姫松の形象が意味するもの——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 70, 1998年
- 石原隆好 「石原正明の位置をめぐって」, 鈴屋学会『鈴屋学会報』, 16, 1999年
- 石原隆好 「『詩』の行方—寛政改革後の述斎と庭園」, 財団法人懐徳堂記念会『懐徳』, 69, 2001年
- 石原隆好 「泉勇八郎宛亀田鵬斎書簡」, 財団法人懐徳堂記念会『懐徳』, 69, 2001年
- 石原隆好 「林述斎と風月社」, 日本近世文学会『近世文藝』, 75, 2002年
- 加藤昌嘉 「連動する源氏物語——笛を吹くこと——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 21, 1997年
- 加藤昌嘉 「共鳴する源氏物語——花の枯れ枝をさしだすこと——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 69, 1997年
- 加藤昌嘉 「源氏物語蜻蛉巻の機構——六条院と明石一族——」, 中古文学会『中古文学』, 62, 1998年
- 加藤昌嘉 「『しのびね物語』のコトバの網——王朝物語世界の中の——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 25, 1999年
- 加藤昌嘉 「源氏物語宿木巻の機構——反明石夕霧の力, 浮舟の力——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 27, 2000年
- 加藤昌嘉 「源氏物語夕霧巻の機構——致仕大臣一族と夕霧勢力圏——」, 『古代中世文学論考』(新典社), 4, 2000年
- 加藤昌嘉 「本文の世界と物語の世界」, 鈴木日出男・増田繁夫・伊井春樹編『源氏物語研究集成』(風間書房), 13, 2000年
- 加藤昌嘉 「源氏物語の中の手習巻という寄生体」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 川端咲子 「加賀掾没後の宇治一派——加賀掾の門弟を中心に」, 演劇研究会『演劇研究会会報』, 24, 1998年
- 川端咲子 「宇治一派の浄瑠璃場——山城少掾文庫蔵の抜本について」, 藝能史研究会『藝能史研究』, 145, 1999年
- 川端咲子 「宇治一派の末流——ば—宇治姓の人形遣を中心に」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 33, 1999年
- 川端咲子 「宇治一派の浄瑠璃と歌舞伎——浄瑠璃『傾城浅間嶽』について」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 74, 2000年
- 川端咲子 「笹野文庫目録」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 77, 2001年
- 川崎佐知子 「謡曲『狭衣』についての考察」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 2, 1998年
- 川崎佐知子 「『狭衣下紐』の基礎資料と注釈方法」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 73, 1999年
- 川崎佐知子 「河村秀根『狭衣入紐』について——自筆稿本跋文の解釈と作成事情を中心に——」, 伊井

- 春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 川崎佐知子 「里村紹巴と奈良連歌——『狭衣物語』享受史研究の一助として——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 34, 2000年
- 川崎佐知子 「紹巴所用『狭衣物語』とその意義——伝本研究への一階梯として——」, 中古文学会『中古文学』, 67, 2001年
- 桑原真臣 『安部公房文学研究参考文献目録』, 著書, 2000年
- 箕浦尚美 「お伽草子と女人往生の説法——『ゑんがく』『花情物語』『胡蝶物語』を中心に——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 23, 1998年
- 箕浦尚美 「『しぐれ』考」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 25, 1999年
- 箕浦尚美 「『有善女物語』考」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 74, 2000年
- 箕浦尚美 「『大仏供養物語』考」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 箕浦尚美 「『大仏の御縁起』考」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 35, 2001年
- 中井賢一 「浮舟の精神病理と宿世観」, 『王朝文学研究誌』, 11, 2000年
- 中川真弓 「第二種七卷本『宝物集』「跋文」考——平康頼と藤原親盛をめぐって——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 29, 2001年
- 中川真弓 「『明恵上人夢記』に見える上覚と文覚」, 『〈心〉と〈外部〉——表現伝承信仰と明恵『夢記』——』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座), 2002年
- 中川照将 「八宮の「本心」と薫の「誤解」——薫に見る「昔物語」からの逸脱序章——」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 22, 1997年
- 中川照将 「『しのびね物語』における人物の属性」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 25, 1999年
- 中川照将 「宇治十帖における薫の主題」, 『源氏物語研究集成』(風間書房), 2, 1999年
- 中川照将 「薫の「誤解」と大君の結婚拒否」, 『古代中世文学論考』(新典社), 3, 1999年
- 中川照将 「薫の恋愛と「箏の琴」——宇治十帖における「合奏」の意味——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 73, 1999年
- 中川照将 「青表紙本の出現とその意義」, 『源氏物語研究集成』(風間書房), 13, 2000年
- 中川照将 「陽明文庫本『源氏物語』における「男」と「女」——源氏と六条御息所を中心に——」, 『本文研究 考証情報資料』, 3, 2000年
- 中原香苗 「豊原統秋撰『舞曲之口伝』考」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 2, 1999年
- 中原香苗 「『體源鈔』の生成」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 中原香苗 「楽器名物譚の伝承」, 説話文学会『説話文学研究』, 34, 1999年
- 中村一夫(共著) 『源氏物語別本集成』(おうふう), 10, 2000年
- 中村一夫 「日本語学日本文学研究のための情報処理——「言語とコンピュータ I」の授業報告——」, 『情報教育年報』, 6, 2000年
- 中村一夫 「源氏物語の心情表現——宇治十帖と「心細し」の内なる関連性——」, 『本文研究 考証情報資料』(和泉書院), 3, 2000年
- 中村一夫(共著) 『源氏物語別本集成』(おうふう), 11, 2000年
- 中村一夫 「源氏物語宇治十帖の本文——別本の待遇表現法を中心にして——」, 『古代中世文学論考』(新典社), 2001年
- 中村一夫(共著) 『源氏物語別本集成』(おうふう), 12, 2001年
- 中村一夫 「保坂本源氏物語の人物造形の方法——別本の待遇表現法を中心にして——」, 『本文研究 考証情報資料』, 4, 2001年
- 中村一夫 「日本文学日本語学専攻学生のための情報処理教育——「国文学情報処理論」(関西大学)——」, 『日本語研究センター報告』, 10, 2002年
- 中村友美 「『現存和歌六帖第二』の研究」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 22, 1997年
- 中村友美 「『しのびね物語』の引歌」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 25, 1999年
- 中村友美 「『東撰和歌六帖』考——出典他出と歌題をめぐって——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 73, 1999年

- 中山一麿 「明恵上人仮託偽書『邪正問答抄』とその伝本」, 『佛教文学』(佛教文学会), 26, 2002年
- 中山一麿 「『邪正問答抄』解説と翻刻」, 『<心>と<外部>——表現伝承信仰と明恵『夢記』——』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座), 2002年
- 仁木夏実 「藤原忠通「読新楽府詩群」考」, 和漢比較文学会『和漢比較文学』, 24, 2000年
- 尾崎千佳 「晩年の宗因——宗因伝記研究をめぐる覚書——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 71, 1998年
- 尾崎千佳 「西山宗因年譜稿」, 天理図書館『ビブリア』, 111, 1999年
- 尾崎千佳 「宗因顕彰とその時代」, 俳文学会『連歌俳諧研究』, 97, 1999年
- 謝立群 「『徒然草』における盛親僧都像と中国の隠逸者」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 29, 2001年
- 斎藤理生 「太宰治『眉山』論」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 77, 2001年
- 斎藤理生 「太宰治『吉野山』論」, 解釈学会『解釈』, 2002年
- 沈亜琴 「『奥の細道』発句の漢訳をめぐる諸問題」, 『和漢比較文学』, 25, 2000年
- 滝川幸司 「花宴考」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 21, 1997年
- 滝川幸司 「儀式と和歌——公宴詩会との関わりにおいて——」, 中古文学会『中古文学』, 59, 1997年
- 滝川幸司 「詩臣としての菅原道真」, 『詞林』, 22, 1997年
- 海野圭介 「伝藤原為家筆『顕注密勘』断簡(卷一春上) 解題・影印・翻刻」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 68, 1997年
- 海野圭介 「『三代集之間事』考(上)」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 22, 1997年
- 海野圭介 「『三代集之間事』考(下)」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 23, 1998年
- 海野圭介 「中院家旧蔵古今和歌集注釈関連資料考(一): 中院通茂・中院通躬・野宮定基との関わりを持つ典籍を中心に」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 26, 1998年
- 海野圭介 「僻案抄の伝本と生成」, 和歌文学会『和歌文学研究』, 79, 1999年
- 海野圭介 「『僻案抄』古筆資料の検討」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 3, 2001年
- 海野圭介 「後水尾院の古今伝授: 寛文四年の伝授を中心に」, 『講座平安文学論究』(風間書房), 15, 2001年
- 海野圭介 「仁木充長所校本覚書」, 『日本文学史論(島津忠夫先生古稀記念論集)』(世界思想社), 1997年
- 海野圭介 「『顕注密勘』古筆資料の検討」, 伊井春樹編『古代中世文学研究論集』(和泉書院), 2, 1999年
- 海野圭介 「東山御文庫蔵『古今集相傳之箱入目録』同『追加』考: 古今伝受後の後西院による目録の作成めぐって」, 『古代中世文学論考』(新典社), 6, 2001年
- 鷲原知良 「大沼枕山の太平頌述——幕末文人の理想世界——」, 『江戸文学(ぺりかん社)』, 18, 1997. 11,
- 鷲原知良 「『英草紙』第一篇の「武蔵野」について」, 『混沌(混沌會)』, 21, 1997年
- 屋木瑞穂 「樋口一葉「琴の音」に関する一考察——ヴィクトル・ユゴー『哀史(ラ・ミゼラブル)』との比較を通して——」, 三重大学日語学文学会編『三重大学日本語学文学』, 10, 1999年
- 屋木瑞穂 「樋口一葉「闇桜」の位相——<筒井筒>変奏——」, 広島大学近代文学研究会編『近代文学試論』, 38, 2000年
- 屋木瑞穂 「記憶の風景——樋口一葉「雪の日」論——」, 大阪大学国語国文学会編『語文』, 77, 2001年
- 米田真理子 「『しのびね物語』の構造——「長恨歌」を視点として」, 大阪大学古代中世文学研究会『詞林』, 26, 1999年
- 米田真理子 「高山寺外所蔵夢記をめぐる二つの考察——署名のある夢記, 明恵と長房の周辺——」, 『<心>と<外部>——表現, 伝承, 信仰と明恵『夢記』——』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座), 2002年
- 米田真理子 「明恵上人夢記山外本目録続貂」, 『<心>と<外部>——表現, 伝承, 信仰と明恵『夢記』——』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座), 2002年

(2) 発表

- 阿部真弓 「『とはずがたり』における自己造型——『夜の寢覚』撰取の一側面として——」, 中世文学会秋季大会, 『中世文学会秋季大会 (第七十三回大会要旨集)』, 高志会館/富山市,
- 壇原みすず 「森鷗外『文つかひ』の再検討」, 第13回阪神近代文学会, 要旨集, 1997年7月, 親和女子大学
- 壇原みすず 「与謝野晶子と関西文壇の形成」, 小林天眠生誕120周年記念パネルディスカッションパネリスト, 1997年11月, 京都府立総合資料館
- 壇原みすず 「鷗外の〈絵画論〉と『うたかたの記』——「ローレイの図」の完成について——」, 日本近代文学会秋季大会, 2000年10月, 実践女子大学
- 藤井由紀子 「六条院世界の終末——『源氏物語』鈴虫巻の構造をめぐって——」, 中古文学会2000年度春季大会, 『中古文学会2000年度春季大会要旨集』, 2000年5月14日, 大妻女子大学大妻講堂/東京都千代田区
- 泉 由美 「泉鏡花の草双紙受容——「葉草取」と「児雷也豪傑譚」——」, 日本近代文学会関西支部春季大会, 要旨集, 1998年, 関西学院大学
- 石原隆好 「石原正明の国学」, 第十八回鈴屋学会大会研究発表会, 鈴屋学会報16号, 1999年12月, 本居宣長記念館
- 石原隆好 「林述斎と風月社」, 平成十三年度日本近世文学会春季大会, 平成十三年度日本近世文学会春季大会要旨集, 2002年1月
- 加藤昌嘉 「源氏物語蜻蛉巻の機構——六条院と明石一族——」, 1998年中古文学会春季大会『1998年中古文学会春季大会要旨集』, 1998年5月, 立教大学/東京都豊島区
- 川端咲子 「四条道場芝居考」, 藝能史研究会第三十八回大会, 要旨集, キャンパスプラザ京都
- 川崎佐知子 「紹巴所用『狭衣物語』とその意義——『狭衣下紐』を手がかりに——」, 平成十二年度全国大学国語国文学会中古文学会秋季合同大会, 『平成十二年度全国大学国語国文学会中古文学会秋季合同大会要旨集』, 2000年10月15日, 甲南女子大学/兵庫県神戸市
- 中川照将 「『夜の寢覚』第一部の構造——「人違へ」をめぐる物語を中心に——」, 2001年度中古文学会秋季大会, 『2001年度中古文学会秋季大会要旨集』, 2001年, 九州大学/福岡県福岡市
- 中原香苗 「名楽器譚の伝承」, 説話文学会1998年大会, 『説話文学会1998年大会要旨集』, 1998年6月, 日本女子大学/東京都文京区
- 中村一夫 「二十一世紀の文学研究とコンピュータ 中古」, 『国文学研究資料館第6回シンポジウム コンピュータ国文学 (同講演集)』, 日本文学, 2000年12月, 国文学研究資料館/東京都品川区
- 中山一磨 「明恵上人仮託偽書『邪正問答抄』とその伝本」, 佛教文学会大会, 『佛教文学会大会要旨集』, 2001年6月3日, 大谷大学/京都市
- 仁木夏実 「東大寺図書館蔵『遁世述懐抄』について」, 第19回和漢比較文学会大会, 『第19回和漢比較文学会大会要旨集』, 2000年9月, 信州大学/長野県松本市
- 尾崎千佳 「宗因顕彰とその時代」, 俳文学会第49回全国大会, 要旨集, 1997年10月, 梅光女学院大学 (山口県下関市)
- 尾崎千佳 「昌琢宗匠連歌会の構成とその展開——宗因の位置をめぐって——」, 平成11年度日本近世文学会秋季大会, 要旨集, 1999年11月, 相愛女子短期大学 (大阪府大阪市)
- 尾崎千佳 「宗因顕彰とその時代」, 財団法人柿衛文庫第9回柿衛賞授賞式, 財団法人柿衛文庫友の会ニュース, 2000年6月, 財団法人柿衛文庫 (兵庫県伊丹市)
- 廖 秀娟 「中島敦『弟子』論」, 2001年度阪神近代文学会冬季大会, 要旨集, 2001年12月8日, 関西学院大学
- 斎藤理生 「太宰治『眉山』論」, 日本近代文学会関西支部春季大会, 要旨集, 2001年6月, 佛教大学
- 海野圭介 「『僻案抄』の伝本と生成」, 和歌文学会第44回大会, 『和歌文学会第44回大会要旨集』, 1998年10月18日, 東洋大学/東京都文京区
- 米田真理子 「『徒然草』と仁和寺僧弘融——『訛述要秘鈔』『康秘』奥書から見えること——」, 201年度中世文学会秋季大会, 『2001年度中世文学会秋季大会要旨集』, 2001. 10. 7, 京都精華大学/京都市

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

尾崎千佳 第九回 柿衛賞 2000年6月 財団法人柿衛文庫

4. 日本学術振興会研究員採択状況 計 2 名

PD : 2名

'97年度: 0名 '98年度: 1名 '99年度: 0名 '00年度: 1名 '01年度: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 12 名

<内訳>

'97年度: 4名 '98年度: 2名 '99年度: 1名 '00年度: 3名 '01年度: 2名

1998年4月	阿部真弓	大阪大学文学部助手 (D 修了)
1998年4月	中本 大	立命館大学文学部助教授 (D 修了)
1998年4月	滝川幸司	奈良大学講師 (D 修了)
1999年4月	青田寿美	神戸女子大学講師 (D 修了)
1999年4月	伊藤鉄也	国文学研究資料館助教授 (D 修了)
2000年4月	正木ゆみ	京都女子短期大学講師 (D 中退, 就職後 D 修了)
2001年4月	阿部真弓	法政大学教養部講師 (D 修了)
2001年4月	尾崎千佳	山口大学講師 (D 中退)
2001年4月	加藤昌嘉	大阪大学文学研究科助手 (D 修了)
2002年4月	加藤昌嘉	国文学研究資料館助教授 (D 修了)
2002年4月	海野圭介	大阪大学文学研究科助手 (D 修了)

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997年度~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6 名

<内訳>

'97年度: 0名 '98年度: 1名 '99年度: 2名 '00年度: 2名 '01年度: 1名

<主な職業名・就職先等>

教職 5名, その他 1名(国会図書館司書)

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 6名

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 6名

10. 刊行物

- ・大阪大学国語国文学会(日本文学・国語学)『語文』(専門分野の機関誌) 年2回刊行
- ・大阪大学古代中世研究会『詞林』(専門分野の機関誌) 年2回刊行
- ・『古代中世文学研究論集』(既刊三冊)
- ・『大阪大学国際日本文学研究集会 講演とシンポジウム
国際化の中の日本文学研究——その課題と方法への模索』(2002年3月)(国際学会)

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- ・和漢比較文学会事務局(1995年11月～97年10月)(国内学会)
- ・和漢比較文学会第16回大会(1997年10月25, 26日)(国内学会)
- ・大阪大学国際日本文学研究集会
講演とシンポジウム 国際化の中の日本文学研究——その課題と方法への模索』
(2002年3月2日)(国際学会)

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

※(国語学専門分野ともに)

- ・大阪大学国語国文学会 1月, 1日間, 研究誌『語文』を年2回編集・発行

※(国語学, 比較文学専門分野とともに)

- ・卒業論文・修士論文中間発表会 10月, 3日間
- ・大学院研究発表会 9月, 11月, 各2日間
- ・大阪大学古代中世文学研究会第87回(1997年4月19日)～139回(2002年3月9日)まで,
53回, 各二名ずつ発表, のべ106発表

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

日本文学専門分野では, 隣接分野で, 学部では同一専修を構成する国語学, また隣接専門分野の比較文学と連携し, 学生の指導を行っている。特に秋期には大学院研究発表会を2回, 学部卒業論文発表会・大学院修士論文中間発表会を1回行い, 全教官・学生の参加のもと, のべ一週間に涉って, 幅広い視点から指導を行っている。その発表は, 学会発表に準じ, 予稿集の提出, 時間厳守の発表を課している。大学院生はその成果を踏まえ, 各研究会・学会での発表へと展開し,

一月の論文提出に備えている。学生はその成果を生かし、高い確率で優れた成果を論文として学会誌等に発表している。

教員が組織する研究会、また大学院生が自主的に企画する研究会は数多いが、特に、大阪大学古代中世文学研究会は、この5年間で第87回（1997年4月19日）～139回（2002年3月9日）まで、53回を数え、のべ106発表が行われた。その成果は多様な媒体に活字化されているが、本研究会の機関誌『詞林』も、年二回順調に刊行されており（2002年3月までに既刊30冊、以後継続中）、また特別号として『古代中世文学研究論集』も既刊3冊となった。

そうした研究・教育体制の有効性は、ここ5年で15名以上の博士論文取得者（課程博士）と、10名以上の学術研究機関への就職者を輩出していることで証明されるであろう。また、本専門分野では修士修了者の高度職業人としての養成にも腐心している。昨年度は国立国会図書館司書の就職者もあり、また、高校教員等教育機関への就職も、厳しい情勢の中、数人を送り出し続けている。

大学院生は総じて研究熱心であり、研究室は夜遅くまで活気にあふれている。その中、学会で高い評価を得る発表も生まれ、柿衛賞など、学術賞を在学中に受賞した者もいる。

教員はバランスよく各時代をカバーし、教育面では多様な演習・講義を提供している。ただし、大学の方針に制約があり、本専門分野には非常勤講師がきわめて少なく、近隣の京都大学・奈良女子大学などの数分の一にも満たない。そこで、研究会や学会を利用した多様な研究者との交流を院生に指導し、また多様な授業提供等、教員の最大限の負担によってそれはカバーされている。近年のグローバル時代を反映し、本専門分野には、ほぼ世界各国からの大学院生、大学院研究生、客員研究員などを受け入れている。留学生も順調に学位を取得しつつあり、また、本学で博士論文のための調査を進め、本国に帰って博士論文を書き上げる米国型の留学生も順調に研究を継続している。

グローバル化の問題は、しかし、研究交流の問題においても、また様々な地域から多様な目的や素地のもとに留学してくる学生達をどのように研究支援するか、という点においても、複雑ながら避けられない多くの問題を含んでいる。また、それは、カリキュラムを含めたファカルティ・デベロップメントの問題として、教員側にもさまざまな問題を突きつける。

本専門分野ではすでに『詞林』28号（2000年10月）において「小特集 留学生から見た日本文学研究」を企画し、各国における日本文学研究の状況を考察するなど、この問題を継続的に追求してきたが、去る2001年度末、本専門分野は、〈大阪大学国際日本文学研究集会 講演とシンポジウム国際化の中の日本文学研究——その課題と方法への模索〉（2002年3月）を開催し、海外研究者を中心とする講演・研究発表・シンポジウムを行った。その成果は伊井春樹編『大阪大学国際日本文学研究集会 講演とシンポジウム国際化の中の日本文学研究——その課題と方法への模索』（2002年3月）としてまとめられており、その問題提起には既に幾つかの反応もあった。今後はこの議論を踏まえて、留学生・海外日本文学研究者の研究支援によりよい応用がなされるよう努力したい。

本専門分野には、日本文学のコレクションとして赤木文庫他、古写本・版本等のレアブックが

数多く存在している。また、国語学との協力を含めた近年の努力によっても少しずつそれは増加しつつあるが、本専門分野では、それらを学界の共有財産とすべく、継続して調査・紹介している。特に、近年の成果として、『語文』誌70輯（1998. 5）に、「大阪大学文学部創立五十周年記念忍頂寺文庫特輯」と題して刊行し、忍頂寺文庫について、その成果の一端を公表した（青田寿美・内田宗一・尾崎千佳・川端咲子・近衛典子・富田志津子・福田安典（責任編集）・正木ゆみ・鷺原知良編著）。

国語学とともに大阪大学国語国文学会を組織し、一年一度学会を開催し、講演・発表を行っている。半期に一度雑誌『語文』（2002年3月時点で既刊77輯）を刊行し、その成果を公表した。学生との交流、また、客員研究員なども交え幅広い意見の交流を行うべく、年に一度、春と夏（夏は1泊～2泊）に、研修旅行・ハイキングを行い、日本文学関係の各種の研究資料や臨地調査を実施した。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 伊井春樹 「今鏡の文芸性——畠山本から流布本へ——」, 『今鏡／歴史物語講座』4巻, 風間書房, pp. 33-58, 1997年
- 伊井春樹 「保坂本源氏物語の世界」, 『源氏物語試論集』4巻, 勉誠社, pp. 3-22, 1997年
- 伊井春樹 「伝後光厳院筆『和歌一字抄』の本文」, 『鳥津忠夫先生古希記念論集』, 世界思想社, pp. 66-77, 1997年
- 伊井春樹 「源氏物語巢守巻関係の古筆切二種——源氏物語異伝に関する覚え書き——」, 『源氏物語と古代世界』, 新典社, pp. 323-337, 1997年
- 伊井春樹 「雲葉和歌集切捨遺」, 『本文研究』2巻, 和泉書院, pp. 1-19, 1998年
- 伊井春樹 「『狭衣物語』における月の描写の効用」, 『論考平安王朝の文学』, 新典社, pp. 219-234, 1998年
- 伊井春樹 「大島本源氏物語本文の意義と校訂方法」, 『論叢源氏物語』1巻, 新典社, pp. 32-65, 1999年
- 伊井春樹 「源氏物語の本文とは何か」, 『伊勢と源氏物語本文の受容』, 臨川書店, pp. 65-107, 1999年
- 伊井春樹 「源氏物語の表現——空の描写と夕暮れの季節——」, 『本文研究』3巻, 和泉書院, pp. 1-24, 2000年
- 伊井春樹 「王朝人の生活の中の絵画」, 『源氏物語絵巻とその周辺』, 新典社, pp. 278-300, 2001年
- 伊井春樹 「源語後考集の注釈の方法」, 『源氏物語の世界』, 風間書房, pp. 358-376, 2001年
- 伊井春樹 「源氏物語における人物の美的表現——「あて」「きよら」の周辺と本文——」, 『王朝文学の本質と変容』, 和泉書院, pp. 219-233, 2001年
- 伊井春樹 「成尋阿闍梨母」, 『紫苑叢書』2巻, 紫式部顕彰会, pp. 99-146, 1997年
- 伊井春樹 「玉鬘十帖の主題」, 『源氏物語研究集成』1巻, 風間書房, pp. 129-174, 1998年
- 伊井春樹 「顕綱とその周辺」, 『古代中世文学論考』1巻, 新典社, pp. 273-294, 1998年
- 伊井春樹 「『鳥歌合』の説話的世界」, 『説話論集』9集, 清文堂出版, pp. 275-311, 1999年
- 伊井春樹 「人物論研究の意義——史的展開と女三宮・柏木像をめぐって——」, 『源氏物語研究集成』5巻, 風間書房, pp. 1-43, 2000年
- 伊井春樹 「伝嵯峨本源氏物語の本文」, 『源氏物語研究集成』13巻, 風間書房, pp. 353-403, 2000年
- 伊井春樹 「源氏物語注釈書版本考」, 『源氏物語研究集成』14巻, 風間書房, pp. 347-407, 2000年

- 伊井春樹 「源氏物語における引歌表現の効用」,『源氏物語研究集成』9巻,風間書房,pp. 119-166, 2000年
- 伊井春樹 「情報発信としての源氏物語——CD-ROM 角川古典大観源氏物語(角川書店)によせて——」,『シンポジウム国文学講演集』,国文学研究資料館,pp. 18-27, 2000年
- 伊井春樹 「絵物語の製作とその享受——『源氏物語』蜚巻における物語論への視座——」,『源氏物語研究集成』7巻,風間書房,pp. 165-213, 2001年
- 伊井春樹 「源氏物語の生と死」,『生と死の文化史』,懐徳堂記念会,和泉書院,pp. 127-160, 2001年
- 伊井春樹 「野村美術館蔵『讃岐入道集』(顕綱集)について」,『野村美術館研究紀要』6号,野村美術館,pp. 82-108, 1997年
- 伊井春樹 「実資の夢,成尋の夢」,『<心>と<外部>』,大阪大学文学研究科,pp. 11-25, 2002年
- 伊井春樹 「成尋阿闍梨渡宋の屏風絵」,『本郷』10号,吉川弘文館,pp. 13-15, 1997年
- 伊井春樹 「情報化時代における『源氏物語』」,『月報』38号,小学館,pp. 3-4, 1997年
- 伊井春樹 「『源氏物語』の享受史」,『源氏物語がわかる』,朝日新聞社,pp. 143-146, 1997年
- 伊井春樹 「編年体古典文学一三〇〇年史 1511~1520永正8年~永正17年他」,『国文学』10月号,学燈社,pp. 154-159, 1997年
- 伊井春樹 「源氏物語古注釈書類の出版」,『武蔵野文学』45号,武蔵野書院,pp. 2-6, 1997年
- 伊井春樹 「中世の源氏学」,『解釈と鑑賞』10月号,至文堂,pp. 175-187, 1998年
- 伊井春樹 「電子辞書の未来」,『国語科通信』,角川書店,pp. 2-5, 1998年
- 伊井春樹 「角川古典大観源氏物語 CD-ROM の世界」,『源氏研究』4号,翰林書房,pp. 213-215, 1999年
- 伊井春樹 「『無名草子』の当代物語評と『松浦物語』」,『月報』40号,小学館,pp. 3-5, 1999年
- 伊井春樹 「日本文学研究の情報化と将来への展望」,『文学』隔月刊1-2,岩波書店,pp. 150-151, 2000年
- 伊井春樹 「源氏物語作例秘訣の世界——文化史としての詠源氏物語和歌——」,『源氏研究』5巻,翰林書房,pp. 70-80, 2000年
- 伊井春樹 「成尋阿闍梨母——篤実な性格と深い信仰心——」,『解釈と鑑賞』8月号,至文堂,pp. 156-164, 2000年
- 伊井春樹 「源氏物語と信仰」,『解釈と鑑賞』10月号,至文堂,pp. 48-55, 2000年
- 伊井春樹 「絵物語は姫君にどのような役割を果たしたのか」,『国文学』12月号,学燈社,pp. 80-86, 2000年
- 伊井春樹 「姫君にとっての絵物語」,『斎王の読んだ物語』,斎宮歴史館,pp. 7-12, 2001年
- 伊井春樹 「須磨の絵日記から絵合の絵日記へ」,『源氏物語の鑑賞と基礎知識』,至文堂,pp. 207-221, 2002年
- 伊井春樹 「鳥歌合(翻刻)」,『詞林』23号,大阪大学古代中世文学研究会,pp. 46-57, 1998年
- 伊井春樹 「『しのびね物語』論——現存本から古本へのまなざし——」,『詞林』25号,大阪大学古代中世文学研究会,pp. 1-15, 1999年
- 伊井春樹 「物語文学の唐物と中国との交流」,『日本文化研究』1巻,長春出版,pp. 30-44, 2000年
- 伊井春樹 「春日懐紙とその周辺」,『語文』74輯,大阪大学国語国文学会,pp. 1-11, 2000年
- 伊井春樹 「『夜の寝覚』散逸部分の復元——新出資料『夜寝覚抜書』をめぐって——」,『国語と国文学』8月号,東京大学国語国文学会,pp. 15-28, 2000年
- 伊井春樹 「中世における源氏物語享受史の構築」,『中世文学』45号,中世文学会,pp. 5-12, 2000年
- 伊井春樹 「宗祇の古典学」,『詞林』30号,大阪大学古代中世文学研究会,pp. 40-53, 2001年
- 伊井春樹 「情報技術は文学研究をいかに変えるか パネルディスカッション」,『文学語学』171巻,全国大学国語国文学会,pp. 27-64, 2001年
- 後藤昭雄 「延久三年『勸学会之記』をめぐって——文事としての勸学会——」,『文芸論叢』56巻,大谷大学文芸学会,pp. 93-112, 2001年
- 後藤昭雄 「『基俊集』の贈答詩歌について」,『語文』77輯,大阪大学国語国文学会,pp. 1-9, 2001年

- 後藤昭雄 「『日本感霊録』の佚文断片——撰者のこと、伝流のこと——」, 『南都仏教』81号, 南都仏教研究会, pp. 45-57, 2002年
- 後藤昭雄 「日唐間における經典の往還——『千手儀軌』の流传——」, 『アジア遊学』4号, 勉誠出版, pp. 24-34, 1999年
- 後藤昭雄 「金剛寺蔵『文集抄』」, 『白居易研究年報』1号, 勉誠出版, pp. 77-96, 2000年
- 後藤昭雄 「中国へ伝えられた日本人の著作——淡海三船の「大乘起信論注」——」, 『日本歴史』610号, 日本歴史学会, pp. 85-91, 1999年
- 後藤昭雄 「平安朝の楽府と菅原道真の<新楽府>」, 『国語国文』68巻6号, 中央図書出版社, pp. 1-19, 1999年
- 出原隆俊 「鴉外が多用する表現について——『山椒大夫』を中心に——」, 『講座／森鴉外』2巻, 新曜社, pp. 363-384, 1997年
- 出原隆俊 「<下層>という光景——荷風「あめりか物語」「ふらんす物語」の一面——」, 『異文化との遭遇』, 笠間書院, pp. 7-26, 1997年
- 出原隆俊 「「他界」と「崇高」——人生相渉論争開幕前夜の検討——」, 『日本文学研究大成／北村透谷』, 国書刊行会, pp. 151-164, 1998年
- 出原隆俊 「蓮華寺の鐘：『破戒』読解の試み」, 『日本文学研究論文集成／島崎藤村』若草書房, pp. 74-99, 1999年
- 出原隆俊 「「誰も知らぬ」試論——太宰の鴉外受容の一端——」, 『太宰治研究』6巻, 和泉書院, pp. 30-43, 1996年
- 出原隆俊 「「高瀬舟」異説」, 『森鴉外研究』7, 和泉書院, pp. 89-102, 1999年
- 出原隆俊 「鴉外作品における<狂気>」, 『語文』71輯, 大阪大学国文学会, pp. 20-28, 1998年
- 出原隆俊 「<心>と<外部>——漱石小説の一端——」, 『<心>と<外部>/表現・伝承・信仰と明恵『夢記』』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 41-55, 2002年
- 出原隆俊 「小六という他者——御米と火鉢——」, 『漱石研究』9号, 翰林書房, pp. 95-106, 1997年
- 出原隆俊 「優しいサヨクのための嬉遊曲——80年代の「遅れてきた青年」の戦略——」, 『国文学／解釈と教材の研究』44巻9月号, 学燈社, pp. 82-86, 1997年
- 飯倉洋一 「語りと命禄——富岡本「天津処女」論——」, 『雅俗』5号, 雅俗の会, pp. 156-174, 1998年
- 飯倉洋一 「文反古の成立——稿本から刊本へ——」, 『雅俗』9号, 雅俗の会, pp. 30-47, 2002年
- 飯倉洋一 「人麿・宗椿・無腸：『ぬば玉の巻』の言説構造」, 『富士フェニックス論叢』中村博保教授追悼特別号, 富士フェニックス短期大学, pp. 249-261, 1998年
- 飯倉洋一 「『近世崎人伝』と伴蒿蹊」, 『歴史読本』第42巻第6号, 新人物往来社, pp. 218-223, 1997年
- 飯倉洋一 「近世小説に伏在する中古物語——秋成を例に——」, 『国文学』第44巻2号, 学燈社, pp. 82-88, 1999年
- 飯倉洋一 「「長物がたり」の系譜——春雨物語論のために——」, 『江戸文学』, 22, ぺりかん社, pp. 105-118, 2001年
- 飯倉洋一 「西原晃樹の文事——著述解題——」, 『山口国文』21号, 山口大学人文学部国語国文学会, pp. 91-100, 1998年
- 飯倉洋一 「富岡本「血かたびら」の<語り>について」, 『近世文藝』68号, 日本近世文学会, pp. 39-48, 1998年
- 飯倉洋一 「老曾の森の物語——「目ひとつの神」私見——」, 『語文研究』86・87号, 九州大学国語国文学会, pp. 64-76, 1999年
- 荒木 浩 「『古今著聞集』『狂簡』の周辺——中世説話集と「狂言綺語」あるいは<作者>のこと——」, 『日本文学史論』島津忠夫先生古希記念論集, 世界思想社, pp. 121-136, 1997年
- 荒木 浩 「和歌を詠む心——中世古今集注釈書の一隅を読む——」, 『中世の知と学——<注釈>を読む』, 森話社, pp. 46-73, 1997年

- 荒木 浩 「『心』の分節——中世日本文学研究の視点から——」,『臨床哲学ニューズレター』2号,大阪大学臨床哲学・倫理学研究室, pp. 20-27, 1998年
- 荒木 浩 「浦島説話の周辺——『古事談』再読——」,『語文』70輯,大阪大学国語国文学会, pp. 37-48, 1998年
- 荒木 浩 「説話データベース化についての課題と展望——書物という桎梏と電子化の周辺——」,『第3回 シンポジウム コンピュータ国文学 講演集』,国文学研究資料館, pp. 10-21, 1998年
- 荒木 浩 「聖徳太子伝から国史へ——今昔物語集本朝部の構想をめぐって——」,『説話論集』7集,清文堂, pp. 3-35, 1997年
- 荒木 浩 「『今昔物語集』本朝部の構想——卷二十五「兵」譚の成立と「今」をめぐって——」,『文学』隔月刊2-2,岩波書店, pp. 45-69, 2001年
- 荒木 浩 「『今昔物語集』本朝部の構想——卷二十五「兵」譚の成立と「今」をめぐって——(承前)」,『文学』隔月刊2-3,岩波書店, pp. 136-155, 2001年
- 荒木 浩 「夢という日記,自伝,うた,そして逸脱のコンテクスト,あるいは、〈心〉と〈外部〉——明恵『夢記』を読むために——」,『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——』,大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, pp. 159-193, 2002年
- 荒木 浩 「〈表題〉から見えるもの——「鈴鹿本今昔物語集から」——」,『佛教文学』23号,仏教文学会, pp. 66-77, 1999年
- 荒木 浩 「無住と円爾——『宗鏡録』と『仏法大明録』の周辺——」,『説話文学研究』35号,説話文学会, pp. 89-103, 2000年
- 荒木 浩 「僥倖と桎梏と——日本文学研究と電子メディアについてのメモ——」,『文学』隔月刊1-6,岩波書店, pp. 229-232, 2000年
- 海野圭介 「略本系「俊頼髓脳」の研究(一)——関西大学図書館蔵『俊秘抄』翻刻——」,『俊頼髓脳研究会相愛国文』14巻,相愛女子短期大学日本語日本文学研究室, pp. 57-133, 2001年
- 海野圭介 「略本系「俊頼髓脳」の研究(二)——関西大学図書館蔵『俊秘抄』翻刻——」,『俊頼髓脳研究会相愛国文』15巻,相愛女子短期大学日本語日本文学研究室, pp. 28-105, 2002年
- 海野圭介 「仁木充長所校本覚書」,『日本文学史論』,世界思想社, pp. 407-420, 1997年
- 海野圭介 「『顕注密勘』古筆資料の検討」,『古代中世文学研究論集』2巻,和泉書院, pp. 167-211, 1999年
- 海野圭介 「『僻案抄』古筆資料の検討」,『古代中世文学研究論集』3巻,和泉書院, pp. 298-327, 2001年
- 海野圭介 「後水尾院の古今伝授——寛文四年の伝授を中心に——」,『講座平安文学論究』15輯,風間書房, pp. 143-189, 2001年
- 海野圭介 「東山御文庫蔵『古今集相傳之箱入目録』・同『追加』考——古今伝受後の後西院による目録の作成をめぐって——」,『古代中世文学論考』6巻,新典社, pp. 144-184, 2001年
- 海野圭介 「伝藤原為家筆『顕注密勘』断簡(卷一・春上)解題・影印・翻刻」,『語文』68輯,大阪大学国語国文学会, pp. 1-14, 1997年
- 海野圭介 「『三代集之間事』考(上)」,『詞林』22号,大阪大学古代中世文学研究会, pp. 47-64, 1997年
- 海野圭介 「『三代集之間事』考(下)」,『詞林』23号,大阪大学古代中世文学研究会, pp. 11-22, 1998年
- 海野圭介 「中院家旧蔵古今和歌集注釈関連資料考(一)——中院通茂・中院通躬・野宮定基との関わりを持つ典籍を中心に——」,『詞林』26号,大阪大学古代中世文学研究会, pp. 42-67, 1999年
- 海野圭介 「僻案抄の伝本と生成」,『和歌文学研究』79号,和歌文学会, pp. 45-59, 1999年

1-2. 著書

- 伊井春樹 『源氏物語と古代世界』, 伊井春樹, 新典社, 588p., 1997年
- 伊井春樹 『本文研究 考証・情報・資料 第二集』, 伊井春樹, 和泉書院, 219p., 1998年
- 伊井春樹 『源氏物語別本集成 第九卷 (若菜下-柏木)』, 伊井春樹, おうふう, 667p., 1998年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第一卷 源氏物語の主題上』, 伊井春樹, 風間書房, 362p., 1998年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第三卷 源氏物語の表現と文体上』, 伊井春樹, 風間書房, 414p., 1998年
- 伊井春樹 『古代中世文学研究論集, 第二集』, 伊井春樹, 和泉書院, 382p., 1999年
- 伊井春樹 『古代中世文学論考 第二集』, 伊井春樹, 新典社, 319p., 1999年
- 伊井春樹 『源氏物語 (絵入) 承応版本 CD-ROM』, 伊井春樹, 岩波書店, 40p., 1999年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第二卷』, 伊井春樹, 風間書房, 394p., 1999年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第四卷 源氏物語の表現と文体下』, 伊井春樹, 風間書房, 348p., 1999年
- 伊井春樹 『角川古典大観 源氏物語 CD-ROM』, 伊井春樹, 角川書店, 50p., 1999年
- 伊井春樹 『古代中世文学論考 第三集』, 伊井春樹, 新典社, 270p., 1999年
- 伊井春樹 『源氏物語古写本六帖, 国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』, 伊井春樹, 臨川書店, 558p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語別本集成 第十卷 (横笛-御法)』, 伊井春樹, おうふう, 602p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第五卷 源氏物語の人物論』, 伊井春樹, 風間書房, 310p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第十三卷 源氏物語の本文』, 伊井春樹, 風間書房, 406p., 2000年
- 伊井春樹 『古代中世文学論考 第四集』, 伊井春樹, 新典社, 301p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第十四卷 源氏物語享受史』, 伊井春樹, 風間書房, 410p., 2000年
- 伊井春樹 『本文研究 考証・情報・資料 第三集』, 伊井春樹, 和泉書院, 199p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第九卷 源氏物語の和歌と漢詩文』, 伊井春樹, 風間書房, 304p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第十二卷 源氏物語と王朝文化』, 伊井春樹, 風間書房, 327p., 2000年
- 伊井春樹 『源氏物語別本集成 第十一卷 (幻-橋姫)』, 伊井春樹, おうふう, 634p., 2000年
- 伊井春樹 『古代中世文学研究論集 第三集』, 伊井春樹, 和泉書院, 602p., 2001年
- 伊井春樹 『古代中世文学論考 第五集』, 伊井春樹, 新典社, 316p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第七卷 源氏物語と物語論・物語史』, 伊井春樹, 風間書房, 332p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語別本集成 第十二卷 (椎本-総角)』, 伊井春樹, おうふう, 590p., 2001年
- 伊井春樹 『本文研究 考証・情報・資料 第4集』, 伊井春樹, 和泉書院, 245p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第六卷 源氏物語の思想』, 伊井春樹, 風間書房, 362p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語注釈書・享受史事典』, 伊井春樹, 東京堂出版, 816p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第八卷 源氏物語における型と話型』, 伊井春樹, 風間書房, 322p., 2001年
- 伊井春樹 『古代中世文学論考 第六集』, 伊井春樹, 新典社, 301p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第十五卷 源氏物語と紫式部』, 伊井春樹, 風間書房, 310p., 2001年
- 伊井春樹 『源氏物語研究集成 第十一卷 源氏物語の行事と風俗』, 伊井春樹, 風間書房, 326p., 2002年
- 伊井春樹 『国際化の中の日本文学研究』, 伊井春樹, 大阪大学国語国文学会, 178p., 2002年
- 伊井春樹 『古代中世文学論考 第1集』, 伊井春樹, 新典社, 318p., 1998年
- 後藤昭雄 『江談抄・中外抄・富家語』, (共著) 後藤昭雄/池上洵一 (神戸大学) /山根對助 (北海学園大学), 岩波書店, 663p., 1-254/593-605, 1997年
- 後藤昭雄 『天台仏教と平安朝文人』, 後藤昭雄, 吉川弘文館, 225p., 2002年
- 飯倉洋一 『時代別日本文学史事典近世篇』, 共著, 時代別日本文学史事典編集委員会, 東京堂出版, 476p., 78-86, 1997年

- 飯倉洋一 「明和九年刊書籍目録所載「奇談」書の研究」, 飯倉洋一, 73p., 2002年
 荒木 浩 「〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——」, 荒木 浩, 大阪大学大学院
 文学研究科, 358p., 2002年

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 書評

- 伊井春樹 「書評 佐野みどり著『風流 造形 物語 日本美術の構造と様態』, 『読書探求』19号, 大
 阪大学生協, pp. 1巻2号, 1997年
 伊井春樹 「書評 久下裕利著『源氏物語絵巻を読む』, 『国文学研究』, 122, 早稲田大学国文学会, pp. 124
 -126, 1997年
 伊井春樹 「書評 小町屋照彦著『王朝文学の歌ことば表現』, 『日本文学』, 532, 日本文学協会, pp. 65
 -66, 1997年
 伊井春樹 「書評 田中隆昭著『源氏物語 引用の研究』, 『日本文学』, 556, 日本文学協会, pp. 60-
 61, 1999年
 後藤昭雄 「平安朝人は『後漢書』をいかに読んだか——吉川忠夫訓注『後漢書』第一冊を読んで—
 —」, 『文学』隔月刊, 3巻1号, 岩波書店, pp. 242-248, 2002年
 出原隆俊 「尾西康充『北村透谷論』, 『日本文学』, 41巻9号, 日本文学協会, pp. 86, 1998年
 出原隆俊 「平成九年度国語国文学界の展望——[近代]森鷗外——」, 『文学・語学』, 161, 全国大学
 国語国文学会, pp. 22-23, 1998年
 出原隆俊 「北川秋雄『一葉という現象』, 『日本近代文学』, 61, 日本近代文学会, pp. 8月10日, 1999
 年
 出原隆俊 「山田俊治他『山田美妙「豎琴草子」本文の研究』, 『国文学 解釈と教材の研究』, 46巻1号,
 学燈社, pp. 56, 2001年
 出原隆俊 「山田有策『深層の近代』, 『泉鏡花研究会会報』, 10, 泉鏡花研究会, pp. 6, 2001年
 荒木 浩 「〈書評〉黒田彰著『中世説話の文学史的環境 続』, 『説話文学研究』, 31, 説話文学会, pp. 96
 -100, 1997年
 荒木 浩 「〈書評〉小峯和明著『宇治拾遺物語の表現時空』, 『立教大学日本文学』, 86, 立教大学日本
 文学会, pp. 127-131, 2001年
 飯倉洋一 「書評 日野龍夫『服部南郭伝攷』, 『国文学』, 44巻6号, 学燈社, pp. 173, 1999年
 飯倉洋一 「書評 長島弘明『秋成研究』, 『国語と国文学』, 79巻1号, 東京大学国語国文学会, pp. 65
 -69, 2002年
 海野圭介 「紹介・島津忠夫著『和歌文学史の研究短歌編』, 『語文』, 大阪大学国語国文学会, 72,
 pp. 51, 1999年
 海野圭介 「紹介・公宴続歌研究会編『公宴続歌 本文編・索引編』, 『語文』, 大阪大学国語国文学会, 77,
 pp. 50-51, 2001年

(2) 辞典項目

- 出原隆俊 「鷗外と漱石」, 『鷗外を読むための辞典』, 『国文学 解釈と教材の研究』, 43巻1号, 学燈社,
 pp. 22-24, 1998年
 出原隆俊 「丸谷才一」, 「村田喜代子」, 『21世紀を拓く現代の作家ガイド』, 『国文学 解釈と教材の研
 究』, 44巻3号, 学燈社, pp. 34, 55, 1999年
 出原隆俊 「天上愛」「ヒステリー」, 『恋愛のキーワード集』, 『国文学 解釈と教材の研究』, 46巻3号,
 学燈社, pp. 23, 35, 2001年
 荒木 浩 「『日本国語大辞典第二版』8項目」, 『日本国語大辞典第二版』, 小学館, pp. 8, 2002年
 飯倉洋一 「日本古典文学研究史大事典」, 勉誠出版, 1997年
 飯倉洋一 「『日本古典文学大事典』8項目」, 明治書院, 1998年

飯倉洋一 「佚斎栲山」,『日本歴史大事典』,小学館,2001年

(3) 解題・解説・総説

後藤昭雄 「『日本詩紀』解説」,『日本詩紀』,吉川弘文館,pp. 1-12,2000年

後藤昭雄 「『新楽府』「千載佳句」解題」,『国立歴史民族博物館蔵貴重典籍叢書文学篇』,21巻,臨川書店,pp. 499-509,2001年

荒木 浩 「『大阪文学史年表』1項目」,『大阪文学史年表』,大阪市教育委員会社会教育課,pp. 1,1998年

荒木 浩 「〈心〉と〈外部〉——はじめにかえて——」,『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——』,大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座,pp. 1-10,2002年

(5) その他(エッセー,批評,新聞記事,インタビュー等)

飯倉洋一 「市史抄片～編さんだより～43西原晃樹と『なるべし』」,『市報やながわ』,柳川市,472,pp. 24,1998年

飯倉洋一 「危機に立つ文系基礎学」,『西日本新聞』,西日本新聞社,1月12日号,pp.,1999年

飯倉洋一 「ひとつの注釈から」,『山口大学広報』,山口大学広報委員会,48,pp. 35-36,2000年

荒木 浩 「夕方の詠歎——古典講座という風景——」,『懐徳堂記念会の九十年』(財)懐徳堂記念会,pp. 155-158,1999年

荒木 浩 「卑俗を開花させた雅の心」,『週刊朝日百科「世界の文学」』,朝日新聞社,83,pp. 76-77,2001年

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

伊井春樹 「絵物語の製作とその読者たち」,ヨーロッパ日本研究, eajs, 外国貿易大学/ブタペスト,1999年7月3日

伊井春樹 “Jojin’s Mother and Her Son”, Medieval Literature and Culture, Twenty-Eighth Medieval Workshop, ブリテッシュ・コロンビア大学/ヴァンクーバー,1999年11月6日

伊井春樹 “Scenes from Genji Monogatari and their Illustration”, Japanese Literature Conference, British Columbia University / Vancouver, 2000年8月31日

伊井春樹 “Illustrating The Tale of Genji”, A Conference of Japanese Literature, University of California, Berkeley / Berkeley, 2001年6月2日

伊井春樹 「源氏物語はなぜ現代も生きつづけるのか」,日本文学研究講演,デリー大学/ニューデリー,2002年11月23日

荒木 浩 “RECONSIDERING MEDIEVAL JAPANESE LITERATURE: The Issue of Setsuwa Bungaku”, The Donald Keene Center Of Japanese Culture, The Donald Keene Center Of Japanese Culture Co, Columbia University / USA, New York, 1999年6月21日

(2) 国内学会

伊井春樹 「中世における源氏物語享受史の構想」,中世文学研究春季大会,中世文学会,二松学舎大学/東京,1997年8月28日

伊井春樹 「寝覚物語の散逸部分の復元」,関西平安文学会,天理大学/天理,1998年9月19日

伊井春樹 「情報技術は文学研究をいかに変えるか」,共同 伊井春樹,全国大学国語国文学会,昭和女子大学/東京,1999年5月29日

出原隆俊 「透谷における〈狂〉」,北村透谷研究会全国大会,北村透谷研究会,関西学院大学/兵庫県西宮市,1997年1月15日

- 出原隆俊 「『春』を読む」, 島崎藤村学会・北村透谷研究会合同全国大会, 島崎藤村学会・北村透谷研究会, 比治山大学/広島県広島市, 2001年9月15日
- 飯倉洋一 「富岡本『血かたびら』論の可能性」, 日本近世文学会, 天理大学/奈良県天理市, 1999年12月12日
- 飯倉洋一 「近世奇談の〈場〉」, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002年1月12日
- 荒木 浩 「説話データベース化についての課題と展望——書物という桎梏と電子化の周辺——」, 第3回 シンポジウム コンピュータ国文学, 国文学研究資料館, 国文学研究資料館/東京都, 2000年12月9日
- 荒木 浩 「鈴鹿本今昔物語集から」, 仏教文学会本部一月例会《特集 今昔物語集》, 仏教文学会, 奈良女子大学/奈良県奈良市, 1997年12月5日
- 荒木 浩 「シンポジウム『沙石集』をめぐる——神道・仏教・地域——」, 共同 荒木 浩/堤禎子/伊藤 聡/小林直樹, 説話文学会大会, 説話文学会, 筑波大学/茨城県つくば市, 1998年1月24日
- 海野圭介 「藤原定家の本歌取り詠とその本文」, 大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 2001年9月15日
- 海野圭介 「『顕注密勘』古筆切の検討」, 第63回関西例会, 和歌文学会, 大阪女子大学/大阪府堺市, 1997年11月9日
- 海野圭介 「『僻案抄』の伝本と生成」, 和歌文学会第44回大会, 和歌文学会, 東洋大学/東京都文京区, 2002年1月12日
- 海野圭介 「後水尾院の古今伝授——寛文四年の伝授を中心に——」, 和歌文学会第74回関西例会, 和歌文学会, 相愛女子短期大学/大阪府大阪市, 2001年12月15日

(3) 研究会

- 伊井春樹 「源氏物語若紫の場面の方法」, 天理大学国語国文学会, 天理大学/天理, 2001年11月26日
- 伊井春樹 「情報発信としての源氏物語」, パネルディスカッション 源氏物語研究の新展開, 国文学研究資料館/東京, 2002年3月15日
- 飯倉洋一 「明和九年刊書籍目録所載「奇談」書をめぐる」, 京都近世小説研究会, 同志社女子大学/京都府京都市, 1999年11月6日
- 荒木 浩 「『<心>と<外部>——表現・伝承・信仰とその周辺——』という共同研究発足に向けて——「日本中世文学」研究の視点から——」, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究会, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, 大阪大学/大阪府豊中市日本, 1998年6月26日
- 荒木 浩 「『邪正問答抄』の意義」, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究会, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, 大阪大学/大阪府豊中市日本, 1999年6月21日
- 荒木 浩 「『今昔物語集』本朝部「国史」の分岐をめぐる——卷二十五の再読をてがかりに——」, 第50回平安京文化研究会, 平安京文化研究会, 奈良女子大学/奈良県奈良市, 1999年8月7日
- 荒木 浩 「『<心>と<外部>——散文のかたちとしての「夢の記」とその周辺——』, 第32回大阪大学大学院文学研究科教官研究会, 大阪大学大学院文学研究科教官研究会, 大阪大学/大阪府豊中市日本, 1999年10月11日

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 荒木 浩 「中世人と「心」のありか——『方丈記』から『徒然草』へ——」, 公開講座フェスタ'98, 阪神奈大学生涯学習ネット, 大阪府立文化情報センター/大阪府大阪市, 1998年10月18日

2. 教員の受賞歴

伊井春樹 1975年, 日本古典文学会賞 (第1回) 財団法人日本古典文学会
飯倉洋一 1993年, 柿衛賞 (第3回) 財団法人柿衛文庫
荒木 浩 1992年, 日本古典文学会賞 (第18回) 財団法人日本古典文学会

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成9年度 課題番号:8610439 基盤研究(C)(2) 研究代表者:伊井春樹 『保坂本源
氏物語本文の総合的研究』 500,000円
平成10年度~11年度 課題番号:10610424 基盤研究(C)(2) 研究代表者:伊井春樹
『源氏物語古注釈書類の出版に関する総合的研究』 600,000円
平成12年度~13年度 課題番号:12610448 基盤研究(C)(2) 研究代表者:伊井春樹
『源氏物語本文及び注釈資料の体系的書誌調査と総合年表の作成』 2,961,540円
平成11年度~12年度 課題番号:11871058 萌芽的研究 研究代表者:出原隆俊『大阪近代文
学史的研究』 1,900,000円
平成11年度~13年度 課題番号:11610446 基盤研究(C)(2) 研究代表者:飯倉洋一
『明和九年刊書籍目録所載「奇談」書の研究』 2,000,000円
平成10年度~11年度 課題番号:10610425 基盤研究(C)(2) 研究代表者:荒木 浩
『日本説話文学データベース化のための基礎的研究』 1,700,000円
平成12年度~13年度 課題番号:1423 特別研究員奨励費 研究代表者:海野圭介 『鎌倉時
代歌学・和歌注釈の研究』 2,400,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

伊井春樹

中古文学会委員 1972年~

和歌文学会委員 1959年~

全国大学国語国文学会理事 1999年4月~2000年3月

全国大学国語国文学会常任理事 2001年4月~

後藤昭雄

和漢比較文学会常任理事 1997年~

中古文学会委員 1997年~

出原隆俊

日本近代文学会評議員 1994年4月~,

日本近代文学会運営委員 2000年4月～2001年3月

日本近代文学会関西支部幹事 1999年4月～

飯倉洋一

西日本国語国文学会地区委員 1996年4月～2001年3月

九州大学国語国文学会幹事 1997年4月～2001年3月

日本近世文学会委員 2000年8月～

日本近世文学会委員50周年記念シンポジウム小委員会委員 2000年11月～2002年10月

日本近世文学会常任委員 2002年6月～

荒木 浩

仏教文学会委員 1998年4月～2000年3月

説話文学会委員（運営委員） 1997年4月～

海野圭介

和歌文学会 HP 委員 2002年4月～

【VI. 教員の教育活動】（2002年度）

1. 大学院授業担当

伊井春樹 教授

通年 日本文学作家作品研究講義和歌史年表の構築と資料読解

通年 日本文学作家作品研究演習中村本寝覚物語の研究

1学期 日本文学修士論文作成演習修士論文演習

後藤昭雄 教授

通年 日本漢文学演習 菅家文草研究

1学期 日本漢文学修士論文作成演習 修士論文演習

出原隆俊 教授

通年 日本文学作家作品研究講義 日本近代文学をめぐる諸問題

通年 日本文学作家作品研究演習 夏目漱石研究

1学期 日本文学修士論文作成演習 修士論文演習

飯倉洋一 助教授

通年 日本文学作家作品研究演習 近世和文研究

1学期 日本文学修士論文作成演習 修士論文演習

荒木 浩 助教授

通年 中世文学論演習 中世文献読解

1学期 日本文学修士論文作成演習 修士論文演習

中原 豊（非常勤講師・長崎大学助教授）

2. 学部授業担当

伊井春樹 教授

通年 日本文学講義 源氏物語の研究

1学期 日本文学演習 卒業論文作成の手引きと実習

後藤 昭雄

通年 日本文学演習 和漢朗詠集研究

1学期 日本文学演習 卒業論文演習

出原隆俊 教授

通年 日本文学演習 日本近現代文学読解

1 学期 日本文学演習 卒業論文（近代文学）作成の手引き
 飯倉洋一 助教授
 通年 日本文学講義 近世散文の諸問題
 1 学期 日本文学演習 卒業論文演習
 荒木 浩 助教授
 通年 日本文学演習 兼好法師集を読む
 1 学期 日本文学演習 卒業論文演習
 松村雄二 （非常勤講師・国文学研究資料館教授）
 1 学期 日本文学講義 古典和歌文学の種々相

3. 共通教育

伊井春樹 教授
 I セメスター 基礎セミナー 文学セミナー
 後藤昭雄 教授
 II セメスター 主題別 日本の古典を読む
 出原隆俊 教授
 I セメスター 専門基礎 国文学
 飯倉洋一 助教授
 II セメスター 人間教育 言語と文化
 荒木 浩 助教授
 I セメスター 主題別 文学の形成と展開
 I セメスター 主題別 文学の形成と展開

4. 他大学における集中講義等

後藤昭雄	東北大学大学院	I	国文学特論	講義	菅原道真の文学
飯倉洋一	近畿大学大学院	II	詩歌散文論 I	講義	近世散文の諸問題
		II	上方文芸研究	講義	西鶴と庭鐘

【Ⅶ. 外部評価の報告】

●外国人評価者：ロンドン大学 ガーストル教授

(Professor Andrew Gerstle, Professor of Japanese Studies, AHRB Centre for Asian and African Literatures, SOAS (School of Oriental and African Studies), University of London)

○本外部評価は、ガーストル教授を囲んで行われた座談会（午前の部）の概要と、そのディスカッションをも踏まえて提示されたガーストル教授の外部評価（午後の部）をまとめたものである。ガーストル氏はすでに数年前、本大学言語文化部で外部評価の経験があるほか、昨年度は、大阪外国語大学・東京外国語大学でも外部評価を行っている。

午前の部（座談会記録）

会場：大阪大学文学研究科本館 3 階伊井研究室

日時：2003年1月10日，10時30分より午前12時まで。午後1時15分より午後2時まで。

出席者

日本文学

伊井春樹教授，後藤昭雄教授（午後授業のため欠席）

出原隆俊教授，飯倉洋一助教授，荒木浩助教授

◎外部評価の目的・全体的な印象

【ガーストル】この外部評価の目的は何か。何に使うのか，学部の命令か，文部省からか。

【荒木】自己評価は従来からあった。大きな潮流として外部評価を行うべきであるという考えがあり，阪大では文部科学省からの指示というわけではなく，本格的な外部評価（全専門分野での細密な評価）をやるべきであるという機運が熟した。その結果，ここ5年間の研究教育業績をデータとして集積して外部評価資料とした。

【伊井】国立大学を取り巻く状況は大きく変化し，学校・部局ごとの予算配分を重点的に行うべきという傾向にある。そのため外部評価の重要性が叫ばれている。阪大としても学位評価機構や外部の識者の意見を聞いて，より充実した成果に結び付けようとしている。他大学では，一部の専門分野をセレクトして外部評価を行うか，あるいは部局全体の概要的評価であった。それを本学ではすべての専門分野で行うことに意義を感じている。特に国際的視野からも評価していただいた上で，世界の中での役割を認識したいと考えている。

【ガーストル】イギリスでも同様な外部評価と予算配分などの，関連づけを行い始めている（12年前から）。それにより研究予算がかわることと，又4年前から文科系にも拠点大学（研究センター）を設定し，予算を重点配分することが始まっている。外部評価が重要になってきているのは世界的傾向であろう。

【ガーストル】データを読むと大学院生，留学生が多い。

【荒木】大学院生・留学生が多くなったのは重点化以降で，より研究へシフトした。

【伊井】重点化以前と違って所属が大学院（文学研究科）になった。

【ガーストル】留学生を含めて学位をよく出しているし，学会発表をさかんにさせている。また就職（研究職）についてもいい結果を出している。2年前京大の客員教授をしていたが，京大に比べても，遜色のない状況だろう。

◎組織としての自己点検と組織についての批評

【ガーストル】大学院生の指導は，論文作成に向かって，学内外で発表させるという点に力を入れているようだ。

【後藤】個々の指導教官の指導において論文提出までのプログラムが設定されている。正規の授業以外の学内研究会や，院生発表会，学外の研究会，専門分野ごとの学会と，段階を踏んで経験をつませるようなカリキュラムがある。

【ガーストル】 そのシステムはよくできているであろう。

◎方法論をめぐって

【ガーストル】 基本的な方法論が描かれていない。分野としてはなくても個人的にはあるはずで、外部評価に際してはそれを鮮明に描き出しておく方がよい。考証・解釈・文献・文化史・比較文化論など、その大学の特徴として突出した独自の方法論を明示する形の学問が望ましい。また学生の指導体制も、一対一の師匠・弟子というのではなく、ファカルティのさまざまなメンバーが開催する多様なセミナーに参加させ、相関的なディシプリンの取得させるやり方がのぞましいと考えられている。

【伊井】 これまでの国立大学では、方法論は総合的・総花的であった。確かに専門分野として特徴あるイメージを打ち出せてはいなかった嫌いがある。

【ガーストル】 かつてイギリスの大学院では、博士課程に入ると、論文指導のみで、演習があまりなかった。しかし最近では、それでは学生の指導上望ましくない、ということで（管轄省庁からの指導的なもので）、演習をするようになった。社会の推移、大学をとりまく状況に応じて、大学院の指導体制も変わらなければならないことがある。日本文学という専門分野においても、全体のある統一された特色を売り出すことが、望ましいかどうかは別として、競争的な時代においては、そうした戦略が必要である。たとえば学部では日本文学専修進学希望が漸減の傾向にあるようだが（これはイギリスの英文学も同じ。世界的な傾向である）、人数的にも少なくなるのみならず、方法論にも孤立している面があるといわざるを得ない。これは「国文学」の存立とも関わる。たとえば比較の場に参加できるような方法論が、学生へのアピールということにおいても必要であろう。そういう特色が何かあるか。

【伊井】 率直に言ってない。

【ガーストル】 我々は SOAS で、文学とパフォーマンス、という COE 的プログラムを設定している。しかしそうした越境的・相関的研究ばかりが進むと、個々の文献や事象の分析が細密でなくなるという批判・反省もある。

【後藤】 日本では、かつてはいくつかの大学に強く見えていた各大学の特徴的な要素（東北大の日本文芸学、國學院大学の民俗学的方法など）が、現代はむしろ、薄まってきている傾向が強いのだが。

【ガーストル】 しかし、COE では、そうした特徴的な要素を打ち出していく必要があるのではないか。

【後藤】 テーマと方法とは別ではないか。

【ガーストル】 大学院の学生のためにも、そうした明確な方法論を提示し、教育してやるのが、いろいろな意味で重要である。

◎時代・ジャンルをめぐって

【伊井】 以前の講座制は、教員が少ない点が逆に学生にプラスに働く面があり、たとえば学生は、

いろいろなジャンルの、あるいは様々な時代の授業をとったり、または取らざるをえなかった。今はそれがなく、指導教官を軸にした講義・演習を中心とした授業に自足し、専門性に狭く縛られている面がみえる。

【ガーストル】文学研究方法論のようなセミナーを設定してはどうか。そうすれば、時代やジャンルを越えた大学院生間の研究交流の場が生まれるのではないか。方法論の批判も生まれ、会話もうまれ、反省も生まれるだろう。

【出原】近代文学にもいろいろな方法が多様に存在する。その多様な学生の方法や個性を尊重してやって、対話する方法をとっていた。一律の方法論を提示してはいない。

【ガーストル】方法論を押しつけるのではなく、方法論の多様さを示し、選択させるような場があってよい。

【伊井】今日、日本では、文理融合型の大学像が再び求められているという面もあるようだ。

【ガーストル】先生と弟子という縦の関係だけでは駄目ではないか。専門を越えた基礎的な方法論や skills を提供するべきであろう。

【後藤】先ほどの、阪大の日本文学の特徴だが、そういえば文献学的方法という点において共通しているように思う。眼前の文献を綿密に読むということ。

【出原】院生発表会での時代やジャンルを越えた研究交流もある。

【ガーストル】たとえば二年前客員として過ごした京大の日野龍夫氏は、多様な研究姿勢を持つ優れた学者だが、学生は非常におとなしい。阪大の院生の方が積極的、意欲的で元気に映る。学生の競争意識がよい方向に機能しているのではないか。

◎大学院生の指導について

【ガーストル】私は SOAS で文学研究方法論のセミナーを三年間担当している。毎年違うことをやり、さまざまな方法論を紹介・分析しつつ、最後に学生に、自分の方法論をもって発表させる。たとえばチベットとパレスチナの文学研究の院生同士が交流できる。欧米には基本的に大学院の一年生コースとしてそういうコースがある。

【伊井】本学では教員同士も交流が少なく、あるいは同僚の研究を知らないということもある。

【ガーストル】私の関わっている COE には必ず大学院生を参加させる。またその COE をめざして学生が参加することも、今後の展望としてはありうる。

◎国際化・留学生について

【伊井】大阪大学の日本文学は、世界の中の日本文学を構想し、国際的な日本文学研究の交流における拠点づくりを目指している。大阪大学は国際的な研究機関であるということを確認する必要がある、と考えている。

【ガーストル】それは結構な構想だが、相応に大きな仕事を伴うだろう。また、その場合、たとえば多様な留学生を受け入れ、研究・教育交流を行おうとする場合においても、先に述べた様な研究論セミナー的なものは必要であろう。その素養が基盤になって、論文執筆をよりスムーズに

導くであろう。

◎ふたたび方法論について

【ガーストル】古代文学は概ね翻刻等が終わり、資料的には大半が既紹介となっている様だ。そうした研究の基盤が整備されたジャンルにおいては、研究者は何をすべきなのか、ということが問われ出している。英文学は、まさにそうした問題が重要になっている。理論研究の必要なゆえんである。一方、近世文学などは未紹介・未翻刻の資料がまだまだ豊富であり、基礎的な翻刻や注釈が必要なジャンルである。

◎危機感

【ガーストル】従来の日本文学の需要に安住して危機感がない。たとえば近代の研究者（もしくは志望者）が増加し、古典のそれが減少していることについてどう考えるのか。なぜ文学を研究するのか、たとえば黄表紙が面白いということをいかに伝えるのか。そうしたモチベーションの自覚と表明が必要ではないのか。

【伊井】たしかに、従来は需要に安住していたが、なぜ日本文学かということを出す積極的なプログラムの提供が必要だろう。

【後藤】ヨーロッパでは文献学はあまり行われぬのか。

【ガーストル】古典ギリシャ研究などは、翻訳も翻刻もそなわっていて、そうした基礎的なことに従事する必要がない。

【飯倉】こちらに来て2年めだが、大阪大学の特徴として、いろいろな研究会や卒論・修論審査などを、時代やジャンルを越えて、活発に交流的に行っていると思われる。また、文献学的方法の徹底は、大阪大学の特徴といえるのではないか。前任の山口大では日本文学概論・日本文学史（学部）という方法論的講義をやっていた。しかし、阪大では、かつて、そうした基礎的なことは大学院生においては既得しているという前提で考えられていた。しかし、残念ながら、現在は、そうした基礎的なことが減少しつつあり、そういう意味で、文学理論的な基礎セミナーの設定は必要だと感じる。

【伊井】（飯倉へ）外から見て阪大はどうだったか

【飯倉】個々の先生の個性は強烈だが、学風という意味で京大や早稲田のような特徴は感じられない。しかし内部に入ると文献的な特徴が顕著であると見えてくる。

【ガーストル】文献学的方法は非常に大事で、その上に何かプラスアルファが必要である。

◎イギリスの状況

【ガーストル】今後日本の大学はイギリスと同じような組織になるだろう。イギリスでは研究は評価によりランク付けされ、予算配分が変わる。これを4・5年ごとに行う（個人を対象とするものではなく、組織が対象となる）。量ではなく、質で評価が問われる。アメリカの制度は今回の独立行政法人化の様相には参考にならない。イギリスのシステムに近い。イギリスは、その制度のもと、より研究等の裁量の自由度が増しているが、その分予算的には厳しくなり、予算獲得

のためには、COE や科研のような外部資金を申請して獲得することになる。

◎その他の諸問題

【ガーストル】博士論文執筆の資格はどうなっているのか。

【伊井】博士二年次に予備論文を提出し、承認されて執筆資格が与えられる。学会誌に最低2本程度の執筆業績があることなども、重要な要件だと考えている。

【ガーストル】研究会などのシステムはよく機能しているだろう。

【伊井】その結果、阪大は学会での発表・論文掲載は非常に増えている。

【ガーストル】それは大学の評価や風聞を非常に高める。

【ガーストル】わたしの場合、ハーバード大学大学院ではほとんど指導はなかった。いい大学では指導がないことが普通だったが、現在は変わってきている。

【後藤】専門分化、方法論の孤立化が指摘されたが、それは、国文だけではないだろう。

【ガーストル】たしかに、外国文学研究相互、たとえば、中国文学と英文学との間は、研究上没交流ではないか。しかし、活発に行われている研究会を方法論のセミナーと連動させる様な工夫で、より機能するであろう。修士の時代のそうした訓練が必要だろう。

【伊井】他に大学評価の基準は。

【ガーストル】これは学部レベルの問題だが、日本の大学は「儒教の世界」。学生は教官や本に対して疑問を持たない。教官も調べさせない。書かせない。その結果、問題発見や自立性の能力が足りない。SOAS の日本語科の学生は全員日本に送る。交換留学生として送るから、日本人の学生もロンドンに来る。日本人留学生が一番とまどうのはそうしたレポートを書く姿勢の違いで、欧米では、レポートの書き方は、寄せ集めではなく、問題意識の特化、分析、批判、そして自分の見解を提示していなければならない。日本ではそうしたレポート執筆の訓練が、質・量ともに少ない。今の日本の大学の講義は、自立性を養う授業ではない。関連して言えば、日本にはいい意味での厳しいエリート教育がなくなった。東大・京大・阪大レベルでも特化した教育をする大学はない。いい大学に入ったら、厳しく指導し（単位取得についても）、その過程でプライドや母校愛のようなものを培うべきではないのか。

【伊井】学生評価についてどう思うか。

【ガーストル】学生評価はイギリスにもあるが公表しない。テニユアには使わない。

【荒木】方法論セミナーについて、T. A. を使うのか。

【ガーストル】修士課程には使ったことがあるが、毎回違う教員が登場し方法論を伝えるという形である。（こういうことは必要で）古典研究にも欧米文学研究理論を知っておく必要があると思う。それに国際化をめざすなら、「比較」という観点は必要だろう。

【伊井】COE の相関的な研究方向は、自ずとそうしたかたちに向かうかも知れない。更にそれがうまく機能すれば、COE の研究動向が組織編成に展開する見通しもある。他になにかありますか？

【ガーストル】よく論文をたくさん書いているという印象である。

【伊井】日本の学者は離れ業。とにかく会議が多すぎる。

【ガーストル】会議はその度1.5時間ぐらいで十分で、そこに準備を集約させるようにする。

【伊井】コロンビア大学では月1回で40分だと聞いている。日本では博士論文の審査が長い。

【ガーストル】博士論文の審査をなぜあらためて教授会で行うのか。論文を読んでいないのに。審査委員会を信用していないのか。無駄があると、競争社会の中で負ける。時間を有効に使わなければ生き残れない。

【荒木】ここではサバティカルが制度化されていない。

【ガーストル】研究休暇がなければ安定した仕事はできない。法人化で制度化されるのではないか。

【ガーストル】非常勤には反対。教えに行く側から言えば、一日つぶれる。また、非常勤先での学生の責任は持た（て）ない。そもそも世界的に非常勤講師など普通は存在しない。言語教育の変革にも非常勤講師の処遇がネックになっている。もっとも、サバティカルの代替機能としてはありうる。若い人がいくべきだろう。

【伊井】教えなければならぬ、やや総花的な配慮が非常勤を生んでいるか。

【後藤】非常勤は違った方法論を持った人に来てもらい、総合的な学力を提供する意味がある。

【ガーストル】それはよい。要は制度の使い方の問題である。日本学関係ジャンルをどう統合していくか、組織の問題も課題。

午後の部（まとめ）

【外部評価のまとめ】

◎評価できる点——大学院生指導のカリキュラム

専門分野（日本文学）のそれぞれの教官の評価は、個別の論文を読んでいないので、今回はできない。

高く評価できるのは、大学院生が論文（修士論文、博士論文）を仕上げるまでのシステムである。学生は、授業の他に、個別（分野別）の学内外の研究会に所属し、また講座で設定する中間発表会、院生発表会という研究発表会で発表し、相互批判を行う。これに全員の教官が出席して指導する、という。この研究会・発表会において、多くの院生が専門以外の研究内容、方法論をも学ぶことができる。それを展開して、学会発表をさせ、さらには学会誌に掲載するように指導する。その体制はうまく機能している。

文献的・綿密な読解、基礎的なリーディングの技術も、成果を上げており、外部からも高い評価を得ている。それをさらに向上させるためには、たとえば修士レベルにおいて、方法論セミナーのようなものをもうけ、専門研究の壁をなくし、展開することが必要であろう。

◎留学生教育への展望と真の国際化に向けて

また留学生はこれからも増加することが見込まれ、有効な教育を施していく必要がある。現在、シラバスには載らないが留学生専用の授業が開設されていることは評価できるが、欧米・アジアそれぞれに多様性が留学生にはあるはずで、それにどのように対応していくかが課題になるだろう。たとえば英語圏であれば、どの国の留学生であっても、英語で一律に行えるが、漢字文化圏の日本文学の場合は、「原文」に直面しなければならず、基礎的な訓練が必要である。総論的な「文学」と「日本文学」との間には大きな距離がある。一方で近代文学には「比較文学」的要素が要求される。しかし、COE プログラムのように大きな国際的なプログラムがあれば、高次の国際的・相関的研究が可能であろう。

◎「外部評価」方法論の問題点

ところで、外部評価には、評価のガイドラインが必要であるが、今回のプロセスではそれが明確ではない。また、日本文学専門分野のカリキュラムの中で求められているもの、目標とされているもの、そのためにどのようなプロセスが設定されているかということも、明確に示されるべきである。アドミッション・ポリシーと、カリキュラム、求められている人間像、また個々の教員の研究のプランや総括などの総合的關係が、業績の表の中にきちんと描かれているべきである。『年報』資料を外部評価資料として活用する際の今後の課題といえる。

◎今後望まれる日本文学専門分野のありかた

今後の大阪大学には、国際的研究拠点として、海外との積極的な共同研究が求められる。海外からの資料・情報の提供に応じること、留学生を交流させること、COE を利用した拠点形成（ネットワーク）を進めることなどが求められる。国際共同研究には必ずしも英語力が必要なわけではない。しかし、若い研究者（院生）には語学を習得し、海外留学で刺激を受けることを勧める。

なお、COE が学問領域を越えた共同研究として、あたらしい日本研究を切り開く可能性に期待がかかる。文学・美術・宗教・哲学など、本来連合すべきディシプリンが相当あり、それがこういうプロジェクトで合流する可能性がある。

学生にアトラクティブな研究や教育を提供し、未来に向けての道を築くべきであるが、そのためにモチベーションをどう設定し、未来図をも描くかが重要である。〈大阪〉という立脚点をどのように自覚的に研究に取りこんでいくかも課題となるだろう。

日本人評価者：松村雄二（国文学研究資料館教授）

1. 研究活動について

（教官組織について）

大阪大学大学院文学研究科における教官組織（教授3、助教授2、助手1）における研究指導分野は、平成14年度現在、古代中古・中世・近世・近代までの時代を網羅し、各人が専門とする研究領域も特殊狭隘なジャンルに限定されず、散文から韻文までを広くカバーするとともに、院

生の研究教育にも柔軟に対応できている点で高く評価できる。各人の専門とする世界における研究成果（業績）も、資料にあるとおり、多彩かつ大量であり、この5年間を見ても、日本文学系の研究者の年間発表論文数（口頭発表を除く）が1人約2件弱に止まるのに対し、本研究科の教官は平均で5.6件に達しており、この数は他大学のすべてを凌駕する驚異的な数値とあってよい。（研究テーマの先端性について）

研究テーマにおける先端性に関してみると、『源氏物語』を中心とする物語文学研究を例にとってみるなら、テキスト原典に関する書誌学的な実証研究を手堅く踏まえるとともに、『源氏』以前の時代から近代に至るまでの享受史の中で物語というジャンルの成立と消長を幅広く追求する文化史的観点が行き届いているなど、今後における文学研究のあり方を先取りした成果があげられており、しかも長年に及ぶ研究テーマの一貫性が見て取れ、実証的と先端性を兼ね備えた成果を着実に挙げている点は高く評価できる。

（対外的な活動について）

科研費等の競争的資金の獲得についても、ほぼ教官各人がそれぞれに成果をあげており、この面での活動も評価できる。学会の委員等、コミュニティにおける活動についても、それぞれが重要な役割を担って学会の発展に積極的に寄与しており、また新聞や在野の広報誌・一般誌などにも不足なく寄稿しており、社会的な貢献度においても評価できる点である。ただし理工科系学問の原理とは異なり、人間文化の精神的側面を対象とする人文系諸学においては、実用的な実効性をただちには標榜しえない独自の学問的性格に基づくから、企業等との連携という点で実をあげる段階には至っていないおらず、その面での評価を実施する段階にはない。人文系諸学に対する社会的な役割や位置づけが社会全体の中で正当に評価されない限り、理工系的な評価基準を性急に当てはめるような判断は慎まれるべきであろう。

2. 教育指導体制について

（教育指導について）

教官の研究成果に見られる前述のごとき旺盛な研究志向に対応して、大学院学生の在学時における研究成果発表各人平均4本以上と、きわめて充実した成果が得られている。これは、発表の場である学内機関誌や研究会が身近に多彩に用意されており、成果発表が盛んに奨励されていると同時に、院生個々人がその奨励に応えるだけの旺盛な研究意欲に満ちている結果であり、本研究科における指導体制が十分に機能していることが認められる。また院生が進めている研究内容も、博士論文や発表論文のテーマから通観されるように、物語・説話・和歌・歌謡・演劇・日記・近代小説等と、特殊な偏りがなく、教官の専門領域を超えた多様性が看取され、指導が適切かつ柔軟に行われていることが分かる。これは、日本文学以外にも国語学・比較文学との共業体制で院生を指導する本研究科の指導理念が有効に機能している証左であろう。カリキュラム内容も、日本文学専攻の学生のみならず特化したものではなく、広領域的な科目編成が採られている点、学生の関心対象が幅広く展開している点が評価できる。これは評価者本人が客員として実際に学部生と本研究科生を対象に指導した結果、実感したことであり、日本文学専攻の学生・院生以外が提

出したレポートにもかなり多くの成績優秀者がいたことを強調したい。

(留学生・社会人入学について)

2002年4月現在における大学院在学学生数48名のうち、外国人留学生が14名、社会人が10名という数は、他大学大学院のそれを凌駕するものであり、きわめて意義高いものがある。その数に応じた研究指導体制が十分に行き届いていることを語っている。

(教官一人当たりの学生配分について)

2002年4月現在における大学院在学学生数が48名に対し、教官数が(助手を除き)5名というのは、1人当たり約10名になる。これは現在の制度下では他の国立大学院ともどもいた仕方ないことであろうが、上述のような充実した指導体制を今後とも維持していくとなれば、その負担はいずれ過重とならざるをえない数と言えよう。日本のトップレベルを維持する学術発展のためにも、高等教育機関としてはもっとゆとりをもった教育指導体制が求められてよい。

(論文指導体制について)

課程及論文両者をあわせた博士号取得件数は、年ごとに多少の出入りはあるものの、おおむね4～5人を順調に輩出しており、十分に評価できる。また、学部生・院生・教官を総合する卒論、修論発表会を年2回、1週間にわたって開催し、卒論・修論を書かない学生までが参加して行っていることは本研究科の特色であり、全員が実際の研究状況を把握できるこのような体制はきわめて理想的であると指摘できる。ただしこのこととは別に、研究テーマの種別分布にもよろうが、博士論文の主査を務める教官が、やや偏っている傾向が見られる。その教官が退官した場合、指導体制が大きく変わらざるをえないことが懸念され、この点は是正されて然るべきである。

(学生研修等について)

学生間同士、院生と教官の交流の機会が研修旅行の形で年2回確保され、教官と院生相互が人間的な接触を密にしている点はきわめて高く評価できる。前述のような教官及び院生の中に見いだされる旺盛な研究意欲は、こうした相互の人的交流の結果、おのずから醸成されたものであろう。また研究室が常時院生の知見交換の場として活気に満ち、おのずから生活面でのケアを醸成している点、他大学院にはない良好な交流環境を作っていると評価できよう。

3. 研究教育環境について

(施設面について)

上述のような良好な研究交流の実がもたらされているにもかかわらず、現在の学生用研究室ははなはだしく狭隘であり、本研究科を実地見聞した判断からいえば、研究に要する院生1人当たりの空間条件はかなり劣悪であると判断される。コンピュータなどの研究用機器の配備も不足しており、また研究室の書架も手狭である等、おおいなる改善の余地がある。教官の研究用面積、教育用教室面積も同様に改善の余地あることは言うまでもない。教育研究棟自体がだはなはだしく老朽化しており、研究空間面積の拡大と併せて早急に手を打つ必要がある。

(予算面について)

教官の研究費が低く抑えられている現状は、国内の国立大学・大学院のすべてに共通する問題

であるので、文教予算全体の見直しが必要であるが、とりわけ学生用の研究図書購入費の規模の劣悪さは、文学研究水準全体の低下を免れざるをえず、早急な対策が望まれる点である。本研究科でもその点は最大の課題であり、COE 経費や科研費などにおける備品購入費割り当て分の改善などを、国立大学が相互に連携して国に要求していく必要がある。

3-13 比較文学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

比較文学専門分野が実質的な活動を開始したのは教授着任の1996年10月からである。教授1名のみという運営体制ではあるが、研究室設備などの整備とともに、学部生・院生の数も増え、また留学生の関心も高まりつつある。全国の国公私立大学を通して、学部・大学院ともに比較文学の専門を置いている大学は非常に少なく、特に関西圏の国立大学としては唯一ともいえるので、一般に比較文学に対して関心が高まりつつある最近の状況を考えると、日本における比較文学研究の大きな拠点として今後大いに発展させたいところである。現在、本専門分野では教育・研究活動ともに日本近代文学を主な対象にして、西洋文学が日本文学に与えた影響、日本文学が東アジアに与えた影響、日本文学と西洋あるいはアジア文学との対比研究、文学と絵画、音楽、映画などとの関係を考えるジャンル間交渉、またたとえば<子供>を手掛かりに数多くの作品を横断的に比較するテーマ研究など幅広い研究が行われている。着眼点としても、近代におけるセクシュアリティの問題など最近の新しい研究を反映したものも多い。目下、講義は専任教授1名、非常勤講師3～4名で行われ、論文の審査は専任教授1名、日本文学の専任教授1名及び他の専門分野の教授1名で行われているが、スタッフの充実化によってさらに多様な外国文学などを視野に収めた研究が可能になることが今後の課題であり、希望でもある。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 0
教授：内藤 高

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
21	9	13	0	0	0	0	2	0

※うち留学生 8 名, 社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	0	0	0	0	0
'98	0	0	0	0	0
'99	3	3	0	0	0
'00	4	0	1	2	1
'01	0	3	2	0	1
小計	7	6	3	2	2

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	1	1	2
'01	0	0	0
計	1	1	2

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- (1)仁苔均 「日韓近代文学における父子関係の比較研究」 課程博士 2000年9月
主査：内藤教授， 副査：出原教授， 柏木教授
- (2)柏木加代子「土田麦僊『愛の書簡』をめぐって」 論文博士 2000年12月
主査：内藤教授， 副査：奥平教授， 圀府寺助教授（当時）

2. 大学院生等による論文発表等の件数

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	0	2	0	0	0	2
'98	0	2	0	0	0	2
'99	2	0	0	0	1	3
'00	2	4	0	0	1	7
'01	1	2	0	1	0	4
計	5	10	0	1	2	18

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等の講演会	その他	計
'97	0	0	0	0	0	0
'98	0	0	0	0	0	0
'99	0	2	0	0	0	2
'00	0	0	0	0	0	0
'01	0	3	1	1	0	5
計	0	5	1	1	0	7

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 任 苔均 「『夜明け前』考—夢と狂気の空間」,『大学院論集』, 7, 1997年10月
- 任 苔均 「藤村文学における父子関係の一断面——「捨子」意識をめぐる——」,『待兼山論叢』, 31, 1997年12月
- 任 苔均 「島崎藤村の『家』と廉想渉の『三代』——父子関係を中心に——」,『大学院論集』, 8, 1998年10月
- 任 苔均 「牧野信一の『父親小説』と廉想渉の『三代』——父子関係を中心に——」,『待兼山論叢』, 32, 1998年12月
- 任 苔均 「島崎藤村『破戒』と廉想渉『万歳前』<父性>と<旅>を中心に」,『島崎藤村研究』, 27, 1999年9月
- 任 苔均 「島崎藤村『新生』論」,『解釈』544・545, 2000年7月・8月
- 任 苔均 「島崎藤村『新生』における生命主義」,『大学院論集』, 10, 2000年10月
- 上垣公明 「三島由紀夫とアーネスト・ヘミングウェイ ジョルジュ・バタイユを通して」,大阪電気通信大学『人間科学研究』, 3, 2001年3月
- 上垣公明 「三島由紀夫の『仮面の告白』とヘミングウェイの『日はまた昇る』の比較研究——登場人物における「性」の問題を中心に」,関西英語英米文学会『KWANSAI REVIEW』, 19, 20合併号, 2001年9月
- 上垣公明 「三島由紀夫の『禁色』とヘミングウェイの『エデンの園』の比較研究——「性」の問題を中心に」,大阪電気通信大学『人間科学研究』, 4, 2002年3月
- 久田原泰子 “*Modelate cantabile et Le Coup de grâce de deux Marguerite*” 『フランス文学論集』, 12, 1999年
- 久田原泰子 「三島由紀夫とマルグリット・ユルスナール(1)——アイデンティティの探求——『仮面の告白』と『アレクシあるいは虚しい葛藤について』を通じて」,『フランス文学論集』, 13, 2000年
- 久田原泰子 “*Une tentative en classe de lecture*”, *Rencontre* 2000, 2000年
- 久田原泰子 「初級フランス語教育における視聴覚教材の活用について」,『視聴覚教育』, 5, 2001年
- 久田原泰子 「*Electre ou la Chute des Masques* におけるセクシュアリティについて」,『フランス文学論集』, 14, 2000年
- 寺内伸介 「小説と映画」,大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 34号, 2000年
- 西澤りょう 「接吻の日本文化史」,大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 35号, 2001年

(2) 発表

- 西澤りょう 「接吻の日本文化史」,日本比較文学会,『日本比較文学会会報』,早稲田大学, 2001年
- 寺内伸介 「山口誓子とモンタージュ」,日本比較文学会,『日本比較文学会関西支部ニューズレター』,

大阪大学, 2001年
朴 銀姫 「性とイデオロギー —— 倉橋由美子と楊沫の作品を中心に ——」, 日本比較文学会, 『日本比較文学会関西支部ニューズレター』, 大阪大学, 2001年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況 (1997～2001年度)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で, 大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 2 名

'97年度: 0名 '98年度: 0名 '99年度: 0名 '00年度: 1名 '01年度: 1名

<内訳>

2000年度 任 荅均 (D 修了) 聖潔大学校 (韓国) 専任講師

2001年度 上垣公明 (D 修了) 大阪電気通信大学短期大学部 専任講師

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で, システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職, ジャーナリスト, アーティスト, 中・高等学校の教員, その他の職業に就いた者について)

なし

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 1 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

10. 刊行物

なし

学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1997年12月19日・シンポジウム「比較文学の現在・未来」(大阪大学文学部)・
大阪大学高度化推進経費によるシンポジウム

1998年12月5日 講演『アラビアン・ナイト』と悪女譚の系譜(講師 杉田英明《東京大学》
於大阪大学文学部・大阪大学高度化推進経費による講演会

1999年6月ー現在 日本比較文学会 本部事務局(事務局長 内藤 高)

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998年度ー01年度 比較文学専門分野, 学部生・院生研究発表会(毎年7月)

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

1でも触れたように本専門分野が実質的な活動を開始したのは1996年10月からである。教育の体制としては専任教授以外に、学外及び言語文化部から非常勤講師をお願いして、できるだけ多様で今日的な観点から比較文学を考えることができるように工夫している。一般に講義の参加学生も多く、学生の知的関心を呼び起こすことに関してはかなりの成功を収めているように思われる。

しかし比較文学が非常に広範囲にわたる対象を扱う学問であるために現行の体制では不十分な点が存在することも否定できない。講義テーマがやはり専任教授の関心の領域に偏り易いこと、講義の負担のために演習にとれる時間が少なくなること、特に比較文学をやる上で重要な条件である様々な外国語のテキストをじっくりと読む時間もちにくいことなどが現在の問題点であろう。

なお、現行の体制での問題点を補うために、比較文学専門分野発足以後、学内の資金の援助を受けて講演会やシンポジウムなどを行ってきたことを付け加えておきたい。とくに1997年秋に学内外の気鋭の比較文学研究者を呼んで開催したシンポジウム「比較文学の現在・未来」は比較文学専攻以外の学生も多数出席し好評であった。今後も是非こうした催しをできるだけ多く開いていきたい。

次に研究活動であるが、現在4で記すように日本比較文学会の事務局を引き受けていることもあり、学会の活動と近いところで全国的な研究の動勢に敏感に触れながら学生が研究を進めていくことをめざしている。専門は違おうとしても専任教授の論文や研究発表などはできるだけ研究室全員の目に触れるようにし、(欠点への批判も含めて)論文の書き方、発表の仕方など学びとって欲しいと思っている。

繰り返す事になるが歴史の浅い研究室であり、博士後期課程から入学した3名(社会人入学を含む)を除けば、最初に博士前期課程の学生を迎えたのは1998年4月であり、また学部生の数が急速に増えるのも最近2,3年のことである。この点から言えば、様々な研究活動の成果はまだ具体的なデータとしては充分には現れていない段階といえる。しかし博士課程に進学した学生の

学会発表，論文発表等が2001年度から本格的に始まり，2002年度は日本比較文学会関西大会での本専門分野の大学院生の発表が多数予定されており，研究活動が急速に活発化しつつあることは疑いない。

なお研究活動の上で早急に実現しなければならないのは，比較文学研究室を単位とした論文集，専門雑誌の発行である。これは2003年3月に第一号を発行することを目指し，現在原稿を準備中であり，必ず実現させなければと思っている。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 内藤 高 “Ecriture de «La Muraille intérieure de Tokyo»”, *Ecritures claudéliennes, Actes du colloque de Besançon, L'Age d'Homme*, pp.111-118, 1997.
- 内藤 高 「テキストの含むドラマ——クローデルにおける絵画と文学の接点——」, 『象徴主義の光と影』, ミネルヴァ書房 pp. 116-130, 1997.
- 内藤 高 “Ecriture sonore dans les poèmes japonais de Paul Claudel”, *Equinoxe* 第17-18号, 臨川書店, pp. 275-281, 2000年
- 内藤 高 「<心>と<外部>の接点——近代日本文学における住まいの<詩学>——」, 広域文化表現論講座共同研究成果報告書大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, pp. 56-74, 2002年
- 内藤 高 「騒音の文化——バードとモースの聴く日本——」, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』第42号大阪大学, pp. 53-76, 2002年
- 内藤 高 「クローデルにおける批評と創造の接点」, 『Gallia』第40号大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 91-98, 2001年
- 内藤 高 「詩のテキストと絵画——クローデルにおける絵画と文学の接点——」『大阪大学文学部紀要』第39号, 大阪大学, pp. 55-67, 1999年
- 内藤 高 「クローデルと水のイメージ——日本滞在期のテキストを手掛かりに——」, 『待兼山論叢』文学篇 第34号, 大阪大学文学会, pp. 1-13, 2000年
- 内藤 高 「日本画と聖母子」, 『言語文化』第4-2号, 同志社大学言語文化学会, pp. 429-446, 2001年

1-2. 翻訳，書評，解説，辞典項目等

(1) 翻訳書

- 内藤 高 「ジャン・リュック・ラガルス『家に居て，私は雨が降ってくるのを待っていた』」『同志社外国文学研究』第78号, 同志社外国文学会, pp. 27-65, 1998年
- 内藤 高 「ポール・クローデル「内堀十二景」」, 『同志社外国文学研究』第79号, 同志社外国文学会, pp. 50-55, 2000年
- 内藤 高 「ミッシェル・タピエ「生成する美学」」, 『「草月とその時代」展カタログ』, 芦屋市立美術館, pp. 148-153, 2002年

(2) 辞典項目

- 内藤 高 「ファッション (アンリ)」, 『エンカルタ百科事典99』, マイクロソフト, 1999年

(3) その他 (エッセー, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

内藤 高 「「クローデル, 日本を聴く」研究集会参加報告」, 『GALLIA』第41号, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 71-74, 2002年

内藤 高 「京都国立近代美術館「京都画壇と『西洋』」展評」『比較文学研究』第76号, 東大比較文学会, pp. 136-140, 2000年

1-3. 口頭発表

(1) 国際学会

内藤 高 “*Écriture sonore dans les poèmes japonais de Paul Claudel*”, *Colloque franco-japonais*, 関西日仏学院/京都府京都市, 1998年11月7日

(2) 国内学会

内藤 高 「クローデルと絵画」, 共同, 内藤 高, 日本フランス語フランス文学会秋期全国大会, 日本フランス語フランス文学会, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 1998年10月24日

内藤 高 「大正京都画壇に西洋との接触がもたらしたもの」, 単独, 日本比較文学会関西支部研究例会, 日本比較文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2000年12月2日

(3) 研究会

内藤 高 「<心>と<外部>の接点——近代日本文学における住まいの詩学——」, 単独, 広域文化表現論講座共同研究, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 2001年11月15日

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

なし

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

日本比較文学会・事務局長 1999年6月~現在

日本比較文学会・理事 2001年6月~現在

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

内藤 高 教授

1学期	比較文学特殊講義	文学と身体
2学期	比較文学特殊講義	住まいの文学
1学期	比較文学特殊講義	江戸と西洋

2学期	比較文学特殊講義	江戸と西洋
1学期	比較文学特殊演習	モダニズム研究
2学期	比較文学特殊演習	モダニズム研究
1学期	比較文学講義	文学と身体
2学期	比較文学講義	住まいの文学
1学期	比較文学講義	江戸と西洋
2学期	比較文学講義	江戸と西洋
1学期	比較文学演習	モダニズム研究
2学期	比較文学演習	モダニズム研究
通年	比較文学博士論文作成演習	比較文学論文指導
通年	比較文学修士論文作成演習	比較文学論文指導
1学期	比較文学講義	文学と身体
2学期	比較文学講義	住まいの文学
1学期	比較文学講義	江戸と西洋
2学期	比較文学講義	江戸と西洋
1学期	比較文学演習	文学批評入門
2学期	比較文学演習	文学批評入門
通年	比較文学演習	比較文学卒業論文作成指導

佐伯順子（非常勤講師・同志社大学文学部教授）

1学期	比較文学特殊講義	男の絆の比較文学
1学期	比較文学講義	男の絆の比較文学

有満保江（非常勤講師・同志社大学言語文化教育研究センター教授）

2学期	比較文学特殊講義	ポストコロニアル文学の諸問題
2学期	比較文学講義	ポストコロニアル文学の諸問題

中 直一（非常勤講師・大阪大学言語文化学部教授）

2学期	比較文学特殊演習	森鷗外の翻訳分析
2学期	比較文学演習	鷗外の翻訳分析

3. 共通教育

内藤 高 教授

Iセメスター	主題別	ジャポニスム
IIセメスター	専門基礎	比較文学入門

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：佐伯順子（同志社大学文学部教授）

大阪大学大学院文学研究科の専門分野・比較文学は、1996年10月の教授着任とともに活動を開始した比較的若い研究室といえるが、専任教授を中心に、大阪大学言語文化学部および学外からの非常勤講師とともに、多角的な視点から比較文学の研究および教育に邁進しようとする姿勢が見られる。

具体的に、教官および大学院生の研究活動、業績について見てみると、教官においては、ポー

ル・クローデルを中心とした絵画と文学の比較研究、京都画壇などの日本画に対する西洋絵画の影響、近代日本文学における住まいの問題等、比較文学の主軸となる二つの方法、すなわち、影響研究、対比研究をまんべんなく取り入れた研究成果が認められる。また、文学と絵画、あるいは音の問題など、視聴覚的要素を含めた、ジャンル間を横断する研究の事例としても、比較文学の幅広い可能性を示すものとなっている。さらに、近代と近代以前の文学および文化の比較という時間的な比較の視点も含まれており、比較文学の多様な方法を駆使した研究活動が実践されていることがわかる。大学院生の研究成果においても、こうした指導教官の研究活動を反映して、多彩な業績が生まれている。日本と韓国の近代文学を父子関係を主題として検討したモチーフ比較、三島由紀夫とヘミングウェイを性の観点から比較した対比研究など、共通のモチーフを軸とした比較研究の成果とともに、土田麦僊の研究、小説と映画の研究といった形で、絵画、映画、文学のジャンル横断的比較研究も豊かに生まれている。比較文学の研究は、過去には外国文学、ことに西洋文学が日本文学に与えた影響研究を中心に行われてきたが、文学という枠組みをこえ、絵画、映画などの視聴覚資料を含めたジャンル横断的な研究は、比較文学のなかでも比較的新しい領域であるといつてよい。また、韓国文学をはじめとするアジア諸国の文学との関係を視野に入れた研究も、西洋との関係に偏りがちであった比較文学研究により幅広い視点を提供するものである。さらに、対比研究と影響研究の融合も、今後の成果が期待される領野であり、そこに、近年文学研究の諸分野で関心が高まっているセクシュアリティの視点を加えた研究事例もみられる。このように、個々の、そしてその総体としての比較文学研究室の研究活動には、比較文学研究における先駆性や独創性が多様な点において認められる。

研究の実証性、あるいは手堅さに関しては、クローデルのテキストや、日本の近代絵画をはじめとする活字資料および視覚資料を丁寧に読み解き、解釈することにより、比較文学の基本的な方法であるエクスプリカション・ド・テキストが忠実に実践されている。こうした、教官によるきめの細かい実証的な研究の模範に従い、大学院生の研究業績においても、島崎藤村や三島由紀夫、ヘミングウェイやユルスナールなど、日本文学および外国文学の作品を丁寧に読み解く作業を通じて、比較文学研究がともすれば陥りがちな印象批評ではない、学問的な実証的分析がなされているといえるだろう。また、「接吻の日本文化史」のような研究業績には、古典文学から近代文学にわたる広汎な資料の博搜の成果が認められる。

研究の持続性については、教官においても大学院生においても、多様な視点を持ちながら、絵画と文学、父子関係、性の問題といった一貫した主題を追求し続けようとする姿勢が感じられ、教官および大学院生が、口頭発表においても論文執筆においても一貫した問題意識に基づく成果を継続的に発表し、積み重ねている事実から、一過性の問題意識に終わらない持続的な主題の追及という着実な研究姿勢が備わっていることがわかる。これにより、おのずと研究の体系的展開がもたらされ、各研究者の問題意識が、文学や芸術の諸ジャンルの相互交流のあり方、家族や人間関係のあり方といった大きな主題を問い直すという方向で体系的に進展していることがうかがえる。

このように、多様性と一貫性を兼ね備えた教官、および大学院生の研究活動は、フランス文学、

日本文学、韓国文学、あるいは絵画や文学を個別に研究する場合には必ずしも見えてこない問題意識や研究成果を提示するという意味で、日本文学、フランス文学等の各国文学研究、あるいは美術史や美学芸術学等の隣接分野など、比較文学以外の学問分野に対して、研究テーマの設定および、研究の方法、成果の両面において、刺激的な波及効果をもたらすことが予測される。それは、近年の学問動向である、いわゆる学際的な研究の進展に寄与するものともなるであろう。学内外の研究者を交えてのシンポジウムや講演会が、比較文学専攻の学生以外の関心をも集めている実績をみれば、比較文学研究室の活動が隣接諸分野の関心をよび、豊かな影響を与えていることが明らかであろう。

過去5年間における専任教授、および非常勤講師による講義の内容を見ると、西洋の芸術が日本に与えた影響、翻訳の問題、洋学と明治ジャーナリズムなど、外国の文学、芸術が日本に与えた影響研究、動植物モチーフ、身体、住まいといったモチーフ比較など、教育の面でも、比較文学の様々な方法が多角的に取り入れられていることがわかる。また、ポスト・コロニアリズムやジェンダーなど、近年高まっている問題関心を取り入れる配慮もなされている。

専任教授1名という体制であるため、一人の教官が多様なジャンルをカバーしなければならない負担の大きさが懸念されるものの、論文の審査は、専任教授1名、日本文学の専任教授1名、及び他の専門分野の教授1名で行われており、隣接諸分野との連携によるまとまった教官組織が教育効果をあげていることがうかがえる。

全国の国公立大学を通して、学部、大学院ともに比較文学の専門を置いている大学は非常に少なく、特に関西圏の国立大学としては唯一といえるため、以上のように活発な研究活動が進みつつある大阪大学大学院の比較文学研究室は、日本における比較文学研究の大きな拠点のひとつ、ことに関西における中心的な拠点として、比較文学研究の進展に大いに寄与することが期待される。すでに日本比較文学会の事務局として学会の中核を担う役割を引き受けている実績もあり、大学院生が全国的な研究動向に身近に触れながら研究を進める条件にもめぐまれている。また、比較文学会の全国大会や関西支部大会、研究例会において、教官はもとより多数の大学院生が研究発表を行っており、学会の運営面においても研究活動においても、その実績は着々と積み重なりつつある。

ただ、まだ発足してから歴史の浅い研究室であるために、学位論文の授与件数や常任の研究者の輩出数は必ずしも多くはない。また、口頭発表については、国内学会では活発であるものの、国際学会における発表例がまだあまり多くないように見受けられるので、近年の学部生、大学院生の増加に伴い、研究者のさらなる輩出や、国際比較文学会（ICLA）をはじめとする海外の学会での発表が活発化することが期待される。海外との交流という点では、留学生の受け入れについて一定の実績が認められるが、大学院生、学部学生等の留学に関してはまだ事例が少ないようである。比較文学の研究においては、海外留学による研究経験の蓄積が重要な位置を占めるので、今後は、学部生、大学院生の海外への留学も奨励されることが望ましいであろう。また、現状の専任教授1名という体制では、前述のように教官にかかる過剰な負担が懸念されるので、今後、スタッフの充実をはかり、さらに多様な研究活動が展開されることが望まれる。

最後に、研究成果を発表する場としての学術雑誌の存在は、研究活動に不可欠なものであるが、現在、2003年3月に研究誌の第一号の発行が計画されている由であり、日本の比較文学研究の向上のためにも、大阪大学大学院の比較文学研究室を母体とした研究誌を発刊することが早急の課題であろう。

以上のように、大阪大学文学部大学院の比較文学研究室は、一部に今後の課題を残しながらも、発足まもない若い勢いに満ち、日本における比較文学研究の拠点のひとつとして将来の発展が大いに期待される存在であるといえる。

3-14 中国文学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

「中国文学」は旧文学科内の国文学，国語学，比較文学が再編成された1995年に開設され，当初は専任スタッフ一名で運営されたが，現在，教官二名，併任教官一名，助手一名によって運営されている。現在，所属する学生は，大学院六名，学部五名。教官二名の専門分野は一名が伝統文学（文言体の詩文），一名が白話文学（白話体の戯曲・小説）であり，大学院学生六名の研究対象は三名が伝統文学，三名が白話文学となっている。本専門分野は，主に清朝時代以前の漢語文献について，文言体と白話体の別なく，文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育・研究の主眼が置かれており，そのため教官スタッフも伝統文学と白話文学を専門とするものが各一名ずつ配置されている。授業は，文献の精密な読解力とそれを踏まえての問題構成力を養うべく，大きく分けて演習と講義の二種類が設けられている。また，研究室内の教育・研究活動をより活性化するために，カリキュラムとは別に，教官スタッフを中心に三種の研究会在が組織されており，文言体（宋代の詩），白話体（明代の戯曲），吏牘体（元代の法律文書）による漢語資料の訳注稿の作成が行われている。これらの研究会は単に教育活動の一環であるのみならず，それぞれの分野で一級の研究業績を上げることを目標にしており，他大学や他専門分野の研究者も参加している。本専門分野の教育・研究活動の特色は，規模は小さいながらも，中国の古典文学の領域をバランスよくカバーしている点にある。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：高橋文治

助教授：浅見洋二

助手：加藤 聡

2. 在学生（2002年4月現在）

2002年度の学生数								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	4	2	0	0	0	0	0	0

※うち留学生0名，社会人学生0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	2	1	0	0	0
'98	4	1	1	0	0
'99	2	3	0	0	0
'00	7	1	1	0	1
'01	5	2	0	0	0
計	20	8	2	0	1

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	1	0	0	0	0	1
'98	1	1	0	0	0	2
'99	2	0	0	0	0	2
'00	2	0	0	0	0	2
'01	1	1	0	0	0	2
計	7	2	0	0	0	9

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	1	0	0	0	1
'98	0	0	0	0	0	0
'99	0	0	0	0	0	0
'00	1	0	0	0	0	1
'01	0	0	0	0	0	0
計	1	1	0	0	0	2

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 大村由紀子 「明末における『搜神記』出版について——当時の知識人の小説評価に向けて」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 32, 1998年
- 横山友美 「『封神演義』——民間神仰とのかかわり——」, 『金沢大学中国語中国文学教室紀要』, 2, 1998年
- 加藤 聰 「初唐期近体詩における四声・八病説の運用」, 『集刊東洋学』, 82, 1999年
- 加藤 聰 「唐代における韻律意識について」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 33, 1999年
- 大村由紀子 「『搜神記』第六・七巻成立小考」, 『中国研究集刊』, 26, 2000年
- 西尾 俊 「『松陵集』における諷諭性について」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 34, 2000年
- 小林春代 「清真漫詞的網状框架及其読解」, 『天津師範大学学报』2001年第6期, 2001年

(2) 発表

- 加藤 聰 「初唐期近体詩における四声・八病説の運用」, 日本中国学会第49回大会, 発表要旨, 1997年
- 加藤 聰 「初唐詩人與其“八病説”運用」, 中国唐代文学会第10届年会暨唐代文学国際学術研討会, 発表要旨, 2000年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 1 名

外国人：1名

'97年度：0名 '98年度：0名 '99年度：0名 '00年度：0名 '01年度：1名

5. 大学院生・学部学生等の留学 計 1 名

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 1 名

'97年度：0名 '98年度：0名 '99年度：0名 '00年度：1名 '01年度：0名

<内訳>

2000年度 (D 修了) 加藤 聰 大阪大学大学院文学研究科 助手

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

'97年度：0名 '98年度：1名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：0名

<内訳> 教職 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 1 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 1 名

10. 刊行物

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1997年10月17日、「第8回中唐文学学会大会」(国内学会)

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

2001年4月～, 烏台筆補研究会

2001年9月～, 石門文字禪研究会

2002年2月～, 中国古典戯曲研究会

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

「中国文学」は、1995年に開設された新しい専門分野であるため、教育環境として不十分な点が多く見られる。たとえば、大学院学生等が共同で利用する研究室は2001年4月に漸く割り振られたが、その面積は不十分であり、またそこに収められる工具書、研究書、OA機器等の備品も必ずしも十分とは言えない。特に小説・戯曲関係の図書資料は基本的なものの整備さえ不十分な状況にある。中国文学の教育・研究活動を考える上で、文学関係の基本図書を充実させることは急務であろう。教官スタッフについて言えば、現在、中国語学や現代文学等の分野を専門とする教官を欠いている。更には、現代中国語の実践的な運用能力を高めるためのネイティブの教官(外国人教師)を欠いており、今後検討の余地がある。特に中国語の外国人教師の不在は、他の大学と比較して看過しえない問題である。

また、中国文学は開設もない新しい専門分野であるため、大学院学生の数が少なく、博士後期課程を修了して研究職についた卒業生はまだ一名しかいない。したがって、本専門分野全体の研究業績を見た場合、主要なものは教官スタッフによるもので占められる。今後は、大学院学生による研究業績、教官と大学院学生共同の研究業績が増えることが望まれるばかりでなく、研究誌の発刊も検討されるべきであろう。ただし、教官スタッフを中心に複数の充実した研究会が開かれ、それら研究会の成果が次第に形になりつつあるのは、大いに評価しうる点だと思われる。本専門分野の教官スタッフ高橋文治(教授)は、講義では元明代の戯曲・小説をテーマにその文学史的意義や社会との関わりを講じ、演習では訓詁に力点を置いて『白兔記』や明末短編小説等を読んでいる。高橋は、元朝期の社会と文学の関わりを追って研究を進めており、最近五カ年の研究業績も同様の観点から展開されたものである。その点で、研究の一貫性は十分に認められるが、ただ、社会史としての元朝研究が文学研究といかに結びついていくかが、今後の課題と言えよう。

浅見洋二（助教授）は、講義では六朝・唐・宋を中心とする時期の詩と詩学について講じ、演習では蘇軾の詩等を共同で読み進めている。浅見の研究業績としては、詩と絵画、詩と歴史学の関係に関するもの等があり、中国古典詩学全体を視野に入れた研究となっている。研究対象の幅広さと問題設定の斬新さでは一定の評価を与えられるべきであるが、個別の事象に対するより精密な考察が今後の課題として求められよう。

加藤聰（助手）は、研究室の運営と大学院学生・学部学生の教育全般に関して尽力している。加藤の研究業績としては、近体詩の韻律をめぐる一連の研究がある。大量の資料を精密に処理する手堅い研究方法は一定の評価を与えられるべきものである。加藤は、現在、唐代文学に関する博士論文を準備中であり、より幅広い視野からの考察が期待される。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 高橋文治 「至元十七年の放火事件」、『東洋文化学科年報』, 12, 追手門学院大学東洋文化学科, pp. 62-76, 1997年
- 高橋文治 「汲水遇子と磨房重会：明代『白兔記』の演变」, 阿頼耶順宏・伊原澤周両先生退休記念論集『アジアの歴史と文化』, 汲古書院, pp. 249-267, 1997年
- 高橋文治 「李三娘の物語——『劉知遠諸宮調』と仏教説話——」, 『東方学創立五十周年記念東方学論集』, 東方学会, pp. 799-812, 1997年
- 高橋文治 「張留孫の登場前後——発給文書から見たモンゴル時代の道教——」, 『東洋史研究』Jan. 56, 京都大学文学部東洋史研究室, pp. 66-96, 1997年
- 高橋文治 「モンゴル時代全真教文書の研究（三）」, 『追手門学院大学文学部紀要』, 33, 追手門学院大学文学部, pp. 132-154, 1997年
- 高橋文治 「承天観公據について」, 『追手門学院大学文学部紀要』, 35, 追手門学院大学文学部, pp. 1-22, 1999年
- 高橋文治 「モンゴル王族と道教——武宗カイシャンと苗道一——」, 『東方宗教』, 93, 日本道教学会, pp. 24-44, 1999年
- 高橋文治 「クビライの令旨二通——もう一つの「道佛論争」——」, 『アジア文化学科年報』, 2, 追手門学院大学アジア文化学科, pp. 64-76, 1999年
- 高橋文治 「「任風子」劇をめぐる」, 『興膳宏教授退官記念中国文学論集』, 汲古書院, pp. 433-446, 2000年
- 高橋文治 「元の白話碑」, 『月刊しにか』, 12月3日, 大修館書店, pp. 69-73, 2001年
- 浅見洋二 「「詩中有画」をめぐる——中国における詩と絵画——」, 『集刊東洋学』, 78, 中国文史哲研究会, pp. 58-80, 1997年
- 浅見洋二 「中国の自然認識におけるピクチュアレスク」, 『待兼山論叢』, 31, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-18, 1997年
- 浅見洋二 「「詩中有画」と「宛然在目」——中国における詩と絵画——」, 松本肇・川合康三編, 『中唐文学の視角』, 創文社, pp. 273-309, 1998年
- 浅見洋二 「距離と想像——中国における詩とメディア, メディアとしての詩——」, 宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』, 汲古書院, pp. 275-320, 1998年
- 浅見洋二 「「詩中有画」と「著壁成絵」——中国における詩と絵画——」, 『日本中国学会報』, 50, 日本中国学会, pp. 108-123, 1998年
- 浅見洋二 「史料論としての文学研究に向けて——宋代文人の詩と詩学——」, 『アジア遊学』, 7, 勉

- 誠出版, pp. 28-40, 1999年
- 浅見洋二 「標題の詩学——沈約, 王昌齡, 司空図, そして宋代の「著題」論を結ぶもの——」, 『中国文人の思考と表現』, 汲古書院, pp. 149-168, 2000年
- 浅見洋二 「The Study of Poetry as Historical Source Material: Focusing on the Term 'Poetic-History」, 『The Study of Song History from the Perspective of Historical Materials』, pp. 180-203, 2000年
- 浅見洋二 「詩はどこから来るのか?それは誰のものか?——宋代詩学における〈内部〉と〈外部〉, 〈自己〉と〈他者〉, あるいは〈貨幣〉〈商品〉〈資本〉——」, 伊原弘・小島毅編『知識人の諸相』, 勉誠出版, pp. 162-177, 2001年
- 浅見洋二 「中国の詩と風景——「江山之助」をめぐる——」, 『アジア遊学』, 31, 勉誠出版, pp. 15-25, 2001年
- 浅見洋二 「標題的詩学——論宋代文人的“著題”論及其源流——」, 『新宋学』, 1, 上海辞書出版社, pp. 199-208, 2001年
- 浅見洋二 「詩人とは誰か——古典中国の詩と詩学——」, 『るしおる』, 45, 書肆山田, pp. 64-69, 2001年
- 浅見洋二 「「作家と作品」, 「詩識」, そして「恐ろしい文学」——作品が読まれるということ——」, 『中国文学報』, 62, 中国文学会, pp. 117-129, 2001年
- 浅見洋二 「文学の歴史学——宋代における詩人年譜, 編年詩文集, そして「詩史」説について——」, 川合康三編『中国の文学史観』, 創文社, pp. 61-99, 2002年
- 浅見洋二 「「夢中得句」をめぐる——中国詩学における〈内部〉と〈外部〉, 〈自己〉と〈他者〉——」, 荒木浩編, 『〈心〉と〈外部〉』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 121-136, 2002年
- 加藤 聰 「初唐期近体詩における四声・八病説の運用」, 『集刊東洋学』, 82, 中国文史哲研究会, pp. 61-82, 1999年
- 加藤 聰 「唐代における韻律意識について」, 『待兼山論叢文学篇』, 32, 大阪大学文学会, pp. 29-41, 1999年
- 加藤 聰 「唐代の齊梁体・齊梁格詩」, 『中国研究集刊』, 28, 大阪大学中国学会, pp. 115-129, 2001年

1-2. 著書

- 高橋文治 『『董解元西廂記諸宮調』研究』, 赤松紀彦・井上泰山・金文京(京都大学)・小松謙・高橋繁樹・高橋文治, 汲古書院, 514p., pp. 27-32/352-421, 1998年
- 高橋文治 『他文化を受容するアジア』, 上村祥二・加賀屋寛・高橋文治・武田秀夫・奥田尚・南出真助・永吉雅夫・正信公章・井谷鋼造・小関三平, 和泉書院, 325p., pp. 58-78, 2000年

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 書評

- 高橋文治 「田仲一成『明清の戯曲』」, 『中国文学報』, 63, 京都大学中国文学会, pp. 96-10, 2002年.
- 浅見洋二 「大野修著作『書論と中国文学』」, 『しにか』, 大修館書店, 12-7, pp. 120-121, 2001年

(2) 辞典項目

- 浅見洋二 『集英社世界文学大事典』, 5項目, 集英社, 3巻, pp. 5, 1997年
- 浅見洋二 『集英社世界文学大事典』, 4項目, 集英社, 4巻, pp. 4, 1997年
- 浅見洋二 『集英社世界文学大事典』, 5項目, 集英社, 5, pp. 5, 1997年
- 浅見洋二 『日中英言語文化事典』, 27項目, マクミランランゲージハウス, pp. 27, 2000年
- 浅見洋二 『集英社世界文学事典』, 18項目, 集英社, 2002年

(3) その他 (エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 加藤 聰 「近代詩韻律関連研究文献目録」, 『第8回中唐文学学会会報』, 中唐文学学会, pp. 106-110, 1997年
- 高橋文治 「三国志劇」, 『週刊朝日百科「世界の文学」』, 朝日新聞社, 107, pp. 206-207, 2001年

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 浅見洋二 「標題的詩学——宋代文人の“著題”論及其源流——」単独, 第1回宋代文学国際学術研討会, 宋代文学学会, 上海蘭生大酒店/中華人民共和国上海市, 2000年3月30日
- 浅見洋二 「The Study of Poetry as Historical Source Material: Focusing on the Term 'Poetic-History」, 第36回国際アジア・北アフリカ研究会議, 国際アジア・北アフリカ研究会議, Palais des Congres / Montreal, 2000年8月30日
- 浅見洋二 「論“詩史”説——“詩史”説と宋代詩人年譜, 編年詩文集編纂之関係——」, 単独, 第10回唐代文学国際学術研討会, 唐代文学学会, 武漢大学/中華人民共和国武漢市, 2000年10月17日
- 浅見洋二 「宋代史研究の新視角・芸術と文学」, 第46回国際東方学者会議, 東方学会, 日本教育会館/東京都千代田区, 2001年5月18日
- 加藤 聰 「初唐詩人與其“八病説”運用」, 中国唐代文学学会第10届年会暨唐代文学国際学術研討会, 中国唐代文学学会, 武漢大学/中華人民共和国湖北省武漢市, 2000年10月16日

(2) 国内学会

- 浅見洋二 「『詩史』観の再検討——白居易「和答詩・和陽城賦」を手がかりに——」, 日本中国学会第51回大会, 日本中国学会, 関西大学会館/兵庫県吹田市, 1999年10月2日
- 浅見洋二 「二人の文学者, 二つの文学ジャンル——中国の文学批評における一つの類型——」, 単独, 日本中国学会第53回大会, 日本中国学会, 福岡大学/福岡市城南区, 2001年10月7日
- 加藤 聰 「初唐期近体詩における四病・八病説の運用」, 単独, 日本中国学会第49回大会, 日本中国学会, 大阪市立大学/大阪府大阪市, 1997年10月18日

(3) 研究会

- 浅見洋二 「史料論としての文学研究に向けて——宋代文人の詩と詩学——」, 単独, 宋代史研究者から見た中国研究の課題——士大夫, 読書人, 文人, あるいはエリート——, 宋代史研究会, 東京大学大学院人文・社会系研究科/東京都文京区, 1999年3月21日
- 浅見洋二 「詩はどこから来るのか?それは誰のものか?——中国詩学における〈内部〉と〈外部〉, 〈自己〉と〈他者〉, あるいは〈貨幣〉〈商品〉〈資本〉——」, 単独, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論共同研究発表会——〈心〉と〈外部〉——, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2001年11月15日

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 浅見洋二 「中国の詩と風景」, 単独, 懐徳堂平成11年度春季講座, 懐徳堂, 大阪府立文化情報センター/大阪市, 1999年5月26日
- 浅見洋二 「中国宋代の詩詞を読む」, 単独, 懐徳堂古典講座, 懐徳堂, 新阪急ビル/大阪市, 2001年-2002年/4月-2月/6日-1日

2. 教員の受賞歴

- 高橋文治 東方学会賞 東方学会「元刊本「薛仁貴衣錦還郷」劇をめぐって」およびそれに関連する研

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況,

平成11年度～13年度 課題番号：11610465 基盤研究(C)(2) 研究代表者：浅見洋二
『唐宋期の詩と詩学に関するメディア論的研究』 2,900,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

高橋文治
日本道教学会評議委員 2002年4月～

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

高橋文治 教授

1学期	中国文学特殊講義	白話文学史の諸問題・第一部
2学期	中国文学特殊講義	白話文学史の諸問題・第二部
1学期	中国文学特殊演習	白話小説の研究
2学期	中国文学特殊演習	戯曲文学の研究
1学期	中国文学特殊演習	当代文学を読む
1学期	中国文学講義	白語文学史の諸問題・第一部
2学期	中国文学講義	白語文学史の諸問題・第二部
1学期	中国文学演習	白話小説の研究
2学期	中国文学演習	戯曲文学の研究
1学期	中国文学演習	当代文学を読む
通年	中国文学博士論文作成演習	中国文学・語学の諸問題(浅見助教授と共同)
通年	中国文学修士論文作成演習	中国文学・語学の諸問題(浅見助教授と共同)

浅見洋二 助教授

1学期	中国文学特殊講義	中国詩学の諸問題
1学期	中国文学特殊演習	宋代文学研究・第一部
2学期	中国文学特殊演習	宋代文学研究・第二部
2学期	中国文学特殊演習	“文学の歴史学”研究
通年	中国文学博士論文作成演習	中国文学・語学の諸問題(高橋教授と共同)
通年	中国文学修士論文作成演習	中国文学・語学の諸問題(高橋教授と共同)
1学期	中国文学講義	中国詩学の諸問題
1学期	中国文学演習	蘇軾詩研究・第一部
2学期	中国文学演習	蘇軾詩研究・第二部
2学期	中国文学演習	“文学の歴史学”研究

浅見洋二 助教授

1 学期	言語文芸史論特殊演習	宋代文学研究・第1部
2 学期	言語文芸史論特殊演習	宋代文学研究・第2部
通年	言語文芸環境論特殊演習	言語文芸環境論共同研究
1 学期	言語文芸史論演習	蘇軾詩研究・第1部
2 学期	言語文芸史論演習	蘇軾詩研究・第2部

佐々木猛 講師（非常勤講師・大阪外国語大学外国語学部教授）

2 学期	中国語学特殊講義	漢語音韻学
2 学期	中国語学講義	漢語音韻学

深澤一幸 講師（非常勤講師・大阪大学言語文化学部教授）

通年	中国文学特殊演習	唐代文学史の諸問題
通年	中国文学演習	唐代文学史の諸問題

2. 学部授業担当

高橋文治 教授

2 学期	中国文学講義	中国文学史・第二部
1 学期	中国文学講義	白話文学史の諸問題・第一部
2 学期	中国文学講義	白話文学史の諸問題・第二部
1 学期	中国文学演習	白話小説の研究
2 学期	中国文学演習	戯曲文学の研究
1 学期	中国文学演習	当代文学を読む

浅見洋二 助教授

1 学期	中国文学講義	中国文学史・第一部
1 学期	中国文学講義	中国詩学の諸問題
1 学期	中国文学演習	蘇軾の詩を読む・第一部
2 学期	中国文学演習	蘇軾の詩を読む・第二部
2 学期	中国文学演習	正史文学者列伝を読む

佐々木猛 講師（非常勤講師・大阪外国語大学外国語学部教授）

2 学期	中国語学講義	漢語音韻学
------	--------	-------

深澤一幸 講師（非常勤講師・大阪大学言語文化学部教授）

通年	中国文学演習	唐代文学史の諸問題
----	--------	-----------

3. 共通教育

高橋文治 教授

I セメスター	主題別	中国通俗文学の世界
---------	-----	-----------

浅見洋二 助教授

II セメスター	主題別	中国古典詩の世界
----------	-----	----------

4. 他大学における集中講義等

浅見洋二助教授

東北大学	1998年度	2学期	中国文学	講義	宋代詩学の諸問題
名古屋大学	1998年度	2学期	中国文学	講義	宋代詩学の諸問題
広島大学	2000年度	2学期	中国文学	講義	宋代詩学研究
広島大学	2001年度	1学期	中国文学	講義	宋代詩学研究

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：金 文京（京都大学人文科学研究所教授）

中国文学は三千年にわたる長い歴史と、古典文学、通俗文学、現代文学、さらにそれらすべての基礎となる語学など広範な領域を有する分野であり、一つの学科のスタッフでそれらをすべて覆うことは、一般的に言ってなかなか困難である。現にスタッフの多い大学でも、ある特定の領域に偏りが出ることが少なくないのである。しかし阪大の場合、三人という少数のスタッフながら、高橋文治氏が小説・戯曲を中心とする通俗文学、浅見洋二氏と加藤聰氏が詩歌を中心とする古典文学を専攻し、さらに浅見氏は現代文学にも造詣が深く、加藤氏は語学的な観点から詩歌を研究しており、少ないスタッフでほぼ全領域をカバーしている点、きわめてバランスのとれた理想的な人員構成となっている。この点は健全な教育、研究が行われるうえで、望ましい基礎条件をそなえているものと言えるであろう。

高橋氏は、中国文学の中でももっとも難解な領域のひとつとされる元代の戯曲を専門とするが、戯曲の背景をなす元代の歴史、社会、宗教についても広い視野と綿密な方法によって研究をすすめており、とかく乖離しがちな歴史研究と文学研究を総合的に把握できる数少ない研究者として、学界でもユニークな存在である。私が京都大学人文科学研究所において主催する「元代の社会と文化」研究班においても、氏は中核メンバーの一人であり、これまでに『董解元西廂記諸宮調研究』など共同研究の成果をともに手掛けてきた経験から、氏は教授として全体を統率し、学生を教育するに十分な能力をもっていると信じていることができる。

浅見氏は、唐宋代の詩を中心に、詩論、そしてまた詩と絵画との関係など芸術論的な研究で注目すべき多彩な業績をあげている。またこの分野の専門家による全国組織である「中唐文学研究会」の有力なメンバーの一人として、学界での活躍にも見るべきものがある。さらにご本人自身、詩人として詩集を出版したこともあり、その方面でも高い評価を得ていると仄聞する。そのため特に中国の現代詩にもくわしく、現在中国で活躍する詩人を招聘して、講演会を開催するなどの活動をも積極的に行っており、その研究方向は、高橋氏とある意味で対照的でありながら、互いに補う関係にあると言えるであろう。

加藤氏は、古典詩の特に格律の分野で意欲的な研究をすすめているが、この分野では中国音韻学の知識が不可欠であり、日本では研究者がきわめて少ない。そういう意味で、氏の研究は、同じ古典詩歌の分野ながら浅見氏の研究とは表裏の関係にあるといえ、比較的未開拓の分野での将来の活躍が期待されるのである。

このようにスタッフの三人は、三者三様の特徴をもちながら、全体として中国文学の各領域と主な研究方法をほぼカバーしており、相互の啓発により、全体として総合的でありながら、特色

のある学風を近い将来に樹立することが望まれる。またこのことは、学生に対する教育、あるいは図書の収集などにおいても良好な影響をもたらすと考えられる。さらに学内外を問わず、他分野とりわけ歴史学、美学、言語学などの研究者との共同研究を行う際に、すぐれた成果をあげうる潜在的可能性をももっていると考えられ、今後、その方面においてもより一層の積極的な活躍が期待されるであろう。

学生への教育面については、いまだ卒業生の少ない現状において評価をくださことは難しいが、前述の理由により、学生がどの領域を選択するにせよ、十分な指導ができる理想的な体制を備えていると思われるのであって、今後の努力次第で、優秀な学生を育成し、学界にもより大きな貢献ができるものと信じる。

一般社会に対する寄与として、懐徳堂講座において、外部からの講師を招き中国の小説についての連続講演会を主催したことを特筆したい。その成果は、昨年十二月に、『中国四大奇書の世界』（和泉書院）として公刊された。この本は、研究書としての水準をもちながら、一般読者にも分かりやすい入門書の性質をもあわせもっており、社会に対して開かれた学術研究が求められる昨今の状況に鑑みて、時代の要請に的確にこたえたものであると言えよう。今後ともこのような活動をさらにつづけることによって、社会と共生する望ましい大学の未来像の一端を担うよう期待したい。そのためにはスタッフ一同のさらなる自覚と努力が必要であろう。

大阪大学の中国文学専門分野は、1995年に開設され、いまだ歴史が浅い。したがってその教育・研究体制および成果が、歴史のある他校の同分野にくらべてやや遜色のあることはやむを得ないところであろう。しかしながら気鋭のスタッフの積極的な活動により、近い将来に充実した教育・研究環境を実現し、見るべき成果をあげる可能性は大きいと信じることができ、またそれを切に望む次第である。

3-15 国語学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

国語学とは、日本語の音韻、文字・表記、文法、語彙などについて、上代から近・現代にわたり、通時的・共時的に研究するものであるが、大阪大学大学院文学研究科においては、別に現代語を主な対象とする日本語学専門分野があるので、国語学専門分野では通時的研究（国語史研究）に重点を置き、明治以前の時代を主な対象とする。講義・演習などの授業も、課程博士論文・修士論文や学部の卒業論文もまた同様である。文献により実証することを重視するので文学の知識も必要であり、学部では日本文学と専修を同じくし、大学院生の研究発表会などは日本文学・比較文学とともにやっている。

2001年3月に定年退官した前田富祺教授は語彙史、文字史、言語文化史を中心とし、蜂矢真郷教授は語構成、語彙史、上代語の研究を中心とし、2001年4月に昇任した金水敏教授は文法史を中心としつつ役割語の研究など多岐にわたっている。このように、どの研究も、一つの時代に限らない、全体として大きな国語史となると言えるものである。米谷隆史元助手は近世節用集を中心とする語彙の研究を、内田宗一前助手は近世を中心とする文字史を研究してきたが、それらも国語史の中に位置づけられるものである。音韻の分野がやや手薄であったが、2002年10月に専任として着任の岡島昭浩助教授が、音韻史を中心とし辞書などについても研究しているので、今後カバーされて行くと見られる。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 2 助教授 0 講師 0 助手 0

教授 : 蜂矢真郷 金水 敏

2. 在学生（2002年4月現在）

2002年度の学生数								
学部*	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	0	12	0	0	0	0	1	0

*(日本文学と合わせて) ※うち留学生 3名, 社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生*	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	18	1	0	0	0
'98	17	2	2	2	2
'99	18	2	0	2	1
'00	16	5	1	5	0
'01	16	2	2	1	1
計	85	12	5	10	4

* (日本文学と合わせて)

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	1	1	2
'99	0	2	2
'00	1	4	5
'01	1	0	1
計	3	7	10

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- 泉 基博 「十訓抄の敬語表現についての研究」, 論文, '98. 9,
主査: 前田富祺教授, 副査: 蜂矢真郷教授, 荒木 浩助教授
- 池田幸恵 「『五国史』宣命の国語学的研究」, 課程, '99. 3,
主査: 蜂矢真郷教授, 副査: 前田富祺教授, 東野治之教授
- 高山善行 「日本語モダリティの史的研究」, 論文, '99. 7,
主査: 前田富祺教授, 副査: 蜂矢真郷教授, 金水 敏助教授
- 藤田保幸 「国語引用構文の研究」, 論文, '99. 7,
主査: 前田富祺教授, 副査: 工藤真由美教授, 金水 敏助教授
- 林 八龍 「日・韓国語の慣用的表現の対照研究」, 論文, '00. 6,
主査: 前田富祺教授, 副査: 蜂矢真郷教授, 真田信治教授
- 鄭 秀賢 「現代日本語の表現についての研究 —— 韓国語の表現と対照しながら ——」, 論文,
'00. 9, 主査: 前田富祺教授, 副査: 真田信治教授, 金水 敏助教授
- 小椋秀樹 「明治期往来物の国語学的研究」, 課程, '01. 3,
主査: 前田富祺教授, 副査: 蜂矢真郷教授, 川村邦光教授
- 中川正美 「源氏物語文体攷 —— 『うし』『心うし』を中心に ——」, 論文, '01. 3,
主査: 前田富祺教授, 副査: 蜂矢真郷教授, 伊井春樹教授
- 神谷かをる 「古今集語彙の研究」, 論文, '01. 3,
主査: 前田富祺教授, 副査: 蜂矢真郷教授, 伊井春樹教授
- 是澤規三 「上代書記の基礎的研究 —— 『日本書紀』を中心に ——」, 課程, '02. 3,
主査: 蜂矢真郷教授, 副査: 金水 敏教授, 後藤昭雄教授, 湯浅邦弘教授

2. 大学院生等による論文発表等の件数

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	2	1	4	0	0	7
'98	2	1	1	0	3	7
'99	1	1	2	0	0	4
'00	4	1	5	2	0	12
'01	6	2	2	0	0	10
計	15	6	14	2	3	40

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等の 講演会	その他	計
'97	0	1	3	0	0	4
'98	0	5	2	0	0	7
'99	2	1	3	0	0	6
'00	0	2	2	0	0	4
'01	0	5	9	0	0	14
計	2	14	19	0	0	35

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 池田幸恵 「宣命の助詞表示」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 68, 1997年
- 池田幸恵 「宣命の漢文助字——助詞相当の助字について——」, 三重大学日本語学文学会『三重大学日本語学文学』, 8, 1997年
- 池田幸恵 「宣命の文章構造——ノリタマフ系宣命を中心に——」, 萬葉学会『萬葉』, 163, 1997年
- 山口真輝 「『日本霊異記』下巻の訓釈——四本を対照して——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 31, 1997年
- 山口真輝 「『御巫本日本書紀私記』の和訓について——台湾大学蔵『圓威本日本書紀』万葉仮名傍訓との比較から——」, 訓点語学会『訓点語と訓点資料』, 記念特輯, 1998年
- 山口真輝 「御巫本日本書紀私記の配列順序——日本書紀訓注との関わりについて——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 72, 1999年
- 是澤範三 「上代における「若」字使用の様相——比況の場合——」, 愛媛大学人文学部国語国文学会『愛文』, 33, 1998年
- 是澤範三 「上代における「若」字使用の様相——疑問推量の場合——」, 古事記学会『古事記年報』, 41, 1999年
- 是澤範三 「上代における「蓋」字使用の様相——『日本書紀』を中心に——」, 国語文字史研究会『国語文字史の研究』, 5, 2000年
- 是澤範三 「ニキとニギ——伊予の地名〈ニキタツ〉を中心として——」, 愛媛大学人文学部国語国文学会『愛文』, 36, 2000年
- 是澤範三 「『日本書紀』における複音節辞使用の様相」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 34, 2000年

- 是澤範三 「上代における疑問推量の表現——和語と漢語の意味領域と語法的相関——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 75・76, 2001年
- 内田宗一 「黄表紙・洒落本の仮名字体——恋川春町自筆板下本についての比較考察——」, 国語文字史研究会『国語文字史の研究』, 4, 1998年
- 内田宗一 「柳亭種彦自筆資料の仮名字体——草双紙稿本を中心に——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 71, 1998年
- 内田宗一 「『修紫田舎源氏』の仮名字体——作者自筆稿本と板本の比較考察——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 32, 1998年
- 館谷笑子 「接尾語タシの成立過程——タシ型形容詞の考察から——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 69, 1997年
- 館谷笑子 「助動詞タシの成立過程」, 『国語論究』, 7 (中古語の研究), 1998年
- 館谷笑子 「接尾語コシの成立過程」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 33, 1999年
- 館谷笑子 「複合形容詞「一ガタシ」「一ニクシ」」, 国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』, 19, 2000年
- 岡崎友子 「いわゆる「近称の指示副詞」について」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 73, 1999年
- 廣坂直子 「付帯状況を表すタママ節について」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 75・76, 2001年
- 楊 昌洙 「文部省の各種整理案と国定国語教科書から見た漢字字体についての一考察——文字形態素「戸」をめぐる——」, 国語文字史研究会『国語文字史の研究』, 5, 2000年
- 楊 昌洙 「日本近代漢字字体の一考察——文字形態素の比較研究を中心に——」, 韓国日本語学会『日本語学研究』, 2, 2000年
- 楊 昌洙 「漢字字形から見た近代漢字字書の性格」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 75・76, 2001年
- 楊 昌洙 「近代における漢字字書・節用集の漢字字体」, 国語文字史研究会『国語文字史の研究』, 6, 2001年
- 米田達郎 「狂言台本における尊敬表現形式「オーナサレマス」について——鷲流狂言台本『保教本』を中心に——」, 大阪大学国語国文学会『語文』, 75・76, 2001年
- 米田達郎 「遊仙窟古点の一人称代名詞——醍醐寺本の「ワラハ」再考——」, 国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』, 21, 2002年
- 衣畑智秀 「いわゆる「逆接」を表すノニについて——語用論的意味の語彙化——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢文学篇』, 35, 2001年
- 朴 美賢 「日本書紀に見る「姫」「媛」の考察」, 韓国日本語学会『日本語学研究』, 2, 2000年
- 朴 美賢 「日本書紀に見える「尊」「命」の考察」, 古事記学会『古事記年報』, 44, 2002年
- 深澤 愛 「雑誌『太陽』創刊号における外国地名片仮名表記」, 国語文字史研究会『国語文字史の研究』, 6, 2001年
- 星出香依 「『おし動詞』『ひき動詞』について——「おしかへす」「ひきかへす」を中心に——」, 山口大学人文学部国語国文学会『山口国文』, 25, 2002年
- 中井彩子 「『うつくし』の意味変化」, 国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』, 21, 2002年

(2) 発表

- 内田宗一 「『古事記伝』の仮名字体——訓仮名出自の字体の忌避とその背景——」, 国語学会平成10年度秋季大会, 『国語学会平成10年度秋季大会要旨集』, 1998年, 九州大学
- 岡崎友子 「いわゆる指示副詞の歴史的推移の一考察——「サ」「ソウ」を中心に——」, 国語学会2000年度秋季大会, 『国語学会2000年度秋季大会要旨集』, 2000年, 安田女子大学
- 廣坂直子 「「ながら」の変遷——主にアスペクト研究の一環として——」, 国語学会平成10年度秋季大会, 『国語学会平成10年度秋季大会要旨集』, 1998年, 九州大学
- 楊 昌洙 「文字形態素の観点から見た近代漢字字体の一考察」, 韓国日本語学会第1回学術発表会, 『韓国日本語学会第1回学術発表会発表論文集』, 2000年, 世宗大学校
- 米田達郎 「鷲流狂言台本保教本の待遇表現について——対称代名詞「オマエ」を中心に——」, 国語学会2000年度春季大会, 『国語学会2000年度春季大会要旨集』, 2000年, 専修大学

- 朴 美賢 「日本書紀に見る「姫」「媛」の考察」, 韓国日本語学会第1回学術発表会, 『韓国日本語学会第1回学術発表会発表論文集』, 2000年, 世宗大学校
- 依田恵美 「中央語におけるサ行イ音便の衰退時期をめぐって」, 国語学会2001年度秋季大会, 『国語学会2001年度秋季大会要旨集』, 2001年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

是澤範之, 2000年6月10日 古事記学会奨励賞 (国内学会)

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 2 名

<内訳>

外国人: 2名

'97年度: 0名 '98年度: 0名 '99年度: 0名 '00年度: 1名 '01年度: 1名

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度~2001年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で, 大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 4 名

'97年度: 0名 '98年度: 2名 '99年度: 1名 '00年度: 0名 '01年度: 1名

<内訳>

'98年10月 池田幸恵 長崎大学環境科学部 専任講師→助教授 (D 単位修得退学)

'98年10月 小椋秀樹 国立国語研究所研究員 (研究開発部門第一領域) (D 単位修得退学)

'99年4月 内田宗一 大阪大学大学院文学研究科助手*→東京家政学院大学 専任講師 (D 中退)

'00年4月 是澤範三 (台湾) 長營管理学院 助理教授 (单科大学) →長營大学 助理教授 (D 修了)

7. 専門分野出身の高度職業人 ('97年度~'01年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で, システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職, ジャーナリスト, アーティスト, 中・高等学校の教員, その他の職業に就いた者について)

計 2 名

'97年度: 0名 '98年度: 1名 '99年度: 0名 '00年度: 0名 '01年度: 1名

<内訳> 教職 1 名

その他 1 名

<主な職業名・就職先等>

'98年度 岡山県立笠岡工業高校 教諭 1名

'01年度 関西語言学院 講師 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 4 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

* (日本文学専門分野とともに)

「語文」 68~77輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年2回

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

開催 国語語彙史研究会 第56回 ('97. 9. 20), 第61回 ('99. 4. 24), 第66回 ('00. 12. 2)

土曜ことばの会 '97. 7. 17, '99. 10. 17, '00. 1. 29, '00. 4. 22, '00. 7. 8, '00. 10. 7, '01. 4. 14, '01. 7. 14, '01. 10. 13, '02. 1. 26

事務局 国語語彙史研究会 '97年度以前から

国語文字史研究会 '97年度以前から

土曜ことばの会 '97年10月から

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

* (日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 1月, 1日間, 研究誌「語文」を年2回編集・発行

* (日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 10月, 3日間

大学院生研究発表会 9月, 11月, 各2日間

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去5年間の自己点検と評価

前田富祺教授(2001年3月定年退官)・蜂矢真郷教授・金水敏教授(2001年4月昇任)はいずれも多くの研究論文や著書・共著書等を発表しており, 蜂矢教授が1998年11月に第17回新村出賞を受賞するなど, 各人ともその研究が評価されている。また, 各人とも多くの学会の役員等をよく務め, 国語語彙史研究会・国語文字史研究会・土曜ことばの会の事務局を大阪大学に置くなど, 学会活動に対して積極的に接している。これらのことは, 新しく着任の岡島昭浩助教授を含めて, 今後とも継続されると見てよいであろう。そして, これらのことが, 大学院生や学部学生に対し

て、研究の面でも学界活動に接する面でもいろいろなよい影響をもたらしていると思われる。

過去5年間の特徴としては、大学院生（とりわけ博士後期課程の）の学会での研究発表が盛んであることである。これは、大学院生が増えてきている（2001年度では、博士前期課程2名、同後期課程12名、うち、留学生2名、社会人1名、女性9名、他に大学院研究生3名）ことと無関係ではないであろう。研究発表は、国語学会5名、古事記学会2名、韓国日本語学会2名、近代語研究会3名、国語語彙史研究会3名に及んでいる。国語学・日本語学界において、近年は、現代語を研究する人が多く、国語史や明治以前などを研究する人はあまり多くない。そうした中で、多くの文献資料を検討する必要がある、文学の知識も必要であるところの、決して楽ではない研究をしようとする大学院生が増え、これほどの研究発表がなされることは評価されてよいのではないと思われる。とりわけ、是澤範三君は、古事記学会での発表を基にした論文を対象として、古事記学会奨励賞を受賞している。留学生が現代語以外を研究対象としているのも、大きな努力をしていると見られる。常時ではないが大学院生による自主的な研究会も持たれている。

大学院生が増え研究が活発になっているのに対して、研究者として就職した者が4名にとどまっているのは決して望ましい状況とは言えない。しかしながら、近年の状況から見ればこれは健闘している方であろう。

一つの問題は、大阪大学文学部からの大学院進学者が少ない（2002年3月で0名になった）ことである。研究者としての就職が困難なのでなかなか難しいが、進学者確保の一層の努力が必要であると思われる。しかし、留学生を含めていろいろな大学から来た大学院生が切磋琢磨しているので、そのことが必ずしも欠点になっているとは言えないであろう。

今一つの問題は、現在、助手が配置されていないことである。中国文学の助手やTAが助けてくれているが、助手がいた時に比べるとやはり差があると言わざるをえない。助手定員が削減されてきている状況でやむをえないことながら、一つの問題であると言える。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 蜂矢真郷 「助数詞被覆形の用法——名詞被覆形とク活用形容詞語幹とから——」、『日本語文法 体系と方法』、ひつじ書房、pp. 153-170, 1997年
- 蜂矢真郷 「形容詞語幹の用法——～+形容詞語幹の構成の複合形状言について——」、『万葉集の世界とその展開』、白帝社、pp. 331-348, 1998年
- 蜂矢真郷 「カ型語幹の構成」、『国語語彙史の研究』17、和泉書院、pp. 121-142, 1998年
- 蜂矢真郷 「ヤカ型語幹とラカ型語幹」、『国語論究』7（中古語の研究）、明治書院、pp. 158-188, 1998年
- 蜂矢真郷 「ヤク（ヤグ）・ラク（ラグ）」、『国語語彙史の研究』18、和泉書院、pp. 135-150, 1999年
- 蜂矢真郷 「ラカ型語幹の構成」、『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』、和泉書院、pp. 3-26, 1999年
- 蜂矢真郷 「形容詞語幹の用法」、『井手至先生古稀記念論文集 国語国文学藻』、和泉書院、pp. 55-74, 1999年
- 蜂矢真郷 「カ・ヤカ・ラカ型語幹の語基」、『国語語彙史の研究』19、和泉書院、pp. 137-154, 2000年

- 年
- 蜂矢真郷 「ラ接尾形とり接尾形」,『上代語と表記』,おうふう, pp. 129~142, 2000年
- 蜂矢真郷 「形容詞の形容動詞化と形容動詞の形容動詞化」,『語文』75・76輯,大阪大学国語国文学会, pp. 12~19, 2001年
- 蜂矢真郷 「一次的ケシ型と二次的ケシ型」,『国語語彙史の研究』,和泉書院, pp. 55~67, 2001年
- 蜂矢真郷 「古典語の複合語」,『日本語学』20巻9号,明治書院, pp. 50~59, 2001年
- 蜂矢真郷 「一音節語幹の形容詞」,『萬葉』178号,萬葉学会, pp. 1~14, 2001年
- 蜂矢真郷 「形容詞ヒキシ・オホキイ等とその周辺」,『日本語学と言語学』,明治書院, pp. 278~289, 2002年
- 蜂矢真郷 「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」,『国語語彙史の研究』21,和泉書院, pp. 141~158, 2002年
- 金水 敏 「応答詞・感動詞の談話的機能」,田窪行則・金水 敏『文法と音声』,1巻,くろしお出版, pp. 257-279, 1997年
- 金水 敏 「現在の存在を表す「いた」について——国語史資料と方言から——」,『日本語文法——体系と方法——』,ひつじ書房, pp. 245-262, 1997年
- 金水 敏 「国文法」,『文法』,5巻,岩波書店, pp. 119-157, 1997年
- 金水 敏 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」,金水 敏・田窪行則『音声による人間と機械の対話』,オーム社, pp. 257-271, 1998年
- 金水 敏 「いわゆる「ムードの「タ」」について——状態性との関連から——」,東京大学国語研究室創設百周年記念『国語研究論集』,汲古書院, pp. 170-185, 1998年
- 金水 敏 “Discourse management in terms of mental domains”, *Travaux de linguistique Japonaise*, pp. 167-186, 1997年
- 金水 敏 「近世・近代上方方言における存在表現とアスペクト表現——大阪落語 SP を中心に——」,『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式——落語資料を中心として——』, pp. 1-14, 1999年
- 金水 敏 「近世江戸・近代共通語の「いる」と「ある」」,『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式——落語資料を中心として——』,横浜国立大学, pp. 65-74, 1999年
- 金水 敏 「大阪方言の特殊拍アクセントについて——『大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM』による——」,『文法と音声 II』,くろしお出版, pp. 173-199, 1999年
- 金水 敏 「近代語の状態化形式の構造」,『近代語研究』,10巻,武蔵野書院, pp. 391-418, 1999年
- 金水 敏 「複数の心的領域による談話管理」,田窪行則・金水 敏『認知言語学的发展』,ひつじ書房, pp. 251-280, 2000年
- 金水 敏 「役割語探求の提案」,『国語史の新視点』,明治書院, pp. 311-351, 2000年
- 金水 敏 “Demonstratives, Bound Variables, and Reconstruction Effects”, *Proceedings of the Nanzan GLOW——the second GLOW Meeting in Asia——*, 南山大学, pp. 141-158, 2000年
- 金水 敏 「『惠果和尚之碑文』所収「大儀後序」について」,『平成12年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』,高山寺典籍文書総合調査団, pp. 75-79, 2001年
- 金水 敏 「テンスと情報」,『文法と音声 III』,くろしお出版, pp. 24-79, 2001年
- 金水 敏 「《資料紹介》明治・大正時代 SP レコード文句集について」,『語文』75, 76輯,大阪大学国語国文学会, pp. 80-88, 2001年
- 金水 敏 “Discourse management in terms of mental spaces”, *Journal of Pragmatics* 28, pp. 759-779, 1997年
- 金水 敏 “The influence of translation on the historical development of the Japanese passive construction”, *Journal of Pragmatics*, 28, pp. 759-779, 1997年
- 金水 敏 「「あり」「ある」「をり」——存在の表現の意義——」,『國文學 解釈と教材の研究』,43巻11号,學燈社, pp. 62-69, 1998年
- 金水 敏 「指示詞:直示再考」,『別冊国文学』,No. 53, 學燈社, pp. 160-163, 2000年
- 金水 敏 「文法化と意味——「~おる(よる)」論のために——」,『国文学 解釈と教材の研究』,46

卷2号, 学燈社, pp. 15-19, 2001年

金水 敏 「計算機による古典籍資料の組版・印刷について」, 『訓点語と訓点資料』, 記念特輯, 訓点語学会, pp. 12-27, 1998年

金水 敏 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」, 『自然言語処理』, 6巻4号, 言語処理学会, pp. 67-91, 1999年

1-2. 著書

蜂矢真郷 『国語重複語の語構成論的研究』, 塙書房, 450p., 1998年

金水 敏 『文法』(共著), 益岡隆志(神戸市外大) / 仁田義雄(大阪外大) / 郡司隆雄(松蔭女子大) / 金水敏著, 岩波書店, 178p., pp. 119-157, 1997年

金水 敏 『LaTeXによる古典籍のコード化のためのマクロ作成』, 165p., pp. 1-25/33-165, 1999年

金水 敏 『意味と文脈』(共著), 金水 敏 / 今仁生美(名古屋学院大学)著, 岩波書店, 260p., pp. 119-234, 2000年

金水 敏 『時・否定と取り立て』(共著), 金水 敏 / 工藤真由美 / 沼田善子(筑波大学), 岩波書店, 230p., pp. 3-92, 2000年

金水 敏 『古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究』, 106p., pp. 1-34/41-106, 2001年

金水 敏 『国語学の基本概念を英訳するための基礎研究』, 141p., pp. 1-141, 2002年

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 書評

蜂矢真郷 「工藤力男著『日本語史の諸相 工藤力男論考選』」, 『国語学』, 51巻3号(通巻203号) pp. 54(49)-48(55), 2000年

(2) 辞典項目

金水 敏 「『新しい古典文法のキーワード』移動表現, 感嘆表現, 敬語動詞, 視点と敬語」(共著) 金水敏, 『國文學——解釈と教材の研究——』, 43巻11号, 学燈社, pp. 121-122/123-124/126-127/128-129, 1998年

(3) 解題・解説・総説

金水 敏 「方便智院聖教目録」, 金水 敏, 明恵上人資料第四(高山寺資料叢書第十八冊), 東京大学出版会, pp. 387-473, 1998年

(4) その他(エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

金水 敏 「唐本一切経目録書名索引」, 築島 裕(中央大学) / 金水 敏, 『明恵上人資料第四』(高山寺資料叢書第十八冊), 東京大学出版会, pp. 387-473, 1998年

金水 敏 「大阪落語 SP 存在表現・アスペクト表現用例集」, 『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式——落語資料を中心として——』, 横浜国立大学・金沢裕之, pp. 15-30, 1999.

金水 敏 「上方洒落本存在表現・アスペクト表現用例集」, 『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式——落語資料を中心として——』, 横浜国立大学・金沢裕之, pp. 31-54, 1999.

金水 敏 「『穴さがし心の内そと』存在表現・アスペクト表現用例集」, 『明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式——落語資料を中心として——』, 横浜国立大学・金沢裕之, pp. 55-63, 1999.

金水 敏 「方便智院聖教目録索引」, 『平成十一年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』, 高山寺

典籍文書綜合調査団, pp. 1 - 21, 2000.

金水 敏 「文法性判断とステレオグラム」, 『日本語学』19巻5号, 明治書院, pp. 13巻8号, 2000.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

金水 敏 “On the relation between the deictic and the non-deictic use of the Japanese demonstratives”, 共同, Yukinori Takubo (Kyushu University) / Satoshi Kinsui, , *A symposium on diachronic and synchronic studies of syntax of east asian languages*, University of Southern California / Los Angeles, 1998年9月6日-8日

金水 敏 “Demonstratives, Bound Variables, and Reconstruction Effects”, 共同, Hajime Hoji (UCS) / Satoshi Kinsui / Yukinori Takubo (Kyushu Univ) / Ayumi Ueyama (Kyoto Univ. of Foreign Studies), GLOW, the GLOW Conference at Nanzan University, 南山大学/愛知県名古屋, 1999年9月20日

金水 敏 “Historical change and harmonization of Japanese grammar”, *Linguistic Society of America*, 2001 Linguistic Institute, University of California, Santa Barbara / Santa Barbara, 2001年6月25日-8月1日

(2) 国内学会

金水 敏 「計算機による古典籍資料の組版・印刷について」, 単独, 第七十七回訓点語学会研究発表会, 訓点語学会, 山形大学/山形県山形市, 1997年10月17日

金水 敏 「談話管理理論をめぐって」, 単独, 日本科学哲学会第34回大会, 日本科学哲学会, 専修大学・生田キャンパス/神奈川県川崎市, 2001年11月18日

金水 敏 「明日は忙しかった——未来の「た」について——」, 単独, 語用論学会第4回(2001年度)大会, 語用論学会, 桃山学院大学/大阪府河内長野市, 2001年12月1日

(3) 研究会

蜂矢真郷 「カ・ヤカ・ラカ型語幹の語基」, 第300回同志社国語学研究会, 同志社大学寧静館4階大会議室/京都府京都市, 1999年9月23日

金水 敏 「LaTeXによる古典籍のコード化について」, 第42回人文科学とコンピュータ研究会, 情報処理学会, 国際電気通信基礎技術研究所/京都府相楽郡精華町, 1999年9月20日

金水 敏 「平安時代の「をり」再考」, 国語語彙史研究会(第67回), 国語語彙史研究会, 龍谷大学大宮学舎/京都府京都市, 2001年4月21日

金水 敏 「助詞から見た日本語文法の歴史」, 文法研究会第3回集中講義, 文法研究会, 東京大学文学部/東京都文京区+神戸大学/兵庫県神戸市, 2001年8月25日-9月8日

金水 敏 「前近代文献の組版電子化の可能性について——高山寺典籍文書綜合調査の経験から——」, 講演会「出版組版電子化の可能性を探る」, 東京大学史料編纂所, 東京大学史料編纂所会議室/東京都文京区, 2001年11月24日

金水 敏 「存在・出来事と情報」, 神戸外大日本語研究コロキウム(第2回), 神戸外大日本語研究コロキウム, 神戸市外国語大学/兵庫県神戸市, 2002年2月2日

(4) 自治体等での講演会等

金水 敏 「情報社会に置ける文学・語学」, 懷徳堂平成12年度春期講座, 懷徳堂, 大阪府立文化情報センター〈さいかくホール〉/大阪府大阪市, 2000年5月24日

金水 敏 「日本語の談話とテンス・アスペクト」, 文法学会研究会連続公開講義, 文法研究会, 東京大学教養部/東京都目黒区, 2000年6月24日

2. 教員の受賞歴

蜂矢真郷，第17回新村出賞，新村出記念財団，1998年11月

金水 敏，日本認知科学会論文賞（田窪行則氏と共同受賞），日本認知科学会，1990年10月

【IV. 教員による競争的資金獲得】（1997～2001年度）

1. 科学研究費補助金の獲得状況（年度別に配列）

平成9年度	課題番号：11164252	特定領域研究（A）（2）	研究代表者：金水 敏『古代、 中世の漢文訓読文資料の文体的研究』	700,000円
平成10年度	課題番号：10111213	特定領域研究（A）（2）	研究代表者：金水 敏『LaTeX による古典籍のコード化のためのマクロ作成』	900,000円
平成11年度	課題番号：11164252	特定領域研究（A）（2）	研究代表者：金水 敏『古代、 中世の漢文訓読文資料の文体的研究』	1,000,000円
平成12年度～13年度	課題番号：12610433	基盤研究（C）（2）	研究代表者：金水 敏 『国語学の基本概念を英訳するための基礎研究』 基盤研究（C）（2）	2,800,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】

蜂矢真郷

国語学会編集委員・大会運営委員	1994年7月～1998年5月
国語学会評議員	2000年4月～
萬葉学会編輯委員	1979年12月～
萬葉学会編輯委員長	1988年4月～1990年7月
国語語彙史研究会委員	1989年4月～2001年3月
国語語彙史研究会幹事	2001年4月～
国語語彙史研究会代表幹事	2001年4月～
国語語彙史研究会編集主任	1998年12月～2002年3月
国語文字史研究会委員	2002年4月～

金水 敏

国語学会編集委員	1996年7月～2000年6月
国語学会評議員	1997年4月～
国語学会常任査読委員	2001年6月～
言語処理学会評議員	2000年4月～
日本言語学会委員	2000年4月～
日本言語学会編集委員	2002年4月～
日本語文法学会学会誌委員	2000年12月～
語用論学会運営委員	2000年4月～
語用論学会編集委員	2002年4月～

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

蜂矢真郷 教授

1 学期	国語史特殊講義	形容詞化と形容動詞化
通年	国語学特殊演習	日本書紀の訓注
2 学期	国語学博士論文作成演習	国語学の諸問題
1 学期	国語史講義	形容詞化と形容動詞化
通年	国語学演習	日本書紀の訓注
1 学期	国語学修士論文作成演習	国語学の諸問題

金水 敏 教授

2 学期	国語学特殊講義	言語理論と日本語
通年	国語文献解析研究特殊演習	「史記抄」を読む
2 学期	国語学博士論文作成演習	国語学の諸問題
2 学期	国語学講義	言語理論と日本語
通年	国語文献解析研究演習	「史記抄」を読む
1 学期	国語学修士論文作成演習	国語学の諸問題

月本雅幸 講師(非常勤講師・東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

1 学期	国語学特殊講義	古訓点概説
1 学期	国語文献解析研究講義	古訓点概説

2. 学部授業担当

蜂矢真郷 教授

1 学期	国語学講義	形容詞化と形容動詞化
通年	国語学演習	類義語
1 学期	国語学演習	国語学の諸問題

金水 敏 教授

2 学期	国語学講義	言語理論と日本語
通年	国語学演習	SP レコード文句集を読む
1 学期	国語学演習	国語学の諸問題

月本雅幸 講師(非常勤講師・東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

1 学期	国語学講義	古訓点概説
------	-------	-------

3. 共通教育

蜂矢真郷	日本語の語彙	Ⅲ 水・1 主題別
金水 敏	日本語の変遷	Ⅱ 水・3 主題別

4. 他大学における集中講義等

蜂矢真郷	光華女子大学大学院文学研究科, 1998年度, 集中, 日本語学研究Ⅱ, 講義, 形容詞
蜂矢真郷	光華女子大学大学院文学研究科, 1999年度, 集中, 日本語学研究Ⅱ, 講義, カス型動詞
蜂矢真郷	光華女子大学大学院文学研究科, 2000年度, 集中, 日本語学研究Ⅱ, 講義, カ・ヤカ・ラカ型語幹

- 蜂矢真郷 光華女子大学大学院文学研究科，2001年度，集中，日本語学研究Ⅱ，講義，ケシ型形容詞
- 蜂矢真郷 京都大学大学院文学研究科，2001年度，通年，国語学国文学特殊講義，講義，形容詞
- 蜂矢真郷 京都大学大学院文学研究科，2002年度，通年，国語学国文学演習，演習，日本靈異記訓釈
- 金水 敏 関西学院大学大学院文学研究科，2000年度，後期，日本語学特殊講義，講義，日本語史の諸問題
- 金水 敏 関西学院大学大学院文学研究科，2001年度，後期，日本語学特殊講義，講義，日本語史の諸問題
- 金水 敏 京都大学大学院文学研究科，2001年度，通年，言語学特殊講義・国語学国文学特殊講義，日本語史の諸問題

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：毛利正守（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

大阪大学はわが国の国立大学のリーダー的な存在であり，中でも文学研究科は教員の質量において全国でも有数な指導的役割を果たす人文系研究・教育組織であることがよく知られている。今回，文学研究科の現状を子細に検討する機会があたえられ，研究・教育等において優れた特質のあることを改めて確認できたことを，まず報告しておきたい。

○教官組織において，語彙史・文字史・言語文化史を中心とした前田富祺教授，語構成・語彙史・上代語を中心とした蜂矢真郷教授，文法史を中心としつつ役割語を研究する金水敏教授は，いずれも文献による実証的な研究をもって学界をリードし，高く評価されている。また，米谷隆史元助手と内田宗一前助手も近世を中心とした国語学の中に位置づけられる研究者である。音韻の分野が多少手薄であったが，2001年3月に定年退官された前田教授のあと，音韻史を中心としながら辞書などをも研究対象とする岡島昭浩助教授が着任され，専門分野にそれぞれ充実した教員配置がなされることとなり，伝統的なまとまりを保ちつつ確実に継承発展していることが実感される。

○教育活動においては，優秀な学生が多く他大学から大学院へ進学し互いに切磋琢磨していることがうかがえ評価される。ただし，大阪大学文学部からの大学院進学者が少ないことは多少懸念される。大阪大学の特色を出そうとするとき，学部生にも学問への興味をさらに十分伝えて，大学院受験者を増加させ，大学院重点化の中での学部教育の活性化を進めることが望まれよう。研究教育活動の一環として，多くの学会・研究会・講演会・シンポジウム等を開催し，学会の事務局を引き受け，更には蜂矢・金水両教授にあっては多数の学会役員等をつとめる等して，学界に大きな貢献及び役割を果たしている。

○博士論文の提出者は、過去5年間で10名でていることは、学問水準の高さを示すものである。そのうち、課程博士の授与は、いずれの大学でも件数が少ない状況にあるが、3件あるというのは少ない方ではない。が、ただ、自然科学系と異なって、人文科学系では博士後期課程の3年間で、博士論文を提出するのは困難な面もあろう。3年という年数を延長して対応する方策がとられているようであるが、一方で、単位取得退学後、一定期間の間に復学し、課程博士として学位論文を提出できる制度の創設も考慮されてよかろうか。分野により異なる面もあるが、金水教授に国際学会での発表があり、留学生による韓国での発表も行われ、また留学生も数多く入学していて国際性が認められる。国際交流において、個人的な関係に基づく交流と共に、研究科単位、更には大学単位での交流を目指すことも期待されよう。蜂矢教授が新村出賞、金水教授が日本認知科学会論文賞、また指導学生が古事記学会奨励賞という、いずれも権威ある賞を受賞していることも特筆されることである。

○教員の研究活動等に関しては、まず蜂矢教授には『国語重複語の語構成論的研究』の著書がある。本書は、国語学の中で方法論的にも極めて困難な研究分野である「語構成」について、本格的にとり組み、豊語を含む重複語を語構成論的に解明し、その位置づけをなした大著である。とりわけ「重複素と重複語」、「形状言の重複と重複語の諸形態」、「形状言・名詞・動詞連用形の重複」等といった考察は重厚であり本書の中心をなす。斬新な切り口、行き届いた用例の探索、綿密な論証過程と高い実証性をもって、重複語の全体的構造が見事に体系づけられており、極めて高い評価が与えられる。論考として、「ヤカ型語幹の構成」の論では、ヤカ型語幹のうち、～ヤ+カの構成を本来型、～+ヤカの構成を応用型に分け、後者は基本的にヤカが肥大した接尾辞であることを明らかにする。また「ラカ型語幹の構成」の論では、ヤカ型語幹に対して、ラカ型語幹が基本的に本来型であり、とくに形容詞語幹+ラカの形のものが多いことを論証する。ここに基本的にヤカ型語幹は応用型、ラカ型語幹は本来型であることが解明された。かかる論考と共に「形容詞語幹の用法」、「カ型語幹の構成」、「一音節語幹の形容詞」、「ク活用形容詞語幹を後項に持つ形容動詞語幹」等々と語幹の構成に関する論文がこの5年間で15篇発表されている。いずれも幅広い多くの資料・文献の精査に基づくものであり、その内容は甚だ説得力に富むものである。且つこうした一連の論文には一貫性と連続性をそこによみとることができる。体系化に向けて研究が着々と進められており、前著にひき続いて集成がなされるのは遠くないであろうことを確信する。蜂矢教授の著書及び論考が学界に与える影響は極めて大きく、指導学生の「接尾語タシの成立過程」や「複合形容詞「ーガタシ」「ーニクシ」」等の優れた論があるばかりでなく、蜂矢教授の論考に触発されて、語構成を扱う論文が、近年、国語学の分野で多くなってきていることは、特記されてよい。さらに、その他でも蜂矢教授の指導を受けた院生の学界での活動は目ざましく、「宣命の文章構造」「御巫本日本書紀私記」の和訓について「上代における「若」字使用の様相」「上代における疑問推量の表現」「日本書紀に見る「姫」「媛」の考察」等と多数の論文が公にされ評価を得ている。

○金水教授のこの5年間の論考を大別してみると、相互に関わるものもあるが、およそ、一、通時的なテンス・アスペクトの研究 二、談話の機能・理論的研究 三、アクセント研究 四、指示語の研究 五、計算機による組版等の研究 六、高山寺典籍文書研究となり、23篇という多数の論文を数える。二、三の論考を挙げれば、「テンスと情報」の論文は、日本語のみならず言語一般を広く観察してうち出された妥当な結論が導かれており、「近代語の状態化形式の構造」の論も、テイル・テアルの相違が統語構造レベルで鮮やかに解き明かされている。また、「国文法」の論考は、広い視野から、しかも客観的立場から日本語における形態と論理の統合といった大きな問題が深く掘り下げている。「計算機による古典籍資料の組版・印刷について」の論は、**LaTeX**と金水教授自らが作成したマクロファイルによる古典籍本文の組版の方法を論述したものであり、この金水教授による組版の開発は、印刷・組版が困難なために途絶えていた高山寺資料の刊行を実現させ、研究の推進に大きく貢献した。今後とも古典籍の刊行に多大な影響を与えるものである。著書もこの5年間で、『文法』（共著）、『意味と文脈』（共著）、『古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究』（単著）、『国語学の基本概念を英訳するための基礎研究』（単著）等と6冊が上梓されている。これらいずれの著書も従来の研究の諸成果が批判的に検討された上で、金水教授自らの先見性と独創性に富んだ思考・見解が包括的に論じられており、且つそれが体系的記述となっていて極めて高く評価される。また、金水教授による日本語の指示語の研究は、学界に広く認められ定評のあるところであり、その成果が指導学生の注目される「いわゆる「近称の指示副詞について」「付帯状況を表すタママ節について」「遊仙窟古点の一人称代名詞」「いわゆる「逆接」を表すノニについて」等の論文にも現れている。テンス・アスペクトの研究は、80年代にピークを迎えたあと、停滞気味であったが、近年、金水教授を中心に新たな切り口をもって研究が進められ活発化していることが留意される。現代語におけるテンス・アスペクトばかりでなく、古代語のテンス・アスペクトについても、現在、若手の研究者が増えており、その牽引をなすのが金水教授の古代から現代までのその分野での幅広い研究があるからだと言って過言ではない。以上のほかにも前田教授から指導を受けた多くの院生も確実に研究成果を挙げており、各教官のきめ細かい徹底した院生への指導のもとに、この5年間の院生の研究活動は論文40件、口頭発表35件というかたちで現れている。優れた一流の教員を擁した教員組織のもとで、研究組織・体制が充実していることをよくうかがわせるものである。以上、文学研究科の研究教育等に対する総合的な評価をひと通り述べた。文学研究科は今後も自己評価や外部評価を継続的に実施されることであろうが、その際、今回の意見が参考となり役立つことがあればと願っている。

3-16 英米文学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

英米文学では、現在、玉井暲、森岡裕一、服部典之、ポール・ハーヴィからなる4名の専属スタッフが中心となり、さらに毎年数名の集中講義・非常勤講師を加えて、学生の多様な関心に対応できる態勢を維持しつつ教育と研究に当たっている。17世紀・ルネサンス文学から20世紀・現代に至るイギリス文学と、19・20世紀にわたるアメリカ文学において、正典といわれる古典的な作品はいうまでもなく、最近新たな評価を獲得し始めた作品までも幅広く取り上げ、それらの文学テキストを綿密かつ正確に読むことを基本方針としている。学生が研究対象とする作家、時代、ジャンル、テーマ、方法論等を限定することは行わず、したがって学生諸君は自分の文学的関心にもとづいて自由に研究テーマを選ぶことができるのが特色である。スタッフおよび学生は、こうした多様な教育と研究にもとづいて蓄積した実力を背景にして、日本英文学会や日本アメリカ文学会をはじめとするさまざまな学会を舞台にして精力的に研究活動を行なっている。

本研究分野は、かつて藤井治彦教授、石田久教授が日本英文学会において評議員・理事を務めた伝統を継承して、玉井教授が現在その任にあり、また森岡教授は現在日本アメリカ文学会代議員を務めるなど、日本における英米文学研究の中枢を支えている。服部助教授、ハーヴィ講師もまた、それぞれの所属する学会や学術誌上で意欲的な活動を見せており、本研究室はもっとも活気にあふれた英文科の代表として注目を浴びている。学生はこの雰囲気志気を鼓舞され、研究活動はきわめて活発である。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 2 助教授 1 外国人講師 1 助手 1

教授： 玉井 暲

森岡裕一

助教授： 服部典之

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助手： 好井千代

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
51	4	12	0	0	0	5	1	1

※うち留学生0名，社会人学生0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	9	7	4	2	2
'98	18	2	3	1	2
'99	20	5	0	0	0
'00	13	9	3	1	2
'01	12	3	4	3	0
計	72	26	14	7	6

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与数

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	2	0	2
'98	1	0	1
'99	0	0	0
'00	0	1	1
'01	2	1	3
計	5	2	7

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

1. 村井美代子 **Immortality and Death: John Keats and the Tradition of the English Ode.** 課程博士。平成10年3月25日授与。主査：藤井治彦，副査：石田久，玉井暲，森岡裕一。
2. 山田雄三 **Writing under Influences: A Study of Christopher Marlowe.** 課程博士。平成10年3月25日授与，主査：藤井治彦，副査：石田久，玉井暲，森岡裕一。
3. 石割隆喜 **Postmodern Metamorphosis: Capitalism and the Subject in Contemporary American Fiction.** 課程博士。平成11年3月25日授与。主査：石田久，副査：玉井暲，林正則，森岡裕一。
4. 玉井 暲 **イギリス世紀末文学におけるテキストと言語——ペイターとワイルド——。** 論文博士。平成12年4月3日授与。主査：石田久，副査：河上誓作，森岡裕一。
5. 森田由利子 **"Invisible Presences": Virginia Woolf and Life-Writing.** 課程博士。平成13年10月29日授与。主査：玉井暲，副査：森岡裕一，服部典之。
6. 新野 緑 **時間・テキスト・主体——ディケンズ後期小説の構造——。** 論文博士。平成14年2月19日授与。主査：玉井暲，副査：森岡裕一，服部典之。
7. 吉野成美 **Mothers and Daughters: Reproduction Issue in the Works of Edith Wharton and Theodore Dreiser.** 課程博士。平成14年3月25日授与。主査：森岡裕一，副査：玉井暲，服部典之。

2. 大学院生等による論文発表等の件数

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	5	2	6	0	0	13
'98	1	2	7	0	0	10
'99	3	2	7	0	7	19
'00	3	2	3	0	0	8
'01	1	2	5	1	0	9
計	13	10	28	1	7	59

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	7	0	0	0	7
'98	0	3	0	0	0	3
'99	0	6	0	0	0	6
'00	0	6	0	0	0	6
'01	1	7	0	0	0	8
計	1	29	0	0	0	30

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 三浦誉史加 “Language and Music in Patriarchal Thought: A Study of *Othello*”, *Osaka Literary Review*, No.36, 1997.
- 川島伸博 “Spider’s Love:A Sensuous Metaphor in Donne’s “Twicknam Garden””, *Osaka Literary Review*. No.36, 1997.
- 諏訪久美子 “Hopkins’ Poetics as Alchemy: The Motif of Death and Resurrection in Hopkins’ Poetry”, *Osaka Literary Review*. No.36, 1997.
- 吉野成美 “Stepping Out: Sister Carrie’s Liberation from the Old” *Osaka Literary Review*, No.36, 1997.
- 鴨川啓信 「繰り返さざる旅 Sequel ——【キホーテ神父】における【ドン・キホーテ】の受容——」, *Osaka Literary Review*, No.36, 1997.
- 阪口瑞穂 「女性の「儀式」と「血」の色 —— アリス・ウォーカーの「喜びの秘密」」, *Osaka Literary Review*, No.36, 1997.
- 武田雅史 “Invention and Transmission: Seymour Chatman’s Narrative Theory”, 『待兼山論叢』第31号, 1997.
- 飯田未希 「不安な旅人 —— ワシントン・アーヴィングのインディアン論 ——」『待兼山論叢』第31号, 1997.
- 小畑拓也 「ウロボロスの時間 —— Robert A. Heinlein の時間旅行 SF とパラドックス」, 『関西アメリカ文学』第34号, 1997.
- 石割隆喜 “The Father for Sale: Matter, Subjectivity, and Irony in Barthelme’s *The Dead Father*”, 『関西アメリカ文学』第34号, 1997.

- 諏訪久美子 「ホプキンスの詩における建築のアナロジー」, *NONDUM*, 第8号, 1997.
- 三浦誉史加 「交換される肉体——死を恐怖する『夏の夜の夢』『尺には尺を』, 死に魅入られる『十二夜』」, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 嶋 公代 “Mary Shelley’s *Proserpine*: A Daughter Writer’s Revision”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 片山美穂 “Longing for the World of Sounds: The Battle of Nature against Civilization in *Wuthering Heights*”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 小久保潤子 “Dissolved by Others: An Analysis of Coverdale in *The Blithedale Romance*”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 諏訪久美子 “A Psychoanalytic Approach to the Idea of ‘Vision’ and Greek Imagery in Hopkins” Poetry”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 金田仁秀 “An Equivocal World: Oscar Wilde’s *An Ideal Husband*”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 森田由利子 “Moments in Joseph Conrad’s Fiction”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 吉野成美 “Symbolic Aborticide behind Productivity: Hemingway and Female Sterility”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 石割隆喜 “Postmodern Metamorphosis: Deformation, Performativity, Capitalism, and History, Part 2”, *Osaka Literary Review*, No.37, 1998.
- 川島伸博 “The Humanistic Elements of Self——A Study of More’s *Life of Pico*——”, 『待兼山論叢』第32号, 1998.
- 小畑拓也 「書き換えられる未来——アイザック・アシモフの歴史改変小説と未来史——」, 『待兼山論叢』第32号, 1998.
- 石割隆喜 “The Economy of Figures: Agency, the Body, and Delillo’s *White Noise*” 『アメリカ文学研究』第35号, 1998.
- 諏訪久美子 “Hopkins’ Conversion to Catholicism: The Meaning of the Eucharist in His Poetry. *Doshisha Literature*, 第41号, 1998.
- 日比野真己 「ウィリアム・ブレイクの黒い脳髓：『ヨーロッパ：ひとつの予言』にみる女性」, *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 嶋 公代 “Re-presentation of Nature: Radcliff’s *The Mysteries of Udolpho* and Shelley’s *Frankenstein*. *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 片山美穂 “Catherine Morland Getting into the World of Gothic Fiction: Her Role as the Author, Reader, and Heroine of the Gothic in *Northanger Abbey*”. *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 小久保潤子 “Domesticity Fails a Romancer: A Study on *The Marble Faun*”, *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 諏訪久美子 “Milton’s Influence on Hopkins’ Style”, *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 金田仁秀 “Performative and Subversive: Oscar Wilde’s “Lord Arthur Savile’s Crime””, *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 多賀谷真吾 “The Passion for Ascension: Robert Frost’s “The Mountain””, *Osaka Literary Review*, No.38, 1999.
- 三浦誉史加 “The Inclination toward Death: A Study of Shakespeare’s *Twelfth Night*”, 『待兼山論叢』第33号, 1999.
- 吉野成美 “A Prostitute Angel: Dreiser’s *Jennie Gerhardt*”, 『待兼山論叢』第33号, 1999.
- 石割隆喜 “Anti-Oedipa: Masochism, Self-Portrait, and *The Crying of Lot 49*”, 『英文学研究』第76巻第2号, 1999.
- 吉野成美 “Keeping Her “Daddy”: Charity Royall’s Reproduction Plot in *Summer*”, 『関西アメリカ文学』第36号, 1999.
- 金田仁秀 “The Reign of the Signifiers: Oscar Wilde’s *The Importance of Being Earnest*”, 『オスカー

- ・ワイルド研究」第1号, 1999.
- 諏訪久美子 “Counterpoint of Pitched Selves: Discordia Concors in Hopkins’ Poetry”, 『中部英文学』第18号, 1999.
- 諏訪久美子 「殉教と法悦 —— “The Wreck of the Deutschland” に見るバロックの要素」, 『主流』第60号, 1999.
- 日比野真己 「ブレイクの中期予言書にみる Institution」, *Osaka Literary Review*, No.39, 2000.
- 小川公代 “Two Bodies in Shelley’s *Queen Mab*”, *Osaka Literary Review*, No.39, 2000.
- 桐山恵子 “The Role of the Helper: Oscar Wilde’s Fairy Tales”, *Osaka Literary Review*, No.39, 2000.
- 小畑拓也 「ジャック・イン・ザ・ボックス—Robert A. Heinlein の知性と審問のテクノロジー」, *Osaka Literary Review*, No.39, 2000.
- 金田仁秀 “Art and Politics: Oscar Wilde’s Critical Theory”, 『待兼山論叢』第34号, 2000.
- 橋 幸子 “The Power of Words in *Tender is the Night*: Facing up to Paternal Authority”, 『待兼山論叢』第34号, 2000.
- 三浦誉史加 「交換される肉体の恐怖 —— 二部作としての *All’s Well That Ends Well* と *Measure for Measure* ——」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 川島伸博 「「椅子」の個人主義 —— 『楽園喪失』における椅子の表象とその論理 ——」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 日比野真己 「内なる牢獄 —— ウィリアム・ブレイク『ユリゼンの第一の書』考 ——」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 多賀谷真吾 「田部重治とワーズワス」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 諏訪久美子 “Inscape of Cathedral: Architectural Analogue in Hopkins’ Poetry”, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 森田由利子 ““More Real than the Present’: Layers of History in the Diaries and Essays of Virginia Woolf”, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 北本有子 “Louis MacNeice and His Meeting Point with Communities”, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 武田雅史 「「視点」再考 —— 物語論における「焦点化」をめぐる」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 飯田未希 「誰が語るべきなのか —— Washington Irving, 職業的専門性, 出版の市場化 ——」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 吉野成美 “Hidden Narrative: May Welland’s Role in *The Age of Innocence*”, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 小畑拓也 「蟻, 異星人, 人造人間」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 阪口瑞穂 「*The Color Purple* における書簡体形式」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 石割隆喜 “Postmodern Metamorphosis: Deformation, Performativity, Capitalism, and History”, 『藤井治彦先生退官記念論文集』(英宝社), 2000.
- 足達賀代子 “On a Fissure in the Allegorical World of Book I of *The Faerie Queene*”, *Osaka Literary Review*, No.40, 2001.
- 三浦誉史加 「『ペリクリーズ』『テンペスト』における「語り」の構造」, *Osaka Literary Review*, No.40, 2001.
- 武内正美 “A Complete Narrator, Guest: William Morris’ *News from Nowhere*”, *Osaka Literary Review*, No.40, 2001.
- 吉野成美 “Placed Between: Boberta Alden’s Inevitable Death in *An American Tragedy*”, *Osaka Literary Review*, No. 40, 2001.
- 垣口由香 “‘Sweet Mother Earth !’: The Unnatural Feminine in *Waiting for Godot*”, *Osaka Literary Review*, No.40, 2001.
- 片山美穂 “The Predominance of Reason over Sentiment: Fatherhood in *Belinda*”, 『待兼山論叢』第35号, 2001.

- 小久保潤子 「「完璧なる妻」のイメージ——「痣」におけるエイルマーの脅迫観念」, 『待兼山論叢』第35号, 2001.
- 桐山恵子 “The Flaneur, the Collector and the Book: The Texture of the City in *The Picture of Dorian Gray*”, 『オスカー・ワイルド研究』第3号, 2001.
- 金田仁秀 「ワイルド, 「ワイルド」, エクリチュール」, 『英語青年』第145巻 第11号, 2001.

(2) 口頭発表

- 諏訪久美子 「大聖堂のインステイプ——ホプキンスの詩における建築のアナログ」, 日本英文学会全国大会発表要旨。『英文学研究』(第74巻第2号に収録)。1997年発表。
- 石割隆喜 「監禁・セルフポートレート・パフォーマンス—*The Crying of Lot 49*と女性主体」, 日本アメリカ文学会全国大会発表要旨。『会報 ALSJ』(第35号)に収録。1997年発表。
- 鴨川啓信 「*The Power and the Glory* の the whisky priest をめぐる「残酷なパロディ」」, 日本英文学会全国大会発表要旨。『英文学研究』(第75巻第2号に収録)。1998年発表。
- 吉野成美 「Mary Welland の妊娠——*The Age of Innocence* にみるテキストの裏側」, 日本アメリカ文学会全国大会発表要旨。『会報 ALSJ』(第36号)に収録。1998年発表。
- 嶋 公代 “Virtue of Prudence: Edgeworth’s *Belinda*”, 日本英文学会全国大会発表要旨。『英文学研究』(第76巻第2号に収録)。1999年発表。
- 片山美穂 「自己の確立——*The Tenant of Wildfell Hall* における言葉」, 日本ブロンテ協会大会発表要旨。『大会プログラム1999』に掲載。1999年発表。
- 三浦誉史加 「『冬物語』における語りの消失」, 日本英文学会全国大会発表要旨。『英文学研究』(第77巻第2号に収録)。2000年発表。
- 川島伸博 「サー・ガイアの未熟さ——『妖精の女王』第二巻における馬術の研究」, 日本英文学会全国大会発表要旨。『英文学研究』(第77巻第2号に収録)。2000年発表。
- 金田仁秀 「不安定な意味作用——『サロメ』におけるセックス, ジェンダー, 欲望」, 日本英文学会全国大会発表要旨。『英文学研究』(第77巻第2号に収録)。2000年発表。
- 嶋 公代 「『アグネス・グレイ』を読む」, 日本ブロンテ協会大会シンポジウム発表要旨。*Bronte Newsletter of Japan* (第48号)。2000年発表。
- 小畑拓也 「仮面の奥のパラサイト——Robert H. Heinlein の審問と変装のレトリック」, 日本アメリカ文学会全国大会発表要旨。『会報 ALSJ』(第38号)に収録。2000年発表。
- 小畑拓也 「エイリアン・プロトコル——Robert H. Heinlein の異星人の身体(ハードウェア)と言語(ソフトウェア)」, 『会報 ALSJ』(第39号)に収録。2001年発表。

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 2 名

<内訳>

PD : 0名 DC : 2名 外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 4 名

学部: 2名 PD : 0名 DC : 2名

6. 専門分野出身の研究者（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）

計 6 名

'97年度：2名 '98年度：2名 '99年度：0名 '00年度：2名 '01年度：0名

<内訳>

1997年度	森田由利子（博士後期課程修了）	広島国際大学人間環境学部専任講師
	矢野正昭（博士後期課程修了）	岡山大学文学部専任講師
1998年度	鴨川啓信（博士後期課程修了）	山口大学経済学部専任講師
	石割隆喜（博士後期課程修了）	大阪外大外国語学部助手
2000年度	川島伸博（博士後期課程修了）	大阪学院大学経営学部専任講師
	金田仁秀（博士後期課程修了）	広島女学院大学文学部専任講師

7. 専門分野出身の高度職業人（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 4 名

'97年度：2名 '98年度：1名 '99年度：0名 '00年度：1名 '01年度：0名

<内訳> ジャーナリスト 2名
教職 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 3 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 3 名

10. 刊行物

1997年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 36

1998年度 *OLR*, No. 37

1999年度 *OLR*, No. 38

2000年度 *OLR*, No. 39

2001年度 *OLR*, No. 40

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1999：日本アメリカ文学会関西支部例会（国内学会）（開催10月）

2000：同上（開催5月）

2001：同上（開催11月）日本ペイター協会第40回年次大会（国内学会）（開催，10月）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 1997： 阪大英文学会第30回大会 (11月開催)
1998： 阪大英文学会第31回大会 (11月開催)
1999： 阪大英文学会第32回大会 (11月開催)
2000： 阪大英文学会第33回大会 (11月開催)
2001： 阪大英文学会第34回大会 (11月開催)

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

スタッフ面では、専任教官として、玉井暉教授がヴィクトリア朝および世紀末英文学や批評理論、森岡裕一教授がアメリカ・モダニズム小説、服部典之助教授が18世紀英国小説、ポール・ハーヴィ教師がシェイクスピアなどを講じている。また、1997年から1999年までは石田久教授がシェイクスピアからオニールにわたる英米演劇を講じた。学内非常勤としては、言語文化部の竹内章教授が英国小説、宮川清司教授が英国ロマン派文学、仙葉豊教授が英国初期小説を講じている。また、学外非常勤としては、圓月勝博講師（同志社大学）、富山太佳夫講師（成城大学）、伊藤貞基講師（奈良女子大学）、川口能久講師（立命館大学）、新野緑講師（神戸外国語大学）、別府恵子講師（神戸女学院大学）、大橋洋一講師（東京大学）、今沢達講師（神戸商科大学）、ジョージ・ヒューズ講師（東京大学）、神尾美津雄講師（名古屋大学）、渡辺克昭講師（大阪外国語大学）、白川計子講師（神戸松蔭女子大学）、植田和文講師（神戸大学）、中村紘一講師（京都大学）、貴志雅之講師（大阪外国語大学）、荒木映子講師（大阪市立大学）、林以知郎講師（同志社大学）、千石英世講師（立教大学）、渡辺信二講師（立教大学）が多種多彩な講義を提供している。また、この間、フルブライト招聘教授として、サイモン・ブローナー教授（ペンシルヴァニア州立大学）、デニス・ホイルマン教授（インディアナ州立大学）、カール・ジャクソン教授（テキサス州立大学）、デイヴィッド・エスピー教授（ペンシルヴァニア大学）がそれぞれ一年間講義を受け持つなど、ヴァラエティかつ国際性豊かな教育水準を維持している。

院生の研究指導体制としては、従来の談話会形式による口頭発表に司会、コメンテーター制を導入し、さらに実践的な指導を行った結果、学会での院生の口頭発表数は13、レフリー査読つき論文採択数は、全国的学会誌においては20にのぼり、うち一点は日本英文学会新人賞を受賞するなどめざましい活躍ぶりを呈している。また、その他の同窓の研究者を基にした学会誌などの論文を含めると、この間の院生の論文総数は66点に上っている。また、ハーヴィ教師が着任したこともあり、院生の間で英米の大学院へ留学する気運が高まり、ほとんど毎年1～2名の留学生を送り出している。以上のように、院生の活躍ぶりに関しても、阪大英米文学が日本の一大拠点になりつつあり、その教育・研究水準の高さが全国的に認められている。

正規の授業に加え、本専攻は年一回、阪大英文学会という研究発表会の開催母体となっており、そこでも院生をはじめ、本専攻出身者が活発な発表を行っている。近年は従来になかったシンポジウム形式を取り入れたり、学会組織の整備が進んでおり、叢書の刊行が計画されるなど、ますます研究組織として充実化の一途をたどっている。

学位取得に関していうと、この5年間に論文博士1名、課程博士4名を生み出している。この傾向はますます強まり、その後も続々、学位授与が成され、名実ともに、本専攻の充実ぶりが実証されつつある。

教育面で一点つけ加えるなら、パソコン等機器の近代化を含むコモンルームの整備も行ったし、学部生をまじえ春・夏の専攻旅行を実施して親睦の場を積極的に設けるなど雰囲気作りにも努力しており、学問追求の厳しい雰囲気の中にも、和気あいあいとしたアットホームな空気が醸成され研究室の雰囲気はきわめて良好である。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 玉井 暲 「ペイター文学と現代批評」, 『言語と文化の対話』, 英宝社, pp. 334-343, 1997.
- 玉井 暲 「ペイターと吉田健一」, 『日本ペイター協会会報』第19号, 日本ペイター協会, pp. 12-15, 1998.
- 玉井 暲 「『ロモラ』とウォルター・ペイター」, 『George Eliot Newsletter of Japan』第3号, 日本ジョージ・エリオット協会, pp. 2-2, 1999.
- 玉井 暲 「リトル・ファーザー・タイムと世紀末文学——『日蔭者ジュード』論」, 『トマス・ハーディと世紀末』, 英宝社, pp. 47-83, 1999.
- 玉井 暲 「作者のゆくえ——ポスト構造主義の文学批評——」, 『批評の現在——哲学・文学・演劇・音楽・美術——』, 和泉書院, pp. 39-80, 1999.
- 玉井 暲 「『サロメ』とヴィクトリア朝」, 『ヴィクトリア朝——文学・文化・歴史——』, 英宝社, pp. 266-280, 1999.
- 玉井 暲 「近代性と言葉——吉田健一のペイター論——」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 英宝社, pp. 513-524, 2000.
- 玉井 暲 「アーノルドの批評」, 『英語・英米文学のエートスとパトス——杉本龍太郎教授古稀記念論文集——』, 大阪教育図書, pp. 399-407, 2000.
- 玉井 暲 「ワイルドにおける文学の再生——無数の生と遺伝」, 『英語青年』第146-11号, 研究社, pp. 685-687, 2001.
- 玉井 暲 「トマス・ハーディを読む J. ヒリス・ミラー」, 『英語青年』第147-7号, 研究社, pp. 414-448, 2001.
- 森岡裕一 「Macomberの悔悛」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 英宝社, pp. 791-802, 1999.
- 森岡裕一 「酔いどれアメリカ文学序説」, 『酔いどれアメリカ文学』, 英宝社, pp. 5-83, 1999.
- 森岡裕一 「『現実』に背を向けて」, 『シャーウッド・アンダソンの文学』, ミネルヴァ書房, pp. 97-113, 1999.
- 森岡裕一 「『風と共に去りぬ』におけるアイリッシュ・ドラマ」, 『文学と女性』, 英宝社, pp. 231-243, 2000.
- 森岡裕一 「暗い笑いのモダニズム—ニューオーリンズ時代のアンダソン」, 『アメリカ文学とニューオーリンズ』, 鷹書房弓プレス, pp. 98-117, 2001.
- 森岡裕一 「Temperance Narrativeの物語学」, 『CHART NETWORK』第35巻, 数研出版, pp. 1-4, 2001.
- 服部典之 「インターネットと大学英語教育」, 『言語文化研究』第25号, 大阪大学言語文化部, pp. 167-183, 1999.
- 服部典之 「メンディソスト, ハンフリー・クリンカー」, 『藤井治彦先生退官記念論集』, 英宝社, pp. 359-371, 2000.
- 服部典之 「『小説の勃興』と小説研究の終焉」, 『日本ジョンソン協会年報』第25号, 日本ジョンソン

- 協会, pp. 1-5, 2001.
- 服部典之 「デ「フォー」と「フォー」——「ポスト」コロニアル主体は自らを名乗りうるか——」, 『待兼山論叢』第35号, 大阪大学文学会, pp. 1-14, 2001.
- Paul A. S. Harvey “Nonchan’s Dream: NHK Morning Serialized Television Novels,” *The Worlds of Japanese Popular Culture*, ed. D. P. Martinez (Cambridge: Cambridge University Press, 1998) 133-151. 1998.
- Paul A. S. Harvey “Shakespeare at the Globe, London and in Stratford-upon-Avon, with the RSC, Summer 1999,” *Eibeibungaku* (Studies in British and American Literature, Koka Women’s University, Kyoto) Vol. 19: 1-50. 2000.
- Paul A. S. Harvey “More Cakes and Ale: Sir Toby Belch in *Twelfth Night*,” *Studies in Language and Culture* (Osaka University, Faculty of Language and Culture) Vol. 26: 77-86. 2000.
- Paul A. S. Harvey 「Shakespeare in Stratford-upon-Avon with the RSC, *As You Like It*, *The Comedy of Errors* and *Romeo and Juliet*, Summer 2000」『演劇学論叢』3 (2001) 1-19. 2001.
- Paul A. S. Harvey 「‘This England’: The First Half of the *Henriad* Performed by the RSC in Stratford-upon-Avon, Summer 2000」『大阪大学大学院文学研究科紀要』41 (2001) 17-50. 2001.
- Paul A. S. Harvey 「‘This England’: *Henry VI Parts 1, 2, 3* and *Richard III*, RSC at the Young Vic 2001」『大阪大学大学院文学研究科紀要』42 (2002) 77-107. 2002.
- 好井千代 “The American and the Romance of Modernity”, *Papers on Language and Literature* Vol. 33, No. 2, Southern Illinois University, pp.142-168, 1997.
- 好井千代 「万博の「茶褐色のレディ」——【メイジャーの知ったこと】の人種観——」, 『英文学春秋』, 臨川書店, pp. 27-42, 1998.
- 好井千代 “The Brown Lady —— Race and Money in *What Maisie Knew* ——”, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 英宝社, pp. 801-820, 2000.

1-2. 著書

- 玉井 暲 『オスカー・ワイルド事典——イギリス世紀末大百科——』, (共著) 玉井暲 / 山田 勝 (神戸市外大), ほか, 北星堂, 746pp., 1997.
- 玉井 暲 『トマス・ハーディと世紀末』, (共著) 玉井 暲 / 森松健介 (中央大学) / 井出弘之 (東京都立大学) / 土岐恒二 (東京都立大学), 英宝社, 156pp, pp. 47-83, 1999.
- 玉井 暲 『イギリス世紀末文学におけるテクストと言語——ペイターとワイルド——』, 海川企画出版部, 358pp., 1999.
- 玉井 暲 『藤井治彦先生退官記念論文集』, (共著) 玉井 暲 / 森岡裕一 / 服部典之 ほか, 英宝社, 1038 pp., 2000.
- 玉井 暲 『編注——オリヴァー・パーカー「理想の結婚」——』, (共著) 玉井 暲 / 沖田知子 (大阪大学言語文化部), 英宝社, 102pp., 2001.
- 森岡裕一 『酔いどれアメリカ文学』, (共著) 森岡裕一 / 藤谷聖和 / 田中紀子 / 花岡秀 / 貴志雅之, 英宝社, 340p, pp. 5-83, 1999.
- 森岡裕一 『シャーウッド・アンダソンの文学』, (共著) 高田賢一 / 森岡裕一, ミネルヴァ書房, 259p, pp. 97-113 / 5-12, 1999.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 玉井 暲 メリッサ・ノックス『オスカー・ワイルド: 長くて, 美しい自殺』, 青土社, 381pp., 2000.
- 玉井 暲 『ウォルター・ペイター全集』第1巻, (共訳) 玉井 暲 / 富士川義之 (駒澤大学), ほか, 筑摩書房, 608pp., pp. 390-396 / 515-520 / 537-541, 2002.
- 森岡裕一 『アメリカ小説の多様性』, コロンビアアメリカ文学史, 山口書店, pp. 1091-1124, 1997.

(2) 書評

- 玉井 暉 「文学の倫理学と政治学に逆らって——Harold Bloom, *The Western Canon*——」, 『英文学春秋』第1号, 臨川書店, pp. 85-92, 1997.
- 玉井 暉 「荒木正純・倉持三郎・立石弘道編『D.H. ロレンスと新理論』」, 『英語青年』第145-6号, 研究社, pp. 418-419, 1999.
- 森岡裕一 「ニュー・アメリカニズム」, 『アメリカ文学研究』第33号, 日本アメリカ文学会, pp. 50-54, 1997.
- 森岡裕一 「ヘミングウェイを横断する」, 『アメリカ文学研究』第37号, 日本アメリカ文学会, pp. 50-54, 2001.
- 服部典之 「インベル・グランディ『レイディー・メアリー・ワートリー・モンタギュ』」, 『英文学研究』, 日本英文学会, Jan-78, pp. 43-48, 2001.
- 服部典之 「遁走する未来ネズミ」, 『英語青年』第147-3号, 研究社, pp. 173, 2001.
- 服部典之 「「イングリッシュ」な乗客たち」, 『英語青年』147-6号, 研究社, pp. 364, 2001.
- 服部典之 「ニューヨークとRushdieの『憤怒』」, 『英語青年』147-9号, 研究社, pp. 567, 2001.
- 服部典之 「フィクションの『つぐない』」, 『英語青年』147-12号, 研究社, pp. 752, 2002.
- Paul A. S. Harvey Germaine Warkentin, ed., *Critical Issues in Editing Exploration Texts* (Toronto: University of Toronto Press, 1995), *Notes and Queries*, New Series Vol. 44, No. 2: 278. 1997.
- Paul A. S. Harvey Jean-Pierre Maquerlot and Michele Willems, eds., *Travel and Drama in Shakespeare's Time* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), *Notes and Queries* New Series, Vol. 45, No. 3: 379-380. 1998.
- Paul A. S. Harvey Neil L. Whitehead, ed., *The Discoverie of the Large, Rich and Bewtiful Empyre of Guiana by Sir Walter Raleigh* (Manchester: Manchester University Press, 1997), *Notes and Queries*, New Series Vol. 46, No. 3: 383-4. 1999.
- Paul A. S. Harvey "Shakespeare on Screen: The Centenary Conference," *Shakespeare News*, Vol. 39, No. 2: 28-29. 1999.
- Paul A. S. Harvey "Ninagawa Macbeth: Cocoon Theatre Bunkamura Tokyo April2001", *Shakespeare News*, Vol. 41, No. 1: 35-38. 2001.
- Paul A. S. Harvey Stephen Greenblatt, *Hamlet in Purgatory* (Princeton: Princeton University Press, 2001), Kansai Shakespeare Society. 2001.

(3) 辞典項目

- 玉井 暉 「ヴィンケルマン」, 「エピキュリアニズム」, 「ダーウィニズム」, 「ホイッスラー」等10項目, 『オスカー・ワイルド事典——イギリス世紀末大百科——』, 北星堂, 746pp. , 1997.

(4) 解題・解説・総説

- 服部典之 「自動車で回るイギリス——ラウンドアバウトという難関——」, 『イギリスを旅する35章』, 明石書店, pp. 102-109, 2000.
- 服部典之 「ナショナル・トラストの旅——エリート文化にはまろう——」, 『イギリスを旅する35章』, 明石書店, pp. 177-184, 2000.
- 好井千代 「なにもかも見物したい時代」, 『週刊朝日百科/世界の文学』, 朝日新聞社, 第35号, p. 156, 2000.

(5) その他 (エッセー, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 玉井 暉 「『トマス・ハーディと世紀末』をめぐって」, 『日本ハーディ協会ニュース』, 日本ハーディ協会, 46号, p. 5, 1999.

1-4. 口頭発表

(2) 国内学会

- 玉井 暲 「ハーディ文学におけるパストラル」, 日本ハーディ協会第40回大会, 福岡女学院大学/福岡県小郡市, 1997年11月1日
- 玉井 暲 「大学における“English”の現在と未来」, 阪大英文学会, 大阪府/大阪大学, 2000年11月11日
- 玉井 暲 「J. ヒリス・ミラーの読むトマス・ハーディ」, 日本ハーディ協会, 京都市/仏教大学, 2000年10月28日
- 玉井 暲 「『アグネス・ 그레이』を読む」, 日本ブロンテ協会, 京都市/同志社大学, 2000年10月14日
- 玉井 暲 「世紀末とヴィクトリアニズム——ラスキンからワイルドへ—Aestheticism 再考——」, 日本英文学会第72回全国大会, 東京都/立教大学, 2000年5月20日
- 玉井 暲 「新しい批評理論の功罪——J. ヒリス・ミラーの批評を批評する——」, テクスト研究学会, 京都市/京都女子大学, 2001年8月11日
- 玉井 暲 「ワイルド演劇の可能性」, 単独, 名古屋大学英文学会, 名古屋市/名古屋大学, 2001年9月28日
- 森岡裕一 「自伝と伝記の中のアメリカ文学」, (共同), 関西支部大会フォーラム, 日本アメリカ文学会, 同志社大学/京都市, 1998年12月12日
- 服部典之 「デ「フォー」と『フォー』——「ポスト」コロニアル主体は自らを名乗りうるか——」, 阪大英文学会, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 2001年1月7日
- 服部典之 「『ロビンソン・クルーソー』を遡る」, (共同)服部典之/仙葉豊/河崎良二(帝塚山大学), 18世紀英文学会, 同志社大学徳照館/京都府京都市, 2001年12月15日
- Paul A. S. Harvey “Twelfth Night”, ELSJ, Matsuyama, May 1999.
- Paul A. S. Harvey “Bunraku Hamlet”, Shakespeare Society of Japan, October 2000.
- Paul A. S. Harvey “Shakespeare and Travel Literature”, International Shakespeare Congress, Valencia, April 2001.
- Paul A. S. Harvey “Lady Macbeth in Translation”, Scaena St. Johns’, Cambridge, August 2001.
- Paul A. S. Harvey “Kyogen of Errors”, Aistugia Torino, September 2002.
- 好井千代 「万博の“brown lady” —*What Maisie Knew* における racial fantasies」, 日本アメリカ文学会, 慶応義塾大学/東京都港区, 1997年10月11日
- 好井千代 「*The Golden Bowl* における power, race, hybridity」, 日本英文学会, 京都大学/京都府京都市, 1998年5月23日
- 好井千代 「自然主義とスペクタクル嗜好——*The Princess Casamassima* をめぐって——」, 日本英文学会, 立教大学/東京都豊島区, 2000年5月20日
- 好井千代 「19世紀末のスペクタクル社会」, (共同)佐々木 隆(同志社大学)/好井千代/大井浩二(関西学院大学)/若島正(京都大学)/渡辺克昭(大阪外国語大学), 日本アメリカ文学会, 同志社大学/京都府京都市, 2000年10月15日

(3) 研究会

- 玉井 暲 「自然と人工のパラドックス——オスカー・ワイルド『サロメ』に表象されるイギリス世紀末文学——」, 単独, 共同研究「自然と人間」研究発表会, 大阪大学文学研究科, 大阪府/大阪大学, 1999年6月24日

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 玉井 暲 「『ジェイン・エア』——大英帝国下の女の幸せ——ブロンテ姉妹小説のおもしろさ——」, 豊能町図書館講座講演会, 大阪府/豊能郡豊能町, 1998年11月13日
- 玉井 暲 「『嵐が丘』——自然, 文化, 所有欲——ブロンテ姉妹小説のおもしろさ——」, 豊能町図書

- 館講座講演会，大阪府／豊能郡豊能町，1998年11月20日
- 玉井 暲 「『アグネス・グレイ』——女性と職業——ブロンテ姉妹小説のおもしろさ——」，豊能町図書館講座講演会，大阪府／豊能郡豊能町，1998年11月27日
- 玉井 暲 「日英比較における世紀末文化論」，大阪成蹊女子短期大学英文科秋季講演会，大阪市／大阪成蹊女子短期大学，2001年11月20日

2. 教員の受賞歴

好井千代 第1回福原賞，1993（福原記念英米文学研究助成基金）

【IV. 教員による競争的資金獲得】（1997年度～2001年度）

1. 科学研究費補助金の獲得状況（年度別に配列）

平成9年度	奨励研究(A)9710341	初期消費社会の諸側面 (gender, class, race) とアメリカ文学	好井千代	1,100,000円
平成10年度	奨励研究(A)9710341	初期消費社会の諸側面 (gender, class, race) とアメリカ文学	好井千代	1,000,000円
平成13年度	基盤研究(C)(2)	アメリカ文学／文化とアルコールの関係に関する研究	森岡裕一	1,600,000円
平成13年度	基盤研究(C)(2)	世紀転換期のグローバリゼーションとアメリカ文学	好井千代	1,200,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】（1997～2001年度）

玉井 暲：	日本英文学会	理事	(2001年4月～2003年3月)
		評議員	(2001年4月～2003年3月)
	日本ワイルド協会	理事	(1997年12月～2002年11月)
		副会長	(1997年12月～2000年11月)
	日本ベイター協会	理事	(1997年4月～)
	日本ハーディ協会	理事	(1997年4月～)
森岡裕一：	日本ジョージ・エリオット協会	理事	(1997年11月～)
	日本ヴィクトリア朝文化研究学会	理事	(2001年11月～)
	日本アメリカ文学会	代議員	(2002. 4～)
	日本アメリカ文学会	編集委員	(1999. 4～2001. 3)
	日本アメリカ文学会	関西支部評議員	(1998. 4～)
	日本アメリカ文学会	関西支部地区委員	(1995. 4～1998. 3)
	日本アメリカ文学会	関西支部編集委員	(1995. 4～1997. 3, 2001. 4～2003. 3)
	日本ヘミングウェイ協会	運営委員	(2002. 4～)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

玉井 暲 教授

- 通年 英文学作品研究特殊演習 現代批評理論
1 学期 英文学史特殊講義 唯美主義とヴィクトリアニズム
2 学期 英文学史特殊講義 Charlotte Bronte の小説
通年 英文学作品研究演習 現代批評理論
1 学期 英文学史講義 唯美主義とヴィクトリアニズム
2 学期 英文学史講義 Charlotte Bronte の小説
2 学期 英文学作品研究博士論文作成演習 英文学研究の諸問題 (服部助教授と共同)
1 学期 英文学作品研究修士論文作成演習 英文学研究の諸問題 (服部助教授と共同)

森岡裕一 教授

- 通年 アメリカ文学史特殊講義 アメリカ・モダニズム文学論
通年 アメリカ文学作品研究特殊演習 William Faulkner, *The Hamlet* 精読
通年 アメリカ文学史講義 アメリカ・モダニズム文学論
通年 アメリカ文学作品研究演習 William Faulkner *The Hamlet* 精読
2 学期 アメリカ文学作品研究博士論文作成演習 アメリカ文学研究の諸問題
1 学期 アメリカ文学作品研究修士論文作成演習 アメリカ文学研究の諸問題

服部典之 助教授

- 1 学期 英文学史特殊講義 18世紀イギリス文学における Englishness
2 学期 英文学史特殊講義 イギリス現代小説と映画
通年 英文学作品研究特殊演習 イギリス小説誕生前夜
1 学期 英文学史講義 18世紀イギリス文学における Englishness
2 学期 英文学史講義 イギリス現代小説と映画
通年 英文学作品研究演習 イギリス小説誕生前夜
2 学期 英文学作品研究博士論文作成演習 英文学研究の諸問題 (玉井教授と共同)
1 学期 英文学作品研究修士論文作成演習 英文学研究の諸問題 (玉井教授と共同)

ポール・ハーヴィー 講師

- 1 学期 英文学史特殊講義 Shakespearean Comedy I
2 学期 英文学史特殊講義 Shakespearean Comedy II
通年 英文学作品研究特殊演習 Shakespeare, *As You Like It*
1 学期 英文学史講義 Shakespearean Comedy I
2 学期 英文学史講義 Shakespearean Comedy II
通年 英文学作品研究演習 Shakespeare, *As You Like It*
2 学期 英文学作品研究博士論文作成演習 英文学研究の諸問題 (玉井教授と共同)
1 学期 英文学作品研究修士論文作成演習 英文学研究の諸問題 (玉井教授と共同)

仙葉 豊 教授 (大学院併任教授/言語文化部)

- 通年 英文学史特殊講義 夏目漱石の英文学
通年 英文学史講義 夏目漱石の英文学

林 和仁 講師 (非常勤講師・龍谷大学)

- 1 学期 英文学史特殊講義 James Joyce 研究
1 学期 英文学史講義 James Joyce 研究

ジョージ・ヒューズ 講師 (非常勤講師・東京大学)
2 学期 英文学史特殊講義 Virginia Woolf and Her Work
2 学期 英文学史講義 Virginia Woolf and Her Work

青山義孝 講師 (非常勤講師・甲南大学)
1 学期 アメリカ文学史特殊講義 アメリカ・ルネサンス論
2 学期 アメリカ文学史特殊講義 アメリカ・ルネサンス論
1 学期 アメリカ文学史講義 アメリカ・ルネサンス論
2 学期 アメリカ文学史講義 アメリカ・ルネサンス論

渡辺信二 講師 (非常勤講師・立教大学)
1 学期 アメリカ文学史特殊講義 アメリカ詩研究：恋するアメリカ人たち
1 学期 アメリカ文学史講義 アメリカ詩研究：恋するアメリカ人たち

2. 学部授業担当

玉井 暲 教授
1 学期 英文学講義 唯美主義とヴィクトリアニズム
2 学期 英文学講義 Charlotte Bronte の小説
通年 英文学講義 英文学史
通年 英文学演習 Oscar Wilde の批評

森岡裕一 教授
通年 アメリカ文学講義 アメリカ・モダニズム文学論
1 学期 アメリカ文学演習 *Ten Nights in a Bar-Room* 翻訳
2 学期 アメリカ文学演習 アメリカ文学研究法
1 学期 アメリカ文学講義 アメリカ研究入門

服部典之 助教授
1 学期 英文学講義 18世紀イギリス文学における Englishness
2 学期 英文学講義 イギリス現代小説と映画
通年 英文学演習 Michael Ondaatje の小説

ポール・ハーヴィー 講師
1 学期 英文学講義 Shakespearean Comedy I
2 学期 英文学講義 Shakespearean Comedy II
1 学期 英文学演習 Academic English I
2 学期 英文学演習 Academic English II

仙葉 豊 教授 (大学院併任教授／言語文化部)
通年 英文学講義 夏目漱石の英文学

林 和仁 講師 (非常勤講師・龍谷大学)
1 学期 英文学講義 James Joyce 研究

ジョージ・ヒューズ 講師 (非常勤講師・東京大学)
2 学期 英文学講義 Virginia Woolf and Her Work

青山義孝 講師（非常勤講師・甲南大学）

1 学期 アメリカ文学講義 アメリカ・ルネサンス論

2 学期 アメリカ文学講義 アメリカ・ルネサンス論

渡辺信二 講師（非常勤講師・立教大学）

1 学期 アメリカ文学講義 アメリカ詩研究：恋するアメリカ人たち

3. 共通教育

森岡裕一 教授

I セメスター 専門基礎 英米文学入門

4. 他大学における集中講義等

玉井 暉：大阪女子大学大学院文学研究科 「英文学特論 I」

金沢大学大学院文学研究科 「英文学特殊講義」

森岡裕一：大阪外国語大学大学院社会言語学研究科 「アメリカ文学研究」

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：原 英一（東北大学大学院文学研究科 教授）

総合評価

教員数5名、大学院在籍者数16名（研究生等を除く）という小規模な組織であるにもかかわらず、日本における英米文学研究の中心の一つとして一大拠点を形成している。伝統的研究方法を堅固な土台として維持しながら独創的かつ清新な研究活動が高いレベルで活発に行われている。専任教員はほぼ全員がその分野で我が国を代表する傑出した研究者であり、多くが論文・著書を継続的に発表し続けている。しかも、それらの研究業績の内容が大体において高水準を維持していることは特記されるべきである。これは個々人の研究能力の高さの表れであるとともに、優れた人材の結集に成功していることを証明している。学会活動についても、研究発表の他、理事等として組織運営に貢献し、関係学会の中核となっている。大学院生の中からも将来の我が国英米文学研究の中心的担い手となることが確実と思われる質の高い研究者が次々に輩出している。大学院生の研究テーマの多様性を見ると、自由闊達な雰囲気の中で、高度な研究指導が行われていることが推測できる。

過去5年間の教員による発表論文数23本、著書7冊、大学院生による発表論文数が59本という研究業績の蓄積は、一般的には論文生産速度の遅い英米文学分野の研究組織としては驚くべき量である。しかもその中には日本英文学会新人賞受賞論文も含まれており、概ね高水準が維持されている。研究組織全体としての層の厚さと質の高さという点では、他に比肩しうるものは我が国にほとんど見あたらないと言える。

求められている評価の視点には含まれていないが、改善すべき点としてあえてあげるならば、

研究活動の国際性を一層高めることであろう。大学院生が発表した論文の約三分の二が英文によるものであるのに対して、専任教員の論文は大部分和文によるものとなっている。また、外国人教師の論文は資料に挙げられていない。我が国の英米文学研究には明治以来の「英学」の伝統があり、それを継承発展させることが日本人研究者の責務であるという主張が、国内の研究者の一部には存在する。また、自然科学分野とは異なり人文科学分野では、研究の国際性を一概に論じること、あるいは評価の基準とすることは、しばしば無意味である。しかしながら、英米文学研究の場合は、その専門分野としての特性上、英語を媒体とする研究成果の発信がきわめて重要であることは自明であろう。藤井治彦元教授は1974年に全文英文による著書を発表し国際的にも高い評価を得た。現在のスタッフの研究業績は国際水準を超えるものであり、これらの優れた業績を海外の研究者が十分に参照・引用できるような手段を講じることが望まれる。

以下、提示されている評価の視点に従ってそれぞれの評価を述べる。

イ 研究の先見性・独創性

自然科学分野と異なり、英米文学研究では、膨大な先行研究を消化することに研究の時間と労力が相当に消費されるという特性がある。こうした作業を経ることのない研究は、一見独創的に見えるものであっても、実体は空虚なものであって、学問の進歩に貢献することはできないというのが常識である。従って、この分野での先見性・独創性の評価は先行研究すなわち研究の伝統をどれだけ着実にまた精確に踏まえているかを見た上で行われなければならない。一方、学問としての活力を保ち、新たな地平を開拓するという意欲と革新性がなければ、非生産的保守主義に陥ることも免れ得ない。こうした視点で評価するならば、専任教員の研究活動は、玉井教授のペイター研究や森岡教授の「酔いどれ文学」研究に代表的に示されるように、先行研究と先端的批評理論を的確に融合させるとともに、鋭敏な知性によって独創的な研究を指向し実践したものであると認められる。その他にも、研究の伝統を守りながらも、今後の英米文学研究の進むべき方向の指針となりうる論文が多く見られる。

ロ 研究の実証性（科学性）あるいは手堅さ

英米文学研究にあっては、実証性（科学性）の評価は、研究の手法及び対象によって大きく異なる。周辺資料の広範囲な渉猟と緻密な分析を要する場合もあれば、対象とする作品テキストの精緻な校訂や分析が主となる場合もある。玉井教授、森岡教授、服部助教授の研究領域とその手法は、実証性（科学性）が強く要求されるものではないが、資料による論の裏づけ、精密な実証的論理展開が必要とされるものと考えられる。これら教員の論文は、思想史、社会史等の歴史的背景の精密なリサーチと的確な把握に基づいたものであり、そのために恣意的な議論に陥らない説得力を持つものとなっている。いたずらに奇をてらうことのない堅実な実証主義的研究方法がこの組織全体としての特徴であると思われる。

ハ 研究の持続性

人文科学、特に英米文学の研究の場合、その学問的特質上、長い期間を要する研究が中心となるが、この点では全体として非常に優れていると思われる。玉井教授の19世紀末文学研究、服部助教授の英国初期小説研究は、持続的な研究の成果である。森岡教授の業績についても、評者の専門外の分野であることを付言するが、アンダソン研究など一貫したテーマによって貫かれている。

ニ 研究の体系性

上記と重なる部分が多い。各教員が一貫した研究テーマの追求によって、大きな研究目的の達成に向かっていくことが窺える。玉井教授の単著はその目に見える成果である。個人による研究が主体となるのが英米文学研究分野の特性であるが、海外を含めた他研究機関の研究者との共同研究を進めることによって、より大きな体系化も可能と思われる。また、学内の他専攻分野との共同研究もさらに推進する必要があるだろう。

ホ 研究（課題・方法・成果）の波及性

英米文学分野の場合、研究の波及性については、一般的に言って、評価がかなり困難である。文学研究は、他の研究分野とはその手法、目的、成果等多くの点で異質の部分をも有しており、個々の研究は独立性が強く、個性が尊重されるためである。一方で、英米文学研究には、他の研究分野、例えば心理学、文化人類学、哲学等の手法や知見を積極的に吸収消化してきた歴史がある。特に近年の英米文学研究においては、隣接の学問分野との境界が次第に不分明となっていて、学際性（interdisciplinarity）と間テクスト性（intertextuality）は、研究の前提と言えるほどになっている。各教員の研究成果は、歴史学、文化研究、美術、社会学等の分野と相互作用が可能なものであり、それらを正当に扱うか否かはむしろ他研究分野の側の課題であると考えべきであろう。

ヘ 教員組織としてのまとめ

イギリス文学とアメリカ文学の専門家によって組織が構成されていることは、研究と教育の両面で相乗的効果が期待され、非常に有効に機能していると推定される。学生にとっては研究テーマの選択の自由度が広がり、能力を十分に開花させる機会が増えることになる。日本英文学会賞受賞者が出ていることなどはその表れである。一方では、個々の教員の研究分野がそれぞれかなりの独立性を持ったものであるために、共同研究等の余地が限られているという不利もある。これは文学研究の特性上やむをえないことであり、また限られた教員数で広範囲な専門分野の教育・研究をカバーしなければならないために生じたことである。しかし、自然科学系の学問とは異なり、文学研究では研究者の個性と能力が非常に大きな比重を占めるため、この点で実際上の問題があるとは思われない。

ト 学会活動での位置

玉井教授が日本英文学会等、英文学関係のいくつかの学会の理事を務め、森岡教授も日本アメリカ文学会の編集委員、代議員等を務めるなど、我が国の英米文学関係学会の中核で重要な役職に就いている。各専任教員が（一部を除いて）日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本ハーディ協会等の全国学会での研究発表、フォーラム等に参加して、積極的な研究発信を行っていることも高く評価される。*Osaka Literary Review* の刊行、日本アメリカ文学会関西支部の定期開催、阪大英文学会大会の毎年開催など、地元での学会活動も非常に活発に行われている。大学院生による学会での研究発表も積極的に行われており、しかも日本英文学会と日本アメリカ文学会での発表が過去5年間で9件もある。これらの学会での研究発表審査の厳しさを考慮すれば驚異的な数字であり、入学者の資質が優れているのみならず、教育上の大きな成果が示されているとも言える。このように大学院生まで含めた学会活動は他に類を見ないほど活発であり、我が国の英米文学関係の学会活動において、組織全体として、その中核を担っていることは明白である。

（本外部評価は、2002年12月作成の資料に基づく。編集部注）

3-17 ドイツ文学

【はじめに、研究・教育活動の概要とその特色】

本専門分野は、創設以来の実証主義的な文献学の伝統を守りながら「原典の緻密な読解」と「広範な文献資料の精査」に基づくテキスト読解という研究の基本姿勢をあくまでも貫き、そうした研究実践を可能にする基礎的な知識と方法を身に付けることを教育の根幹に据えてきた。これまでは、主に啓蒙主義、古典主義からローマン主義にいたる18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ文学を主な研究領域とするスタッフを中心に研究・教育を当たってきたが、平成12年以降ドイツ語圏中欧（特にドイツ・モデルネの都市文学）を研究対象とし、この地域の文学や文化がおりなす多様な現象をあつかっている助教授をスタッフに迎え、思想史、社会史など隣接領域もひろく視野におさめた、新たな問題設定を模索し、研究・教育活動を展開している。平成11-13年度にかけて、当研究室が中心となり他大学の研究者と連携しながらすすめた「風景と空間」に関する共同研究は、そうした領域横断的なプロジェクトの試みであった。

ドイツ文学研究の基礎学としてのドイツ語学の研究・教育については、ドイツ人教師を中心に非常勤講師の応援を得て欠けるところのないように努めている。

研究室修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会は、機関誌『独文学報』や研究発表会をつうじて、活発な活動をおこなっている。

また、毎夏8月28日に大阪で開催される「ゲーテ生誕の夕べ」（日本ゲーテ協会主催）は15年来、本専門分野が挙げて取り組み、京阪神での日独文化交流の重要な一翼を担っている。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 1 助教授 1 外国人講師 1 助手 1

教授： 林 正則

助教授： 三谷研爾

外国人教師：ヨルク・ノヴァコヴィッチ

助手： 三谷(阪井)葉子

2. 在学生（2002年4月現在）

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	4	5	0	0	0	0	0	0

※うち留学生0名，社会人学生0名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	3	2	3	0	0
'98	3	0	2	1	0
'99	0	3	0	0	1
'00	3	0	1	0	2
'01	0	0	1	0	0
計	9	5	7	1	3

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	1	1
'99	0	0	0
'00	0	0	0
'01	0	0	0
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教官等

林 正則 【ゲーテのイタリア旅行前後——「古典主義」の生成をめぐって——】，論文，1999年3月，
中村元保（主査） 石田久（副査） 柏木隆雄（副査）

2. 大学院生等による論文発表等（1997～2001年度）

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	5	0	0	0	0	5
'98	6	1	0	0	1	8
'99	3	0	0	0	0	3
'00	5	0	0	0	0	5
'01	7	1	0	0	2	10
計	26	2	0	0	3	31

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	1	0	0	0	1
'98	0	1	0	0	0	1
'99	0	2	0	0	0	2
'00	0	3	0	0	0	3
'01	0	1	0	0	0	1
計	0	8	0	0	0	8

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

学会誌

- 赤木登代 「テオドーア・フォンターネ『エフィー・プリースト』——結婚という社会的行為の破綻——」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第13号，1997年11月，35-50ページ。
- 小野麻衣子 「中世の恋愛抒情詩における鷹のモチーフ」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第13号，1997年11月，69-87ページ。
- 茂幾保代 「『宵の明星』における「夢の風景」または「魔術的風景」」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第13号，1997年11月，19-33ページ。
- 森多摩喜 「リルケの初期作品における「神」をめぐって——キリスト教批判から自らの「神」探求へ」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第13号，1997年11月，51-67ページ。
- 山野彩子 「プロイスラーの『クラバート』における「遊び」と世界認識」、『待兼山論叢』（大阪大学文学会），第31号，1997年12月，47-59ページ。
- 山本賀代 「読書する主人公——18世紀ドイツにおける<ドン・キホーテ=モデル>の展開——」、『ドイツ文学論攷』（阪神ドイツ文学会），第40号，1998年12月，S. 1-21
- 赤木登代 「テオドーア・フォンターネ『エフィー・プリースト』と『ポッケンプール家の人々』——貴族階級の女性と奉公人たち」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第14号，1998年11月，39-54ページ。
- 江波昌子 「R. ワーグナーの小説をめぐって——イギリス人にあらわされているもの」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第14号，1998年11月，73-89ページ。
- 永谷麻衣子 「インスブルック復活劇における「聖墓訪問」のモチーフ」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第14号，1998年11月，55-71ページ。
- 山城貴茂 「シュトルムのノヴェレ『シュターツホーフにて』——アンネ・レーネとマルクスを隔てるもの——」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第14号，1998年11月，91-106ページ。
- 内田哲志 「トーマス・マン短編集『小フリーデマン氏』における語りの問題について」、『待兼山論叢』（大阪大学文学会），第32号，1998年12月，59-71ページ。
- 森多摩喜 「初期リルケにおける「自然」について——ヴォルプスヴェーデ体験を中心に——」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第15号，2000年11月，47-63ページ。
- 山城貴茂 「シュトルムのメールヒェン『雨姫』に見られる自然疎外と人間疎外」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第15号，2000年11月，65-81ページ。
- 赤木登代 「フォンターネの『返すよしなく』——〈男らしさ〉と〈女らしさ〉の相克——」、『待兼山論叢』（大阪大学文学会），第33号，1999年12月，57-69ページ。
- 神田彩子 「ファンタジー世界への冒険旅行——ドイツ児童文学における「出発」と「帰還」のモチーフ——」、『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会），第15号，2000年11月，79-95ページ。
- 葉柳和則 「可能的世界としての舞台——M. フリッシュの『伝記』初演に至る美学的背景——」、『独

- 文学報】(大阪大学ドイツ文学会), 第15号, 1999年11月, 23-41ページ。
- 茂幾保代 「『見えないロッジ』における太陽のメターファ — 主人公グスタフの「太陽」をめぐる体験を中心に —」, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第15号, 1999年11月, 43-59ページ。
- 森多摩喜 「世紀転換期における「運動」と「身振り」の問題 — リルケの中期作品に見られるダンスのモチーフを中心に —」, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第15号, 2000年11月, 61-78ページ。
- 村田美紀 「トーマス・マン『トニオ・クレーガー』とその後 — 「芸術家問題」から「ドイツの芸術家問題」へ —」, 『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 第34号, 2000年12月, 57-69ページ。
- 山本賀代 「『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における文学の自己省察」, 『ドイツ文学』(日本独文学会), 第106号, 2001年3月, 101-111ページ。
- 葉柳和則 「既視というリアリティ — M. フリッシュの『モントーク岬』における語りの存立機制 —」, 『ドイツ文学論攷』, 第43号, 阪神ドイツ文学会, S. 1-21, 2001年12月。
- 石田純一 「「見る」ことの限界に挑んで — ムーヅル『愛の完成』をめぐる —」, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第17号, 2001年11月, 63-79ページ。
- 永谷麻衣子 「『ドナウエッシンゲン受難劇』におけるユダヤ人たち」, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第17号, 2001年11月, 1-21ページ。
- 山城貴茂 「シュトルムの『森の隅』 — ある失楽園の物語 —」, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第17号, 2001年11月, 45-62ページ。
- 山本賀代 「18世紀ドイツ文学史における通俗小説の位置」, 『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第17号, 2001年11月, 23-44ページ。
- 吉元海人 「Klassizismus in den Trauerspielen von Andreas Gryphius」, 『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 第35号, 2001年12月, 85-103ページ。

紀要

- 赤木登代 「テオドーア・フォンターネ『不貞の妻』 — 女性の不貞行為をめぐる —」, 『クヴェレ』(クヴェレ会), 第51号, 1998年12月, 17-27ページ。
- 赤木登代 「フォンターネの『シャッハ・フォン・ヴェーテノー』 — 名誉をめぐるジェンダー —」, 『クヴェレ』(クヴェレ会), 第52号, 2001年12月, 15-34ページ。

単行本

- 葉柳和則 (共著) 「小さき者への変身 — エリアス・カネッティのカフカ読解」, 所収: 平田達治 (監修), 松村國隆, 金子元臣, 三谷研爾 (編), 『中欧 — その変奏』, 鳥影社, 1998年6月, 382-401ページ。

論文集等

- 森多摩喜 「ヴォルプスヴェーデの芸術家コロニー」, 『近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現』, 平成11-13年度科学研究費補助金 基盤研究 B (1) 研究成果報告書 (研究代表者 林正則), 115-123ページ。
- 山城貴茂 「「家」への参入 — シュトルムの『三色すみれ』」, 『近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現』, 平成11-13年度科学研究費補助金 基盤研究 B (1) 研究成果報告書 (研究代表者 林正則), 100-106ページ。

(2) 発表

- 山城貴茂 「シュトルムのノヴェレ『シュターツホーフにて』 — 語り手マルクスの問題を中心に —」, 大阪大学ドイツ文学会第4回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 1997年12月13日
- 赤木登代 「テオドーア・フォンターネの『不貞の妻』と『北の海辺』 — 不貞行為をめぐる —」, 大阪大学ドイツ文学会第5回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 1998年12月12日
- 赤木登代 「アルフレート・デーブリーンの『ベルリーン・アレクサンダー広場 フランツ・ビーバーコプフの物語』 — 主張する技術と大都市 —」, 阪神ドイツ文学会秋季研究発表会: シンポジ

- ウム「ドイツ文学における近代意識の展開」, 神戸薬科大学／兵庫県神戸市, 1999年11月14日。
- 神田彩子 「異界（ファンタジー）への冒険——ドイツ児童青年文学における「出発」と「帰還」のモチーフをめぐる考察」, 大阪大学ドイツ文学会第6回研究発表会, 大阪大学／大阪府豊中市, 1999年12月11日
- 山本賀代 「18世紀ドイツ小説史における通俗小説の位置」, 阪神ドイツ文学会, 第174回研究発表会, 神戸薬科大学／兵庫県神戸市, 2000年11月（要旨は『ドイツ文学論攷』（阪神ドイツ文学会）, 第42号, 2000年12月, 149-150ページに掲載）
- 葉柳和則 「「私」の神話学——フリッシュとレヴィ＝ストロース」, 阪神ドイツ文学会, 第174回研究発表会, 神戸薬科大学／兵庫県神戸市, 2000年11月。
- 石田純一 「「見る」ことの限界に挑んで——ムージル『愛の完成』をめぐって——」, 大阪大学ドイツ文学会第7回研究発表会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2000年12月2日
- 村田美紀 「トーマス・マンと「保守的的革命」——第1次大戦後の「非政治的人間の考察」へのアプローチ」, 大阪大学ドイツ文学会第8回研究発表会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2001年11月17日。

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 5 名

1997年度

葉柳和則：1997年10月－1999年10月 スイス政府給費留学生, チューリヒ大学

吉元海人：1997年10月－1998年9月 ロータリー奨学生, チューリヒ大学

1998年度

山野彩子：1998年10月－1999年9月 ロータリー奨学生, アウクスブルク大学

2000年度

池田泰子：2000年10月－2002年3月 ロータリー奨学生, ジーゲン大学

6. 専門分野出身の研究者（1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）

計 3 名

武林多寿子：1999年10月 エアランゲン大学（ドイツ）日本学科助手

赤木登代： 2000年4月 大阪教育大学教養学科講師

葉柳和則： 2000年10月 長崎大学環境科学部文化環境論講座助教授

7. 専門分野出身の高度職業人数（1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職, ジャーナリスト, アーティスト, 中

・高等学校の教員，その他の職業に就いた者について)

計 3 名

'97年度：0名 '98年度：2名 '99年度：0名 '00年度：0名 '01年度：1名

<内訳> 技術職 2名
教職 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

1997年度	『独文学報』	第13号 (11月)	学会誌
1998年度	『独文学報』	第14号 (11月)	学会誌
1999年度	『独文学報』	第15号 (11月)	学会誌
2000年度	『独文学報』	第16号 (11月)	学会誌
2001年度	『独文学報』	第17号 (11月)	学会誌

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

97年 日本ヘルダー学会秋季研究発表会 (11月)

98年～00年 阪神ドイツ文学会総会，研究発表会 (4月)

99年～01年 日本ヘルダー学会秋季研究発表会 (11月)

毎年8月28日ゲーテ生誕の夕べ (日本ゲーテ協会主催) の事務・実施担当

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

科研「空間と風景」研究会 (99年～01年度)

ヘルダー研究会 (隔月開催 97年～)

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

本研究分野は、「原典の緻密な読解」と「広範な文献資料の精査」に基づく実証主義的な文献学という専門分野の伝統を守りながら，ドイツ語テキストの正確・厳密な読解を研究と教育の基本に据えて活動を行ってきた。そうした伝統は，これまで研究・教育の両分野で大きな成果を上げてきた。大阪大学ドイツ文学研究室の卒業・修了者が学会で高く評価され，その少なからざるものが学会で中枢的な役割を担っていることが，それを示している。

しかしながら、大学設置基準の大綱化以降、日本のドイツ文学研究全体が大きな質的転換を迫られるなか、当専門分野の教育・研究活動もまた困難な状況に直面している。その端的なあらわれは、学部・大学院とも在籍学生数が減少していることであり、それがことに院生の研究・教育職への就職の困難にもはねかえっている。この事態の原因は、基本的には現スタッフの力不足に帰せられるべきものであろうが、具体的には次のような問題点を指摘することができる。

・厳密な文献学研究の伝統に安住し、研究・教育の両面で、時代の進展とともに大学の内外からドイツ文学研究に求められるに至った多様な要求に応える努力が不十分であった。

・教養部解体（1995年）に伴う文学部再編で、専修進学が制度が変わり2年次から学生が専修に所属することになったが、そうした制度改変に迅速・的確に対応できなかった。つまり、初修外国語であるドイツ語の習得段階が大きく異なっている学部学生に対して、綿密かつ妥当なカリキュラムや教育プログラムを作成することに遅れをとった。

・大学院教育の位置づけの変化にもかかわらず、教育・指導体制の再構築が遅れた結果、博士後期課程学生の学位取得へのサポートが不十分であった。

これらの問題への真摯な反省に基づき、教育活動について、以下のような取り組みを進めている。

- (1) 学部教育プログラムの再構築：1年次提供の専門基礎教育科目の授業内容を、高校での学習内容と接続できるように改める。また、学部教育では演習的科目の内容を、初級文法習得者レベルで設計しなおすとともに、発表や討議を軸とした学生参加型のプログラムを提供する。
- (2) 教育内容の領域横断化：伝統的な文献学的教育とならんで、文化史研究や民俗学など隣接分野との交流にもとづく研究成果を授業に活かし、専門分野にかかわる学生の研究関心をよりアクチュアルで多角的なものにする。この点は、現スタッフでできるかぎり努力するとともに、非常勤講師の来講によって実現をはかっている。
- (3) 博士論文指導の強化：研究者の就職状況の極端な悪化を背景に、目的意識を見失いがちな若手研究者のサポートを計画的に実施する。2002年度に、はじめて課程博士号取得者が出たので、後続の養成を積極的にすすめる。

研究活動では、上記(2)と連動するかたちで、他大学の研究者と連携し、また当専門分野の院生も加えて共同研究「近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現」をおこなった。1999年度から2001年度までの3年間は科研費の給付をうけ、阪神ドイツ文学会でのシンポジウムを担当、2002年3月に研究成果報告書を刊行した。従来の文献学を超えて領域横断的なプロジェクトを組み、一定の成果を上げることができたのは、研究室全体の研究意欲と協力体制の強化にとって、また研究分野の新たな可能性を開くという意味で大きかった。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

林 正則 「原植物」は絵に描けるか？——ゲーテの自然研究と言語——, 里見軍之編『自然のなか

- の人間』、大阪大学文学研究科広域文化形態論講座, pp. 115-128, 2001.
- 林 正則 「新しい喜劇の理論」, 南大路振一／中村元保／石川実／深見茂編『18世紀ドイツ市民劇研究』, 三修社, pp. 121-138, 2001.
- 林 正則 「試練に立つ市民劇——市民劇のフランス革命受容——」, 南大路振一／中村元保／石川実／深見茂編『18世紀ドイツ市民劇研究』, 三修社, pp. 434-449, 2001.
- 林 正則 「シラーのバラードにおけることばと歴史——『人質』の解釈をてがかりに——」, 梅澤知之／栗林澄夫／林正則／広瀬千一他編『仮面と遊戯—フリードリヒ・シラーの世界』, 鳥影社, pp. 165-182, 2001.
- 林 正則 「近代ドイツにおける空間経験の変容と旅の記述」, 『近代ドイツにおけ空間経験の変容とその言語表現』, pp. 1-8, 2002.
- 林 正則 「風景画家としてのアーモル——ゲーテとイタリアの風景——」, 『ゲーテ年鑑』第39巻, 日本ゲーテ協会, pp. 1-19, 1997.
- 林 正則 「クラクフへの途上にて——1790年・ゲーテのシュレージエンの旅——」, 『ゲーテ年鑑』第43巻, 日本ゲーテ協会, pp. 13-30, 2001.
- 三谷研爾 「都市と美的モデルネ——世紀転換期のプラハにおける空間経験とその言語的表象——」, 平田達治監修／松村國隆, 金子元臣, 三谷研爾編『中欧——その変奏——』, 鳥影社, pp. 315-335, 1998.
- 三谷研爾 「視覚と近代をめぐる四つの議論」, 平成7-9年度科研費研究成果報告書(課題番号07301007)(研究代表者:大林信治)『近代社会と観察者の系譜——科学・文学・思想史における分析とモデル化——』, 大阪大学人間科学部, pp. 3-10, 1998.
- 三谷研爾 「ドイツ語圏における都市の経験と観察」, 平成7-9年度科研費研究成果報告書(課題番号07301007)(研究代表者:大林信治)『近代社会と観察者の系譜——科学・文学・思想史における分析とモデル化——』, 大阪大学人間科学部, pp. 69-75, 1998.
- 三谷研爾 「街衢へのまなざし——近代における都市経験とその言語表現——」, 大林信治, 山中浩司編『視覚と近代——観察空間の形成と変容——』, 名古屋大学出版会, pp. 217-246, 1999.
- 三谷研爾 「都会における眼の愉しみ——シュティフター『聖シュテファン教会の塔からの眺望と観察』にみる空間の記述——」, 平成11-13年度科研費研究成果報告書(課題番号11410125)(研究代表者:林正則), 『近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現』, 大阪大学大学院文学研究科ドイツ文学研究室, pp. 85-99, 2002.
- 三谷研爾 「多民族都市プラハのゲーテ——カフカにおけるゲーテ受容をめぐって——」, 『ゲーテ年鑑——ゲーテ生誕250年記念号——』第42号, 日本ゲーテ協会, pp. 77-93, 2000.
- 阪井(三谷)葉子 「アイヒェンドルフの音の庭——言語テキストにおけるサウンドスケープ——」, 平成11-13年度科学研究費(基盤研究B)研究成果報告書(研究代表者:林正則)『近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現』, pp. 76-84, 2002.
- 阪井(三谷)葉子 「ドイツ民謡収集の起源——啓蒙主義とロマン主義の接点としての『少年のふしぎな角笛』——」, 『ドイツ文学』4月8日号, 日本独文学会, pp. 60-70, 1997.
- 阪井(三谷)葉子 「民謡におけるく口承性」, 『あうろーら』第17号, 日本アイヒェンドルフ協会, pp. 6-19, 1999.
- 阪井(三谷)葉子 「口承の記憶——ドロステのバラード『博労の家霊』をめぐって——」, 『独文学報』第16号, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 1-22, 2000.
- 阪井(三谷)葉子 「研究ノート——音楽民俗学の挑戦—オルデンブルク・コロキウムから——」, 『独文学報』第17号, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 81-98, 2001.

1-2. 著書

- 三谷研爾 「中欧——その変奏——」, (共著), 松村國隆(大阪市大)／金子元臣／三谷研爾／監修者・平田達治, 鳥影社, 512p., pp. 315-335, 1998.
- 林 正則 『仮面と遊戯 フリードリヒ・シラーの世界』, (共著) 林正則／梅澤知之(姫路独協大)／栗

林澄夫（大阪教育大）／広瀬千一（大阪市大）／山本淳二（関西学院大）／渡邊哲雄（愛知医科大），鳥影社，258p.，pp. 165-182，2001.

林 正則 『近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現』，大阪大学文学研究科ドイツ文学研究室，123p.，pp. 1-8，2002.

Jörg Nowakowitsch Macht nichts! Deutsche Grammatik mit Lesetext. (共著) 中村元保（梅花女子大）伊東史明（大谷大）朝日出版社 80p. 1997

Jörg Nowakowitsch Tante Ellas Beratungszimmer. Deutsche Grammatik mit Text. (共著) 今別府美江（大阪大非常勤）朝日出版社 82p. 2000

1-3. 翻訳，書評，解説，辞典項目等

(1) 翻訳書

三谷研爾 「カフカの衣装」，(共著) マーク・アンダーソン著／三谷研爾／武林多寿子（エアランゲン大）訳，高科書店，pp. 1-409，1997.

(2) 書評

林 正則 『「イメージの狩人——評伝ジュール・ルナール——」』，『読書探検』第30号，大阪大学生協同組合「読書探検」編集委員会，pp. 11巻10号，1999.

三谷研爾 「Rolf J. Goebel: Constructing China」，『ドイツ文学』第101号，日本独文学会，pp. 138-141，1998.

三谷研爾 「城山良彦『カフカ』」，『オーストリア文学』第15号，オーストリア文学研究会，pp. 65-66，1999.

三谷研爾 「石川達夫『黄金のプラハ——幻想と現実の錬金術——』」，『図書新聞』11月1日号，図書新聞，pp. /1/5，2000.

阪井(三谷)葉子 「今泉文子著『ロマン主義の誕生 ノヴァーリスとイエーナの前衛たち』」，『Flaschenpost』/1/21号，ゲルマニステイネンの会，pp. 17-18，2000.

(3) 辞典項目

林 正則 「ゲラート」「ハインゼ」『世界文学大事典』，林正則，集英社，pp. 95，1997.

(4) その他（エッセー，批評，新聞記事，インタビュー等）

林 正則 「ゲーテ生誕250年について」，『ドイツ文学論攷』第41号，阪神ドイツ文学会，pp. 159-163，1999.

三谷研爾 「物語られた空間，あるいはモンテ・クリスト雑考」，『読書探検』第36号，pp. 5巻6号，大阪大学生協，2000.

1-4. 口頭発表

(2) 国内学会

林 正則 「旅・庭園・都市——1800年前後における空間経験の変容——総論」，阪神ドイツ文学会，甲南大学／兵庫県神戸市，2000年1月23日.

三谷研爾 「多民族都市プラハにおけるゲーテ——カフカにみるゲーテ像——」，シンポジウム『ゲーテとモデルネ』，日本独文学会，上智大学／東京都千代田区，1999年5月22日.

三谷研爾 「都市空間の記述——ニコライとリヒテンベルクの場合——」，シンポジウム『旅・庭園・都市——1800年前後における空間体験の変容——』，阪神ドイツ文学会，甲南女子大学／兵庫県神戸市，2000年1月23日.

三谷研爾 「社会・歴史と接続する教育」，シンポジウム『Wozu Germanisten? 大学教育におけるその

アイデンティティをめぐって』, 阪神ドイツ文学会, 大阪音楽大学/大阪府豊中市, 2001年12月2日.

阪井(三谷)葉子 「贖罪のパラーデ『博労の家霊』, シンポジウム「1997年のドロステ=ヒュルスホフ」(阪神ドイツ文学会第163回研究発表会), 阪神ドイツ文学会, 甲南大学/兵庫県神戸市, 1997年10月26日.

(3) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

林 正則 「クラクフへの途上にて——1790年ゲーテのシュレーゲンの旅——」, 富山における講演と映画の集い, 日本ゲーテ協会富山支部, 県民会館/富山県富山市, 1998年11月14日.

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997年度~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成12年度	奨励研究(A) 1	1710276	19世紀の民謡収集にみる口承文化論の位相	
	三谷葉子			600,000円
平成13年度	基盤研究(B) (1)	11410125	近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現	
	林 正則			1,100,000円
平成12年度	基盤研究(B) (1)	11410125	近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現	
	林 正則			1,500,000円
平成11年度	基盤研究(B) (1)	11410125	近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現	
	林 正則			3,000,000円
平成11年度	奨励研究(A)	11710276	19世紀の民謡収集にみる口承文化論の位相	
	三谷葉子			1,300,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997年度~2001年度)

林 正則

日本独文学会理事 (1995. 5 - 1998. 5)

日本ゲーテ協会評議員 (2000. 5 -)

ドイツ語学文学振興会評議員 (2001. 4 -)

日本ヘルダー学会理事 (1994. 5 -)

大阪大学ドイツ文学会会長 (2000. 4 -)

三谷研爾

日本独文学会学会誌編集委員 (2001. 3 -)

阪神ドイツ文学会幹事 (2000. 4 -)

関西チェコスロヴァキア協会理事長 (1996. 4 - 2002. 3)

大阪大学ドイツ文学会委員 (2002. 4 -)

阪井葉子

ゲルマニスティンネンの会 関西支部代表 (2000. 4 -)

大阪大学ドイツ文学会委員 (1995. 4 -)

大阪大学文学会委員 (2001. 4 -)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

林 正則 教授

1 学期	ドイツ文学特殊講義	ゲーテとプロメテウス神話
2 学期	ドイツ文学特殊講義	【親和力】と【エフィ・プリースト】
1 学期	ドイツ文学特殊講義	シラーのバラード
1 学期	ドイツ文学作品研究特殊演習	ドイツ・ローマン派のメールヒェン(1)
2 学期	ドイツ文学作品研究特殊演習	ドイツ・ローマン派のメールヒェン(2)
2 学期	ドイツ文学博士論文作成演習	博士論文作成指導 (三谷助教授と合同)
1 学期	ドイツ文学修士論文作成演習	修士論文作成指導 (三谷助教授と合同)
1 学期	ドイツ文学講義	ゲーテとプロメテウス神話
2 学期	ドイツ文学講義	【親和力】と【エフィ・プリースト】
1 学期	ドイツ文学講義	シラーのバラード
1 学期	ドイツ文学作品研究演習	ドイツ・ローマン派のメールヒェン(1)
2 学期	ドイツ文学作品研究演習	ドイツ・ローマン派のメールヒェン(2)

三谷研爾 助教授

2 学期	ドイツ文学特殊講義	多民族都市と文化的アイデンティティ
2 学期	ドイツ文学史講義	多民族都市と文化的アイデンティティ
1 学期	ドイツ文学史演習	中欧モダニズムの思想と文化(1)
2 学期	ドイツ文学史演習	中欧モダニズムの思想と文化(2)
2 学期	ドイツ文学博士論文作成演習	博士論文作成指導 (林教授と合同)
1 学期	ドイツ文学修士論文作成演習	修士論文作成指導 (林教授と合同)
1 学期	ドイツ文学作品研究演習	<交通>のディスクール(3)
2 学期	ドイツ文学作品研究演習	<交通>のディスクール(4)

J. Nowakowitsch 講師

1 学期	ドイツ文学特殊演習	Gedichtinterpretation(1)
2 学期	ドイツ文学特殊演習	Gedichtinterpretation(2)
1 学期	ドイツ文学特殊演習	Nacherzählen der Märchen(1)
2 学期	ドイツ文学特殊演習	Nacherzählen der Märchen(2)
1 学期	ドイツ文学特殊演習	Kolloquium(1)
2 学期	ドイツ文学特殊演習	Kolloquium(2)
1 学期	ドイツ文学特殊演習	Übungen im Briefschreiben(1)
2 学期	ドイツ文学特殊演習	Übungen im Briefschreiben(2)
1 学期	ドイツ文学演習	Gedichtinterpretation(1)
2 学期	ドイツ文学演習	Gedichtinterpretation(2)
1 学期	ドイツ文学演習	Nacherzählen der Märchen(1)
2 学期	ドイツ文学演習	Nacherzählen der Märchen(2)

1学期	ドイツ文学演習	Kolloquium(1)
2学期	ドイツ文学演習	Kolloquium(2)
1学期	ドイツ語学演習	Übungen im Briefschreiben(1)
2学期	ドイツ語学演習	Übungen im Briefschreiben(2)

金子元臣 教授 (言語文化部)

1学期	ドイツ文学特殊演習	“Der Tod in Venedig” を読む(1)
2学期	ドイツ文学特殊演習	“Der Tod in Venedig” を読む(2)
1学期	ドイツ文学演習	“Der Tod in Venedig” を読む(1)
2学期	ドイツ文学演習	“Der Tod in Venedig” を読む(2)

市川 明 講師 (非常勤講師・大阪外国語大学)

1学期	ドイツ文学特殊演習	主人と下僕の文学(1)
2学期	ドイツ文学特殊演習	主人と下僕の文学(2)
1学期	ドイツ文学演習	主人と下僕の文学(1)
2学期	ドイツ文学演習	主人と下僕の文学(2)

佐藤正樹 講師 (非常勤講師・広島大学)

1学期	ドイツ文学特殊講義	近世ドイツ文学における「個人」の運命
1学期	ドイツ文学講義	近世ドイツ文学における「個人」の運命

2. 学部授業担当

林 正則 教授

1学期	ドイツ文学講義	ゲーテとプロメテウス神話
2学期	ドイツ文学講義	『親和力』と『エフィ・ブリースト』
1学期	ドイツ文学講義	シラーのバラード
1学期	ドイツ文学演習	テキストをいかに読むか?
2学期	ドイツ文学演習	E. T. A. Hoffmann『砂男』を読む

三谷研爾 助教授

1学期	ドイツ文学演習	<交通>のディスクール(3)
2学期	ドイツ文学演習	<交通>のディスクール(4)
2学期	ドイツ文学講義	多民族都市と文化的アイデンティティ
1学期	ドイツ文学演習	中欧モダニズムの思想と文化(1)
2学期	ドイツ文学演習	中欧モダニズムの思想と文化(2)

J.Nowakowitsch 講師

1学期	ドイツ文学演習	Gedichtinterpretation(1)
2学期	ドイツ文学演習	Gedichtinterpretation(2)
1学期	ドイツ文学演習	Nacherzählen der Märchen(1)
2学期	ドイツ文学演習	Nacherzählen der Märchen(2)
1学期	ドイツ語学演習	ドイツ語会話(1)
2学期	ドイツ語学演習	ドイツ語会話(2)
1学期	ドイツ語学演習	Übungen im Briefschreiben(1)
2学期	ドイツ語学演習	Übungen im Briefschreiben(2)

金子元臣 教授（言語文化部）

1 学期 ドイツ文学演習 “Der Tod in Venedig” を読む(1)

2 学期 ドイツ文学演習 “Der Tod in Venedig” を読む(2)

市川明 講師（非常勤講師・大阪外国語大学）

1 学期 ドイツ文学演習 主人と下僕の文学(1)

2 学期 ドイツ文学演習 主人と下僕の文学(2)

佐藤正樹 講師（非常勤講師・広島大学）

1 学期 ドイツ文学講義 近世ドイツ文学における「個人」の運命

3. 共通教育担当

三谷研爾 ドイツ文学入門（専門基礎教育科目）

4. 他大学における集中講義等

林 正則 東京大学大学院人文社会系研究科 H12. 10. 1～H13. 3. 31 集中

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：鎌田道生（関西学院大学文学部教授）

ドイツ文学研究室は創設以来、実証主義的な文献学の伝統を守りながらテキストの正確な解読を教育・研究の中心に据え、それによって数多くの研究者を輩出し、研究業績、研究活動において学会における高い評価を獲得している。とはいえここ数十年の社会の劇的変動とそれに対応した文学研究の質的变化は、この従来の堅実な実証的学風に再検討を迫っている。ここ数年の独文研究室の動向には、そうした社会の多様な要請に応える意識的努力の跡が明確に見られる。そこでここ数年の同研究室の研究活動と業績について次のような視点を中心に評価をこころみたい。

1. 研究の先見性・独創性

従来の18・19世紀の啓蒙主義、古典主義、ロマン派中心の研究体制に加えて、文化論的視点を持つ20世紀文学の研究者を講座に迎え、かつ非常勤講師として20世紀文学の様々な領域の専門家を呼ぶことによって近現代のドイツ語圏文学の研究を推し進める体制が出来上がったことは大いに評価できる。また取り上げる研究課題が狭義の文学作品研究から、多様な、一段と社会に開かれた文化研究へとシフトされつつあることも、今はまだ萌芽的段階にあるとはいえ、将来独創的研究を生む基盤を形成すると考えられる。

2. 研究の実証性

しかし、上記の独文研究室の変化にともない、従来から評価の高かった実証的学風が多大の影

響を被るとは考えられないし、またその学風が無くなることが望ましいことでもない。実証的精神は文学研究が学問に留まる限りは、基本的に不可欠の存在であるからであり、文学が文化研究の一端を担う場合もそこには厳密性が要求されるからである。営々と培われてきた実証的学風は古き器に新しい酒を盛ることによって着実に生き続けてゆくことと思われる。

3. 研究の持続性・体系性・波及性

1999年から3年にわたって科学研究費の給付を受けた共同研究「近代ドイツにおける空間経験の変容とその言語表現」に象徴的に表されているごとく、独文研究室の教員、また大学院生の研究は、巨視的に見れば「近代ドイツ」とは何かという大きな総合的テーマをめぐっての多様な研究の集積であり、その点において研究の持続性・体系性は一貫していると思われる。またその共同研究に見られた他大学の研究者との連携、専門領域を越えた学科横断的方向への研究の波及は、新しい研究の在り方を示唆するものと言える。今後この種の研究が外国の研究者をも巻き込み、一段と旺盛になることが望まれる。

4. 教員組織としてのまとめ

近代ドイツ語圏の文学・文化研究を中心とする組織としては、ドイツ古典主義の研究者、ロマン派の研究者、そして20世紀モダニズム文学の研究者、そして外国人教師を専任に据え、かつ不足する分野に非常勤講師を招き、一応理想的体制が出来上がっていると思われる。ここ数年のカリキュラムの編成からも読みとれるように、学部教育のプログラムの再構築、教育内容の領域横断化、また博士論文指導の強化が打ち出され、各教員が懸命に自己の研究の幅を広げ、社会や学生の要請に応えようとしている点も評価できる。ただし、教員の絶対数の不足を承知の上で、敢えて不満を言えば、第二次大戦以降の、つまりは現代ドイツの文学・文化を講じる教員が不在であること、また言語学を研究する学生を受け容れる体制が組み立てられていないことが指摘できる。この点での改善が望まれる。

5. 学会活動での位置

現在、日本にはドイツ文学に関して最大の学会「日本独文学会」があり（会員数約2600人）、その内、阪神地区を中心にその支部（別称「阪神ドイツ文学会」、会員数約400名）があり、全国で最も活発な研究活動（年3回の研究発表会、数回の講演会、機関誌『ドイツ文学論攷』の発行）を行っている。大阪大学の独文研究室は、その支部の中心的存在の1つであり、教員・院生ともどもその会員として阪神間のドイツ文学研究の興隆の一翼を担っている。また「日本独文学会」に関して言えば、研究室から過去に数名の支部長、理事、機関誌『ドイツ文学』の編集委員を輩出し、日本の独文学研究に多大の貢献をなしている。また教員は、ドイツ語学文学振興会の役員をはじめ各種の学会（日本ヘルダー学会）、協会（日本ゲーテ協会、関西チェコスロヴァキア協会）、学会（クヴェレ会等）の役員を勤め、機関の振興に力を揮っている。学会の新人賞とも言える昨年度のドイツ語学文学振興会の奨励賞に博士後期課程の院生が選ばれたことは特筆す

べきことである。

学内的には大阪大学文学会という学会組織を持ち、研究発表会、講演会を開催し、機関誌『独文学報』を年1回発行し活発な活動を行っていることは評価できる。また機関誌に掲載された論文の実証的手堅さは定評がある。

他に、毎夏8月28日に大阪で開催される「ゲーテ生誕の夕べ」（日本ゲーテ協会主催）は独文研究室がその運営を担い、京阪神地区での日独文化交流に貢献している。

6. 大学院生の研究活動

英語を中心とするグローバル化のあおりを受け、ドイツ語の学習、ひいてはドイツ文学の研究が衰退の一途を辿りはじめて数年になる。その影響は、結果として院生の研究・教育職への就職の困難さを生み出した。そうした状況のせいでもあるが、教員スタッフによる懸命の努力にもかかわらず、優秀な学生の大学院への進学者数（特に学内からの）が減ったことは、各大学に共通する一般的現象であるとは言え、ここ5年に限って見ても学部の卒業生がゼロだった年が複数にわたって存在したことは反省すべき点として指摘せざるをえない。またそれに呼応して博士課程前期修了者、後期課程修了者が減ったことも憂うべき事態である。しかしながら2001年度に学部卒業生や博士課程修了者の数が激増したこと、また2002年度にはじめての課程博士が誕生したことは、教員一同のここ数年の意識改革に基づく真摯な努力がようやく実を結んだと評価できる。今後の修士、博士の量産が期待される。

7. 残された課題

以上、幾つかの点について評価と批判を展開したが、最後に残された課題を箇条書きに記し、まとめとしたい。

- 1) 外国、特にドイツ語圏の大学との学術交流（教員、院生の派遣）の拠点を持つこと。このことはドイツ語圏の現実、そしてドイツの学問の現状を認識する上で必須のことである。
- 2) これに併せてドイツ語圏の研究機関からの第一線の客員教授、客員研究員を受け入れる体制を整えることが望まれる。
- 3) 現在萌芽的状况にある領域横断的プログラムを充実し、学内の他の組織、他大学の研究者との連携を一段と深める。いわばCOEを目指したとも言える研究体制を構築することが望ましい。
- 4) 助手、外国人講師の在り方をも含め、教員組織を再検討し、全員の能力が最大限に有機的に機能する方法を見つけられないものかと考える。

3-18 フランス文学

【はじめに、研究・教育活動の概要とその特色】

本専門分野は、フランス文学研究の王道である文献学的実証性を重んじ、堅実な方法でフランス文学のテキストを読み、すでにパスカル研究では「エコール・ドーサカ（大阪学派）」と称されて著名であり、バルザック研究、ブルースト研究ではフランス本国に伍して遜色のない研究と教育を行うことを創設以来努めてきた。その成果は数多くの国際的に通用する専門家を輩出したことによっても証明される。また優れた外国人教師はフランス語の実践的運用能力の養成に力を注ぎ、仏政府給費留学生を含む多くの留学生を海外に送った。

また学外のアリアンス・フランセーズ、関西日仏学院とも協力関係を結び、学生の語学力の向上、海外思潮の速やかな摂取を計った。

ごく最近まで学部生は3年から進学し、専門教育を行ったが、2年生からの進学となって、新たに語学のコースを増やし、文法、会話など従来よりもフランス語の能力を高めるように配慮している。科目は中世から現代までのフランス文学を併任教授の助力も仰いで教授し、知識に偏りが無いことをめざし、語学教育も専門家が先端の理論を紹介している。

院生については毎週研究指導の時間を設け、他の院生も含めた自由討議で、論理の整合性や発表の有効な表現法について訓練する機会としている。

また年一回発行する研究誌に寄稿させ、論文執筆の機会を多くするように心がけている。この研究誌はフランスのもっとも権威ある学会誌に文献として載るほど著名となっており、学生もフランス語で執筆するか、要旨をフランス語で記すかして、海外に発信している。

研究室では院生と学部生が自由に討議できる時間と空間を設け、積極的な学生はそれぞれに読書会を開いて知識やフランス語応用能力を涵養できるようにしている。院生は学部生を指導し、教官とはまた別趣の効果をあげているようだ。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 1 助教授 1 外国人講師 1 助手 1

教授： 柏木隆雄

助教授： 和田章男

外国人教師： アニエス・ディソン

助手： 藤本武司

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	6	19	0	0	0	1	0	0

※うち留学生0名，社会人学生2名

3. 修了生・卒業生 (1997～2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	5	2	3	1	2
'98	6	3	1	0	0
'99	6	3	3	0	0
'00	12	2	1	1	2
'01	4	2	2	0	0
計	33	12	10	2	4

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】(1997～2001年度)

1. 博士学位授与数

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	1	0	1
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	1	0	1
'01	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者，題目，審査教官等

- 林 直子 Paul Valéry: un regard qui renouvelle le monde. 課程博士。1998. 3. 25. 主査：柏木隆雄，副査：和田章男，アニエス・デイソン，鷺田清一
- 武田裕紀 Du mouvement dans la physique cartésienne. 課程博士。2000. 10. 1. 主査：柏木隆雄，副査：和田章男，山形頼洋，望月太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	9	0	0	1	0	10
'98	8	0	0	0	0	8
'99	9	0	0	1	0	10
'00	11	2	0	2	0	15
'01	10	1	1	2	0	14
計	47	3	1	6	0	57

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等での 講演会	その他	計
'97	0	3	0	0	0	3
'98	0	7	0	0	0	7
'99	1	7	3	0	0	11
'00	0	13	2	0	1	16
'01	0	6	7	0	0	13
計	1	36	12	0	1	50

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中(発表年度において在籍)の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 安藤麻貴 「アルペール・カミュ『転落』における「聖なるもの」」『関西フランス語フランス文学』n°5, 1999
- 安藤麻貴 “Le mythe d’Orphée chez Pierre Emmanuel” *Nouvelle Plume*, n°2 <神話・象徴・文学> 2001
- 上江洲律子 「マルロー『王道』における「昆虫」・「モイ族」・「細菌性毒素」の役割——「戦いの場」の構築手法——」『関西フランス語フランス文学』n°4, 1997
- 上江洲律子 “Le rôle des objets brahmaniques dans *La Voie royale* d’André Malraux” *Gallia*, n°37, 1998
- 上江洲律子 “L’univers étranger dans les premières œuvres de Malraux – du motif farfelu à l’espace exotique –” *Gallia*, n°38 1999
- 上江洲律子 “Le chronotope du Royaume-Farfelu d’André Malraux” *Gallia*, n°40, 2001
- 岡田純子 “Quête de la liberté—le cas de l’Avenir—” *Gallia*, n°37, 1998
- 岡田純子 「ラコルデアール：『ノートルダムでの講和』（1835-1836）のレトリック」『待兼山論叢』文学篇 n°35, 2001
- 加藤靖恵 “Le projet abandonné de la “préface” de Jean Santeuil” 『待兼山論叢』文学篇 n°31, 1998
- 加藤靖恵 “La leçon d’impressionnisme d’Elstir et la vision du héros – genèse du “Port de Carquethuit” *Bulletin d’informations proustiennes*, n°28, 1998
- 加藤靖恵 “Le site de Carquethuit décrit par Elstir: la genèse du discours du peintre” *Bulletin Marcel Proust*, n°47, 1998
- 黒岡美登里 “La recherche du “vrai lieu” ou l’espace autobiographique dans *L’Arrière-pays* d’Yves

- Bonnefoy” *Gallia*, n°37, 1998
- 黒岡美登里 “L’ombre et le nom — à propos de deux épisodes dans *Paulina 1880* de P. J. Jouve — ” *Gallia*, n°39, 2000
- 黒岡美登里 “Une écriture de soi: *Le nom sur le bout de la langue* de Pascal Quignard” *Gallia*, n°41, 2002
- 黒岡美登里 “Présence de la Bible dans *La Pluie d’été* de Marguerite Duras” *L’Information littéraire*, 52e année, n°2, 2002
- 黒岡美登里 *La musique dans l’œuvre littéraire de Marguerite Duras*, Harmattan, 2002
- 阪村圭英子 「『ソドムとゴモラ』のクラゲのイメージ」『関西フランス語フランス文学』n°7, 2001
- 阪村圭英子 “Les yeux mauves de Mme de Guermantes” *Gallia*, n°40, 2001
- 阪村圭英子 「プルーストと boule de neige の花束 (スワン夫人の「白の長調交響曲」)」 *Gallia*, n°41, 2002
- 佐藤久仁子 “Le mal chez François Mauriac dans *Thérèse Desqueyroux* et *Le Noeud de vipères*” *Gallia*, n°39, 2000
- 佐藤久仁子 “L’absence de communication dans *Le Sagouin*” *Les Lettres françaises*, n°21, 2001
- 高岡尚子 “L’utopie de George Sand” *Gallia*, n°37, 1998
- 高岡尚子 “L’endroit équivoque et polyvalent — les ‘jardins’ dans *Le Pêché de Monsieur Antoine* de George Sand” *La lettre d’Ars*, 2001
- 高岡尚子 “Naissance et disparition dans *Jacques* de George Sand” *Gallia*, n°40, 2001
- 武田裕紀 「重さはどのように決定されるのか——デカルトにおける力 force の射程——」『関西フランス語フランス文学』n°5, 1999
- 武田裕紀 「なぜ運動の量とその方向は区別されるのか? ——『哲学原理』第2部第41項をめぐる——」 *Gallia*, n°38, 1999
- 武田裕紀 「デカルトにおける力学の再検討」『待兼山論叢』文学篇 n°34, 2000
- 武田裕紀 「モリエール『気でやむ男』の「小さな即興オペラ」における王の不在」 *Gallia*, n°40, 2001
- 中尾雪絵 「ディドロ『修道女』における見かけと真実」 *Gallia*, n°40, 2001
- 中尾雪絵 “L’athéisme et l’intérêt de la physiologie chez Diderot” *Gallia*, n°41, 2002
- 林 千宏 「Pierre de Ronsard, *Sur la mort de Marie* における新プラトン主義的世界像」『ロンサル研究』n°14, 2001
- 深川聡子 “La musique dans l’univers romanesque de *L’Écume des jours*” *Gallia*, n°38, 1999
- 深川聡子 “La composition et la structure spatio-temporelle de *L’Écume des jours*” *Gallia*, n°39, 2000
- 藤田義孝 「アレゴリーとしての『夜間飛行』——「船」のイメージを中心として——」『日本フランス語フランス文学研究』n°75, 1999
- 山崎恭宏 「パリの場の構造について——リュシアン・ド・リュバンプレのパリの軌跡をめぐる——」 *Gallia*, n°41, 2002

(2) 発表

- 安藤麻貴 「贖罪は可能か——アルベール・カミュ『転落』をめぐる——」大阪大学フランス語フランス文学会 1998
- 安藤麻貴 「アルベール・カミュ『転落』における「聖性」」日本フランス語フランス文学会関西支部会 1998
- 上江洲律子 「マルロー『王道』における「昆虫」・「モイ族」・「細菌性毒素」の役割——「戦いの場」の構築手法——」日本フランス語フランス文学会関西支部会 1997
- 上江洲律子 「マルロー『王道』における「昆虫」・「モイ族」・「細菌性毒素」の役割——小説における世界創造の手法——」大阪大学フランス語フランス文学会 1997
- 上江洲律子 「マルロー『紙の月』における“farfelu”の表象」日本フランス語フランス文学会九州支部大会 2001

- 上江洲律子 「マルロー『風狂王国』における *Ispahan* の機能」大阪大学フランス語フランス文学会2002
- 岡田純子 「ラコルデールと自由の概念」日本フランス語フランス文学会秋季大会 1998
- 加藤靖恵 「エルスチールの挿話の生成過程」日本フランス語フランス文学会春季大会 1997
- 阪村圭英子 「『失われた時を求めて』における紫について」大阪大学フランス語フランス文学会1999
- 阪村圭英子 「『ソドムとゴモラ』のクラゲのイメージ」日本フランス語フランス文学会関西支部会 2000
- 阪村圭英子 「プルーストとオダマキの花」大阪大学フランス語フランス文学会 2001
- 阪村圭英子 「プルーストとオダマキの花」日本フランス語フランス文学会秋季大会 2001
- 佐藤久仁子 「F. モーリヤックの「悪」についての一考察——『テレーズ・デスケルー』, 『蝮のからみあい』をめぐって——」大阪大学フランス語フランス文学会 1999
- 佐藤久仁子 「F. モーリヤックの「悪」について——『テレーズ・デスケルー』, 『蝮のからみあい』をめぐって——」日本フランス語フランス文学会関西支部会 1999
- 佐藤久仁子 「F. Mauriac の *Le Sagouin* における悪へと向かう宿命——*Thérèse Desqueroix* から25年を経て」日本フランス語フランス文学会秋季大会 2000
- 高岡尚子 「George Sand の作品に見る「庭」」大阪大学フランス語フランス文学会 2000
- 高岡尚子 「ジョルジュ・サンドの *Le Pêché de Monsieur Antoine* に描かれる庭」日本フランス語フランス文学会秋季大会 2000
- 高岡尚子 「シンポジウム：フランス文学における「地方」／ジョルジュ・サンドとベリー地方」大阪大学フランス語フランス文学会 2002
- 武田裕紀 「重さはどのように決定されるのか——デカルト自然学の検討——」日本フランス語フランス文学会関西支部会 1998
- 武田裕紀 「デカルト『哲学原理』における「静止の力」の意味」日本フランス語フランス文学会春季大会2000
- 中尾雪絵 「デイドロの『修道女』における *vraisemblance* について」大阪大学フランス語フランス文学会 2000
- 中尾雪絵 「デイドロ『修道女』におけるヒロインの反抗について」日本フランス語フランス文学会関西支部会 2000
- 林 千宏 「Pierre de Ronsard, *Sur la mort de Marie* における新プラトン主義的世界像」日本ロンサール学会 2000
- 林 千宏 「ロンサール初期のオードと恋愛詩」日本ロンサール学会 2001
- 深川聡子 「*L'Écume des jours* : ボリス・ヴィアンの小説世界と音楽」大阪大学フランス語フランス文学会 1998
- 深川聡子 「ボリス・ヴィアン『日々の泡』の構造——時間と空間をめぐって」日本フランス語フランス文学会秋季大会 1998
- 藤田義孝 「アレゴリーとしての『夜間飛行』——「船」のイメージを中心として——」日本フランス語フランス文学会春季大会 1999
- 藤本武司 「J. Racine の *Athalie* について」日本フランス語フランス文学会関西支部 1999
- 藤本武司 「ラシーヌの『アタリー』における悲劇性の問題をめぐって」大阪大学フランス語フランス文学会 2000
- 山崎恭宏 「パリの場の構造について——リュシアン・ド・リュバンプレをめぐって」大阪大学フランス語フランス文学会 2001

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

1999年3月 林千宏 楠本賞（大阪大学）

4. 日本学術振興会研究員採択状況 計 2 名

<内訳>

PD : 2名 DC : 0名 外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学 計 3名

学部: 1名 PD : 0名 DC : 2名

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について) 計 4名

'97年度: 2名 '98年度: 0名 '99年度: 0名 '00年度: 2名 '01年度: 0名

<内訳>

1997年度 加藤靖恵 (博士後期課程修了) 福井大学教育地域科学部 助教授

1997年度 林直子 (博士後期課程修了) 大阪教育大学教育学部 助教授

2000年度 武田裕紀 (博士後期課程修了) 英知大学文学部 講師

藤本武司 (博士後期課程修了) 大阪大学文学研究科 助手

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

'97年度: 0名 '98年度: 1名 '99年度: 2名 '00年度: 0名 '01年度: 0名

<内訳> 技術職 2名

教職 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

年1回刊行 (第1号, 1953年), GALLIA (機関誌: 大阪大学フランス語フランス文学会)

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1997年6月3日「フロランス・ドレー氏講演会」(研究会)

1997年9月13日「大阪大学フランス語フランス文学会(第41回)」(国内学会)

1998年3月7日「大阪大学フランス語フランス文学会(第42回)」(国内学会)

1998年9月12日「大阪大学フランス語フランス文学会(第43回)」(国内学会)

1998年10月5日「オリヴィエ・カディオ氏（詩人）講演会」（研究会）
1998年10月24、25日「日本フランス文学会秋季全国大会」（国内学会）
1999年3月6日「大阪大学フランス語フランス文学会（第44回）」（国内学会）
1999年9月11日「大阪大学フランス語フランス文学会（第45回）」（国内学会）
2000年3月11日「大阪大学フランス語フランス文学会（第46回）」（国内学会）
2000年9月9日「大阪大学フランス語フランス文学会（第47回）」（国内学会）
2000年10月2日「ジャック・ルーポー氏（詩人）講演会」（研究会）
2001年3月10日「大阪大学フランス語フランス文学会（第48回）」（国内学会）
2001年9月8日「大阪大学フランス語フランス文学会（第49回）」（国内学会）
2001年12月3、5日「ステファヌ・ヴァション氏（モントリオール大学）講演会・セミナー」（研究会）
2001年12月7、8日「獨協大学国際フォーラム、バルザックとその時代」（国際学会）（大阪大学文学研究科における同時中継）
2001年12月13日「ジゼル・セジャンジェ氏（ストラスブール大学）講演会」（研究会）
2002年3月9日「大阪大学フランス語フランス文学会（第50回）」（国内学会）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

フランス文学専修は、毎年春と秋に本専修が中心となって組織している大阪大学フランス語フランス文学会の活動として、専門家、学生による研究発表、シンポジウムを行い、学外を含めて毎回50名ほどのフランス文学研究者の参加を得、研究活動の成果を公開、議論している。この研究会はすでに2002年3月の会において、発足以来50回の永木を数えて、のべ出席者は3000人近くになる。

また、機関誌『ガリア』は、1953年の初号以来、大学紛争時に延期はあったが、これも2002年3月で40号を数える、こうした研究室を拠点にした学術雑誌でかく長期間、定期的に発刊しているものはフランス文学では『ガリア』だけで、先にも言うようにフランスのもっとも権威ある学会誌の文献目録に必ず採録されるなど国内外で注目される学術誌に成長した。毎年11月に応募の論文を、選ばれた委員で組織する編集委員会で審査し、10編前後を掲載し、邦文、欧文論文ともにフランス語の要約を付している。

またこれと平行してフランス人を中心とする外国人研究者の講演、シンポジウムも活発で、1997年にはアカデミー・フランセーズ会員の小説家兼批評家、フロランス・ドレー、1998年現代詩人として著名なオリヴィエ・カディオ、2000年には現代詩の長老にして日本文学研究家のジャック・ルーポー、2002年には最も高い評価を得ている現代作家ジャン・エシュノーズなどの講演会、あるいはシンポジウムを開催。さらに2001年12月には獨協大学の国際フォーラムと協力して、フォーラムの草加市一阪大との同時多重テレビ中継を行って、柏木教授の講演および日仏バルザック研究家の討論の様態を公開討論した。それと平行して、カナダからバルザック研究の一線にあるステファヌ・ヴァション、ストラスブール大のジゼル・セジャンジェとともに研究室主催

でシンポジウムも開催した。2002年10月にもパリ第三大学のアンリ・ベアールを招き、シュールレアリスムに関する、絵画、芸術、文学にまたがる関心を応える講演を企画している。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等 (1997年度～2001年度の過去5年間)

1-1. 論文

- 柏木隆雄 「二人のオノレ——ドーミエとバルザック——」, 現代の風刺詩『ドーミエ展』伊丹市立美術館, pp. 8-11, 1997年
- 柏木隆雄 「ルナールと象徴主義」, 『象徴主義の光と影』, ミネルヴァ書房, pp. 100-116, 1997年
- 柏木隆雄 「フランス古典主義演劇とその理論」, 『芸術フォーラム』7, 勁草書房, pp. 340-355, 1997年
- 柏木隆雄 “Daumier et Balzac”, *Balzac et la peinture*, Musee des beaux-arts de Tours, 6月21日
- 柏木隆雄 「誘惑のディスクール——『田舎ミュージ』から『ボヴァリー夫人』へ」, 今こそフローベールを読み返す, 名古屋大学文学部フランス文学研究室, pp. 13-29, 1999年
- 柏木隆雄 「『アルベール・サヴァリス』——声とまなざし——」, 『バルザック生誕200年記念論集』, 駿河台出版社, pp. 315-328, 1999年
- 柏木隆雄 「フランスにおけるディケンズ」, 『ヴィクトリア朝——文学・歴史・文化——』松村昌家教授古稀記念論集, 英宝社, pp. 374-389, 1999年
- 柏木隆雄 「太宰治とメリメ」, 『太宰治研究』7巻, 和泉書院, pp. 226-237, 2000年
- 柏木隆雄 「竹友藻風とヴェルレーヌ」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 英宝社, pp. 159-174, 2000年
- 柏木隆雄 “Cent ans des études balzaciennes au Japon”, *GALLIA* 40, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 147-154, 2000.
- 柏木隆雄 “Le regard et la voix dans Albert Savarus”, *Equinoxe* 19, Rinsen Books, pp. 82-90, 2000.
- 柏木隆雄 “Avant propos ou Cent ans des Etudes balzaciennes au Japon”, *Equinoxe* 19, Rinsen-books, pp. 1-9, 2000.
- 柏木隆雄 “L'éhec de la reine de cœur”, *Balzac loin de nous, près de nous*, Surugadai-shuppansha, pp. 124-134, 2001.
- 柏木隆雄 “La Poétique balzacienne sur *Facino Cane*”, *L'Année balzacienne* 2月20日号, Presses universitaires de France, pp. 567-574, 2000年.
- 柏木隆雄 「短編小説の楽しみ1『マテオ・ファルコネ』」, ふらんす Oct. 76号, 白水社, pp. 72-75, 2001年
- 柏木隆雄 「短編小説の楽しみ2『海辺の悲劇』」, ふらんす Nov. 76号, 白水社 pp. 72-75, 2001年
- 柏木隆雄 「短編小説の楽しみ3『ヴェンデッタ』」, ふらんす12月1日号, 白水社, pp. 64-67, 2001年
- 柏木隆雄 「短編小説の楽しみ4『にんじん』」, ふらんす Jan. 77号, 白水社, pp. 64-67, 2001年.
- 柏木隆雄 「短編小説の楽しみ5『ヴェラ』」, ふらんす Feb. 77号, 白水社, pp. 64-67, 2002年.
- 柏木隆雄 「短編小説の楽しみ6『最後の授業』」, ふらんす Mar. 77号, 白水社, pp. 64-67, 2002年
- 柏木隆雄 「日本文学の内と外——ジュール・ルナールの受容をめぐる——」, <心>と<内部>——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——, 大阪大学大学院広域文化表現論講座, pp. 75-99, 2002年
- 柏木隆雄 「『ゴリオ爺さん』における「知る」こと」, 大阪大学大学院文学研究科紀要42巻, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-30 11月30日, 2002年
- 柏木隆雄 「バルザックと馬琴」, バルザックと周辺領域における文化史的背景の研究, 柏木隆雄 科研費研究成果報告書, pp. 84-94, 2002年
- 和田章男 「プルーストにおける批評と創造, ベルゴット導入場面に見られる実在の作家たち」, *GALLIA*

- 37, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 33-40, 1998年
- 和田章男 “Chronologie de l'écriture proustienne (1909-1911)”, *Bulletin d'Informations Proustiennes* 29号, Presses de l'École normale supérieure, pp. 41-65, 1998.
- 和田章男 「フランス自伝文学の比較研究の試み」, 大阪大学文学部紀要39巻, 大阪大学, pp. 21-53, 1999年
- 和田章男 “La naissance de Bergotte et quelques écrivains réels dans la genèse de *A la recherche du temps perdu*”, *EQUINOXE* 16号, Rinsen Book Co, pp. 123-131, 1999.
- 和田章男 「『サント＝ブーヴに反論する』における知性の問題－批評と創造のはざままで」, 待兼山論叢33号, 大阪大学文学会, pp. 1-12, 1999年
- 和田章男 「ピエール・ロチ『お菊さん』－日本イメージ形成の物語」, 懐徳堂ライブラリー3号, 和泉書院, pp. 1-31, 1999年
- 和田章男 「ジャン＝ジャック・ルソー『告白』における自然描写と「私」－季節, 時間, 年齢」, 大阪大学文学研究科共同研究報告書「自然のなかの人間」, 大阪大学文学研究科, pp. 129-140, 2001年
- 和田章男 「プルーストの文学的・芸術的教養－『プルースト書簡集』作品別および作者別索引に基づく統計的分析の試み」, 大阪大学大学院文学研究科紀要41巻, 大阪大学, pp. 51-71 2001年
- 和田章男 「大阪大学におけるフランス文学研究の傾向」, *GALLIA* 40, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 291-296, 2001年
- 和田章男 「『失われた時を求めて』におけるコンブレーのトポグラフィ－「サン＝ジャック通り」をめぐる」, *GALLIA*40号, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 55-62, 2002年
- 和田章男 「アラン＝フルニエ『グラン・モーヌ』における「失われた時」と「失われた場」」, 大阪大学大学院文学研究科紀要42巻, 大阪大学, pp. 31-52, 2002年
- アニエス・デイソン “La poésie française dans les années 90: état des lieux”, *Shincho*, Shinchosha, 1997. 7.
- アニエス・デイソン “La poésie est une mécanique lyrique”, *Eureka*, 1998. 9.
- アニエス・デイソン “L'Histoire autrement: Pascal Quignard, Michel Chaillou, Pierre Michon”, *Shincho*, Shinchosha, 1999. 8.
- アニエス・デイソン “Figures poétiques contemporaines”, *Equinoxe*, n°17/18, 2000.
- アニエス・デイソン “Jean Echenoz: une musique particulière”, *Subaru*, 2000. 2.
- アニエス・デイソン “Poésie années 90: Olivier Cadiot, Futur ancien fugitif”, *Gallia*, n°39 (1999), 2000. 3.
- アニエス・デイソン “L'altérité au féminin: Anne Portugal, Pascalle Monnier, Nathalie Quintane”, *Ecritures Contemporaines*, n°4, Minard, 2001.
- アニエス・デイソン “Poésie 90: Les enfants de Gertrude Stein et de Jacques Roubaud”, *French Studies Bulletin*, Oxford University Press, 2001.
- アニエス・デイソン “Poèmes de la trame et du dessin: le Japon de Jacques Roubaud”, *Mélanges pour Jacques Roubaud, Cahiers de poétique comparée*, *Mezura* 49, Institut National des Langues et Civilisations Orientales (INALCO), 2001.
- アニエス・デイソン “Poésie années 90: Pierre Alferi, Kub Or”, *Gallia*, n°40 (2000), 2001. 3.
- アニエス・デイソン “Pierre Alferi: les choses du monde sont des mots”, *Eureka*, 2001. 11.
- アニエス・デイソン “Eponger le réel: Nathalie Quintane”, *Revue Fusées* 5, Carte Blanche, 2001.
- 藤本武司 「ラシーヌ『ブリタニキユス』の終結部に関する一考察－ヴェスタ聖女ジュニーをめぐる－」, *Gallia* n°41, 大阪大学フランス語フランス学会 2002

1-2. 著書

- 柏木隆雄 『象徴主義の光と影』（共著）, 宇佐美斉（京都大学）編, ミネルヴァ書房, 356p., pp. 100-116, 1997年.
- 柏木隆雄 『文芸・演劇の諸相——芸術学フォーラム 7——』（共著）, 森谷宇一／山縣熙（神戸大

学) / 天野文雄編, 勁草書房, 386p., pp. 340-355, 1997年.

- 柏木隆雄 『Et vous ? —— あなたとフランス語で ——』 (共著), 柏木隆雄 / 岡田純子 / 小坂美樹, 青山社, 80p., 1996年.
- 柏木隆雄 『イメージの狩人 —— 評伝ジュール・ルナール』, 臨川書店, 256p., 1999年.
- 柏木隆雄 「ふらんすにおけるディケンズ」, 『ヴィクトリア朝—文学・歴史・文化—松村昌家教授古稀記念論集』 (共著), 英宝社, 1999年
- 柏木隆雄 *Balzac et la peinture* (共著), E. Bordas (Univ. de Bordeaux) / G. Gengembre (Univ. de Caen) / T. Kashiwagi / S. Vachon (Univ. de Montreal) et autres. Musée des Beaux-Arts de Tours/Farrago, 287p., pp. 99-106, 1999年。
- 柏木隆雄 『バルザック生誕200年記念論集』 (共著), 日本バルザック研究会.
- 柏木隆雄 『謎解き「人間喜劇」』, ちくま文庫, 筑摩書房, 2000年
- 柏木隆雄 『藤井治彦先生退官記念論文集』 (共著), 玉井暉監修 河上誓作, 柏木隆雄他, 英宝社, 1038p., pp. 159-174, 2000年.
- 柏木隆雄 *Balzac loin de nous, près de nous* (共著), Société japonaise d'études balzacienne, Surugadai-shuppansha, 181p., pp. 124-134, 2001年.
- 和田章男 『異邦人の見た近代日本』 (共著), 懷徳堂ライブラリー 3号, 和泉書院, pp. 1-31, 1999年.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 柏木隆雄 『「ルナール全集」第14巻』, 共訳, 柏木隆雄 / 北村卓 / 和田章男 / 七尾誠 (大阪産業大学), 臨川書店, 14巻, pp. 316, 1997年
- 柏木隆雄 「ジュール・ルナール全集第15巻」, 共訳, 柏木隆雄 / 打田素之 (大阪産業大) / 小谷征生 (大阪産業大) / 松田和之 (福井教育大), 臨川書店, 15巻, pp. 393, 1997年
- 柏木隆雄 『いとこポンス』, バルザック「人間喜劇コレクション No. 13」, 藤原書店, 1998年
- 柏木隆雄 『ミシュレ』, 「テーヌ」, 「メーストル」, 『フランス革命事典』, 第7巻, みすず書店, 2000年
- 和田章男 『「失われた時を求めて」冒頭部の三つの先行テキストをめぐって: 【サント=ブーヴに反論する】の諸問題への新たなアプローチ』, プルースト全集, 筑摩書房, pp. 418-445, 1999年
- 和田章男 「ジュール・ルナール『日記 IV』」 (共訳), 和田章男 / 柏木隆雄, ジュール・ルナール全集, 臨川書店, 14巻, pp. 1-96, 1997年

(2) 書評

- 柏木隆雄 「河村民部『山頂に向かう想像力』」, 英語青年, 研究社, 142-12, pp. 41, 1997.
- 柏木隆雄 「芳川泰久著『闘う小説家バルザック』」, 文学界, 文芸春秋社, Aug. 98, pp. 312-314, 1998.
- 柏木隆雄 「アンリ・トロワイヤ著, 尾河直哉訳『バルザック』」, 『ふらんす』2月号 2000年
- 和田章男 “Kazuyoshi Yoshikawa, *Le Musée Proust*”, *Bulletin Marcel Proust*, 49号, pp. 172-173.

(3) その他 (エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 柏木隆雄 「ジュール・ルナール全集第16巻『日記』索引」, 柏木隆雄 / 深川聡子 (博士課程在学), 臨川書店, 16巻, pp. 1-162, 1998.
- 柏木隆雄 『「いとこポンス」のコレクション』, 藤原書店, 96, pp. 12. 13, 1998.
- 柏木隆雄 「澤瀉久敬先生のこと」, 澤瀉久敬追悼文集, 私家版, pp. 61-64, 1999.
- 柏木隆雄 「旅の本あれこれ」, 読書探検, 大阪大学生協書籍部, 30号, 4巻3号, 1999.
- 柏木隆雄 「吉川幸次郎の露伴ざらい」, 文学, 岩波書店, 9巻3号, pp. 130-131, 1999.
- 柏木隆雄 「加地先生のこと」, 『孤剣 弧ならず』, 加地先生退官記念刊行会, pp. 172-174 1999.
- 柏木隆雄 「バルザックと活字・生誕二百年によせて」, 大学出版, 大学出版協会, 1999-春号,

- pp. 4 卷9号, 1999.
- 柏木隆雄 「バルザック生誕200年」, 読売新聞大阪版夕刊, p. 6, 1999.
- 柏木隆雄 「日本におけるバルザック生誕200年」, 読売新聞大阪版夕刊, pp. 1-6, 1998.
- 柏木隆雄 「私の「なかじきり」——『謎とき「人間喜劇」』縁起——」, らびす, アルル書房, 13号, 2巻14号, 2001.
- 柏木隆雄 「教室は舞台」, ジ・アトレ, 産経新聞社 Oct. 00, pp. 1-11, 2000.
- 柏木隆雄 「未来の図書館」, VERITAS, 神戸女学院大学図書館, 3号, pp. 4, 2000.
- 柏木隆雄 「小説家」, 「詩人」, 「評論家」, 『歴史学事典』第8巻「人と仕事」, 弘文堂, 2001年
- 和田章男 『固有名詞調査に基づくブルースト書簡集の総合研究』(共編), 科学研究費共同研究報告, 1998.
- 和田章男 Index général de la Correspondance de Marcel Proust(共編), 京都大学学術出版会, 1998年

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 柏木隆雄 “La poétique balzacienne dans *Facino Cane*”, Colloque international pour le bicentenaire de la naissance de Balzac, 1999. 5. 17. Au Palais du Luxembourg.
- 柏木隆雄 “La traduction de Balzac au Japon”, communication faite au Colloque Balzac organisé par le Groupe international des recherches balzaciennes, 2000. 6. 28, au Centre Culturel international de Cerizy-la-Salle.
- アニエス・ディソン “L’altérité au féminin: Anne Portugal, Pascale Monnier, Nathalie Quintane”, Colloque International sur la poésie contemporaine, Maison Franco-Japonaise de Tokyo, 1999. 4.
- アニエス・ディソン “Figures poétiques contemporaines”, Colloque Franco-Japonais Ecriture / Figure, 京都, 1998. 11.
- アニエス・ディソン “Poésie 90: Les enfants de Gertrude Stein et de Jacques Roubaud”, Royal Holloway, Université de Londres, 2000. 3.
- アニエス・ディソン “L’hypothèse du compact: Jacques Roubaud et Pierre Alferi”, Université de Londres, 2001. 3.
- アニエス・ディソン “Objets verbaux non identifiés: Pierre Alferi et Olivier Cadiot”, Trinity College, Cambridge, 2001. 3.

(2) 国内学会

- 和田章男 「シンポジウムー批評と創造のはざままで」, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学, 1998. 3. 7.
- 和田章男 「シンポジウムーフランス文学における「地方」」, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学, 2002. 3. 9.
- アニエス・ディソン “Poésie années 90: Olivier Cadiot, Futur ancien fugitif”, 日本フランス語フランス文学会春季大会/成城大学, 1998年6月
- アニエス・ディソン “Poésie années 90: Pierre Alferi, Kub Or”, 日本フランス語フランス文学会秋季大会/大阪大学, 1998年10月
- アニエス・ディソン “Jacques Roubaud: Kamo no Chomei, un modèle improbable”, 日本フランス語フランス文学会春季大会/上智大学, 2001年6月

(3) 研究会

- 柏木隆雄 「バルザックとフローベール」, 名古屋大学文学部/愛知県名古屋市, 1998. 12. 13.
- 和田章男 「ピエール・ロチ『お菊さん』に見られる日本のイメージ」, 大阪大学文学部共同研究会, 大

- 阪大学, 1997.12.10.
- 和田章男 「シンポジウム『プルースト書簡集』をめぐって： 作品別および作者別索引に基づく統計的分析の試み」, 日本プルースト研究会, 大阪大学, 1998.10.24.
- 和田章男 「ジャン=ジャック・ルソー『告白』に見られる自然」, 大阪大学文学研究科共同研究会, 大阪大学, 2000.6.1.
- 和田章男 「ネルヴァル受容史におけるプルーストの位置」, 関西ネルヴァル研究会, 大手前大学, 2001.12.29.
- 和田章男 「プルーストとモネの「睡蓮」展」, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2002.3.23.

(4) 自治体等での講演会等

- 柏木隆雄 「ドームエとバルザック」, 伊丹市立美術館/兵庫県伊丹市, 1997.10.12.
- 柏木隆雄 「二人の歌人 会津八一と吉野秀雄」, 松阪市中央公民館/三重県松阪市, 1998.11.6.
- 柏木隆雄 「鈴の舎の版木 思い出あれこれ」, 茨木市商工会議所/大阪府茨木市, 1998.6.16.
- 柏木隆雄 「バルザック生誕二百年：バルザックのおもしろさーまなざしを読むー」, 三重日仏協会/三重県津市 プラザ洞津, 1999.7.11.
- 柏木隆雄 「バルザック『ウジェニー・グラन्द』を読む」, 三重日仏協会/三重県津市, 2000.1.24.
- 柏木隆雄 「ジュール・ルナールと近代日本文学」, 三重日仏協会/三重県津市, 2000.10.7.
- 柏木隆雄 「ブルジョワ覇権下のヒーローたち」, 神戸交通センター/兵庫県神戸市日本, 兵庫県主催「ひょうご講座」, 2001.10.3.

2. 教員の受賞歴

- 柏木隆雄 パルム・アカデミック勲章 (シュバリエ), 仏共和国, 2000年6月2日
- アニエス・ディソン パルム・アカデミック勲章 (シュバリエ) 仏共和国, 2001年6月1日

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997年度～2001年度の過去5年間)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

柏木隆雄	平成12年度 基盤研究(B)(1)	12410121	バルザックと周辺領域における文化的背景の研究	6,600,000円
柏木隆雄	平成13年度 基盤研究(B)(1)	12410121	バルザックと周辺領域における文化的背景の研究	6,600,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

- 柏木隆雄 日本フランス語フランス文学会 副会長 (2001.6～)
- 柏木隆雄 大阪大学フランス語フランス文学会 会長 (1991.4～)
- 和田章男 日本フランス語フランス文学会関西支部 編集委員 (2000.6～2002.6)
- 和田章男 日本フランス語フランス文学会 編集委員 (1996.6～1999.6)
- 和田章男 大阪大学フランス語フランス文学会 幹事 (1993.4～)
- 藤本武司 大阪大学フランス語フランス文学会 編集委員 (1999.4～)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

柏木隆雄 教授

1 学期	フランス文学史特殊講義	近代日本文学におけるフランス文学
2 学期	フランス文学史特殊講義	近代日本文学におけるフランス文学
1 学期	フランス文学作品研究特殊演習	Balzac, <i>Ecrits sur le roman</i> (1)
2 学期	フランス文学作品研究特殊演習	Balzac, <i>Ecrits sur le roman</i> (2)
1 学期	フランス文学史講義	近代日本文学におけるフランス文学
2 学期	フランス文学史講義	近代日本文学におけるフランス文学
1 学期	フランス文学作品研究演習	Balzac, <i>Ecrits sur le roman</i>
2 学期	フランス文学作品研究演習	Balzac, <i>Ecrits sur le roman</i>
1 学期	フランス文学作品研究博士論文作成演習	フランス文学各論 (和田助教授と共同)
2 学期	フランス文学作品研究博士論文作成演習	フランス文学各論 (和田助教授と共同)
1 学期	フランス文学作品研究修士論文作成演習	フランス文学各論 (和田助教授と共同)
2 学期	フランス文学作品研究修士論文作成演習	フランス文学各論 (和田助教授と共同)
1 学期	比較文学特殊講義	近代日本文学におけるフランス文学
2 学期	比較文学特殊講義	近代日本文学におけるフランス文学
1 学期	比較文学講義	近代日本文学におけるフランス文学
2 学期	比較文学講義	近代日本文学におけるフランス文学

和田章男 助教授

通年	フランス文学作品研究特殊講義	ブルーストとノルマンディー地方
通年	フランス文学作品研究特殊演習	文学の風景
通年	フランス文学作品研究講義	ブルーストとノルマンディー地方
通年	フランス文学作品研究演習	文学の風景
1 学期	フランス文学作品研究演習	『ドルジェル伯の舞踏会』を読む
2 学期	フランス文学作品研究演習	『ドルジェル伯の舞踏会』を読む
1 学期	フランス文学作品研究修士論文作成演習	フランス文学各論 (柏木教授と共同)
2 学期	フランス文学作品研究修士論文作成演習	フランス文学各論 (柏木教授と共同)

アニエス・デイソン 講師

1 学期	フランス文学作品研究特殊講義	Le roman français contemporain: Jean Echenoz
2 学期	フランス文学作品研究特殊講義	Le roman français contemporain: Pierre Michon
1 学期	フランス語学特殊演習	Techniques de la dissertation et du commentaire
2 学期	フランス語学特殊演習	Techniques de la dissertation et du commentaire
1 学期	フランス文学作品研究講義	Le roman français contemporain: Jean Echenoz
2 学期	フランス文学作品研究講義	Le roman français contemporain: Pierre Michon
1 学期	フランス文学作品研究演習	La lettre dans la littérature française
2 学期	フランス文学作品研究演習	Le voyage / l'aventure
2 学期	フランス語学演習	Techniques de la dissertation et du commentaire
2 学期	フランス語学演習	Techniques de la dissertation et du commentaire
1 学期	フランス文学演習	La lettre dans la littérature française

高岡幸一 講師 (学内非常勤講師・言語文化部)

通年	フランス文学作品研究特殊講義	ラ・フォンテーヌ『寓話』研究
通年	フランス文学作品研究講義	ラ・フォンテーヌ『寓話』研究

金崎春幸 講師 (学内非常勤講師・言語文化部)

通年 フランス文学作品研究特殊演習 フローベールの『感情教育』
通年 フランス文学作品研究演習 フローベールの『感情教育』

春木仁孝 講師 (学内非常勤講師・言語文化部)

通年 フランス語学特殊講義 フランス語史の諸問題
通年 フランス語学講義 フランス語史の諸問題

小西嘉幸 講師 (非常勤講師・大阪市立大学)

通年 フランス文学作品研究特殊講義 ラクロ『危険な関係』と18世紀の文学
通年 フランス文学作品研究講義 ラクロ『危険な関係』と18世紀の文学

田村 毅 講師 (非常勤講師・東京大学)

1学期 フランス文学特殊講義 ネルヴァル研究
1学期 フランス文学講義 ネルヴァル研究

木内良行 講師 (非常勤講師・大阪外国語大学)

1学期 フランス語学特殊講義 フランス語学の諸問題
2学期 フランス語学特殊講義 フランス語学の諸問題
1学期 フランス語学講義 フランス語学の諸問題
2学期 フランス語学講義 フランス語学の諸問題

2. 学部授業担当

柏木隆雄 教授

1学期 フランス文学講義 フランス文学概説15
2学期 フランス文学講義 フランス文学概説16
1学期 フランス文学講義 近代日本文学におけるフランス文学
2学期 フランス文学講義 近代日本文学におけるフランス文学
1学期 フランス文学演習 **Baudelaire, *Les fleurs du mal* を読む (1)**
2学期 フランス文学演習 **Baudelaire, *Les fleurs du mal* を読む (2)**
1学期 比較文学講義 近代日本文学におけるフランス文学 (1)
2学期 比較文学講義 近代日本文学におけるフランス文学 (2)

和田章男 助教授

通年 フランス文学講義 プルーストとノルマンディー地方
1学期 フランス文学演習 『ドルジェル伯の舞踏会』を読む
2学期 フランス文学演習 『ドルジェル伯の舞踏会』を読む

アニエス・ディソン 講師

2学期 フランス文学演習 **Le voyage / l'aventure**
1学期 フランス語学演習 **Exercices pratiques (1)**
2学期 フランス語学演習 **Exercices pratiques (2)**

高岡幸一 講師 (学内非常勤講師・言語文化部)

通年 フランス文学講義 ラ・フォンテーヌ『寓話』研究

金崎春幸 講師 (学内非常勤講師・言語文化部)

通年 フランス文学演習 フローベールの『感情教育』

春木仁孝 講師（学内非常勤講師・言語文化部）

通年 フランス語学講義 フランス語史概説

小西嘉幸（非常勤講師・大阪市立大学）

通年 フランス文学講義 ラクロ『危険な関係』と18世紀の文学

田村 毅（非常勤講師・東京大学）

1学期 フランス文学講義 ネルヴァル研究

3. 共通教育

柏木隆雄 教授

Ⅱ Semester 専門基礎 フランス文学基礎

和田章男 助教授

Ⅱ Semester 専門基礎 フランス文学基礎

4. 他大学における集中講義等

柏木隆雄	京都大学大学院文学研究科	平成9年度	各週（通年）
	東北大学大学院文学研究科	平成10年度	集中（2学期）
	広島大学大学院文学研究科	平成13年度	集中（1学期）
	東京大学大学院総合文化研究科（併任）	平成13年度	集中（2学期）
	岡山大学大学院文学研究科／文化科学研究科	平成14年度	集中（1学期）

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：吉川一義（東京都立大学人文学部・人文科学研究科教授）

大阪大学のフランス文学研究室は、創設以来、赤木昭三先生のパスカル研究上の成果に明らかのように、今日に至るまで日本のフランス文学研究史にのこる優れた業績を積み重ねてきた。その学風の特色は、ひと言でいえば、文献学上の実証性にもとづき研究に新たな局面を切りひらくところにある。今回、過去5年間にわたる研究室の業績一覧に接し、この伝統がいささかも衰えることなく堅持されているばかりか、それが新しい世代の研究者によって実り豊かに展開されているとの想いを深くした。

フランス文学専攻における研究の柱となっているのは、柏木隆雄教授と和田章男助教授の両氏である。柏木教授は、古今東西にわたる文学を渉猟する愛書家、読書家として知られているが、氏はここ数年、その蘊蓄を傾けて精力的に著作や翻訳を世に問うてきた。多数の同僚を率いて完成させた『ジュール・ルナール全集』（全16巻、臨川書店）の翻訳はもちろんのこと、それと平行して『イメージの狩人評伝 ジュール・ルナール』という人生の機微に通じた伝記を書き下ろした実力は、瞠目に価する。「太宰治とメリメ」「竹友藻風とヴェルレーヌ」「バルザックと馬琴」などの比較文学の業績も、氏の幅広い文学上の素養なくしては書きえない論文である。

とはいえ氏の活動の中心は、もとより専門とするバルザック研究にある。その白眉は、なんと

いってもバルザックの連作小説の醍醐味を縦横に論じた『謎とき「人間喜劇」』（ちくま学芸文庫）であろう。『人間喜劇』を論じるにあたり、その歴史的・社会的背景に重きをおく研究者が多いなかで、氏の論考の特徴は、原稿やプレオリジナルをはじめ、生前の諸版にいたる異本を調査したうえで、テキストの文言をあくまで文学の表現として深く読みこむところにある。その鋭い洞察にしばしば目から鱗が落ちる想いがするのは、評者だけではないだろう。しかもどれほど専門的な考察においても、すべてが明快にして味わい深い文章で綴られているところが、氏の仕事が高く評価される要因のひとつである。柏木教授は、科研費の研究代表者として『バルザック生誕200年記念論文集』や《Balzac loin de nous, près de nous》などの著作に結実する日本のバルザック研究を主導するのみならず、国際学会での研究発表や、専門誌に寄稿したフランス語論文で高い評価を受けたり（それらをまとめた論文集《Balzac, romancier du regard》が2002年秋に Nizet 書店から刊行された）、パリ大学の博士論文審査に審査員として招かれるなど、いまや日本を代表するバルザック研究者として知られる。同氏が2001年より、選ばれて日本フランス語フランス文学会の副会長を務めているのも、このような研究業績が認められてのことである。

和田助教授は、プルーストの小説『失われた時を求めて』の生成過程についての研究を草稿にもとづいて着実に進め、日本のみならず、国際的な信頼を集めている研究者である。かつて氏が、パリ＝ソルボンヌ大学に提出した博士論文のなかで小説冒頭部のタイプ原稿の執筆時期を確定した論証は、この問題を採りあげるさいに決まって引用される独自の研究成果である。その綿密な実証手続きは、作家の草稿帳の執筆順序を解明した最近の論文《Chronologie de l'écriture proustienne (1909-1911)》にも遺憾なく発揮されている。また日本のプルースト研究会が共同で作成した『プルースト書簡集の総合索引』（仏文、京大出版会）においても、じつに堅実な調査研究により中核的役割を果たしたことを申しそえる。近年は、研究対象を拡げ、ルソー、ロチ、アラン＝フルニエなどについても優れた論文を発表しているから、さらに充実した視野の広い成果が発表されるものと期待できる。

大阪大学のフランス文学専攻が、以上のような研究成果をあげている柏木・和田の両氏を中心に、外国人教師アニエス・ディソン女史によるフランス語指導と、言語文化部の充実した教員スタッフの協力をえて、いかに優れた人材を輩出しているかは、大学院生による研究論文一覧をみれば一目瞭然である。そこには、16世紀の詩人ロンサルから現代の小説家デュラスにいたる幅広いフランス文学のさまざまな局面が、じつに多様で個性的な発想と方法によって考察されている。そのなかにフランスの専門誌に掲載された論文がいくつもあることは、同専攻の研究水準の高さをしめす指標のひとつといえよう。数はそう多くないが、大学院生のなかから大学に研究者として勤める人材が着実に出ているのも、このような優れた研究環境によるものと評価できる。

ただ残念なのは、資料の在学生数をみるかぎり、このような立派な環境を享受できる学生があまり多くないことである。文学専攻の学生数が減少しているのは、国公立を問わず全国の大学で顕著に認められる傾向ではある。しかし文学の研究は、言葉についての考察から出発しつつ、究極的には当該言語によって成立している人間と文化について最も深く確実な洞察へと導いてくれるものである。大阪大学のように伝統ある関西の中核大学においてこそ、目先の経済効率にと

らわれない地道な文学研究が重視されるべきであろう。フランス文学専攻スタッフの一層の努力が期待される所以である。

3-19 英語学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

英語学研究室のスタッフは教授2名で、所属する大学院生は23名である。河上誓作教授は「意味論・語用論・認知言語学」を専門分野とし、特に「アイロニーの統合理論」を中心とする言語運用理論に関心をもつ。大庭幸男教授は「統語論・生成文法理論」を研究分野とし、特にチョムスキーの言語理論に基づく「生成文法の研究」が専門である。本研究室の特色は、2名のスタッフが言語運用と言語生成という全く異なる理論的視点から教育・研究を行うため、学生は運用と生成の両面から言語を相補的に観察する目を養うことができる点であり、これは他大学では見られない特色である。その反面、音韻論や英語史の分野は教育面で手薄になるため、集中講義を中心にその不備を補っている。

研究・教育面でスタッフが特に注意していることは、学生各自が研究したいことを自由に研究できるように、研究と教育の環境を整えることである。研究面では、最新の研究資料がすぐ入手できるように、研究室の書物や専門誌をできるだけ充実させるよう努め、教育面では、学生の専門に合わせて演習の論文を選ぶよう工夫している。また、学生にできるだけ国際学会や全国学会で研究成果を発表するよう指導している。院生の研究分野は、関連性理論、意味論、統語論、認知言語学、生成文法理論など、多岐にわたるが、各自の研究意欲は旺盛で、自主的に研究会・読書会を開き、専門的知識の吸収に努めている。

大学院の指導面については、博士前期課程では授業の他に、学内外のすぐれた講演や講義にも積極的に参加して、広く英語学の知識を身につけるよう指導し、修士論文の作成にあたっては、中間発表や学会発表を通じて、その質的向上に努めている。特に英語の運用能力の向上には注意を促し、大学院演習における発表はすべて英語で行うクラスを設けている。また博士後期課程では、各年次に日本英語学会などの学会発表を行い、2年次末に博士予備論文を提出、3年次末には学位申請論文を完成させる方向で指導している。また、日本学術振興会特別研究員にも積極的に応募するよう助言している。

なお、英語学研究室を活性化する目的も込めて、年数回「待兼山ことばの会」を開催し、国内外の著名な言語学者や若手研究者に講演や研究発表をお願いしている。また、英語学研究室のスタッフと大学院生による英語学論文集 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* を年1回刊行、論文は *MLA International Bibliography* に報告し、国際的に公表されている。なお、大学院生は英米文学分野と共同で刊行している *Osaka Literary Review* にも執筆する機会がある。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 2 助教授 0 外国人教師 0 助手 0

教授： 河上誓作 大庭幸男

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部 ^(注)	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
51	13	10	0	0	0	1	2	0

※うち留学生0名，社会人学生0名

3. 修了生・卒業生 (1997～2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	10	1	4	1	4
'98	8	5	1	0	1
'99	7	2	1	0	1
'00	13	4	1	0	0
'01	11	4	4	1	2
小計	49	16	11	2	9

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】(1997～2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	1	1	2
'98	0	0	0
'99	0	0	0
'00	0	0	0
'01	1	1	2
計	2	2	4

1-2. 博士論文の提出者，題目，審査教官等

- 大庭幸男 【英語構文研究—素性とその照合を中心に】，論文，1997年9月，河上誓作（主査），柏木隆雄（副査），仁田義雄（副査）
- 堀田優子 *Event Construal in Grammar: A Cognitive Study of English Resultatives and Cognate Objects*，課程，1998年3月，河上誓作（主査），藤井治彦（副査），大庭幸男（副査）
- 岡田禎之 【英語等位構造の実証的研究】，論文，2001年9月，河上誓作（主査），大庭幸男（副査），渋谷勝己（副査）
- 高木宏幸 *Aspects of Categorization: Lexical, Relational, and Constructional Case Studies*，課程，2002年3月，河上誓作（主査），大庭幸男（副査），工藤真由美（副査）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	3	2	1	0	0	6
'98	7	0	2	0	0	9
'99	9	1	8	0	0	18
'00	11	1	7	0	0	19
'01	7	1	0	1	0	9
計	37	5	18	1	0	61

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	8	0	0	0	8
'98	0	9	0	0	0	9
'99	1	14	0	0	0	15
'00	0	17	0	0	0	17
'01	0	12	1	0	0	13
計	1	60	1	0	0	62

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中(発表年度において在籍)の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 石野 牧 「名詞化表現に関する一考察：英語と日本語の比較」・『待兼山論叢』31号・1997
- 三原 京 「付加疑問文の特性と共起関係について」・*Osaka Literary Review*36・1997
- 田村幸誠 「法助動詞の主体化からみた CAN の特異性について」・*KLS* 17 (関西言語学会) ・1997
- 奥田雅信 「英語の迂言的使役構文に関する認知的分析」・*KLS* 17 (関西言語学会) ・1997
- 高木宏幸 「参照点構造の理論と照応形の分布」・*KLS* 17 (関西言語学会) ・1997
- Hatsutani, Tomoko “A Proposal to the Classroom Foreign Language Learning in Japan: In the Light of the Interaction Hypothesis in Second Language Acquisition Models”・大阪大学人間科学部紀要第23号・1997
- 奥田雅信 「MAKE 使役構文の多義性に関する認知的分析」・*JELS* 15 (日本英語学会) ・1998
- Takagi, Hiroyuki “Subjective Cognition and Inalienable Possession NPs”・*JELS* 15 (日本英語学会) ・1998
- 田村幸誠 「主体化からみた法助動詞の段階的意味拡張について —— can, may, must を中心に ——」・*JELS* 15 (日本英語学会) ・1998
- 奥田雅信 「2つのタイプの MAKE 使役構文 —— 認知的観点から ——」・*KLS* 18 (関西言語学会) ・1998
- 石野 牧 「非時制(非)定形節としての英語の Acc-ing 構文について：素性区別の有効性」・*KLS* 18 (関西言語学会) ・1998
- 三原 京 「as 節にまつわる意味的制約」・*KLS* 18 (関西言語学会) ・1998
- 春木茂宏 「日英語依頼表現における補償方法：「関係性」の必要性」・*Osaka Literary Review* 37・1998
- 米倉陽子 「前置詞 with の意味拡張：COMITATIVE 以前を中心に」・*Osaka Literary Review* 37・1998

- Okuda, Masanobu "The *Make*-Causative in English: Its Structure and Meaning" · *English Linguistics* 15 (日本英語学会) · 1998
- 春木茂宏 「創造的メトニミー：伝達と解釈的仕様の観点から」 · *JELS* 16 (日本英語学会) · 1999
- 高木宏幸 「長距離再帰形に対する認知文法的考察」 · *JELS* 16 (日本英語学会) · 1999
- 田中英理 「参照点構造と再帰代名詞」 · *JELS* 16 (日本英語学会) · 1999
- Hatsutani, Tomoko "Subjectification in 'V+NP+to-infinitive' Construction in English" · *Proceedings of the 2nd International Conference on Cognitive Science and the 16th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society Joint Conference* · 1999
- Morikawa, Fumihito "Inversion and Subject Decision in English" · *KLS* 19 (関西言語学会) · 1999
- 貞光宮城 「転移修飾語に関する一考察——認知的観点から——」 · *KLS* 19 (関西言語学会) · 1999
- 奥田雅信 「GET 受動文と「責任」——認知的視点から——」 · *KLS* 19 (関西言語学会) · 1999
- 春木茂宏 「日英語依頼表現形式選択のメカニズム：ポライトネスと関連性理論の共存に向けて」 · *KLS* 19 (関西言語学会) · 1999
- Yonekura, Yoko "A Prototypical-theoretical Approach to Semantic Extension of *wið* in Old English" · *KLS* 19 (関西言語学会) · 1999
- 貞光宮城 「落語の【オチ】についての一考察——認知的観点から——」 · *Osaka Literary Review* 38 · 1999
- 前川貴史 「接触打撃動詞と能動構文との関わり合い」 · *Osaka Literary Review* 38 · 1999
- 春木茂宏 「PLEASE please me! : Please に関する一考察」 · *Osaka Literary Review* 38 · 1999
- 田村幸誠 「接続詞と時制の相互作用について：BEFORE 節中の過去形と過去完了の交替の場合」 · 『待兼山論叢』 33号 · 1999
- Ishino-Ura, Maki "Some Observations on (A)symmetries in English Acc-ings" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 4 · 1999
- Morikawa, Fumihito "Inversion and Subject Decision in English" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 4 · 1999
- Sadamitsu, Miyagi "A Cognitive Account on Transferred Epithet" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 4 · 1999
- Tsuboi, Ken-ichi "Antecedent-Contained Deletion: Its Structure and Resolution" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 4 · 1999
- Yonekura, Yoko "On the Semantic Development of *Get*" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 4 · 1999
- 藤井友比呂 「包括性条件と多重主格構文」 · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- 春木茂宏 「アイロニーと文脈効果：関連性理論的分析」 · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- 初谷智子 「ECM 構文における受動化：主体化の観点から」 · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- 奥田雅信 「因果関係と主体的認知」 · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- 貞光宮城 「共感覚比喩表現についての一考察——認知的観点から——」 · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- Tamura, Yuki-Shige "On the Interaction between the Temporal Connection *Before* and Tense: A Cognitive Account" · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- 坪井健一 「先行詞内削除の統語的構造について」 · *JELS* 17 (日本英語学会) · 2000
- Maekawa, Takafumi "The Difference between IN and ON with Contact Verbs" · 『英語語法文法研究』 第7号 (英語語法文法学会) · 2000
- 米倉陽子 「古英語 *ongean* の形成する意味的ネットワーク」 · 『英語学英米文学』 (奈良女子大学紀要) 第26号 · 2000
- Maekawa, Takafumi "Verbs of Contact by Impact and the Conative Alternation" · *KLS* 20 (関西言語学会) · 2000
- Yonekura, Yoko "A Cognitive Approach to the Semantic Evolution of *Again(st)*" · *KLS* 20 (関西言語学会) · 2000

- Tamura, Yuki-Shige "Relative Subjectification and a Semantic Network Model of English Modal Auxiliaries" · *English Linguistics* 17-1 (日本英語学会) · 2000
- Fujii, Tomohiro "Multiple Nominative Constructions and Their Implications" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 5 · 2000
- Iwasaki, Shin-ya "Temporal and Spatial Expressions in English and Japanese: A Cognitive Account" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 5 · 2000
- Maekawa, Takafumi "Some Observations on English Prepositional Possessive Constructions" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 5 · 2000
- Tamura, Yuki-Shige "On the Grounding Function of the Past Tense in English" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 5 · 2000
- Tanaka, Eri "The Mental Processing of Logophoricity in English" · *Osaka University Papers in English Linguistics* 5 · 2000
- 田中英理 「時空間修飾語における非対称性」 · *Osaka Literary Review* 39 · 2000
- 春木茂宏 "Jocularly in irony and humor: A cognitive-to-affective process" · *Osaka Literary Review* 39 · 2000
- 初谷智子 「動詞 order の補文に関する一考察」 · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- 岩崎真哉 "A Temporal Network of *This* and *Here*" · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- 町田 章 「プレーン混合と概念再配置: 受動文を中心に」 · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- 前川貴史 「前置詞 to による所有関係表現」 · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- 森川文弘 "Filled to Overflowing: A Study of Locative Alternation" · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- 田中英理 「メンタルスペース理論における制限的 when 節の取り扱いについて」 · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- Yonekura, Yoko "Grammaticalization and Subjectification of Two Aspectual Adverbs in English" · *JELS* 18 (日本英語学会) · 2001
- 森川文弘 「数量詞のスコープと参照点構造」 · 『待兼山論叢』 35号 · 2001
- 米倉陽子 「認知文法から見たアスペクト的副詞の文法化」 · 『文法化: 研究と課題』 (秋元実治 (編)) · 2001

(2) 発表

- 田中裕幸 "Non-minimality of Generalized Pied-Piping" · 「(発表要旨)」 · 日本英文学会第69回大会資料 · 宮城学院大学/宮城県仙台市 · 1997
- 米倉陽子 「動詞 get の意味的発達について」 · 「(発表要旨)」 · 日本英文学会第69回大会資料 · 宮城学院大学/宮城県仙台市 · 1997
- 奥田雅信 「MAKE と事態解釈の関係: Interaction と Causation の関係から」 · 「(発表要旨)」 · 関西言語学会第22回大会 · 京都大学/京都府京都市 · 1997
- 石野 牧 「補文主語の対格認可のメカニズムと統語的一貫性」 · 「(発表要旨)」 · 関西言語学会第22回大会 · 京都大学/京都府京都市 · 1997
- 三原 京 「as 節にまつわる意味的制約」 · 「(発表要旨)」 · 関西言語学会第22回大会 · 京都大学/京都府京都市 · 1997
- 高木宏幸 「主観的認知と Inalienable Possession NP」 · 「(発表要旨)」 · *Conference Handbook* 15 (日本英語学会第15回大会) · 東京都立大学/東京都八王子市 · 1997
- 田村幸誠 「主体化から見た法助動詞の段階的意味拡張について: Can, May, Must を中心に」 · 「(発表要旨)」 · *Conference Handbook* 15 (日本英語学会第15回大会) · 東京都立大学/東京都八王子市 · 1997
- 奥田雅信 「MAKE 使役構文の多義性に関する認知的分析」 · 「(発表要旨)」 · *Conference Handbook* 15 (日本英語学会第15回大会) · 東京都立大学/東京都八王子市 · 1997
- 高木宏幸 「長距離再帰形の認知文法的分析」 · 「(発表要旨)」 · *Conference Handbook* 16 (日本英語学会第16回大会) · 東北大学/宮城県仙台市 · 1998

- 田中英理 「参照点構造と再帰代名詞」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 16* (日本英語学会第16回大会)・東北大学/宮城県仙台市・1998
- 春木茂宏 「創造的メトニミー：伝達と解釈的使用の観点から」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 16* (日本英語学会第16回大会)・東北大学/宮城県仙台市・1998
- 春木茂宏 「Politeness をめぐって」・「(発表要旨)」・関西言語学会第23回大会・奈良女子大/奈良県奈良市・1998
- 奥田雅信 「GET 受動文と「責任」——認知的視点から——」・「(発表要旨)」・関西言語学会第23回大会・奈良女子大/奈良県奈良市・1998
- 森川文弘 「主語の典型条件と倒置文」・「(発表要旨)」・関西言語学会第23回大会・奈良女子大/奈良県奈良市・1998
- 貞光宮城 「転移修飾語に関する一考察——認知的観点から——」・「(発表要旨)」・関西言語学会第23回大会・奈良女子大/奈良県奈良市・1998
- 米倉陽子 「前置詞 with の意味拡張——COMITATIVE 以前を中心に」・「(発表要旨)」・関西言語学会第23回大会・奈良女子大/奈良県奈良市・1998
- 藤井友比呂 “Feature Strength and Inherent Case”・「(発表要旨)」・関西言語学会第23回大会・奈良女子大/奈良県奈良市・1998
- 田中英理 「参照点構造と概念的近接性——照応形の分析から——」・「(発表要旨)」・Workshop (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 森川文弘 「英語の倒置文における参照点構造」・「(発表要旨)」・Workshop (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 坪井健一 「先行詞内削除の統語的構造について」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 藤井友比呂 “The Inclusiveness Condition and the Multiple Nominative Construction”・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 田村幸誠 「接続詞 BEFORE と時制の相互作用について：認知文法の視点から」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 奥田雅信 「因果関係と主体的認知」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 初谷智子 「ECM 構文における受動化：主体化の観点から」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 春木茂宏 「アイロニーと文脈効果：関連性理論的分析」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 貞光宮城 「共感覚比喩表現についての一考察——認知的観点から——」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 17* (日本英語学会第17回大会)・成蹊大学/東京都武蔵野市・1999
- 前川貴史 「動名構文への生起可能性からみた接触打撃動詞」・「(発表要旨)」・関西言語学会第24回大会・関西学院大学/兵庫県西宮市・1999
- 米倉陽子 「Again(st) の意味拡張に関する認知的考察」・「(発表要旨)」・関西言語学会第24回大会・関西学院大学/兵庫県西宮市・1999
- 前川貴史 「接触動詞と共起する IN と ON の交替について」・「(発表要旨)」・英語語法文法学会第7回大会・日本大学/東京都世田谷区・1999
- 春木茂宏 「Please の意味に関する一考察」・「(発表要旨)」・日本語用論学会第2回大会・立命館大学/京都府京都市・1999
- 森川文弘 “Establishment of Existential There as a Subject”・「(発表要旨)」・認知言語学フォーラム第2回大会・京都大学/京都府京都市・1999
- Hatsutani, Tomoko “Subjectification in ‘V+NP+to-infinitive’ Construction in English”・「(発表要旨)」・国際認知科学会第2回大会・早稲田大学/東京都新宿区・1999
- 岩崎真哉 「英語と日本語に見られる時間表現の『方向性』と『直示性』の対照研究」・「(発表要旨)」

- ・日本英文学会第72回大会資料・立教大学／東京都豊島区・2000
- 町田 章 “Passivizability and Structured World”・「(発表要旨)」・日本英文学会第72回大会資料・立教大学／東京都豊島区・2000
- 藤井友比呂 “Notes on Multiple Case Constructions in Japanese”・「(発表要旨)」・Workshop (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 町田 章 “Reference Point, Word Order, and Structured World Model”・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 前川貴史 「前置詞 to による所有関係表現の特性について」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 初谷智子 「動詞 order の補文に関する一考察」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 米倉陽子 「2つの副詞のアスペクト概念成立と主体化」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 田中英理 「メンタルスペース理論における制限的 when 節の取り扱いについて」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 岩崎真哉 “A Temporal Network of *this* and *here*”・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 森川文弘 “Filled to Overflowing: A Study of Locative Alternation”・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 18* (日本英語学会第18回大会)・甲南大学／兵庫県神戸市・2000
- 田村幸誠, 貞光宮城 「Focus からみた現在完了の意味構造」・「(発表要旨)」・関西言語学会第25回大会・神戸商科大学／兵庫県神戸市・2000
- 初谷智子, 田中英理 「時制解釈におけるアクセス・パス」・「(発表要旨)」・関西言語学会第25回大会・神戸商科大学／兵庫県神戸市・2000
- 伊藤千鶴 “Existential *There* Sentences”・「(発表要旨)」・関西言語学会第25回大会・神戸商科大学／兵庫県神戸市・2000
- 梅林有美 「NOT...UNTIL の二つの意味解釈に関する認知的考察」・「(発表要旨)」・英語語法文法学会第8回大会・大阪樟蔭大学／大阪府東大阪市・2000
- 春木茂宏 「認知的不調和としてのアイロニー：認知から情緒へ」・「(発表要旨)」・日本語用論学会第3回大会・神戸研究学園都市大学交流センター／兵庫県神戸市・2000
- 榊原 愛 「not un-X についての一考察」・「(発表要旨)」・日本語用論学会第3回大会・神戸研究学園都市大学交流センター／兵庫県神戸市・2000
- 田村幸誠 “Focus Chain and English Tense: Towards the Full Parallelism between Nominals and Clauses”・「(発表要旨)」・日本認知言語学会設立記念大会・慶應義塾大学／東京都港区・2000
- 前川貴史 「達成動詞の目的語削除の可能性について」・「(発表要旨)」・日本英文学会第73回大会資料・学習院大学／東京都豊島区・2001
- 藤井友比呂 “Agree and Theta-Assignment”・「(発表要旨)」・日本英文学会第73回大会資料・学習院大学／東京都豊島区・2001
- 岩崎真哉 「時間表現に生起する前置詞 on の省略可能性に関する認知的考察」・「(発表要旨)」・日本英文学会第73回大会資料・学習院大学／東京都豊島区・2001
- 名雪達朗 「英語の tough 構文に関する認知的一考察」・「(発表要旨)」・日本英文学会第73回大会資料・学習院大学／東京都豊島区・2001
- 森川文弘 “Type, Instance, and Scope Ambiguity”・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 19* (日本英語学会第19回大会)・東京大学 (駒場キャンパス)／東京都目黒区・2001
- 米倉陽子 「Tough 構文の意味と拡張：総時的アプローチ」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 19* (日本英語学会第19回大会)・東京大学 (駒場キャンパス)／東京都目黒区・2001
- 橋本百合亜 「Indefinite *this* について」・「(発表要旨)」・*Conference Handbook 19* (日本英語学会第19回大会)・東京大学 (駒場キャンパス)／東京都目黒区・2001
- 榊原 愛 「メタファーでは何が伝達されているか」・「(発表要旨)」・関西言語学会第26回大会・龍谷

- 大学／京都府京都市・2001
- 香本直子 「疑似含意：意思伝達動詞にみられる不定詞の用法について」・「(発表要旨)」・関西言語学会第26回大会・龍谷大学／京都府京都市・2001
- 森 英樹 「疑似命令文の生成と解釈」・「(発表要旨)」・関西言語学会第26回大会・龍谷大学／京都府京都市・2001
- 野藁まゆ 「英語従属節の時制選択について」・「(発表要旨)」・関西言語学会第26回大会・龍谷大学／京都府京都市・2001
- 黒川尚彦 「直喩表現 (*like* NP) と関連性」・「(発表要旨)」・日本語用論学会第4回大会・桃山学院大学／大阪府和泉市・2001
- 岩橋一樹 「時間を表す属格表現について」・「(発表要旨)」・第4回 JACET 関西支部英文法研究会・京都教育大学附属高校メディアセンター／京都府京都市・2001

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況 計 3 名

<内訳>

PD : 3名 DC : 0名 外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学 計 3 名

学部: 0名 PD : 0名 DC : 3名

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 9 名

'97年度: 4名 '98年度: 1名 '99年度: 1名 '00年度: 1名 '01年度: 2名

<内訳>

1997年度	田中裕幸	(博士後期課程中退)	大阪大学文学部	助手
	甲斐雅行	(博士後期課程中退)	京都女子大学短期大学部	講師
	三原 京	(博士後期課程中退)	近畿大学教養部	講師
	堀田優子	(博士後期課程修了)	金沢大学文学部	講師
1998年度	高木宏幸	(博士後期課程中退)	近畿大学文芸学部	講師
1999年度	奥田雅信	(博士後期課程中退)	大阪大学文学部	助手
2000年度	春木茂宏	(博士後期課程中退)	近畿大学文芸学部	講師
2001年度	初谷智子	(博士後期課程中退)	姫路獨協大学外国語学部	助教授
	森川文弘	(博士後期課程中退)	姫路獨協大学外国語学部	講師

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・

高等学校の教員，その他の職業に就いた者について)

計 2 名

'97年度：1名 '98年度：0名 '99年度：0名 '00年度：1名 '01年度：0名

<内訳> 教職 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 6 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 3 名

10. 刊行物

1999年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 4

(原則として) 毎年

2000年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 5

2001年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 6

(原則として) 毎年

1997年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 36 毎年

1998年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 37 毎年

1999年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 38 毎年

2000年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 39 毎年

2001年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 40 毎年

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本英語学会事務局 (97-00)

1997年 (9月21日開催) : 第19回関西認知言語学研究会

1998年 (5月9日開催) : 第20回関西認知言語学研究会

1999年 (6月27日開催) : 第23回関西認知言語学研究会

2000年 (7月15日開催) : 第25回関西認知言語学研究会

2001年 (4月28日開催) : 第27回関西認知言語学研究会

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1997年 (9月6日開催) : 第57回待兼山ことばの会

1997年 (7月14日開催) : 第58回待兼山ことばの会

1997年 (8月20日開催) : 第59回待兼山ことばの会

1997年 (9月12日開催) : 第60回待兼山ことばの会

1997年 (11月14日開催) : 第61回待兼山ことばの会

1998年 (5月29日開催) : 第62回待兼山ことばの会

1998年（10月17日開催）：第63回待兼山ことばの会
1999年（3月11日開催）：第64回待兼山ことばの会
1999年（6月12日開催）：第65回待兼山ことばの会
2000年（5月22日開催）：第66回待兼山ことばの会
2001年（5月26日開催）：第67回待兼山ことばの会
2001年（7月24日開催）：第68回待兼山ことばの会
1997年（11月15日開催）：阪大英文学会第30回大会
1998年（11月17日開催）：阪大英文学会第31回大会
1999年（11月13日開催）：阪大英文学会第32回大会
2000年（11月11日開催）：阪大英文学会第33回大会
2001年（11月10日開催）：阪大英文学会第34回大会

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

まず、スタッフの研究評価であるが、河上教授は『認知言語学の基礎』（1996）の韓国語版（1997）が出版され、本邦でも2002年第7刷が刊行されたことから認知言語学の発展に寄与することができた。また、アイロニーの統合理論に関する科学研究費（萌芽的研究）が2000年に認められ、2002年に報告書が刊行される予定であるが、この研究もこれまでにない成果が期待できる。大庭教授は1997年に博士（文学）を取得、この論文を1998年に『英語構文研究——素性とその照合を中心に——』として刊行、これが同年度の市河三喜賞を受賞し、大きな評価を得た。またその後のわが国におけるミニマリスト・プログラムの研究でも寄与するところが大きかった。しかし、両者とも1996年から2000年までそれぞれ日本英語学会会長、日本英語学会事務局長の任についたこともあり、業績面で伸び悩みがあったことは否めない。

次に、院生の各種学会での研究活動と課程博士論文作成・提出に関して自己点検と評価を行う。

まず、院生の各種学会での研究活動については、極めて積極的に行われている。日本国内にさまざまな学会（日本英語学会、日本英文学会、英語語法文法学会、日本語用論学会、日本認知言語学会、関西言語学会など）があるが、そのほとんどで毎年誰かが研究発表を行っており、過去5年間の発表実績をみると、総計62件にのぼる。また、最近では海外で発表する院生もあり、昨年度と今年度はそれぞれ韓国、英国で開催された学会で2名が発表し、今秋にもカナダで1名が発表の予定である。したがって、諸学会の研究発表や *Proceedings* に掲載される論文は多数ある。しかし、これに対して、レフェリーつきの学会機関誌（例えば日本英語学会の *English Linguistics* や日本英文学会の『英文学研究』など）の掲載論文数が極めて少ない。院生の学会機関誌投稿について、今後一層細かい指導を行う必要がある。

次に、課程博士論文の作成・提出について自己点検・評価を行う。英語学分野では、現在まで3名が課程博士論文を提出し、学位を授与されている（うち1件が「市河賞」受賞）。われわれは、課程博士論文の提出条件として、博士予備論文の提出のほかに、内規として「国内外の学会が刊行するレフェリーつきの機関誌（日本英語学会の *English Linguistics* レベル）またはそれ

相当レベルの海外専門誌に2本以上の論文が掲載されること」を設定している。3名の学位授与者はいずれもこの条件をクリアし、そのような掲載論文をもとに博士論文を書いており、高い評価を得ている。現在、博士予備論文を提出したものが7名いるが、彼らには博士論文を執筆する熱意はあるものの、上記の条件がまだ満たされていないため、提出には至っていない。博士論文の水準を一定以上に保つには同等の条件を維持する必要があるが、現在の条件が博士論文提出の機会を奪っているのも事実である。大学の重点化後、学位授与者数の増加が求められている昨今、この条件の見直しの必要性を感じているところである。

なお、論文博士の授与件数は過去5年間で2件、日本学術振興会特別研究員は現在2名である。また、*OUPEL* の発行状況は必ずしも定期的とはいえないが（2002年に第5巻が発行された）、現役院生の論文集としては一定のレベルを保っていると思う。「待兼山ことばの会」の開催件数は過去5年で12件で、往年に較べやや少ない。これはスタッフの多忙が原因である。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 河上誓作 「アイロニーの言語学」, 『待兼山論叢』第32号, 大阪大学文学会, pp. 1-16, 1998年.
- 河上誓作 「Simulation と Dissimulation」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 英宝社, pp. 131-143, 2000年.
- 河上誓作 「認知意味論: 『サンドウィッチ』にみる意味拡張のメカニズム」, 『國文学』第46巻2号, 学燈社, pp. 30-35, 2001年.
- 大庭幸男 「Phaseとしての名詞表現」, 言語の潮流, 開拓社, pp. 21-36, 1999年.
- 大庭幸男 「束縛条件についての覚え書き」, 『藤井治彦先生退官記念論文集』, 英宝社, pp. 145-157, 2000年.
- 大庭幸男 "Island Phenomena and Search Spaces of a Probe", *Linguistic Analysis* 30-1. 2, pp. 67-92, 2000年.
- 大庭幸男 「疑問文」, 英語構文事典, 大修館書店, pp. 152-167, 2001年.
- 大庭幸男 「多重疑問文」, 英語構文事典, 大修館書店, pp. 168-184, 2001年.
- 大庭幸男 「付加疑問文」, 英語構文事典, 大修館書店, pp. 185-193, 2001年.

1-2. 著書・編著

- 河上誓作 *An Introduction to Cognitive Linguistics*, 李奇雨他訳, 韓国語版『認知言語学の基礎』, 韓国文化評論社, 316pp., 1997年.
- 河上誓作 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics), Volume 4*, (共編), *English Linguistics, Graduate School, Osaka University*, 232pp., 1999年.
- 河上誓作 「ことばの仕組みを探る —— 生成文法と認知文法 ——」(共著), 原口庄輔(筑波大学) / 中島平三(東京都立大学) / 中村捷(東北大学) / 河上誓作, 研究社出版, 228pp., pp. 165-214, 1999年.
- 河上誓作 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics), Volume 5* (共編), *English Linguistics, Graduate School, Osaka University*, 158pp., 2000年.
- 河上誓作 「補文構造」(共編)・原口庄輔(明海大学) / 中島平三(東京都立大学) / 中村捷(東北大学) / 河上誓作 / (共著)・桑原和生(神田外語大学) / 松山哲也(東京都立大学), 研究社出版, 208pp., 2001年.

- 河上誓作 『文法におけるインターフェイス』(共編)・原口庄輔(筑波大学)／中島平三(東京都立大学)／中村捷(東北大学)／河上誓作／(共著)・岡崎正男(茨城大学)／小野塚裕視(筑波大学), 研究社出版, 209pp., 2001年.
- 河上誓作 『語の意味と意味役割』(共編)・原口庄輔(明海大学)／中島平三(東京都立大学)／中村捷(東北大学)／河上誓作／(共著)・米山三明(成蹊大学)／加賀信広(筑波大学), 研究社出版, 200pp., 2001年.
- 河上誓作 『文の構造』(共編)・原口庄輔(明海大学)／中島平三(東京都立大学)／中村捷(東北大学)／河上誓作／(共著)立石浩一(京都外国語大学)／小泉政利(東北大学), 研究社出版, 208pp., 2001年.
- 河上誓作 『機能範疇』(共編)・原口庄輔(明海大学)／中島平三(東京都立大学)／中村捷(東北大学)／河上誓作／(共著)・金子義明(東北大学)／遠藤善雄(横浜国立大学), 研究社出版, 217pp., 2001年.
- 河上誓作 『語彙範疇(Ⅱ) 名詞・形容詞・前置詞』(共編), 原口庄輔(明海大学)／中島平三(東京都立大学)／中村捷(東北大学)／河上誓作／(共著)・丸田忠雄(山形大学)／平田一郎(奈良教育大学), 研究社出版, 184pp., 2001年.
- 河上誓作 『左方移動』(共編)・原口庄輔(明海大学)／中島平三(東京都立大学)／中村捷(東北大学)／河上誓作／(共著)大庭幸男／島越郎(山口大学), 研究社出版, 199pp., 2002年.
- 河上誓作 『英語学用語辞典』(共編)・荒木一雄(京都外大)／服部義弘(愛媛大学)／森島一雄(京都外大)／柘矢好弘(甲南大学)／天野政千代(名古屋大学)／小野貴啓(京都外大)／河上誓作／中野弘三(名古屋大学)／山梨正明(京都大学)／井出祥子(日本女子大)／熊取谷哲夫(関西外大)／小野経男(名古屋大学)／有馬道子(光華女子大)／赤野一郎(京都外大), 三省堂, 900pp., 1999年.
- 大庭幸男 『英語構文研究』, 英宝社, 320pp., 1998年.
- 大庭幸男 『言語の潮流』(共著), 編者・大庭幸男／岩部浩三(山口大学)／稲田俊明(九州大学)／水光正則(京都大学)／武本雅嗣(山口大学)／西村秀夫(神戸大学), 開拓社, 280pp., pp. 21-36, 1999年.
- 大庭幸男 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics) Volume 4*, (共編)・河上誓作／大庭幸男, Department of English Linguistics, 232pp., 1999年.
- 大庭幸男 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics) Volume 5*, (共編)・河上誓作／大庭幸男, Department of English Linguistics, 158pp., 2000年.
- 大庭幸男 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics) Volume 6*, (共編)・河上誓作／大庭幸男, Department of English Linguistics, 179pp., 2002年.
- 大庭幸男 左方移動(共著), 著者・大庭幸男／島越郎(山口大学), 研究社, 199pp., pp. 1-93, 2002年.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 河上誓作 「ジェフリー・N. リーチ『語用論』(復刻版)」, 共訳 池上嘉彦(東京大学)／河上誓作, 紀伊国屋書店, pp. 149-333, 2000.
- 河上誓作 「A.E. ゴールドバーグ『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』」, 共訳・監修, 河上誓作／早瀬尚子(大阪外国語大学)／谷口一美(大阪教育大学)／堀田優子(金沢大学), 研究社出版, pp. 301-311, 2001年.

(2) 書評

- 河上誓作 「吉田一彦『現代英語紀行』」, 公明新聞, 公明新聞社, p. 1, 1998年
- 河上誓作 「丸田忠雄『使役動詞のアナトミー — 語彙的使役動詞の語彙概念構造』」, 『英語青年』, 研

(3) 辞典項目

- 大庭幸男 「『英語構文事典』「多重疑問文」, 「疑問文」, 「付加疑問文」, 大修館書店, pp. 152-167/
168-184/185-193, 2001年
- 大庭幸男 「英語学用語辞典」, 三省堂, 86項目, 1999年

(4) その他 (『英語年鑑』「回顧と展望」)

- 河上誓作 「統語論・意味論の研究」, 『英語年鑑』, 研究社出版, pp. 35-38, 1998年.
- 河上誓作 「統語論・意味論の研究」, 『英語年鑑』, 研究社出版, pp. 35-38, 1999年.
- 河上誓作 「統語論・意味論の研究」, 『英語年鑑』, 研究社出版, pp. 38-41, 2000年.
- 河上誓作 「統語論・意味論の研究」, 『英語年鑑』, 研究社出版, pp. 38-41, 2001年.
- 河上誓作 「統語論・意味論の研究」, 『英語年鑑』, 研究社出版, pp. 38-41, 2002年.

1-4. 口頭発表

(1) 国内学会

- 河上誓作 「アイロニーのはなし」, 福岡言語学会, 西南学院大学/福岡県福岡市, 1997/12/14.
- 河上誓作 「意味のからくり」, 広島女学院大学秋季英文学会, 広島女学院大学/広島県広島市, 1999/
11/10.
- 河上誓作 「アイロニーの言語学」, 神戸女学院大学英文学会, 神戸女学院大学/兵庫県西宮市, 1999/
12/10.
- 河上誓作 「シンポジウム『英語学・言語学の今後の課題』」, 共同 河上誓作/大津由紀雄(慶応大学)
/窪園晴夫(神戸大学)/影山太郎(関西学院大学)/渡辺明(東京大学)/山梨正明(京都
大学)/小倉美知子(千葉大学)/中村捷(東北大学)/中島平三(東京都立大学), 日本英
語学会第18回大会, 甲南大学/兵庫県神戸市, 2000/11/19.
- 河上誓作 「シンポジウム『認知言語学の新たな展開—21世紀への眺望』」, 共同 河上誓作/高橋英光
(北海道大学)/山梨正明(京都大学)/西村義樹(東京大学), 日本認知言語学会, 第1回
大会, 慶応大学/東京都港区, 2000/9/10.
- 河上誓作 「アイロニーとその周辺—外観と実態の言語学」, 甲南大学英文学会, 甲南大学/兵庫県神戸
市, 2001/6/23.
- 河上誓作 「アイロニーの統合理論に向けて」, JACET 関西支部学会, 京都府立大学/京都府京都市, 2001
/10/13.
- 大庭幸男 「島の現象と探査領域」, 日本英文学会, 第53回日本英文学会中国・四国支部大会, 鳥取大学
/鳥取県鳥取市, 2000/10/29.
- 大庭幸男 「強い島と弱い島と探査領域」, 福岡言語学会, 第3回福岡言語学会, 九州大学/福岡県福岡
市, 2000/12/16.

(2) 自治体等での講演会等

- 河上誓作 「アイロニーのからくり」, 近畿大学/大阪府東大阪市, 1997/11/28.
- 河上誓作 「アイロニーの言語学」, 筑波大学言語学講演会, 筑波大学/茨城県つくば市, 1998/7/1.
- 河上誓作 「アイロニーのからくり」, 活水女子大学英文学科特別講演会, 活水女子大学/長崎県長崎
市, 1999/11/16.
- 大庭幸男 「wh 移動について」, 言語学・英文学書フェア特別講演会, 丸善/大阪市心斎橋, 1998/7
/1.

2. 教員の受賞歴

大庭幸男 1998年度市河賞（財団法人 語学教育研究所）1998年

【IV. 教員による競争的資金獲得】（1997年度～2001年度）

科学研究費補助金の獲得状況

平成9年度 萌芽的研究12871062 認識構造理論による「アイロニー関連語彙」の関係解明と
その日・英・中・韓国語比較 河上誓作 1,600,000円

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】（1997～2001年度）

河上誓作 教授

日本英語学会・評議員・1989年4月～現在
日本英語学会・会長・1996年4月～2000年3月
日本英文学会・評議員・理事・1997年4月～2001年3月
日本英語学会・理事・1997年12月～2001年11月

大庭幸男 教授

関西言語学会・運営委員・1993年4月～現在
関西言語学会・実行委員・1993年4月～2000年3月
日本英語学会・事務局長・1997年4月～2000年3月
日本英文学会・編集委員会委員・2000年4月～現在
日本英文学会・編集委員会副委員長・2001年4月～2002年3月
日本英文学会・編集委員会委員長・2002年4月～現在

【VI. 教員の教育活動】（2002年度）

1. 大学院授業担当

大庭幸男 教授

通年	英語学特殊講義(D)	生成文法理論の新展開
通年	英語学特殊講義(D)	英語構文研究
通年	英語学特殊演習(D)	英語学の諸問題
通年	英語学特殊演習(D)	理論言語学の基礎
通年	英語学講義(M)	生成文法理論の新展開
通年	英語学講義(M)	英語構文研究
通年	英語学演習(M)	英語学の諸問題
通年	英語学演習(M)	理論言語学の基礎
通年	英語学博士論文作成演習(D)	認知言語学・生成文法理論研究
通年	英語学修士論文作成演習(M)	認知言語学・生成文法理論研究

河上誓作 教授

通年	英語学特殊講義(D)	英語学の研究
通年	英語学特殊演習(D)	英語学の諸問題
2学期	英語学特殊講義(D)	アイロニーとその周辺
通年	英語学講義(M)	英語学の研究
通年	英語学演習(M)	英語学の諸問題
2学期	英語学講義(M)	アイロニーとその周辺

通年 英語学博士論文作成演習(D) 認知言語学・生成文法理論研究
通年 英語学修士論文作成演習(M) 認知言語学・生成文法理論研究

天野政千代 講師(非常勤講師・名古屋大学)
2学期 英語学特殊講義(D) 英語構文の通時的研究
2学期 英語学講義(M) 英語構文の通時的研究

内田聖二 講師(非常勤講師・奈良女子大学)
1学期 英語学特殊講義(D) Grice から Sperber&Wilson へ
1学期 英語学講義(M) Grice から Sperber&Wilson へ

岡田禎之 講師(非常勤講師・神戸市外国語大学)
通年 英語学特殊講義(D) 機能主義的文法分析と語法研究
通年 英語学講義(M) 機能主義的文法分析と語法研究

早瀬尚子 講師(非常勤講師・大阪外国語大学)
1学期 英語学特殊講義(D) Usage-Based Model と言語分析
1学期 英語学講義(M) Usage-Based Model と言語分析

2. 学部授業担当

大庭幸男 教授
通年 英語学講義 英語構文研究
通年 英語学演習 生成文法の基礎
通年 英語学演習 英語学研究

河上誓作 教授
1学期 英語学講義 英語研究の基礎
2学期 英語学講義 アイロニーとその周辺
通年 英語学演習 英語学研究

ポール・ハーヴィ 外国人教師
1学期 英語学演習 ENGLISH DIALECTS I
2学期 英語学演習 ENGLISH DIALECTS II

天野政千代 講師(非常勤講師・名古屋大学)
2学期 英語学講義 英語構文の通時的研究

内田聖二 講師(非常勤講師・奈良女子大学)
1学期 英語学講義 Grice から Sperber & Wilson へ

岡田禎之 講師(非常勤講師・神戸市外国語大学)
通年 英語学講義 機能主義的文法分析と語法研究

早瀬尚子 講師(非常勤講師・大阪外国語大学)
平成14年度:
1学期 英語学講義 Usage-Based Model と言語分析

3. 共通教育

河上誓作 教授

I セメスター 専門基礎 英語学の基礎

II セメスター 特別科目 ことばの研究最前線

大庭幸男 教授

I セメスター 専門基礎 英語学の基礎

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：中村 捷（東北大学大学院文学研究科教授）

はじめに

この報告書では、はじめに総括的評価を述べ、つづいてその根拠となる具体的事項について、いくつかの評価視点を基準として重点的に検討し、その評価を述べる。それに基づいて、さらなる飛躍の参考となるように、今後の課題に言及する。

研究活動の総括的評価

英語学専門分野に所属する教官は教授2名で、その専門分野は「意味論・語用論・認知言語学」（河上誓作教授）と「統語論・生成文法理論」（大庭幸男教授）である。河上教授はこれまでに英語学会会長として、日本の英語学会に多大の貢献をなしてきたばかりではなく、認知言語学の国際会議の日本での開催を成功させ、日本認知言語学会の設立にも尽力した。またその著書『認知言語学の基礎』は現在急速に発展している日本の認知言語学研究の礎となっているが、その影響力は表面的に眼に見える現象以上に深く認知言語学研究の領域に及んでいると判断される。現在、認知言語学関係6巻及び英語学関係21巻の編集をつとめており、その中のいくつかの巻を執筆予定である。河上教授は「アイロニー」の研究者としては文字通り日本の第一人者である。

大庭教授は生成文法研究において、常にその最先端領域を研究対象とする研究者として知られ、その緻密な議論展開には定評がある。明快な論述で書かれた著書『左方移動』に加え、アメリカの言語研究誌 *Linguistic Analysis* にも論文が掲載されている。大庭教授は、日本英語学会や日本英文学会の機関誌にも多くの論文があり、その著書『英語構文論』（博士論文）において市河賞（1998年度）を受賞している第一級の研究者である。

大学院生の研究活動には眼を見張るものがある。日本国内で開催される学会における過去5年間の論文発表の累計は62件にものほり、これは恐らく日本一の多さであると推測される。また、最近では海外の学会での研究発表も増えてきている。さらに、その発表内容が、生成文法、認知意味論、語用論、語法研究、関連性理論、史的研究等々と多岐にわたっていることは特筆に値する。これは専門の異なる教官の指導が相補的に有効に働くように適切な指導が行われていること、教官の専門以外の研究分野を研究する学生に対する適切な便宜が図られていること、研究室に自由な学問研究の雰囲気が作り出されていることによるものである。

以上のことを総括すると、教官は極めて高い研究水準を持ち、特色のある学風を保持し、学生

の指導にそれを生かすことによって、優秀な若手研究者を育成していると判断される。

研究活動評価の具体的内容

教官の研究業績について、研究の独創性、研究の先見性、研究の牽引力の有無（影響力）、研究の一貫性・持続性、研究成果の教育への還元、学会活動などの観点から具体的に検討する。

河上教授は、これまでに意味論・語用論の分野で多くの優れた論文があるが、90年代初頭から認知意味論が急速に発展したのに呼応して、その研究分野を認知意味論に拡大し、その発展に多大の貢献をなしている。その著書『認知言語学の基礎』は多くの読者を得て版を重ねているのに加え、韓国語訳も出版されており、国際的に読者を得ている。この本により、認知意味論を目指す若い研究者が多く生まれたことは疑いの余地がないと思われる。「ことばと認知の仕組み」「認知意味論：『サンドイッチ』にみる意味拡張メカニズム」は、認知意味論研究の基本的考え方と具体的事例分析を明快に説いたものである。「アイロニーの言語学」は、河上教授のもっとも得意とする分野であるアイロニーについての説得力のある議論の展開である。

河上教授は一貫して意味論・語用論の研究を追求してきているが、特にアイロニー研究においては日本で他の追従を許さない研究を積み重ね、この分野では研究の牽引的役割を果たしている。認知意味論の台頭とともにその発展の可能性を見抜き、適切な概説書を著し、日本における認知意味論研究の発展に寄与していることは、研究動向をみる確かな先見性があることをよく示している。さらに、現在進行中の英語学モノグラフシリーズ21巻（研究社）と認知言語学シリーズ6巻（大修館）の編集に携わっており、その中のいくつかの巻を執筆予定である。また、英語学研究室の研究誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を編集し、国内外の研究者を招聘して「待兼山ことばの会」を主催している。口頭発表をみると、日本英語学会、日本認知言語学会をはじめとして、さまざまな学会や自治体主催のシンポジウムや講演を依頼されていることから、研究活動の範囲の広さと影響力を知ることができる。

研究成果の教育への還元については、大学院生の活動の項で詳細に述べるが、大学院生の積極的な研究活動には目を見張るものがあり、研究成果が教育に十分に還元されていることがわかる。学会活動に目を転ずると、河上教授は日本英文学会の編集員・評議員・理事を務め、また、日本英語学会の編集委員・評議員・理事に加え、1996年から2000年までは日本英語学会の会長職にあり、英語学会の発展に多大な貢献をした。

大庭教授の学風を一言で述べれば、つねに最先端の問題に挑戦する姿勢であるといつてよい。生成文法の動向を的確に把握し、そこから解決すべき問題を洗い出し、より適切な説明を試みるという姿勢である。最先端の動向を的確に把握すること自体容易ならざることであるが、そこから解くに値する問題点を見つけだすことはさらに困難なことである。このような姿勢により、これまで多くの優れた論文を発表しているが、その大きな成果の1つが『英語構文研究』（博士論文）であり、これにより1998年度の市河賞を受賞している。また、大庭教授の研究の柱の1つに移動現象とそれに課せられる条件の問題があり、この問題を明解な論述で説き進めた著書として『左方移動』（共著）がある。

「Phase としての名詞句表現」は、最新の生成文法の理論展開であるミニマリスト・プログラムで提案されている Phase の概念について、名詞句も Phase の候補として組み込むべきである点を説いた論考である。「束縛条件についての覚え書き」は、最新の理論展開にともなって、その基本的考え方に修正が求められている束縛条件について検討し、新しい角度からの提案を試みたものである。アメリカの言語研究誌 *Linguistic Analysis* に掲載された “Island Phenomena and Search Spaces of a Probe” では、これまでの研究成果を土台として、移動に課せられる条件・制約を最新の理論においてどのように説明するかを論じたものである。事典の項目として書かれている「疑問文」「多重疑問文」「付加疑問文」の項目からわかるように、疑問文に関してもいくつかの論考があり、特に多重疑問文の論文は引用されることの多い優れた論文である。

学会活動に目を転じると、日本英文学会編集委員・副委員長・委員長、関西言語学会運営委員・実行委員を務め、1997年から2000年までは日本英語学会の事務局長として英語学会の発展に多大の貢献をした。

大学院生の研究活動

教官の研究活動は、その成果が教育あるいは社会に活かされてこそ、十分な意味を持つものと言える。このような観点から大学院生の研究活動を見ると、その活動の活発さ、研究領域の多様性のいずれの点から見ても眼を見張るものがある。過去5年間に在学中の大学院生の論文発表数が61編、研究発表数が62編の多さにのぼっているが、これは驚異的な数字である。この数字はいかに大学院生の研究活動が活発であるかをものがたっている。発表論文の研究領域を見ると、日英語比較、言語教育、認知意味論、関連性理論、意味論、生成文法、英語史、語彙意味論等々に及んでいる。これらすべての分野を2人の教官で指導することは不可能であるので、他の部局との連携あるいは集中講義等によって補われているものと思われるが、それにしてもこれだけ多様な研究が1つの研究室で行われていることに驚きを禁じ得ない。研究と教育が見事に有機的に結合した結果であると判断される。

今後の課題

英語学専門分野は、このように高度の研究能力をもつ教官と研究意欲旺盛な大学院生の相互刺激により、きわめて質の高い研究活動を行ってきていると判断されるが、博士課程の大学院生の数の多さに比して、課程博士号の授与が少ないのは問題となるであろう。博士論文提出の要件として「国内外の学会が刊行するレフェリーつきの機関誌またはそれに相当するレベルの海外専門誌に2本以上の論文が掲載されていること」という高いレベルの条件が課せられていることが、問題となるかもしれない。条件を緩めれば博士号の授与数は増加するであろうが、質の低下は避けられないかもしれない。研究室の置かれている位置を考えると、一定の高い質を保持しながら、博士号の授与数を増加させるという困難な問題に挑戦しなければならない。また、今後、脳科学との連携など国際的・学際的研究にもさらに力を入れられることを期待したい。

3-20 日本語学

【はじめに、研究・教育活動の概要とその特色】

日本語学講座では、日本語を一つの個別言語として客観的に対象化して観て行こうとする立場を基に、現代日本語学、社会言語学、日本語教育学の各領域の研究が行われている。現代日本語学の領域では、話し言葉や書き言葉の実例を丹念に調査することによって、現代日本語の文法・語彙・音韻・表記等の特質を体系的・総合的に研究する。社会言語学の領域では、日本語の地域差（方言）・性差・年齢差や場面による言葉の違い、生きた日本語の動向などを、フィールドワーク等によって解明しようとする。日本語教育学の領域では、日本語を母語としない人々の日本語習得を支援するための方法や心構えについて、基本的な理論を追究するとともに、実践的研究も進めている。いずれの領域においても、当初から日本人学生とともに外国人留学生を研究室における当然の存在として導き入れてきた。言語や文化的背景を異にする学生達が日本語を巡って熱心に討論している姿は、研究室や教室でよく目にする光景であるが、このような刺激的な対話の中から、対照言語学的視点、異文化接触についてのものの見方、その他さまざまな視野が拓け、日本語をより真摯な態度で見据えようとする姿勢が定着してきている。このような、グローバルな雰囲気の中で日本語と日本語社会の特質を解き明かそうと日々努めていることが日本語学講座の大きな特色である。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 3 助教授 3 講師 1 助手 1

教授： 真田信治 土岐哲 工藤真由美

助教授： 渋谷勝己 石井正彦 青木直子

講師： 木下りか

助手： 吉村裕美

2. 在学生（2002年4月現在）

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
41	26	35	1	0	1	6	10	2

※うち留学生 5 名，社会人学生 9 名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	19	14	7	7	9
'98	16	7	6	1	4
'99	10	14	7	6	5
'00	11	11	1	2	1
'01	13	10	2	2	3
計	69	56	23	18	22

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	6	2	8
'98	2	0	2
'99	1	2	3
'00	4	0	4
'01	1	0	1
計	14	4	18

1-2. 博士論文の提出者、題目等

- 前田直子 【日本語複文の記述的研究——論理文を中心に——】（課程）1997年1月，主査：仁田義雄，副査：真田信治，土岐 哲。
- 金沢裕之 【近代大阪語変遷の研究】（論文）1997年2月，主査：真田信治，副査：仁田義雄，土岐 哲。
- 由井紀久子 【日本語動詞における意味の抽象化過程の研究——補助動詞用法を持つ動詞の意味分析——】（課程）1997年2月，主査：土岐 哲，副査：真田信治，仁田義雄。
- 日高水穂 【授与動詞の体系と変化に関する方言対照研究】（課程）1997年3月，主査：真田信治，副査：仁田義雄，土岐 哲，渋谷勝己。
- 鈴木重幸 【形態論・序説】（論文）1997年6月，主査：仁田義雄，副査：真田信治，土岐 哲。
- 庵 功雄 【日本語テキストの結束生の研究——指示表現と名詞の機能を中心に——】（課程）1997年8月，主査：仁田義雄，副査：土岐 哲，真田信治。
- 張 麟声 【現代日本語の受動文についての記述的研究】（課程）1997年9月，主査：仁田義雄，副査：真田信治，土岐 哲。
- 丁 意祥 【日本語受身分の研究】（課程）1997年12月，主査：真田信治，副査：土岐 哲，渋谷勝己。
- 姜 錫祐 【敬語運用の社会言語学的研究】（課程）1998年3月，主査：真田信治，副査：土岐 哲，渋谷勝己。
- ナカミズ・エレン 【ブラジル就労者における日本語の諸相】（課程）1998年7月，主査：真田信治，副査：真田信治，副査：土岐 哲，渋谷勝己。
- 工藤真由美 【アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——】（論文）1999年2月，主査：真田信治，副査：土岐 哲，渋谷勝己。
- 山口幸洋 【日本語方言一型アクセントの研究】（論文）1999年7月，主査：真田信治，副査：前田富祺，土岐 哲

- 陳 於華 『地域社会の標準語化に関する研究——南中国と香港をフィールドとして——』（課程）1999年9月，主査：真田信治，副査：土岐 哲，渋谷勝己。
- 山東 功 『明治前期日本文典の研究』（課程）2000年3月，主査：工藤真由美，副査：真田信治，石井正彦，審査協力者：清水康行。
- 山田敏弘 『日本語におけるベネファクティブの記述的研究』（課程）2000年3月 主査：工藤真由美，副査：土岐 哲，石井正彦。
- 氏平 明 『発話の非流暢生に関する言語学的・音声学的研究』（課程）2000年3月主査：土岐 哲，副査：真田信治，青木直子，審査協力者：伊藤友彦。
- 呉 玆定 『現代日本語における連体修飾語の語順の傾向』（課程）2000年9月主査：工藤真由美，副査：真田信治，石井正彦。
- 金 美善 『在日コリアンの言語接触に関する社会言語学的研究』（課程）2001年3月主査：真田信治，副査：土岐 哲，渋谷勝己

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	9	5	13	4	9	40
'98	12	3	11	0	9	35
'99	8	8	11	3	13	43
'00	3	7	7	6	19	42
'01	6	12	19	3	17	57
計	38	35	61	16	67	217

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	2	5	14	6	0	27
'98	0	4	14	7	0	25
'99	1	8	11	8	0	28
'00	2	12	12	6	0	32
'01	6	14	26	4	0	50
計	11	43	77	31	0	162

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 雨宮雄一 「するべきだ」「したほうがいい」と「しなくてはいけない」の違いについての覚え書き・現代日本語研究・7・2000
- 岩崎 卓 従属節テンス認定の問題・日本学報・17・1998
- 呉 玆定 連体修飾表現に関する日韓対照研究——「の」に対応する韓国語の「wi」「in」——・現代日本語研究・4・1997
- 呉 玆定 「程度を表す連体修飾成分について——程度評価づけの修飾成分と数量的程度の修飾成分——」・現代日本語研究・5・1998
- 小林英樹 「VNr-Nr タイプ動名詞の目的語（補語）について」『日本学報』16・1997

- 小林英樹 二字漢語動名詞の主要部について・現代日本語研究・4・1997
- 小林英樹 自他両用法をもつ二字漢語動名詞の意味体系における分布・計量国語学21-3・1997
- 小林英樹 複合による他動化・国語学・192・1998
- 小林英樹 「VN をする」構文で使えない動名詞について・現代日本語研究・5・1998
- 小林英樹 複数事態を表す述語について・現代日本語研究・6・1999
- 佐野由紀子 程度副詞の名詞修飾について・日本学報・16・1997
- 佐野由紀子 程度限定における「主観性」について・現代日本語研究・5・1998
- 佐野由紀子 程度副詞と主体変化動詞との共起・日本語科学・3・1998
- 佐野由紀子 比較に関わる程度副詞について・国語学・195・1998
- 佐野由紀子 程度副詞との共起関係による状態性述語の分類・現代日本語研究・6・1999
- 山東功・春山弟彦 【小学科用日本文典】について——明治前期文法教科書考証（1）——・解釈・43-11・1997
- 山東功 隨筆の発見と国文学史の成立——近代の文学研究と徒然草——・日本思想史研究会会報・15・1997
- 山東功 言文一致と物集高見——【小学詞遣】について——・国語学・191・1997
- 山東功 物集高見の文法研究——【初学日本文典】について——・待兼山論叢・31・1997
- 山東功 国語学史批判の陥穽・江戸の思想・8・1998
- 山東功 物集高見【日本文法問答】について——明治前期文法教科書考証（2）——・解釈・44-9/10・1998
- 山東功 歴史の空間、言語の時間——日本語史と方言の思惟——・江戸の思想・9・1998
- 山東功 中根淑【日本文典】について・阪大日本語研究・11・1999
- 山東功・佐藤誠実 【語学指南】について——明治前期文法教科書考証（3）——・解釈・45-5/6・1999
- 山東功 国語学か日本語学か・江戸の思想・10・1999
- 山東功 物集高見【日本文語】について・現代日本語研究・7・2000
- 山東功 【ことばのはやし】と【ことばのその】——付載文典の比較について——・現代日本語研究・8・2001
- 清水佳子 主題連鎖と「のだ」との関連・現代日本語研究・4・1997
- 清水佳子 格成分から主題への取り立て——主題の連続における導入部——・現代日本語研究・5・1998
- 高田祥司 大阪方言におけるテオク形の用法——東京方言との対照を中心に——・現代日本語研究・6・1999
- 高橋美奈子 措定文の一面——主格名詞句が「ガ」でマークされる措定文について——・現代日本語研究・4・1997
- 高橋美奈子 文の叙述内容と主題の有無についての覚書・現代日本語研究・5・1998
- 高橋美奈子 ‘判定詞’+接続助詞「が」による主題提示を持つ文について・日本学報・18・1999
- 張 麟声 受動文の分類について・現代日本語研究・4・1997
- 丁 意祥 受け取り・取り外し動詞から形成される受身文について・現代日本語研究・4・1997
- 本多真紀子 個人の言語直観の信頼性について——接続詞スルトを含む文連鎖の場合——・現代日本語研究・7・2000
- 宮崎和人 確認要求表現としての「ダロウネ」・日本語科学・6・1999
- 宮崎和人 モダリティ論から見た「～と思う」・待兼山論叢・33・1999
- 宮崎和人 確認要求表現の体系性・日本語教育・106・2000
- 宮崎和人 動詞「思う」のモーダルな用法について・現代日本語研究・8・2001
- 宮崎和人 認識的モダリティとしての〈疑い〉——「ダロウカ」と「ノデハナイカ」——・国語学・206・2001
- 宮崎和人 終助辞「ネ」と「ナ」・阪大日本語研究・14・2002
- 八亀裕美 現代日本語の形容詞述語文・阪大日本語研究別冊・1・2001

- 八亀裕美 非動的述語の継続相当形式——青森五所川原方言の場合——・国語学・208・2002
- 姜 錫祐 同一集団の中での第三者に対する待遇表現——大学応援団を事例として——・日本学報・16, 1997. 3
- 陳 於華 香港と南中国における「標準語化」の地域差とその要因・日本学報・16, 1997. 3
- 陳 於華 香港と南中国における標準語（普通話）の機能の地域差・計量国語学・21-1, 1997. 6
- 西尾純二 マイナス待遇表現行動における規範意識の属性差・地域言語・9, 1997. 10
- 陳 於華 香港における『普通話』の普及度とその運用実態——返還直前のフィールドワークから——・待兼山論叢日本学篇・31, 1997. 12
- 西尾純二 マイナス待遇表現行動分析の試み——非礼場面における言語行動規範について——・日本学報・17, 1998. 3
- 金 美善 在日コリアン一世の日本語——大阪市生野区に居住する一世の事例——・日本学報・17, 1998. 3
- オストハイダ・テーヤ・対外国人言語行動と言語外的条件の相互関係・日本学報・18, 1999. 3
- 高木千恵 若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて——談話から見た使用実態——・現代日本語研究・6, 1999. 3
- 余 健 母アクセントと移住先アクセント間における切り換え能力・日本学報・18, 1999. 3
- 船木礼子 意志・推量形式「べー」の対照——用法変化の推論——・待兼山論叢日本学篇・33, 1999. 12
- 船木礼子 江戸期鶴岡方言における意志・推量表現形式の変化・現代日本語研究・7, 2000. 3
- 高木千恵 関西における間投助詞「サー」の使用実態・地域言語・12, 2000. 10
- 船木礼子 幕末以降の土佐方言における意志表現・推量表現形式の変化・地域言語・12, 2000. 10
- 林 欣儀 台湾における言語使用——政治意識という観点から——・待兼山論叢日本学篇・34, 2000. 12
- 李 吉鎔 日韓両言語における反対意見表明行動の対照研究——談話構造とスキーマを中心として——・阪大日本語研究・13, 2001. 2
- 朝日祥之 ニュータウン居住者の言語意識について——西神ニュータウンにおける調査から——・地域言語・13, 2001. 10
- オストハイダ・テーヤ 言語外的条件による過剰適応——コミュニケーション行動の言語社会心理学——・待兼山論叢日本学篇・35, 2001. 12
- 松丸真大 ラ行五段化の語彙的拡散——高知県幡多方言の3体系比較から——・地域言語・13, 2001. 10
- 簡 月真 台湾における言語接触・社会言語科学・第4巻第2号, 2002. 3
- 松丸真大 高知県幡多方言の使役形式——活用体系変化の一過程——・阪大日本語研究・14, 2002. 3
- 氏平 明 成人の吃音の引き金について——音韻論・音声学からのアプローチ——・1997・音声言語医学第38号 No. 1・日本音声言語医学会
- 氏平 明 吃音の生起位置について・1997・龍谷大学国際センター第6号・龍谷大学留学生別科
- 氏平 明 吃音の引き金の日英比較・1997・大阪大学日本学報第16号・大阪大学文学部日本学研究室
- 氏平 明 幼児の吃音の繰り返しの単位について・1998・音声言語医学第39号 No. 1・日本音声言語医学会
- 氏平 明 吃音者の声の特徴と声帯・1998・電子情報通信学会技術第97号 No. 586・電子情報通信学会
- 氏平 明 吃音の音声の移行と吃音者の声の特徴・1998・音韻研究第1号・日本音韻論学会・開拓社（東京）
- 氏平 明 吃音者と健常者の発話の非流暢性について・1999・音声研究第3巻第1号・日本音声学会
- 氏平 明 日本の言語障害治療の現状について・1999・社会言語科学第2巻第1号・社会言語科学会
- 氏平 明 発話の非流暢性に関する言語学的・音声学的研究]・2000・博士論文大阪大学大学院文学研究科
- 代田智恵子 日本語アクセントの習得とイントネーション：フランス語母語話者による日本語発話の音調特徴とその要因・1997・日本語教育論集世界の日本語教育第7号・国際交流基金日本語国際センター
- 代田智恵子 ニュース文の聞き取りと韻律——日本語母語話者による聴取調査——・1999・日本学報第18号・大阪大学文学部日本学研究室

- 李 宝瓊 「ソウル方言話者の統語境界の知覚における韻律的特徴」、『待兼山論叢』, 34号, 2000年
- 司 空煥 「韓国語話者による日本語破擦音の音響的特性に関する考察」『阪大日本語研究』14, 2002. 3. 25
- 江崎哲也 「ブルガリア東北方言話者による東京方言名詞一語文の知覚」、『待兼山論叢』2001年12月
- Yoko Arashi 'Research on the Acquisition of Kana Writing with Special Morae in Japanese Young Children —— From the Perspective of Phonological Awareness —— '・2002・JBAET Journal No.6.
- 前田理佳子 「在日コリアン一世の談話におけるスタイル切り替え —— スピーチレベルシフトの様式に注目して ——」『待兼山論叢』33, 1999
- Nagami, M. 「Development of intercultural competence」『The Canberra Linguist』2000.
- 御館久里恵 「日本語学習者のタスク遂行過程における「気づき」」『阪大日本語研究』13, 2001
- 上田和子 「専門日本語教育プログラム・デザイン —— 外交官・公務員日本語研修における選択システムの実践 ——」(羽太園・和泉元千春との共著)『日本語国際センター紀要』11, 2001
- 永見昌紀 「日本語研修コースにおけるコンピュータリテラシー授業の実践報告」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』6, 2002
- 御館久里恵 「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの諸相 ～非言語行動を含めた談話過程の観察から～」『日本学報』17, 1998
- 朝倉淳子 「日本語学習者の情報要求と教授者の応答プロセスの分析 —— Exchangeを単位として ——」『待兼山論叢』31, 1997

(2) 口頭発表

【口頭発表予稿集】

- 兩宮雄一 現代日本語における義務論理表現 —— 「して(も)いい」「しなければならない」をめぐる —— ・(発表要旨)・国語学会平成10年度春期大会発表要旨集・1998
- 呉 玆定 連体修飾語の語順の傾向・(発表要旨)・国語学会平成12年度秋期大会発表要旨集・2000
- 黄意ブン 現代日本語における「～タメ(ニ)」形式の意味・用法と使用実態・(発表要旨)・国語学会平成12年度春期大会発表要旨集・2000
- 小林英樹 使役と語形成・(発表要旨)・国語学会平成9年度春季大会要旨集・1997
- 山東 功 物集高見と下田歌子 —— 口語文法研究をめぐる —— ・(発表要旨)・国語学会平成11年度春期大会発表要旨集・1999
- 高田祥司 京阪方言における「～テオク」の用法 —— 西日本諸方言アспектとの関連 —— ・(発表要旨)・国語学会平成11年度春期大会発表要旨集・1999
- 高橋美奈子 措定文の一面 —— 主格名詞句がガでマークされる措定文について —— ・(発表要旨)・国語学会平成9年度春季大会予稿集・1997
- 丁 意祥 持ち主の受身の細分化をめぐる・(発表要旨)・国語学会平成9年度秋期大会発表要旨集・1997
- 本多真紀子 日本語の接続詞ソコデについて —— 発話行為理論の観点を軸に —— ・(発表要旨)・第119回言語学会発表要旨集・1999
- 宮崎和人 判断形成のモダリティ・(発表要旨)・国語学会平成12年度春季大会要旨集・2000
- 八亀裕美 日本語の形容詞のディスコース上の機能 —— Thompson1988に従って —— ・(発表要旨)・第123回言語学会発表要旨集・2001
- 余 健 移住先アクセントの受容・統合能力に関わる主要因間の相関性 —— 首都圏への移住者を対象として —— ・(発表要旨)・日本方言研究会第66回研究発表会発表予稿集・1998. 5
- 高木千恵 若年層の関西方言における否定辞の使用実態 —— カジュアルな場面での談話を資料として —— (発表要旨) 日本方言研究会第67回研究発表会発表予稿集・1998. 10
- 朝日祥之 方言接触場面における Linguistic-Accommodation —— イギリスに在住する日本人の場合 —— ・(発表要旨) 第3回社会言語科学会研究大会予稿集・1999. 1

- オストハイダ・テーヤ 対外国人言語行動の多様性——その研究上の問題点——・(発表要旨) 第3回
社会言語科学会研究大会予稿集・1999. 1
- 辻加代子 京都市方言話者(女性)の談話から見たハル敬語の枠組み・(発表要旨) 日本方言研究会第68
回研究発表会発表予稿集・1999. 5
- 船木礼子 方言助動詞「べー」の用法の変化——対照による推論——・(発表要旨) 日本方言研究会第
68回研究発表会発表予稿集・1999. 5
- 簡 月真 台湾における言語使用変化・(発表要旨) 第4回社会言語科学会研究大会予稿集・1999. 7
- 阿部貴人 方言話者の「標準語」の記述——青森県津軽方言話者を対象として——・(発表要旨) 日本
方言研究会第70回研究発表会発表予稿集・2000. 5
- 余 健 首都圏移住者の方言アクセント間における切り換え能力の推移——情報処理論的観点から——
・(発表要旨) 第7回社会言語科学会研究大会予稿集・2001. 3
- 朝日祥之 方言認知地図から見た言語意識の変遷——西神ニュータウン在住者の場合——・(発表要
旨) 日本方言研究会第72回研究発表会発表予稿集・2001. 5
- 武田佳子 大阪方言話者における音調の世代差——アクセントの世代的変化と句の音調——・(発表要
旨) 日本方言研究会第72回研究発表会発表予稿集・2001. 5
- 松丸真大 方言における動詞活用体系の変化過程——高知県幡多方言を事例として——・(発表要旨)
国語学会2001年度春季大会要旨集・2001. 5
- 金 美貞 韓国における接客敬語行動について・(発表要旨) 第9回社会言語科学会研究大会予稿集・
2002. 3
- 氏平 明 吃音者の声の特徴について・1997・第11回日本音声学会全国大会予稿集・日本音声学会
- 氏平 明 幼児の吃音の繰り返しの単位について・1997・第42回日本音声言語医学会総会・学術講演会
プログラム：予稿集 日本音声言語医学会・
- 江崎哲也 名詞一語文「CVCV?」と「CVCV。」のフォルマント周波数・2001・日本音声学会全国大会
予稿集・
- 江崎哲也 東京方言の名詞一語文——イントネーションはすなわち高さの変動か——・2001・日本語教
育学会秋季大会予稿集・
- 嵐 洋子 'Interim Report on Phonological Awareness to Learning to Write'・2001・第7回日英・英
語教育学会大会・
- 嵐 洋子 年少者の特殊拍表記の習得に関する研究～分節意識の観点から～・2001・第38回第二言語習得
研究会
- 朝倉淳子 「教師準備教育における内省能力育成の試み——ダイアリ・スタディによる検証——」(発
表要旨)『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』1999
- 永見昌紀 「発話産出時の問題処理に関わる心的操作標識—音声対話に見られる filled pause (FP) と問
題処理の認知状態の関連」(発表要旨)『日本認知科学会第17回大会口頭発表要旨』2000
- Nagami, M. 「Use of filled pause by learners of Japanese」ALAA2000, 2000.
- Nagami, M. 「Collaborative scaffolding and co-planing for professional development of second lan-
guage teacher educators.」(Burdelski, M., Maeda, R., Kamiyoshi, U. and Aoki, N. と共同
発表), The Second International Conference on Language Teacher Education, 2001.
- 御館久里恵 「接触場面における日本語母語話者のフォリナー・トークの諸相 ～非言語行動を含めた談話
過程の観察から～」(発表要旨)『平成9年度日本語教育学会秋季大会予稿集』1997

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況 ('97～'01年度)

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

計 2 名

<内訳> PD : 0名 DC : 2名 外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

計 1 名

<内訳> 学部: 0名 PD : 0名 DC : 1名

6. 専門分野出身の研究者数 ('97年度~'01年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 22 名

'97年度: 9名 '98年度: 4名 '99年度: 5名 '00年度: 1名 '01年度: 3名

1997年度

岩崎 卓 (D 中退) 光華女子大学文学部 講師
岡部 寛 (D 中退) 京都橘女子大学文学部 助教授
張 麟声 (D 修了) 立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋マネジメント学部 教授
丁 意祥 (D 中退) 朝鮮大学校外国語日本語科 講師
姜 錫祐 (D 修了) 韓国カソリック大学言語文化学部 助教授
池田英喜 (D 中退) 新潟大学留学生センター 助教授
石井容子 (M 修了) 別府大学留学生別科 講師
村上敬一 (D 中退) 神戸松蔭女子学院文学部 講師
東 和枝 (M 修了) 立命館大学法学部 (留学生担当) 講師

1998年度

高橋美奈子 (D 中退) 四天王寺国際仏教大学言語文化学部 講師
小林英樹 (D 中退) 群馬大学教育学部 講師
佐野由紀子 (D 中退) 群馬県立女子大学文学部 講師
西尾純二 (D 中退) 大阪府立大学総合科学部 講師

1999年度

前田理佳子 (D 中退) 大東文化大学外国語学部 講師
赤堀由紀子 (D 中退) 京都橘女子大学文学部 講師
氏平 明 (D 修了) 茨城大学留学生センター 教授
代田智恵子 (D 中退) 佐賀大学留学生センター 助教授
山東 功 (D 修了) 大阪女子大学人文社会学部 講師

2000年度

呉 ヒョンジョン (D 修了) 建国大学校師範大学日語教育科 助教授

7. 専門分野出身の高度職業人数（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業生で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 21 名

'97年度： 0名 '98年度： 2名 '99年度： 6名 '00年度6名 '01年度： 7名

<内訳>

技術職 3名 ジャーナリスト1名 アーティスト 1名

教職12名 その他 4名

8. 客員研究員等の受け入れ状況*

計 4 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況*

計 4 名

10. 刊行物

1989年度～ 『阪大日本語研究』（機関誌・年1回）定期刊行物

1994年度～ 『現代日本語研究』（機関誌・年1回）定期刊行物

1999年度～ 『阪大社会言語学研究ノート』（論文集・年1回）定期刊行物

2000年度～ 『日本語教育実習報告書』（その他・年1回）定期刊行物

1996年12月 『飛騨白川郷方言説話資料』逐次刊行物

2000年3月 『対馬巖原方言の実態』逐次刊行物

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1989～ 変異理論研究会（研究会）事務室

1980～ 土曜ことばの会（研究会）事務室

1998 デビット・リトル教授講演会（講演会）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1999～ 日本語教育実践を語る会

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

対国外的活動としては、各領域で積極的に外国人客員研究員の受け入れを行って来たが、当該期間の状況は次の通りである。

- ・夏菊芬・中国／中国政府
- ・楊詭人・中国／国際交流基金

- ・金美貞・大韓民国／私費
- ・Benedicte M.Irgens・ノルウェー／私費
- ・黄淑燕・台湾／交流協会
- ・任榮哲・大韓民国／ロータリー米山記念奨学金
- ・陳淑婉・台湾／語言訓練測驗中心公費・
- ・高正道・大韓民国／国際交流基金・
- ・曹大峰・中国／国際交流基金
- ・王際幸・中国／中国政府
- ・張韶岩・中国／中国政府
- ・張守祥・中国／私費・以上12件。

なお、受け入れ担当教官は、受け入れ期間修了後、適宜相手方の大学を訪問し研究会や講演会等に参加、必要に応じて助言などして研究交流活動の継続性を図る努力もしている。

また、これら対外活動の一環として、香港中文大学日本研究学系の「海外招聘学外評価委員」（1999～2001）、中国広州の広東外語外貿大学客員教授（2000～）等に就任し、当該大学のコースにおける教育・研究の運営に関して多角的に協力してきた。また、台湾、韓国等の諸大学には、本学の大学院を修了した教官も多いところから、現地でのフィールドワークその他の研究活動に際しては、積極的に協力してもらい、場合によっては、現地大学院生にも研究内容を紹介するなどの支援活動も行い、現地での研究者養成にも助力している。とくに、台湾は、現在、日本との間に正式な国交がないにも関わらず日本語の教育や研究が盛んであるところから、機会あるごとに、個々の大学以外にも、交流協会などの全台湾向け教員研修活動等に協力して来た。

外国人留学生受け入れも積極的に行い、学部生、研究留学生、博士前期課程、博士後期課程の留学生を合わせると次のようである。{数字は総数、（ ）内は、その内の国費留学生}平成9年：27名（6名）・平成10年：18名（5名）・平成11年：32名（5名）・平成12年：33名（8名）・平成13年30名（7名）。

なお、国費留学生には含まれていないが、総数の中には、台湾の交流協会の奨学金を得て留学する学生も含まれている。毎年、3～4名受け入れているが、これは、国費留学生に準じた留学生である。

また、オーストラリア国立大学やクイーンズランド大学と学術交流協定を結び、毎年、大学院生や学部生を交換留学生として派遣して来たが、前者は現在では、昇格して大阪大学全体のプログラムとなっている。

教育・研究活動の一環として、これまで国の内外におけるフィールド・ワークや実習を行ってきた。国外では台湾東海岸や離島及び韓国での日本語調査、東北地方北部や対馬など日本各地での調査活動を展開し、それらの活動の過程で「方言記述プロジェクト」および方言と中間言語を対象とする「スタイル・シフトプロジェクト」の2つを立ち上げ、それぞれ調査を行い、『阪大

社会言語学研究ノート』1号(1999年3月), 2号(2000年1月), 3号(2001年3月), 4号(2002年3月)としてまとめた。成果は, 学界でも一定の評価を得ている。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等(1997年度～2001年度の過去5年間)

1-1. 論文

- 工藤真由美 「否定文とディスコース」, 工藤真由美『ことばの科学』8号, むぎ書房, pp. 65～102, 1997年
- 工藤真由美 「否定の表現」, 工藤真由美『日本語の文法』, 岩波書店, pp. 95～153, 2000年
- 工藤真由美 「アスペクト・テンス」, 工藤真由美『現代日本語必携』, 学燈社, pp. 136～139, 2000年
- 工藤真由美 「アスペクト体系の生成と進化」, 工藤真由美『ことばの科学』10号, むぎ書房, pp. 118～173, 2001年
- 工藤真由美 「現象と本質」, 工藤真由美 日本語文法学会第2回大会発表論文集2巻1号, 日本語文法学会, pp. 20～29, 2001年
- 工藤真由美 「青森県五所川原方言の動詞のアスペクトとテンス」, 工藤真由美『国語学研究』38号, 東北大学文学部国語学研究室, pp. 93～102, 1998年
- 工藤真由美 「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」, 工藤真由美『現代日本語研究』6号, 大阪大学文学研究科日本語学講座, pp. 1～22, 1999年
- 工藤真由美 「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」, 工藤真由美『阪大日本語研究』11号, 大阪大学文学研究科日本語学講座, pp. 1～17, 1999年
- 工藤真由美 「八丈方言のアスペクト・テンス・ムード」, 工藤真由美『阪大日本語研究』12号, 大阪大学大学院日本語学講座, pp. 1～20, 2000年
- 工藤真由美 「アスペクト・テンス体系と極性」, 工藤真由美『現代日本語研究』7号, 大阪大学文学研究科日本語学講座, pp. 1～11, 2000年
- 工藤真由美 「西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐって」, 工藤真由美『日本語研究』18号, 東京都立大学, pp. 1～11, 1998年
- 工藤真由美 「反事実性の表現をめぐって」, 工藤真由美『横浜国立大学人文紀要』44号, 横浜国立大学教育学部, pp. 51～65, 1997年
- 工藤真由美 「否定と呼応する副詞をめぐって」, 工藤真由美『大阪大学文学部紀要』39号, 大阪大学文学部, pp. 69～107, 1999年
- 工藤真由美 「方言のムードについてのおぼえがき」, 工藤真由美『待兼山論叢』34号, 大阪大学文学部, pp. 1～14, 2000年
- 工藤真由美 「非動的述語のテンス」, 工藤真由美『国文学解釈と鑑賞』63号, 至文堂, pp. 66～81, 1998年
- 工藤真由美 「西日本諸方言と一般アスペクト論」, 工藤真由美『言語』27巻7号, 大修館書店, pp. 34～40, 1998年
- 工藤真由美 「テキスト言語学」, 工藤真由美『国文学解釈と鑑賞』63-7巻・号, 至文堂, pp. 36～43, 1998年
- 工藤真由美 「時間的限界点のタイプ」, 工藤真由美『日本語学』9月号, 明治書院, pp. 15～23, 1999年
- 工藤真由美 「アスペクト表現の地域差」, 工藤真由美『国文学解釈と鑑賞』65-1号, 至文堂, pp. 34～44, 2000年
- 工藤真由美 「彼は風邪くらいでは休まないよ——否定のスコープと焦点——」, 工藤真由美『言語』11月号, 大修館書店, pp. 38～44, 2000年
- 工藤真由美 「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査」, 工藤真由美『国文学解釈と鑑賞』Jan-64号, 至文堂, pp. 106～114, 1999年
- 真田信治 「音声の社会言語学」, 真田信治『諸方言のアクセントとイントネーション』, 三省堂, pp. 217

- ～224, 1997年
- 真田信治 「コスラエ語（ミクロネシア）における日本語からの伝播語の音的特徴」, 真田信治『日本語の歴史地理構造』明治書院, pp. 3～14, 1997年
- 真田信治 「社会言語学」, 真田信治『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 238～250, 1998年
- 真田信治 「方言の意識化とその実体」, 真田信治『ことばの二十世紀』, ドメス出版, pp. 180～193, 1999年
- 真田信治 「第一言語の習得」, 真田信治『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 168～175, 2000年
- 真田信治 「現代人にとっての理解不可能な語彙：『分類語彙表』収載語彙を母集団として」, 真田信治『日本語学と言語学』, 明治書院, pp. 136～143, 2001年
- 真田信治 「ボナベ語における日本語からの借用語の位相：ミクロネシアでの現地調査から」, 真田信治『国語論究9現代の位相研究』, 明治書院, pp. 33～57, 2001年
- 真田信治 「Characteristics of Japanese Loanword Vocabulary in Micronesian languages」, 『大阪大学文学部紀要』38号, 大阪大学, pp. 63～94, 1998年
- 真田信治 「標準語をめぐる諸問題：音声日本語の場合」, 真田信治『手話コミュニケーション研究』38号, 日本手話研究所, pp. 24～29, 2000年
- 真田信治 「話しことばの社会的多様性」, 真田信治『日本語学』5月号, 明治書院, pp. 104～109, 1997年
- 真田信治 「方言研究はどこまで来たか」, 真田信治『国文学』Jul-42号, 学燈社, pp. 28～32, 1997年
- 真田信治 「江戸語はいつ共通語になったか」, 真田信治『言語』Jan-02号, 大修館書店, pp. 42～47, 1998年
- 真田信治 「ネオ方言の実体」, 真田信治『日本語学』18-13号, 明治書院, pp. 46～51, 1999年
- 真田信治 「変容する大阪ことば」, 真田信治『言語』1月29日号, 大修館書店, pp. 49～53, 2000年
- 真田信治 「日本語論へのアプローチ：社会言語学」, 真田信治『現代日本語必携』学燈社, pp. 89～93, 2000年
- 真田信治 「方言分野での計量的研究概観」, 真田信治『日本語学』5月号, 明治書院, pp. 193～199, 2000年
- 真田信治 「Phonological characteristics of Japanese-derived borrowings in the Trukese of Micronesia」, 『日本語科学』1号, 国立国語研究所, pp. 53～66, 1997年
- 真田信治 「現代標準語の行方」, 真田信治『日本文化学報』9号, 韓国日本文化学会, pp. 5～11, 2000年
- 土岐 哲 「日本語とベトナム語」, 土岐 哲『新しい日本語研究を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 199～208, 1998年
- 土岐 哲 「縮約形に見られるリズム形式の変化」, 土岐 哲 平成13年度文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書「言語のリズムとTEMAX3」3, pp. 113～120, 2000年
- 土岐 哲 「ミクロネシア・チュークに見られる日本語音声」, 土岐 哲『日本語教育史論考』, 凡人社, pp. 195～206, 2000年
- 土岐 哲 「韓国語話者による日本語倒置疑問文のイントネーション」, 土岐哲/金秀芝, 『阪大日本語研究』7号, 大阪大学文学部日本語学講座, pp. 17～33, 1997年
- 土岐 哲 「アクセントの下げ, イントネーションの下げ」, 土岐 哲『阪大日本語研究』10号, 大阪大学文学部日本語学講座, pp. 53～66, 1998年
- 土岐 哲 「ミクロネシア・チュークの現日本語学習者による日本語音声」, 土岐 哲『阪大日本語研究』12号, 大阪大学文学部日本語学講座, pp. 21～31, 2000年
- 土岐 哲 「The Remnants of Japanese Phonology in the Micronesian Chuuk」, 『大阪大学文学部紀要』38号, 大阪大学文学部, pp. 25～48, 1998年
- 土岐 哲 「日本語の能力とは」, 土岐 哲『日本語学』18巻・5月臨時増刊号, 明治書院, pp. 158～

- 164, 1999年
- 土岐 哲 「日本語のスピーチ教育」, 土岐 哲 『日本語学』5月特集号, 明治書院, pp. 6~10, 2001年
- 土岐 哲 「TEMAXによる日本語リズムの研究と言語教育への応用」, 土岐 哲/鮎澤孝子(東京外国語大学)/北沢茂良(静岡大学)『音声研究』2巻1号, 日本音声学会, pp. 34~40, 1998年
- 土岐 哲 「青森県深浦方言の音声・音韻——四世代の横断的内部観察資料から——」, 土岐 哲『国文学研究』128号, 早稲田大学文学部, pp. 113~120, 1999年
- 渋谷勝己 「在日コリアン一世の日本語における動詞文」, 渋谷勝己/金 美善『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』, 科学研究費補助金研究成果報告書, pp. 180~193, 1999年
- 渋谷勝己 「フォーマルスタイルとインフォーマルスタイルのあいだ: 中間言語のスタイルの一側面」, 渋谷勝己『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』, 科学研究費補助金研究成果報告書, pp. 398~404, 1999年
- 渋谷勝己 「方言文法の現在」, 渋谷勝己『展望 現代の方言学』, 白帝社, pp. 81~99, 1999年
- 渋谷勝己 「同一文章の方言訳の可能性と限界」, 渋谷勝己『徳川宗賢先生追悼論文集 20世紀フィールド言語学の軌跡』, 変異理論研究会編, pp. 191~201, 2000年
- 渋谷勝己 「パラオに残存する日本語の実態—報告書・序章—」, 渋谷勝己『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』, 真田信治編/科学研究費成果報告書, pp. 285~302, 2001年
- 渋谷勝己 「中間言語」, 渋谷勝己『応用社会言語学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 184~192, 2001年
- 渋谷勝己 「中間言語における可能表現の諸相」, 渋谷勝己『阪大日本語研究』10号, 大阪大学文学部日本語学講座, pp. 67~81, 1998年
- 渋谷勝己 「山形市方言の文末詞ハ」, 渋谷勝己『阪大社会言語学研究ノート』1号, 大阪大学文学部日本語学講座社会言語学研究室, pp. 6~15, 1999年
- 渋谷勝己 「山形市方言の文末詞ズ」, 渋谷勝己『阪大社会言語学研究ノート』2号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 8~17, 2000年
- 渋谷勝己 「徳島県海部郡方言の可能表現」, 渋谷勝己『阪大社会言語学研究ノート』2号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 63~73, 2000年
- 渋谷勝己 「方言地理学と文法」, 渋谷勝己『阪大日本語研究』12号, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 33~47, 2000年
- 渋谷勝己 「山形市方言の丁寧語ス」, 渋谷勝己『阪大社会言語学研究ノート』3号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 49~60, 2001年
- 渋谷勝己 「山形市方言における確認要求表現とその周辺」, 渋谷勝己『阪大社会言語学研究ノート』3号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 20~32, 2001年
- 渋谷勝己 「山形市方言における談話マーカ「ホレ・ホリヤ;アレ・アリヤ」」, 渋谷勝己『阪大社会言語学研究ノート』4号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 131~142, 2002年
- 渋谷勝己 「Grammatical aspects of an interlanguage: the potential expressions of Yapanese Japanese」, 『大阪大学文学部紀要』38号, 大阪大学文学部, pp. 49~61, 1998年
- 渋谷勝己 「足で学ぶ言語研究: フィールド言語学」, 渋谷勝己『月刊言語』26巻5号, 大修館書店, pp. 32~37, 1997年
- 渋谷勝己 「社会言語学のキーテーマ1 社会言語学の課題」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻1号, 大修館書店, pp. 100~105, 1997年
- 渋谷勝己 「社会言語学のキーテーマ2 ことばのバリエーション」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻2号, 大修館書店, pp. 100~105, 1998年
- 渋谷勝己 「社会言語学のキーテーマ3 言語行動」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻3号, 大修館書店, pp. 114~119, 1998年
- 渋谷勝己 「社会言語学のキーテーマ4 言語接触」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻4号, 大修館書店, pp. 116~121, 1998年
- 渋谷勝己 「社会言語学のキーテーマ5 第二言語習得」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻5号, 大修館書店,

- pp. 114~119, 1998年
- 渋谷勝己 「社会言語学のキーテーマ6 言語計画」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻6号, 大修館書店, pp. 98~103, 1998年
- 渋谷勝己 「文法変化と方言：関西方言の可能表現をめぐって」, 渋谷勝己『月刊言語』27巻7号, 大修館書店, pp. 18~25, 1998年
- 渋谷勝己 「漱石のスタイルシフト」, 渋谷勝己 『待兼山論叢』日本学篇 Feb一号, 大阪大学文学会, pp. 1~16, 1998年
- 渋谷勝己 「国語審議会における国語の管理」, 渋谷勝己『社会言語科学』2巻1号, 社会言語科学会, pp. 5~14, 1999年
- 渋谷勝己 「文末詞「ケ」：三つの体系における対照研究」, 渋谷勝己『近代語研究』10巻, 武蔵野書院, pp. 205~230, 1999年
- 渋谷勝己 「徳川学の流れ：方言学から社会言語学へ」, 渋谷勝己 『社会言語科学』2巻2号, 社会言語科学会, pp. 2~10, 2000年
- 渋谷勝己 「副詞エの意味」, 渋谷勝己 『国語語彙史の研究』19号, 和泉書院, pp. 17~36, 2000年
- 青木直子 「Empowering future teachers: a humanistic approach to developing learner autonomy」, Fifth Nordic Conference of Developing Autonomous Learning in the Foreign Language Classroom, Danmarks Lærerhøjskole, pp. 46~53, 1997年
- 青木直子 「第二言語話者と第一言語話者とのやりとりにおける理解達成のプロセス」, 青木直子/他7名『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究, 文部省科学研究費補助金研究報告書』課題番号06301099, pp. 80~123, 1998年
- 青木直子 「Affect and the role of teachers in the development of learner autonomy」, Affect in Language Learning, Cambridge University Press, pp. 142~154, 1999年
- 青木直子 「Learner autonomy in cultural context: the case of Japan」, 『Learner Autonomy in Language Learning: Defining the Field and Effecting Change』Peter Lang, pp. 19~27, 1999年
- 青木直子 「教師の役割」, 青木直子 『日本語教育学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 184~199, 2001年
- 青木直子 「Examining definitions of learner autonomy」, 『阪大日本語研究』10号, 大阪大学文学部日本語学講座, pp. 129~148, 1998年
- 青木直子 「The institutional and psychological context of learner autonomy」, AILA Review15, pp. 82~90, 2001年
- 石井正彦 「Syntagmatic な臨時一語化：文章における先行表現の臨時一語化について」, 石井正彦『日本語の歴史地理構造』, 明治書院, pp. 278~292, 1997年
- 石井正彦 「複合動詞の語構造分類」, 石井正彦 『国語語彙史の研究 二十』, 和泉書院, pp. 59~71, 2001年
- 石井正彦 「語彙の調査」, 石井正彦 『日本語学』17巻10号, 明治書院, pp. 12~20, 1998年
- 石井正彦 「歌謡曲の聞き手はどんな単語を好むか」, 石井正彦 『表現研究』69号, 表現学会, pp. 35~44, 1999年
- 石井正彦 「情報処理研究とターミノロジーから見た『分類語彙表』：分類の体系と専門語の扱い」, 石井正彦/柏野和佳子(国立国語研究所)/中野洋(国立国語研究所)『情報知識学会誌』9巻4号, 情報知識学会, pp. 12~28, 2000年
- 木下りか 「カモシレナイ・ニチガイナイ：真偽判断のモダリティの体系における「可能性」」, 木下りか『ことばの科学』10号, 名古屋大学言語文化部, pp. 41~56, 1997年
- 木下りか 「真偽判断を表わす文末形式と「既定性」」, 木下りか 『ことばの科学』11号, 名古屋大学言語文化部, pp. 171~182, 1998年
- 木下りか 「ダロウの意味」, 木下りか 『阪大日本語研究』13号, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1~17, 2001年
- 木下りか 「ヨウダ・ラシイ：真偽判断のモダリティの体系における「推論」」, 木下りか『日本語教育』

- 96号, 日本語教育学会, pp. 154~165, 1998年
- 木下りか 「事態の隣接関係と様態のソウダ」, 木下りか『日本語文法』1号, 日本語文法学会, pp. 137~158, 2001年
- 吉村裕美 「現代日本語の形容詞述語文」, 八亀裕美『阪大日本語研究』別冊1号, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1~144, 2001年

1-2. 著書

- 工藤真由美 『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』, 単著 工藤真由美, ひつじ書房, 209p., 1999年
- 工藤真由美 『時・否定と取り立て』, 共著 金水敏/工藤真由美/沼田善子, 岩波書店, 230p., pp. 95~153, 2000年
- 工藤真由美 『方言におけるアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究——西日本編——』, 共著工藤真由美/木部暢子, 大阪大学文学研究科, 346p., 2000年
- 工藤真由美 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』, 単著 工藤真由美, 大阪大学文学研究科, 497p., 2001年
- 工藤真由美 『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』, 単著 工藤真由美, 大阪大学文学研究科, 466p., 2002年
- 真田信治 『諸方言のアクセントとイントネーション』, 共著 編者・真田信治/佐藤亮一(東京女子大学)/加藤正信(宮崎大学)/板橋秀一(筑波大学)/監修者・杉藤美代子, 三省堂, 296p., 1997年
- 真田信治 『富山県のことば』, 共編者・真田信治/平山輝男(国学院大学), 明治書院, 259p., 1998年
- 真田信治 『展望 現代の方言』, 共著 編者・真田信治, 白帝社, 252p., 1999年
- 真田信治 『百年前の越中方言』, 共著 真田信治, 桂書房, 223p., 2001年
- 真田信治 『脱・標準語の時代』, 単著 真田信治, 小学館, 222p., 2000年
- 真田信治 『標準語の成立事情』, 単著 真田信治, PHP 研究所, 224p., 2001年
- 真田信治 『方言は絶滅するのか: 自分のことばを失った日本人』, 共著 真田信治, PHP 研究所, 212p., 2001年
- 真田信治 『社会言語学図集: 日本語・英語解説』, 共編者・真田信治/Daniel Long(大阪樟蔭女子大学), 秋山書店, 200p., 1997年
- 真田信治 『よくわかる日本語史』, 単著 真田信治, アルク, 174p., 1999年
- 真田信治 『関西・ことばの動態』, 単著 真田信治, 大阪大学出版会, 86p., 2001年
- 真田信治 『九州におけるネオ方言の実態』, 共著 編者・真田信治, 大阪大学, 196p., 1998年
- 真田信治 『関西・若年層における談話データ集』, 共編者・真田信治, 大阪大学, 150p., 1999年
- 真田信治 『対馬厳原方言の実態』, 共著 編者・真田信治, 大阪大学, 107p., 2000年
- 真田信治 『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』, 共編者・真田信治, 大阪学院大学302p., 2001年
- 真田信治 『方言文法調査項目リスト: 天草篇』, 共編者・真田信治, 大阪学院大学, 146p., 2001年
- 土岐 哲 『日本語教育学を学ぶ人のために』, 共著 土岐 哲/青木直子/尾崎明人(名古屋大学), 世界思想社, 252p., 2001年
- 土岐 哲 『日本語中級 J301』, 共著 土岐 哲/関 正昭(鹿児島女子大学)/平高史也(慶応義塾大学)/新内康子(鹿児島女子大学)/鶴尾能子(海外技術者研修協会), スリーエーネットワーク, 223p., pp. 25-36, 1007年
- 土岐 哲 『日本語中級 J501』, 共著 土岐 哲/関 正昭(志學館大学)/平高史也(慶応義塾大学)/新内康子(志學館大学)/石沢弘子(海外技術者研修協会), スリーエーネットワーク, 187p., pp. 167-184, 1999年
- 青木直子 『日本語教育学を学ぶ人のために』, 共著 青木直子/尾崎明人/土岐 哲/編者, 世界思想社, 252p., 2001年

- 石井正彦 『語構成（日本語研究資料集第1期第13巻）』, 共著 斎藤倫明（東北大学）／石井正彦, ひつじ書房, 354p., 1997年
- 石井正彦 『テレビ放送の語彙調査Ⅲ——計量的分析——』, 共著 中野 洋（国立国語研究所）／石井正彦／山崎 誠（国立国語研究所）／大島資生（東京大学）／小沼 悦（国立国語研究所）, 大日本図書, 222p., pp. 7-11/76-106/164-217, 1999年
- 吉村裕美 『高等学校の国語教科書は何を扱っているのか。』, 共著 中河督裕（四条畷高校）／吉村裕美, 京都書房, 205p., 2001年

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳

- 真田信治 「台湾における言語衝突史年表」, 共著 真田信治／簡月真, 『阪大日本語研究』, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, 11号, pp. 91-126, 1999
- 真田信治 「台湾における日本語普及計画」, 共著 真田信治／簡月真, 『阪大日本語研究』, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, 12号, pp. 71-82, 2000

(2) 書評

- 石井正彦 『A. K. Melby, with C.T. Warner. The Possibility of Language』, 単著 Masahiko Ishii, Terminology, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 4巻1号,

(3) 解説

- 工藤真由美 「多文化教育と日本語教育」, 工藤真由美, 『海外子女教育』, 横浜国立大学附属中学校, 36号, pp. 56-71, 1997
- 工藤真由美 『にほんごだいすき; おしえかたガイド2』, 共著 工藤真由美／鈴木重幸, むぎ書房, p. 200, 1998
- 工藤真由美 『にほんごだいすき——れんごのほん——』, 共著 鈴木重幸／工藤真由美, むぎ書房, p. 120, 1998
- 土岐 哲 「日本語の音, 音と意味」, 土岐 哲, 『日本語学のみかた』, 朝日新聞社, pp. 10-11, 1997
- 青木直子 「談話分析」, 青木直子, 『日本語学のみかた』, 朝日新聞社, pp. 24-25, 1997
- 石井正彦 「〈国語学〉近代・現代(文章・文体)」, 石井正彦, 『文学・語学』, 全国大学国語国文学会, 161号, pp. 84-85, 1998

(4) その他 (エッセー, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 工藤真由美 『日本語ワンポイントレッスン』, 単・共著 工藤真由美, NHK 国際放送, NHK, pp. 30項目, 1997
- 青木直子 「On becoming a pro-autonomy teacher」, 共著 Hoaian Nguyen (University of Cambridge Local Examination Syndicate)／Naoko Aoki, The Language Teacher, The Japan Association of Language Teaching, 25/6, pp. 28-29, 2001
- 吉村裕美 「非動的述語の「継続相相当形式」——青森五所川原方言の場合——」, 八亀裕美, 『国語学』, 国語学会, 53-1号, pp. 131-132, 2002
- 吉村裕美 「大阪を舞台とする小説による調査について」, 八亀裕美, 方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究, 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 NO.1, pp. 339-343, 2002

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 工藤真由美 「日本語学と日本語教育との関係」, 単独 工藤真由美, 韓国日本学会, 21世紀総合的日本語教育のための語学・文学・文化・メディア活用のあり方, 国際会議室/同徳女子大学, 2000/11/25-26
- 工藤真由美 「アスペクト体系の生成と変容過程」, 単独 工藤真由美, 日本語文法シンポジウム」, 国際センター/北京大学, 2000/10/14-15
- 工藤真由美 「現代日本語の時間表現」, 単独 工藤真由美, 台湾日語教育学会, 21世紀の日本研究国際会議, 台湾大学/台北市, 2001/11/10-11
- 工藤真由美 「現代日本語のダイクシス」, 単独, 工藤真由美, *Intercultural Studies and Linguistics*, チュービンゲン大学/ドイツ2001/6/16
- 土岐 哲 「漢字圏日本語学習者の自信と不安」, 単独 土岐 哲, 香港日本語教育学会, 第5回日本研究・日本語教育国際シンポジウム, 香港中文大学キャンパス/香港, 2000/11/25
- 土岐 哲 「世界の日本語教育: ひろがる各国日本語教師の活動と連携」, 共同 土岐哲(司会)/李徳奉(同徳女子大学:韓国)/ワワン・ダナサスミタ(インドネシア教育大学)/田中和美(ロンドン大学), 海外日本語教師会・関西セミナー, 国際交流基金関西国際センターホール/大阪府田尻町, 2001/11/30
- 青木直子 「The affective dimension of learner autonomy: the role of reflection」, 共同 Naoko Aoki / Ema Ushioda (Trinity College, Dublin), The 6th Conference on Developing Autonomous Learning, バルセロナ大学/バルセロナ, 1997/9/1
- 青木直子 「Doing and feeling autonomy」, 単独 Naoko Aoki, The 23rd Annual International Conference of The Japan Association for Language Teaching, アクトシティ/静岡県浜松市, 1997/11/22
- 青木直子 「Looking around: the institutional and psychological context of learner autonomy」 単独 Naoko Aoki, The 12th World Congress of International Association of Applied Linguistics, 早稲田大学/東京, 1999/8/2
- 青木直子 「Aspects of teacher autonomy: capacity, freedom, and responsibility」, 単独 Naoko Aoki, LT 2000: Quality Language Teaching through Innovation and Reflection, 香港科学技術大学/香港, 2000/6/19
- 青木直子 「An alternative way for teacher development」, 単独 Naoko Aoki, The Japan Association for Language Teaching, The 27th Annual International Conference, 北九州国際会議場/福岡県小倉市, 2001/11/24
- 青木直子 「Shaping an identity as teacher educator」, 単独 Naoko Aoki, The Japan Association for Language Teaching, The 27th Annual International Conference, 北九州国際会議場/福岡県小倉市, 2001/11/25
- 青木直子 「Towards teacher autonomy through writing: your story of learner autonomy」, 共同 Hoaian Nguyen (Univeristy of Cambridge Local Examination Syndicate) / Naoko Aoki, The 27th Annual International Conference, 北九州国際会議場/福岡県小倉市, 2001/11/23
- 青木直子 「Collaborative scaffolding and co-planning for professional development of second language teacher educators」, 共同 Mathew Burdelski (UCLA) / Masanori Nagami / Rikako Maeda / Uichi Kamiyoshi / Naoko Aoki, The Second International Conference on Language Teacher Education, ミネソタ大学/ミネソタ, 2001/5/19

(2) 国内学会

- 工藤真由美 「文法化とアスペクト・テンス」, 単独 工藤真由美, 関西言語学会, 奈良女子大学/奈良市, 1998/11/21

- 工藤真由美 「日本語の文法（上級）」, 単独 工藤真由美, 日本言語学会, 日本言語学会夏季講座, 大学セミナーハウス/八王子市, 2000/8/21-26
- 土岐 哲 「日本語音声教育の現状と展望」, 単独 土岐 哲, 日本語教育学会, 研究集会, エール日本語学院大教室/大阪市, 2001/3/10
- 石井正彦 「「はやり」にかかわる言語的特徴を探る」, 単独 石井正彦, 表現学会, 第35回表現学会全国大会, 大妻女子大学/東京都千代田区, 1998/6/7
- 石井正彦 「臨時一語発生の一要因: 「~」連続の回避」, 単独 石井正彦, 計量国語学会, 計量国語学会第42回大会, 国立国語研究所/東京都北区, 1998/9/26
- 吉村裕美 「日本語の形容詞のディスコース上の機能——Thompson1988に従って——」, 単独 八亀裕美, 日本言語学会, 九州大学/福岡県福岡市, 2001/11/18

(3) 研究会

- 工藤真由美 「現代日本語の文法的カテゴリー」, 単独 工藤真由美, 言語学セミナー, リヨン第3大学/リヨン, 1997/6/21
- 工藤真由美 「現代日本語の否定対極表現をめぐって」, 単独 工藤真由美, 日本語文法研究会, 遼寧師範大学/大連, 1998/5/23
- 工藤真由美 「現代日本語の過去形のモーダルな用法について」, 単独 工藤真由美, 言語学研究会, 国立東洋言語文化研究所/パリ, 2000/6/11
- 工藤真由美 「時間的限定性について」, 単独 工藤真由美, 東西言語文化の類型論プロジェクト, 筑波大学/つくば市, 2002/2/28
- 工藤真由美 「テンスとムード」, 単独 工藤真由美, 言語学研究会, 北京国際日本学研究中心/北京市, 2001/10/11
- 工藤真由美 「現代日本語の否定表現」, 単独 工藤真由美, チュービンゲン大学日本文化研究所/チュービンゲン, 2001/6/20
- 土岐 哲 「日本語音声の研究とその応用」, 単独 土岐 哲, 香港日本語教育学会, 香港中文大学日本研究学系/香港市, 1998/7/15
- 土岐 哲 「音声の受容と産出」, 単独 土岐 哲, ドイツ語圏日本語教師研究会, ドイツ国立教員研修館/ポツパート市, 2000/11/15-17
- 土岐 哲 「聴解の教育を巡って」, 単独 土岐 哲, 中国広州市日本語教育研究会, 中国, 2001/3/30
- 石井正彦 「阪倉篤義氏の『語構成論』から学ぶべきもの」, 単独 石井正彦, 語彙・辞書研究会, 第12回研究発表会, 三省堂文化会館/東京都新宿区, 1997/11/29

(4) 自治体等での講演会等

- 工藤真由美 「日本語指導教材について」, 単独 工藤真由美, 文部省教育助成局, 外国人子女等日本語指導講習会, 国立オリンピック記念青少年総合センター/東京都, 1998/8/6
- 工藤真由美 「日本語指導」, 単独 工藤真由美, 神戸市教育委員会, 日本語指導講座, 神戸市総合教育センター/神戸市, 1999/8/4
- 工藤真由美 「述語の構造」, 単独 工藤真由美, 関西地区日本語指導者研究会, 豊崎中学校/大阪市, 2001/9/22
- 土岐 哲 「韓国語話者の日本語音声教育」, 単独 土岐 哲, 国際交流基金ソウル日本語センター/ソウル市/釜山 YMCA/釜山市, 1997/7/11-14

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成9年度	基盤研究(A)(1)	7301047	西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究	真田信治	2,300,000円
平成9年度	特定領域研究(A)(1)	12039104	消滅に瀕した日本語方言に関する総合的研究	真田信治	400,000円
平成9年度	萌芽的研究	9871067	関西圏における「ネオ」方言談話の収集	真田信治	1,000,000円
平成10年度	萌芽的研究	9871067	関西圏における「ネオ」方言談話の収集	真田信治	4,800,000円
平成11年度	基盤研究(B)(1)	11410110	方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究	工藤真由美	8,600円
平成12年度	基盤研究(B)(1)	11410110	方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究	工藤真由美	6,100,000円
平成12年度	特定領域研究(A)(2)	12039224	消滅する方言文法・表現法の緊急調査研究	真田信治	3,400,000円
平成12年度	特定領域研究(A)(2)	12039225	環太平洋地域に残存する日本語の調査研究	渋谷勝己	3,600,000円
平成13年度	基盤研究(B)(1)	13410124	方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究	工藤真由美	5,400,000円
平成13年度	基盤研究(C)(2)	13680357	接触会話における在日外国人の日本語習得に影響を及ぼす心理的・社会的要因の研究	青木直子	2,600,000円
平成13年度	特定領域研究(A)(1)	12039104	消滅に瀕した日本語方言に関する総合的研究	真田信治	2,300,000円
平成13年度	特定領域研究(A)(2)	12039224	消滅する方言文法・表現法の緊急調査研究	真田信治	2,900,000円
平成13年度	特定領域研究(A)(2)	12039225	環太平洋地域に残存する日本語の調査研究	渋谷勝己	3,300,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

真田信治：

- ・NPO 法人日本話しことば協会・理事・2002年4月～2004年3月
- ・新村出記念財団・評議員・2002年7月～2005年7月
- ・国語学会・評議員・1997年4月～2003年3月

- ・ 日本方言研究会・世話人・2002年4月－2008年3月
- ・ 日本語教育学会・学会誌委員会委員・2001年7月－2003年6月
- ・ 社会言語科学会・学会誌編集委員・2000年8月－2003年7月

工藤真由美：

- ・ 国語学会・評議員・1997年4月－
- ・ 日本語文法学会・評議員・2000年12月－
- ・ 日本語文法学会・学会誌委員・2000年12月－

土岐 哲：

- ・ 日本音声学会・評議員・1992年4月－
- ・ 日本音声学会・編集委員・1992年4月－2001年3月（4期）
- ・ 言語文化教育学会・理事・2000年5月－
- ・ 社会言語科学会・学会誌編集委員・1998年1月－
- ・ 日本語教育学会・常任理事／学会誌委員会委員長・1999年6月－2001年6月

渋谷勝己：

- ・ 社会言語科学会・学会誌編集委員・1998年1月－2003年7月（2期）
- ・ 日本言語学会・編集委員・2000年4月－2003年3月
- ・ 日本語文法学会・学会誌委員・2000年12月－2004年3月

石井正彦：

- ・ 計量国語学会・編集委員・1997年4月－1999年3月
- ・ 国語学会・編集委員／大会運営委員・1998年7月－2001年6月
- ・ 情報知識学会・編集委員・2000年7月－現在

青木直子：

- ・ 日本語教育学会・評議員・1995年4月－2001年3月

【VI. 教員の教育活動】（2002年度）

1. 大学院授業担当

真田 信治 教授

- 1 学期 社会言語学講義 日本語の変遷と変異Ⅰ
- 2 学期 社会言語学講義 日本語の変遷と変異Ⅱ
- 1 学期 社会言語学博士論文作成演習 社会言語学の諸問題Ⅰ
- 2 学期 社会言語学博士論文作成演習 社会言語学の諸問題Ⅱ
- 1 学期 方言学特殊演習 フィールドワークⅠ
- 2 学期 方言学特殊演習 フィールドワークⅡ
- 1 学期 社会言語学演習 社会言語学の実践Ⅰ
- 2 学期 社会言語学演習 社会言語学の実践Ⅱ

土岐 哲 教授

- 1 学期 日本語教育学講義 音声の教育と研究Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学講義 音声の教育と研究Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学演習 日本語音声教育に関する調査研究Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学演習 日本語音声教育に関する調査研究Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学特殊演習 日本語音声教育に関する調査研究Ⅰ

- 2 学期 日本語教育学特殊演習 日本語音声教育に関する調査研究Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学演習 日本語音声の文献研究
- 2 学期 日本語教育学演習 日本語音声の文献研究
- 1 学期 日本語教育学修士論文作成演習 日本語教育学研究（論文の個人指導）Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学修士論文作成演習 日本語教育学研究（論文の個人指導）Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学特殊講義音声の教育と研究Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学特殊講義音声の教育と研究Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学特殊演習 日本語音声の文献研究Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学特殊演習 日本語音声の文献研究Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学博士論文作成演習 日本語教育学研究Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学博士論文作成演習 日本語教育学研究Ⅱ

工藤真由美 教授

- 1 学期 現代日本語学修工論文作成演習 現代日本語の諸問題Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学修工論文作成演習 現代日本語の諸問題Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学博士論文作成演習 現代日本語学研究Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学博士論文作成演習 現代日本語学研究Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学特殊講義 現代日本語文法論概説
- 2 学期 現代日本語学特殊講義 現代日本語文法論の諸問題
- 1 学期 現代日本語学講義 現代日本語文法論概説
- 2 学期 現代日本語学講義 現代日本語文法論の諸問題
- 2 学期 現代日本語学特殊演習 文法論・ディスコース論関連文献の研究
- 1 学期 現代日本語学演習 文法論・ディスコース論の研究
- 2 学期 現代日本語学演習 文法論・ディスコース論関連文献の研究

渋谷 勝己 助教授

- 1 学期 社会言語学演習 社会言語学の諸問題
- 1 学期 社会言語学講義 社会言語学概説Ⅰ
- 2 学期 社会言語学講義 社会言語学概説Ⅱ
- 1 学期 社会言語学修士論文作成演習 社会言語学の諸問題Ⅰ
- 2 学期 社会言語学修士論文作成演習 社会言語学の諸問題Ⅱ
- 1 学期 社会言語学演習 言語接触の諸問題Ⅰ
- 2 学期 社会言語学演習 言語接触の諸問題Ⅱ
- 1 学期 社会言語学特殊演習 接触言語学の諸問題Ⅰ
- 2 学期 社会言語学特殊演習 接触言語学の諸問題Ⅱ

石井 正彦 助教授

- 1 学期 現代日本語学修士論文作成演習 現代日本語の諸問題Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学修士論文作成演習 現代日本語の諸問題Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学特殊講義 現代日本語語彙論の諸問題Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学特殊講義 現代日本語語彙論の諸問題Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学博士論文作成演習 現代日本語学研究Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学博士論文作成演習 現代日本語学研究Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学特殊演習 現代日本語の諸問題Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学特殊演習 現代日本語の諸問題Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学特殊演習 コーパスを用いた日本語研究Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学特殊演習 コーパスを用いた日本語研究Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学講義 現代日本語語彙論の諸問題Ⅰ

- 2 学期 現代日本語学講義 現代日本語語彙論の諸問題Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学演習 現代日本語の諸問題Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学演習 現代日本語の諸問題Ⅱ
- 1 学期 現代日本語学演習 コーパスを用いた日本語研究Ⅰ
- 2 学期 現代日本語学演習 コーパスを用いた日本語研究Ⅱ

青木 直子 助教授

- 1 学期 日本語教育学演習 日本語の学習と教育
- 1 学期 日本語教育学演習 日本語教育研究方法論の再検討
- 2 学期 日本語教育学演習 日本語教育の教授方法論
- 2 学期 日本語教育学演習 日本語教育の教授法
- 2 学期 日本語教育学演習 第二言語教育の質的研究方法演習
- 2 学期 日本語教育学特殊演習 日本語教育の教授方法論
- 1 学期 日本語教育学特殊演習 日本語教育研究方法論の再検討
- 2 学期 日本語教育学特殊演習 第二言語教育の質的研究方法演習
- 1 学期 日本語教育学演習 日本語教育実習Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学演習 日本語教育実習Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学演習 日本語教育学論文作成演習Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学演習 日本語教育学論文作成演習Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学特殊演習 日本語教師養成の方法論Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学特殊演習 日本語教師養成の方法論Ⅱ
- 1 学期 日本語教育学博士論文 作成演習日本語教育学博士論文作成演習Ⅰ
- 2 学期 日本語教育学博士論文 作成演習日本語教育学博士論文作成演習Ⅱ

木下 りか 講師

- 1 学期 日本語学講義 現代日本語の意味論
- 2 学期 日本語学演習 現代日本語の意味分析
- 1 学期 日本語学演習 論文作成法Ⅰ
- 2 学期 日本語学演習 論文作成法Ⅱ
- 1 学期 日本語学演習 日本語表現Ⅰ
- 2 学期 日本語学演習 日本語表現Ⅱ

斎藤 倫明 講師

- 1 学期 現代日本語学特殊講義 義語構成と語彙的意味
- 1 学期 現代日本語学講義 語構成と語彙的意味

田野村 忠温 講師

- 2 学期 現代日本語学特殊講義 電子資料と日本語研究
- 2 学期 現代日本語学講義 電子資料と日本語研究

木村 英樹 講師

- 1 学期 対照言語学特殊講義 中国語の「文法化」と「カテゴリ化」について—日本語との対照を兼ねて
- 1 学期 対照言語学講義 中国語の「文法化」と「カテゴリ化」について—日本語との対照を兼ねて

中井幸比古 講師

- 1 学期 方言学講義 日本語アクセント概説
- 1 学期 方言学特殊講義 日本語アクセント概説中

高橋 顕志 講師

1 学期 言学特殊講義 言語地理学の手法と理論

1 学期 方言学講義 言語地理学の手法と理論

郡 史郎 講師

2 学期 日本語教育学講義 話しことばの多様性とその音声的特徴

2 学期 日本語教育学特殊講義 話しことばの多様性とその音声的特長

庄司 博史 講師

2 学期 日本語教育学講義 マイノリティー言語と言語政策

2 学期 日本語教育学特殊講義 マイノリティー言語と言語政策

2. 学部授業担当

真田 信治 教授

1 学期 社会言語学演習 社会言語学の諸問題 (渋谷助教授と共同)

1 学期 社会言語学演習 社会言語学の実践 I

2 学期 社会言語学演習 社会言語学の実践 II

1 学期 社会言語学講義 日本語の変遷と変異 I

2 学期 社会言語学講義 日本語の変遷と変異 II

土岐 哲 教授

1 学期 応用日本語学講義 日本語音声の教育と研究 1

2 学期 応用日本語学講義 日本語音声の教育と研究 2

1 学期 応用日本語学演習 日本語音声研究とその応用についての方法論 I

2 学期 応用日本語学演習 日本語音声研究とその応用についての方法論 II

1 学期 応用日本語学演習 日本語音声関連文献の研究 I

2 学期 応用日本語学演習 日本語音声関連文献の研究 II

工藤真由美 教授

1 学期 現代日本語学講義 現代日本語文法論概説

2 学期 現代日本語学講義 現代日本語文法論の諸問題

1 学期 現代日本語学演習 文法論・ディスコース論の研究

2 学期 現代日本語学演習 文法論・ディスコース論関連文献の研究

渋谷 勝己 助教授

1 学期 社会言語学講義 社会言語学 I

2 学期 社会言語学講義 社会言語学 II

1 学期 社会言語学演習 バリエーション研究の方法

石井 正彦 助教授

1 学期 現代日本語学講義 現代日本語語彙論の諸問題 I

2 学期 現代日本語学講義 現代日本語語彙論の諸問題 II

1 学期 現代日本語学演習 コーパスを用いた日本語研究 I

2 学期 現代日本語学演習 コーパスを用いた日本語研究 II

青木 直子 助教授

1 学期 応用日本語学演習 日本語の学習と教育

- 1 学期 応用日本語学演習 日本語教育研究方法論の再検討
- 2 学期 応用日本語学演習 日本語教育の教授方法論
- 2 学期 応用日本語学演習 日本語教育の教授法
- 2 学期 応用日本語学演習 第二言語教育の質的研究方法演習
- 1 学期 応用日本語学演習 日本語教育実習Ⅰ
- 2 学期 応用日本語学演習 日本語教育実習Ⅱ
- 1 学期 応用日本語学演習 日本語教育学論文作成演習Ⅰ
- 2 学期 応用日本語学演習 日本語教育学論文作成演習Ⅱ

木下 りか 講師

- 1 学期 日本語学基礎講義 現代日本語の意味論
- 2 学期 日本語学基礎演習 現代日本語の意味分析
- 1 学期 日本語学基礎演習 論文作成法Ⅰ
- 2 学期 日本語学基礎演習 論文作成法Ⅱ
- 1 学期 日本語学基礎演習 日本語表現Ⅰ
- 2 学期 日本語学基礎演習 日本語表現Ⅱ

斎藤 倫明 講師

- 1 学期 現代日本語学講義 語構成と語彙の意味

田野村忠温 講師

- 2 学期 現代日本語学講義 電子資料と日本語研究

木村 英樹 講師

- 1 学期 対照言語学講義 中国語の「文法化」と「カテゴリ化」について－日本語との対照を兼ねて

中井幸比古 講師

- 1 学期 社会言語学講義 日本語アクセント概説

高橋 顕志 講師

- 1 学期 社会言語学講義 言語地理学的手法と理論

郡 史郎 講師

- 2 学期 応用日本語学講義 話しことばの多様性とその音声的特徴

庄司 博史 講師

- 2 学期 応用日本語学講義 マイノリティー言語と言語政策

3. 共通教育授業担当

土岐 哲 教授

- Ⅱセメスター 特別科目 ことばの研究最前線
- Ⅰセメスター 専門基礎 日本語学基礎

真田信治 教授

- Ⅱセメスター 特別科目 ことばの研究最前線
- Ⅰセメスター 専門基礎 日本語学基礎

工藤真由美 教授

- Ⅱセメスター 特別科目 ことばの研究最前線

I セメスター	専門基礎	日本語学基礎
渋谷勝己 助教授		
II セメスター	特別科目	ことばの研究最前線
I セメスター	専門基礎	日本語学基礎
青木直子 助教授		
II セメスター	特別科目	ことばの研究最前線

4. 他大学における集中講義等

工藤真由美	東京大学大学院総合文化研究科	H13. 4. 1～H14. 3. 31	集中
土岐 哲	鳴門教育大学大学院学校教育研究科	H11. 4. 1～H12. 3. 31	集中
土岐 哲	北海道大学大学院文学研究科	H12. 4. 1～H13. 3. 31	集中
土岐 哲	横浜国立大学教育人間科学部大学院	H12. 4. 1～H13. 3. 31	集中
渋谷勝己	京都大学大学院文学研究科	H11. 4. 1～H12. 3. 31	各週
	京都大学大学院文学研究科	H10. 4. 1～H11. 3. 31	各週

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：杉戸清樹（独立行政法人国立国語研究所 日本語教育部門長）

1. 全体的な意見：当該分野の開拓と展開の持続を高く評価します。

評価対象である専門分野「日本語学」は、近年および現在、人文科学の中での一分野として、きわめて活発な状況を呈しています。このことは、明治以降、おおむね1970年代までの永い間、「国語学」の名称のもとに展開・継続された調査研究が、近年「日本語学」という名称のもとに拡大・再編制されつつあることを想起して言っています。日本語の国際化、海外での日本語学習需要の増大、関連諸分野との学際的研究の深化などを契機とした、新たな専門分野の創成がこの分野で今も継続中です。

こうした状況の中で、大阪大学の当該学科及び大学院研究科が、当初から、その動きの最先端を切り拓く役割を担われ、現在もその位置と役割を持続されていることを高く評価いたします。具体的には、現代日本語の多様な実態に迫る問題意識と方法による研究と教育、日本語を母語としない人への日本語教育の理論的・実践的な研究と指導などにおいて、それぞれに着実かつ見通しの効いた実績を厚く蓄積されていると評価するからです。換言すれば、研究・教育の「先見性・独自性」「持続性」が充分によく実現されているということになります。

2. 個別的な意見①：研究教育における「実証性」の実現を評価します。

現代日本語の現実の姿についての文法論・語彙論、地域言語（方言）の実態や動態についての社会言語学的研究、非母語話者への日本語教育についての研究と実践など、この専門分野の研究課題に共通してもっとも不可欠な要件はその「実証性」だと考えます。

所属される教官各位はそれぞれに、関連学界においてこの点での実績と評価を蓄積されているところですが、今回の評価用資料のうち特に大学院生の論文課題や研究業績一覧において、教育指導の面でも、そうした「実証性」を旨とした成果が挙げられていることをあらためて知るに及

びました。

3. 個別的な意見②：調査研究の「組織化」の実現を評価します。

前項の「実証性」を実現するためには、調査研究をさまざまな意味で「組織化」して行う必要があります。これは、大学講座の内部に止まらず、学部・研究科や大学の枠を超え、さらには国の内外にわたる広範な研究組織によって可能になることがらです。

この点で、文部科学省科学研究費をはじめとする競争的外部資金を旺盛に獲得されていること、とりわけ、それによって、人文科学領域では多いといえない比較的大規模な調査研究を、その研究組織の中心に立って推進された事例が多いことを評価するものです。

また、そうした調査研究の進む過程が、関係する大学院生の指導やその研究実績の蓄積に有効であることを、評価用資料によりあらためて確認しました。海外からの留学生も含めて、そのような機会が組織的・有機的に生かされていることが資料には明らかです。

4. 個別的な意見③：研究の「体系性」と教官組織のまとまりについて（評価と意見）

教官各位の研究が、そのつど個別的・具体的な課題を焦点としながらも、より全体的・体系的な枠組みを強く意識した骨組みの太いものであることについては、この点でもすでに関連学界で定評のあるところだと理解しています。文法論、語彙論、社会言語学、日本語教育研究等の各領域の中で、幅広い範囲を覆う射程の長い問題意識に基づいた調査研究が蓄積されていることは、今回の一覧資料からも明瞭だと思われます。この意味での調査研究の「体系性」は、管見の限りの諸大学講座の教官と比較するとしても、特記してよいものと評価いたします。

一方、このことを別の視点から見た場合、以下のような希望が湧いてきます。

別の視点とは、教官組織全体として、つまり教官各位の専門領域の集合体として、講座の研究及び指導の「体系性」を見る視点です。その視点からは、端的に言えば、組織全体として現代日本語をより有機的に扱うことを可能にするような研究体制や、これに基づく教育指導体制が期待されるのです。

もちろん、他に比べて少なくないとは言え限られた人数の教官組織で、現代日本語を総体的・網羅的に扱うことは望むべくもないことです。しかし、仮に例えば、「方言も含めた日常の話し言葉における文法・語彙の事象についての実態把握とその知見の日本語教育への実践的応用」というような枠組みを構成して、教官各位の専門が有機的に交差するような共同研究を行うことは大なり小なり可能ではないでしょうか。隣接講座の教官も含めた、教官組織全体の研究活動の一つの「体系性」を追求することは、研究・教育の両面で講座としての一体性を実現し、外部に向けてこれを表現するための試みとして有意義なものであらうと考えます。

5. 個別的な意見④：調査研究の成果情報の組織的な蓄積と公開供用を期待します。

教官及び大学院生の皆さんによる各種の調査研究から、様々な知見や情報が論文・著書・口頭発表などの形で公表されているのですが、この点での更なる希望を記します。

それは、調査研究から得られた情報（データ）をできるだけ素材段階の形で組織的に蓄積すること、またそれらを、講座の内部構成員間に、さらには講座外部にも、公開し供用する体制をつくることです。

このことには二つの意義があるように思われます。第一に、調査研究の成果発表を当事者による限られた数の報告や論文だけで終わらせることなく、他の研究者による再活用の道を開き得る点です。第二に、専門分野（講座）の研究を各教官の世代交代を超えた継続的・持続的なものとなし得る点です。このことは、成果情報をそのつどの視点から分析してしまった論文だけでは困難な場合が多いと思われます。データをできるだけ素材の段階できちんと蓄積し、再分析に供する用意が不可欠です。

電子的な機器や媒体が充実しつつある現在、これまでは望むべくもなかった研究情報の蓄積と供用が、大学の研究組織でも積極的に検討されてよいと考えます。

6. 個別的な意見⑤：研究成果の一般への普及、及び初等中等教育への貢献を期待します。最後に、評価用資料を拝見して気付いた点を、二つの期待として記します。

一つは、研究成果の一般市民への普及ということです。このことは大学の基本的な任務をどう捉えるかに関わることで、ここで軽々に言及することには慎重でありたいと思うのですが、少なくとも評価用資料を見る限り、「エッセイ・新聞記事」「自治体等での講演会等」の項目への記載が少ないことが気になりました。「著書」の項目に一般向け著作が相当数かぞえられることは承知しつつ、それ以外の姿や機会においても、一般市民への成果普及活動が展開されることを期待します。この期待は、一般論としてではなく、現代日本語という市民生活に密着した事象を専門対象とする講座であることゆえの期待です。

もう一つは、初等中等教育の教員として巣立つ卒業生・修了生が、あるいはもっと多くてよいのではないかということです。資料のうち「出身の高度職業人数」によれば5年間で12名が該当するだけです。このことを特に記すのは、中学校・高等学校の国語科教育の近年の動向、とりわけ学習指導要領の改訂によって、本講座の扱う範囲に重なるような現代日本語についての多面的な教育が改めて重視されていること、そのための教員養成の改善が求められていることを想起するからです。私見では、本講座の卒業生は、今後の国語教育の中核を担いうる指導を受けることのできた全国でも少ない人材だと思われます。卒業生の進路について教官の容喙しうる限度は推察しつつ、あえて申し添えます。

以上

3-21 美学・文芸学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

本専門分野ではおもに四つの方向で研究が行われている。第一に、地域や時代によって異なり、時代とともに変貌を続ける美的現象を比較分析して考察すること。第二に、芸術作品およびデザイン作品の本質的な構造を論理的かつ実証的に究明すること。第三に、文芸（芸術としての文学）について、各国文学研究の枠を超えて、普遍的かつ体系的に研究すること。第四に、ギリシア、ラテン文学に代表される西洋古典文学と古典文化について研究することである。本専門分野は美学と文芸学の二つの研究室からなり、美学研究室はドイツ、フランス、英米の美学、文芸学研究室は西洋古代の美学思想と文芸理論（レトリック）を専門とする専任教師で構成されている。したがって、文化系統別の美学教育・研究では世界的にも稀な整った体制を有し、これが第一の特色となっている。文化系統を超えたおもな教育・研究テーマを数え上げても、造形芸術、映画とパフォーマンス・アーツ、建築を含む各種デザイン、各種文学、自然論、芸術論、風景論、工芸論と幅広く、これが第二の特色である。しかしながら、それらは個別的な教育・研究にとどまるのではない。根本的で普遍的な美学・文芸学研究の立場から、第一、第二の特色を活かした共同研究等を通じ、美、芸術、文学の本質や構造を明らかにすることをめざしており、これが第三の特色となっている。このような特色と理念を有する教育・研究組織は全国の大学の中でもユニークなものである。

【I. 現在の組織】

1. 教員（2002年4月現在）

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授： 森谷宇一 上倉庸敬 藤田治彦

助教授： 加藤 浩

助手： 渡辺浩司

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
40	14	13	0	0	0	3	1	0

※うち留学生0名、社会人学生12名

2. 在学生 (2002年4月現在)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	4	4	3	7	3
'98	0	4	1	2	0
'99	5	4	1	2	1
'00	5	8	6	2	0
'01	8	3	6	11	1
計	22	23	17	24	5

3. 修了生・卒業生 (1997～2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	4	4	3	7	3
'98	0	4	1	2	0
'99	5	4	1	2	1
'00	5	8	6	2	0
'01	8	3	6	11	1
計	22	23	17	24	5

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】(1997～2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	4	3	7
'98	1	1	2
'99	2	0	2
'00	2	0	2
'01	8	3	11
計	17	7	24

1-2. 博士論文の提出者, 題目, 審査教官等

岡林 洋 シュライエルマッハーの美学と解釈学の研究, 論文博士, 平成9年5月7日, 主査: 神林恒道, 副査: 森谷宇一, 上倉庸敬。

原田平作 日本の近代美術～欧米と比較して, 論文博士, 平成9年9月8日, 主査: 神林恒道, 副査: 奥平俊六, 肥塚隆。

萱のり子 書芸術の地平——その歴史と解釈——, 課程博士, 平成9年12月24日, 主査: 神林恒道, 副査: 肥塚隆, 上倉庸敬。

高梨友宏 ドイツ現象学的美学・芸術論の諸相と展開——フィードラー・ガイガー・オーデブレヒトを中心に——, 課程博士, 平成9年12月24日, 主査: 神林恒道, 副査: 上倉庸敬, 里見軍之。

- 潮江宏三 銅版画師ウイリアム・ブレイク，論文博士，平成10年1月14日，主査：神林恒道，副査：森谷宇一，若山映子。
- 渡辺浩司 アリストテレス『詩学』についての一考察，課程博士，平成10年1月14日，主査：森谷宇一，副査：神林恒道，上倉庸敬。
- 前田 茂 ドゥルーズと美学，課程博士，平成10年3月18日，主査：上倉庸敬，副査：神林恒道，森谷宇一，鷺田清一。
- 齋藤稔人 文学としてのアルス——西洋における人文主義的芸術の系譜——，論文博士，平成11年3月12日，主査：神林恒道，副査：森谷宇一，上倉庸敬。
- 高 暎子 現代文芸学から見たヘイドン・ホワイトの物語理論への展望——島崎藤村の『破戒』・『夜明け前』との関連において——，課程博士，平成11年3月12日，主査：森谷宇一，副査：上倉庸敬，加藤浩，出原隆俊。
- 小川伸子 表現不可能なもの表現——初期ドイツ・ロマン派における哲学・批評・文学——，課程博士，平成12年3月15日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，藤田治彦，林正則。
- 廣兼順子 形象・意味・解釈——G・ベームにおける絵画経験の諸相——，課程博士，平成12年3月15日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，鷺田清一，圀府寺司，藤田治彦。
- 陳 琛 清末から中華民国にかけての中国美術教育関係史の研究——師範教育を中心とする，課程博士，平成13年3月23日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，藤田治彦。
- 要真理子 ロジャー・フライの批評理論——知性と感受性との間で——，課程博士，平成13年3月23日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，藤田治彦，玉井暉。
- 清原佐知子 エミール・ノルデの「宗教画」をめぐる——モダニズムの内と外，その狭間——，課程博士，平成14年2月19日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，圀府寺司，藤田治彦。
- 高安啓介 アドルノの音楽美学 非同一なもの経験，課程博士，平成14年2月19日，主査：神林恒道，副査：森谷宇一，根岸一美，上倉庸敬，藤田治彦。
- 三浦信一郎 西洋音楽思想の近代——西洋近代音楽思想の研究——，論文博士，平成14年3月12日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，根岸一美，藤田治彦。
- 藤枝晃雄 ジャクソン・ポロック，論文博士，平成14年3月12日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，藤田治彦。
- 川田都樹子 美術批評におけるフォーマリズムの展開——イギリス，日本，アメリカ——，論文博士，平成14年3月12日，主査：神林恒道，副査：上倉庸敬，藤田治彦。
- 岩崎陽子 見えないものの探究——メルロ・ポンティの存在論と絵画——，課程博士，平成14年3月25日，主査：上倉庸敬，副査：神林恒道，山形頼洋，藤田治彦。
- 枅矢令明 あらゆる音に開かれた音楽——ケージ的創造理念の受容と克服——，課程博士，平成14年3月25日，主査：上倉庸敬，副査：神林恒道，根岸一美，藤田治彦。
- 石原みどり 造形活動の理解に向けて——フィードラーとカッシーラー——，課程博士，平成14年3月25日，主査：藤田治彦，神林恒道，上倉庸敬，森谷宇一。
- 立野良介 文化哲学としての美の哲学——ヴィルヘルム・パーベートの「美学史」研究——，課程博士，平成14年3月25日，主査：上倉庸敬，副査：神林恒道，森谷宇一，藤田治彦。
- 金 悠美 美学と現代美術——アメリカにおけるその乖離と接近をめぐる——，課程博士，平成14年3月25日，主査：藤田治彦，副査：神林恒道，上倉庸敬，圀府寺司。
- 伊達立晶 ポーの詩論とフランス美術への影響，課程博士，平成14年3月25日，主査：森谷宇一，副査：上倉庸敬，森岡裕一，加藤浩。

2. 大学院生等による論文発表等（1997～2001年度）

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	2	2	1	1	1	7
'98	3	4	5	1	0	13
'99	3	2	1	2	0	8
'00	2	5	1	0	1	9
'01	9	5	1	2	7	24
計	19	18	9	6	9	61

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	3	2	0	0	5
'98	1	5	3	0	0	9
'99	0	5	0	3	0	8
'00	0	10	2	0	0	12
'01	6	9	4	0	0	19
計	7	32	11	3	0	53

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

- 岩崎陽子 「問いかけと絵画——メルロ＝ポンティの「絵画の存在論」——」, 大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』創刊号, 2001年1月.
- 榎矢令明 「ケージとライヒ——『プロセスとしての音楽』をめぐって」, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史研究室『フィロカリア』第17号, 23-49頁, 2000年2月10日.
- 榎矢令明 「音のきこえとしての音楽——B・イーノのアンビエント・ミュージックをめぐって」, 美学会『美学』第52巻第1号, 70-83頁, 2001年6月30日.
- 榎矢令明 「電子音楽の開拓者たち——OHM: The Early Gurus of Electronic Music (Ellipsis Arts: CD3670, 2000)をめぐって」, 大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』創刊号, 109-110頁, 2001年1月31日.
- 榎矢令明 「音と身体性」(共著: 榎矢桂一/榎矢令明), 『大阪薬科大学教養論叢・ばいであ』Vol. 26, 大阪薬科大学, 53-69頁, 2002年3月12日.
- 石原みどり 「K・フィードラーの芸術論の可能性を求めて」, 広島芸術学会『藝術研究』第12号, 45-58頁, 1999年7月.
- 石原みどり 「造形活動の理解にむけて——フィードラーとカッシーラー——」, 美学会『美学』第207号, 14-25頁, 2001年12月.
- 石黒義昭 「藝術作品とハイデガーの世界概念」, 大阪大学文学会『待兼山論叢・美学篇』第33号, 25-46頁, 1999年12月.
- 石黒義昭 「ハイデガーの大地概念」, 美学会『美学』第208号, 1-14頁, 2001年3月.
- 佐谷記世 「アヴァンギャルド芸術の機能——現代芸術におけるアヴァンギャルド」, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史研究室『フィロカリア』第15号, 33-56頁, 1998年.

- 立野良介 「ヴィルヘルム・パーベートの「芸術哲学」—— 相対主義の克服という観点で ——」, 美学会『美学』第204号, 25-36頁, 2001年。
- 古後奈緒子 「『ヨセフ伝説』に見られる新しいバレエ構想—— 舞台舞踊の転換期におけるバレエ改革の試み ——」, 舞踊学会『舞踊学』第23号, 1-11頁, 2000年。
- 古後奈緒子 「アクション芸術の現在形 —— クリストフ・シュリンゲンジーフのパフォーマンス・プロジェクト『オーストリアを愛してね!』」, AICT [国際演劇評論家協会] 日本センター編集委員会『シアターアーツ』14号, 晩成社, 137-140頁, 2001年。
- 金 悠美 「マーク・タンジの絵画について」, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史研究室『フィロカリア』第14号, 57-87頁, 1997年。
- 村田(池田)葉子 「マルグリット・デュラス《愛人》とその叙述形式」, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史研究室『フィロカリア』第16号, 1-40頁, 1999年。
- 桑島秀樹 「E・バーク美学成立における〈触覚〉の位置 —— 崇高と優美 ——」, 美学会『美学』第192号, 1-12頁, 1997年3月。
- 桑島秀樹 「触覚的想像力に基づく観念的な表象風景としての〈歌枕〉 —— 藤原公任『新撰髓脳』によりつつ ——」, 浜下昌宏・関周植監修『第5回日韓学生美学研究会報告書』, 183-190頁, 1997年6月。
- 桑島秀樹 「シェリング造形芸術論における〈作品創造〉と〈崇高〉の問題 —— E・バークの崇高論との比較から ——」, 日本シェリング協会『シェリング年報'99』第7号, 112-122頁, 1999年。
- 桑島秀樹 「漱石『草枕』にみる西洋美学の受容と翻案 —— 画工の絵にならない俳句的な旅 ——」, 大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』創刊号, 15-25頁, 2001年1月。
- 桑島秀樹 「E・バークにおける詩画比較論とその美学的基礎 —— 『崇高と美』の分析より」, 日本イギリス哲学会『イギリス哲学研究』第21号, 21-35頁, 1998年。
- 桑島秀樹 「E・バーク演劇論草稿における〈喜劇〉評価 —— 18世紀イギリスにみる 'ridicule' の美学 ——」 文芸学研究会『文芸学研究』第4号, 51-80頁, 2000年3月。
- 要真理子 「ロジャー・フライの美術批評 —— ラッセル論理学との関係 ——」, 大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』創刊号, 27-45頁, 2001年1月。
- 前田 茂 「2+ α の〈映画=メディア〉論」, 『FB』第12号, 行路社, 47-64頁, 1998年。
- 前田 茂 「ドゥルーズと美学」, 学位申請論文1998年度
- 前田 茂 「二つのイマージュ ドゥルーズ『シネマ』にみるベルクソン解釈の展開」, 広島芸術学会『藝術研究』第11号, 93-106頁, 1998年。
- 前田 茂 「映画における〈リアリズム〉の諸相」, ASD 研究会『ASD』第5号, 40-50頁, 1998年。
- 前田 茂 「芸術作品のモノドロジー」, 帝塚山学院大学美学美術史研究室『芸術論究』第26編, 67-78頁, 1998年。
- 前田 茂 「キューブリックの空間とモンタージュ」, 『FB』第13号, 行路社, 41-48頁, 1999年。
- 前田 茂 「映画における存在者としての身体 ドゥルーズ『シネマ』をてがかりに」, 美学会『美学』第206号, 57-70頁, 2001年, 1月。
- 前田 茂 「ジル・ドゥルーズの映画論 —— リアリズムの転倒と現代の映画」 大阪大学美学研究会編『美と芸術のシュンポシオン』, 勁草書房, 236-244頁, 2002年。
- 高安啓介 「危機の経験 —— アドルノの崇高論 ——」 大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』創刊号, 1-14頁, 2001年, 1月。
- 高安啓介 「ワーグナーの芸術はまやかしか」 大阪大学美学研究会編『美と芸術のシュンポシオン』, 勁草書房, 228-235頁, 2002年。
- 高安啓介 「アドルノと不定形音楽の理念」『美学』208号, 15-28頁, 2002年。
- 小川伸子 「初期フリードリヒ・シュレーゲルの哲学」『シェリング年報』第5号, 97-106頁, 1997年。
- 小川伸子 「フリードリヒ・シュレーゲルにおけるアラベスク」『シェリング年報』2001年7月。
- 小川伸子 「ノヴァーリスの『フィヒテ研究』における「表現 *Darstellung*」の問題」『フィロカリア』, 25-44頁, 2001年。
- 小川伸子 「ノヴァーリスとフリードリヒ・シュレーゲルにおける構想力と数学」 大阪大学美学研究会編

- 【美と芸術のシュンポシオン】，勁草書房，29-36頁，2002年。
- 陳 琛 「清朝末期における渡日留学生李叔同の美術教育思想とその活動をめぐって」2000年『関西教育学会紀要』第24号
- 伊達立晶 「ポーにおける詩的イマジネーション論の変遷」，文芸学研究会『文芸学研究』第1号，72-95頁，1998年。
- 伊達立晶 「ボードレールにおける詩画比較論——ポーからの思想的影響を中心に」，文芸学研究会『文芸学研究』第2号，74-102頁，1999年。
- 伊達立晶 「ポーにおける仮説形成的イマジネーション論」，文芸学研究会『文芸学研究』第3号，1-33頁，2000年。
- 伊達立晶 「ポーの「構成の哲学」について」，文芸学研究会『文芸学研究』第4号，16-50頁，2001年。
- 伊達立晶 「虚無と美——ポーの詩論における唯物論的背景」，文芸学研究会『文芸学研究』第5号，61-89頁，2002年。
- 蔵本典之 「プラトン『プロタゴラス』における文学批評」，文芸学研究会『文芸学研究』第1号，129-149頁，1998年。
- 蔵本典之 「テリー・イーグルトンにおける文芸批評の概念」，大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史研究室『フィロカリア』第16号，41-50頁，1999年。
- 蔵本典之 「テリー・イーグルトンにおける文学と価値」，文芸学研究会『文芸学研究』第2号，122-132頁，1999年。
- 蔵本典之 「文学と言語——言語芸術における意味」，大阪大学文学会『待兼山論叢・美学篇』第34号，1-22頁，2000年。
- 高 映子 「歴史小説の間テクスト性——島崎藤村の『夜明け前』との関連において」，大阪大学文学会『待兼山論叢・美学篇』第32号，1-22頁，1998年。
- 高 映子 「物語の成立——島崎藤村の『破戒』を中心に」，文芸学研究会『文芸学研究』第1号，96-128頁，1998年。
- 高 映子 「ヘイドン・ホワイトにおける「物語」の概念」，美学会『美学』第50巻第1号(197号)，1-12頁，1999年。
- 高 映子 「島村抱月の「自然主義論」再考」，文芸学研究会『文芸学研究』第3号，100-121頁，2000年。

(2) 口頭発表

- 岩崎陽子 “Art and the sense of smell: The traditional Japanese art of scents (*ko*)”，第15回国際美学会議（神戸外国語大学・国際学会），2001年8月30日。
- 岩崎陽子 「芸術と嗅覚——日本の伝統芸術「香」をめぐって——」，美学会第52回全国大会（早稲田大学），2001年10月7日。
- 岩崎陽子 「芸術における感覚とイデーの絆——メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』より——」，美学会第52回全国大会（早稲田大学），2001年10月8日。
- 榊矢令明 「音のきこえとしての音楽——B・イーノの《ディスクリート・ミュージック》(1975)をめぐって」，美学会西部会第230回研究発表会（大阪大学），2000年9月30日。「Lo-fiをめぐるとの考察」，日本ポピュラー音楽学会2001年度関西地区第1回研究例会（関西大学），2001年4月1日。
- 石原みどり 「K・フィードラーの芸術論の可能性を求めて」，広島芸術学会第12回大会，1998年7月31日。
- 石原みどり 「カッシーラーの芸術論におけるフィードラー受容」，美学会第51回全国大会，2000年10月7日。
- 石黒義昭 「ハイデガーの大地概念について」，美学会西部会第232回，2001年2月17日。
- 石黒義昭 「ハイデガーの『語り』概念」，文芸学研究会，2001年9月24日。
- 立野良介 「ヴィルヘルム・パーペートにおける美学並びに芸術哲学の方法」，待兼山芸術学学会，1999年3月12日。

- 立野良介 「ヴィルヘルム・パーペートの美学思想」, 美学会西部会第224回研究発表会, 1999年7月3日.
- 古後奈緒子 「『ヨセフ伝説』に見られる新しいバレエ構想——舞台舞踊の転換期におけるバレエ改革の試み——」, 第48回舞踊学会, 1999年, 12月4日.
- 古後奈緒子 「『アテネの廃墟』における視覚体験としての舞踊」第50回舞踊学会, 2000年12月3日.
- 古後奈緒子 「京都におけるコンタクト・インプロヴィゼーションの受容」, 第1回韓日合同舞踊学会シンポジウム, 2001年5月26日.
- 古後奈緒子 「ホーフマンスタールの舞踊構想」, 第52回美学会全国大会, 2001年, 10月8日.
- 古後奈緒子 「『新しい舞踊』論におけるリズム概念の意義」, 第52回舞踊学会, 2001年12月7日.
- 桑島秀樹 「E・パーク美学成立における〈触覚〉の位置——優美と崇高——」, 美学会西部会第215回研究発表会, 1997年9月27日.
- 桑島秀樹 「シェリングにおいて〈崇高〉は可能か——イギリス経験論美学からの問い——」日本シェリング協会第7回大会, 1998年7月12日.
- 桑島秀樹 「E・パークにおける〈崇高〉概念の政治的受肉——初期趣味論から『フランス革命の省察』を読む——」, 日本イギリス哲学会第24回研究大会シンポジウム・「エドモンド・パーク」パネル報告, 1999年3月26日.
- 桑島秀樹 「E・パークと劇場——未完草稿『演劇のための覚書』を中心に——」, 文芸学研究会第4回研究発表会, 2000年7月29日.
- 桑島秀樹 「E・パーク演劇論における〈喜劇〉評価——18世紀イギリスにみる‘ridicule’の美学——」, 近現代演劇研究会12月例会, 2000年12月9日.
- 要 真理子 「ロジャー・フライの転換期における批評の問題」, 待兼山芸術学会, 2000年2月13日.
- 要 真理子 「ロジャー・フライとフォーマリズム——感性的リアリティーの創造」美学会第234回西部会, 2001年6月30日.
- 前田 茂 「二つのイマージュ——ドゥルーズ『シネマ』にみるバルクソン哲学の展開」, 広島芸術学会, 1997年7月20日.
- 前田 茂 「ドゥルーズの映画論——イマージュの自己・時間化」, ドイツ観念論研究会, 1998年9月15日.
- 前田 茂 「映画における《リアリズム》の諸相」ASD研究会, 1998年10月31日.
- 前田 茂 「ドゥルーズ『シネマ』におけるショットの存在論から」美学会第50回全国大会, 1999年10月3日.
- 前田 茂 「Gilles Deleuze's Theory of Cinema-the Overturning of Realism and the Modern Cinema」XVth International Congress of Aesthetics in Japan, 2001年8月30日.
- 高安啓介 「アドルノの文化批判をめぐって」美学会第229回西部会, 2000年7月1日.
- 高安啓介 「Die Stille und das Erhabene: Asthetische Betrachtungen fur Lachenmanns musique concrete instrumentale」, XVth International Congress of Aesthetics in Japan, 2001年8月29日.
- 高安啓介 「沈黙と崇高——H・ラッヘンマンの作曲をめぐって」美学会第52回全国大会, 2001年10月7日.
- 小川伸子 「フリードリヒ・シュレーゲルにおけるアラバスク」シェリング協会全国大会, 2000年7月
- 清原佐知子 「抽象と物語の媒体としてのゴシック概念: エミール・ノルデ《伝説: エジプトの聖女マリア》(1912年)をめぐって」第48回美学会全国大会, 1997年10月(東京芸術大学)
- 蔵本典之 「文学とイデオロギー——テリー・イーグルトンを中心に」(発表要旨)・美学会第50回全国大会プログラム・1999年.
- 蔵本典之 「文学と価値」(発表要旨)・広島芸術学会大会案内・2001年10月2日(金沢大学)
- 高 暎子 「ヘイドン・ホワイトにおける「物語」の概念」(発表要旨)・美学会第49回全国大会プログラム・1998年10月11日(京都大学)

(3) 翻訳

- 石黒義昭 「ハイデッガーと芸術の問題(湯浅慎一)」(原論文: Shin'ichi Yuasa, Heidegger und das Prob-

- lem der Kunst, in: STUDIA HUMANA ET NATURALIA, No.28, Kyoto Prefectural University of Medicine, 1944.), 『日常世界の現象学』, 太陽出版, 168-256頁, 2000年10月.
- 石黒義昭 「ライナー・ケーテ「1945年から今日までのドイツのノーベル賞受賞者」(共訳), 財団法人日独協会『Die Brücke——かけ橋』1997年4月号より1999年4月号まで連載.
- 小川伸子・石黒義昭 「ヘンクマン/ロッター編『美学のキーワード』(他共訳), 勁草書房, 2001年7月.
- 金 悠美 「リチャード・ウォルハイム「フォーマリズムとは何か——その分類と展開——」, 『美術フォーラム21』第2号, 醍醐書房, 40-55頁, 2000年.
- 桑島秀樹・前田茂・村田(池田)葉子・村上敬・北村仁美共訳「アルマン・ド・トランティニヤン著「カタログ解説(原文フランス語)」, 富山県立近代美術館ほか編『ジャン・デュビュッフ展』, 24-164頁, 1997年5月.
- 桑島秀樹 「エドワード・R・フォード著『巨匠たちのディテール』第1巻(共訳), 丸善, 51-97頁, 1998年.
- 前田 茂 『グラフィックデザイン全史』第26章「デジタル革命」, 『アイデア』第280号, 誠文堂新光社, 179頁-186頁, 2000年.
- 前田 茂 「原子論, 芸術, そして作者—ダントーのヘーゲルの転回」, 大阪大学大学院文学研究科美学研究室『美学研究』創刊号, 69-94頁, 2001年, 1月
- 高安啓介 テオドール・W・アドルノ「社会学講義」, 作品社, 82-110頁, 202-233頁, 2001年.
- 要真理子・古後奈緒子・立野良介共訳「生の技術としての哲学——フーコーの場合」R・シュスターマン, 大阪大学美学研究会編『美と芸術のシュンボシオン』勁草書房, 322-332頁, 2002年2月.
- 要真理子・石原みどり・立野良介・榊矢令明共訳「文学における論争——文献学と文芸学」M・F・マルラ, 大阪大学美学研究会編『美と芸術のシュンボシオン』勁草書房, 311-321頁, 2002年2月.

(4) 書評

- 金 悠美 「Richard Serra 1985-1998」, 『建築文化』第55巻第645号, 彰国社, 67頁2000年.
- 桑島秀樹 Michael B. Prince, *Philosophical Dialogue in the British Enlightenment: Theology, Aesthetics and the Novel* (Cambridge University Press, 1996), 日本18世紀学会編『日本18世紀学会年報』第14号, 29-30頁, 1999年7月.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

- 古後奈緒子 第5回シアターアーツ賞 AICT 国際演劇評論家協会日本センター編集委員会
発行 『シアターアーツ』主催 2001年

4. 日本学術振興会研究員採択状況

- 計 2 名
 <内訳>
 PD: 2名 DC: 0名 外国人: 0名

5. 大学院生・学部学生等の留学

- 計 4 名
 学部: 1名 PD: 1名 DC: 2名
 <留学先>
 フランス, ベルギー, イギリス, アメリカ合衆国

6. 専門分野出身の研究者 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

計 5 名

'97年度：3名 '98年度：0名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：1名

<内訳>

1997年度	萱のり子	(D 修了)	大阪教育大学教員養成課程	助教授
	高梨友宏	(D 修了)	大阪市立大学文学研究科	助教授
	渡辺浩司	(D 修了)	大阪大学文学研究科	助手
1999年度	廣兼順子	(D 修了)	京都工芸繊維大学工芸学部	助教授
2001年度	高安啓介	(D 修了)	愛媛大学法文学研究科	専任講師

7. 専門分野出身の高度職業人 (1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8 名

'97年度：2名 '98年度：1名 '99年度：2名 '00年度：2名 '01年度：1名

<内訳>

技術職	3名
ジャーナリスト	0名
アーティスト	0名
教職	2名

<主な職業名・就職先等>

1997年度	学芸員	2名
1998年度	学芸員	1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 4 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 4 名

10. 刊行物

『美学研究』(専門分野の紀要) 毎年刊行
『文芸学研究』(文芸学研究会の会誌) 毎年刊行

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際デザイン史フォーラム事務局(国際学会) 1998年度～現在に至る。

国際デザイン史フォーラム開催（国際学会）	1999年3月22～23日.
国際デザイン史フォーラム開催（国際学会）	2000年3月22～24日.
アジア芸術学会事務局（国際学会）	2001年度～現在に至る.
美学会事務局（国内学会）	1999年度～2001年度.
民族芸術学会事務局（国内学会）	2001年度～現在に至る.
文芸学研究会事務局・研究会（年4回研究会を開催）	1998年度～現在に至る.

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

2001年度より 美学研究会

1998年度より 待兼山芸術学会 毎年3月に研究発表会を開催.

1998年度より 待兼山芸術学会誌『フィロカリア』 毎年2月に刊行.

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

美学研究室は過去5年間、教授・助教授計3名、助手1ないし0名、非常勤講師2ないし1名という体制で運営されてきた。神林教授は退官までドイツと日本を中心に広く内外の美学と芸術を研究して高く評価され、美学会会長や日本学術会議会員を務めるなど、学内外での教育文化活動においても指導的立場にあった。上倉教授はおもにフランス美学と映画の教育・研究に取り組み、藤田教授は環境美学を中心とする英米美学とデザインや工芸に関する教育・研究を展開している。1998年にはデザイン史フォーラムが美学研究室を事務局に発足し、1999年3月と2000年3月に大阪大学で国際デザイン史フォーラムを開催した。その成果は2001年刊行の『国際デザイン史』として公表されている。1999年度から2002年度にかけて科学研究費補助金（A）の交付を受け（研究代表者：上倉教授）、「近代日本における芸術概念の誕生と死」をテーマとする研究を行った。2000年度から2002年にかけて科学研究費補助金（B）の交付を受け（研究代表者：神林教授）、「芸術学の日本近代——その歴史と展望」をテーマとする研究を行なった。2001年には大阪大学美学研究会が発足し、美学研究室編集の『美学研究』が創刊された。各種国際学会や国内学会における発表、美学研究室大学院生が交代で執筆する大阪日日新聞のシリーズ記事「関西美術探訪」の2002年夏からの連載開始など、大学院生および学部学生の活動も非常に活発である。

文芸学研究室は教授・助教授・助手各1名と非常勤講師2名とからなる。森谷教授は文芸学基礎論の諸問題やホメロスの自然感情の問題などと取り組み、加藤助教授はプラトンの文芸論やスカリゲルの詩学などを研究し、渡辺助手はアリストテレスの悲劇論などを研究した。1998年に文芸学研究会が発足し、機関誌として『文芸学研究』が発刊された。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者とも連携したものであり、研究発表会を10回開催するとともに、機関誌を6号まで発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、極めて活発に活動している。1999年度から2001年度にかけて科学研究費補助金の交付を受けて「古代弁論術の理論と実践とに関する歴史的・体系的研究」（研究代表者：森谷教授）という、上記3名による研究を行った。この研究を通じて、古代弁論術の最重要文献たるクインティリア

ヌスの *Institutio oratoria* を全訳する態勢が整うとともに、2002年度から2003年度にかけての本研究室の同様の共同研究「自然感情と風景とに関する美学的・文芸学的研究」が企画されることになった。なお上記の3名は美学研究室の同様の共同研究にも随時参加している。文芸学研究室に属する学部生・大学院生の数は少なく、これまでの課程博士の学位取得者は4名にとどまっているが、美学・文芸学の専門分野全体では多く、課程博士の学位取得者も過去5年間で17名に上る。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 専門分野所属の教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 上倉庸敬 「カタルシスの美学」, FB10号, FB 同人, pp. 127-145, 1997.
- 上倉庸敬 「バラ, そしてジャスミン」, 宇佐見齊編『象徴主義の光と影』, ミネルヴァ書房, pp. 55-69, 1997.
- 上倉庸敬 「都市と光」, 『日本の美学』, ペリかん社, pp. 109-115, 1997.
- 上倉庸敬 「師父たち」, 栄光学園創立50周年記念誌『より高く』, 栄光学園, pp. 197-200, 1997.
- 上倉庸敬 「フランスと映画」, 田辺保編『フランス学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 179-195, 1998.
- 上倉庸敬 「文学は人生と相渉るだろうか」, 太田喬夫編『芸術学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp. 164-179, 1999.
- 上倉庸敬 「アカダグス」, 神林恒道・太田喬夫編『芸術における近代』, 勁草書房, pp. 155-176, 1999.
- 上倉庸敬 「現代の文学理論」, 藤枝晃雄・谷川渥編『芸術理論の現在』, 東信堂, pp. 279-300, 1999.
- 上倉庸敬 「現代フランスの芸術批評」, 『美術フォーラム』巻・号, 醍醐書房, pp. 95-99, 2000.
- 上倉庸敬 「日本映画における生と死」, 懐徳堂記念会編『生と死の文化史』, 懐徳堂, pp. 161-210, 2001.
- 上倉庸敬 「木下空太郎『百花譜』ノート」, 大阪大学美学研究会編『美と芸術のシュンポシオン』, pp. 105-113, 2002.
- 森谷宇一 「文学とレトリック」, 『芸術学フォーラム』第7巻, 勁草書房, pp. 60-70, 1997.
- Uichi MORITANI “Das homerische Naturgefühl des antiken Naturgefühls”, Report on GRANT-IN-AID FOR CO-OPERATIVE RESEARCH (A) 1993-1994, 'ART AND NATURE', Department of the Science of Arts, Faculty of Letters, Osaka University, pp. 21-27, 1997.
- 森谷宇一 「文芸学の対象——文学（文芸）の概念論と価値論——」, 『文芸学研究』第1号, 文芸学研究会, pp. 6-39, 1998.
- 森谷宇一 「夢について——恣意的なる一小考』, 『エポス』第17号, 木魂社, pp. 67-85, 1998.
- 森谷宇一 「風景について」, 『エポス』第18号, 木魂社, pp. 32-50, 1999.
- 森谷宇一 「海——私的なる考察 (I)」, 『エポス』第18号, 木魂社, pp. 74-84, 1999.
- 森谷宇一 「没理想論争」, 『美学・芸術学の今日的課題』, 日本美学会, pp. 61-69, 1999.
- 森谷宇一 「ニーチェとデカダグスの問題」, 『転換期のフィロソフィー』第2巻, ミネルヴァ書房, pp. 136-154, 1999.
- 森谷宇一 「坪内逍遙の文学・演劇論——ハムレットにしてドン・キホーテたること——」, 『日本の芸術論——伝統と近代——』, ミネルヴァ書房, pp. 242-264, 2000.
- 森谷宇一 「ホメロスの自然感情 (I)」, 『フィロカリア』第17号, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, pp. 1-22, 2000.
- 森谷宇一 「ホメロスの自然感情 (II)」, 『フィロカリア』第18号, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, pp. 1-23, 2001.
- 森谷宇一 「ホメロスの自然感情 (III)」, 『フィロカリア』第19号, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, pp. 1-14, 2002.
- 森谷宇一 「歴史画論争」, 『美と芸術のシュンポシオン』, 勁草書房, pp. 123-131, 2002.

- 藤田治彦 「バーン＝ジョーンズが人を、ウェッブが鳥を、そしてモリスが野の花を描いた」, ウィリアム・モリス展図録, NHK, pp. 14-19, 1997.
- 藤田治彦 「ロマンティシズム・反修復運動・講演活動」, ウィリアム・モリス展図録, NHK, pp. 173-175, 1997.
- Haruhiko FUJITA “‘Bauhaus Osaka’ in oblivion: dilemmas in conservation and restoration of a recent past”, *Architecture 2000*, Donhead Publishing Ltd., pp. 314-322, 1998.
- 藤田治彦 「ウィリアム・モリスと民族芸術」, 『民族芸術』第15号, 民族芸術学会, pp. 104-109, 1999.
- 藤田治彦 「象徴としての和室——21世紀の日本の住まい——nLDKJが意味するもの」, 『都市住宅学』第26号, 都市住宅学会, pp. 12-15, 1999.
- 藤田治彦 「第二の自然」, 『武蔵野美術』第112号, 光琳社, pp. 30-35, 1999.
- 藤田治彦 「明治五年刊『西洋家作雛形』の建築用語」, 『待兼山論叢・美学篇』第33号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-22, 1999.
- 藤田治彦 「オリンピック海報芸術」, 『藝術家』第306号, 藝術家出版社, pp. 428-441, 2000.
- 藤田治彦 「グラスゴー・スタイルの形成——チャールズ・レニー・マッキントッシュと“ザ・フォー”」, 『チャールズ・レニー・マッキントッシュとグラスゴー・スタイル』, アルティス, pp. 23-31, 2000.
- Haruhiko FUJITA “Formation of the Glasgow Style: Charles Rennie Mackintosh and the Four”, C. R. Mackintosh and the Glasgow style, *Artis*, pp. 182-186, 2000.
- Haruhiko FUJITA “Notomi Kaijiro: An Industrial Art Pioneer and the First Design Educator of Modern Japan”, *Design Issues*, 17, The MIT Press, pp. 17-31, 2001.
- 藤田治彦 「イングリッシュ・スタイル」, アール・ヌーヴォー展図録, 読売新聞社, pp. 81-83, 2001.
- 藤田治彦 「グラスゴー——チャールズ・レニー・マッキントッシュとアール・ヌーヴォー——」, アール・ヌーヴォー展図録, 読売新聞社, pp. 183-185, 2001.
- 藤田治彦 「イギリスとのデザイン交流」, 『国際デザイン史』, 思文閣出版, pp. 3-7, 2001.
- 藤田治彦 「アメリカとのデザイン交流」, 『国際デザイン史』, 思文閣出版, pp. 49-54, 2001.
- 藤田治彦 「ベルギーとのデザイン交流」, 『国際デザイン史』, 思文閣出版, pp. 187-190, 2001.
- 藤田治彦 「美を生んだケルムスコット・プレス」, 『印刷博物誌』, 凸版印刷株式会社, pp. 610-613, 2001.
- 藤田治彦 「著作権法の礎を築いたホガース」, 『印刷博物誌』, 凸版印刷株式会社, pp. 708-709, 2001.
- 藤田治彦 「版画芸術を築いたブレイク」, 『印刷博物誌』, 凸版印刷株式会社, pp. 710-711, 2001.
- 藤田治彦 「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」, 『印刷博物誌』, 凸版印刷株式会社, pp. 712-717, 2001.
- 藤田治彦 「フランク・ロイド・ライトと日本」, 『美と芸術のシュンボシオン』, 勁草書房, pp. 114-122, 2002.
- 加藤 浩 「叙事詩から小説へ」, 『芸術学フォーラム』第7巻, 勁草書房, pp. 123-133, 1997.
- Hiroshi KATO “Rhetoric and Philosophy in Cicero”, 『文芸学研究』第1号, 文芸学研究会, pp. 40-46, 1998.
- 加藤 浩 「ユリウス・カエサル・スカリゲル『詩学七巻』の基本構想」, 『文芸学研究』第2号, 文芸学研究会, pp. 133-154, 1999.
- 加藤 浩 「ミュートスとロゴス」, 『待兼山論叢・美学篇』第34号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-22, 2000.
- 渡辺浩司 「理想的な悲劇——アリストテレス『詩学』第十三章と第十四章より」, 日韓美学研究会報告7, 日韓美学研究会, pp. 119-125, 1999.
- 渡辺浩司 「アリストテレスの好きな悲劇——『詩学』第十三章と第十四章を中心に」, 『芸術研究』第12号, 広島芸術学会, pp. 31-43, 1999.
- 渡辺浩司 「『オイディプス王』と『タウリケのイピゲネイア』」, 『文芸学研究』第5号, 文芸学研究会, pp. 28-47, 2002.

1-2. 著書

- 森谷宇一 「芸術学フォーラム・7」, 共著: 森谷宇一/山縣熙/天野文雄, 勁草書房, 396p., pp. 1-3/60-70, 1997.
- 藤田治彦 「現代デザイン論」, 単著, 昭和堂, 237p., 1999.
- 藤田治彦 「ターナー——近代絵画に先駆けたイギリス風景画の巨匠の世界——」, 単著, 六耀社, 120p., 2001.

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳

- 藤田治彦 「西洋美術の歴史」(H. W. Janson / A. F. Janson 著), 創元社, 528p., 2001.
- 加藤 浩 「ミュートスとしての言語」(Walter Friedlich Otto 著), 『文芸学研究』第4号, 文芸学研究会, pp. 1-15, 2001.
- 渡辺浩司 「古代における文学概念」(ラリツァ・コンスタンテーノヴァ著), 山縣熙・森谷宇一・天野文雄編『芸術学フォーラム』第7巻, 勁草書房, pp. 19-1, 1997.

(2) 書評

- 上倉庸敬 「篠原資明著『心にひびく短詩の世界』」, 『人環フォーラム』第3号, 京都大学大学院人間環境研究科, pp. 3-62, 1997.
- 上倉庸敬 「磯田啓二著『熱眼熱手の人・私説・映画監督伊藤大輔の青春』」, 『FB』14号, FB 同人, 行路社, pp. 125-128, 2000.
- 森谷宇一 「ジョルジョ・アガンベン著(岡田温司訳)『スタンツェ——西洋文化における言葉とイメージ』」, 『美術フォーラム21』, 醍醐書房, 1号, pp. 189-191, 1999.

(3) 解説

- 上倉庸敬 「『丹下左膳』その他」, 京都映画祭1997公式カタログ5号, p. 12, 1997.
- 上倉庸敬 「悲劇『東京物語』」, 映像学会会報, 100号, 日本映像学会, p. 2, 1997.
- 上倉庸敬 「映画学事始——映画研究者失格の記——」, 『La Vue』8号, るな書房, pp. 1-2, 2001.
- 森谷宇一 「発刊の辞」, 『文芸学研究』第1号, 文芸学研究会, pp. 1-5, 1998.
- 藤田治彦 「ヴィトラ・デザイン・ミュージアム」, 『美術フォーラム』第1号, 醍醐書房, pp. 148-155, 1999.
- 藤田治彦 「ナショナル・トラスト・英国事情」, 『すてき時代』22号, 郵便貯金振興会, pp. 6-7, 1999.
- 藤田治彦 「ロンドンのデザイン・ミュージアム」, 『美術フォーラム』第2号, 醍醐書房, pp. 139-146, 2000.

(4) 辞典項目

- 上倉庸敬 「アビ・ウォーバーク・その他」, 『マイクロソフト・エンカルタ百科事典2000』, マイクロソフト・エンカルタ, 1999.
- 森谷宇一 「自由学芸」等7項目, The Shueisha Dictionary of World Literature 5, 集英社, 1997.

(5) その他(エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 上倉庸敬 「フィルム・ライブラリアン江間道生」(聞き書き), 『FB』9号, FB 同人, 行路社, 36-98頁, 1997.
- 上倉庸敬 「東映京撮が変わった頃——巨匠から映画村へ——」(聞き書き), 『FB』16号, FB 同人, pp. 158-172, 2002.

- 森谷宇一 「南欧周遊——はじめてにして遅ればせの海外旅行の記——」, 『エポス』第19号, 木魂社, pp. 48-85, 2000.
- 森谷宇一 「辞書への思い Feelings toward Dictionaries」, 『エポス』第19号, 木魂社, pp. 105-113, 2000.
- 渡辺浩司 「海外雑誌論文紹介」2点, 『メソドス: 古代哲学研究』第31号, 古代哲学研究会, pp. 59-68, 1999.
- 渡辺浩司 「海外雑誌論文紹介」2点, 『メソドス: 古代哲学研究』第32号, 古代哲学研究会, p. 74, 2000.
- 渡辺浩司 「海外雑誌論文紹介」2点, 『メソドス: 古代哲学研究』第33号, 古代哲学研究会, pp. 82-88, 2001.
- Haruhiko FUJITA “CENT ANS DE CONSERVATION HISTORIQUE AU JAPON”, *JAPON PLUS PROCHE* 12, l’Ambassade du Japon en Belgique, p. 4, 1998.
- Haruhiko FUJITA “HONDERD JAAR BESCHERMING VAN HET HISTORISCH ERFGOED IN JAPAN”, *JAPAN DICHTERBIJ* 12, Ambassade van Japan in België, p. 4, 1998.
- 藤田治彦 「デザイン」, 大阪府文化芸術年鑑1999年版, 大阪文化団体連合会, pp. 27-28, 1999.
- 藤田治彦 「デザイン」, 大阪府文化芸術年鑑2000年版, 大阪文化団体連合会, pp. 27-28, 2000.
- 藤田治彦 「デザイン」, 大阪府文化芸術年鑑2001年版, 大阪文化団体連合会, pp. 29-30, 2001.

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- Haruhiko FUJITA “‘International’ versus ‘Local’: Joichi Kogure, Towards a Japanese Furniture”, 単独, デザイン史フォーラム, 第1回国際デザイン史フォーラム, デザイン史フォーラム, 大阪大学シグマ・ホール/大阪府豊中市, 1999年3月24日.
- 藤田治彦 「明治初年のイギリス建築」, 単独, デザイン史フォーラム, 第2回国際デザイン史フォーラム, デザイン史フォーラム, 大阪市立東洋陶磁美術館/大阪府大阪市/大阪大学シグマ・ホール/大阪府豊中市, 2000年3月22日.
- Haruhiko FUJITA “Toynbee and the Japanese Settlement Movement”, 単独, Toynbee Hall Seminar, Toynbee Hall and Social Change, Toynbee Hall/London, 2000 / 9 / 16.
- Haruhiko FUJITA “This Will Kill That: Frank Lloyd Wright, Japan, and 21st-century Architecture”, 単独, 国際美学会, 第15回国際美学会議, 神田外語大学/千葉県千葉市, 2001年8月27日.
- Haruhiko FUJITA “Settlement Houses, Frank Lloyd Wright, and Meanings of the Machine”, 単独, The Society of Historic Settlement Houses, University of Illinois at Chicago / Illinois, 2001 / 3 / 2.
- Hiroshi KATO “Rhetoric and Philosophy in Cicero”, 単独, Seminar fuer allgemeine Rhetorik Tuebingen Universitaet, Rhetorik und Topik, Heinrich-Fabri-Institut/Blaubeuren, 1997 / 10 / 10.
- 渡辺浩司 「理想的悲劇——アリストテレス『詩学』の第13章と第14章より」, 単独, 日韓美学会, 広島県立美術館/広島県広島市, 1998年8月1日.

(2) 国内学会

- 上倉庸敬 「劇場のなかの人間」, 単独, 日本演劇学会2001年秋季大会, 大阪市立大学, 2001年11月25日
- 森谷宇一 「没理想論争——その内実と意義」, 単独, 美学会, 第49回美学会全国大会, 京都大学/京都府京都市, 1998年10月11日.
- 藤田治彦 「明治・大正期の高等教育における工芸」, 単独, 美学会, 第50回美学会全国大会, 金沢美術工芸大学/石川県金沢市, 2000年10月2日.
- 藤田治彦 「ヴィクトル・ユゴー, フランク・ロイド・ライト, 日本の現代建築」, 単独, 美学会, 第52回美学会全国大会, 早稲田大学/東京都, 2001年10月7日.
- 藤田治彦 「1901年『ハル・ハウス講演』のフランク・ロイド・ライト」, 単独, 建築史学会, 建築史学会2001年度大会, 大阪市立住まいのミュージアム/大阪府大阪市, 2001年4月21日.

- 加藤 浩 「ユリウス・カエサル・スカリゲル『詩学七卷』の基本構想」, 単独, 美学会, 第49回美学会全国大会, 京都大学/京都府京都市, 1998/10/12
- 渡辺浩司 「アリストテレス『詩学』13章と14章との筋構成論」, 単独, 日本西洋古典学会, 新潟大学/新潟県新潟市, 2001年6月2日.

(3) 研究会

- 森谷宇一 「志賀重昂『日本風景論』を読む」, 単独, 科学研究費補助金基盤研究(A)(2)「日本の美学」研究代表者: 佐々木健一の研究会, 東京大学/東京都文京区, 2001年5月19日.
- 森谷宇一 「近代日本における文学概念の定着」, 単独, 科学研究費補助金基盤研究(A)(2)「日本における芸術概念の誕生と死」(研究代表者: 上倉庸敬)の研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2001年7月14日.
- 森谷宇一 「志賀重昂『日本風景論』を読む」, 単独, 文芸学研究会, 第10回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002年3月2日.
- 森谷宇一 「ホメロスの世界像」, 単独, 文芸学研究会, 第6回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2000年12月23日.
- 加藤 浩 「アリストテレスのミュートス論」, 単独, 文芸学研究会, 第3回文芸学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 1999年12月23日.
- 渡辺浩司 「ゴルギアスの弁論術」, 単独, 文芸学研究会, 第4回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2000年7月29日.

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

- 藤田治彦 「アジアの芸術と美学芸術学の地平」, 単独, 台湾美学芸術学会, 亜州藝術與美學藝術學學術演講座談會, 靜宜大学教學大樓國際會議廳/台中県, 2002年3月28日.

2. 教員の受賞歴

なし

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成10年度	奨励研究(A)	10710013	観照の過程と製作の過程	廣兼順子	1,000,000円
平成11年度	基盤研究(A)(2)	11301001	日本における芸術概念の誕生と死	上倉庸敬	9,900,000円
平成11年度	基盤研究(B)(2)	11410015	古代弁論術の理論と実践に関する歴史的・体系的 研究	森谷宇一	7,600,000円
平成11年度	奨励研究(A)	10710013	観照の過程と製作の過程	廣兼順子	800,000円
平成12年度	基盤研究(A)(2)	11301001	日本における芸術概念の誕生と死	上倉庸敬	6,700,000円
平成12年度	基盤研究(B)(2)	11410015	古代弁論術の理論と実践に関する歴史的・体系的 研究	森谷宇一	2,900,000円

平成12年度	基盤研究(C)(2)	12610054	西洋の工芸博物館の比較研究	藤田治彦	1,000,000円
平成13年度	基盤研究(A)(2)	1301001	日本における芸術概念の誕生と死	上倉庸敬	5,300,000円
平成13年度	基盤研究(B)(2)	11410015	古代弁論術の理論と実践に関する歴史的・体系的 研究	森谷宇一	1,600,000円
平成13年度	特別研究員奨励費	463	エドモンド・パークを中心とする18世紀イギリス経験論 美学の研究	桑島秀樹	1,200,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997~2001年度)

上倉庸敬	教授：美学会委員	(1995年10月—現在)
	映像学会委員	(1997年5月—2000年5月)
森谷宇一	教授：美学会委員	(2001年10月—現在)
藤田治彦	教授：美学会委員	(2001年10月—現在)
	意匠学会委員	(1990年4月—現在)
	日本デザイン学会評議員	(1990年4月—現在)
	民族芸術学会理事	(2000年4月—現在)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

上倉庸敬	教授	
通年	美学特殊演習	美学ドイツ語文献購読
通年	美学特殊演習	美学・芸術学の諸問題(藤田教授と合同)
通年	美学特殊講義	芸術とポイエーシス
通年	美学特殊講義	芸術における身体の構造
通年	芸術学特殊演習	芸術学フランス語文献購読
通年	美学演習	美学ドイツ語文献購読
通年	美学演習	美学・芸術学の諸問題(藤田教授と合同)
通年	美学講義	ポイエーシスの問題
通年	芸術学講義	身体とドラマ
通年	芸術学演習	芸術学フランス語文献購読

森谷宇一 教授

通年	西洋古典学特殊演習	ウェルギリウス購読(V)
1学期	西洋古典学特殊講義	ホメロスの自然感情(Ⅲ)
2学期	文芸学特殊講義	風景の問題
通年	文芸学特殊演習	文芸学の諸問題
通年	文芸学特殊演習	文芸学研究の実践(加藤助教授と合同)
通年	西洋古典学演習	ウェルギリウス講読(V)
1学期	西洋古典学講義	ホメロスの自然感情(Ⅲ)

2学期	文芸学講義	風景の問題
通年	文芸学演習	文芸学の諸問題
通年	文芸学演習	文芸学研究の実践（加藤助教授と合同）

藤田治彦 教授

通年	美学特殊演習	都市美学資料研究
通年	美学特殊演習	美学・芸術学の諸問題（上倉教授と合同）
通年	芸術学特殊講義	環境芸術学研究
1学期	芸術学特殊講義	近代社会における工芸運動
2学期	芸術学特殊講義	造形芸術と環境
通年	美学演習	環境美学資料研究
通年	美学演習	美学・芸術学の諸問題（上倉教授と合同）
通年	芸術学講義	デザイン思想研究
1学期	芸術学講義	デザインと社会
2学期	芸術学講義	芸術と環境

加藤 浩 助教授

通年	文芸学特殊講義	古典詩学研究
通年	文芸学特殊演習	文芸学研究の実践（森谷教授と合同）
通年	西洋古典学特殊演習	アリストテレス『詩学』研究
通年	文芸学演習	古典詩学研究
通年	文芸学演習	文芸学研究の実践（森谷教授と合同）
通年	西洋古典学演習	アリストテレス『詩学』研究

小林信之 講師（非常勤講師・京都市立芸術大学）

2学期	美学特殊講義	仮象の美学
2学期	美学講義	仮像の美学

長野順子 講師（非常勤講師・神戸大学）

1学期	文芸学特殊講義	18世紀イギリスの旅行記とジェンダー
1学期	文芸学講義	18世紀イギリスの旅行記とジェンダー

濱下昌宏 講師（非常勤講師・神戸女学院大学）

2学期	文芸学特殊講義	近代日本の文体および文体論の研究
2学期	文芸学講義	近代日本の文体および文体論の研究

2. 学部授業担当

上倉庸敬 教授

通年	美学・芸術学演習	美学・芸術学論文作成
通年	美学・芸術学史講義	美学概論
通年	美学・芸術学講義	ポイエーシスの問題
通年	美学・芸術学講義	身体とドラマ
通年	美学・芸術学演習	美学フランス語文献講読
通年	美学・芸術学演習	美学ドイツ語文献講読

藤田治彦 教授

1学期	環境芸術学講義	デザインの歴史と理論
-----	---------	------------

2 学期 環境芸術学講義 建築と庭園
通年 美学・芸術学演習 環境美学文献講読
通年 美学・芸術学演習 美学・芸術学論文作成

森谷宇一 教授

2 学期 文芸学講義 風景の問題
通年 文芸学演習 文芸学の諸問題
1 学期 西洋古典学講義 ホメロスの自然感情 (Ⅲ)
通年 西洋古典学演習 ウェルギリウス講読 (Ⅴ)

加藤 浩 助教授

通年 文芸学講義 古典詩学研究
通年 西洋古典学演習 アリストテレス「詩学」研究

小林信之 講師 (非常勤講師・京都市立芸術大学)

2 学期 美学・芸術学講義 仮象の美学

長野順子 講師 (非常勤講師・神戸大学)

1 学期 文芸学講義 18世紀イギリスの旅行記とジェンダー

濱下昌宏 講師 (非常勤講師・神戸女学院大学)

2 学期 文芸学講義 近代日本の文体および文体論の研究

3. 共通教育授業担当

藤田治彦 教授

I セメスター 人間教育科目 芸術と自然

上倉庸敬 教授

I セメスター 人間教育科目 芸術と自然

I セメスター 専門基礎教育科目 芸術の始まり

森谷宇一 教授

II セメスター 専門基礎教育科目 文芸学

4. 他大学大学院における講義等

藤田治彦

大阪大学市立大学, 2000年度後期, 2002年度後期, 住居意匠学特論, 講義 (授業題目なし)

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：利光 功 (東京工芸大学大学院芸術学研究科研究科長)

1. 研究組織体としての美学・文芸学

最初に評価対象である専門分野について所見を述べておきます。美学を専門分野とする研究組織は、昨今、かなり多くの大学にみられますが、これに文芸学を併置した研究組織は、本大学院にしかないものであり、極めてユニークな存在と言えます。感性学としての美学の研究対象は美と芸術の現象全般にわたり、そこには文芸も本来は含まれていると解せるのですが、私どもが芸術と言った場合、まず念頭に浮かぶのは感覚的直接性の強い美術や音楽であって、文芸は欠落しがちです。しかし言語を表現媒体とする芸術としての文芸は、いかなる民族も「言葉を話す人間(homo loquens)」である限り古代から創り続けてきている重要な芸術の領域であります。とりわけヨーロッパでは古典古代の時代からということは近代の芸術概念の誕生する以前から数多くの名作が作られ伝承されてきているばかりか、その研究も詩学(Poetics)として始められています。この文芸研究を専門分野として標榜していることは、ややもすると軽視しがちになる美学の一大研究領域を広く掲揚することになり、これが新鮮な研究課題の展開の可能性を孕むばかりか、専門研究者の育成へと繋がることから、高く評価したいと思います。

2. 研究活動について

過去5年間(1997年度~2001年度)の研究活動を概観してみますと、教員は欧文論文5編を含めて約50編の論文を発表しています。これは各教員が平均すると教員の就任年度が不明なので、無茶であり意味のない計算かも知れませんが年間少なくとも2編以上の論文をコンスタントに発表していることとなります。同じ期間の大学院生による学会誌、紀要等への論文発表も約60件に上り、国際学会、国内学会等での口頭発表が53件あります。このように数値の上からみて、極めて活発な研究活動が展開されているとしてよいでしょう。さらに研究活動を評価する上で見逃せないのは、文芸学研究室が1998年に文芸学研究会を立ち上げて、定期的に研究発表会を開催し始めただけでなく、機関誌『文芸学研究』を刊行しだしたことです。文芸学の発祥の地ドイツには有名な『文芸学と精神史』の季刊学術雑誌がありますが、日本で文芸学をタイトルにうたった研究誌は、本誌が始めてではないでしょうか。いずれにせよこの文芸学研究会の発足は、文芸学の研究活動を推進する上での拠点となるものであり、単に大阪大学における研究活動ばかりでなく、わが国の文芸学の研究の活性化に寄与するところ大なるものがあります。実際、『文芸学研究』には執筆希望者が徐々にふえているようで、早くもその効果が現れだしたと言えましょう。

時期を同じくして美学研究室では「デザイン史フォーラム」を発足させ、1999年と2000年に「国際デザイン史フォーラム」を開催していますが、これも従来の美学研究で軽視されがちであったデザイン領域の研究活動を推進するものとして評価できます。デザインは簡単に言えば生活と密着した美的造形にはかなりませんが、生活と交わるがゆえにおざなりにされてきました。けれども見方を変えれば、私どもの生活環境のアメニティばかりかあるべき社会の設計にもかかわる重要なアートなのであります。また美学研究室は2001年に大阪大学美学研究会を発足させ、『美学研究』を編集・発刊させました。美学の研究誌は、53年前に設立された美学会の機関誌『美學』を始めとし、近年は美学・芸術学関係の教育研究機関でも刊行されていて、さほど珍し

いものではありません。しかし本『美学研究』は院生の研究と批評の発表の場として院生のイニシアチブで編集・発行されている点で注目に値します。すなわちかかる研究誌を刊行できるのは、院生の層の厚さと研究レベルの高さの何よりもの証左であり、ひいては美学研究室の教員と学生を含めた総合体の熱気の現れと受け取れます。

3. 研究業績について ついで肝心な研究の内容について点検してみます。しかしこれを十全に行うためには、前述したようなおびただしい分量の研究業績に目を通さなければなりません。私にはそのための時間的余裕がないばかりか、そもそも研究評価の作業自体が私の能力を越えるところがあります。以下の評価とおぼしきものは、主要な三人の教授の若干の論文を読んだかぎりでの私の感想ないしはメモに過ぎません。なお敬称は省略させていただきます。 まず上倉庸敬の研究は、論題をさばく包丁の手さばきの見事さに特徴があり、これは広大な視野と柔軟な思考の持ち主にして始めて可能だと申せましょう。これをみるには例えば「デカダンス」と題する論文（神林恒道・太田喬夫編『芸術における近代』ミネルヴァ書房、1999年刊、所収）を読むにしくはないと考えます。19世紀末のヨーロッパの芸術運動を説明するのに、上倉は三島由紀夫の『卒塔婆小町』を用いています。これなどは私には到底思いつかない意表をついた手法であり、しかもこれを使用することによってデカダンスの本質を鮮明に浮かび上がらせるのに成功しています。森谷宇一は文芸学研究会の中心人物で、文芸学と西洋古典文学に関する数多くの業績がありますが、最近の注目すべき研究は「ホメロスの自然感情」（『フィロカリア』第17号第18号、第19号連載）でしょう。ホメロスの二大叙事詩の精密な読解をもとに、そこに直接描写や直喻表現によって現れる自然ないし自然現象を、様相と要素の点から具体的かつ精細に明らかにしており、これまで看過されていたホメロスの叙事詩のもつ新しい側面をあぶりだしているといえます。森谷が他方では日本の文芸も視野に入れて、風景論へと研究領域を広げていることも評価されてよいでしょう。藤田治彦はつとにウィリアム・モリスやアーツ・アンド・クラフツ運動の研究者として貴重な業績を上げていますが、近著『現代デザイン論』（昭和堂、1999年刊）では、産業、生活、情報、環境をキー・ワードに明治期以降現在までの日本のデザインの流れをたどり新境地を開拓しています。この著作の叙述は、精密でありながらコンパクトという両立しがたい要求を合致させた見事なものです。また藤田が中心となって前述の国際デザイン史フォーラムが開催され、その報告書であるデザイン史フォーラム編『国際デザイン史』（思文閣出版、2001年刊）の刊行をみたことも特記しておかねばなりません。本書は日本とヨーロッパ諸国との国際交流史としてのデザイン史であり、デザイン関係の歴史情報を満載したユニークな報告書です。加藤浩をはじめ院生の研究業績の評価については省略するしかありませんが、博士学位授与について付言しておきます。過去5年間の博士論文の提出者、題目、審査教官等の資料をいただきましたが、確かに院生にとっては博士の学位の取得は研究業績に数えられますものの、審査する教官にとって博士の学位の授与は研究業績には当たらないと考えられます。むしろ教育業績に含められると思われしますので、ここでの評価は保留します。

4. 学会活動への支援 最後に研究活動と直接関係しませんが、現在、国際デザイン史フォーラムと民族藝術学会の事務局を引き受けていること、1999年度から3年間美学会の事務局を引き受けていたことは、研究活動の基盤を支える地味ながらも不可欠な活動であり、この意味で事務担当の労を評価すると同時に学会員の一人として感謝する次第です。

3-22 音楽学・演劇学

【はじめに. 研究・教育活動の概要とその特色】

(音楽学)

総合大学のなかに位置づけられた大阪大学音楽学研究室は、日本では例外的な存在である。そうした環境ゆえ、1976年創立という浅い歴史ながら、古今東西南北の音楽文化を巨視的に把握しつつも、人文科学、社会科学あるいは自然科学といった諸分野と関係づける姿勢を保ち続けてきた。現在、教授2名というきわめて少ないスタッフながら、たしかな成果が生み出されつつあるのは、多様多彩な経験と関心を持ち、しかも幅広い年齢層からなる大学院生、研究生、客員研究員に恵まれてきたという面が少なくない。

それぞれの教官は、独自の研究活動を活発に続けながら教育にあたっている。一方では、主に東・東南アジア、オセアニア、そして西洋の音楽文化を、融合や革新を遂げる文化変動の様相として捉えていくことを眼目としており、また他方では、音楽家個人の仕事に総合的な見地より検証してゆくことを目標としている。こういった文化・地域研究と作品・個人研究という2つの機軸のもとで、合同演習というかたちで学生たちの関心に即した教育を展開している。教官、学生のいずれの研究においても、音楽および音楽活動のそれぞれの意義について、既成の価値判断に囚われず、事実そのものを丹念に見てゆくという実証的な姿勢が共通の特徴であるといえよう。とりわけ博士課程の大学院生たちは、博士論文の執筆を念頭に置いた調査研究を心がけており、事実、毎年数名の博士を輩出している。

(演劇学)

演劇学では、日本伝統演劇と近代演劇との二つの分野を有している。日本伝統演劇を教授天野文雄が、近代演劇を助教授永田靖が担当している。天野文雄は近年世阿弥研究と中世の能の歴史研究に積極的で、盛んに論考を発表している。永田靖はロシア演劇に限らず、近代演劇の理論と実践をトータルに考え、近年は演技論を軸に20世紀の演劇史を再構築する試みを続けている。また助手の大林のり子も、演劇学とドイツ近代演劇を多角的に研究している。それらの成果は別表に詳しい。授業はそれぞれ、専門の能楽史、ロシア演劇史に関するものの他に、初学者用の能楽入門的な概説や、西欧演劇史の概説や演劇学概論の講義や演習を行っている。また西欧演劇学と日本伝統芸能史のクロスオーバーな検討を主題にした、2人の教官による共同演習の他、実際に劇場に行き、上演を分析する観劇実習を行っている。さらに、数年に一度、研究上演やワークショップを行うのも特徴の一つである。それらの教育・研究成果を発表することにも積極的である。紀要『演劇学論叢』と、劇評誌『まくあい』を刊行している。前者は年1回、後者は年2回の刊行である。これらは院生や学部学生ばかりでなく、他大学の研究者からの投稿をも掲載し、活気のある研究成果発表活動を行っている。これらの教育研究活動を通して、上演そのものの本質を解明することに加え、日本演劇と世界演劇をトータルに見る視点と、身体的にアプローチする着想を育んでいる。

【Ⅰ. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：山口 修 天野文雄 根岸一美

助教授：永田 靖

助手：大林のり子

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
48	15	28	0	0	0	4	1	3

※うち留学生5名，社会人学生9名

3. 修了生・卒業生 (1997～2001年度)

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	11	3	3	4	0
'98	14	3	3	4	1
'99	9	5	4	7	2
'00	20	4	3	5	3
'01	10	6	3	4	1
計	64	21	16	24	7

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】 (1997～2001年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	3	1	4
'98	1	1	2
'99	6	1	7
'00	4	1	5
'01	2	2	4
計	16	6	22

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教官等

- 佐々木淳子 「中国北方農村の口承文化——語り物の書・テキスト・パフォーマンス」論文博士，98年2月25日，主査：山口修，副査：濱島敦俊，天野文雄
- 荒川恵子 「20世紀演奏史研究への解析的アプローチ——ベートーヴェン交響曲第8番を例として——」課程博士，98年3月18日，主査：山口修，副査：神林恒道，中村元保
- 金 英峰 「中部ベトナムにおける音楽文化の伝承と変化——宮廷音楽を中心に——」課程博士，98年3月18日，主査：山口修，副査：天野文雄，桃木至朗
- 小西潤子 「石貨の島からの声——ヤップ島の歴史的音楽民族誌——」課程博士，98年3月18日，主査：山口修，副査：土岐哲，永田靖
- 田中健次 「近現代日本における洋楽器産業と音楽文化」論文博士，98年7月7日，主査：山口修，副査：根岸一美，上倉庸敬
- 上野正章 「ケージと日本——戦後現代音楽の布置——」課程博士，99年3月12日，主査：根岸一美，副査：山口修，園府寺司
- 澤井万七美 「人形振り」論考」課程博士，99年7月26日，主査：天野文雄，副査：柏木隆雄，永田靖
- 張 雷 「映画音楽機能論」課程博士，99年9月9日，主査：山口修，副査：根岸一美，上倉庸敬
- 増田 聡 「現代ポピュラー音楽の美学的研究——「作品」「作者」概念を中心に——」課程博士，00年3月15日，主査：山口修，副査：根岸一美，藤田治彦
- 宮本圭造 「上方能楽史の研究」課程博士，00年3月15日，主査：天野文雄，副査：平雅行，永田靖
- 龔 林 「揚琴とその音楽文化の研究」課程博士，00年3月15日，主査：山口修，副査：根岸一美，永田靖
- 薛 羅軍 「侗族の音楽が語る文化の静態と動態」課程博士，00年3月15日，主査：山口修，副査：根岸一美，天野文雄
- 月溪恒子 「尺八古典本曲の研究」論文博士，00年3月15日，主査：山口修，副査：根岸一美，天野文雄
- 吉崎清富 「杵屋正邦における邦楽の解体と再構築」論文博士，00年6月15日，主査：山口修，副査：根岸一美，竹中亨
- 中川 桂 「近世後期大坂の芸能興行史研究」課程博士，00年6月29日，主査：天野文雄，副査：根岸一美，永田靖，村田路人
- 近藤秀樹 「ジャンクレヴィッチのヴィルトゥオーソ論における「技術—生成」の問題」課程博士，00年9月25日，主査：根岸一美，副査：山口修，鷺田清一
- 大久保賢 「音楽作品ゲーム論」課程博士，00年9月25日，主査：根岸一美，副査：山口修，上倉庸敬
- 金 士友 「中国東北農村の歌舞芸能「二人転」」課程博士，01年3月23日，主査：山口修，副査：根岸一美，濱島敦俊，永田靖
- 阪田順子 「20世紀におけるペルシャ伝統芸術音楽の伝承」課程博士，01年9月12日，主査：山口修，副査：根岸一美，林正則，加藤浩
- 三島 郁 「鍵盤上を飛遊する *discretion* とファンタジー——J.J. フローベルガーのチェンバロ曲にみられる表現装置——」課程博士，01年9月21日，主査：根岸一美，副査：山口修，柏木隆雄
- 山本宏子 「神を請う楽の音——福建省泉州提線木偶戯における技法の象徴性とその継承——」論文博士，02年3月12日，主査：山口修，副査：根岸一美，天野文雄
- CHAN, CHEONG JAN “The Musicking of Malay Folksongs in Ule Tembeling and its Applicative Implications on Music Education” (ウルタンバリ地域におけるマレー民謡の「ミュージッキング」と音楽教育に対する応用的展望) 論文博士，02年3月12日，主査：山口修，副査：根岸一美，永田靖，田中健次(佐賀大)

2. 大学院生等による論文発表等（1997～2001年度）

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'97	1	3	6	0	0	10
'98	3	5	5	2	0	15
'99	4	4	4	1	0	13
'00	3	3	4	1	0	11
'01	1	5	1	1	0	8
計	12	20	20	5	0	57

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'97	0	11	2	2	1	16
'98	0	7	5	0	0	12
'99	1	11	5	2	0	19
'00	1	12	5	0	0	18
'01	0	11	2	1	0	14
計	2	52	19	5	1	79

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

(1) 論文

(音楽学)

- 金 英峰 「朝鮮通信使の日本における音楽演奏」、『フィロカリア』14号, 1997年
- 金 英峰 「ベトナムにおける『雅楽』概念の変遷」、『音楽学』45/1, 1999年
- 増田 聡 「ポピュラー音楽における『作品』とはなにか——記号学的考察の試み——」、『ポピュラー音楽研究』創刊号, 1997年
- 増田 聡 「現代ポピュラー音楽の作品概念——クラブ・ミュージックの諸実践を中心に——」、『音楽学』45/1, 1999年
- 上野正章 「ジョン・ケージの日本音楽受容——笙のために作曲された作品を中心に——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第31号, 1997年
- 上野正章 「社会教育としてのアメリカ音楽——占領期の日本におけるCIEの音楽政策について——」, 『音楽学』45/2, 1999年
- 上野正章 「日本における初期のジョン・ケージ評について——秋山邦晴と黛敏郎を中心に——」、『フィロカリア』16号, 1999年
- 荒川恵子 「20世紀演奏史研究への解析的アプローチ——ベートーヴェン交響曲第8番を例として——」, 『音楽学』44/3, 1998年
- 近藤秀樹 「メティスとしての即興」, 『美学』193号, 1998年
- 大久保賢 「音楽作品における真正さの機能——ゲームとしての音楽作品——」, 『美学』194号, 1998年
- 薛 羅軍 「〔調査報告〕トン族の琵琶歌——中国湖南省通道トン族自治州の場合——」, 『東洋音楽研究』第63号, 1998年

- 奥中康人 「伊澤修二のもくろみ——国民教化のための音楽——」, 『音楽学』45/1, 1999年
 伊藤友子 「劇場での『観光』——バレエにおけるキャラクター・ダンス——」, 『民族藝術』第15巻, 1999年
 伊藤友子 「舞踊における『型』の一要素としての音——キャラクター・ダンスの教育を例に——」, 『音楽学』46/2, 2000年
 宮本美紀 「Festspiel als Festspiegel 祝祭鏡としての祝祭劇——ザルツブルク・フェスティバルにおける意義の変容——」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第35号, 2001年
 宮本美紀 「ウィーン祝祭週間の企画に見え隠れするウィーン気質」, 『民族藝術』第15巻, 2001年
 奥中康人 「岩倉使節団が見聞した西洋音楽」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』第33号, 1999年
 近藤(林) 睦 「[調査報告] ニューヨークにおける芸術教育普及活動——マンハッタン音楽院の事例を中心に——」, 『アートマネジメント研究』創刊号, 2000年
 今田健太郎 「無声映画の音」, 『東洋音楽研究』第65号, 2000年
 近藤秀樹 「手の形・響きの形——ジャンケレヴィッチのアルベニス論をめぐって——」, 『フィロカリア』17号, 2000年
 李 金叶 「[調査報告] 南部中国ヤオ族の音楽文化——打楽器を中心として——」, 『東洋音楽研究』第66号, 2000年
 三島 郁 「演奏における *discretion* ——「ファンタジーする」ために——」, 『フィロカリア』18号, 2001年

(演劇学)

- 宮本圭造 「南都禰宜衆の演能活動——もう一つの能楽史——(上)」, 『芸能史研究』138号, 1997年
 宮本圭造 「南都禰宜衆の演能活動——もう一つの能楽史——(中)」, 『芸能史研究』139号, 1997年
 宮本圭造 「南都禰宜衆の演能活動——もう一つの能楽史——(上)」, 『芸能史研究』140号, 1998年
 宮本圭造 「貴志猿楽考」, 『芸能史研究』141号, 1998年
 宮本圭造 「南都禰宜衆演能年表」, 『芸能史研究』142号, 1998年
 大林のり子 「ブラムとラインハルト——イプセンの『幽霊』をめぐって——」, 『演劇学論叢』第1号, 1998年
 大林のり子 「キャバレーと演劇の狭間——ラインハルトのキャバレー『響きと煙』——」, 『フィロカリア』第16号, 1999年
 大林のり子 「日本のマックス・ラインハルト受容」, 大阪大学文学会『待兼山論叢』34号, 2000年
 大林のり子 「不明瞭生の導入——ラインハルトの演技論——」, 『演劇学論集』日本演劇学会紀要, 38, 2000年
 大林のり子 「ラインハルト演出『夏の夜の夢』(一九〇五年)の上演分析」, 『美学』206号, 2001年
 中谷友美 「仏徳と歌徳——廃曲《住吉橋姫》をよむ——」, 『フィロカリア』17号, 2000年
 団夕紀子 「古浄瑠璃資料としての佐渡の説教浄瑠璃本」, 『フィロカリア』18号, 2001年
 木下耕介 「オーソン・ウェルズ作品の語りの構造」, 『演劇学論叢』第3号, 2000年
 木下耕介 「劇映画における「語り手」の修辞について」, 『映像学』67号, 2001年
 木下耕介 「現代アメリカ・インディペンデント映画——その言説の諸問題」, 『フィロカリア』19号, 2002年

(2) 発表

(音楽学)

- 荒川恵子 「20世紀演奏史研究への解析的アプローチ——ベートーヴェン交響曲第8番を例として——(発表要旨)」, 『日本音楽学会会報』第41号, 1997年
 上野正章 「1960年代の日本におけるジョン・ケージ受容について(発表要旨)」, 『日本音楽学会会報』第41号, 1997年
 大久保賢 「音楽作品解釈におけるオーセンティシティーの問題(発表要旨)」, 『美学』第191号, 1997年
 金 英峰 「東アジアにおける雅楽概念——主にベトナムのニャーニャック *nhanhac* のケースを中心に——(発表要旨)」, 『日本音楽学会会報』第41号, 1997年

- 増田 聡 「拡散する『作者』——現代ポピュラー音楽とテクノロジーに関する一考察——（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第41号，1997年
- 伊藤友子 「劇場での『観光』——バレエにおけるキャラクター・ダンス——（発表要旨）」、『民族芸術学会第14回大会案内』，1998年
- 大久保賢 「演奏不可能(?)な楽譜（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第44号，1998年
- 橋田 勲 「民国期中国における初期創作琵琶曲の一傾向——古琴曲との関係性——（発表要旨）」、『東洋音楽学会第49回大会プログラム』，1998年
- 近藤秀樹 「『月の光』のイロニー——ジャンケレヴィッチのフォーレ論とイロニー論——（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第44号，1998年
- 阪田順子 「ベルシア音楽用語にみる多義性（発表要旨）」、『東洋音楽学会第49回大会プログラム』，1998年
- 金 士友 「中国『東北二人転』の成立と継承過程にみる文化的重層性について（発表要旨）」、『民族芸術学会第15回大会案内』，1999年
- 近藤(林) 睦 「ニューヨークにおけるエデュケーション/アウトリーチ——マンハッタン音楽院の事例を中心に——（発表要旨）」，日本アートマネジメント学会全国大会プログラム，1999年
- 近藤(林) 睦 「プロの音楽を学校へ——マンハッタン音楽院のアーツ・イン・エデュケーション（発表要旨）」，日本音楽教育学会全国大会プログラム，1999年
- 増田 聡 「音楽著作権の美学（発表要旨）」、『美学』199号，1999年
- 宮本美紀 「大阪国際フェスティバル——日本初，都市型国際総合音楽祭の真実——（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第47号，1999年
- 近藤(林) 睦 「米国における芸術教育普及活動——マンハッタン音楽院の事例を中心に——（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第50号，2000年
- 近藤(林) 睦 「地域の音楽家を学校へ——アーツ・イン・エデュケーションの実践——（発表要旨）」，日本アートマネジメント学会全国大会プログラム，2000年
- 宮本美紀 「音楽祭が創る祝祭のリアリティー——20世紀音楽研究所主催『現代音楽祭』をめぐって——（発表要旨）」、『美学』203号，2000年
- 市村道久 「ジュゼッペ・タルティーニの装飾論における演奏行為の位置（発表要旨）」、『美学』第207号，2001年
- 今田健太郎 「無声映画の視聴覚体験と再構成される『音楽』（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第53号，2001年
- 近藤(林) 睦 「大学と地域を結ぶ芸術教育普及活動（発表要旨）」，地域公共政策学会全国大会プログラム，2001年
- 近藤(林) 睦他（共同研究） 「音楽家と学校教育の連携（発表要旨）」，日本音楽教育学会全国大会プログラム，2001年
- 谷 正人 「イラン伝統音楽のラディーフ——その再定義への試論——（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第53号，2001年
- 筒井はる香 「シューマンのピアノ作品とフォルテピアノ——消えてゆく音の美学——（発表要旨）」、『日本音楽学会会報』第53号，2001年
- 牧野淳子 「地域資源を活用したアートプロジェクト——竹から広がる音楽文化——（発表要旨）」，日本アートマネジメント学会全国大会プログラム，2001年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

今田健太郎，平成13年度（2001）4月6日柴田南雄音楽評論賞奨励賞アリオン音楽財団

4. 日本学術振興会研究員採択状況 計 1 名

<内訳>

PD：0名 DC：1名 外国人：0名

5. 大学院生・学部学生等の留学 計 1 名

学部：0名 PD：0名 DC：1名

6. 専門分野出身の研究者数（1997年度～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について）

計 7 名

'97年度：0名 '98年度：1名 '99年度：2名 '00年度：3名 '01年度：1名

<内訳>

1998年度

宮本圭造 (D 修了) 大阪学院大学国際文化学部専任講師

1999年度

荒川恵子 (D 修了) 京都女子大学文学部教育学科音楽教育学専攻専任講師

澤井万七美 (D 修了) 東亜大学総合人間文化学部専任講師

2000年度

金 士友 (D 修了) 吉林大学(中国)芸術学院助教授

小西潤子 (D 修了) 静岡大学教育学部音楽教育専攻助教授

増田 聡 (D 修了) 鳴門教育大学学校教育学部芸術系(音楽)教育講座助手

2001年度

大林のり子 (D 後期課程中退) 大阪大学大学院文学研究科助手

7. 専門分野出身の高度職業人数（'97年度～'01年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 21 名

'97年度： 3名 '98年度： 5名 '99年度： 2名 '00年度： 9名 '01年度： 2名

<内訳>	技術職	11名
	ジャーナリスト	3名
	アーティスト	5名
	教職	2名
	その他	0名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 5 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3 名

10. 刊行物

1998年度より現在『演劇学論叢』（専門分野の紀要）年1回

1991年度より現在『まくあい』（機関誌）年2回

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1997～2001年 民族芸術学会（国内学会）

2000～現在 近現代演劇研究会（国内学会分科会）

2002～2004年 日本演劇学会（国内学会）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998年4月2日第3回大阪大学演劇学セッション

1999年10月16日演劇学特別講演会・講師：クリストファー・イネス

1997～2000年（財）国際高等研究所プロジェクト「わざ学」への協力

1999～2001年「筆・学校教育・楽譜コンピュータ」研究会

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

（音楽学）

本専門分野は、1999年度より重点化の対象となり、総長裁量の学内研究教育特別経費による、2
教官の海外調査研究をはじめ、フィールドワークと資料探索・解釈を同時に推し進める研究を展
開している。さらに科学研究費補助金による研究を推し進め、また国際的な研究上の連携も強化
している。各教官の個々の業績としては、応用音楽学という、音楽文化の未来の在り方を問う方
法論を著述化したり、内外の顕著な業績を有する研究者を招聘し講演会等を開いてきた。また、
かつて宝塚少女歌劇のオーケストラを率いてクラシック音楽の演奏活動に尽力したヨーゼフ・ラ
スカについて、作曲家としての意義に目を向け、作品の蘇演が実現しつつある。概して、研究室
外の一般社会との関係を密にする姿勢が各教官の、ひいては本研究室の特徴といえよう。

しかしながら、学部2回生から大学院博士課程3回生まで8学年の幅を有し、さらに留学や社会
人等の出自をもつ学生諸君に対して、それぞれの段階に必要な学的知見をどれだけ得させること
ができていくかについては、なお大きな課題に留まっている。特に、音楽学という学問領域が全
国的に博士課程まで有する大学は未だに寡少である一方で、大学院大学として留学生や社会人の
受け入れを推進することが求められているという状況においては、高度な研究活動と効果的な教
育活動を両立させることは必ずしも容易な問題ではない。それに十分対応できるためには教官ス
タッフが質的のみならず、量的にも充実されることが本来必要であろう。また、多くのすぐれた
人材を社会に送り出すことができるよう、学部教育の充実にいっそう努力する必要がある。教授
2名というきわめて限られた指導体制ではあるが、周辺に若手研究者、外来研究者、修了生

等、幅広い学術的交流が常に開かれており、総合的に音楽学の多様な展開を示していることは、他大学にない顕著な特徴といえよう。

(演劇学)

本学の教育・研究は、能楽を中心とする日本伝統演劇の歴史と理論、西欧近代演劇の歴史と理論の基礎を研究・教育の軸にしている。2人の教官と1人の助手は毎年数本の論文執筆や口頭発表を行い、院生も論文執筆と研究発表を積極的に行っている。寄稿誌は学会誌から研究会紀要、商業誌まで幅広く、口頭発表も、演劇学会、能楽学会、芸能史研究会、また国際演劇学会、その他国内外のシンポジウムに毎年のように参加し、発表を行っている。その数と内容は、別表にあるように決して少ないものではなく、研究室の教育・研究の高まりを示していると思われる。それらの研究活動に加えて、観劇実習、研究上演・ワークショップ、紀要・劇評誌発行、などを行っている。観劇実習は、歌舞伎、能、浄瑠璃、小劇場、新劇、商業演劇などのジャンルから偏りなく、毎年5本の演劇を選択し、上演についての準備勉強を経た後に、観劇し、批評を書かせることで、上演そのものに触れさせる授業として受講者が多い。研究上演は、近年では、テネシー・ウィリアムズの短編劇や、狂言とベケット劇のワークショップを行ない、上演を作り手の側から認識させ、演劇研究の着想を豊かなものにする授業を展開している。また来年度からは、公立劇場と提携して、劇場の制作実務を経験させるインターンシップを開始することになっている。成果の発表活動である紀要刊行も、毎年欠かさず刊行しており、今年度は第5号を編集準備中である。劇評誌「まくあい」も毎年2冊を刊行し、数えて20号の節目を迎えている。これらのことを通して、日本演劇と西欧演劇を分けて考えるのではなく、広い意味での演劇としてトータルに捉える視点を養っている。また演劇を美学的に解明するだけでなく、社会の中の営みとして理解する方向性も大切にしている。大学院生も着実に増え、現在学部学生を含めて40名内外の学生が在籍して、それぞれの研究活動を行っている。また社会人大学院も5名前後在籍し、社会に開かれた大学院となっている。院生が研究する分野は、能楽、浄瑠璃、歌舞伎から、西欧や日本の近代演劇や大衆演劇、映画史や映画理論にまで及んでいる。また社会活動を見れば、天野文雄は演劇学会副会長に、永田靖は演劇学会事務局長になり、演劇学会の事務局が、研究室に移転されたことも、研究室の充実ぶりを示すものであろう。天野文雄は今年度創設された能楽学会の常任委員であり、永田靖も演劇学会の分科会である、近現代演劇研究会を主宰して毎年5回の研究例会を開催している。全体的にみて、演劇学研究室は、日本の国立大学としては唯一の専攻であるが、その教育と研究の充実ぶりは、その名に恥じないものと思われる。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等 (1997年度～2001年度の過去5年間)

1-1. 論文

(音楽学)

根岸一美 「音楽の社会学的解釈：アドルノの音楽的観相学をめぐって (改訂稿)」、『精神と音楽の交響 西洋音楽美学の流れ』、音楽之友社、pp. 363-381, 1997年

- 根岸一美 「表現と表情 — ベートーヴェンの《ハンマークラヴィーア・ソナタ》の緩徐楽章をめぐる」、『音楽による表現の教育』, 晃洋書房, pp. 296-310, 1998年
- 根岸一美 「転換期の音楽 — 調性解体のフィロソフィー」, 『芸術における近代／転換期のフィロソフィー』第2巻, ミネルヴァ書房, pp. 177-193, 1999年
- 根岸一美 「ヨーゼフ・ラスカ (1886~1964) と宝塚交響楽団」, 待兼山論叢／美学篇, 32, 大阪大学文学会, pp. 1-20, 1998年
- 根岸一美 「曲がわかるとは曲の何がわかるということなのか」, 学校音楽教育研究, 3, 日本学校音楽教育研究会, pp. 2-4, 1999年
- 根岸一美 「メッテルとラスカ — 関西における初期交響楽運動の牽引者」, 『日本の作曲20世紀』, 音楽之友社, pp. 28-29, 1999年
- 山口 修 「打てば響く」, 『国立劇場第23回音楽公演, 日本音楽の表現 — 打つ』プログラム冊子, 東京: 日本芸術文化振興会, pp. 4-5, 1999年
- 山口 修 “Another theory of transcontextualisation of performing arts: toward a positive evaluation of tourism”, *Workshop on Sustainable Tourism Development in World Heritage Sites · Planning for Hue* (Hue, VietNam, 3-6 May 1995: Final Report), pp. 67-71, 1997年
- 山口 修 “Transcontextualisation and stylistic changes of the East Asian court musics”, 第2回国際会議「東洋之雅楽」, 国立国楽院, pp. 131-159, 1997年
- 山口 修 “Needs for documenting body movements and sounds in expressive performance of traditional Asian cultures”, *National Workshop on the Documentation and Promotion of the Intangible Cultural Heritage in Lao P.D.R.*, ユネスコ・アジア文化センター, pp. 30-32, 1997年
- 山口 修 “Collecting data through human relations: DIPA (Documentation Items of Performing Arts) and its applications in broad perspectives”, *National Workshop on the Documentation and Promotion of the Intangible Cultural Heritage in Lao P.D.R.*, ユネスコ・アジア文化センター, pp. 33-38, 1997年
- 山口 修 “Proposal for a tripartite theory (transformation/ transcontextualisation/ transposition) and its application to the empowerment of an East Asian court music network with emphasis on the Vietnamese case”, *Safeguarding traditional cultures: a global assessment*, pp. 178-181, 2001年
- 山口 修 「音的表象文化論初探～基於一天的日記而發的隨想」(翻訳朱家駿・趙維平・龔林・仲万美子・橘田勲), 音楽藝術, Jan-97, 上海音楽学院, pp. 24-29, 1997年
- 山口 修 「直接及間接脈絡中の音楽及其変形形態」(翻訳朱家駿・趙維平・龔林・仲万美子・橘田勲), 音楽藝術, Feb-97, 上海音楽学院, pp. 15-18, 1997年
- 山口 修 「音楽是如何傳承的」(翻訳朱家駿・趙維平・龔林・仲万美子・橘田勲), 音楽藝術, Mar-97, 上海音楽学院, pp. 47-49, 1997年
- 山口 修 「音楽是如何傳播和變容的」(翻訳朱家駿・趙維平・龔林・仲万美子・橘田勲), 音楽藝術, 4月1日, 上海音楽学院, pp. 47-49, 1997年
- 山口 修 「豊中の音」, 『くらしと環境』第30回大阪大学開放講座テキスト, pp. 81-91, 1998年
- 山口 修 「少数民族に関する芸術文化政策」, 『芸術文化政策 I』, 東京: 放送大学教育振興会, pp. 91-97, 2002年
- 山口 修 「「撫づ」がごとき弾法」, 『国立劇場第97回邦楽公演, 日本音楽の表現 — 弾く』プログラム冊子, 東京: 日本芸術文化振興会, pp. 4-5, 1997年
- 山口 修 「知られざるラオスの表演芸術を垣間見る」, ひょうご舞台芸術, 12, (財)兵庫現代芸術劇場, pp. 8-9, 1997年
- 山口 修 「「エアポート・ミュージック」「エアポート・ダンス」 — ハワイのツーリズムと多民族社会から生まれる文化」, 『NHK 趣味悠々, アロハフラ! フラダンス入門』, 日本放送出版協会, pp. 44-45, 1998年
- 山口 修 「「もの」と「からだ」から音具と発音へ — ハワイの伝統楽舞を支える楽器の世界」, 『NHK

- 趣味悠々, アロハフラ!フラダンス入門], 日本放送出版協会, pp. 101-103, 1998年
- 山口 修 「「アジア」文化の創造——音楽交流の過去と現在」, アステイオン, 51, TBS プリタニカ, pp. 174-185, 1999年
- 山口 修 「外から見た沖縄の音」, 民族藝術, 13, 民族藝術学会, pp. 91-94, 1997年
- (演劇学)
- 天野文雄 「神戸市立博物館蔵『観能凶屏風』の時と場——安土桃山時代能楽史のために——」, 島津忠夫先生古稀記念論文集日本文学史論, 世界思想社, pp. 282-295, 1997年
- 天野文雄 「近代の能と坂元雪鳥」, 芸術学フォーラム/文芸・演劇の諸相, 7, 勁草書房, pp. 263-275, 1997年
- 天野文雄 「芸能と伝承——作り物にみる観世大夫元章の演出改革——」, 伝承文学講座/芸能伝承の世界, 6, 三弥井書店, pp. 6-31, 1999年
- 天野文雄 「『忠度』を読み解く——能における「作意」の把握をめざして——」, 『日本の芸術論』, ミネルヴァ書房, pp. 27-51, 2000年
- 天野文雄 「古作の鬼能《小林》成立の背景——足利義満の明德の乱処理策との関連をめぐる——」, 『鬼と芸能』, 森話社, pp. 193-220, 2000年
- 天野文雄 「アヴェウ当時の古七大夫——『時慶卿記』文禄二年十月十四日条の記事をめぐる——」, 鏡仙, 453, 鏡仙会, pp. 3-4, 1997年
- 天野文雄 「井阿弥をめぐる二、三の問題」, 日本文学誌要, 57, 法政大学国文学会, pp. 54-69, 1997年
- 天野文雄 「世阿弥がいた場所——義持以前の御用役者の環境——」, 演劇学論叢, 1, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 5-26, 1998年
- 天野文雄 「『弓八幡』成立の時と場——『申楽談儀』の「当御代」と応永初年の義満をとりまく状況をめぐって——」, 演劇学論叢, 2, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 1-28, 1999年
- 天野文雄 「「世阿弥」命名の時期続貂:「兵庫の御犬」の時期の検討から」, 鏡仙, 470, 鏡仙会, pp. 3-4, 1999年
- 天野文雄 「豊千の演出をめぐる諸問題」, 演劇学論叢, 3, 大阪大学演劇学研究室, pp. 140-150, 2000年
- 天野文雄 「『難波』成立の背景——応永十五年の將軍義持の家督継承前後の状況をめぐって——」, 芸能史研究, 151, pp. 1-28, 2000年
- 天野文雄 「足利義満の禅的環境と観阿弥の能——観阿弥の《自然居士》と《卒都婆小町》をめぐって——」, 演劇学論叢, 3, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 1-40, 2000年
- 天野文雄 「『養老』の典拠と成立の背景——『養老寺縁起』と明德四年の義満の養老の滝見物をめぐって——」, 演劇学論叢, 4, pp. 1-24, 2001年
- 天野文雄 「能における対権力者意識についての覚書」, 演劇学論叢, 4, pp. 25-36, 2001年
- 天野文雄 「『泰山府君』の原曲名をめぐる諸問題——世阿弥研究のために——」, 演劇学論叢, 4, pp. 179-199, 2001年
- 天野文雄 「世阿弥《千寿》の輪郭——現行《千手》以前の「千手の能」——」, 金剛, 149, 金剛会, pp. 10-16, 1997年
- 天野文雄 「式三番という名称の初出」, 鏡仙, 469, 鏡仙会, pp. 3-4, 1997年
- 天野文雄 「サンバンソウの呼称の変遷——三番猿楽から三番叟まで——」, 本田安次著作集, 17月報, 錦正社, pp. 1-6, 1999年
- 天野文雄 「『申楽談儀』の「セツカ」は「責呵(過)」なるべし」, おもて, 60, 大槻能楽堂, pp. 7-8, 1999年
- 天野文雄 「『楊貴妃』の舞台「蓬莱の島」のこと」, おもて, 61, 大槻能楽堂, pp. 8-9, 1999年
- 天野文雄 「世阿弥における「無常」の主題とその表現——『清経』の読み解きをとおして——」, 日本の美学, ぺりかん社, pp. 90-103, 1999年

- 天野文雄 「『壺折仕舞』とその絵画資料」, おもて, 62, 大槻能楽堂, pp. 8-9, 1999年
- 天野文雄 「光悦と能——能役者との交流と謡本からみた光悦謡本の出現——」, 光悦と能, MOA 美術館, pp. 105-114, 1999年
- 天野文雄 「御用役者増阿彌をとりまく環境——二つの『増阿彌画像賛から』——」, 鏡仙, 482, 鏡仙会, pp. 3-4, 2000年
- 天野文雄 「能大夫「竹村定之進」のモデル——『恋女房染分手綱』異聞——」, 国立文楽劇場, pp. 14-15, 2000年
- 天野文雄 「『一代能』覚書」, おもて, 63, pp. 8-9, 2000年
- 天野文雄 「『呼掛け』と『脇留め』」, おもて, 64, pp. 8-9, 2000年
- 天野文雄 「『邯鄲』の「面白や, 不思議やな」」, おもて, 65, pp. 8-9, 2000年
- 天野文雄 「禅竹の事跡についての新資料」, おもて, 66, pp. 8-9, 2000年
- 天野文雄 「明治十九年設立の申楽倶楽部のこと」, おもて, 67, pp. 6-7, 2000年
- 天野文雄 「世阿弥と禅——「六祖壇経」をめぐって——」, 国文学解釈と鑑賞, Oct-65, 至文堂, pp. 163-173, 2000年
- 天野文雄 「『風姿花伝』をめぐる二, 三の覚書」, 観世, Nov-67, pp. 24-31, 2000年
- 天野文雄 「『泰山木』の主題と趣向——世阿弥の作意を考える——」, 観世文庫設立五十周年記念能, 観世文庫, pp. 12-19, 2001年
- 天野文雄 「綱吉家宣時代に上演された稀曲の作り物」, おもて, 68, pp. 4-5, 2001年
- 天野文雄 「鏡板に松が描かれた時期と松をめぐる言説」, おもて, 69, pp. 10-11, 2001年
- 天野文雄 「『向來却來』と世阿弥の禅的環境」, おもて, pp. 8-9, 2001年
- 天野文雄 「年時不明の竹田権兵衛勸進能の評判」, おもて, 71, pp. 6-7, 2001年
- 天野文雄 「下間家伝来文書にみる下間少進の事績」, 藝能史研究, 141, 藝能史研究偕會, pp. 61-72, 1998年
- 天野文雄 「能を見る女たち——篠山能楽資料館蔵『演能図屏風』とその観客——」, 女性史学, 8, 女性史学会, pp. 94-97, 1998年
- 天野文雄 「『笠間の能』をめぐる諸問題:大成期における将軍周辺の能という視点から」, 演劇学論集, 37, 日本演劇学会, pp. 65-96, 1999年
- 天野文雄 「『杜若』を読み解く——「衆生済度の我」をめぐって——」, 演劇学論集, 39, pp. 71-85, 2001年,
- 永田 靖 「リアリズムに反するリアリズム——初期スタニスラフスキイ再考」, 演劇学の現在, 西洋比較演劇研究会/白鳳社, pp. 63-80, 1999年
- 永田 靖 「演出としてのロシア——小山内薫のインターカルチャリズム」, 日本の芸術論, ミネルヴァ書房, pp. 265-285, 2000年
- 永田 靖 「チェーホフ『かもめ』二つの初演をめぐって」, 西洋比較演劇研究会会報, 25, 西洋比較演劇研究会, pp. 25-30, 2000年
- 永田 靖 「ピオメハニカとロシア・アヴァンギャルドの演技身体」, アヴァンギャルドの世紀, 京都大学人文科学研究所京都大学学術出版会, pp. 170-199, 2001年
- 永田 靖 「感情の機械:ロシア・アヴァンギャルド演劇の系譜学に向けて」, 演劇研究, 10, 明治大学大学院演劇学研究会, pp. 31-41, 1999年
- 永田 靖 「作品としてのリハーサル・メソッド」, ASD, 5, ASD 研究会, pp. 29-39, 1999年
- 永田 靖 「セノグラフィとしての構成主義——タトリンの劇場」, 演劇学論叢, 1, 大阪大学文学部演劇学研究室, pp. 115-136, 1998年
- 永田 靖 「20世紀の演劇性——演技論の展開」, 西洋比較演劇研究会会報, 22, 西洋比較演劇研究会, pp. 4-7, 1999年
- 永田 靖 「Reception and Absorption; Reconsidering on Modern Japanese — Russian Theatre Circuit」, 演劇学論叢, 4, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 208-214, 2000年
- 永田 靖 「20世紀ロシア演劇を考える——芸術思想としての演技思想」, ユーラシア研究, 23, 日本ユーラシア協会, pp. 16-20, 2000年

- 永田 靖 「解釈技法としての演技論（1）」, 演劇学論叢, 4, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 103-129, 2001年
- 永田 靖 「音の編入——ヴェルトフからスターリンの映画へ」, 映像学, 59, 日本映像学会, pp. 57-72, 1997年
- 永田 靖 「修辞としての社会主義リアリズム演劇」, 演劇学論集, 38, 日本演劇学会, pp. 25-36, 2000年
- 大林のり子 「ブラムとラインハルト; イプセンの『幽霊』をめぐって」, 演劇学論叢, 1, 大阪大学文学部演劇学研究室, pp. 73-89, 1998年
- 大林のり子 「キャバレーと演劇の狭間; ラインハルトのキャバレー『響きと煙』」, フィロカリア, 16, 大阪大学文学部人文学科芸術学・芸術史講座, pp. 113-128, 1999年
- 大林のり子 「日本のマックス・ラインハルト受容; 小山内薫を中心に」, 待兼山論叢, 34, 大阪大学文学部, pp. 45-66, 2000年
- 大林のり子 「不明瞭性の導入; ラインハルトの演技論」, 演劇学論集, 38, 日本演劇学会, pp. 197-212, 2000年
- 大林のり子 「ラインハルト演出『夏の夜の夢』(一九〇五年)の上演分析」, 美学, Feb-52, 美学会, pp. 71-83, 2001年

1-2. 著書

- 天野文雄 「能に憑かれた権力者——秀吉能楽愛好記」, 天野文雄, 講談社, 286p, 1997年
- 山口 修 「応用音楽学」, 山口修, 東京: 放送大学教育振興会, 234p, 2000年
- 山口 修 「わざ学: 国際高等研究所報告書1999-004」, 編著者・山口修/近藤秀樹/著者・安藤由典(東京情報大学)/伊藤俊太郎(麗澤大学)/岡田節人(JT生命誌研究館)/木村敏(河合文化教育研究所)/杉田繁治(国立民族学博物館)/徳丸吉彦(お茶の水女子大学)/埴原和郎(東京大学)/鷺田清一, 京都: 国際高等研究所, 129p, 3-7/123-128, 2000年
- 山口 修 「新福山箏: 地域振興活性化事業報告書」, 編著者・山口修/田中健次(佐賀大学)/岡野仁(広島県立東部工業技術センター)/著者・伊藤穰(佐賀大学)/小川賢三(福山邦楽器製造業協同組合)/開原彰三(福山商工会議所)/徳丸吉彦(お茶の水女子大学)/長瀬淑子(NPO日本音楽国際交流会)/長川浩治(広島県立西部工業技術センター)/平田勉(広島県立東部工業技術センター)/三宅孝治(セイコーエスヤード株式会社)/吉崎清富(東京学芸大学)/吉野信行(広島県立西部工業技術センター)/米川裕枝(NPO日本音楽国際交流会)/和田進(福山邦楽器製造業協同組合)/渡辺健次(佐賀大学), 福山商工会議所, 75p, 2001年
- 根岸一美 「宝塚交響楽団定期演奏会記録——1926年(大正15)9月18日~1942年(昭和17)3月14日」, 根岸一美, 大阪大学大学院文学研究科, 12p, 1999年

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

(音楽学)

根岸一美 「《月光》ソナタの響き: 新発見の自筆メモをめぐって」, ベートーヴェン全集, 講談社, 3, pp. 110-119, 1997年

根岸一美 「伝統の変遷: ベートーヴェンの弦楽四重奏曲作品五九」, 講談社, pp. 90-97, 1998年

(演劇学)

永田 靖 「セルゲイ・パラジャーノフ」永田靖, 国文社, pp. 1-274, 1998年

(2) 書評

(音楽学)

根岸一美 「Robert D.Schick, *Classical Music Criticism*」, 日本音楽学会, Feb-43, pp. 134-135, 1998年

(演劇学)

- 天野文雄 「橋本朝生『狂言の形成と展開』」天野文雄, 国語と国文学, 東京大学国語国文学会, Mar-74, pp. 96-98, 1997年
- 天野文雄 「能楽研究新時代の一大成果: 竹本幹夫著『観阿弥・世阿弥時代の能楽』」天野文雄, 金剛, 金剛能楽堂, pp. 55-59, 2000年
- 永田 靖 「ネーヤ・ゾールカヤ著『ソヴェート映画史』」永田靖, 図書新聞, 図書新聞, 2537, pp. 3, 2001年
- 永田 靖 「ネーヤ・ゾールカヤ著『ソヴェート映画史』」永田靖, 映像学, 日本映像学会, 67, pp. 107-110, 2001年

(3) 辞典項目

(音楽学)

- 根岸一美 「ワーグナー事典」 「ブルックナー」 東京書籍, pp. 317-318, 2002年
- 根岸一美 「新編音楽中辞典」 「ブルックナー」 「ラスカ」 根岸一美, 音楽之友社, pp. 604-605/729, 2002年

(4) 解題・解説・総説

(音楽学)

- 根岸一美 「マーラー《交響曲第9番》」 根岸一美, 第39回大阪国際フェスティバルプログラム, pp. 14-15, 1997年
- 根岸一美 「ブルックナー《交響曲第7番》」 根岸一美, 大阪フィルハーモニー交響楽団第310回定期演奏会プログラム, 3巻5号, 1997年
- 根岸一美 「ブルックナー《交響曲第8番》」 根岸一美, 京都市交響楽団第401回定期演奏会プログラム, 3巻9号, 1998年
- 根岸一美 「バイロイト・ワーグナー・フェスティバルの歌手たち」 根岸一美, 第40回大阪国際フェスティバルプログラム, pp. 26-33, 1998年
- 根岸一美 「モーツァルト《フリーメイソンのための葬送音楽》」, 同「《交響曲第35番(ハフナー)》」, 同「《レクイエム》」 根岸一美, 京都市交響楽団第408回定期演奏会プログラム, pp. 9-13, 1998年
- 根岸一美 「チャイコフスキー《交響曲第5番》」 根岸一美, 東京フィルハーモニー交響楽団演奏会プログラム, pp. 0-2, 1999年
- 根岸一美 「サティ《グノシエンヌ》第1~3番」, 同「《犬のためのぶよぶよとした前奏曲》」, 同「《ジムノペディ》第1~3番」, 「イベール《物語》」 根岸一美, CD; Victor NCS151解説書 pp. 1-2, 1999年
- 根岸一美 「ベートーヴェン《ピアノ協奏曲第1番》」, 「ラフマニノフ《交響曲第2番》」 根岸一美, 大阪フィルハーモニー交響楽団第329回定期演奏会プログラム, pp. 6-8, 1999年
- 根岸一美 「シューベルト《交響曲第7番(未完成)》」, 同「《交響曲第8番(ザ・グレート)》」 根岸一美, 大阪フィルハーモニー交響楽団第38回東京定期演奏会プログラム, pp. 6-8, 1999年
- 根岸一美 「ベートーヴェン《交響曲第2番》」 根岸一美, 同「《交響曲第6番(田園)》」, 大阪フィルハーモニー交響楽団第336回定期演奏会プログラム, pp. 5-7, 2000年
- 根岸一美 「リムスキー=コルサコフ《序曲<ロシアの復活祭>》」, 「チャイコフスキー《交響曲第5番》」 根岸一美, 大阪フィルハーモニー交響楽団第339回定期演奏会プログラム, pp. 5-8, 2000年
- 根岸一美 「武満徹《ウォーター・ドリーミング》」, 「バルトーク《ピアノ協奏曲第3番》」, 「シベリウス《交響曲第1番》」 根岸一美, 大阪フィルハーモニー交響楽団第344回定期演奏会プログラム, pp. 6-8, 2001年
- 根岸一美 「ラスカ《日本組曲》」 根岸一美, CD; NEGIP-2001解説書, pp. 1-5, 2001年
- 根岸一美 「ブルックナー《ピアノ独奏曲集》」 根岸一美, CD; KKCC-2319解説書, pp. 2-6, 2001年

(演劇学)

- 永田 靖 「戦後ロシア・ソビエト映画史を読む」永田靖, 日本海新聞, 日本海新聞社, pp. 23, 1998年
- 永田 靖 「『国際デザイン史』3項目」永田靖, 思文閣出版, pp. 221-222/223-228/233-232/, 2001年
- 永田 靖 「ドン・キホーテに始まる」永田靖, ポリショイ劇場1999年日本公演プログラム, 日本舞台芸術振興会, pp. 40-41, 1999年
- 永田 靖 「映画社会主義, あるいはドブジェンコの自然」永田靖, アテネフランセ文化センター, pp. 6-9, 2000年
- 永田 靖 「プーシキンと作曲家たち」永田靖, 週間朝日百科世界の文学オペラの誕生, 朝日新聞社, 60, pp. 306-308, 2000年
- 永田 靖 「リチャード・ボレスラフスキ」永田靖, Theatre&Policy, シアタープランニングネットワーク, 3, pp. 7, 2000年
- 永田 靖 「ロシアの演劇・映画」永田靖, 地域研究のすすめ, 上智大学外国語学部ロシア語学科, pp. 78-83, 2001年
- 永田 靖 「スタニスラフスキの身体行動のメソッド」永田靖, Theatre&Policy, シアタープランニングネットワーク, 6, pp. 7, 2001年
- 永田 靖 「ソ連国産 SF 映画の系譜——『アエリータ』に始まる」永田靖, 不思議惑星キンザザ上映プログラム, パンドラ, pp. 25-27, 2001年

(5) その他 (エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

(音楽学)

- 根岸一美 「柴田南雄「人間について」」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1997年
- 根岸一美 「鈴木英明・ピアノ音楽の領域」根岸一美, 音楽芸術, 1997年11月号, pp. 111, 1997年
- 根岸一美 「相沢吏江子ザ・デビュー」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1997年
- 根岸一美 「Se.1997第6回現代音楽作品の夕べ」根岸一美, 音楽芸術, 1998年1月号, pp. 121, 1998年
- 根岸一美 「おらとりお「天地の謳」」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1998年
- 根岸一美 「ノルウェー・ベルゲン・フィル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1998年
- 根岸一美 「神戸・音楽の展覧会'97ポスト・モダン? ネオ・モダン?」根岸一美, 音楽芸術, 1998年5月号, pp. 90, 1998年
- 根岸一美 「大阪フィル第317回定期演奏会」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1998年
- 根岸一美 「関西現代音楽交流協会主催第23回現代音楽作品の夕べ<第二夜>」根岸一美, 音楽芸術, 1998年8月号, pp. 104, 1998年
- 根岸一美 「音楽の未来への旅シリーズ第1夜「声の冒険」」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1998年
- 根岸一美 「関西現代音楽交流協会主催第24回現代音楽作品の夕べ<第一夜>」根岸一美, 音楽芸術, 1998年9月号, pp. 111, 1998年
- 根岸一美 「バレンボイムの交響曲, 新録音二点登場」根岸一美, レコード芸術, 1998年10月号, pp. 188-189, 1998年
- 根岸一美 「佐渡裕・大阪フィル20世紀の交響楽展」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1998年
- 根岸一美 「ターリッヒ弦楽四重奏団+山上明美」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1998年
- 根岸一美 「野田千晶ハープリサイタル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1999年
- 根岸一美 「畑儀文シューベルト歌曲全曲演奏会最終回」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1999年
- 根岸一美 「ヴァント&ベルリン・フィルのブルックナー交響曲第9番」根岸一美, レコード芸術, 1999年6月号, pp. 202-203, 1999年
- 根岸一美 「大町陽一郎のブルックナー」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1999年
- 根岸一美 「20世紀のベスト・レコード=ブルックナー交響曲第3, 4, 5, 7, 8, 9番」根岸一美,

- レコード芸術編『名曲・名盤300NEW』, 音楽之友社, pp. 91-96, 1999年
- 根岸一美 「井原秀人バリトン・リサイタル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1999年
- 根岸一美 「ブーレーズのブルックナー《8番》を聴く」根岸一美, レコード芸術, 1999年10月号, pp. 212-213, 1999年
- 根岸一美 「東京クワルテット演奏会」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 1999年
- 根岸一美 「井上(ゴツケル)直美(ソプラノ)オペラ《UNEME》ほかの演奏(2000年1月, シュトゥットガルト近郊における録音)について」根岸一美, CD『Neuer Wind aus Japan Naomi Takeda Soprano』付属冊子, pp. 5-8, 2000年
- 根岸一美 「奥田一夫コントラバス・リサイタル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2000年
- 根岸一美 「山本正三バス・リサイタル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2000年
- 根岸一美 「大阪第一合唱団公演「天地創造」」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2000年
- 根岸一美 「田部京子(p)ジークハルト指揮リンツ・ブルックナー管のベートーヴェン:ピアノ協奏曲第4番, 同第5番《皇帝》」根岸一美, レコード芸術, 2000年10月号, pp. 154-155, 2000年
- 根岸一美 「加藤あや子ピアノ・リサイタル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2001年
- 根岸一美 「迫昭嘉ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全曲チクルス第4回」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2001年
- 根岸一美 「東郷麻矢ピアノ・リサイタル」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2001年
- 根岸一美 「ヴァント指揮ベルリン・フィルのブルックナー:交響曲第8番」根岸一美, レコード芸術, 2001年11月号, pp. 176-177, 2001年
- 根岸一美 「大阪フィルハーモニー交響楽団第354回定期演奏会」根岸一美, 関西音楽新聞, pp. 3, 2002年
- (演劇学)
- 永田 靖 「百年目のモスクワ,あるいは狭さの効用」永田靖, 劇, 劇場文化・ドラマの会, 15, pp. 2巻6号, 1998年
- 永田 靖 「モスクワのイボンカ,あるいは真摯さの勝利」永田靖, まくあい, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, 17, pp. 3, 1999年
- 永田 靖 「ミハイル・チェーホフのこと」永田靖, 定有, 定有堂書店, 5, pp. 2-6, 1999年
- 永田 靖 「チェーホフまたチェーホフ」永田靖, まくあい, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, 1月14日, pp. 1-3, 1998年
- 永田 靖 「『アルフレッド・ヒッチコックの世界』5項目」永田靖, アルフレッド・ヒッチコックの世界, シネマハウス, pp. 78-79, 2000年
- 永田 靖 「大都会の誘惑,あるいはニューヨークのウクライナ人」永田靖, まくあい, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, 19, pp. 3, 2000年
- 永田 靖 「演劇嫌い,あるいは俳優は自らをどう書くか」永田靖, TRB, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, 1, pp. 5-10, 2000年
- 永田 靖 「Voicfabricated:オペラのスタニスラフスキイ」永田靖, 劇 Drama, 劇場文化・ドラマの会, 23, pp. 5巻7号, 2001年
- 永田 靖 「21世紀の演劇に向けて」永田靖, まくあい, 大阪大学大学院演劇学研究室, 20, pp. 24-39, 2001年
- 永田 靖 「劇場と共同体第1回」永田靖, ひろば, 俳優座劇場, 81, pp. 6巻8号, 2002年

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

(演劇学)

- 天野文雄 「《女郎花》を読む」天野文雄, 《女郎花》国際会議, ピッツバーグ大学/ペンシルベニア州ピッツバーグ市, 1997/10/3-5

- 永田 靖 「Multiple Landscape: A Shift of Theatrical Space in Japanese Underground Theatre in 1960's」永田靖, International Symposium, アンカラ工科大学/トルコ, 1997/10/21
- 永田 靖 「Rethinking on Intercultural Japanese-Russian Theatre Relationship; Meyerhold and Osanai.」Yasushi Nagata, International Symposium; Meyerhold La mise en scene dans le Siecle., CNRS/パリ, 2000/11/8

(音楽学)

- 根岸一美 「Joseph Laska und seine in Japan geschriebenen Musikwerke」根岸一美, 国際美学会, 第15回国際美学会議, 神田外国語大学/千葉県千葉市, 2001/8/31

(2) 国内学会

(音楽学)

- 根岸一美 「ヨーゼフ・ラスカの音楽作品：研究報告と演奏」根岸一美, 日本音楽学会, 関西支部第280回例会, 神戸女学院大学/兵庫県西宮市, 1998/12/12
- 根岸一美 「ウィーンとリンツにおけるヨーゼフ・ラスカの遺稿資料について：Manyoshu-Lieder, Hyakunin-isshu を中心に」, 日本音楽学会, 関西支部第286回例会, 大阪大学文学部文13教室/大阪府豊中市, 2000/1/22
- 根岸一美 「ヨーゼフ・ラスカと日本で書かれた彼の音楽作品」根岸一美, 美学会, 第52回全国大会, 早稲田大学文学部/東京都新宿区, 2001/10/7

(演劇学)

- 天野文雄 「世阿弥という名前——義教以前の能役者の環境——」天野文雄, 日本演劇学会, 成城大学/東京都世田谷区, 1997/5/31
- 天野文雄 「能はいかなる演劇か——「作意」ということをめぐって——」天野文雄, 日本演劇学会, 大阪市立大学/大阪府大阪市, 2001/11/24
- 永田 靖 「音の編入：30年代前半のジガ・ヴェルトフの言説と実践をめぐって」永田靖, 日本映像学会, 関西支部研究例会, 京都工繊大学/京都府, 1997/5/24
- 永田 靖 「上演分析の方法と実践」永田靖, 日本演劇学会, 若手研究者交流セミナー, 玉川大学/東京都, 1998/5/29
- 永田 靖 「20世紀ロシア演劇を考える」永田靖, 日本ユーラシア協会, 総合シンポジウム「世紀の境に立ってロシアを考える」, 龍谷大学/京都府, 2001/4/8
- 大林のり子 「マックス・ラインハルト劇団の演技術」大林のり子, 待兼山芸術学会, 大阪大学Σホール/大阪府豊中市, 1999/3/9
- 大林のり子 「ラインハルト演出の時代感覚——『夏の夜の夢』(1905)の上演分析」大林のり子, 美学会西部会, 京都大学/京都府京都市, 2000/6/10

(3) 研究会

(演劇学)

- 天野文雄 「井阿弥をめぐる二、三の問題」天野文雄, 六麓会, 神戸市勤労会館/兵庫県神戸市, 1997/8/31
- 天野文雄 「《弓八幡》成立の時と場——能大成期の将軍と御用役者——」天野文雄, 芸能史研究会, 京大会館/京都府京都市, 1999/3/12
- 天野文雄 「《老松》成立の背景——応永二十七年冬の義持大患との関連をめぐって——」天野文雄, 六麓会, 神戸市勤労会館/兵庫県神戸市, 2000/1/23
- 天野文雄 「世阿弥と『六祖壇経』——『風姿花伝』の場合——」天野文雄, 世阿弥忌研究セミナー, 奈良県経済倶楽部/奈良県奈良市, 2000/8/8
- 天野文雄 「養老二題——秀次本『謡抄』とおぼしき『養老之注』の紹介と《養老》成立の背景——」

- 天野文雄, 六麓会, 神戸市勤労会館/兵庫県神戸市, 2001/3/11
- 天野文雄 「東大寺文書にみる鎌倉末期の田楽界——権力者との関係を中心に——」天野文雄, 芸能史研究会, 京都キャンパスプラザ/京都府京都市, 2001/6/3
- 永田 靖 「ロシア構成主義のセノグラフィ」永田靖, 日本文化研究センター共同研究横断セミナー, 国際日本文化研究センター/京都府, 1998/3/13
- 永田 靖 「小山内薫のロシア」永田靖, 近現代演劇研究会, 6月例会, 東梅田生涯教育センター/大阪府大阪市, 1998/6/29
- 永田 靖 「20世紀の演劇性:演技論の展開」永田靖, 西洋比較演劇研究会, シンポジウム「20世紀の演劇性」, 成城大学/東京都, 1999/1/9
- 永田 靖 「如月小春を読む」永田靖, 近代演劇史研究会, 7月例会, 明治大学/東京都, 1999/7/26
- 永田 靖 「チェーホフ『かもめ』二つの上演をめぐる」永田靖, 西洋比較演劇研究会, 言語・身体・モノローグ, 成城大学/東京都, 2000/11/20
- 永田 靖 「国際演劇研究集会2000報告」永田靖, 近現代演劇研究会, 近現代演劇研究会5月例会, 大阪大学/大阪府, 2000/5/20
- 永田 靖 「モンタージュを考える」永田靖, アヴァンギャルド芸術研究会, 京都大学人文科学研究所/京都, 2001/2/21
- 大林のり子 「マックス・ラインハルトの演技術」大林のり子, 近現代演劇研究会, 大阪市立大学文化交流センター/大阪府, 1998/12/15

(4) 自治体等での講演会・講習会・研究会等

(音楽学)

- 根岸一美 「水と音楽」根岸一美/廣井榮子, 阪神奈大学生涯学習ネット, 公開講座フェスタ'99, 大阪府立文化情報センター/大阪府大阪市, 1999/11/17

(演劇学)

- 永田 靖 「スタニスラフスキイ・システムの空間性」永田靖, シアター・プランニング・ネットワーク, 俳優の空間性の探究, オリピック記念青少年総合センター/東京都, 2001/12/1

2. 教員の受賞歴

- 山口 修: 第4回京都音楽賞, 1989年, ベトナム文化戦士勲章(ベトナム政府より, 1999年)
第10回小泉文夫音楽賞, 1999年
兵庫県功労者表彰, 2001年
- 天野文雄: 第18回観世寿夫記念法政大学能楽賞, 1996年

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997~2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

(音楽学)

平成9年度~12年度 課題番号: 9410018 基盤研究(B)(2)

研究代表者: 山口 修『外から見た沖縄の音文化—内外の視点を交叉させる比較文化—』

10,200,000円

平成12年度~13年度課題番号: 12410016

研究代表者: 根岸一美 基盤研究(B)(2) 『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団』

2,200,000円

(演劇学)

平成11年度～13年度 課題番号：11610048

研究代表者：永田 靖 基盤研究(C)(2) 『近現代演技論の実践と分析理論の研究』

3,400,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

(演劇学)

天野文雄

芸能史研究会委員 1998年4月～

日本演劇学会副会長 2002年4月～

能楽学会常任理事 2002年6月～

民族藝術学会理事 1991年4月～

永田 靖

日本演劇学会理事 2002年4月～

日本演劇学会事務局長 2002年4月～

日本演劇学会関西支部幹事 2002年4月～

日本映像学会理事 2002年4月～

日本映像学会関西支部幹事 2002年4月～

大林のり子

民族藝術学会庶務委員 2001年4月～

日本演劇学会幹事 2002年4月～

(音楽学)

山口 修

民族藝術学会理事 1984年4月～

東洋音楽学会・関西支部長 1992年10月～1996年10月

東洋音楽学会・監事 1998年10月～2002年10月

国際伝統音楽学会 (ICTM:International Council for Traditional Music) 世界大会企画委員 1999年8月～
2001年7月

日本学術会議芸術学研究連絡会委員 1999年4月～2003年3月

根岸一美

日本音楽学会・関西支部長 (1997年4月～1999年3月)

日本音楽学会・関西支部監事 (2001年4月～2003年3月)

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

山口 修 教授

1学期音楽学特殊講義

音楽学概説1

1 学期音楽行動研究特殊講義	応用音楽学の展開 (1)
2 学期音楽行動研究特殊講義	応用音楽学の展開 (2)
1 学期音楽行動研究特殊演習	音楽文献学の心得
2 学期音楽行動研究特殊演習	音楽資料学の心得
1 学期音楽行動研究特殊演習	音楽的修史論と民族誌の実際 (1) (根岸教授と合同)
2 学期音楽行動研究特殊演習	音楽的修史論と民族誌の実際 (2) (根岸教授と合同)
1 学期音楽学博士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (1) (根岸教授と合同)
2 学期音楽学博士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (2) (根岸教授と合同)
1 学期音楽学修士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (1) (根岸教授と合同)
2 学期音楽学修士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (2) (根岸教授と合同)

根岸一美 教授

2 学期音楽学特殊講義	音楽学概説 2
1 学期音楽作品研究特殊講義	ブルックナーの生涯と作品
2 学期音楽作品研究特殊講義	音楽分析の方法論研究
1 学期音楽作品研究特殊演習	音楽学原典研究
1 学期音楽作品研究特殊演習	和声の理論と実践
1 学期音楽行動研究特殊演習	音楽的修史論と民族誌の実際 (1) (山口教授と合同)
2 学期音楽行動研究特殊演習	音楽的修史論と民族誌の実際 (2) (山口教授と合同)
1 学期音楽学博士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (1) (山口教授と合同)
2 学期音楽学博士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (2) (山口教授と合同)
1 学期音楽学修士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (1) (山口教授と合同)
2 学期音楽学修士論文作成演習	音楽研究のプレゼンテーション (2) (山口教授と合同)

津上英輔 講師 (非常勤講師)

1 学期音楽学特殊講義	西洋における音楽観の歴史—古代から近世まで
-------------	-----------------------

井口淳子 講師 (非常勤講師)

1 学期音楽行動研究特殊講義	フィールドワーク再考—中国黄土高原の事例より
----------------	------------------------

天野文雄 教授

2 学期演劇作品研究特殊講義	能の名作を読む
通年芸能史特殊演習	近世の手紙を読む
通年演劇史特殊講義	世阿弥の芸術
通年演劇作品研究特殊演習	観世大夫元章の能楽改革の総合的研究
通年演劇学特殊演習	世阿弥の能を読む
1 学期演劇史特殊講義	能楽史概説
1 学期演劇学特殊演習	文献処理基礎演習 (永田助教授と合同)
2 学期演劇学特殊演習	観劇実習 (永田助教授と合同)
通年芸能史博士論文作成演習	芸能史研究の諸問題
通年芸能史修士論文作成演習	芸能史研究の諸問題

永田 靖 助教授

1 学期演劇学特殊講義	メイエルホリドを読む
1 学期演劇史特殊講義	戦後演劇の展開
1 学期演劇学特殊演習	演劇研究の基礎 I
2 学期演劇学特殊演習	演劇研究の基礎 II
1 学期演劇史特殊演習	映画研究の基礎 I

2 学期演劇史特殊演習 プドフキン研究
 1 学期演劇学特殊演習 文献処理基礎演習 (天野教授と合同)
 2 学期演劇学特殊演習 観劇実習 (天野教授と合同)
 通年演劇学博士論文作成演習 演劇学文献研究
 通年演劇学修士論文作成演習 演劇学文献研究

林 公子 講師 (非常勤講師)
 2 学期芸能史特殊講義 近世芸能の環境
 瀬戸 宏 講師 (非常勤講師)
 1 学期演劇学特殊講義 日中比較演劇論

ジョナ・サルズ 講師 (非常勤講師)
 1 学期演劇学特殊演習 レクチャーとワークショップ

2. 学部授業担当

山口 修 教授

1 学期音楽学講義 音楽学概説 1
 1 学期音楽行動研究講義 応用音楽学の展開
 2 学期音楽行動研究講義 応用音楽学の展開
 1 学期音楽行動研究演習 音楽文献学の心得
 2 学期音楽行動研究演習 音楽資料学の心得

根岸一美 教授

2 学期音楽学講義 音楽学概説 2
 1 学期音楽作品研究講義 ブルックナーの生涯と作品
 2 学期音楽作品研究講義 音楽分析の方法論研究
 1 学期音楽学演習 音楽学原典研究
 1 学期音楽作品研究演習 和声の理論と実践

天野文雄 教授

2 学期演劇作品研究講義 能の名作を読む
 通年芸能史演習 近世の手紙を読む
 通年演劇史講義 世阿弥の芸術
 通年演劇作品研究演習 観世大夫元章の能楽改革の総合的研究
 通年演劇学演習 世阿弥の能を読む
 1 学期演劇史講義 能楽史概説
 1 学期演劇学演習 文献処理基礎演習 (永田助教授と合同)
 2 学期演劇学演習 観劇実習 (永田助教授と合同)

永田 靖 助教授

1 学期演劇学演習 文献処理基礎演習 (天野教授と合同)
 2 学期演劇学演習 観劇実習 (天野教授と合同)
 1 学期演劇学講義 メイエリホリドを読む
 2 学期演劇史講義 戦後演劇の展開
 1 学期演劇学演習 演劇研究の基礎 I
 2 学期演劇学演習 演劇研究の基礎 II
 1 学期演劇史演習 映画研究の基礎 I

2 学期演劇史演習 プドフキン研究

津上英輔講師（非常勤講師）

1 学期音楽学講義西洋における音楽観の歴史——古代から近世まで

井口淳子講師（非常勤講師）

2002年度：

1 学期音楽行動研究講義 フィールドワーク再考——中国黄土高原の事例より

林公子講師（非常勤講師）

2 学期芸能史講義 近世芸能の環境

瀬戸宏講師（非常勤講師）

1 学期演劇学講義 日中比較演劇論

ジョナ・サルズ講師（非常勤講師）

1 学期演劇学演習 レクチャーとワークショップ

3. 共通教育

天野文雄教授

Ⅱセメスター 専門基礎 能楽概説——能の歴史と魅力

根岸一美 教授

Ⅱセメスター 専門基礎 音楽学

永田靖 助教授

Ⅱセメスター 専門基礎 演劇学入門

4. 他大学における集中講義等

山口修

東京藝術大学大学院音楽研究科

沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科

東京大学大学院人文社会系研究科

大阪芸術大学大学院芸術文化研究科

神戸大学大学院文学研究科

根岸一美

愛知県立芸術大学大学院音楽研究科

大阪教育大学大学院教育学研究科

同志社大学大学院文学研究科

神戸女学院大学大学院音楽研究科

島根大学大学院 音楽史特論

愛媛大学大学院 音楽学

天野文雄

香川大学, 2001年度, 1, 伝統芸能文化論, 講義, 能の歴史と魅力

香川大学, 1999年度, 1, 伝統芸能文化論, 講義, 能の歴史と魅力

【Ⅶ. 外部評価の報告】

●音楽学

評価者：月溪恒子（大阪芸術大学教授／同大学院芸術文化研究科教授）

【全体的評価】

大阪大学における音楽学・演劇学について評価する際にまずあげなければならないことは、国立総合大学におけるこれらの専門分野が歴史的に新しいにも関わらず、その存在がなければ過去四半世紀の日本の音楽学・演劇学が成立し得なかったほど、重要な役割を果たしてきたという点であります。別のいい方をすれば、後発であるがゆえにきわめて自由な発想のもとで急速に発展し、学問と教育の世界に大きく貢献してきたということです。これらの詳細については、個別の観点から後に述べますが、評価者自身が音楽学を専門とするため、音楽学が中心となることをお断りしておきます。

二つの専門分野で構成される教官の業績については、まったく申し分がないと言えます。きわめて賞賛すべきものであります。しかも、従来の日本の大学で行われていたのとは違った観点が常にあるということ、例えば、世阿弥を扱いながら現代的な視野を入れ、しかも世阿弥だけを孤立化させるのではなく、近代演劇との関係においても捉えようとする態度、また、民族音楽学を扱いながら特定地域に限定することなく、広く音楽文化全体に関連づけようとする態度、あるいはまた、西洋音楽史を扱いながら、それを西洋社会における西洋音楽史に限定せずに、日本との相関において捉えようとする態度が、その代表的な例です。

博士課程に関しては、他大学の卒業生をきわめて柔軟に採用してよい訓練を施し、多くの優れた課程博士を生んできた点が評価されなければならないでしょう。また、他大学の関係者やいわゆる外部の人に広く門戸を開いて論文博士として提出させ、すぐれた論文の完成に寄与したことは高く評価されます。その授与率については、大阪大学が常に一位を保ってきたといっても過言ではありません。恐らく例外は、平成13年度におけるお茶の水女子大学人間文化研究科ぐらいだろうと思われまゝ。人文科学は、自然科学と異なり、博士号授与に関しては大きく立ち後れてきました。そうした長い伝統のなかにいる人文科学系の人びとは、大阪大学から毎年輩出される博士について、当初は批判的でした。しかし、「博士課程は作ったがめったに博士を出さない」といった悪しき風潮を打破するための突破口を開いたという点で、大阪大学がとった方針は特別な意味があります。今後もこの方針を継続し、論文博士による博士号取得の可能性を与え続けることは、大阪大学大学院文学研究科の存在価値をますます高めることになるでしょう。

大学院修了生の活動についても、きわめて重要な点が指摘できます。私自身が関係した仕事というなら、第一に、1974年から15年間にわたって行われた「アジア伝統芸能の交流」(Asian Traditional Performing Arts) という研究において、大阪大学大学院の修了生が重要な役割を果た

してきました。第二に、日本およびアジアの音楽研究にとって不可欠な基本文献である『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽』全7巻・別巻2（蒲生郷昭・柴田南雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道万里雄編，1988-1989）において、阪大関係者がいかに多く寄与したかは所載の諸論文を見れば明らかです。第三に、最近完成した *The Garland encyclopedia of world music volume 7 East Asia : China, Japan, and Korea*. (Robert C. Provine, Yosihiko Tokumaru, and J. Lawrence Witzleben (eds.), New York; London; Routledge, 2002) では、阪大大学院の恩恵で学んだ者、あるいは阪大との関連を持った者がいなければ、その論文の三分の一は成立しなかったほどの貢献をしました。そして第四に、日本の音楽学全体にとって重要な『ニューグローヴ世界音楽大事典』全21巻（柴田南雄・遠山一行総監修，東京：講談社，1993-1995）（日本語版）や、*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. の新版についても、阪大関係者の寄与が目立っています。これらの功績は、大学側から提示された過去5年間の資料には含まれませんが、創設以来輩出した歴代院生たちの、社会的活動に関する特記すべきこととして指摘しておきます。

【研究の先見性・独創性】

先にも述べたとおり、大阪大学の音楽・演劇学は、日本の音楽学・演劇学研究を新しく構成した存在であるといっても過言ではありません。教官数が少ないことがかえって利点となったのか、従来の縦割り式 (pigeon hole) ではなく、学問領域を横に繋ぐ役割を果たした結果、今まで研究対象にならなかったような音楽の重要なアスペクトがつぎつぎと明らかにされました。例えば、西洋音楽におけるフィールドワークの要素、アジア音楽に関する歴史的研究などにこうした独創性が現れています。

【研究の実証性・手堅さ】

この点に関しては、多少の問題を感じます。まず、民族音楽学におけるフィールドワークについては、ひじょうにいいモデルが阪大の教官および院生によって示されてきました。それに対して音楽の歴史研究については、史料操作および古文書的研究に対して余り関心を払って来なかったように思われます。この点が改善されれば、さらに新しい視野が広がるはずです。また、西洋音楽に限らず一般に音楽作品の分析に関して、伝統的な形式分析や様式分析の成果をあまり使うことなく、いわばそれらと無関係に研究を始める傾向が（特に過去において）強かったのが残念であります。これらの点は恐らく教官の不足からくるものであって、そうしたトレーニングを行う人がいなかったことが大きな原因と思われます。同じことは、演奏に関する研究についても言えます。教官および学生はそれぞれ何らかの演奏を行います。音楽大学ではないので、あくまでアマチュアです。アマチュアおよび素人の段階の演奏能力をもって演奏研究を始めるのは危険を伴います。これについては、さらに優れた演奏能力をもった教官を非常勤ででも採用し、演奏のもつ奥深さ、恐ろしさを丹念に学生に指導しないと、誤解したまま演奏研究をおこなうことになりかねません。以上が実証性・手堅さという側面において不足する点であり、今後の改善が望まれます。

【研究の波及性】

これについては、ひじょうに重要な貢献をしています。特に阪大の民族音楽学、西洋音楽学の研究方法が、日本だけではなく世界の音楽研究において大きな影響を与えていることは、論文に引用されているものからも明らかでしょう。また、東京外国語大学、国立民族学博物館などで開かれる共同研究において、阪大の関係者が文化人類学や史学の専門家たちに与えた影響はきわめて大きいと言わざるをえません。これらが隣接分野における成果の波及性として評価されるべき点であります。

【教官組織としてのまとめ】

新しいテーマで登場する論文博士に対して、教官が相補的・友好的であることが有効に働いて、広く門戸を開く可能性を強くしています。ただし、美学・芸術学の領域に留まっている傾向があるので、今後の課題としては、他学部の教官をさらに巻き込むようにして、学際性をよりいっそう高めることを要請します。具体的には、音響学・楽器学的研究や、自然科学的なテーマが出てきたときに、理学部・工学部、生命科学等の教官が参入するような姿勢を強めることが望ましいでしょう。阪大には学部を超えてもっと横に広げる潜在能力が十分にあるので、こうした学際性に向けてのネットワーク作りを期待します。

【学会活動での位置】

私が知る限り、美学会・民族芸術学会・日本音楽学会・東洋音楽学会などにおいて、教官が会長や支部長の職をおこなうばかりでなく、委員として、あるいはシンポジウムの司会者・パネリストとしてきわめて重要な役割をはたしてきました。国際学会についても、1990年の「第四回国際音楽学会シンポジウム」を阪大音楽学研究室が実質的に運営した、という実績があります。また、卒業生たちが学会活動で大きな貢献をし、阪大が日本の芸術関係の学会活動のいわば中心になっているといっても過言ではありません。院生の学会誌への投稿、学会発表もじつに活発です。望むらくは、院生の海外での発表や外国語による論文投稿が増えることを期待します。

以上を総合して結論的に言えることは、個人の独創的研究を多く行い、また、個性的学生を育てた点で阪大の存在はとても重要だということです。それと同時に、そうした学生が育ちうるような、また、そうした研究が遂行できるようなシステムを作ったこと（例えば『フィロカリア』『待兼山論叢』『演劇学論叢』『まくあい』などの刊行物の定期的刊行）を、高く評価したいと思います。新たに音楽学専門の定期刊行物『阪大音楽学報』が修了生・院生を中心に発刊される予定と聞いていますが、今後ともこうした方針が継続されていくことを切に希望します。

●演劇学

評価者：毛利三彌（成城大学文芸学部教授）

大阪大学大学院文学研究科専門分野音楽・演劇学に関する評価

大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室は、国立大学に設置されている唯一の演劇学研究室と

して、日本における演劇理論・歴史研究のパイオニア的役割を果たしていることは衆目の認めるところである。天野教授は能楽を専門分野とし、永田助教授は欧米、特にロシア演劇の近現代歴史を中心的な研究領域とし、大林助手はドイツの近現代演劇を専門とするといったように、その研究範囲が古今東西にわたっていることの強みを大いに発揮している。むろん、いくつかの私立大学の演劇学科のように、数人の専門領域を異にする専任教員によって、さまざまな演劇分野を専門的に指導する態勢をもつほうが望ましいことは事実だろうが、それは当然のことながら制限のあることであろう。日本の歌舞伎・浄瑠璃や民俗芸能、あるいは東洋、西洋の細分化された領域については、適宜、非常勤講師によってカバーされており、そのためであろう、大学院生の研究テーマには、各演劇分野から映像分野にまでおおよそ多様性が見られる。(現に、過去五年間に博士号が授与された演劇学論文には、人形浄瑠璃関係、芸能興行関係のものもある。) また、実践面の教育を目的とするものではないにもかかわらず、あるいはかえってそのためか、演劇創造の現場への関心に高いものがあるのも特色である。(天野教授は、現実の能楽界と深いつながりを持ち、芸術祭の審査員を委嘱されたりもしているし、永田助教授は、近現代演劇研究会を実質的に主宰して、現場の演劇人との交流を図ったりもしている。) それは、この研究室から年2回発行されている演劇批評誌『まくあい』に寄稿される舞台批評からも、明瞭にうかがうことのできることである。

『まくあい』は、演劇批評の貧困な日本の現状に一石を投じるものとしてはじめられ、すでに10年以上つづいているが、一つの舞台あるいは映画作品に対して、かなりの紙幅をさいて批評することによって、演劇・映画批評の新しいあり方を探ろうとしている。たしかに、演劇の新しい研究領域としての上演分析 (performance analysis) の方法は、世界的にもいまだ模索の状態にあるし、そもそも一過的な現象としてしか成立しない舞台現象を、客観的な分析の対象することの是非が問われもする。しかし、演劇とは上演としてしか存在しない以上、実際の舞台成果を抜きにして演劇を研究することは、机上の空論となる危険性をもつだろう。そのことの反省に立って、二十世紀初頭のヨーロッパにおいて、学問研究としての演劇学の成立をみたのであってみれば、当研究室の実際の舞台にむける関心は、演劇学の正当な道を進んでいるものであると評価することができる。それはもちろん、各人の、より実証的科学的な研究成果に裏打ちされることを前提とするが、そのような論文は、当研究室発行の『演劇学論叢』や、学部、学科発行の紀要、また学会の機関誌等において、頻繁に発表され、評価されている。

わたしはそれらの論文すべてに目を通してはいるわけではないが、少なくとも身近に接したかぎりでも (寄贈を受けた著書、論文、あるいは演劇学会々長および紀要編集責任者として接した発表、論文)、天野教授、永田助教授、大林助手をはじめ新旧の大学院生の研究成果は、その着眼の斬新さと論証の堅実さにおいて、日本の演劇研究のもっとも優れた地平にあると断言することができる。これは、指導的な立場にある三氏が、幅広い視野と関心を基盤としながら、先述したような、確固としたそしてかなり限定された専門地点をもっており、その点に関しては、他の追随を許さぬ研究成果を持続的に発表していることに由来するものだろう。今後は、それぞれの研究が、当研究室を中心として互いに連携しあい、包括的な演劇理論として結実することが望まれ

る。それは日本における国立大学唯一の演劇学研究室としての義務でもあるだろう。

それには、当然のことながら、まず研究の体系性が求められる。しかし、周知のとおり、今日の人文科学研究一般において、体系性はさしたる関心の的となっていないきらいがある。それは今日の文化現象自体に、それを求めない、あるいは許さないところがあるからでもあり、そのことは演劇の分野においても顕著に見られることである。だが、一時流行の演劇文化現象論は、世界的に、資料中心の歴史研究や理論研究へとやり戻されつつある傾向にあり、むしろそれらはかつてのような教条的な研究とは異なるべきであるが、当研究室の研究方向は、わたしには、世界の新方向の道しるべともなることを目指しているように思われる。それが、上記のような期待を抱かせる理由でもあるが、それはまた、演劇の分野のみで充足されるものではないだろう。その点で、隣接する音楽学研究室との連携のみならず、他の芸術分野、美学の研究室との共同作業が可能である当文学研究科の利点は計り知れない。これまで、他にまで波及する形でそのような共同プロジェクトが組まれたことがあるかどうか、寡聞にして知らないが、今後は、文部科学省の支援もあって、おそらくその方向に積極的に進んで行くものと予想される。特に、音楽学研究室が民族音楽研究を柱の一つに据えていることは、演劇学研究室にとって、この上ない強みともなるだろう。残念ながら、わたしには音楽学研究室の業績を正当に評価する能力はないが、山口、根岸両教授の指導のもとで、音楽と演劇の接点ともなるテーマの研究が少なからずなされていることは、その業績表からも容易に推測される。

ところで、本年度から、当演劇学研究室に日本演劇学会の事務局が移転した。これは、学会の東西セクションを一本化するにあたって、会長としてのわたしのたつての願いで引き受けていただいたものであるが、天野副会長、永田事務局長、大林幹事のもとで、すでに旺盛な学会活動がはじめられている。日本演劇学会は、日本におけるさまざまな演劇研究をすべて束ねる性格の学会であり、これからは世界的な視野にたつて、海外の演劇研究者・学会との共同研究を進めて行くことが必要であろうと考えている。そのためにも、永田事務局長の、数多くの国際会議出席の経験、多くの海外研究者との交流経験は大いに役立つだろう。しかも永田助教授が、ロシアの研究者に知己が多いだけでなく、近年は韓国その他のアジアにも交流の場を広げていることは、心強いかぎりである。わたし個人としても、これからは他のアジア諸国、とくに東南アジア諸国との研究交流の必要性を痛感しているが、この点でまたもや、当演劇学研究室が、アジアの民族音楽研究に大きな成果をあげている音楽学研究室と隣接していることは、大変な僥倖といわねばならない。(過去五年間の音楽学関係の博士号授与論文には、ベトナム、ペルシャ、マレーの民族音楽に関するものまで含まれている。)音楽は、アジアの伝統演劇においてもっとも重要な要素であり、そこでは音楽研究と演劇研究との境目が実質的にないに等しいことは、いまさらいうまでもない。このことは、天野教授が専門とする能楽研究が如実に示していることでもある。

このように見てくると、大阪大学大学院文学研究科の専門分野「音楽・演劇学」は、教員組織の上でもユニークなものがあり、それにふさわしい業績をあげてきたといえるが、演劇学研究室は今後、その研究方向をより広く、深く進めることによって、日本の演劇研究を強力に牽引していくことになるだろうと期待される。

3-23 美術史学

【はじめに、研究・教育活動の概要とその特色】

先史美術から現代美術にいたるまで、絵画、彫刻はもとより、建築や工芸、デザインも含めたあらゆる造形芸術を研究対象とし、その歴史学的研究を行っている。主として芸術理論に関する研究を行う芸術学とは密接な関連を保っているが、美術作品に関する諸問題を作品に即して実証的に解明し、あるいは美術作品が生成され、受容される歴史的背景を考究することに美術史学の特色がある。現在、教授3名、助教授1名、助手2名のスタッフを擁し、さらに総合学術博物館にも美術史学を専門とする教授1名がおり、美術史学を専門とする講座としては日本で最大規模をほこる。授業を担当しているのは教授、助教授で、それぞれの専門に応じて西洋美術学史概説および13～17世紀のイタリア美術、西洋近現代美術・建築、日本の中近世絵画、東アジアの仏教美術、南アジア・東南アジア美術に関する授業を開講しているほか、各年3名ほどの非常勤教官がその他の地域、時代、ジャンルに関する授業を開講している。学内における授業のほか、美術館、寺社などにでかけて作品を見学する学外演習にも力を入れ、さらに国内外を問わず、作品研究のためのフィールドワークを奨励している。また、コンピュータによる画像処理や文献データベースの検索、写真やビデオによる画像の収集にも力を入れている。なお、社会的活動としては、美術展覧会の企画運営、種々の美術作品調査、鑑定などへの協力のほか、文化財保護、市史編纂事業などにも協力している。

【I. 現在の組織】

1. 教員 (2002年4月現在)

教授 4 助教授 1 講師 0 助手 2

教授：肥塚 隆 (兼任, 総合学術博物館長) 若山映子 奥平俊六 園府寺 司

助教授：藤岡 穰

助手：島田 明 吉松実花

2. 在学生 (2002年4月現在)

2002年度の学生数								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
33	15	13	0	0	1	1	5	0

※うち留学生5名, 社会人学生9名

3. 修了生・卒業生（1997～2001年度）

年度	学部卒業生	大学院博士前期 (M) 修了者	大学院博士後期 (D) 修了者	博士号学位授与者	出身の研究者
'97	20	6	2	0	0
'98	7	9	0	0	1
'99	10	2	1	1	1
'00	11	6	2	0	0
'01	0	0	1	0	1
計	48	23	6	1	3

【Ⅱ. 過去5年間の組織としての研究・教育活動】（1997～2001年度）

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'97	0	0	0
'98	0	0	0
'99	1	0	1
'00	0	0	0
'01	0	0	0
計	1	0	1

2. 大学院生等による論文発表等（1997～2001年度）

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	その他	計
'97	0	3	0	0	0	3
'98	0	2	0	0	0	2
'99	0	5	0	0	0	5
'00	0	4	0	0	0	4
'01	0	10	0	0	0	10
計	0	24	0	0	0	24

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等での 講演会	その他	計
'97	0	1	0	0	0	1
'98	0	1	2	0	0	3
'99	0	3	4	0	0	7
'00	0	2	1	1	0	4
'01	0	2	1	0	0	3
計	0	9	8	1	0	18

2-3. 上記の論文・口頭発表のうち、在学中（発表年度において在籍）の大学院生による主要業績

- 清水佐保子 「1920年代のヴァシリー・カンディンスキー——幾何学的抽象における絵画「空間」をめぐる——」『待兼山論叢』31号, 1997年
- 清水佐保子 「ロシア・アヴァンギャルドとバウハウスにおける美術教育の諸相」『鹿島美術研究』年報第14号別冊, 1997年
- 藤原貞朗 「アンリ・フォションの浮世絵解釈とジャポニスム以後の日本美術史編纂」『美術フォーラム21』第1号, 1999年
- 綿田稔 「西湖の花と鳥——京博本伝雪舟筆四季花鳥図屏風について——」『美術史』143冊, 1997年
- 阿部彩子 「四条河原遊楽図の成立と展開」『待兼山論叢』32号, 1998年
- 藤原貞朗 「節度なき彫刻 (Sculpture of no scruples) —— 1870年以降の彫刻のリアリズムをめぐるいくつかの考察 ——」『鹿島美術研究』年報第15号別冊, 1998年
- 安井雅恵 「山東京伝の内筆画について——寛政後期の作品を中心に」『フィロカリア』16号, 1999年
- 竹口浩司 「バルテュスとフランスの伝統——一九三四年のピエール画廊における展覧会をめぐる——」『フィロカリア』16号, 1999年
- 吉松実花 「聖ニコラオスの聖人伝アイコン——聖人伝サイクルにおけるテキストとイメージ——」『待兼山論叢』33号, 1999年
- 安井雅恵 「山東京伝序『江戸風俗図巻』をめぐる問題」『鹿島美術研究』年報第16号別冊, 1999年
- 阿部彩子 「絵画史料に見る近世初期のかぶき小屋——『はな』を遣す」『芸能史研究』148号, 2000年
- 大川葉子 「池大雅筆『東山清音帖』について」『フィロカリア』17号, 2000年
- 川西由里 「北野恒富筆『道行』について」『待兼山論叢』34号, 2000年
- 竹口浩司 「1920 - 1930年代のフランスにおける美術と文学との関係——バルテュスをめぐる——」『鹿島美術研究』年報第17号別冊, 2000年
- 阿部彩子 「風俗画に描かれた初期歌舞伎の櫓」『フィロカリア』18号, 2001年
- 池上裕子 「ロバート・ラウシェンバークの不安と内省」『フィロカリア』18号, 2001年
- 川西由里 「北野恒富の画風形成に関する一考察——明治末期の作品を中心に——」『美術史』150冊, 2001年
- 宮崎奈都香 「ルーヴル美術館スペイン・ギャラリーにおける「スペイン美術」の形成——テロール男爵による作品収集とスペイン側の対応——」『待兼山論叢』35号, 2001年
- 安井雅恵 「歌麿美人画と京伝『客衆肝照子』」『美術史』151冊, 2001年
- 宮崎奈都香 「3年間の自由主義政権期におけるゴヤの民衆像の変容」『鹿島美術研究』年報第18号別冊, 2001年
- 大野陽子 「対抗宗教改革期におけるヴァラッロのサクロ・モンテ」『鹿島美術研究』年報第18号別冊, 2001年
- 吉松実花 「14世紀前半のマケドニア地方における教会堂装飾——聖ニコラオス図像を中心に——」『鹿島美術研究』年報第18号別冊, 2001年
- 吉松実花 「アギオス・ニコラオス・オルファノス聖堂の内部装飾——アカティストス聖母讃歌サイクルを中心に——」『民族藝術』18号, 2002年 (2001年度)
- 吉松実花 「Text and Image in the hagiographical cycle of St. Nicholas: SEA STORIES」『大手前大学人文科学部論集』2号, 2002年 (2001年度)
- 竹口浩司 「バルテュスと『リアリズム』」『美学』1998年
- 川西由里 「明治期の北野恒富」『美術史』1999年
- 安井雅恵 「歌麿に見る京伝洒落本の影響——『婦人相学十躰』を中心に——」『美術史』1999年
- 宮本久宣 「原田直次郎の第三回内国勸業博覧会出品について」『美術史』1999年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

1名 '01年度 島田 明
1名 '01年度 安井雅恵

5. 大学院生・学部学生等の留学

'97年度 '98年度 '99年度 '00年度 '01年度
1名 1名 4名 8名 5名

6. 専門分野出身の研究者（1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について） 計 5 名

'97年度：0名 '98年度：1名 '99年度：1名 '00年度：0名 '01年度：2名

<内訳>

1998年度 島田 明（博士後期課程中退） 大阪大学文学部 助手*
1999年度 藤原貞朗（博士後期課程中退） 大阪大学文学部 助手*
2001年度 藤原貞朗 茨城大学人文学部 助教授
2001年度 吉松実花（博士後期課程中退） 大阪大学大学院文学研究科 助手*

7. 専門分野出身の高度職業人（1997～2001年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳等の技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 19 名

'97年度：10名 '98年度：0名 '99年度：3名 '00年度：4名 '01年度：2名

<内訳> その他（博物館美術館学芸員） 19名

8. 客員研究員等の受け入れ状況 計 1 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況 計 1 名

10. 刊行物

1998年度 『国際交流美術史研究会 第16回 国際シンポジウム報告書
東洋美術史研究の展望』 その他

1999年度 『上方美術の19世紀』（平成9～10年度科学研究費基盤研究（A）（1）研究報告書，研究代表者 奥平俊六）

2001年度 『近代美術史（学）におけるユダヤ人』（平成10～13年度科学研究費（B）（1）研究代表者 囿府寺 司）

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

学会 1997～2001年度 民族藝術学会事務局
1999～2001年度 美術史学会西支部事務局
研究会 1997年度 国際交流美術史研究会事務局
1998年度 日本の抽象絵画研究会
2000年度, 2001年度 美術とユダヤ研究会

シンポジウム関連

1997年10月20日～24日 国際交流美術史研究会シンポジウム

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998年3月7日 待兼山芸術学会研究発表会（第8回）2月20日
待兼山芸術学会誌「フィロカリア」15号刊行
1999年3月6日 待兼山芸術学会研究発表会（第9回）2月22日
待兼山芸術学会誌「フィロカリア」16号刊行
2000年2月12日 待兼山芸術学会研究発表会（第10回）2月10日
待兼山芸術学会誌「フィロカリア」17号刊行
2001年4月14日 待兼山芸術学会研究発表会（第11回）2月10日
待兼山芸術学会誌「フィロカリア」18号刊行
2002年4月13日 待兼山芸術学会研究発表会（第12回）3月29日
待兼山芸術学会誌「フィロカリア」19号刊行

13. 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

① 教育, 院生の研究

現有スタッフによる授業, ならびに非常勤教員の授業により, 美術史学全般にわたる偏りの少ない授業を実施し, 学部生, 大学院生ともに着実な成果をあげてきたと考える。現教員（教授, 助教授）は全員, 専門領域も異なるため多彩な授業が可能で, 現教員では手薄な領域については非常勤講師で補ってきた。また, 全教員が出身大学も異にしており, いわゆる「純血率」の高さによる弊害がないのも特徴としてあげられよう。

講義, 演習, 見学などの授業の他, 論文作成のための現地調査は, 教官, 学生ともに国内外で活発に行っており, 西洋美術研究の博士前期課程大学院生においても, 修士論文作成前に現地で少なくとも一ヶ月程度, 場合によっては数ヶ月以上の期間, 調査を行うことが定着してきた。博士後期課程の院生には常時二, 三名以上の留学生がおり, その中には博士論文作成中の者もいる。

これらの研究活動の成果は, 学会（口頭発表）, 紀要, 学会誌などに着実に発表されてきた。もっとも, 「美術史」や外国雑誌など, 厳格なレフリース制を採用している雑誌への掲載

数、博士論文の提出数なども、さらに増やせればよかったと考える。今後の課題としてさらに促進していきたい。

② 教員の研究活動等

教員（教授、助教授、助手）の多くはほぼ継続的に科学研究費による研究プログラムを遂行してきており、学術振興会海外特別研究員をつとめる助手もいる。それらの研究成果は別紙資料を参照されたい。学会活動については、美術史学会西支部事務局、民族藝術学会本部事務局、国際交流美術史研究会事務局などをつとめ、さまざまな形で学会活動にも貢献してきた。また、懐徳堂記念会の主催する講演、講座のほか、各種文化講座、美術展覧会の監修、カタログ執筆、美術館での講演活動など、さまざまな形で一般市民向けの教育、普及活動も行ない、市史編さん事業などにも協力してきた。大学院重点化完了後も博物館設置、学会運営等、学内外の仕事も多く、そのような中での研究・教育活動は決して余裕のあるものではなかった。仕事の効率化など、研究、教育全般にわたってさらに改善する努力の必要があると考えられる。

【Ⅲ. 教員の研究活動】

1. 教員による論文発表等（1997年度～2001年度の過去5年間）

1-1. 論文

- 奥平俊六 「金閣寺の遊楽」, 寛永文化のネットワーク——「隔冥記」の世界——, 思文閣出版, pp. 125～134, 1998年。
- 奥平俊六 「屏風について」, 近世屏風絵展 展覧会, 篠山歴史美術館, pp. 1～3, 1997。
- 奥平俊六 「彦根屏風とともに」, 彦根屏風への誘い, 彦根城博物館, pp. 92～97, 1998年。
- 奥平俊六 「大学における美術史教育の現状と課題」, 博物館, 美術館, 大学と東洋美術, 谷口財団第15回国際シンポジウム報告書, 国際交流美術史研究会, pp. 69～74, 1998年。
- 奥平俊六 「目の愉楽」, 古今1号, 光琳社, pp. 118～122, 1998年。
- 奥平俊六 「狩野派の役割」, 仏教と文化33, 四天王寺, pp. 91～115, 1998年。
- 奥平俊六 「酔うこと」, 古今2号, 光琳社, pp. 103～109, 1999年。
- 奥平俊六 「都市の実感」, 古今4号, 光琳社, pp. 120～128, 2000年。
- 奥平俊六 「寛永時代の雪舟気分」, 雲谷等益, 山口県立美術館, pp. 1～2, 2001年。
- 若山映子 「Una nuova interpretazione iconografica della «Creazione di Adamo» di Michelangelo」, Studi di Storia dell'arte in onore di Maria Luisa Gatti Perer, Vita e Pensiero, Milano, Italia, pp. 215～222, 1999年。
- 肥塚 隆 「中世インドのダイナミズム；ヒンドゥー教とムスリムの美術」, インド（2）／世界美術大全集東洋編14巻, 小学館, pp. 9～16, 1999年。
- 肥塚 隆 「ヒンドゥー教美術の興隆」, インド14巻, 小学館, pp. 41～56, 1999年。
- 肥塚 隆 「グプタ時代の美術」, インド（1）／世界美術大全集東洋編13巻, 小学館, pp. 201～216, 2000年。
- 肥塚 隆 「ジャイナ教美術」, インド13巻, 小学館, pp. 329～336, 2000年。
- 肥塚 隆 「東南アジア文化と「東南アジア化」」, 東南アジア／世界美術大全集東洋編12巻, 小学館, pp. 9～16, 2001年。

- 肥塚 隆 「インドネシアの彫刻」, 東南アジア／世界美術大全集東洋編12巻, 小学館, pp. 243～252, 2001年。
- 肥塚 隆 「プレ・アンコール期の彫刻」, 東南アジア／世界美術大全集東洋編12巻, 小学館, pp. 86～90 2001年。
- 藤岡 穰 「伝説の尊像, 蔵王権現」, 役行者と修験道の世界, 毎日新聞社, pp. 193～198, 1999年。
- 藤岡 穰 「仏像にみる光と空間の視覚化——いわゆる飛天光を中心に——」, 藤岡 穰／荒木浩編 <心>と<外部>——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, pp. 101～120, 2002年。
- 藤岡 穰 「説法印阿弥陀如来像をめぐる試論」, 待兼山論叢35美学篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1～27, 2001年。
- 藤岡 穰 「アンコールの栄光——クメールの歴史と美術——」, 仏教と文化34号, 総本山四天王寺, pp. 72～83, 2001年。
- 圀府寺司 「森村泰昌 変身する自由」, 芸術学の100年, 日本と世界の間, 勁草書房, pp. 186～210, 2000年。
- 圀府寺司 「ファン・ゴッホとロシア文学：<夜のカフェ>, <アルルの病室>とトルストイ, ドストエフスキー」, 待兼山論叢13号, 大阪大学文学会, pp. 1～18, 1997年。
- 圀府寺司 「消えた「鳥」と「麦畑」：現代の映像作品におけるファン・ゴッホ神話の解体」, 西洋美術研究1号, 三元社, pp. 125～140, 1999年。
- 圀府寺司 「封印を解く：今なぜ「美術史とユダヤ」か」, 西洋美術研究4号, 三元社, pp. 4～11, 2000年。
- 圀府寺司 「ハンス・ルードヴィヒ・コーン・ヤッフエ：「教養」からデ・ステイルの<エチカ>へ」, 西洋美術研究4号, 三元社, pp. 111～132, 2000年。
- 圀府寺司 「イコノクラスム：イメージをめぐる闘争」, 西洋美術研究6号, 三元社, pp. 4～7, 2001年。
- 圀府寺司 「ファン・ゴッホ作<ドービニーの庭>：その来歴と関連資料」, 日蘭学会会誌2月22日, 日蘭学会, pp. 1～18, 1998年。
- 吉松実花 「14世紀前半のマケドニア地方における教会堂装飾：聖ニコラオス図像を中心に」, 鹿島美術研究年報18号別冊, 鹿島美術財団, pp. 330～343, 2001年。
- 吉松実花 「聖ニコラオスの聖人伝イコン：聖人伝サイクルにおけるテキストとイメージ」, 待兼山論叢33, 大阪大学文学会, pp. 1～22, 1999年。
- 吉松実花 「アギオス・ニコラオス・オルファノス聖堂の内部装飾：アカティストス聖母讃歌サイクルを中心に」, 民族藝術18号, 民族藝術学会, pp. 183～193, 2002年。
- 島田 明 「ビルサー塔群の仏教美術」, フィロカリヤ15号, 待兼山芸術学会, pp. 77～119, 1998年。
- 島田 明 「南インド・スリランカにおける<アーンドラ式仏陀像>の受容」, 平成11年度鹿島美術財団年報別冊17号, 鹿島美術財団, 2000年。
- 島田 明 「アジャンターの菩薩図像：観音, 弥勒像を中心に」, 佛教藝術237号, 毎日新聞社, pp. 42～66, 1998年。
- 島田 明 「アーンドラ美術の仏陀像：浮彫像に見るその成立と展開」, 佛教藝術249号, 毎日新聞社, pp. 13～48, 2000年。

1-2. 著書

- 肥塚 隆 「インド(2)」(共著), 責任編集・肥塚隆／宮治昭(名古屋大学), 小学館, 458p., pp. 9～16/41～56/350～361, 1999年。
- 肥塚 隆 「東南アジア：世界美術大全集東洋編第12巻」(共著), 編者・肥塚隆, 小学館, 462p., pp. 9～16/86～90/243～252/354～357/402～411, 2001年。
- 奥平俊六 「寛永文化のネットワーク——「隔冥記」の世界」(共著), 著者・奥平俊六ほか／編者・岡佳子(大手前大学)／岩間香(摂南大学)／監修者・冷泉為人(池坊大学), 思文閣出版, 285

- p., pp. 125-134/278-284, 1998年。
- 奥平俊六 『日本美術館』, 編者・青柳正規(東京大学) / 東野治之(大阪大学) / 佐野みどり(成城大学) / 五味文彦(東京大学) / 島尾新(東京国立文化財研究所) / 奥平俊六(大阪大学) / 河野元昭(東京大学) / 木下直之(東京大学) / 五十殿利治(筑波大学), 小学館1248p., pp. 562-567/572-573/598-607/640-641/672-685, 1997年。
- 奥平俊六 『洛中洛外図・舟木本——町のにぎわいが聞こえる——』, 小学館, 127p., 2001年。
- 肥塚 隆 『インド(1); 世界美術大全集東洋編第13巻』(共著), 編者・肥塚隆 / 宮治昭(名古屋大学), 小学館, 486p., pp. 201-216/329-336/413-429, 2000年。
- 藤岡 穰 『日本仏像史』(共著), 著者・水野敬三郎(東京芸術大学名誉教授) / 浅井和春(青山学院大学) / 石松日奈子(無所属) / 松田誠一郎(東京芸術大学) / 副島弘道(跡見学園女子大学) / 岡田健(東京国立文化財研究所) / 武笠朗(実践女子大学) / 和田圭子(東京芸術大学) / 奥健夫(文化庁) / 山本勉(東京国立博物館) / 熊田由美子(立命館大学) / 浅井京子(富岡美術館) / 藤岡穰 / 根立研介(京都大学) / 鈴木喜博(文化庁) / 長谷洋一(堺市博物館) / 田中修二(大分大学) / 瀬山里志(サントリー美術館) / 監修者・水野敬三郎(東京芸術大学名誉教授), 美術出版社, 220p., pp. 146, 2001年。

1-3. 翻訳, 書評, 解説, 辞典項目等

(1) 翻訳書

- 関府寺司 『ファン・ゴッホと日本』, 日蘭交流400年の歴史と展望, 日蘭学会, pp. 169, 1999。
- 吉松実花 『J. グットマン「ユダヤ美術とユダヤ研究」』, 西洋美術研究, 三元社, 4号, pp. 133-145, 2000。

(2) 書評

- 奥平俊六 『綿田稔『雲谷等益——寛永期の雪舟流——』』, 紫明, 紫明の会, 10, pp. 111, 2002。

(3) 辞典項目

- 奥平俊六 『『日本思想史辞典』「画論」「小堀遠州」「作庭記」「等伯画説」「狩野派」「絵巻」「雪舟』』, ペリかん社, 7項目, 2001。
- 若山映子 『『新カトリック大事典』キアロスケーロ / クワトロチェント / コレッジョ / サン・ピエトロ大聖堂 / サン・マルコ大聖堂』, 研究社, 2巻, pp. 112/674/963-4/1108-9/1112, 1998。

(4) その他(エッセイ, 批評, 新聞記事, インタビュー等)

- 奥平俊六 『『二枚の絵』「本多平八郎姿絵」』, 毎日新聞社, pp. 108, 2000。
- 奥平俊六 『『名画日本史』「彦根屏風」』, 朝日新聞社, 1巻, pp. 128-129, 2000。
- 奥平俊六 『『日本のデザイン』20項目』, 紫紅社, 11巻, 20項目, 2001。
- 藤岡 穰 『『世界美術全集東洋編第3巻三国・南北朝』作品解説 nos. 237-238/241-244/249/253』, 世界美術全集東洋編第3巻三国・南北朝, 452-454/457-458, 小学館, 2000。
- 藤岡 穰 『朝日新聞創刊120周年記念特別展西遊記のシルクロード『三蔵法師の道』図録列品解説 nos. 140/142-149/170』, 朝日新聞創刊120周年記念特別展西遊記のシルクロード『三蔵法師の道』図録, 305-306/309, 朝日新聞社, 1999。
- 関府寺司 『オランダ, 出島の国のジャポニスム Holland; Japonisme in the nation of Deshima』, ジャポニスム入門, 思文閣出版, pp. 110-119, 2000。
- 関府寺司 『「カミーユ・ピサロ」, 「アビ・ヴァールブルク」』, ユダヤ学のすべて, 新書館, pp. 161/164, 1999。
- 関府寺司 『ヤン・フルスカー「ゴッホ全作品集」CD-ROM版』, 富士通, 1997。
- 関府寺司 『西洋美術館(近代)』, 西洋美術館, 小学館, pp. 816-941, 1999。
- 関府寺司 『ファン・ゴッホ自画像』, 二枚の絵, 毎日新聞社, pp. 148, 2000。

- 囀府寺司 「生身を晒して演じ、騙りだした森村泰昌 Yasumasa Morimura」, 国立国際美術館, 2, 1998。
 囀府寺司 「「カンディンスキー, 芸術における精神的なもの (抽象芸術論)」, 「アンドレ・ブルトン, シュルレアリスム宣言」, 20世紀を震撼させた100冊, 出窓社, pp. 48-49/82-83, 1998。
 囀府寺司 「ピート・モンドリアン, 幾何学的秩序に従って論証された「エチカ」, 美術手帳, 美術出版社, pp. 46-57, 1998。
 吉松実花 「「美術史とユダヤ」(文献リストと解題)」, 西洋美術研究, 三元社, 4号, pp. 187-200, 2000。
 島田 明 「世界美術大全集図版解説」, 世界美術大全集, 小学館, インド2, pp.nos. 89-96/111-116, 1998。

1-4. 口頭発表

(1) 国際学会

- 奥平俊六 「若沖とわたし」, 京都国立博物館国際シンポジウム, 京都国際会議場/京都府京都市, 2000/11/11。
 若山映子 「イタリア・ルネサンス美術に見られる思想表現の特性——ミケランジェロのシステイーナ礼拝堂を例に——」, ルネサンス国際シンポジウム, 東京外国語大学/東京都府中市, 2001/11/17。
 藤岡 穰 「隋・初唐における長安造像の展開——菩薩像を中心に——」, 唐墓壁画と唐代日中文化交流国際学術シンポジウム, 陝西歴史博物館/西安, 2000/3/31。
 囀府寺司 「Van Gogh and Russian Literature」, International Comparative Literature Association, Universiteit van Leiden/Leiden, 1997/8/17。

(2) 国内学会

- 奥平俊六 「絵画と現実のはざままで」, 芸能史研究会基調講演, 京大会館/京都府京都市, 1999/6/13。
 奥平俊六 「描かれた祇園祭」, シンポジウム「祇園祭の社会史」, 京都造形芸術大学/京都府京都市, 2000/6/24。
 吉松実花 「アギオス・ニコラオス・オルファノス聖堂のフレスコ装飾」, 待兼山芸術学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2001/4/14。
 島田 明 「アーンドラ地方における仏陀像の成立と展開」, 美術史学会, 早稲田/東京都新宿区, 1998/5/29。

(3) 研究会

- 若山映子 「イタリア・ルネサンス美術の魅力」, 日本ペイター協会, 第40回年次大会・研究発表会, 大阪大学文学部/大阪府豊中市, 2001/10/20。
 藤岡 穰 「隋・初唐における長安造像の展開」, 唐宋美術研究班研究会, 京都大学人文科学研究所東洋部/京都市, 2000/2/28。
 藤岡 穰 「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興造像」, 南都文化研究会, 奈良女子大学/奈良市, 2000/11/3。
 吉松実花 「聖ニコラオスの聖人伝イコン: 聖人伝イコンの視覚形式と粹絵シーンの配置を中心に」, 関西ビザンツ史研究会, 京大会館/京都府京都市, 1998/10/18。
 吉松実花 「アギオス・ニコラオス・オルファノス聖堂 (テサロニキ) のフレスコ装飾」, 関西ビザンツ史研究会, 京大会館/京都府京都市, 2000/9/24。

(4) 自治体等での講演会等

- 奥平俊六 「狩野派の役割」, 四天王寺仏教文化講演会, 四天王寺/大阪府大阪市, 1997/4/12。
 奥平俊六 「洛中洛外図雑感」, 東京読画連例会, 細見美術館/京都府京都市, 1997/5/23。

- 奥平俊六 「かぶく人々」, 「かぶく美の世界」展記念講演, 徳川美術館/愛知県名古屋市, 1997/10/4。
- 奥平俊六 「絵の中の刀」, 「刀と装い」展記念講演, 大阪市立博物館/大阪府大阪市, 1997/10/17。
- 奥平俊六 「桃山の風俗画」, 「桃山の絵画」展記念講演, 京都国立博物館/京都府京都市, 1997/11/8。
- 奥平俊六 「風俗画の花」, 「花の絵画」展記念講演, 颯川美術館/兵庫県西宮市, 1998/6/21。
- 奥平俊六 「彦根屏風の「かたち」」, 「彦根屏風への誘い」展記念講演, 彦根城博物館/滋賀県彦根市, 1998/11/14。
- 奥平俊六 「秋草の陰映」, 「秋草」展記念講演, 逸翁美術館/大阪府池田市, 1999/9/25。
- 奥平俊六 「カブキモノ異聞」, 朝日カルチャー「日本の美術」講座, 朝日新聞社/大阪府大阪市, 1999/11/12。
- 奥平俊六 「近世の絵画」, 「近世の絵画」展記念講演, サンリツ服部美術館/長野県諏訪市, 2000/10/15。
- 奥平俊六 「宗達のこと」, 「宗達と西行物語」展記念講演, 出光美術館(大阪)/大阪府大阪市, 2001/7/25。
- 奥平俊六 「美術における「日本的」ということに関して」, 北摂三田高校大学体験講義, 兵庫県立北摂三田高校/兵庫県三田市, 2001/8/29。
- 奥平俊六 「パノラマ源氏物語」, 源氏物語ミュージアム会館5周年記念講演会, 宇治市源氏物語ミュージアム/京都府宇治市, 2001/11/2。
- 奥平俊六 「都市の自画像」, 大阪大学適塾記念会講演会, 府立情報センターさいかくホール/大阪府大阪市, 2001/11/30。
- 若山映子 「*Interpretazioni iconologiche dell'arte del Rinascimento*」, ミラノ・カトリック大学大学院美術史学専攻特別講義, 1998/5/1。
- 若山映子 「*La «Creazione di Adamo» di Michelangelo*」, ミラノ・カトリック大学大学院美術史学専攻特別講義, 1998/11/6。
- 若山映子 「*La Cappella Sistina alla luce dei recenti restauri*」, *Giovedì dell' ISAL, Istituto per la Storia dell' Arte Lombarda/Milano (Italia)*, 1998/4/30。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——法隆寺釈迦三尊像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/4/3。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——広隆寺弥勒菩薩像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/5/22。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——興福寺阿修羅像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/6/5。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——葛井寺千手観音像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/7/3。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——神護寺薬師如来像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/8/7。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——観心寺如意輪観音像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/10/2。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——六波羅蜜寺十一面観音像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/11/6。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——平等院鳳凰堂阿弥陀如来像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2001/12/4。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——長岳寺阿弥陀三尊像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2002/1/22。
- 藤岡 穰 「仏像の名品を読む——円成寺大日如来像——」, 懐徳堂古典講座, 新阪急ビル12階スカイルーム/大阪市, 2002/2/5。

2. 教員の受賞歴

- 1989年11月 圀府寺 司「エラスムス研究賞」Erasmus Studieprijis (オランダエラスムス財団) 受賞
- 1990年10月 奥平俊六「第2回国華賞」受賞
- 1991年10月 藤岡 穰「第3回国華賞」受賞
- 1998年12月15日 若山映子「ロンバルディア美術史研究所功績賞」(イタリア共和国) 受賞

【IV. 教員による競争的資金獲得】(1997年度～2001年度)

1. 科学研究費補助金の獲得状況

平成9年度	基盤研究(A)(1)	9351001	上方美術の19世紀	奥平俊六	7,000,000円
平成9年度	奨励研究(A)	11710021	南インド, スリランカ, 東南アジア地域における アーンドラ式仏陀像の受容	島田 明	800,000円
平成13年度	基盤研究(B)(1)	10410016	近代美術史(学)におけるユダヤ人	圀府寺 司	1,200,000円
平成12年度	基盤研究(B)(1)	10410016	近代美術史(学)におけるユダヤ人	圀府寺 司	1,600,000円
平成11年度	基盤研究(B)(1)	10410016	近代美術史(学)におけるユダヤ人	圀府寺 司	2,000,000円
平成11年度	奨励研究(A)	11710021	南インド, スリランカ, 東南アジア地域におけるア ーンドラ式仏陀像の受容	島田 明	1,100,000円
平成10年度	基盤研究(A)(1)	9351001	上方美術の19世紀	奥平俊六	4,900,000円
平成10年度	基盤研究(B)(1)	10410016	近代美術史(学)におけるユダヤ人	圀府寺 司	2,800,000円

2. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

【V. 教員による学会役員等の引き受け状況】(1997～2001年度)

若山映子 教授

2000年度～ 国際美術史学会国際代理委員

奥平俊六 教授

1997年度 国際交流美術史研究会事務局長

1998～2001年度 美術史学会常任委員

1999～2000年度 美術史学会西支部庶務委員

2002年度 日本美術史に関する国際大学院生会議運営委員

囿府寺司 教授
2000年度～ 美術史学会常任委員
2000年度～2001年度 美術史学会編集委員
2001年度 美術史学会庶務委員
1997年度～ 民族藝術学会 理事
1999年度～ 民族藝術学会 編集理事

藤岡 穰 助教授
1999年7月～2000年6月 美術史学会西支部会計幹事

鳥田 明 助手
1999年7月～2001年6月 美術史学会西支部庶務幹事
2000年7月～2001年6月 美術史学会西支部会計幹事

吉松実花 助手
1999年度～2001年度 民族藝術学会 編集委員

【VI. 教員の教育活動】(2002年度)

1. 大学院授業担当

奥平 俊六 教授

1 学期	日本美術史特殊演習	近世絵画研究
2 学期	日本美術史特殊演習	近世絵画研究
1 学期	日本美術史特殊演習	【画乗要略】講読
2 学期	日本美術史特殊演習	【画乗要略】講読
2 学期	日本美術史特殊講義	東洋古典主題の探求
通年	日本美術史特殊演習	見学演習 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
通年	日本美術史特殊演習	見学演習 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
1 学期	日本美術史演習	近世絵画研究
2 学期	日本美術史演習	近世絵画研究
1 学期	日本美術史演習	【画乗要略】講読
2 学期	日本美術史演習	【画乗要略】講読
2 学期	日本美術史講義	東洋古典主題の探究
通年	日本美術史演習	見学演習 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
通年	日本美術史演習	見学演習 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
1 学期	東洋美術史博士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
2 学期	東洋美術史博士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
1 学期	東洋美術史修士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)
2 学期	東洋美術史修士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題 (肥塚教授, 藤岡助教授と合同)

肥塚 隆 教授

1 学期	東洋美術史特殊講義	プレ・タイ彫刻史
2 学期	東洋美術史特殊演習	【六度集経】講読
通年	東洋美術史特殊演習	東洋美術史の研究方法
通年	日本美術史特殊演習	見学演習 (奥平教授, 藤岡助教授と合同)
通年	日本美術史特殊演習	見学演習 (奥平教授, 藤岡助教授と合同)
1 学期	東洋美術史講義	プレ・タイ彫刻史
2 学期	東洋美術史演習	【六度集経】講読

1 学期	東洋美術史演習	東洋美術史の調査方法
2 学期	東洋美術史演習	東洋美術史の調査方法
2 学期	東洋美術史講義	東南アジア美術史
通年	日本美術史演習	見学演習（奥平教授，藤岡助教授と合同）
通年	日本美術史演習	見学演習（奥平教授，藤岡助教授と合同）
1 学期	東洋美術史博士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（奥平教授，藤岡助教授と合同）
2 学期	東洋美術史博士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（奥平教授，藤岡助教授と合同）
1 学期	東洋美術史修士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（奥平教授，藤岡助教授と合同）
2 学期	東洋美術史修士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（奥平教授，藤岡助教授と合同）

藤岡 穰 助教授

1 学期	東洋美術史特殊講義	中国仏教彫塑史
2 学期	日本美術史特殊講義	日本彫刻史 —— 平安後期 ——
1 学期	日本美術史特殊演習	【七大寺日記】講読
2 学期	日本美術史特殊演習	【南無阿弥陀仏作善集】講読
1 学期	東洋美術史特殊演習	仏教美術研究の理論と実践
2 学期	東洋美術史特殊演習	仏教美術研究の理論と実践
通年	日本美術史特殊演習	見学演習（肥塚教授，奥平教授と合同）
通年	日本美術史特殊演習	見学演習（肥塚教授，奥平教授と合同）
1 学期	東洋美術史講義	中国仏教彫塑史
2 学期	日本美術史講義	日本彫刻史 —— 平安後期 ——
1 学期	日本美術史演習	【七大寺日記】講読
2 学期	日本美術史演習	【南無阿弥陀仏作善集】講読
1 学期	東洋美術史演習	仏教美術研究の理論と実践
2 学期	東洋美術史演習	仏教美術研究の理論と実践
通年	日本美術史演習	見学演習（肥塚教授，奥平教授と合同）
通年	日本美術史演習	見学演習（肥塚教授，奥平教授と合同）
1 学期	東洋美術史博士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，奥平教授と合同）
2 学期	東洋美術史博士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，奥平教授と合同）
1 学期	東洋美術史修士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，奥平教授と合同）
2 学期	東洋美術史修士論文作成演習	日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，奥平教授と合同）

囿府寺 司 教授

1 学期	西洋美術史特殊講義	オランダ近代美術史Ⅰ
2 学期	西洋美術史特殊講義	オランダ近代美術史Ⅱ
1 学期	西洋美術史講義	西洋美術史論文演習Ⅰ
2 学期	西洋美術史講義	西洋美術史論文演習Ⅱ
1 学期	西洋美術史演習	オランダ近代美術史Ⅰ
2 学期	西洋美術史演習	オランダ近代美術史Ⅱ
1 学期	西洋美術史博士論文作成演習	西洋美術史論文演習Ⅰ
2 学期	西洋美術史博士論文作成演習	西洋美術史論文演習Ⅱ
1 学期	西洋美術史博士論文作成演習	西洋美術作家作品研究
2 学期	西洋美術史博士論文作成演習	西洋美術作家作品研究（若山教授と合同）
2 学期	西洋美術史修士論文作成演習	西洋美術史作家作品研究（若山教授と合同）
1 学期	西洋美術史修士論文作成演習	西洋美術史作家作品研究

若山 映子 教授

2 学期	西洋美術史特殊講義	北イタリアにおける16世紀美術
------	-----------	-----------------

- 2 学期 西洋美術史講義 北イタリアにおける16世紀美術
 2 学期 西洋美術史博士論文作成演習 西洋美術作家作品研究（圀府寺教授と合同）
 2 学期 西洋美術史博士論文作成演習 西洋美術作家作品研究（圀府寺教授と合同）
 2 学期 西洋美術史修士論文作成演習 西洋美術史作家作品研究（圀府寺教授と合同）

小林 忠 講師（非常勤講師）

- 1 学期 日本美術史特殊講義 江戸時代絵画の諸問題
 1 学期 日本美術史講義 江戸時代絵画の諸問題

辻 佐保子（非常勤講師）

- 1 学期 西洋美術史特殊講義 中世美術の楽しみ
 1 学期 西洋美術史講義 中世美術史の楽しみ

尾崎 彰宏（非常勤講師）

- 2 学期 西洋美術史特殊講義 レンブラント研究
 2 学期 西洋美術史講義 レンブラント研究

2. 学部授業担当

奥平 俊六 教授

- 1 学期 日本美術史演習 「画乗要略」講読
 2 学期 日本美術史演習 「画乗要略」講読
 2 学期 日本美術史講義 東洋古典主題の探求
 1 学期 日本美術史演習 近世絵画研究
 2 学期 日本美術史演習 近世絵画研究
 通年 日本美術史演習 見学演習（肥塚教授，藤岡助教授と合同）
 通年 日本美術史演習 見学演習（肥塚教授，藤岡助教授と合同）
 1 学期 東洋美術史演習 日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，藤岡助教授と合同）
 2 学期 東洋美術史演習 日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，藤岡助教授と合同）

肥塚 隆 教授

- 1 学期 東洋美術史講義 プレ・タイ彫刻史
 2 学期 東洋美術史演習 「六度集経」講読
 2 学期 東洋美術史講義 東南アジア美術史
 通年 日本美術史演習 見学演習（奥平教授，藤岡助教授と合同）
 通年 日本美術史演習 見学演習（奥平教授，藤岡助教授と合同）
 1 学期 東洋美術史演習 日本・東洋美術史の諸問題（奥平教授，藤岡助教授と合同）
 2 学期 東洋美術史演習 日本・東洋美術史の諸問題（奥平教授，藤岡助教授と合同）

藤岡 穰 助教授

- 1 学期 東洋美術史講義 中国の石窟と仏像
 2 学期 日本美術史講義 日本彫刻史——平安後期——
 1 学期 日本美術史演習 「七大寺日記」講読
 2 学期 日本美術史演習 「南無阿弥陀仏作善集」講読
 1 学期 東洋美術史演習 仏教美術研究の理論と実践
 2 学期 東洋美術史演習 仏教美術研究の理論と実践
 通年 日本美術史演習 見学演習（肥塚教授，奥平教授と合同）
 通年 日本美術史演習 見学演習（肥塚教授，奥平教授と合同）

- 1 学期 東洋美術史演習 日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，奥平教授と合同）
 2 学期 東洋美術史演習 日本・東洋美術史の諸問題（肥塚教授，奥平教授と合同）

囀府寺 司 教授

- 1 学期 西洋美術史講義 オランダ近代美術史Ⅰ
 2 学期 西洋美術史講義 オランダ近代美術史Ⅱ
 1 学期 西洋美術史演習 西洋美術史論文演習Ⅰ
 2 学期 西洋美術史演習 西洋美術史論文演習Ⅱ
 1 学期 西洋美術史演習 西洋美術史の諸問題
 2 学期 西洋美術史演習 西洋美術史の諸問題
 1 学期 西洋美術史演習 西洋美術研究：理論と実践Ⅰ
 2 学期 西洋美術史演習 西洋美術研究：理論と実践Ⅱ

若山 映子 教授

- 2 学期 西洋美術史講義 西洋美術史概説
 2 学期 西洋美術史講義 北イタリアにおける16世紀の美術
 2 学期 西洋美術史演習 西洋美術史の諸問題（囀府寺教授と合同）

小林 忠 講師（非常勤講師）

- 1 学期 日本美術史講義 江戸時代絵画の諸問題

辻 佐保子（非常勤講師）

- 1 学期 西洋美術史講義 中世美術の楽しみ

尾崎 彰宏（非常勤講師）

- 2 学期 西洋美術史講義 レンブラント研究

3. 共通教育

- 囀府寺司 西洋美術と日本Ⅰ 主題別
 若山映子 西洋美術と日本 主題別
 藤岡 穰 東洋美術と日本 主題別
 奥平俊六 東洋美術史 専門基礎

4. 他大学における集中講義等

- 若山映子 大阪外国語大学 地域文化学科 南欧地域文化専攻 イタリア語 2002年度非常勤講師
 囀府寺司 関西学院大学 文学部 芸術史 A・B 2002年度非常勤講師

【Ⅶ. 外部評価の報告】

評価者：小佐野重利（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

1 資料全般に対する若干のコメント

全体として、よく整理された評価用資料であるが、十全な評価にとり、評者が推論に頼らざるをえない情報の遺漏がいくつかあるように思われる。

第一に、教授4，助教授1，助手2の教員スタッフに対する学部学生，大学院博士前期および

後期学生の受け入れ定員が明記されていない。評者の所属する美術史学専門分野教員数がほぼ同数であるため、その受け入れ定員に準じて資料を判断するに、学部学生の進学者数が減少気味の反面、大学院学生についてはほぼ横ばいの入進学者数であると判断する。もちろん、大学院受験者数の受け入れ定員に対する割合の増減についてはまったく判断できないが、やはり評者の所属する専門分野における過去2年間のその割合の推移を勘案するに、恐らく各国立大学大学院同専門分野において受験者数が減少の傾向にあるようである（後で、この予想傾向を踏まえて全体的な評価を加える）。また、資料2. の注記にある「社会人学生」は博士後期のみか、後期および前期、それとも前期のみか、また、社会人の職種についても資料があれば、より正確な評価を加えるかもしれない。

第二に、資料番号3. 4. 5. および8. 9. については、年度表示がないので、平成14年度のみ資料とも取れるが、貴研究科全体の資料作成基準が過去5年間と明記されているので、以下、これら項目についても過去5年間の資料であるとみなす。

第三に、【VI. 教員の教育活動】中、各専任教員の担当科目数は、大学院および学部授業の共通科目（いわゆる二枚看板授業）や、複数教官担当科目のすべてを教員ごとに列挙しているものと判断した。そうでないなら、文科省の基準からしても超過重の教育活動となり、改善を要する喫緊の課題となろう。

第四に、資料13. の「教員の研究活動等」にある記載「学術振興会研究員をつとめる助手、院生」は意味不明だが、一応「学術振興会研究員をつとめる院生もいる」の意味に取る。だが、そうすると第二の疑問点の資料4. の記事と齟齬することにも留意した。

2 全般的な評価

教員各人の研究活動および業績に関しては、各人の専門領域はいうまでもなく、その隣接領域へと拡大するか、もしくは、美術史教育の今後の課題や、近年までタブーであった近代美術史学におけるユダヤ人の問題に取り組むといったような新領域開拓へ向けた意欲的な研究活動・業績も含め、質量ともに高度な研究活動を展開する我が国有数の教員たちからなる専門分野であるとして高く評価できる。国際学会での発表は、我が国の美術史学界のレベルを世界に問う絶好の機会であり、一方、国内学会および研究会、さらに自治体等での講演会は、若手や次世代の研究者養成にとり有効な活動である。また、以上の研究活動を潤滑に継続発展させるために、科学研究費補助金の獲得にも鋭意努力されている。過去5年間のその採択数および助成金総額は、疑いなく同専門分野のある大学のうち5位内にある。これと並行して、美術史学研究の西日本の核となって、学会活動（美術史学会西支部事務局、民族芸術学会事務局、各種常任委員・理事など）でも積極的に指導的な役割を担い、学外諸機関および研究者との連携を計っているなど、評価を高める要素が多くある。また、大学院生の諸学会での口頭発表、学会誌、紀要、および一般販売の学術雑誌等への投稿・掲載が年平均5件程度あり、現有大学院生総数とほぼ等しく、恐らく年院生一人当たり1件と考えられが、研究課題の発見から関連資料の渉猟・検討を経て論文とするまで、恐らく他の歴史学分野以上に研究にかなりの時間を要する美術史学専門分野の特殊事情か

ら見ると、決して悪くはない数値である。

教員および大学院生の個別研究活動・業績は、以上のように高く評価できるものの、我が国の美術史学研究の置かれている現状と将来という観点に立つ時、いくつかの不安材料が散見される。

(1) 課程博士号授与者の少なさ、(2) 研究者としての他大学・他機関就職者の少なさ、(3) 美術館・博物館研究員・学芸員への採用者の少なさ、である。これは、貴研究科美術史学専門分野だけの重大な問題にとどまらず、特に、(2)(3)は、評者の所属する専門分野を含め、我が国美術史学の置かれている危機的な状況でもある。

(1)は、実にデリケートな問題である。指導する教員の資質等の問題であると同時に、在籍する博士後期学生の力量の問題でもある。前述のように、短い論文は書ける学生でも資料の粘り強い博搜と、大きな構想を練るための豊富な学識を問われる長大な論文の執筆は、現行の在籍年数では至難なことであると認識する。その立場から、院生(特に博士後期の学生)指導のある段階において、個々の学生の研究能力を考慮し、能力差による中期的指導を個別に立て、博士論文が執筆できそうな学生には、学会発表はよしとして、小論文の多産よりは学位論文執筆に専心させる方が効果的である。それが、能力のある学生が学位取得者となり、他大学・他機関就職者数の増加にも途を開くことになろう。(2)は、一に学位取得の有無と連動しているはずであるから。また同時に、このような指導により、資料4.の日本学術振興会特別研究員採択者数も増えることが見込まれる。

(3)への対策としてその最適任の候補者となれるように、ある段階で小論文執筆を推奨した学生たちの研究活動をさらに振興するために、教員はいろいろな面で今以上にコミットしていく必要がある。一つは、授業カリキュラム中に「論文執筆指導」等を加え制度的にも個人指導の時間を設けることである。第二に、学生の研究意欲を刺激し問題発見能力を涵養するために、学外者、例えば客員研究員や外国人研究員を積極的に受け入れ(少なくとも毎年度、各1ないし2名)、同時に彼らによる講演の機会を増やすように努めることである。第三に、現行のような教員の美術展企画運営への個人的協力ではなく、教員指導のもとで専門分野院生の全員もしくは一部が集団で美術展等の企画運営に協力できるように、学外美術館・博物館との連携協力関係を打ち立てることが喫緊の課題である。ちなみに、平成14年度埼玉県立近代美術館創立20周年記念展「モネからセザンヌまで——印象派とその時代展——」に、評者の統括のもとに東京大学大学院生12名が企画協力し、カタログの企画構成・執筆分担・編集を行い、一般からも相応の評価(読売新聞9月17日夕刊記事やカタログの完売など)が得られたが、このような企画協力は、院生の研究活動の成果としてばかりか、各人の研究能力、および幅広い職務への適応能力の開発にもきわめて効果的であることが判明した。いずれにせよ、美術館・博物館学芸員の採用件数が年々減少するなか、同様の文化機関との何らかの連携協力関係を専門分野全体として構築する体制をつくることが肝要である。今後それが、たとえ任期つきであれ、非常勤であれ学芸員の採用件数を増やすことのできる少ない機会となろう。

しかし、美術展等へのそのような企画協力には資金的な裏付けも必要になってくる。このために、これまであまり試みていないと思われる、教員による科学研究費補助金以外の外部資金(企

業や財団の委託研究費、共同研究費等)の獲得に向け、さらに一層の努力をしなくてはならないであろう。

そして、我が国における美術史学研究的将来を考えると、日本・東洋美術史研究者は今以上に欧米での、特に講演・シンポジウム発表を通じた研究活動の公開に努め、一方、西洋美術史研究者は、欧米研究者を招聘して学生を含めた国際的な研究活動の機会を増やしていく方向が、学生の教育と研究能力の開発にとり重要と思われる。

3. 最終評価

要するに、美術史学専門分野の教員および学生はこれまでの個々人の研究活動および業績の積み重ねを高く評価されるとともに、今後はその水準の維持に努めるばかりでなく、上記のような諸課題にも集団で取り組むことが必要であると結論する。

3-24 文化基礎学（広域文化形態論講座）

【はじめに．教育・研究活動の概要とその特色】

本専門分野は1998年、文学研究科全体を下支えする大学院専担の部門として創設された。文化論や科学論に関する主題を取り上げ、各専門分野の枠を越えて共同研究を推進することを目的としている。大学院学生がこの分野に直接籍を置くことはないが、共同研究に参加したり、この分野が提供する授業に出て、自らの専門の学識を広げ、深めることができるように配慮されている。

1998～2000年度は里見軍之が担当。「自然のなかの人間」というテーマで共同研究会を主宰し、授業は学問論として解釈学関係の文献を取り上げた。2001年度からは溝口宏平教授が担当。「科学と社会」に関する共同研究を行っており、また授業は批判的解釈のための理論を整理するため、ハイデガーの文献を取り上げている。

【I．現在の組織】

教員（2002年4月現在）

教授 1

教授： 溝口宏平（兼任）

【II．過去5年間の組織としての教育・研究活動】（1997～2001年度）

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

アメリカ人1名（現関西大学助教授）、ドイツ人1名（現大阪府立大学専任講師）が研究会メンバーとして参加した。

3. 刊行物

里見担当分として『自然のなかの人間』という報告書を2001年2月に刊行。これは科研報告書スタイルのものであるので、市販できるようなものにするため、目下出版助成金を申請中である。

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998年度～2000年度については、文学研究科のスタッフ14名、他の研究科から3名の計17名を基幹メンバーとし、また大学院生の参加も得て、随時研究会を行った。

2001年度以降は、文学研究科教官7名、学内の他の研究科教官3名、学外メンバー6名で、目

下鋭意推進中。

6. 組織としての教育・研究活動に関する過去5年間の自己点検と評価

手探りで運営した割には、まずまずの成果を生み出せたと思われるが、以下の問題点も残った。

共同研究会について：基幹メンバーが数多く、また各自多忙なため日程調整に難しいところがあったし、大学院生の参加者も相当変動した。研究会の回数をもっと減らすべきかもしれない。

報告書について：刊行の準備が遅れたため、市販できるようなものが作成できなかったのもので、今後は準備を早め、かつまた講座費の使用法も柔軟に運用できるようにしなければならないであろう。

授業について：主催者の専門分野である哲学以外の参加者は数名にとどまったので、もう少し広報活動を行うべきかもしれない。

【Ⅲ. 開講科目】

大学院授業科目（2002年度）

溝口宏平 教授

1 学期 文化基礎論演習 ハイデガー哲学研究Ⅰ

2 学期 文化基礎論演習 ハイデガー哲学研究Ⅱ

1 学期 人文科学基礎論特殊演習 共同研究「科学と社会Ⅰ」

2 学期 人文科学基礎論特殊演習 共同研究「科学と社会Ⅱ」

3-25 地域社会論（広域文化形態論講座）

【はじめに．教育・研究活動の概要とその特色】

この専門分野は1998年に創設されたもので、主に歴史学、地理学、人類学に関する主題を取りあげ、共同研究を推進するとともに、大学院学生をこうした共同研究に参加させることで大学院教育の活性化を図ることを目的としている。そして他の専門分野に属する教員が兼務によって、ここにおける共同研究を主宰する。また直属の大学院学生は不在である。逆に言えばどの分野の学生であれ、自らの関心にしたがって共同研究に参加することができる。

1998～2000年度は江川温が主宰し、「死の習俗の比較史」という主題の下に共同研究を行った。2001年度からは川北稔が引き継ぎ、世界システム論を軸として、新たな共同研究班を組織した。アジアに視点をすえて、「近代世界システムと地域文化」の関係を多様な方面から検討している。

【I．現在の組織】

教員（2002年4月現在）

教授 1

教授： 川北 稔（兼任）

【II．過去5年間の組織としての教育・研究活動】（1997～2001年度）

1. 客員研究員等の受け入れ状況

1999～2000年度に、国立民族学博物館の中牧弘允教授を客員教授として招いた。

2. 外国人研究者の受け入れ状況

1998～2000年度には該当者なし。

3. 刊行物

1998～2000年度の成果の最も重要な部分は、2002年10月に『死の文化誌——心性・習俗・社会——』（昭和堂）として刊行された。

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1998～2000年度については該当事項なし。

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998～2000年度については他大学所属の研究者を含めて11人の基幹メンバーを置き、20回の会合で38の報告をもとに討論を行った。研究会には基幹メンバー、本学の大学院学生はもとより、他大学の大学院生も多数参加した。2001年度は、部内10名の教官とRAを含む大学院生多数とで研究班を構成し、計6回の研究会を開催した。2002年度も引き続き同様の活動を展開している。

6. 組織としての教育・研究活動に関する過去5年間の自己点検と評価

1998～2000年度については第一回の試みであり、手探りでの前進を余儀なくされたが、予算やRA配置において相当の配慮を受けたこともあり、学際的研究の、また大学院教育の場としてそれなりの成果は残せたと考えている。ただ成果報告については、上記単行本は別として、より多くの成果をより早く公開するような媒体も考慮すべきであったと考える。

科研特定研究の獲得をめざしたが、成功しなかったため、2002年度も引き続き要求している。

【Ⅲ. 開講科目】

大学院授業科目（2002年度）

川北 稔 教授

1 学期	欧米地域社会論演習	工業化の社会史Ⅰ
2 学期	欧米地域社会論演習	工業化の社会史Ⅱ
1 学期	欧米地域社会論特殊演習	共同研究「世界システムと地域社会Ⅲ」
2 学期	欧米地域社会論特殊演習	共同研究「世界システムと地域社会Ⅳ」

3-26 言語文芸学（広域文化表現論講座）

【はじめに、教育・研究活動の概要とその特色】

本専門分野は、広く言語表現をめぐる諸領域に関連して、文学・芸術作品とそれが生まれた時代や社会背景との相互関連、また広く人間にとっての文学・芸術の意味を追求するため、多元的・総合的に言語文芸の諸相を考究する学際的な共同研究をすすめている。

1999年度から2001年度までは、日本文学兼任の荒木 浩助教授が共同研究「〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰とその周辺——」を開催、日本・アジアを起点として、広く表現行為に於ける「外部」の問題を考えた。

2002年度からは、中国文学兼任の浅見洋二助教授が共同研究「テキストの読解と伝承——〈書くこと〉と〈読むこと〉、〈話すこと〉と〈聴くこと〉を結ぶ言説の場に関する社会文化論的研究——」をスタートさせた。それと並行して、恵洪『石門文字禪』の訳注作業を本研究科客員教授である周裕鍇四川大学教授らとともにすすめている。

【I. 現在の組織】

教員（2002年4月現在）

助教授 1

助教授： 浅見洋二（兼任）

【II. 過去5年間の組織としての教育・研究活動】（1997～2001年度）

1. 客員研究員等の受け入れ状況

1999年度，1，2000年度，1，2001年度，1（荒木分）

2. 外国人研究者の受け入れ状況

2000年度，1（荒木分）

2002年度，1（浅見分，2001年度から継続）

3. 刊行物

2001年度，『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——』（大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書，平成14（2002）年3月，全358頁）

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

特になし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

1999年度：

(1) 1999年6月21日

一、基調発表

- ・荒木浩「〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰とその周辺——」という共同研究発足に向けて——「日本中世文学」研究の視点から——
- ・山崎淳「明恵の文献的研究の現在」

二、以上の基調発表、及び本研究会の方向について論議。

(2) 1999年8月7日

第一回輪読部会

一、基調発表

- ・中山一磨 「『邪正問答抄』の本文と伝来」

二、関連発表

- ・山崎淳「西教寺蔵『臨終秘伝』（存海箱1）所収『邪正問答抄』について」
- ・荒木浩「『邪正問答抄』の意義」

(3) 1999年10月11日

荒木浩 “RECONSIDERING MEDIEVAL JAPANESE LITERATURE: The Issue of Set-suwa Bungaku” (米コロンビア大学在外研究中の共同研究関連発表)

2000年度：

(1) 明恵『夢記』輪読部会は、『夢記』を講読対象に、今年度より言語文芸学演習として授業化して、定期開催とした。

(2) 2000年5月18日

第一回講演・研究発表部会研究会

伊井春樹「実資の夢、成尋の夢 —— 夢を信じ、実現に向かう人々 ——」

(3) 2000年6月29日

第二回講演・研究発表部会研究会

出原隆俊「日本近代文学における「魔」——〈狂気〉の表出と関連して」

(4) 2000年7月25日

第一回輪読部会特別研究会

目幸黙僊（カリフォルニア州立大学教授）

「華嚴佛光三昧観冥感伝 試読 —— 冥感、好相、そして夢相 ——」

(5) 2000年9月21日

第三回講演・研究発表部会研究会

柏木隆雄「文学の内と外 —— 日本近代作家の西洋 ——」

(6) 2000年10月19日

第四回講演・研究発表部会研究会

湯浅邦弘「懐徳堂学派の夢の説」

(7) 2000年10月30日

第五回講演・研究発表部会研究会

土井光祐（実践女子大学文学部助教授・国語学）

「国語史資料としての明恵関係法談聞書類の特質」

※科学研究費特定領域研究「古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究」（研究代表者本学教授，金水敏）共催

(8) 2001年1月17日

第二回輪読部会特別研究会

柴崎照和氏を講師に招き，定期開催の『夢記』講読における疑問点を列挙し，質問と議論を行う。

2001年度：

(1) 今年度前期も言語文芸学演習として『夢記』講読を継続。

(2) 言語文芸学演習後期は成果報告書編集会議を併せ開催し，成果報告書執筆予定者の研究発表（中山一麿，荒木浩，中川真弓，米田真理子，謝立群）を中心に進行。

(3) 2001年6月21日

第一回講演・研究発表部会研究会

藤岡穰「光と空間の視覚化——いわゆる飛天後背を中心に——」

(4) 2001年11月29日

第32回大阪大学大学院文学研究科教官研究会において，本共同研究会の成果発表をかねて，荒木浩「〈心〉と〈外部〉——散文のかたちとしての「夢の記」とその周辺」と題して発表。

(5) 2001年11月15日

第二回講演・研究発表部会研究会

第一発表

浅見洋二「詩はどこから来るのか？それは誰のものか？——中国詩学における〈内部〉と〈外部〉，〈自己〉と〈他者〉，あるいは〈貨幣〉〈商品〉〈資本〉——」

第二発表

内藤高「〈心〉と〈外部〉の接点——〈住まい〉の詩学——」

(6) 2001年12月6日

第三回講演・研究発表部会研究会

第一発表

川森博司（甲子園大学助教授）「昔話と都市伝説——伝承基盤の変容——」

第二発表

中村生雄「動物の夢／死者の夢——日本における自然と他界——」

2002年度：

- (1) 2002年4月15日
第一回『石門文字禪』研究会
- (2) 2002年5月13日
第二回『石門文字禪』研究会
- (3) 2002年6月3日
第三回『石門文字禪』研究会
- (4) 2002年6月24日
第四回『石門文字禪』研究会
- (5) 2002年7月8日
第五回『石門文字禪』研究会
- (6) 2002年8月5日
第六回『石門文字禪』研究会
- (7) 2002年10月7日
第七回『石門文字禪』研究会
- (8) 2002年10月21日
第八回『石門文字禪』研究会
- (9) 2002年11月11日
第九回『石門文字禪』研究会
- (10) 2002年11月5日
第一回特別研究会・楊煉講演・朗読会
講演「亡命の原型としての詩を求めて」
朗読「1989年」ほか近作
- (11) 以上の他、言語文芸学演習として蘇軾『蘇文忠公詩合注』会読を行った。

6. 組織としての教育・研究活動に関する過去5年間の自己点検と評価

1999年に発足した本講座は、3年をローテーションとする兼任の助教授ポストを基軸に構成されるため、本来の兼任講座との兼務は大変な激務ではあるが、本研究科全体による支援体制の中、十数回の研究会の開催を得、外部からの研究者も数名招いて、従来の狭い専門性の枠組みにとらわれない、有益な相関的人文学を展開することが出来ている。

第一期は荒木が担当し、1999年から2001年度まで、第一期の研究タームを完結した。その成果は、第一期完結の際に刊行した『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——』に集約されているが、そこには、日本文学、中国文学、フランス文学、比較文学、東洋美術史、日本学、中国哲学、仏教史など、幅広い学問が、〈心〉と〈外部〉というキータームの基に多様な研究を集約させている。

研究会の運営は、大学予算のやや膠着した運用上の制限のため、旅費・謝礼等に執行すること

が出来ず、外部研究者の招聘には困難を極めたが、幸い行為ある協力者を得て、関西在住の研究者のみならず、アメリカや東京の研究者を招いた発表会を実現した。

その萌芽的な研究をさらに展開・結実させるべく、本共同研究後も、第一期担当者荒木は科学研究補助費を取得して、関連の研究の研究を目指している。さらに同成果報告書は、ヨーロッパ・アメリカ・中国他、海外の研究者・研究機関に送付され、その成果が広く公表された。

また、その中で行われた明恵『夢記』の共同研究は、まだ萌芽的なものであるとはいえ、そのジャンル論的的定位、文献学的研究、さらには英語圏の研究者からの研究、そして中国語訳と、グローバルな視野にたった相関的研究を達成している。

現在は第二期の浅見が担当している(2002年度～)。研究テーマは「テキストの読解と伝承—〈書くこと〉と〈読むこと〉、〈話すこと〉と〈聴くこと〉を結ぶ言説の場に関する社会文化論的研究」である。生産(制作)の側面のみならず、受容の側面にも焦点を当てる形で、文学作品等さまざまなテキストが読解・伝承されてゆく過程をめぐって、社会文化論的な視点から考察を加える共同研究である。

今年度は、その一環として、『石門文字禅』に関する研究を行った。学内の研究者の他、学外の研究者(国外も含む)も加え、同書の訳注作成を目標として行われている。2003年8月には、中間報告書として『石門文字禅(巻一・二)訳注稿』を刊行する予定である。同書に関する研究の嚆矢として、少なからぬ意義を有するであろう。

また、このほかロンドン在住の中国語詩人・楊煉氏を招いての講演、ならびに朗読会を行った。同講演は、中国語文化圏の外において、中国語の詩が書かれ、そして読まれることの意味を考察したものであり、今日の国際化時代における文学テキストの受容の問題を考えるうえで示唆に富むものであった。

【Ⅲ. 開講科目】

大学院授業科目(2002年度)

浅見洋二 助教授

1学期	言語文芸史論演習	蘇軾詩研究・第1部
2学期	言語文芸史論演習	蘇軾詩研究・第2部
1学期	言語文芸史論特殊演習	宋代文学研究・第1部
2学期	言語文芸史論特殊演習	宋代文学研究・第2部
通年	言語文芸環境論特殊演習	言語文芸環境論共同研究

編集後記

この年報が出るまでの1年半のうごきはめまぐるしい。ここでは、この年報が刊行されるまでの経過をふりかえり、反省点などを記しておくことにしたい。

文学研究科内に設けられた自己評価委員会と設置形態委員会が統合されて、企画・評価委員会が設置されたのは、2001年秋のことであった。このころは大学の統合・再編の議論が大阪大学にもおよび、近隣の大学関係者との予備的な接触がくり返され、統合された場合の組織案の検討がさかんにおこなわれていた。

また大学評価にそなえ、大阪大学では各種データの収集を全学レベルではじめるという計画が公表されていた。この背景に国立大学の法人化があることは、あらためていうまでもないが、大学評価・学位授与機構による教育評価が理学研究科・理学部でも実施されつつあり、それには膨大な「根拠資料」が必要とのことで、データ収集は現実の要請でもあった。手元にのこっている記録をみると、統合に関する検討のあいまいに、全学のデータ収集案に対し、文学研究科として提案する項目を検討し（10月25日、11月15日）、さらに教授会懇談会（11月22日）でも、この説明もおこなったことがわかる。年報の公刊はこのころよりすでに話題になっており、データ収集とあわせて意識されるにいたっていた。

くわえてこのころ、「世界最高水準の大学づくり——国公私『トップ30』——について」が公表され、それに対する申請の準備も視野にはいつてきた。2002年1月になると、この「トップ30」は「21世紀 COE」と改称され、2002年度の公募については人文科学分野も予定されていることが公表されるにいたった。まだしっかりした公募要領は公開されていなかったが、応募に際しては、申請機関の広い意味での業績の提示がもとめられており、とりあえずこれにむけたデータの収集の必要性が痛感された。

2002年1月31日の企画・評価委員会以後、これにむけて収集するデータ項目が急速にきめられる一方、その入力方法の整備がすすめられていく。この段階で、全学で検討されていたデータ収集はまだ実施されるにいたらず、とくに21世紀 COE の申請にそなえるために、学内 LAN を活用して研究業績を中心に文学研究科独自の個人データ収集システムを構築することになった。これに際しては、企画・評価委員だけではとても対応できず、情報通信網整備管理小委員会の金水敏教授ならびにアルバイトの北山 育さん（基礎工学研究科大学院生）には、たいへんお世話になった。そして2月末には、入力マニュアルまで一応の準備が整うにいたった。

この研究業績を中心とする個人データ収集システム（「教官業績登録フォーム」）の構築に際しては、データ収集管理室の岸野文郎教授から提供された工学部の個人データ収集用のフォーマット（全学のデータ収集のモデル）を参考にした。将来、全学のデータ収集システムが稼働しはじめるときにそなえて、そこにデータが移行できるよう、同一の項目を設定することにしたわけである。

こうして、3月15日を一応の締め切りとして、各教官に自己のデータの入力をお願いした。さいわい、多くの教官の協力をえて、これはほぼ順調にすすんだ。この成果が、本年報の各専門分野の教官の業績となったわけである。

他方これについて、各教室（専門分野）ごとのデータの収集も検討された。3月後半から4月はじめまでこの項目の設定作業がすすめられ、各教室にデータ提出の依頼を出すことになった。これが本年報の各専門分野のデータの前半の核となった。

こうして、21世紀 COE の公募要領の公表をまつことになったが、当初の予定の4月から延期され、最終的には6月となった。やっと公表された公募要領は、予想とかなりちがいが、データについても研究科単位というよりは個人単位のものが必要であることがわかった。そのため、申請書の作成のためには、あらためてデータを収集しなおす必要のある項目もすくなくなかった。また、申請書が要求するデータ収集期間は3年で、「教官業績登録フォーム」で収集した5年間よりもみじかいものであった。

ともあれ、こうした作業のなかで、本年報に掲載するデータはととのっていったが、その間に企画・評価委員会は大きな転機を迎えることになった。再編統合、21世紀 COE、法人化にむけた中期目標・中期計画の設定と大きな課題をいくつもかかえ、4月4日の委員会で、それぞれの課題に専念するグループに委員を割り振ることになったのである。この結果、データ収集に関係する委員は一時期、望月・堤・小林の3名のみとなった。のちに荒木と服部がこれに加わり強化され、以後はほぼこの5名で作業を継続することになった。

夏休みがあけて、9月下旬に各専門分野に大学院生の業績など補足的なデータの提出を要請し、10月下旬にはそれらに教官の業績などもあわせて集成した原稿を作成した。この膨大な作業に際しては、哲学資料室の駒山智子さん、文学資料室の滝田知子さんにはたいへんお世話になった。こうして本年報の主要部分が姿をあらわすことになったが、その間にさらにあたらしい項目がくわえられることになった。阪大文学研究科では、これまで3度にわたり自己評価書（『大阪大学文学部』1994年3月刊および『現状と課題』1996年7月刊、『現状と課題1998』1999年3月刊）を刊行していたが、外部評価をおこなっていなかった。各種データの整備を機会に、外部の研究者に依頼して評価していただくのはどうかという意見がでて、あわせてこれをおこなうことになったのである。

ただしこの外部評価に際しては、あたらしい試みとして、つぎの2点が企画された。他の大学や研究科の例をみると、外部評価では特定の学科や専門分野のみを対象としていることが多い。これに対して、全分野で外部評価を実施することとした。また別途申請しておいた外国人の研究者による評価の予算がみとめられ、一部の専門分野に限られるが、それもあわせておこなうこととした。この外部評価の依頼や報告の集約の作業については、とくに研究科長秘書の高橋恵理子さんのお世話になった。

またこれらの外国人研究者には、あわせて自国における大学評価についても語っていただく機会（座談会）を設け、この記録も掲載することにした（本年報第1部）。教官個人に対する業績評価は、人事に際しておこなわれているが、組織としての評価やそれにもとづく資源配分は、科学研究費などをのぞいて、日本ではほとんどおこなわれていない。海外のそうしたシステムを理解しておくことは、たいへん有用と思われたからである。なおこの座談会のとりまとめについては、日本語学の土岐 哲教授、アルバイトの嵐 洋子さん（文学研究科大学院生）・北村美穂

(文学研究科科目等履修生)さんにお世話になった。

これらに並行して、文学研究科全体の状況が展望できるように、その研究・教育の理念とともに現状を示す各種データを示す原稿も準備した。これは本年報の第2部にあたる。

このようにして、2003年1月末になって本年報の原稿がほぼそろふことになった。印刷所におわたしする原稿の準備については、再度哲学資料室の駒山さんにお世話になっているところである。

このようにみえてくると、本年報は紆余曲折の末にできあがりつつあることがあきらかであろう。初期より明確な構想があつてこうしたかたちをとったというよりは、業績の公開という大きな目標はあつたが、21世紀COEの申請や、自己評価だけでなく外部評価もおこなうべきであるという要請、さらには外国人研究者による評価の実現など、いろいろな経過があつて徐々にかたちを整えてきたわけである。

そうした点で反省すべきところがすくなくない。とくに第3部については、最初から一貫した項目が設定できず、なんども研究科内で調査依頼をくりかえしたこと、調査項目の細部に関する指定が充分でなく、入稿まえにいたつても、一部の項目で様式の統一ができていないことがそれにあたる。また外部評価のためにお送りした原稿の整備が充分でなく、それにあたつていただいた先生方にご迷惑をかけたことも大きく反省される点である。阪大文学部・文学研究科だけでなく、編集にあたる私たちにとつても最初の試みで、不慣れなことが多かったことにくわえ、調査する期間がややながすぎ、多様な項目にわたつてしっかりしたデータを収集することが容易でなかったことなどによるが、次回からはこうしたことのないよう心がけたい。

ところで、私たち年報編集グループの仕事は、この年報の刊行をもつて完了するわけではない。上記「教官業績登録フォーム」であつめたデータを、今後どのように管理・運用していくかという問題がのこされている。当初これは全学レベルで収集・管理される「大阪大学教官基礎データ」に統合されるものとして、収集された。しかし、2002年秋に入力が開始された「大阪大学教官基礎データ」は、「論文」と「著書」の項目をのぞくと、文学研究科の「教官業績登録フォーム」とは大きく指標のちがうものであつた。2001年秋にはこうしたことがおこらないよう、各種要望をだし、その多くはみとめられていたのに、実施段階で変更された模様である。

このため、当面は統合しやすい「論文」と「著書」の項目については、データを「大阪大学教官基礎データ」に移行するが、それに適合しない、書評や翻訳、解説、辞典項目さらには口頭発表や一般向け講演については、「教官業績登録フォーム」にのこすことにしている。また、2002年度以降のデータについても、「論文」と「著書」の項目については、「教官業績登録フォーム」にいったん入力し、それを加工して継続的に「大阪大学教官基礎データ」に移行できるようにツールを準備していただくようお願いしているところである。このなりゆきについては、まだ気になるところがすくなくないが、現在のところは、おおむね私たちの希望のようにすすむ可能性がたかいと判断している。

文学研究科特有ともいえる事情はこれにかぎられない。一般にこの分野では、大学院生と教官が連名で論文を発表することはすくなく、院生が教官よりかなりの指導を受けた場合でも、単著として公刊するのがふつうである。この点は、実験や調査研究自体が単独では成り立たない自然

科学系とは対照的である。したがって、文学研究科の研究成果ということになると、教官の名前のはいった論文や学会発表のリストを作るだけでは不十分である。大学院生の論文や発表も考慮にいれざるをえない。本年報で大学院生の業績として別項を立てているのはそのためである。また今後は、大阪大学の研究業績の全体の把握にむけて、「大阪大学教官基礎データ」にくわえて、大学院生の業績を集約する仕掛けもつくっていただきたいと考えている。

業績の公開は、今回発刊する年報のようなかたちだけでなく、誰にとっても簡単にアクセスできるようなものになることが望ましい。そうした意味で、「大阪大学教官基礎データ」や「研究開発支援総合ディレクトリ(ReaD)」(科学技術振興事業団)のようなシステムに対する期待は大きいですが、文学研究科の教官が、「論文」と「著書」といった項目にかならずしも適合しない、多彩な学術情報さらにはそれに関連する業績もさかんにうみだし、それによって社会的な貢献もおこなっていること、大学院生が単独で多くの論文を公表していることについては、もっとひろく理解していただきたいものである。

本年報の準備過程は、こうして分野を越えた業績公開の方法という点でも、多くのことを考えるきっかけをあたえてくれた。そうした意味で私たちにとってもえがたい経験であったことを付記させていただきたい。

なお、これまで私たちがこの年報の刊行に努力してきたのは、研究・教育に関する業績の公開というあたりまえのことが、大学の透明性の確保に不可欠と一致して考えてきたからである。そうした思いなくしては、それだけでも多忙な研究・教育のほかに、この種の業務を推進することは容易ではなかったことをご理解下されば、幸いである。

末尾になるが、これまでご協力いただいた皆様に感謝申し上げたい。

(荒木 浩・小林 茂・堤 研二・服部典之・望月太郎・和田章男 [五十音順])

大阪大学大学院文学研究科

年報 2002

研究・教育(1997~2001)と外部評価

2003年3月発行

編 集 大阪大学大学院文学研究科／企画・評価委員会

発 行 大阪大学大学院文学研究科

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5

印 刷 (株)天理時報社
